

ISSN 1882-7179

創 価 教 育

第 19 号

2026年3月

創 価 教 育

第 19 号

『創価教育』（第19号） 目次

特集：周恩来・池田大作会見 50 周年記念シンポジウム

開会挨拶	鈴木将史	(1)
日中国交正常化の今日的意義	宮本雄二	(7)
歴史大転換の時代と＜対話＞による東アジアの平和構築の可能性 ——現代史を振り返って	姜尚中	(19)
『周池会談』への偲び	韓東育	(29)
周恩来・池田大作会見の今日的意義——池田大作の価値人生	賈蕙萱	(39)
周恩来・池田大作会見の今日的意義	西園寺一晃	(49)
大公・大智・大信・大愛——周恩来総理と池田大作先生の友誼	紀亜光	(61)
韓国における池田思想研究の展開と課題：民衆幸福思想の視座から	三浦大樹	(73)
「人間主義の行動準則」 ——池田大作の SGI 提言における対話の規範の一考察——	山田竜作	(95)
閉会挨拶	田代康則	(107)

論文

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作 ——実現に至らなかった会談をめぐって——	塩原将行	(109)
牧口常三郎の国体観 ——「国体明徴論」における逆用のレトリック——	岩木勇作	(183)
創価教育と通信教育の歴史	岩木勇作	(209)

講演

斎藤正二と牧口常三郎研究 ——回想・方法・継承——

…………… 塩 原 將 行・牛 田 伸 一・岩 木 勇 作・伊 藤 貴 雄 (233)

高崎隆治と戸田城聖研究 ——回想・方法・継承——

…………… 塩 原 將 行・伊 藤 貴 雄 (257)

池田大作とその時代…………… 西園寺 一 晃 (279)

兄・小澤征爾とともに ——戦争を越えて、芸術が奏でる平和——

…………… 小 澤 幹 雄 (295)

Advancing Global Education and Democracy through the Practice of Value-Creating Education

…………… Namrata Sharma, Takao Ito, Tetsuko Watanabe, Stephanie Kukita (317)

池田大作の「人間主義」と創価大学…………… 勘 坂 純 市 (323)

研究動向

中国における「池田思想」研究の動向 (22)

…………… 高 橋 強・堀 口 真 吾 (329)

資料紹介

創価大学・東京富士美術館所蔵ゲーテ自筆・自署書簡について (2)

…………… 田 中 亮 平 (339)

『新教材集録』『新教』掲載の牧口常三郎の文章について (補遺その1)

…………… 岩 木 勇 作 (345)

2025 年度活動報告 …………… (371)

編集後記…………… (379)

Soka Education (Vol. 19) Table of Contents

Special Feature: International Symposium Commemorating the 50th Anniversary of the Meeting Between Zhou Enlai and Daisaku Ikeda

Opening Remarks	Masashi Suzuki	(1)
The Contemporary Significance of the Normalization of Japan-China Relations	Yuji Miyamoto	(7)
The Era of Great Historical Transformation and the Possibilities for Peacebuilding in East Asia Through “Dialogue” : Reflecting on Modern History	Kang Sang-jung	(19)
In Remembrance of the “Zhou-Ikeda Meeting”	Han Dongyu	(29)
The Contemporary Significance of the Meeting Between Zhou Enlai and Daisaku Ikeda: Daisaku Ikeda’s Life of Value-Creation	Jia Huixuan	(39)
The Contemporary Significance of the Meeting Between Zhou Enlai and Daisaku Ikeda	Kazuteru Saionji	(49)
Great Humanity, Great Wisdom, Great Trust, and Great Compassion: The Friendship Between Premier Zhou Enlai and Daisaku Ikeda	Ji Yaguang	(61)
The Development and Challenges of Research on Ikeda Philosophy in South Korea: From the Perspective of a People-Centered Philosophy of Happiness	Hiroki Miura	(73)
<i>The Guidelines for Humanism in Action:</i> A Study of the Norms of Dialogue in Daisaku Ikeda’s SGI Peace Proposals	Ryusaku Yamada	(95)
Closing Remarks	Yasunori Tashiro	(107)

Articles

- Why Did the Meeting Between John F. Kennedy and Daisaku Ikeda Never Happen
After the Cuban Nuclear Missile Crisis?..... Masayuki Shiohara (109)
- Tsunesaburo Makiguchi's View of National Polity:
The Rhetoric of Reversal in the "Clarification of the National Polity"
..... Yusaku Iwaki (183)
- The History of Soka Education and Distance Learning Yusaku Iwaki (209)

Lectures

- Research on Shoji Saito and Tsunesaburo Makiguchi: Reflections, Methodology, and Continuity
..... Masayuki Shiohara, Shinichi Ishida, Yusaku Iwaki, Takao Ito (233)
- Research on Ryuji Takasaki and Josei Toda: Reflections, Methodology, and Continuity
..... Masayuki Shiohara, Takao Ito (257)
- Daisaku Ikeda in the Historical Context of His Times Kazuteru Saionji (279)
- Together with My Brother, Seiji Ozawa: Beyond War, Peace Resounding Through Art
..... Mikio Ozawa (295)
- Advancing Global Education and Democracy Through the Practice of Value-Creating Education
..... Namrata Sharma, Takao Ito, Tetsuko Watanabe, Stephanie Kukita (317)
- Daisaku Ikeda's "Humanism" and Soka University Junichi Kanzaka (323)

Reports

- Recent Work on Ikeda's Thoughts in China (22)
..... Tsuyoshi Takahashi, Shingo Horiguchi (329)

Reference Materials

- On Goethe's Handwritten and Signed Letters in the Soka University
and Tokyo Fuji Art Museum Collections (2) Ryohei Tanaka (339)
- On the Articles of Tsunesaburo Makiguchi Published in *Shin Kyōzai Shūroku*
and *Shinkyō* (Supplement 1) Yusaku Iwaki (345)

開会挨拶

鈴木 将 史

皆様、おはようございます。本日は「周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム」にご参加くださり、心より感謝申し上げます。

参加者の内訳

本日のシンポジウムには、日本、中国をはじめ、アメリカ、スペイン、イタリア、韓国、フィリピンなどから、120名を超える研究者の皆様が集ってくださいました。遠路日本まで、ようこそおいでくださいました。本学を代表して、皆様のご来学を心から歓迎申し上げます！

オンラインにて分科会の発表をされる方もおり、基調講演を含め、本日、明日の両日で、60本近い研究発表が行われる予定です。ご準備をいただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

本日ご出席の先生方は、当時の状況についてよくご存じのこととは思いますが、記念シンポジウムの開催に当たり、1974年に行われた会見の様子を少々振り返ってみたいと思います。

周総理との会見

50年前の12月5日、創価大学創立者池田大作先生は周恩来総理と会見されました。それは、池田先生の第2次訪中の答礼宴の席上、中日友好協会の廖承志会長から「周総理が待っております」と突然告げられ、実現したそうです。

池田先生は闘病中であった周総理の体調を案じ、「お会いするわけにはいきません」と固辞されましたが、「これは周総理の強い希望なのです」と言われ、周総理が入院する病院へ向かわれました。

会見を強く希望した周総理に対し、医師団は「命の保証はできません」と強く反対されましたが、周総理は「池田会長にはどんなことがあっても会わなければならない」と強く決意されました。医師団は、ご夫人である鄧穎超女史に相談しましたが、「総理が、そこまで言うなら許可してあげてください」との夫人の言葉で、会見が許可されたとのことでした。

池田先生が病院に到着したのは午後9時55分、周総理は病院の玄関で立って迎えてくださったそうです。

会見では、医師からの「そろそろお休みください」とのメモを無視して、周総理は池田先生と語り続けられました。「20世紀の最後の25年間は、世界にとって最も大事な時期です。全世界の人びとが、お互いに平等な立場で助け合い、努力することが必要です」との周総理の言葉について、池田先生は遺言を聞く思いであったと述懐しております。

お二人が直接語り合ったのは、この一回のみ、時間は30分程度だったと伺っております。池田先生は、小説『新・人間革命』の中で「これが最初で最後の、生涯でただ一度だけの語らいとなった。しかし、その友情は永遠の契りとなり、信義の絆となった。総理の心は伸一の胸に、深く注ぎ込まれたのである。」と述べておられます。

基調講演者の紹介

今回のシンポジウムでは、このお二人の一期一会の会見の意義について、深く考察を加えるため、それに相応しい先生方に基調講演を依頼させていただきました。

まず、この開幕式でご講演をお願いしたのは、日中友好会館の宮本雄二会長です。宮本会長は、1969年に外務省に入省し、中国との外交の最前線で活躍され、2006年からは特命全権大使として中国に赴任されました。退任後は「宮本アジア研究所」を設立し、アジアの平和構築に尽力しておられます。

宮本会長は、周総理と池田先生が会見した1974年、若手外交官として在中国日本大使館に勤務しておられ、池田先生から会見内容を伝えたいとの連絡を受け、大使館の上司と共に話を伺ったそうです。長年日本外交の中核で活躍された宮本会長にご講演いただけることは、誠に意義深いものと感じております。

また、本日午後には、「対話による東アジアの平和構築」と題し、会見の歴史的・政治的な意義を掘り下げる機会といたします。ここでは、政治学や政治思想史の分野で、日本を代表する学者であられる姜尚中先生、そして日本史、東アジア思想史、東アジア国際関係史の専門家で、中国日本史学会会長でもある韓東育先生に、ご講演いただく予定となっております。お二人とも、両国を代表する学者であり、深いご高察が伺えるものと期待しております。

さらに、明日の午前中に行う全体会では、「周恩来・池田大作会見の今日的意義」と題し、さらに3名の先生にご講演をお願いしております。

まず初めに、北京大学の賈蕙萱教授です。賈教授は、池田先生の訪中の受入を担ってきた中日友好協会に勤務され、直接ご担当してこられました。2001年には、中国国内で初めて北京大学に「池田大作研究会」を発足させ、初代会長として池田先生のご思想研究を先駆的に推進してこら

れた方です。

次に、西園寺一晃先生です。西園寺先生は北京大学を卒業後、朝日新聞社に入社し、中国担当記者として活躍されました。1974年、池田先生の初訪中時には、北京を取材中で、池田先生を北京飯店に訪ねられ、夜9時から3時間にわたって懇談されたそうです。その時、池田先生が「両国の友好には青年の交流こそ最も大切」と仰っていたことが、今でも印象に残っていると教えてくださいました。また、西園寺先生は、中国語人材の育成にも尽力され、その年の10月、本学の「第1回中国語弁論大会」にも、多大な尽力をいただきました。

3人目にご講演いただく方は、周総理の母校・南開大学の紀亜光教授です。紀教授は、1999年、南開大学周恩来研究センターの王永祥所長に同行し、本学に研究滞在されました。そして、創大との共同研究は『周恩来と池田大作』という書籍として日中両国で出版されました。

その後、南開大学の学生たちとともに周総理と池田先生について学ぶ活動を進め、2006年には「周恩来・池田大作研究会」を発足されました。この研究会の発足日が12月5日、会見の日を選んだことにも、深い意義が込められています。今回のシンポジウムには、この研究会の出身者も多数参加されております。

両日の6名による基調講演を通して、これからの若い学生の皆さんに、日中友好の精神と世界平和の重要性を伝える機会にしていきたいと思います。

創立者の対話活動

さて、ここからは、今回のシンポジウムのテーマを創立者の行動から掘り下げていきたいと思います。「対話による平和と発展」との今回のテーマの通り、池田先生は平和を実際にたぐり寄せる具体的な手法として、胸襟を開いた「対話」を重視し、周総理をはじめ多くの識者との「対話」を種として、「平和と発展」の道なき道を切り開いてこられました。生前、世界の識者との対話は7000人以上に及び、その多くが対談集として発刊されており、80冊以上に達しています。

対談集の内訳統計

池田先生が対談された方を地域に分けると、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、アフリカの五大州を網羅し、34か国・地域の方々となります。

1972年にクーデンホーフ・カレルギー博士との対談集を発刊して以来、2017年の王蒙氏との対談集まで、対談相手は歴史学者、経済学者、物理学者、政治家、作家、教育者等多岐にわたり、ノーベル平和賞受賞者も多数含まれております。また池田先生は仏教者でありながら、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、儒教、道教など異なる宗教の方々との、いわば「文明間の対話」、「宗教間の対話」を繰り広げられました。

対談の分野は、歴史、政治、経済、人権、環境、文明、哲学、宗教にとどまらず、文化、芸術、

文学、教育、科学、生死論、宇宙論など多岐にわたり、扱っていないジャンルはないと思われるほどです。

これら 80 数冊には、21 世紀の現代に警鐘を鳴らす内容が多く、どの対談集でも、国や宗教の壁を越え、英知が真剣にぶつかり合い、未来と平和のための意見を昇華させています。

また、その他多くの創価学会向けの指導書や未来部への指針、宗教教学など、多くの著作も対談形式を選んで進められました。池田先生は、「他者との対話」を軸に、いわば自身のライフワークとして、50 年以上にわたり、繰り返し世界に訴えかけ、若い世代のために書籍として残されました。

トインビー対談

池田先生の世界との対談の始まりは、アーノルド・J・トインビー博士との対談であり、皆様もよくご存じのことと思います。

池田先生は、トインビー博士の要望に応じて 1972 年と 73 年に、ロンドンの自宅を訪れ、2 年越し、延べ 10 日間、計 40 時間に及ぶ対話を展開されました。博士は池田先生に「あなたと話をすると、自分の学問の一切が整理される」と対談を喜んでおられました。その後の往復書簡を含めて、1975 年春に、『二十一世紀への対話』の日本語版が完成し、翌年には英語版『Choose Life』が出版されています。

この対談集は次々と各言語に翻訳され、現在までに 30 以上の言語で出版されており、世界中の指導者や識者の強い関心と高い評価を受けてきました。今では大学や高校の教材として使っている国もあり、「人類の教科書」と呼ぶ方も多くいらっしゃいます。対談の領域は、平和、環境、人権、倫理などの課題から、根底の問いである「生と死」、「人間とは何か」、「生命とは何か」との話題にまで及んでいます。

この両者の対談は、「東洋と西洋」の対話であり、「宗教間の対話」の先駆けとなりました。

なお、本学が 2005 年に初めて中国で行った、「第 1 回池田大作思想国際学術シンポジウム」も、この対談集に基づいて、「『二十一世紀への対話』と現代社会」をテーマとして行われました。本日まで参加の方々の中には、この第 1 回から参加してくださっている方々もいらっしゃいます。

中国の対談者

中国の対談者の名前を挙げると、敦煌文物研究所の常書鴻氏、作家の金庸氏、北京大学の季羨林氏、儒家思想のドゥ・ウェイミン氏、「東洋のレオナルドダヴィンチ」とも称される香港の饒宗頤氏、台湾・中国文化大学の張鏡湖理事長、華中師範大学元学長の章開沅氏、元文化部長の高占祥氏、中国教育学会会長の顧明遠氏、香港中文大学元学長の劉遵義氏、作家の王蒙氏等がおられます。内容も中国古代思想から現代中国までのあらゆる時代の思想や歴史を語り合い、両国の次世代へのメッセージが込められています。どの対談集も、日中友好と世界平和の共通点を基に、

未来への希望を青年に託す一書になっています。

対話の重要性

2007年に発刊されたドウ・ウェイミン博士との対談集では、両者が「対話の重要性」について語り合っています。ドウ博士は「対話は自己認識や自己批判を深めていけるチャンス」と述べ、池田先生は「異なる価値観を尊重し、新たな対話を通じて人類の共通の大地を広げることが大切」と強調したうえで、「変革への挑戦を続け、『対話の文明』を築くことが、世界平和への壮大にして着実なる挑戦である」と述べています。

池田先生がこれまで繰り広げてきた対談集の発刊は、人類の未来が平和であってほしいとの願いからであり、青年への期待・遺訓として、多くの国から称賛されてきました。各国から受けられた名誉称号の数々は皆様も知るところであり、本学では本部棟で常設展示として毎年学生・来学者に紹介しております。

3人に捧ぐ栄誉

2006年に、池田先生は北京師範大学から200番目となる名誉称号を授与され、本学数千人の学生を前に、「この栄誉は、トインビー博士、周恩来総理、コスイギン首相に報告申し上げたい」と3名との会見を振り返るとともに、周総理との会見の様子も改めて語られ、「総理とお約束した日中の平和友好は絶対に崩れない、いな、永遠に磨きあげていくべき『金の橋』である」と力強く宣言され、学生に後事を託されました。

最後に

今月15日、池田先生の一周忌に際し、本学では全学集会が行われ、学部生、大学院生、留学生、創価女子短大生、及び教員・職員が一堂に集いました。創立者の祥月命日であるこの11・15を池田先生への感謝と決意を新たにする日として「若き創立者の日」に制定し、後継の決意の碑が除幕されました。

「私たちは若き創立者として 生命尊厳の哲学を根本に 人と人との心を結ぶ平和の大連帯を 断じて広げてまいります」等の3つの誓いが力強く宣言され、「皆が創立者の自覚！」という新時代の創価大学がスタートし、新たな歩みを学生と共に元気に開始しております。

最後に、今回のシンポジウムの大成功と、皆様のご健勝を祈念するとともに、テーマの通り、「対話」によって活発な議論が交わされることを心から念願し、開会の挨拶といたします。

大変にありがとうございました。

日中国交正常化の今日的意義

宮 本 雄 二

こういう形で皆様方にお話しする機会を与えていただき誠にありがとうございます。

池田大作先生と周恩来総理との会見を記念したこのシンポジウムに、私がお話しすべきは、あの時代に起こった日中国交正常化、その後締結された日中平和友好条約が持っている今日的意味だと思います。このことを、もう一回皆様と共に考えてみたいと思います。

最初に、歴史の教訓を学ぶことについての、私の経験的な見方を語ってみたいと思います。

1. 歴史の教訓に学ぶということ

1972年9月29日に日中国交正常化が実現してから、すでに半世紀が経ちました。歴史上の出来事に対する理解は、それを経験したかどうかで異なります。経験しないと、本当の意味が分からないということであり、書物で学んでも限界があるということです。だから経験した方の話を聞き、お書きになったものを読む必要があります。私自身、1946年生まれですので、それ以前の歴史は、自分で学んだものであり、実際に体験したものではありません。それでも懸命に学ぶことで、実際の経験に近づくことはできます。そこから教訓を学ぶことが大事なのです。

面白い経験をしたことがあります。歴史上の人物、つまり歴史の本に登場する人物が、実際に自分の目の前に現れた時には、本当にびっくりしますし、戸惑います。私は2度、そういう経験をしました。1度は、1971年10月のことで、台湾で中国語の研修をしているときに外交官の資格で国慶節の記念式典に参加する機会を得た時のことです。外交官の席は演壇に近いので、10メートル足らずの至近距離で、蒋介石総統の演説を聴くことができました。蒋介石という名前は歴史の本に何度も登場します。その人物が、自分の目の前にいる。実に不思議な感覚でした。同じ事は、1974年1月に、当時の大平正芳外務大臣の末席の随員として訪中したときにも起こりました。周恩来総理とお会いすることができ、握手まですることができたのです。この方も、私からすると、間違いなく、歴史上の人物でした。その方と自分が握手している。戸惑いました。

Yuji Miyamoto（宮本アジア研究所代表・元駐中国日本大使）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の開会式における基調講演に加筆修正を施したものである。

夢か、現実か、どっちかなという感覚です。

ところが、その後年齢を重ねると、そういうことは起こらなくなりました。歴史上の人物と言われる方々が、次第に世を去ります。そして自分が経験したものは、同時代の人たちと一緒につくる歴史の一部となっていくからです。鄧小平さんになると、もう同じ時代の人なんですね。私の、蒋介石総統や周恩来総理と会ったときの感覚は、今考えれば、実は「若い」ということの特権だったのです。

さて、経験したかしないかの違いの持つ意味についての話ですが、そのことを深く考えさせられたのが、日中国交正常化でした。本日は、日中国交正常化という事例を通じて、経験したかしないかの違いの持つ意味を考えたいと思います。なぜなら、私自身、年月の経過とともに、日中国交正常化の持つ意味が、戦前を体験した世代の方々と、それを体験していない我々、戦後世代では違うことを、ますます強く感じているからです。

私は、1969年に外務省に入りましたが、1972年9月に日中国交正常化が実現したときは、アメリカで在外研修をしており、この件に直接関係していません。日本に戻り、1973年7月に外務省アジア局中国課に配属となり、日中共同声明の関連文書を懸命になって勉強したことをよく覚えております。そこで私が理解したことは、「日中共同声明は、日中の戦争状態に終止符を打ち、日本の歴史認識問題に道筋をつけ、台湾問題に対処する基本的枠組みを作りあげたが、尖閣問題は手つかずであった」というものでした。しかし、その後の経験が示しているように、日中の戦争状態を終わらせた以外は、具体的な問題を処理するたびに日中は揉め続けました。歴史認識問題、台湾問題、そして尖閣を巡る領土の問題は今日まで続いております。日中間の複雑な多くの問題を、1回の共同声明だけで処理することは難しかったのです。

そこで日中共同声明は、日中の諸懸案を十分に解決することはできていない、それがその後の諸懸案の解決を難しくしている、あの時にもっとしっかり処理しておくべきだったという声も聞きます。しかし、日中共同声明の過小評価は、日中国交正常化の過小評価となります。あの当時の政治的現実を考えれば、逆に、よくぞここまで合意できたな、というのが、私の率直な感想です。その後の日中の諸懸案の解決を図るときに、その基準、根拠となっているのも日中共同声明です。日中共同声明の価値は、本当に大きいと思います。

そして、それ以上に、単なる文章の表面だけではなく、その背後にある、日中国交正常化を実現し、日中共同声明を発出した、あの時代の両国指導者の方々の「心」をしっかりと受け止める必要があります。そのことを、月日の経過とともに、ますます強く感じております。幸いなことに、その後、日中国交正常化前後の歴史を綴る多くの文書が公開され、関係者のメモワールも出され、それらを読むことで、私たちにとり、あの当時のことは、今の方が良く分かるようになりました。私が十分に理解できておらず、しかしあの当時の両国指導者にとり一番大事だったことは、日中は二度と戦争をしないし、してはならない、ということでした。戦争の否定と平和の追求への強い思い入れがあり、それが名実ともに彼らの不動の信念だったのです。ここに経験した

かないかの違いが、顕著に表れていると、しみじみ思います。あの世代の方々は、実際に戦場で戦い、戦争がもたらす惨禍と、それが両国に及ぼす影響のとてつもない大きさを十分に知り尽くしておられた。だから日中の不戦、すなわち日中は二度と戦ってはならず、平和を大事にし、国と国、国民同士は対立や恨みや嫌悪ではなく友好を、何が何でも育まなければならない、と考えておられたのです。

ここにおいて1974年12月5日の、池田大作先生と周恩来総理の会見が大きな意味を持つてくるのです。池田大作先生も、平和への強い思いをお持ちでした。1968年に池田先生が発表された「日中国交正常化提言」を周恩来総理は、高く評価しました。現在、もう一度読み直しても、この日中国交正常化提言は先見性をもった判断であり、提言でした。そのこともあり、周恩来総理も公明党を重視し、公明党は日中国交正常化に大きな役割を果たします。池田先生との会見の時、周恩来総理はすでに76歳であり、重病と闘っておられました。46歳の、大きな歴史的視点と日中の平和と友好の関係を大切に思う池田大作先生に間違いなく後事を託されたと言っても過言ではないでしょう。

周恩来総理は、日中の間に、平和と友好と協力の関係を確立したいという強い気持ちを持っておられたと、よく耳にしました。それ故に、日中共同声明だけではなく、日中平和友好条約を締結しなければならないという強い信念をお持ちでした。つまり共同声明という政治文書だけでは不十分であり、それを条約という、国と国との最も強い拘束力を持つ国際約束という形で、日中関係の枠組みを決めておきたかったのです。日中共同声明の中に、平和友好条約を結ぶことが書き込まれているのは、そういうことです。これが中国の最高外交方針となり、1978年、鄧小平副総理の力強い指導の下、日中平和友好条約は締結されたのです。当時の福田赳夫総理もまた、日中の平和は極めて大事だと考えておられました。ちなみに福田赳夫先生も日中国交正常化を進めた、あの世代と同じ世代の方であり、日中平和友好条約の締結により「日中の間は、木の橋から鉄の橋になった」と喜ばれました。鄧小平副総理訪日の際、日中平和友好条約の批准書交換のセレモニーが行われました。両国の外務大臣が批准書を交換し終わると、後ろで見守っていた福田総理と鄧小平副総理が、満面の笑みを浮かべて抱き合われました。この写真は今日も見ることができます。

皆さんもご存じのように、池田大作先生は、74年5月に初訪中されています。先ほど学長がお触れになった通りです。周恩来総理は会見を希望されましたが、膀胱がんの手術のため果たせませんでした。同年12月5日、池田大作先生の2度目の訪中の最後の夜に、周恩来総理は医師の反対を押し切り、非常に困難な中、どうしても会いたいということで、入院中の北京の305病院に池田先生を迎え、会見が実現したわけです。

私事ですが、実は74年5月に初訪中されたときに、私は池田大作先生と北京でお目にかかっています。後に外務次官になられた高島益郎アジア局長のお供で中国を訪問中でして、北京飯店に泊まっていたのです。そうすると、突然池田先生から来てくれというメッセージが入り、お部屋にお伺いし、お話を承ったことがあります。その時は池田大作先生からメモは遠慮してくださ

いと言われていましたので記録はとれず、お話が終わり自分の部屋に戻る途中、局長には「何も話しかけないで下さい」とお願いして、走るように部屋に戻り、必死になって記憶をたどり報告書を書いたことを覚えています。今度は、私自身が、歴史の一コマに直接参画することになったわけです。

経験するかしないかの違いの話は、ここまでといたします。

2. 日中国交正常化の意義

次に、日中国交正常化の意義について考えてみたいと思います。最初に、日中国交正常化の日本にとっての意味をお話したいと思います。

日中国交正常化の日本にとっての意味

私が1969年に外務省に入ったときには、中国と国交を回復する動きは全く見えず、いつ北京との間で中国語を使って仕事ができるのか全く分かりませんでした。そこで中国語を勉強しろと言われたわけですが、1973年に在外研修から帰ってきたときには、相手が台湾から中国大陆に替わっていました。日中国交正常化は、私にとっては突然の出来事でした。その私でも、日中国交正常化は、日中、ひいてはアジア、さらには世界の将来に影響を与える重大な歴史的出来事だったことは皮膚感覚で分かりました。

日本にとっての意味から考えてみましょう。皆さんよくご存じのように、日本が第二次世界大戦で敗れ降伏した後、中国では共産党と国民党との間の争い、所謂国共内戦が始まります。1949年に、中国共産党が勝利して中華人民共和国が成立します。この戦いに敗れた蒋介石の中国国民党は、台湾に逃れ、中華民国を存続させます。中国は2つに分断されたわけですが、この背景には米国が絡んでいました。中華人民共和国が成立した翌年の1950年に朝鮮戦争が勃発し、中国はソ連の強い要請もあり参戦します。米国は、世界の共産主義化というソ連の思惑に共産中国が加担し、米ソ冷戦、東西冷戦の構造がアジアに及んだと判断します。共産中国は米国の敵ですから、その共産主義と戦う台湾の中華民国は味方だということになります。あの当時、イギリスは、台湾の中華民国ではなく北京の中華人民共和国を外交承認しました。外交的にはこちらの方が正常な判断です。アメリカは別の判断をしたということです。米国はソ連憎し、共産党憎しですから、中華人民共和国を承認せず、台湾の中華民国を支持し、台湾の防衛を決めます。中華人民共和国、すなわち中国は、2度、武力による台湾解放を試みましたが、米国に阻止されました。もし米国が関与しなければ、台湾は、あの時点で中国の一部となっていたはずでした。つまり台湾問題には、最初から米国が深く関与しており、この基本構図は、今日まで続いているということです。

米国は、日本にも、中国ではなく台湾を承認することを求めました。あの当時の日本は連合国、すなわち米国の占領下にあり、主権を持っていませんでした。独立国ではなかったのです。最後

は米国の言うことを聞く以外の選択肢はありませんでした。しかも米国は、日本が独立を回復するために待ち望んだ1951年のサンフランシスコ平和条約の発効と、日本と台湾との外交関係の樹立を結びつけてきたのです。日本は、サンフランシスコ平和条約の発効直前に台湾の中華民国との間で平和条約を結びました。しかし、当時の吉田茂首相は、中国といずれ外交関係を結ぶことは当然だと考えていました。そこで台湾との条約は、台湾にしか適用されないことを明記し、将来に備えたのです。何があろうとも中国は大国であり、大国であり続けます。その中国が統一された以上、隣に位置する日本にとり、外交、経済、安全保障等、あらゆる面で中国が重要になることはあまりにも明らかだったからです。

日本人の常識として、中国といえば大陸の中華人民共和国であり、台湾の中華民国ではなかったのです。1972年に日中国交正常化が実現した後、大部分の日本国民は、それを支持しました。自民党内でも、反対の最大の理由は、台湾を見捨てたという点であり、中国との国交を回復すること自体ではありませんでした。中国大陆との関係に空白が生じると、日本外交に支障が生じ、経済でも困るということです。日中国交正常化は、日本に、そのような巨大なプラスをもたらす大きな外交的な動きだったのです。

日中国交正常化の世界にとっての意味

この日中国交正常化が、1971年に始まる米中関係の変化に触発されたものであることは、間違いない歴史的事実です。米中が国交回復に向かわなければ、あの時期に日本が中国と国交を回復することは難しかったでしょう。ニクソン大統領の下で大活躍したキッシンジャー国務長官のエピソードは、皆さんもよくご存じだと思います。1971年7月にキッシンジャーは極秘裏に中国を訪問し、その直後、ニクソン大統領の中国訪問が突然、発表されました。これが、第1次ニクソン・ショックと呼ばれるものです。同じ年の8月に、今度はドルと金との交換停止を突然発表し、世界経済を大混乱に陥れました。これが第2次ニクソン・ショックです。ニクソン大統領だけではなく、米国は不意打ちが大好きなようで、ときどき何の連絡もなしに突然、政策を変えます。このような我が儘は、米国が圧倒的な超大国だったからできたことで、米国の国力が相対的に低下してきている現在、少しは他国のことも気にして欲しいのですが、トランプ大統領が再登場して、また驚かされることでしょう。米国という国はときどき、こういうことをするというのを、皆さんの頭の片隅に、特に日本の方々の頭の隅に置いておいて下さい。

少し脇道に逸れてしまいましたが、ニクソン大統領は、1955年から米国がのめり込んだベトナムとの泥沼の戦争を終わらせ、名誉ある撤退をしたいと考えていました。国内世論が、それを望んだからです。ベトナム戦争に反対する米国の若者の動きはますます強くなり、過激化していました。そこでニクソン大統領も撤退を考えたわけですが、米ソ冷戦時代ですから、ソ連の勢力を拡大させずに、ベトナムからスムーズに撤退し、なおかつ米ソ対立を米国に有利な状況に持っていくには、中国との関係改善を図るしかないと考えました。ここがニクソン・キッシンジャーチームの戦略的発想であり、それを実行に移すところが凄いところです。その結果、キッシンジ

ヤーの1971年7月の中国極秘訪問となり、10月のキッシンジャーの2度目の中国訪問となります。そして最後に1972年2月のニクソン大統領の歴史に残る訪中となり、上海コミュニケ(共同声明)を出しました。国交回復に確実に向かい始めたのです。その間、1971年の11月には、中国の国連代表権問題において中国支持派が多数となり、中国と台湾が入れ替わりました。中国は国際社会に再登場し、時代は大きく変わっていたのです。

このような国際情勢の下で、日本において中国との国交正常化を望む声は勢いを増しました。それが1972年に田中総理が訪中する後押しをしたわけです。このように見てきますと、その4年前の1968年に、池田大作先生が「日中国交正常化提言」を発表された先見の明に改めて感服します。あの時代に、あのような提言をされることは、私は本当に勇気のいることだったと思います。あの当時、中国関係で何か動きをすれば、やはり強い社会の圧力に直面する時代でした。池田先生のご見識と勇氣に、改めて深い敬意を表したいと思います。

ニクソン訪中の「その後」に、少し触れておきます。今日まで続いている台湾問題の出発点でもあるからです。1972年2月のニクソン訪中が、そのまま米中の国交正常化には進みませんでした。台湾問題が足かせとなり、正式の国交正常化は、1979年1月までずれ込みました。

米国は、対中国軍事包囲網の一環として、朝鮮戦争の休戦協定成立後の1954年12月に台湾との間で相互防衛条約を結んでいました。共産中国の脅威から自由台湾を守ることです。実は、台湾に逃れた中国国民党ですが、日中戦争の間、蒋介石夫人の宋美齡の活躍もあり、すでに米国内で強力な支持グループを作りあげていました。宋美齡は、中国の大財閥の家に生まれ、米国の大学を卒業し、流暢な英語を話し、見事に米国の人たちの心をつかみました。世論戦で日本は完敗でした。そういう風にしてでき上がった所謂「台湾ロビー」が、米国の政治に大きな影響力を持っていたのです。

中国から戻ったニクソン大統領は、米中共同声明を発表したにもかかわらず、国内で難題に直面します。中国は、米台相互防衛条約の破棄と軍事支援の放棄を強く要求していました。この要求を呑めば、中国は台湾を武力解放することが可能となります。そこでワシントンの議会を中心に、「共産中国に自由台湾を売り渡すのか」という激しい反対が起こります。ニクソン大統領は、台湾をどうするのかについて、国内が納得する回答を持っておらず、やむなく正式の国交正常化をあきらめ、実質上、国交正常化と同じ状況を作るようにしました。形よりも実を取り、中国とソ連に対する共同戦線を作りあげ、ベトナムからの撤退を実現することにしたのです。

中国の方も、1969年に中ソ武力衝突が起こり、ソ連から核の恫喝を含む厳しい圧力を受けていました。そのとき、私も外務省中国課にいて、ソ連が中国に核を使用するかもしれないという情報電が外務本省に飛び込んできていました。ソ連は、核の使用に対する世界の反応を見るために、こういう情報を流しているなと思ったものです。そこで中国は、ソ連を牽制するためにもアメリカとの関係改善が必要だということで、実質上の国交正常化を受け入れたのだらうと思います。

次のカーター大統領は、米中国交正常化の完成を決意します。1978年12月に国交正常化のた

めの共同声明を出し、1979年1月に国交正常化が実現しました。その結果、米台相互防衛条約は破棄されることになり、台湾の安全はどうなるのだというので、アメリカ議会は強く反発し、1979年4月に台湾関係法を通します。そこで「自衛能力の維持を可能とする防衛的な器材および役務」を台湾に供与することを決めました。また「台湾に対するいかなる脅威についても、直ちに議会に通告し、大統領と議会は、この種のいかなる危険に対抗するため、とるべき適切な行動を決定しなければならない」と定めたのです。共同声明は国際約束であり、それとは異なる国内法ができたことに、中国は激怒します。しかし米国は、これが三権分立の米国の制度であるとして、米中の共同声明と台湾関係法に基づき対中外交を進めます。つまり米国の対中政策には、初めから大きな矛盾が埋め込まれているのです。ここに米中関係の最大の問題が集約されていると言えます。

しかし、物語は、ここでは終わりません。1981年、レーガンが大統領に就任します。レーガン大統領は大統領選挙運動中に、台湾を公式の政府として認める、すなわち「1つの中国」の原則¹を踏みにじり「2つの中国」を承認すると公言していました。鄧小平は、そうなれば米中の外交関係は断絶され、1960年代の対立関係に戻ると米国に警告します。そこでレーガン大統領は、これまでの米中関係の枠組みを維持するということにしました。米ソ冷戦時代の米国にとり、それほどソ連との対立は深刻であり、中国が米国側に付いていることの利益は大きかったのです。しかしカーター政権が積み残した台湾に対する武器売却の問題は残りました。そこで1982年8月17日、3つ目の米中共同声明を発出します。この共同声明において米国は、①台湾への武器売却を長期に実施するつもりはないこと、②台湾に対する武器売却は質的にも量的にも米中外交関係樹立以降の数年に供与されたもののレベルを越えないこと、③台湾に対する武器売却を次第に減らしていき一定期間のうちに最終的解決に導くつもりであること、を表明しました。段々に減らしていくと約束したのです。

これでこの問題は一応の解決を見るはずでした。ところがレーガン政権は、台湾に対し極秘裏に「6つの保証」といわれるものを与えていたのです。その中には、台湾への武器供与の終了期日を定めず、台湾の主権に関する米国の立場は変えず、台湾関係法は修正しない、といったことを約束していました。私自身、台湾をめぐる米国と中国とのやりとりを観察していて、米国は共同声明で約束したことを違うことをやるので問題だ、と感じていました。しかし、米国が台湾に対し極秘裏に「6つの保証」といわれるものを約束していたことは知りませんでした。しかもトランプ政権の2020年8月に、この「6つの保証」を表に出し、その上、これを米国の台湾政策の一部にすると表明しました。この基本方針はバイデン政権にも引き継がれています。米中関係には、軍事問題や経済安全保障問題だけではなく、台湾の安全問題においても、厳しい対立の構図が埋め込まれているのです。米中の異なる基本的立場をいかにして調和させて安定を保つかと

¹ 「1つの中国」原則は、①世界にはただ1つの中国しかなく、②中華人民共和国は中国人民を代表する唯一の合法政府であり、③台湾は中国領土の不可分の一部分である、という3要素から成る。

いうのは実に難しいということです。しかし、それでも米国は、台湾を守るとは公に言わない、すなわち曖昧にしておくことによって、中国の「1つの中国」の原則との共存を図ってきたのです。

長々と米中の関係に触れてしまいましたが、それは米中関係の最も重要な部分が台湾問題であり、その鍵は台湾の安全を米国が守ろうとすることから来る軍事的な関係にあるからです。正に「台湾有事」は「日本有事」の議論に直結します。日本は日米安全保障条約を通じ、台湾の安全問題に結びつけられているからです²。武器の売却は一種のビジネスですが、この規模が拡大し、質的にも防衛的な兵器から攻撃的な兵器になれば、米中関係は緊張します。売却ではなく「供与」に変われば、ウクライナに対するように無償、つまりタダで台湾に武器を供与することも可能となり、米中関係はさらに緊張します。台湾に対し米軍が直接、軍事訓練を施したり、共同作戦計画を練ったりするようになれば、米中関係は破綻するでしょう。

米国が台湾との関係を深めることに対抗して、中国は台湾に対する軍事演習を強化し、米国の軍事的レッドラインを超えかかっています。トランプ政権が、台湾との関係をさらに深め、高いレベルでの交流を始めたり、台湾当局を政府並みに扱ったりすれば、米国が中国の外交的レッドラインを越えかねません。米中関係は、本質的にそういう厳しい緊張関係にありますので、あえて強調させていただきました。

このように1972年に米中関係が改善し、国際政治も、また大きく変わりました。米中が組んでソ連と対抗するという構図が、台湾問題をかかえながら、米中関係を安定させる上で、大きな役割を果たしました。さらに大きくいえば、レーガン大統領の軍拡路線が、ソ連経済の弱さを露呈させ、ソ連崩壊となります。その始まりはといえば米中が手を結んだことにあります。米中国交正常化は、そういう世界史的意味を持っていたとも言えなくもありません。ソ連崩壊により、米中関係は新たなページを歩み始めました。中国の急速な台頭が、今度は米中関係を不安定化させます。今は超大国同士となった米中は何がなんでも上手に関係をマネジメントしてもらわなければ困るということです。ここを強調しておきたいと思います。

日中国交正常化により、日本と中国の関係が安定したことにより、東アジアに平和と発展の条件が整いました。日本を先頭に雁が空を並んで飛ぶような「雁行型発展」が実現し、韓国、台湾、香港、シンガポールの「アジアの4つの小さな竜」が登場します。それに中国の発展が付け加わり、今やASEAN、さらにインドの発展が加わって、真の「アジアの世紀」が始まったのです。この経済主導の発展モデルにおいて日本は大変重要な役割を果たしました。しかし、それは日中の平和な協力関係があったからできたことであり、それを前提条件として、初めてアジアにおけ

² 日米安全保障条約第6条は、「…極東における国際の平和及び安全の維持の寄与するため、アメリカ合州国は、その陸軍、空軍及び海軍が日本国において施設及び区域を使用することを許される」と規定している。「極東」には台湾が含まれるというのが日本政府の公式見解である。1972年5月に沖縄が日本に返還されたばかりであり、沖縄の米軍基地の極東戦略における重要性に照らし、その使用に支障を来たさないようにするのが、日中国交正常化の前提条件であった。

る平和と発展のモデルが完成したのです。この意味で、日中国交正常化は実に大きな国際的意義を有していました。

それでは、日中国交正常化の今日的意義というのを我々はどう捉えるべきなのでしょう。

日中国交正常化の今日的意義

本日の講演の最終章である、日中国交正常化の今日的意義に入りましょう。

以上説明してきましたように、日中国交正常化の前と後で、世界は大きく変わりました。今日、中国と外交関係を持ち、深い経済関係を持っていることが、いわば当たり前、所与のものとならされております。ところが、1972年の日中国交正常化以後、日中が基本的には平和で協力的な関係を維持してきたこと自体、決して所与のものではなく、そのために懸命な努力がなされ、ようやく維持されてきたものだということを強調しておきたいと思います。それほど日中関係は複雑で、簡単に感情問題となる事案を沢山抱えているのです。しかし、その努力は報われました。日中が平和で協力的な関係を築くことができたからこそ、日本、中国、そしてアジアの平和と発展が実現したのです。日中が喧嘩をし、角突き合わせていれば、「アジアの世紀」などと言われる時代が訪れることはなかったでしょう。日中国交正常化の今日的意義の第1は、日中が平和で協力的な関係を築き、維持している点にあります。逆に言えば、それを失えば、全てを失うのです。

正直申し上げて、現場にいた者からすると、維持すること自体、なかなか大変でした。日中の間には、先ず台湾問題があります。「1つの中国の原則」、これを尊重しながら対応するということです。1973年に中国課で仕事を始めると、1週間に何度も、政府が出した出版物に「中華民国」という名前が出ている、「台湾」に書き直せと、中国側から抗議を受けたものです。ちなみに、その抗議をしていた人の通訳をしていたのが、その後、外務次官をやりました、武大偉さんで、当時の中国課長の通訳をしていたのが、私です。それから李登輝さんの訪日問題もありましたね。中国は、日本と台湾の関係に大変、神経質です³。台湾問題は、中国にとっての核心的利益の中でも、最も核心となる利益です。それは「1つの中国の原則」に集約されます。これからも極めて大事です。日本が日中共同声明において約束した台湾に関する枠組み、これは1つの中国の基本的な承認ですけれども、それに基づく日本の対中関係は決して動揺させてはならないということです⁴。

次に歴史認識問題があります。1981年から83年まで、初めて北京の日本大使館に勤務しまし

³ 台湾は1894年の日清戦争の結果、日本に割譲され植民地とされたものであり、その後の日本の対中侵略を経験し、祖国統一を掲げる中国共産党にとり、日本は格別の存在となる。また、日本は台湾に対し大きな影響力を今日も持つと認識している。

⁴ 日本は共同声明において、台湾が中国の領土の不可分の一部であるとの中国政府の立場を「十分理解し、尊重し、ポツダム宣言第八項に基づく立場を堅持する」と表明している。「尊重する」とは「反対しない」ということであり、「ポツダム宣言第8項に基づく立場」とは、台湾が中国に返還されることは認める、ということである。

たが、そのとき、第1次教科書問題に遭遇しました。教科書問題の実際の事実関係は、極めて複雑だったのですが、日本の歴史教科書が、日本の中国侵略を肯定していると単純化され、大騒ぎになりました。また1985年の中曽根康弘首相や2001年～6年の小泉純一郎総理の靖国神社参拝問題で日中関係が止まってしまったことをご存じの方も多いでしょう。歴史認識問題は、今日においても依然として重要な問題であり、日本側は慎重に対応しなければなりません。日本は中国を侵略し、中国の方々に大きな犠牲と痛みを与えた事実を正面から受け止めなければなりません。加害者は容易に忘れますが被害者は忘れません。強調しておきたいのは、日本の総理の靖国参拝は、全世界から「戦前の歴史を修正する歴史修正主義者」というレッテルを貼られる行為であるという点にあります。日本の戦前の生き様ファシズムや軍国主義と呼ばれていますが、戦後の国際秩序は、その否定の上に成り立っているのです。靖国参拝は戦前の日本の肯定と見なされ、中国や韓国だけではなく、東南アジアやアメリカ、さらにはヨーロッパとの関係も悪化します。世界中を敵に回せば、日本外交は破綻します。日本の総理は決してこれをやってはなりません。

その次に、尖閣問題という領土がらみの問題があります。日中が、尖閣は自国の領土だとお互いに主張し、いがみ合っています。

2012年に、日本政府が尖閣を所謂「国有化」したことで、中国は公船の尖閣領海侵入を常態化させました。実際は「国有化」ではなく、日本の国内法上の所有権が日本国民から日本政府に移っただけで、国際法上は何の変更もありません。中国は、そこを日本による現状変更だと言いつのり、今度は公の船、公船を派遣して日本の領海に侵入し、物理的に尖閣の現状変更を試みているのです。国際社会では、実力による現状変更は国際法違反だという認識が主流となってきました。国際法も皆様ご存知のように時がたつにつれ変化していきます。今は、実力による現状変更は国際法違反であるという方向で集約されています。このことを中国の方にも念頭に置いていただきたいと思います。南シナ海の中国の行為も同じ事です。

さて中国公船の背後には人民解放軍がいます。尖閣は日本も中国も、お互いに自分の領土だといっており、領土を守るのは、日本の自衛隊にとっても、中国の人民解放軍にとっても神聖な任務です。お互いに自国の領土を守ろうとする行動が、相手から見ると侵略行為となるわけです。第二次世界大戦が終わってから、初めて日本と中国の軍勢力が直接向き合う緊張した事態を迎えました。皆さんの想像を超えることだと思いますが、あの当時、世界は日中が軍事衝突をすることを本当に心配しました。台湾問題、歴史認識問題、領土がらみの問題と並んで、ついに日中の間に軍事安全保障問題が登場しました。日中関係に、安全保障という新たな柱が、それもととても大きな柱として立ってしまったのです。それまでの政治外交、経済、文化・国民交流の柱に追加されたということでもあります。

さらに、日中の国民間における感情の悪化があります。昨年言論NPOが中国側と実施した世論調査では、日本人で、中国に対して「良くない」印象を持っている人は9割を超えました。日本に対して「良くない」印象を持つ中国人も6割を超えました。ただ、「良い」印象を持っている中国人は、まだ4割近くいるということですが、来週発表される予定の今年度の言論NPOと

中国の共同世論調査によれば、中国側の対日好感度が大幅に低下しております。中国でも日本に対する好感度は下がっているということです。日中の国民感情はさらに悪化し続けているのです。

日中国交正常化の今日的意義の第2の点は、そのように漂い始めた日中関係に、今後の方向性を与えてくれるのも、また日中国交正常化である、という点です。日中国交正常化の目的と、その背景にある時代精神は極めて明確です。それが方向性というものです。それこそが、日中国交正常化を実現した先人たちの目的意識であり、信念であり、我々、後世に対する厳しい要求です。第1に、冒頭強調しましたように、日本と中国は、二度と戦争をしてはならないということです。核兵器が登場し、通常兵器の破壊力も格段に強まった今日、大国同士の戦争は人類全体を破壊します。アメリカが入ってくれば、人類は滅亡ということになりかねないわけです。日中は「平和」を堅持しなければならないということです。

日中の交流は、遣隋使や遣唐使のように、日本のエリートと中国のエリートとの交流の歴史でした。室町時代まで国の仏教を学ぶために沢山の日本の僧侶が中国を訪れ、また鑑真和尚のように中国の高僧も何人も日本に来ています。京都の宇治市にある万福寺の隠元和尚のように、江戸時代に日本に来た人もいます。日中の文化交流は江戸時代もあったということです。貿易関係もずっと続いてきました。しかし、それでもそれは限られた分野の交流であり、一般の国民同士の交流ではありませんでした。極めて不幸なことですが、初めて普通の国民同士が直接、接触したのは、実は、日本の中国侵略を通じてであったのです。戦争は人の殺し合いであり、日本軍は一般の中国人も手にかかけました。あの時代、中国人は兵隊としての日本人しか知らず、普通に生活する日本人がどういうものなのかを知らなかったのです。日本人はと言えば、中国人を見下し、本当の中国人の姿が分かかっていませんでした。

そこで先人たちは、第2に、日中の国民同士が平等の立場で大いに交流し、相互理解を深めなさいと要求しているのです。国民同士の交流は幅広い文化の交流を伴います。そうすることで相手に対する理解が生まれ、信頼感が生まれ、尊敬の気持ちが生まれます。深い絆で結ばれた関係を作ることができるのです。それが「友好」ということです。自分の言いたいことも言わずに、表面的に仲良くしていることを「友好」とはいいません。「友好」とは、懸命に相互理解の努力をした後に生まれてくるもののなのです。

そして先人たちの3番目の教えは、「協力」関係を深めなさい、ということです。「協力」はウィン・ウィンの関係を作ります。経済面での「協力」は当然のことです。東アジアに平和で安定した国際環境がない、つまり日中がいがみ合い、今にも戦争になりそうな中で安心してビジネスをやっていただけますか？ この地域に平和で安定した国際環境を作り、経済発展ができる環境を作ることは日中の政治・外交の重大な任務です。そして、この地域に永続する平和と安定の仕組みを構築するのです。そのために相手が気に入らないからといって、口もきかず、付き合いもしないで済まされますか？ 対話をし、意思疎通を深め、協力関係を深めることは、外交において必要不可欠なことなのです。そして今やグローバル化の時代です。地球は1つであり、年々、小さ

く見えてきます。その地球のために世界の大国である日本と中国が協力しないという選択肢はあり得ますか？ 1972年の日中国交正常化の時代以上に、日中は協力関係を深める必要があるのです。

このように先人たちは、日中には、平和、友好、協力の関係以外に選択肢はなく、その道を歩みなさい、ということを我々に強く求めているのです。冒頭に触れましたように、だから日中平和友好条約を締結しました。日中両国は、そのような関係を作ることを条約という形で約束し合っているのです。

私も、日中関係のあるべき姿について日々考えてきました。結論はやはり先人たちと同じです。日中の間には平和、友好、協力の関係以外に選択肢はありません。中国にとっても同じです。現状を見れば、そのようなことは実現可能なのか、という見方もあります。確かに現状は実に厳しいものがあります。しかし将来のあるべき姿、向かうべき方向、守るべき理念を持つかどうかで、現実の諸問題に対処する姿勢も、気持ちも変わります。しかも、そういう方向性と信念を持って日中の間の現実の諸課題を考えますと、実は、実現可能な対応策が必ず見つかります。これは私の40年以上の外交官生活の結論です。問題は必ず解決できます。本格的に真剣な必死の外交をやるということです。これが今足りないと思っております。本日は、その機会ではありませんので、一々の説明は省きますが、あるべき世界を見据えて、日中の、今日の問題に対処する基本姿勢だけは、皆さんにも、是非、共有させていただきたいと思います。

日中の間は大変ですが、しかしながら我々が努力することによって、この関係は改善することができます。そして、それを支えてくれる若い世代の方々が確実に育ってきているのを私は日頃感じております。そういう人たちに希望を託し、我々も最後の最後までそういう人たちを支えながら、日本と中国がさらなる新しい時代の平和・友好・協力関係になるように努力しようではありませんか。

ご清聴ありがとうございました。

歴史大転換の時代と〈対話〉による 東アジアの平和構築の可能性

——現代史を振り返って

姜 尚 中

池田大作名誉会長がお亡くなりになったことに衷心より哀悼の意を表したいと思います。

この度のシンポジウムは、1974年12月5日、北京・第三〇五医院において行われた周恩来・池田大作両巨頭の「一期一会」の会見50周年記念に向けたイベントです。このシンポジウム開催を待たず、昨年11月15日、池田名誉会長は永眠されました。その悲報に触れ、一キリスト教徒として「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」（『コヘレトの言葉（伝道の書）』（第3章－1）という思いを新たにせざるをえません。

周恩来総理との会見における池田名誉会長の提言の記念碑的な意義やその歴史的な役割については既に西園寺一晃氏が明らかにしている通りです（西園寺一晃『周恩来と池田大作の一期一会』潮出版社、2020年）。

その時から半世紀、世界は、東アジアは大きく変わり、世界の此処かしこで分断と対立が絶えず、憎しみと報復の連鎖が広がろうとしています。しかもウクライナで、パレスチナで、今も殺戮と虐殺が続き、さらに日中間にもささくれ立った国民感情が広がり、〈対話〉による日中間の相互理解と友好、共存の熱い信義は、地政学的な戦略思考の冷めたりアリズムへと様変わりしつつあります。

それでは、こうした日中関係やそれを取り巻く東アジアや世界の平和は益々、風前の灯火となり、その後には「虐殺と戦争の世紀」が再びやって来るのでしょうか。人間とその歴史の愚昧さに多くの人々がベシズムに陥り、さらにシニシスト（冷笑主義者）になってしまうとしても不思議ではありません。

しかし、池田名誉会長がどこかでフランスの哲学者アランの言葉を引用しながら、悲観主義は気分の問題であり、楽観主義は意志の問題であると述べていますが、まさしくその通りです。

現実主義（リアリズム）に徹すれば、悲観的にならざるを得ませんし、最悪の事態だけを想定した地政学的な戦略に基づく予測は、往々にして「自己成就的な予言」になってしまいがちです。例えば、米国のCSIS（戦略国際問題研究所）が発表した、台湾への中国の大規模な軍事侵攻

Kang Sang-jung（東京大学名誉教授）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の全体会1「対話による東アジアの平和構築」における基調講演に加筆修正を施したものである。

を想定したシミュレーションなどはその典型です。

確かに、平和を構築するためには「政策決定の合理性」が不可欠です。そのための土台となるのが、現実に対する透徹した認識です。その意味でリアリズムを、望ましいと考える価値や選好から自由（「価値からの自由」）に「不都合な事実」にも目を向けるエートスを指すとするならば、それは特に熱狂と共感が燃えさかり、透徹した認識と理解が曇らされる時にこそ、重大な役割を果たすはずです。

ロシアのウクライナ侵攻を契機とするウクライナへの熱狂的な支援と共感の輪は瞬く間に「西側」諸国民の間に拡散し、ロシアのプーチン大統領がどんな思惑と狙いで、またどんな背景から侵攻という暴挙にいたったのか、それを理解することすら、敵を利する行為として指弾されたことは記憶に新しいはずです。

フランスの言い回しにあるように、「すべてを理解することは、すべてを赦すこと」ではありません。ロシア史におけるプーチン大統領の統治を理解し、それを歴史的な脈絡に位置づけ直すことは、ロシアのウクライナ侵攻を赦すことでは断じてありません。

この意味でリアリズムの乾いた知性は、熱狂的な信念や正邪の道義が燃えさかる時にこそ、その出番が必要とされているのです。

しかし、そのリアリズムはナチス時代の大量殺戮を赦してはならないという、倫理的な価値判断——敢えて言えば、理想主義の立場によって支えられていなければなりません。

こうして、平和構築には、池田名誉会長が指摘しているように「政策決定の合理性」の土台となる現実認識（リアリズム）と、価値判断の根拠となる「倫理的側面」（理想主義・アイディアリズム）が必要とされているのです。

池田名誉会長との対談で平和学研究所の泰斗、ヨハン・ガルトゥング氏が語った言葉を使えば、私たちはいま、「頭では現実主義者であり、心には理想主義の炎を燃やし続ける」必要があるのです。

それでは、この現実主義と理想主義の弁証法は、実際にどんな歴史をたどったのでしょうか。ここに歴史から学ぶという、周恩来総理と池田大作名誉会長に共通するメッセージがあると思います。

本日の私のスピーチは、以上のような視点から、過去の歴史を振り返り、「対話」による平和構築の可能性について論じてみたいと思います。

第一次世界大戦は問題を解決するどころか、戦後処理を通じて次の大戦を準備することとなったがゆえに、第一次世界大戦そして第二次世界大戦というネーミングが生まれたわけですが、20世紀の始まりは戦争でした。そして、同時に20世紀の初めには、アメリカのヘンリー・フォードがやった、ベルトコンベアで働く人が一日に5ドルの給与をもらい、フォード社の車を買えるアメリカニズムの時代でもありました。空前の豊かさと、そして大量殺戮の時代が始まったのです。大体20世紀の100年間で、戦争もしくはそれに関連した形で大量に人が亡くなりました。

アメリカのズビグネフ・ブレジンスキーによると、大体1億8000万人が、20世紀に戦争もしくはその関連死と言われています。

私には今もって解けない謎があります。それは、最も人類史の中で、人が無惨にも殺された時代が、人権と繁栄の時代だったということです。ヒューマンライツが定着したのは20世紀です。そして、テクノロジーも含めて、豊かさというものが世界に広がろうとしているのも20世紀です。その20世紀に、このような1億8000万の、日本の人口をはるかに超えるような人々が、無惨に殺され、死を余儀なくされた。この惨事について英国の高名な歴史家、エリック・ジョン・アーネスト・ホブズボームはそれをエクストリーム、「極端な時代」と言いました。明と暗があまりにもはっきりしすぎる時代です。では21世紀は、この明と暗がはっきりした時代が終わったのでしょうか。残念ながら、我々は、依然として20世紀を生きていると言っても言いすぎではないと思います。なぜそうなるのでしょうか。なぜ我々は新ミレニウムを祝福するときに、「20世紀よ、サラバ」と言えなかったのか。むしろ今、21世紀になり、もうかれこれ4分の1世紀を過ぎようとしているにもかかわらず、その歴史は終わっていません。

先ほど、宮本雄二先生の方から「歴史の教訓」ということを言われました。まさしくそうだと思います。ホブズボームは、冷戦崩壊以後の時代を「破局の時代」と呼んでいます。これは地球規模で地球の生態系が壊れ、資本主義の暴走というものが止まらない事態を指しています。さらに、人々がメディアやテクノロジーの空前の発達を通じて、政治的なものやパブリックなものへの関心を失っていく時代です。そして、ある一部の人たちだけによる、ある種の寡頭制支配が起きていくのではないかと。破局へと我々は向かっているのではないかとというようなことを、若干、悲観論ですが、そういう言葉を残しています。

それではどうしてそうなったのでしょうか。私はここで現代史の第一次世界大戦から今日に至るこの時期を大きく3つのフェーズに分けて考えるべきだと思っています。私たちが世界とか国際社会とかいうときに、必ずそれは一定の体制として成り立っています。国際関係論というレジームというものです。では第一次世界大戦。これが起きたときに、その後に何が起きたのでしょうか。これは言うまでもなくヴェルサイユ体制という一つのレジームが出来上がりました。この総力戦、これはおそらく国力の全てを通じて戦争を戦うわけですから、それまでのような正規戦と違って、正規の軍隊同士が戦うのではなくて、国民が丸ごと戦争にわし掴みのように動員された。こういうことが初めて起きたのです。1930年代の半ば、ドイツの参謀本部にいたエーリヒ・ルーデンドルフという人は、これを総力戦と呼びました。

考えてみますと、私たちが20世紀から、世界の秩序、世界の体制というものを考えるときに、それは全てが戦後の体制になっており、デモクラシーも戦後デモクラシーです。日本の場合でいうと、日清戦争以後の戦後デモクラシー、日露戦争以後の戦後デモクラシー、第一次世界大戦後の戦後デモクラシー。そして今、依然として続いている第二次世界大戦後の戦後デモクラシーとしてのいわゆる戦後体制です。第一次世界大戦から考えてきますと、私はこれを第一次戦後デモクラシーと第一次戦後体制と言いたい。第二次は言うまでもなく先の戦争です。では第三次は何

か。これは1991年ソビエトが崩壊したとき、本来であれば冷戦という戦争が終わったわけですから、この冷戦が終わった後に第三次のデモクラシーと第三次の戦後体制が作られるべきでした。しかし、これは作られませんでした。そこに、今我々が抱えている大きな問題があったということの後で、もっと具体的に話そうと思います。

第一次世界大戦は、日本では大正デモクラシーに繋がりました。この時は、日本は戦勝国でありました。そして中国の人にとっては最も屈辱的な「二十一か条の要求」を突きつけました。残念ながら、この第一次世界大戦後の日本のデモクラシーは、中途半端な形で終わりました。しかし、間違いなくこの第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制は敗戦国に対する懲罰的な体制であったと思います。それは必然的に、ドイツのいわばベンジというものを第二次世界大戦という形で、悪夢な形で導き出すことになったわけです。ちなみに、本日の基調講演者であられる、西園寺一晃先生の曾祖父にあたる、西園寺公望氏がこのときのヴェルサイユ体制の全権大使だったと思います。

このヴェルサイユ体制というものが一つのレジームでしたが、これは残念ながら短い20年くらいで終わってしまいました。イギリスの有名な歴史家エドワード・ハレット・カーは、これを『危機の二十年』で取り上げています。第一次世界大戦から第二次世界大戦の始まりの戦間期です。しかしこの戦間期には、残念ながら次の戦争に向かう体制がこのヴェルサイユ体制の中に、ビルトインされていたと言っても過言ではありません。

冷戦崩壊後、なぜ中東で最初の戦争が起きたのか。イラク戦争から、さらにはアフガン戦争そして今、中東であのような戦争が起きている。これは、私は第一次世界大戦まで遡らなければ分からないと思います。第一次世界大戦ではヴェルサイユ体制という戦後処理の体制が出来上がりましたが、その基本的な理念はアメリカのウィルソン主義でした。民族自決——1つの民族が1つの国家を、いわば自存自衛としてつくり出し、そして国民国家が集まって国際関係が成り立つ。こんな想定だったわけです。それと同時に当時のオスマン＝トルコ帝国、ハプスブルク帝国、ロマノフ帝国、そしてプロイセン・ドイツ第二帝政、こういう旧帝国が第一次世界大戦で事実上崩壊しました。

しかし、ロマノフ王朝はロシア革命によって違う形で延命することになりました。またプロイセン・ドイツ第二帝政はドイツ革命を経て、次のワイマール体制が出来上がりました。しかし、オスマン＝トルコ帝国とハプスブルク帝国は粉々に砕け散りました。国民国家に砕け散ったわけです。考えてみますと、この東ヨーロッパの中にあるウクライナの問題、さらには冷戦崩壊後のヨーロッパ内戦とっていいユーゴ内戦は、なぜ起きたのでしょうか。なぜサダム・フセイン氏は、それこそあのような無謀な侵攻をやったのでしょうか。そこに引かれていた人工的な国境線を考えると、帝国が崩壊した後の国民国家の国境線というものが、いかに人為的なものであるかということを我々に示しております。これはアフガニスタンもそうですし、そのように考えていくと、この第一次世界大戦の戦後処理は、帝国から主権国家への大きな転換点になりました。私はここに、今日のロシアとウクライナ、さらに今は一応収束し平和が回復しましたが、ユーゴスラビア

における内戦のいわば基本的な構図が出来上がっていたと思います。

私は現在のウクライナとロシアの戦争、言うまでもなくこれはプーチン氏の国際法上で見れば明らかに侵略行為です。しかし、その背景はもっと複雑であり、ユーゴ内戦と同じような事実上の内戦状態、そこからこのような紛争へと発展しているというふうに見た方が私は妥当性を持っていると思います。そう考えてきますと、この第一次世界大戦の戦後処理から作られたものは、依然としてこの20年以上経った21世紀においても、それが違う形で危機を作り出しているというふうに、我々は考えた方がいいのではないかと思います。そして、前述のようにE・H・カーは第一次と第二次の戦間期を「危機の20年」と呼びましたが、第二次世界大戦が1939年に始まりました。これは言うまでもなく、第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制の大きな問題点をつくり形で、そして皆さんも知っての通りこれは連合国対枢軸国とのある種の世界戦争としての第二次世界大戦になりました。

そして、この1930年代、大きな変化が起きました。経済学者のカール・ポランニーという人はこれを「大転換」(Great Transformation)と呼びました。グレート・トランスフォーメーションです。何が起きたか。アメリカのニューディール体制、ソビエト＝ロシアのスターリン型の社会主義そしてナチス・ドイツ／イタリア・ファシズム／日本の軍国主義。この3つのカテゴリーに括られるような、いわば世界経済の危機から3つの新たな体制が生まれたのです。これはそれぞれにイデオロギーは異なりながらも共通点がある。それは国家が中心になって社会を統制していくということ。アメリカ合衆国において初めて、自由主義的な資本主義ではなく、国家がいわば資本主義を統制するような、そのような変則的な体制がニューディール体制として出来上がりました。そして日本もあの戦争中、統制経済という言葉が至るところに現れてきたということは皆さんも知っての通りです。またスターリンの時代が言うまでもなく国家を中心とする計画経済でした。「社会から国家へ」これが合言葉でした。

どうでしょうか皆さん。今同じような現象が起きている。中国を封じ込めるためには、最先端の経済的なサプライチェーンから中国をいかに外すべきか。そのためには国家が一定限度の裁量権を持ち、場合によっては経済界に干渉し、そして国家主導で様々な経済的なある種の統制というものが進んでおります。

この30年代に起きたことが、実は後で述べるように今起きているわけです。その本質においては、私は独ソ戦がこの第二次世界大戦のメインだったと思います。D-day、ノルマンディー上陸作戦でアメリカが参戦し、第二次世界大戦が終わったかのように我々は教えられてきた。そうと思いますが、本質はドイツ対ソビエトの戦争でした。スターリングラードが陥落しなければ、おそらくナチス・ドイツはまだ生き延びていた可能性もあります。イギリスでも、チャーチルが出る前は、ナチス・ドイツに非常に寛容的でした。イギリスの中ではモズレーのように、ナチス・ドイツのシンパが相当おりました。そう考えていくと第二次世界大戦と言われていますが、本質はドイツ対ソビエトの戦争であり、そしてアジアにおいては日中戦争です。この2つの戦争が第二次世界大戦の東と西のメインだったと理解していいと思います。そして、その結果として出来

上がったのが第二次の戦後デモクラシーであり、第二次戦後体制でした。

これはどこから始まったか。ヤルタ体制でした。あのヤルタで始まった体制。これこそが第二次戦後体制を作り出しました。残念ながら中国は、このヤルタ会談の主要なアクターにはなれませんでした。イギリスとアメリカとソビエト。スターリンの主導のもとに、このヤルタ体制というのは出来上がったわけです。そして、その結果として今でも安保の5つの常任理事国、もちろん中国は、先ほど宮本先生がおっしゃったような形で復権し、そして常任安保理事国の貴重な椅子に座ることができるようになったわけですが、戦後体制はこのヤルタから始まりました。それは旧ソビエトが最大の人的な犠牲を払ったからです。当時のソビエトと言われている国、その死者の数と中国の死者の数は、おそらく全部合わせれば第二次世界大戦の死者数のかなりの部分を占めていると思います。ソビエト内部だけでもおそらく2000万人は下らないのではないのでしょうか。この第二次の戦後体制はそのような形で始まり、そして常任安保理事国が5つの国になりました。そしてその中で依然として現在もロシアは常任安保理事国として決定権を持っておりまし、中国、アメリカ、イギリス、そしてフランス、これは70年以上にわたって変わらない体制です。

この第二次の戦後体制の中で決定的に重要だったのは朝鮮戦争です。朝鮮戦争の犠牲者のカウントにはいろいろな仕方がありますが、例えばアメリカの有名な歴史家は、おそらく300万人近く亡くなったのではないかと推測しています。ベトナム戦争が大体360万、アメリカ兵が大体5万6000ぐらいでしょうか。この朝鮮戦争は、歴史家の和田春樹氏の言葉を使えば、「準国際戦争」でした。これを通じて冷戦はもう決定的になり、そしてアメリカの軍事予算は桁外れに大きくなったということは皆さんも知っての通りです。これは熱戦として展開されました。ヨーロッパは冷戦、コールドウォーでしたが、アジアは熱戦でした。そして今でもこれは朝鮮半島の分断として続いております。そしてもう一つ重要なことは、やがて中国は文化大革命の大混乱を迎え、その中で中国が払った犠牲というものはあまりにも大きかったということです。その混乱の中で、皆さんも知っての通り1974年、あのような形で周恩来総理と池田大作名誉会長との対話があったということ。そしてもう一つ重要なこと。これは戦後体制の中で、ナショナリズムというものが確実に色々な国々で台頭してきたということです。

1979年、私はアエロフロートを利用し、モスクワ経由で旧西ドイツに行きましたが、1979年に有名な本が出ています。それはナショナリズム研究の大家であったベネディクト・アンダーソンという人がナショナリズムについて書いた本です。その冒頭、彼は何を事例として出しているか。それは中国のベトナムへの侵攻でした。あの中越紛争。これは私のような世代にとってはショッキングでした。あのベトナム戦争を勝ち抜いたベトナムと、アジア解放、そしてアジア・アフリカ会議の主要なメンバーである中国。この2つの国が軍事的に衝突したという。これは社会主義のインターナショナリズムより、ナショナリズムというものが大きな力を持つようになったのだというふうに、アンダーソン氏は述べております。最後のこの冷戦崩壊後の今の我々の第三のフェーズ、ここにおいて大きなナショナリズムの台頭というものを我々は今経験しているわけ

です。

第一次大戦後、不完全ではあれ、ヴェルサイユ体制が出来上がりました。そして第二次世界大戦後はヤルタ体制が出来上がりました。ではどうして第三次の戦後体制が作られなかったのか。ベルリンの壁崩壊後、ヤルタからマルタへが合言葉になり、その時には間違いなくアメリカは旧ソビエト連邦が存続するというふうに考えていたと思います。マルタ島で、ブッシュ・シニアとゴルバチョフとが冷戦終結宣言をやった時点においては、明らかに NATO をどうするのか、ワルシャワ条約機構をどうするのかという話について様々な議論があったはずですが。皆さんも知っての通り、NATO は多国間の安全保障の体制です。それに立ち向かうワルシャワ条約機構。この2つの体制は冷戦の産物であり、1989年の時点において、一方のワルシャワ条約機構が突然なくなるというふうには、アメリカ合衆国は考えてなかったはずですが。しかし、1991年、皆さんも知っての通り旧ソビエトは崩壊しました。結果としてワルシャワ条約機構は瓦解しました。しかし、NATO はそのまま存続している。

考えてみますと、NATO はなぜ東に向けて拡大しなければならないのか。ソビエト連邦という国が崩壊し、それぞれの国に分かれていった中で、どうして NATO の東側への拡大ということがこの間進んできたのか。何度も申し上げますが、私自身はプーチン氏の特別軍事作戦という名のウクライナ侵攻には反対です。しかし、彼らが考えるレッドラインというものがあり、残念ながら大国の安全保障を考えるときには、どうしてもそれを考慮に入れなければ国際社会の安定というものは図り得ないということも、歴然とした事実です。その端的な表れはキューバ危機でした。もし、これは全く仮定の話として、中国なりロシアなり、メキシコとの軍事同盟関係を結び、そしてそこにミサイル基地を置いたとしたならば、アメリカ合衆国はどのような行動を取るでしょう。先制攻撃を加えるだろうと思います。

冷徹に見れば、中国とアメリカ合衆国とロシア、この3つの大陸国家だけが、国の独立と安全のトレードオフを免れる唯一の大国だと思います。日本や韓国のようなミドルパワー、西ヨーロッパのミドルパワーの国は、例えばイギリスであれ、フランスであれ、核を持っても NATO に入らなければ自らの安全を確保することはできないでしょう。したがって、そこでは何らかの形で国の独立の制約を受ける。その典型は日本でした。日米安保の下に、日本は対米従属と言われてようとも、その独立国家としての重要な部分を制約されても、アメリカにその安全保障を担ってもらおう。これが吉田茂以来の日本が選択した選択肢です。「日本よ、独立たれ」ということを言ったのが石原慎太郎でした。しかしそうでしょうか。日本は独立を犠牲にしてでも、平和を勝ち取りました。いや、平和を確保したわけです。韓国もまた然りです。その結果として、これだけの繁栄と平和を享受してきました。国際社会は依然として、大国の論理を完全に否定することはできません。なぜなら、ヤルタ以来この3つの常任安保理事国が中心になって国際秩序というものが出来上がっているからです。これを誰も否定することはできません。これを否定しようとするならば、ヤルタ体制に代わる新しいレジームを作らざるを得ない。これは戦争になるでしょう。しかし、依然として私たちの世界はそのような形で大国が戦争しない、そしてレッドライン

を超えないような形で国際社会が対立し合いながらも、そこに一定限度のバランス・オブ・パワーが確保され、そしてできる限りお互いが相互理解に達するような、そのような理念というものが生きていなければ、むき出しの形でパワーポリティクスが暴走すれば、今回のようなウクライナとロシアの事態が現れてくることは、火を見るより明かだと思います。

そういう点で日本は大国です。しかし中国やロシアやアメリカのような大国ではありません。ドイツも大国でしょう。しかし、この3つの大陸国家に比肩できるような大国ではありません。ましてや韓国や、あるいはそれ以外の国々は、何らかの形で独立と平和もしくは繁栄のトレードオフの上に自らの平和というものが確保される。

韓国の有名な映画に、17世紀の大国・清が李朝朝鮮に朝貢を強いるシーンがある。その時に李朝朝鮮内部で大論争がある。国が破滅してでもいいから、大国・清と交戦すべし。もう一方で、国が減びて人々が死んで、何の大義と名分があるのか。人々が生きていれば、必ずそこに再生の希望があると。こういうような大論争があるわけです。これは朝鮮半島のような、中国やロシアやアメリカから比べれば小国の悲哀と言ってもいいでしょう。しかしそこには賢明な選択があります。それは独立と平和はトレードオフ、しかし、平和と繁栄があれば、いつの日かインディペンデントな国になる可能性は残されている。私は単刀直入に言えば、ウクライナとロシアの戦争はもうとっくに終わっていたはずだと思います。トルコの介入によって、このウクライナとロシアとの停戦交渉が始まっておりました。これはウクライナにとっては屈辱的だったでしょう。しかし、これは過去の歴史的な経緯を考えると、ここで矛を収め、そして停戦を通じてロシアとの様々な領土問題を解決する手立てが私はあったと思います。皆さんもお分かりになる通り、朝鮮戦争が1950年6月25日に始まりました。その3年後、停戦協定が結ばれました。もし停戦にならなかったらどうなったのでしょうか。おそらく朝鮮半島はなかったと思うのです。それは当時マッカーサーや、あるいはトルーマン大統領ですらも一時期この朝鮮半島とロシアとの国境及び朝鮮半島と中国との国境に、核を落とすという計画を立てていたわけですから大惨事になったと思います。しかし残念ながら、停戦の機会はウクライナにはありませんでした。そして今、この戦争はどこに向かっていくか分からない状況に立っていることは皆さんも知っての通りです。本来であれば冷戦が終わった後に、新しい戦後レジームが作られていなければなりません。そして私は個人的にはNATOが解体されるべきだったと思います。ワルシャワ条約機構が解体されるならば、NATOもその歴史的な役割は終わった。そして、破綻したロシアを世界経済の中にいかにして組み込むか。なぜ第二次世界大戦後のヤルタ体制は存続してきたのでしょうか。それは一方においてアメリカ合衆国が敗戦国に対してマーシャルプランという形で様々な援助をしたことが大きかったはず。旧ソビエトは西側にとっては敵国だったかもしれません。しかし体制は崩壊しました。崩壊したならばマーシャルプランに対応できるような、いかにしてボロボロになったロシア経済を復活させ、世界経済の中に組み込んでいくのかというような、そのような新しい体制についての様々な協議や、やりとりがあったとすれば、今のような危機的状況は避けられたのではないかと。もちろんこれは、タラレバの話です。

ではどうしたらいいのか。私は最後に短い時間ですが、このダイアログの意義を踏まえて、私なりの話に代えさせていただきます。孫文は大アジア主義として講演でこんなことを言っている。アジアの文化は王道の文化である。西洋の文化は覇道の文化である。アジアの文化の王道は仁義道德である。仁義道德は恫喝や武器によってではなくて、合理的な正義の感化を通じて人々に影響を与える。仁義道德、これを孫文はアジアに求めました。果たして今孫文が生きているとして、今の中国をどう評価するか私には分かりません。しかし間違いなく本来、今後も中国は、やはり今のウクライナとロシアの戦争に対して第三者的な和解と介入を惜しまない態度を取るべきであり、またさらには中東の紛争に関しても紛争解決の立場でいかにしてアメリカやロシアがやれないことをやるのかということが非常に重要な役割だと思うのです。そして同時にこの孫文が言いたい仁義道德とは、これは周恩来総理と池田大作名誉会長との間にあったダイアログを通じ、感化を通じて相手の国を変えていく。異質な価値や異質な文明であっても共存できる道を探るということを示していると思います。

ハンチントンの『文明の衝突』に私は反対でした。なぜ文明は衝突しなければいけないのか。彼は先験的に文明の違いの中で儒教的な中国やイスラームと西洋的な価値との衝突ということを特に力説しております。果たしてそうでしょうか。文明の違いは必ず文明論的に衝突へと向かうのでしょうか。池田先生ならばきっと文明間の対話と言ったはずです。文明の違いは必ずしも衝突するわけではありません。デモクラシー対専制主義、自由対独裁。このような二分法的な対立を通じて、違う体制や違う文化や違う社会を否定する。このような方向に向かうならば、どのような問題が起きるかということは、もう皆さんはあのイラク戦争を見れば分かります。イラク戦争では民間人だけで20万は死んだと思います。同時に2500万近くの人口のイラクで20万死んだということは、日本に直せばその6倍ですから120万が死んだということになります。無辜の民です。イスラーム原理主義対アメリカのデモクラシー。こんな単純な二分法によって世界を裁くということを、我々は決して許してはならない。やはり我々は異なった体制、異なった文明であっても、お互いに対話を通じて最悪の事態を避けていかなければならないということです。そのことを私は、この1974年の両巨人の対話から学びました。したがって、私はかつて2000年代の初頭に中国が中心になった朝鮮半島の非核化を巡る六カ国協議に賛成でした。この六カ国協議という多国間の協議を通じて、もし朝鮮半島が完全に非核化されるならば、この六カ国協議は将来、東アジアの多国間における安全保障のための取り決めに発展しなければいけない。私の言葉で言うと「東アジア共同の家」。これはイーストエシアン・コモンハウス。もしこういうものが東アジアで出来上がるなら、そこにはアメリカも入り、ロシアも入り、中国が中心になり、また日本も入り、南北朝鮮が入り、場合によってはモンゴルも含めて東アジアの中にそのような多国間における平和のダイアログの機構が出来上がるならば、ASEANと連携していけば、真の意味での東アジアにそのような平和の枠組みが出来上がるのではないかというふうに考えました。

おそらくこれは、痴人の夢としてリアリストからは退けられると思います。この厳しい国際政治の現実の中で、私のこのような考えは単なる虚妄に過ぎないかもしれません。しかし今、我々

は第三次世界大戦のとば口にいるのかもしれない。分かりません。トランプ大統領というこの不確実性の一番高い私は間違いなく孫文氏が今生きていれば、トランプ主義を指してこう言うと思います。功利強権。ただただ利を採すために、強権、強い力つまり恫喝とアメリカファーストのそのようなディール。これを通じて世界にアメリカ中心の価値というもののや利害を押し付けるような形になってくれば、私は世界がかなり混乱していくのではないかと思います。日中の間に、また中韓との間に、日韓との間にも様々な問題があります。しかし大切なことは、アメリカ合衆国との二国間のディールだけに傾けば、中国も含めて様々なデメリットがあまりにも大きいということです。したがって、アジア諸国は横の連携を深めていかなければなりません。そういう意味においても、私はこの対話の重要性ということが、ただ単なるお題目としてあるのではなくて非常に差し迫った重要な提言であり、また理念であり、今こそそれが必要な局面に我々が達しているのだということを、皆さんに申し上げて非常に雑駁な話ですが、私の話に代えさせていただきます。

どうもご清聴ありがとうございました。

『周池会談』への偲び

韓 東 育

本日は、宮本雄二大使、そして姜尚中先生のお二方からお話を伺い、大変感動いたしました。なぜなら、お二人のご講演はきわめて温かく、歴史に「温度」を与えながら語ってくださったからです。同時に、理性的かつ歴史的な視点から東アジアを論じてくださり、学者の姜尚中先生にはもちろんのこと、外交官の方もここまで深く東アジアの将来を考えておられることに、大きな学びを得ました。心より感謝申し上げます。

私は幾つかの部分に分けて話したいと思っています。

第一に、周恩来中華人民共和国初代国務院総理と、創価大学の創立者であり創価学会名誉会長である池田大作先生との会見について振り返ります。2024年は、この会見からちょうど50周年にあたります。その意義を写真なども交えながら偲びつつ、いくつかの問題提起を行い、皆さまと共に考えたいと思います。

■ 周恩来総理と池田大作先生との会見

ここからは中国語で話しますが、スライドは日本語でご用意しています。

鈴木将史創価大学学長からも言及がありましたとおり、昨年11月15日、池田先生がご逝去され、一周忌を迎えました。池田先生のご体調については以前から心配しておりました。中国でもこの会談50周年にあたり、研究機関による特別研究が行われており、大変意義深い動きだと感じています。

ここに池田先生に寄せられた言葉を紹介します。フィリピン・リサール協会の元会長口ヘリオ・キアンバオ氏は次のように語っています。

「世界平和、人類の融和、国際化、環境保護主義など、池田博士の提言は、世界中の何百万もの人々に大きな影響を与えてきました。また、世界のリーダーとして、愛や希望、正義などの価値を広めてられました。その人生は多くの人々の生命と心にいつまでも残り続けることでしょう。」

また、公明党代表（当時）の山口那津男氏も次のように述べています。

Han Dongyu（東北師範大学元副学長）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の全体会1「対話による東アジアの平和構築」における基調講演に加筆修正を施したものである。

「今年（2023年）は、日中友好条約締結45周年の節目の年です。今回は、訪中直前に日中首脳会談が行われ、公明党創立者である池田大作先生の逝去が重なる中での訪中となりました。お会いした方々から池田先生への深い哀悼の意が示され、池田大作先生が築かれた日中友好の『金の橋』の重みを改めて実感しました。池田先生は1968年9月、日中国交正常化を提言され、72年の国交正常化の道を開きました。74年12月には当時の周恩来総理と会見。この時の両氏の思いが結実したのが日中平和条約です。」

山口氏の言葉の通り、1974年12月、池田先生は周恩来総理と会見しました。多くの著名な指導者たちが池田先生を追悼されていること自体、この会談が歴史的な転換点であったことを物語っています。

これが当時の写真です。周恩来総理は当時、重い病を抱えており、外国からの賓客と会うことはほとんどしていませんでした。しかし、池田先生の訪中に際しては、特別に会見が許されました。当初は「5分だけ」と言われていたものが、結果として30分間の会談となったと伝えられています。周総理は、学生時代の日本留学を懐かしみ、「日本を離れたのは桜が満開の季節でした」と語りました。これに対し池田先生は、「ぜひ桜の季節に、もう一度日本へお越しください」と応じられました。しかし周総理は、自身の病状を悟っていたのか、「それは難しいでしょう」と答えたといえます。それほど重い病状だったのです。

■ 日中国交正常化と民間外交の歴史的意義

池田先生は新中国から6名の国費留学生を創価大学に招きました。後の程永華元駐日大使も、そのうちの1人です。池田先生は、周恩来総理、またその留学生たちのために桜の木を植えることを提案され、「周桜」と名付けました。のちに周恩来夫人の鄧穎超さんが日本を訪れ、池田先生は「周桜」と別に、「周恩来桜」「鄧穎超桜」を植樹され、合わせて「周夫婦桜」と名付けられました。今年4月、私が創価大学を訪れた際も、この桜を拝見いたしました。非常に美しく、深い意義を感じました。

池田先生は、周総理との会談や留学生との交流、「周桜」の植樹に至るまで、陰で多くの努力を積み重ねてこられました。戦争によって多くの人々が命を落とし、恨みを抱くことは自然のことです。それでもなお、日本と中国の間に「友好は必要なのか」という問いに、池田先生は明確に「必要である」と示されました。

数千年に及ぶ交流の歴史の中で、中日両国間には戦争で一時期に不幸な歴史がありました。冷戦下の国際情勢の中で、日本はアメリカの動向を見極めてから中国との関係を考えるのが一般的でした。その中で先見性をもって行動したのが池田先生でした。

中日関係は日米関係にも影響を及ぼします。もしアメリカ大統領の訪中がなければ、中日関係改善は、さらに遅れていたかもしれません。池田先生が東京で日中国交正常化提言を発表されましたが、当時としてはきわめて明快かつ大胆な行動でした。

池田先生は中国訪問の際、至るところに防空壕があることに気づき、「ソ連の核攻撃に備える

ため」と説明を受けました。帰国後、池田先生はソ連を訪問し、クレムリンでコスイギン首相と会見します。そこで、「中国を攻撃するつもりはありますか」と単刀直入に問いかけたところ、コスイギン首相は「そのつもりはない。中国にそう伝えてほしい」と答えました。池田先生はこれを「朗報」と受け止め、同年12月には再び中国を訪れ、その内容を周総理に伝えました。このように、池田先生は水面下においても不斷の努力を重ね、中日国交正常化に大きく貢献されたのです。

周恩来総理から鄧小平氏、胡錦濤氏、そして習近平主席に至るまで、公明党との関係は継続してきました。公明党は当時、野党でありながら重要な役割を果たしたと、日本側からも評価されています。また中国、共産党政権も公明党を高く評価しています。習主席と山口公明党元代表との会見も、これまで複数回行われています。程永華元駐日大使も、公明党との長年の友好を象徴する人物の一人です。

中日関係が厳しさを増した際には、「公明党がパイプの役割を果たした」と中国の元留学生たちもよく語ります。政党間関係が良好に保たれてきたことは、きわめて重要な意味をもっています。

■ 池田大作先生の功績

続いて、池田先生の多岐にわたる功績について触れたいと思います。最終的には池田先生の「哲学」に行き着くものだと考えています。宗教は、池田先生が物事を考える際の一つの枠組みでした。宗教的着眼点は、きわめて大事です。池田先生は21世紀を迎える以前から、東アジアで大きな変化が起こる可能性を予見していました。東アジアに新たな軸が生まれるかどうかは、予見力と備え次第であると考えていたのです。

池田先生は、アーノルド・トインビー博士と『21世紀への展望』について語り合い、ヘンリー・キッシンジャー氏とも対談を行いました。これらの著作は中国語にも翻訳されています。池田先生の発言は仏教的なイメージが強いと思われるがちですが、実際には非常に幅広い哲学思想を示しています。著書『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』からは、宇宙観に基づく壮大な思想が伝わってきます。

宇宙飛行士が宇宙から地球を眺めたとき、国境は見えません。国境とは、人間が引いた線に過ぎず、宇宙から見れば、私たちは地球共同体の一員である——池田先生はキッシンジャー氏との対話の中で、このように語っています。

また対談集『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』には、大乘仏教の重要な思想も説かれています。大乘仏教には「衆生済度」という理念があります。さらに、池田先生は、哲学と科学技術の関係についても指摘されています。科学技術を過度に信奉すると、死という概念を忘れがちになります。科学技術の先に死が存在しない、すなわち欲望が無限につながっていく、無限連鎖が生まれる危険性があると指摘されたのです。

池田先生は、科学技術の限界を認識し、そして人文的視点を非常に重視されました。私は、

この点こそが非常に重要であると考えています。

さらに、トインビー博士との対話の中で、次のようなやりとりがありました。

「もし生まれ変われるならば、どこの国に生まれたいですか」

博士は笑いながら「紀元1世紀、仏教が伝来したばかりの新疆に生まれたい」と答えています。西暦4～5世紀、クチャという地に、鳩摩羅什という人物がおり、300以上の仏典を翻訳しました。維摩経、法華経、阿弥陀経、般若心経などがそれにあたります。この点から見ても、博士が仏教の発祥地に深い関心を抱いていたことがうかがえます。

池田先生の哲学は、宇宙の大生命観にも根ざしています。そのスケールは非常に大きく、私たちのような普通の人間には容易に理解しがたい部分もあるかもしれません。

また池田先生は、善悪を単純に断じるのではなく、人間の本性は自然に近いものであると説いています。この姿勢は、荀子や孟子の思想にも通じます。このように池田哲学には、一本の太い芯が通っています。

仏教の概念に「月印万川（がっちんまんせん）」という言葉があります。英訳は難しいかもしれませんが（“The Moon’s Reflection in Ten Thousand Rivers”）、月があり、世界中の川がそれを映し出す——これは池田哲学を象徴する概念だと言えるでしょう。

現在、世界各国には池田先生の思想を研究し、実践する研究機関や教育機関が数多く存在します。これは私が昨年撮影した写真です。

■ 中国における池田思想研究と教育交流

次に、第二に重要な点を皆さまと共有したいと思います。

私の母校である東北師範大学は、2000年3月10日、池田先生に名誉博士号を授与しました。「名誉博士号」は極めて高い栄誉であり、国内でも唯一の授与例でした。当時、史寧中学長らが式典に参加し、私は自ら記事にまとめ、新聞にも掲載されました。スライドに示したのは、聖教新聞の報道です。創価大学の先生方や学生の皆さんからも多くの資料が寄せられ、現在も大切に保管しています。

私は帰国後、東北師範大学において池田思想を広めるための活動に取り組みました。創価大学の高橋強教授と相談し、大学内に新たな哲学研究所を設立しました。宗教よりも、哲学の方が理解されやすいと考えた結果、池田哲学研究所を設立したのです。これは研究所設立当時の写真です。

2020年のコロナ禍には、「平和と文明：池田大作の哲学精神と東アジア思想文化国際シンポジウム」をオンラインで開催し、周総理と池田先生の会談が中日交流に与えた影響を改めて確認しました。

■ 政府間との協力関係

このようにして交流は深まりました。スライド写真は公明党の議員秘書・中条氏で、創価学会と中国の間を橋渡しし、木の橋を鉄の橋へ、そして金の橋へと発展させた重要な人物です。

日本政府も ODA や留学生支援を含め、多方面で協力してくださいました。人文的な交流もあります。その中で最大の成果が、中国から日本に留学に行く人たちのための「予備学校」の設立です。これは文部科学省と中国教育部が、海外で合意し、実現した取り組みでした。設立から45年間で4,000人以上の中国人留学生が日本の主要大学へ進学しています。これは特筆すべき成果です。中国の発展の速度が加速する中、留学先としては、3分の1は日本を選ぶ状況でした。私自身もこの予備学校に関わる業務に携わっていました。この場をお借りして、日本の先生方、文部科学省、各大学と研究施設および長年にわたり中国人留学生を支えてくださった日本の市民の皆様に、改めて感謝申し上げます。

こちらの写真は、山口那津男氏が本学を訪問された際のものです。予備学校40周年の記念行事の折で、秋野公造議員をはじめ、多くの方々が来訪されました。山口氏は、ご自身のお父様についての本を手にも、私と記念写真を撮ってくださいました。私は一教員に過ぎませんので、学長が少し不満そうでしたが（笑）、大変光栄でした。

さらに日本の文部科学副大臣であった浮島智子氏、多くの議員、中国外交部関係者、そして程永華ご夫妻も参加され、まさに壮観な場となりました。日本の与党代表が来校されたという点で、これは空前とも言える出来事でした。

この写真は、2023年12月のもので、私が山口代表に、周恩来総理と池田先生の会談から現在に至る流れについてお話しした際の一枚です。

ここで「中日友好の金の橋」に話を戻しましょう。周恩来総理は「井戸の水を飲むときは、井戸を掘った人を忘れるな」と語り、池田先生の貢献を忘れないと述べました。中国は、この恩に報いたいというお話でありました。現在では、なかなかこうした言葉を耳にする機会は少なくなったかもしれません。

では、池田大作先生は一体何を伝えたかったのでしょうか。

私は歴史と哲学を学んできました。中国は「宗教がない国」と言われることがありますが、宗教とは本来、死あるいは永遠の世界を説明するものではないかと考えています。哲学もまた、生と死、現在と未来について深く思索する学問です。

人は誰しも、生と死の問題を抱えています。生とは何か、死とは何か——これは個人の時間軸の中で避けられない課題です。池田先生も必ずこの問題に向き合っていたはずで

■ 生死をめぐる生命観

中国では宗教を迷信と見なしがちで、神や幽霊の話に矮小化されます。しかし、近代物理学の研究は、東洋の神秘思想に近い結論を示す部分もあります。私は『近代物理学と東方神秘主義』という本を読んだことがあります。現代物理学の結論は、中国を含む東洋の神秘主義と深く関係していると感じました。例えば、量子レベルの粒子の存在、死後も別の尺度で存在し続ける可能性など、いまだ完全に解明されていない現象は多くあります。これらが今後少しずつ科学とい

う力で実証されていくことができるのかどうかです。

ダークマター、暗黒物質などを含め、宇宙には未解明のものが数多く残されています。死とは何か——古代の思想家である莊子などは死を恐怖としては捉えていません。私たちは死を経験していないため分かりませんが、実際には穏やかなものかもしれません。そのうえで、「では今をどう生きるのか」という問題が浮かび上がります。これは生命を重んじているということであり、人類は一人一人であると同時に、集団としての生命体でもあります。国家もまた一つの生命体であり、生存か滅亡かという問題に直面します。先ほどの宮本雄二元大使、姜尚中東京大学名誉教授の講演にも同様の指摘がありました。

私たちは未来を予測することはできません。第二次世界大戦後、世界は真に平和的な新秩序を築くことができず、今もなお存亡の瀬戸際に立たされています。科学技術が蓄積されるほど、空間の世界、つまり人類社会を消滅させるリスクも高まります。池田先生は『21世紀への展望』やキッシンジャー氏との対話で、核兵器問題など人類の生存に関わる課題を語っています。

■「一（いち）」の哲学——分断を超える全体観

このように考えると、自然に第三の問題へと話が及びます。それは「一（いち）」という概念です。ここでいう「一」とは、統一の「一」であり、時間や空間を人為的に分断してきた現代社会に対し、宇宙本来の自然な姿に戻るための視座を示しています。これは単なる数字としての「一」ではなく、字義的な「無」でもありません。「全て」を意味するものです。さらに言えば、「無」とは「何もない」という否定ではなく、「無限」を内包する概念です。しかし、仮に私がこの「一」を研究対象として捉えようとした瞬間、「一」はすでに「全て」ではなくなります。なぜなら、「一」を把握しようとする思想主体としての「私」が、「一」の外に立ってしまうからです。その意味で、「一」とは、「思考」や「議論」を超えた存在であり、「有」（有限）を超越する「無限」「全体」そのものと言えるでしょう。

莊子はこれを、「道通為一」と語る一方で、「大道不称」、すなわち「大道は名づけ得ない」と強調しました。慧能のいう「不立文字」も、同様の精神に基づくものだと思います。中国思想においては、「禪の祖型は莊子である」との言い方（范文蘭）があるように、莊禪思想と深く通じる天台宗と日蓮宗の系譜に立つ池田先生の心には、「大乘仏教」「大我」「宇宙大生命」といった、「一」の哲学が息づいていたのではないのでしょうか。こうした信仰を理解することで、池田先生の「知行観」の本質も、より明確に見えてきます。具体的に言えば、池田先生はなぜ周恩来総理、トインビー博士、キッシンジャー氏らと会い、深い合意に至ることができたのか。なぜ、そのような世界的な人物との対話を求めたのか。その理由もここにあるのだと思います。

中国、日本、朝鮮半島、ベトナムは文化的に同じ源を持ちます。池田先生は、国家という枠を超え、東アジア全体を一つの歴史的、文明的単位として捉え、その大きな地域観から未来を捉えていたのではないのでしょうか。

また、マルクスについても誤解が多いのですが、本来彼は社会学者であり、彼の考える社会主義は必ずしも国家主義ではありません。中国古代の「大同」の思想にも通ずるところがあります。

トインビー博士は対談の中で、文明には国家の枠を超えた260の文明単位が存在すると述べています。池田先生は、この壮大な文明観の中に交流を見出し、米中関係についても過去の道を繰り返してはならないと語っています。こうした広い視野と知恵、国際観がある人物であったからこそ、池田先生もまた同じ地平に立つ人々との対話を求められたのだと思います。

池田先生は東アジアの人間であり、日本人でもありましたが、その学識と思想はその枠をはるかに超え、東洋と西洋のさまざまなテーマにわたり、使命をもって語り続けてこられたのだと思います。西側の思想家、哲学者、歴史家とも対話を重ね、最終的には共通の基盤を見い出してきました。池田先生は、対立ではなく、包摂と統合という対談者のすべてを包み込むような存在だったと思います。その根底には、やはり仏法が精神があったのではないかと感じています。

■ 国際秩序の揺らぎと現代世界

続いて第四の問題としてお伝えしたいのは、先ほど姜先生がお話された内容とも深く関わりますが、私なりの整理として、国際関係には基本的に二つの体制があるということです。ひとつは国際法を基礎とするウェストファリア体制です。これは「三十年戦争」の終結後に成立した体制であり、これが国際法の基礎となっています。もう一つは、第二次世界大戦後に形成された国際秩序です。ポツダム宣言、カイロ宣言、ヤルタ会議、さらにはサンフランシスコ講和条約も含まれます。ただし、ヤルタ会議およびサンフランシスコ講和条約は密約であり、中国は今日に至るまでこれらを正式には認めていません。

現在、この二つの国際関係の枠組みは、いずれも揺らぎ、再編を迫られています。では、そのような状況の中、私たちは何を考え、どのように行動すべきなのでしょう。姜先生がご指摘されたように、冷戦は形成され、やがて崩壊しました。冷戦体制は一定のバランスを保っていましたが、いつの間にかその均衡が崩れた結果、同盟国同士であっても、従来のような安定した関係を維持することが難しくなっていました。

かつての枢軸国であった日本とドイツでも例外ではありません。現在では両国とも軍事支出のGDP比が2%を超えています。かつてドイツの中央銀行総裁が日本を訪問したこともありましたが、これでいわばパンドラの箱が開き、出てはならないものがついに出てきてしまった状況とも言えます。戦後、国際環境は大きく変化し、かつての敵はもはや敵ではなく、かつての友が友でなくなる可能性すらあります。

今、その中心にいるのがアメリカです。アメリカこそが今日の国際秩序変動の主役と言えるでしょう。私たちは、この変化に適応していかなければなりません。「不合理だ」「正しくない」「カイロ宣言に戻るべきだ」「ヤルタ会議に戻るべきだ」と主張することは、残念ながら現実的ではありません。今、目の前にあるのが厳然たる「リアリティ」であり、「現実」なのです。

同時に、国際法をめぐる深刻な対立も生じています。中東問題、ウクライナ戦争をはじめ、多

くの事例がありますが、彼らはいったい何を考えているのでしょうか。ウェストファリア体制が今日、問題を抱えるようになったのでしょうか。すなわち、近代以来の国際法体制は、もはや「転覆」されようとしているのではないのでしょうか。「転覆」という言葉は否定的で悪い意味を含みますが、私自身は何よりも国際情勢の安定を強く願っています。

また、中国という国についても、誤解が少なくありません。「中国には独自の国際法がある」と言われることもあります。これは事実ではありません。毛沢東時代、私たちはよく東欧、朝鮮、ベトナムの映画などを見て、「大小の国家が全て平等である」という雰囲気の中で育ち、世界共通の国際法を真剣に遵守していたのです。しかし、あの時代に戻ってはなりません。当時の中国には欧米の意味での資本もありませんでした。今の中国経済の状況は皆さんご存じのとおりです。その意味で、中国に対する誤解は多いと言わざるを得ません。だからこそ、宮本先生や姜先生が中国に対して示しておられる深い理解と的確な評価は、非常に貴重なものだと感じています。お二人は表層ではなく、本質から理解しておられます。

私の表現が適切かどうか分かりませんが、「古い帝国」と「新しい帝国」とではやり方が異なります。私が危惧する新しい帝国とは、他者の資金を横取りしようとする存在です。私の理想は、公平な国際環境の中で平和共存を実現し、互いに奪い合わない世界を築くことです。姜先生も、目先の利益を超え、限りある対立から、無限の包摂的な状態を目指すべきだと述べられました。池田大作先生も、まさにそのような思想を持ち、今も私たちに大きな影響を与え続けています。偉大な人物であり、その考え方ゆえに、今もそばにいたような感覚さえ覚えます。

東洋、特に東アジアは連携すべきです。そうでなければ、欧州がたどった歴史の轍を踏むことになりかねません。欧州は中国に対抗しようとしているのでしょうか。そうではありません。あるいは何とかバランスを取ろうとしているのかもしれませんが、重要なのは生存です。中国が日本や韓国をどう見るか、日本や韓国が中国をどう見るかという点について、絶対にほっておくまま相手を「自由落下」させるわけにはいかないのです。お互いには、単純な地政学的存在ではなく、引越しのできない永遠の隣人でもあり、何千年にわたる倫理関係を共有しているからです。

もともと、「一帯一路」の東の行き先は、韓国と日本でしたが、アメリカ主導の TPP によってその流れは阻まれ、方向転向を余儀なくされました。一方、日本のインフラは、更新の時期を迎えつつあり、そのためには資金と生産能力が必要です。私たちは近隣国であり、中国の近代化 40 年の歩みの中で、日本から多くの支援をいただきました。その事実を中国の人々は理解しています。

別の見方として、「日本は旧中国を嫌い、認めない。しかし、新中国には期待を寄せている」という認識もあります。中国の人々は、戦争期の日本を憎んでいるかもしれませんが、戦後の新しい日本については十分に理解していないという現実もあります。人と人との交流の中で、このような誤解はどうしても生じます。宮本元大使が午前中に指摘されたように、過去の中日戦争は、歴史上初めて中日の人々が直接ぶつかり合った出来事でした。

留学生の存在も重要です。中国に来た日本人留学生は日本の経験を伝え、中国に行った日本人

留学生もまた中国の実情を伝えています。しかし今、私たちの間には距離が生じています。交流の不足が、その一因かもしれません。こうした状況を前に、私は悲観的な側面も感じています。東アジアは指導者主導の地域です。指導者同士の関係が悪化すれば、国家間の関係も悪化します。だからこそ、一刻も早く指導者・政治家の覚醒を促したいと願っています。現在、中国の人々は日本の政局に非常に注目しています。岸田前首相が「日中同盟」と言い間違えたことがありましたが、もしかするとそれは単なる言い間違いではなかったのかもしれません（笑）。

最後に、主催者の皆さまに改めて感謝申し上げます。本日のお二人の基調講演から、多くの示唆と感銘を受けました。ぜひ将来、お二人を中国にお招きし、中国の人々と直接交流していただきたいと思います。そして、今後の中日関係の発展、さらには未来の東アジア共同体の繁栄を心より期待しております。

ご清聴、誠にありがとうございました。

周恩来・池田大作会見の今日的意義——池田大作の価値人生

賈 蕙 萱

私の本日のテーマは、「池田大作先生はいかに人生最大の価値を創造したのか」であります。こちらは、周恩来総理と池田大作先生が一期一会の会見を行われた際の写真です。右側の写真は、北京大学の季羨林副学長との対談集です。こちらは池田大作先生とお会いした際の私の写真です。また、池田先生が私どもの研究を励ますために書いてくださった漢詩もご紹介します。

尊敬する皆様方、研究者の皆様、ご在席の皆様、こんにちは。皆様ご存知の通り、周恩来総理と池田大作先生は1974年12月5日に一期一会の会見を行われました。

そして、その会見は私たちに多くの励ましを与え、研究すべき内容に満ちています。

私が非常に喜ばしく思うのは、すでにあの世において、お二方が再びお目にかかっているだろうということです。そして、再び交流できることを、お二方とも非常に嬉しく思っているんじゃないでしょうか。さらに、平和と発展のために、交流を一層深めてほしいという励ましを、私たちに贈っておられるに違いありません。

今回のシンポジウムのテーマは、まさに時宜を得たものであります。世界的な規模で、「平和と発展」について、人類は真剣に考えなければなりません。現在、世界各地で戦争、対立、紛争、暴力といった不協和音の要素が複雑に絡み合い、極めて危険な状況を招いております。そのような意味において、昨日は多くの卓越した学者の皆様が素晴らしい発表をされ、私自身もそこから多くの学びを得ることができました。今回、私もまた別の角度から「平和と発展」についての考えを提起するとともに、昨年11月15日にご逝去された池田大作先生を偲びたいと思います。池田先生は傑出した平和主義者であり、さまざまな分野において、人類社会の平和と発展のために多大な尽力をされました。

中国には「蓋棺論定」という言葉があります。これは、人が亡くなった後に、その人に対する

Jia Huixuan（北京大学国際関係学院教授）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の全体会2「周恩来・池田大作会見の今日的意義」における基調講演に加筆修正を施したものである。

最終的な評価を下すことができるという意味です。流星のごとき名士である池田大作先生について、短い時間の中で論じることは非常に困難ではありますが、同時に極めて意義が深いことでもあります。ご逝去された後もなお、多くの方々から慕われ続けている池田先生が、いかにして人生最大の価値を創造されたのかについての資料は、決して多いとは言えません。しかしながら、その業績は非常に多大なものであり、研究すべき価値があると考えています。こちらの写真は、池田先生ご本人のお姿です。こちらは、1968年に中日国交正常化提言をされた際の情景であります。

まず池田先生は「初心を忘れずに貫いてこられた」という点が挙げられます。「初心を忘れない」とは創価学会の究極の目標を忘れないということを指しています。すなわち、人生で最大の価値を創造し、社会に最大の幸福をもたらすことです。池田先生が実現できたのには様々な要素がありますが、最も重要なのは、池田先生が「人間革命」という非常に優れた理論を深く理解されていたからであります。皆さまもご存知のように、「人間革命」という言葉は、東京大学の南原繁総長によって提唱されたものです。南原繁総長は、「人間革命とは、人生観を確立することを目的とし、それを実現しようと努力することである。人間革命は、目先の現世のみを目標とするのではなく、永遠の生命観に目を向け、確固として揺るぎない生命観を確立することである」と述べています。

池田先生の恩師であり、創価学会第二代会長であった戸田城聖先生は、この南原総長の考え方が、創価学会の発展目標と合致していると考え、「人間革命」という理念を受け入れ、実践へと移しました。池田先生は恩師の思想を深く尊敬し、1960年に第三代会長に就任して以来、「師弟不二」の精神を貫き、「人間革命」を創価学会の指針として掲げ、学会全体において広く提唱し、実践してきました。

池田先生はしばしば、「自分が変わらなければ他人を変えることはできない」と述べられました。池田先生は自身の修練、変革から始めると同時に、創価学会の会員に対しても「人間革命」の理論で自身を変革するよう導いてこられました。そして、自身の歩みと会員を指導しながら進めてきた変革の過程をありのままに記録し続けました。それが小説『人間革命』全12巻及び『新・人間革命』全30巻、合計43冊にも及ぶ壮大な作品です。これが池田先生の代表作となっています。多忙を極める池田先生が、自らの思想や行動、その過程を粘り強く書き続けると同時に、講演集、詩集、写真集など、他の著作も数多く執筆し、百点以上に及びます。その並々ならぬ努力と苦闘は想像に難くなく、常人には到底成し得ないものです。すべては、人生の最大価値を創造するために、昼夜を分かたず続けられた営みでした。

こちらは、恩師である戸田先生と池田先生の写真です。次に、「仏法の導きと恩師の教え」に

についてお話しします。創価学会は日蓮仏法を信奉しています。日蓮大聖人は日本の仏教、日蓮宗の開祖であり、この仏法は、積極的に社会に関わる生き方を重視しています。現世に生きる人々が直面する問題を解決することを目的としており、世間の苦しみに目を向けず、深山幽谷にこもって修行するような消極的な仏法とは一線を画しています。日蓮仏法は、自身と他者の幸福が密接に結びついていると捉え、他者や社会の幸福のために努力することが人生の真の意味を持つと教えています。また、その教義は、すべての人が無限の可能性を備えており、人生の様々な苦難を乗り越え、価値ある人生を生きることができると説いています。そして、社会、さらには人類全体の幸福のために尽くすことができると示しています。

日蓮大聖人は『妙法蓮華経』（法華経）を尊重されました。法華経は仏典の王と称され、民衆を目覚めさせ、現世において行動を促す教典であり、すべての諸仏は法華経から生まれたとされています。そのため、創価学会の会員は、その題目である「南無妙法蓮華経」を唱えます。「南無」とは帰依することを意味し、「妙法」とは深遠かつ精妙な仏を意味します。すなわち、「南無妙法蓮華経」とは、「深遠にして精妙なる法華経に帰依する」という意味です。また会員は、『法華経』の核心部分である「方便品」「寿量品」も読誦しています。池田先生は、『法華経』について深い研究と理解を有し、人々が貧富の差にかかわらず全て成仏することができること、全ての衆生には仏性があり、その仏性はあらゆる生命に存在していることを説いてこられました。こうした教えは、人々に将来への希望と努力の方向性を明確に示し、自信を深める力を持っています。池田先生の指導に多くの人々が共鳴し、その流れの中で、創価学会は着実に発展し、拡大してきました。

「規則がなければ秩序は成り立たない」と言われるように、創価学会には独自の会憲、学会の憲法があります。学会は組織運営をより充実させるため、2017年11月18日に新しい会憲を制定しました。新会憲においては、学会の発展の方向性がより明確に示され、創価学会三代会長の功績が正式に位置づけられています。特に池田先生が仏法史上、類い稀な指導者として高く評価され、師弟不二の精神で世界に広宣流布した偉業が強調されています。

ここで、新会憲に記された池田先生に関する部分を皆さんと共有したいと思います。

「池田大作先生は、戸田先生の不二の弟子として、広宣流布の指揮をとることを宣言され、怒濤の前進を開始された。（中略）牧口先生と戸田先生の御構想をすべて実現されて、大聖人の仏法の理念を基調とした平和・文化・教育の運動を多角的かつ広汎に展開し、社会のあらゆる分野に一大潮流を起こしました」。

「会長就任直後から、全世界を駆け巡り、妙法の種を蒔き、人材を育てられて、世界広宣流布の礎を築かれ、1975年1月26日には、世界各国・地域の団体からなる創価学会の国際的機構として創価学会インターナショナル（SGI）を設立された。それとともに、世界においても仏法の理念を基調として、識者との対談、大学での講演、平和提言などにより、人類普遍のヒューマニ

ズムの哲学を探求され、平和のための善の連帯を築かれた」。

現在、創価学会は世界の五大陸に及ぶ 192 の国と地域に広がり、会員数は 300 万人に達しています。池田先生は世界の有識者との対話を重ね、世界各地の大学、研究機関で 32 回にわたり演説を行い、1983 年からは毎年、平和提言を発表されるなど、人類共通の人道主義哲学を探求し、平和を目標とする行動の連帯を築いてこられました。この写真は池田先生が創価学会インターナショナルを創設された際の写真であります。

新会憲では、また、『三代会長』の敬称は、『先生』とする、「この会は、『三代会長』を広宣流布の永遠の師匠と仰ぐ」と明記され、特に池田先生の功績が高く評価されています。

さらに池田先生は、中日友好についても、たびたび「牧口初代会長と戸田第二代会長は、生前に一貫して日中友好を願っていた」、「私にとって、中国との平和友好とは、先師、恩師から受け継いだ信念であり、師たちが示してくださった道である」と語っておられました。中日友好はアジアのみならず、世界の平和と発展の礎です。中日関係がいかなる状況であっても、池田先生と先生が率いる創価学会の友人の皆様による友好の姿を見ることができます。その結果、中国において多くの金の橋が架けられてきました。これはまことに尊いことであります。

次に、「池田先生の仕事に取り組む姿は非常に人間性に富んでいた」という点について述べます。人生の価値を創造し、恩師の構想を実現するために、池田先生は少なくとも 5 つの方法を実践されました。これは私が研究を通してまさにそのように感じたところであります。きわめて細かでありながら自在に実行され、人の心を動かす点において非常に卓越した成果を上げています。その 5 つの方法とは、「人の心を耕すこと」、「人の士気を鼓舞すること」、「人の知恵を引き出すこと」、「人の信仰を強めること」、「人の心を動かす言葉を用いること」です。

詳細に説明することはできませんので、ここで代表的なエピソードを紹介します。

1965 年 3 月 22 日、日本の宮城県仙台市で地区部長大会が開催されました。池田先生は、一人一人との出会いを非常に大切にされ、会員の声や悩みに耳を傾けられました。大会終了後、池田先生は、参加者 600 人全てと 2 時間かけて握手をしました。そのために手は赤くはれ、筆を握ることができないほどの痛みだったそうです。その後、幹部から、握手ではなく記念撮影に変更することが提案され、1965 年からの 8 年 3 ヶ月の間に、71 万 8,550 人と記念撮影をされています。このことから、池田先生が一人一人を励ますために全身全霊を尽くされていたことがわかります。まことに感動的な事実であります。

また 1966 年、創価学会の一人の女子大学生がアルゼンチンに留学することを知り、現地で世話になる方々に渡せるよう、プレゼントを用意されました。さらに現地の創価学会の情報と連絡先を調べ、彼女が安心して生活できるよう、事前に配慮されたそうです。加えて、一人娘であった彼女の高齢の両親に対しても、色紙に「安穩」と揮毫して贈り、安心して留学に臨めるよう

心を配られました。それだけでなく、彼女がアルゼンチンへ出発する当日には、2人の女性会員に神戸港までの見送りを依頼されたといいます。このように、常に一人一人に誠実に接する池田先生の姿勢には、心から感銘を受けずにはられません。池田先生はかつて、「他者に奉仕することこそ、自らの価値を実現する最良の道である」と述べています。

池田先生は、力強く、かつきわめて包容力に富んだ講演や、詩、揮毫などを通して、多くの方を励ましてこられました。そこには、人を引きつける力があり、人格的魅力に溢れています。いくつかここで紹介したいと思います。

「前進、前進、また前進」、「対話こそ、平和への王道であります」、「自信を持つと、無限の可能性が広がる」、「他人を大切にすることは、自分自身を大切にすることである」。こうした一つ一つの言葉が、人々の心を強く打ち、深い感動を与えてきました。

次に、香峯子夫人の献身的な支援についても紹介します。「成功する男性の背後には、賢明な妻の支えがある」と言われますが、この言葉は、まさに池田先生ご夫妻にふさわしいものです。池田先生と白木香峯子女史は、約1年間にわたる自由恋愛を経て、1952年5月3日に結婚されました。その後、香峯子夫人は7つの役割を兼任されました。看護師、栄養士、妻、母、秘書、そして財務大臣、さらに創価学会婦人部の中核のメンバーとしての役割です。財務大臣には、色々なエピソードがあるのですが、創価学会のサポートのために、池田先生が香峯子夫人の同意を得ずに、お金を使われたこともあったそうです。このように、創価学会の婦人部の立場も含め、7つの役割を同時に担っておられました。その多忙な日々にあって、非常にしなやかで、かつ良妻賢母であったことがうかがえます。池田先生は香峯子夫人に支えられてこのように温かい家庭を築いてこられました。夫人が、池田先生が人生の最大の価値を創造するために献身的に支援されてきたことは明らかです。こちらの写真は、皆様もよくご覧になっていると思いますが、香峯子夫人との本当に素敵な一枚です。

香峯子夫人に触れた機会に、私が夫人から直接伺った池田先生の人生に関する大変重要な内容についてお話ししたいと思います。2018年9月、私は創価大学で研修をしていた際、書簡を通じて香峯子夫人に5つの質問をさせていただいたことがあります。時間の都合上、そのうち2つをご紹介します。

1つは、「池田先生が成功を収められた秘訣は何であるとお考えですか」と伺った際のご回答です。

「同じご質問を、アメリカの未来学者で、環境運動の母と謳われるヘイゼル・ヘンダーソン博士が主人になさったことがあります。主人は、間髪を容れず答えました。『まず、一心不乱に事に当たったからです』。特別な秘訣は何もなく、誠に素朴ですけれども、戸田先生の弟子として、

ただ『一心不乱』の一点を貫いてきたことを挙げたのです。私も、主人の行動を側で見てきて、まったくその通りと思います」というお答えでした。

2つ目は、「牧口先生、戸田先生は、それぞれ、『価値論』、『生命論』を世に問われました。池田先生は『何論』を以て社会に貢献されてきたとお考えですか」と何うと、「先般、創価学会婦人部が主催したフォーラムで、賈蕙萱先生に素晴らしいご講演をしていただきましたこと、心から感謝申し上げます。参加者の方々からも、感動と喜びの声がたくさん届いております。ご講演の中で、賈先生が、この点に関しまして、『人間革命論』と位置づけてくださったことを、感銘深くお伺いいたしました。もとより、私は、専門的にお答えできる立場でもございませんが、婦人部の一人として、賈先生のご高見に心から共鳴し、賛同させていただきたいと思います」という回答をいただきました。

このように香峯子夫人は、きわめて謙虚な姿勢で、池田先生が生涯にわたり堅持し実践してきた理論を「人間革命論」であると受け止め、賛同されました。

言うまでもなく、香峯子夫人は、池田先生が人生の最大価値を創造する上で、多大な貢献を果たしてきました。時間の都合上、ここではいくつかの例を簡潔に紹介します。香峯子夫人は、池田先生が肺結核を患われていたことを知り、結婚後は食事面に細心の注意を払い、看護師兼栄養士として体調管理に尽力し、池田先生が健康で精力的に学会活動に打ち込めるよう支えてきました。

また、池田先生が10回にわたって中国を訪問した際には、いずれも香峯子夫人が同行し、その成功を陰で支える重要な役割を果たしました。池田先生が中国との交流を通じて、中日友好、平和、文化、教育の金橋を架けることができた背景には、香峯子夫人の貢献があったことは間違いありません。

香峯子夫人が家庭において多くの役割を担っていたことは、容易に理解できます。家事全般を引き受けるだけでなく、池田先生の事業にも計り知れない貢献をしてきました。創価学会婦人部が学会の大きな支柱であることは周知のとおりであり、香峯子夫人は其中でも極めて影響力のある中心的存在でした。時間のある折には、『香峯子抄』を手にとっていただければ、夫人が池田先生の人生における最大価値の創造をいかに支えてきたかについて、より深く理解することができますでしょう。

次にご紹介したいことは、池田先生が生涯をかけて、平和、文化、教育について貢献をされてきたことです。平和、文化、教育は、池田先生が「人間革命」を提唱し、実践する上で掲げた3つの柱です。多くの識者も、これについてかなりの数の卓越した論文、書物を発表しており、昨日の基調講演から、その重要性が分かります。そのため、ここで同じ内容を繰り返すつもりはありません。ただ私は、なぜ池田先生が「平和、文化、教育」に焦点を当て全力を傾けてこられたのか、そして常に初心を忘れず、人生の最大の価値を創造するために努力をされてこれ

た、それは一体なぜなのかと考えてきました。その答えは、やはり初心を忘れず、「人生の最大の価値を創造する」という一点にあったのではないかと考えています。

人は、良い教育を受けることにより、文化的素養を身につけ、平和に対してもより深い理解を持つようになります。そして、「平和と発展」の関係はとても重要です。ここで皆様にお尋ねしたいのは、「平和と発展はいかなる関係にあるのか」という点です。私の答えは、「平和と発展は、水と魚のような関係で、水がなければ魚は生きていくことはできない」ということです。平和な環境がなければ、いかなる事業の発展も望めないということは想像に難くありません。

「平和」の定義には諸説あり、統一された見解は存在していません。ご承知の通り、池田先生は若い頃、戦争のさなかを過ごされましたので、平和に対して非常に深い認識があり、これまでも多くの平和論、生存論に関する洞察を発表してられました。

池田先生が著名な方々で行った対談において語られる平和論は、私たちの理解をさらに深めてくれます。池田先生は、1990年10月24日、ノルウェー・オスロ大学の国際関係の第一人者であるヨハン・ガルトゥング教授と対談されました。ガルトゥング教授は、北欧平和学派のリーダーであり、「平和学の父」と称される方でした。その方の代表作は『平和論』です。彼は、物理的暴力および構造的暴力が存在しない状態こそが平和であると主張しています。ここで言う構造的暴力というのは、極度の貧困、飢餓、無秩序、無政府状態、政治的抑圧といった要因によって起こされるもので、計り知れない数の犠牲者を生み出します。また、自己実現の機会を奪われ、やむなく命を絶つ人々の存在も含まれます。こうした状況は、発展途上国において決して珍しいものではありません。大規模な戦争のように流血やテロ、衝撃的なニュース報道などが伴わなくとも、人々の生命を奪う暴力が存在するという点が、ガルトゥング教授の平和学の重要な柱となっています。池田先生との対話からわかるように、両者の平和に対する理解と定義に照らせば、平和の反対語は単なる戦争ではなく、物理的暴力および構造的暴力であることが浮き彫りになります。

話題を教育に移したいと思います。中国には「知恩図報（恩を知り、それに報いる）」という諺があります。私たちは池田先生に感謝をしなければいけないと思っております。池田先生は、中国の教育に対しても多大な貢献をされてきたからです。これまで10回にわたり中国を訪問され、中国の教育を多方面から支援されました。その中でも特に重要な功績は、北京大学、復旦大学、武漢大学などに数千冊にわたる日本語の書籍や資料を寄贈されたことです。当時を振り返ると、中国は外貨不足のため、外国語文献を十分に購入することができず、教職員や学生が日本の書物に触れる機会は極めて限られていました。

また、池田先生は、新中国から派遣された第一期国費留学生の保証人を務め、多くの人材育成に尽力されました。中国にも8つの希望小学校という支援学校を建設されています。これらの情報は、創価学会国際渉外局国際渉外第二部の梶浦伸作副部長から伺いました。池田先生は、平和、文化、教育という3つの大きな分野で大きな功績を残されました。人生の最大価値を創造する中

で、社会が直面する多くの問題解決のために尽力され、輝かしい歴史を刻まれたのであります。

次に、「創立の精神」が池田先生の人生と価値をいかに豊かにしてきたかについて述べたいと思います。創価学会会員間での会話の中で、しばしば「創立者」という言葉を耳にしますが、これは池田先生を指しています。このことから、池田先生が多くの機関を創立してきたことがわかります。

例えば、1951年4月20日に戸田先生と共に「聖教新聞」を創刊されました。この新聞は、創価学会の機関紙として重要な役割を果たしています。1962年1月27日には、「東洋哲学研究所」を創設しました。同研究所は世界中の法華經に関する資料をほぼ網羅的に収集し、深い研究を行っており、半年ごとに『東洋学術研究』という学術誌を発行しています。さらに、1963年10月18日には民主音楽協会を設立し、世界的に著名な芸術団体の演奏や公演を主催してきました。いずれの公演も満席となる盛況ぶりです。1964年11月17日には公明党を創立し、同党は自民党との連立政権を通じて、政策実現する機会を得ており、日本の政局において無視できない存在となっています。特に、公明党は中日国交正常化の促進にも、極めて重要な役割をはたしました。1983年11月3日には、東京富士美術館を創立し、著名な書画や美術品、貴重な文化財の展覧会を数多く開催し、世界文化交流の重要な拠点となっています。他にも多くの機関がありますが、池田先生が創られた諸機関は、非凡な成果をあげています。多くの人が不可能と考えることを可能にし、人生を実に豊かで、価値のあるものへと高めてくれました。

とりわけ、教育分野でも、尊敬に値するような教育機関を数多く創立されました。幼稚園から大学院までの一貫教育体制を築き、1968年4月には創価中学・高等学校を、1971年には創価大学を創立されました。創価大学は文部科学省からスーパーグローバル大学にも認定されています。さらに、2001年5月3日には、アメリカ創価大学も創立されました。

池田先生は、「私が生涯をかけて取り組む事業は教育です」と繰り返し語っておられ、教育を何よりも重視していたことがわかります。先師・牧口常三郎先生、恩師・戸田城聖先生の悲願である教育事業を完成させ、人生の価値の中に輝かしい歴史を築かれました。こちらは、創価学会と創価大学の写真であり、私自身も深い親しみを覚えます。

次に、池田先生が学会の指導部及び会員から支えられていたことについて触れたいと思います。

中国には「一人の英雄には三人の助けが不可欠で、一つの垣根にも三本の杭が必要である」という俗語があります。池田先生がいかに優れた人物であっても、学会の指導部や会員の一貫した支えなしには、これほどの偉業を成し遂げることはできなかったでしょう。これは、池田先生が人生最大の価値を創造する上でも極めて重要な要素であります。

池田先生が逝去されて間もなく、創価大学北京事務所の上野理恵女史が聖教新聞の複写を私に

送ってくれました。2023年11月19日から23日まで連続で掲載されていた池田先生の特集記事には、6つの主要な業績と非凡な歩み、そして会員による深い追悼の思いが綴られていました。私は、原田稔会長、池田博正主任副会長をはじめとする学会の指導部、会員、そしてご親族の皆様が、悲しみを力に変え、異体同心でいっそう団結し、池田先生の遺訓を胸に刻み、弟子として報恩の道を歩み続ける決意を固めていることを強く感じました。まさに、「衆志成城、勇往邁進」、すなわち多くの人々が団結し、共通の志のもとに力強く前進する姿であると言えるでしょう。この写真は、原田稔会長、池田博正主任副会長の写真です。こちらは、池田先生の弟子を代表する創価大学の田代康則理事長と鈴木将史学長であり、本日もご参加くださっています。この写真は、池田先生の指導のもと、創価学会の青年会員100名の中国訪問の写真です。池田先生が育ててこられた会員の姿を見るたびに、そのきめ細やかな行動と実践に、私自身も深い感動を覚えます。池田思想や学会を研究する立場の者にとっても、学ぶべき点は非常に多いと感じます。

まとめをさせていただきます。以上のように池田先生は、95年の生涯のうち76年にわたり創価学会のために寝食を忘れ働き続けてこられました。理論があり、実践があり、創作があり、著作があり、弟子があり、業績があり、功績があり、また後継者もいます。さらに内外に友人があり、世界中の学者が池田先生を研究しています。このように豊かな人生経験そのものが、人類に残された貴重な遺産であると言えるでしょう。池田先生の不撓不屈の精神と行動によって、創価学会は827万世帯へと発展し、1100か所以上の創価学会の会館が建設されました。恩師・戸田先生は生前、池田先生に「君の舞台は世界だよ」と語りかけました。1960年に会長就任後、半年も経たないうちに、この恩師の言葉のとおり、世界へと歩みだし、平和の旅を始めました。54の国と地域を訪問し、内外の大学や研究機関で32回にわたる講演を行い、著名な識者との対談集は80冊以上に及びます。

1975年1月26日には、グアムでSGI（創価学会インターナショナル）を発足させ、会長に就任されました。SGIは五大洲192か国・地域へと広がり、会員数は300万人を超える規模にまで拡大しました。日本の他の宗教団体には見られない成果です。1983年から2023年まで、池田先生が発表した「SGI平和提言」の冊子は40冊以上に及び、平和と友好のための活動により、世界的な平和賞を5回、国連からも2回表彰を受けています。生涯に授与された各種賞は1500を超え、名誉学術称号は400以上、名誉市民称号は800都市以上に及びます。また、世界61の大学や研究機関で池田先生を対象とした研究が行われています。それ以外にも多々ありますが、ここでは省略いたします。

池田先生の人生は、創価学会の究極の目標を生き生きと体現するものであり、池田大作先生が人生の最大価値を創造したと評価されることは、まさに名実ともにふさわしいものです。私たち

は池田先生を追悼するとともに、その生き方から学ぶべきでしょう。池田先生の人生は、「生榮没哀（せいえいぼつあい）」という言葉にふさわしい人物でした。これは、生前に多くの人々から敬愛され、逝去後も深く偲ばれることを意味します。私は池田先生について全てを知っているわけではありません。ただ、私の知り得た範囲だけを見ても、池田先生は創価学会の歴史に、きわめて多彩で輝かしい「池田大作時代」を築いたと言うに十分かと思います。今後も創価学会のより輝かしい未来と人類社会のさらなる平和と発展のために努力していくべきではないかと思えます。私は、創価大学の客員教授に任命していただいております。そして、創価学会、創価大学の皆さまと私も頑張っていきたいと思えます。皆さん一緒に頑張って参りましょう。

最後に、これは中国でも大変人気のある「中国結び」というリボンの飾りです。色々な意味が込められており、編み方も多様にあります。「団結」、「友好」、「平和」、「発展」という意味もあり、中国では様々な場所で使われていますし、自分で編んだりすることもできます。これは皆さまへの感謝を込めて、私自身が編んだものです。皆様の健康、長寿、そして平和と発展を祈念し、お贈りいたします。ご清聴、誠にありがとうございました。

周恩来・池田大作会見の今日的意義

西園寺 一 晃

先ほど、賈蕙萱先輩は大変レベルの高い高尚な話をされまして、私はまた別の角度でお話を致します。まずお断りしておきたいのは、私の話の中に色んな政治家とか各国のリーダーのお名前が出てきます。初めだけ肩書きをつけさせていただいて、あとは肩書き・敬称を略させていただきます。

今からちょうど50年前、1974年12月大きな出来事がありました。中国の誰からも尊敬されている指導者周恩来総理と、日本の文化と政治に大変な影響力を持つ宗教指導者池田大作先生の会見です。立場の異なる2人が会見する。わずか30分の会見に、どんな深淵な意義があるのかと、問う人がいると思います。私は2人の会見は偶然なことではないと思っています。歴史が2人を会見させた、歴史の必然と言ってもいいと思います。どうしてなのか。この会見の意義を我々が正しく理解するためには、日本と中国、そして日中関係の推移、それから当時の国際情勢、この変化を知る必要があると思います。そういう大きな歴史の流れの中で、この2人の会見というものを評価するべきだと思います。

歴史というのは意識的に記憶、記録しておかないと風化するものです。歴史を銘記し、忘れないようにするのは、単に思い出に浸ったり、成功の喜び、屈辱の憎しみを募らせたりするためではありません。歴史を銘記する唯一の目的は、我々がこれまでの歴史の経験と教訓から学ぶ、そして、それを未来創造の糧にすることです。個人にとっても、団体にとっても、国家にとっても、さまざまな歴史があります。栄えある歴史、痛恨の歴史、成功の歴史、失敗の歴史、いろいろあります。問題はそこから何を学ぶか。そして、これからの歴史の創造にどう活かすか。そういう重要な問題を含んだ周恩来、池田大作会談だったと思います。

さて、少し歴史を振り返りますと、アヘン戦争に敗れ、腐敗した軍閥政治が横行している中国、

Kazuteru Saionji（東日本国際大学客員教授）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の全体会2「周恩来・池田大作会見の今日的意義」における基調講演に加筆修正を施したものである。

その中国から多くの志を持った青年が、アジアで初めて近代化を成し遂げた日本にやってきました。学ぶためです。その中に、19歳の周恩来青年がいました。周恩来青年は、中国の独立と近代化を目指し、日本にその答えを求めにやってきました。1917年のことです。ところが皮肉にも、周恩来青年がやってきたそのとき、日本は軍国主義の道を選び、朝鮮半島や中国に野心を持ちはじめていました。周恩来青年の日本における環境は大変厳しいもので、常に特高に尾行されたり、会合は強制的に解散させられたり、さまざまな嫌がらせを受けました。そして、彼は悩み、傷心のうちに帰国するのです。日本と戦うために帰国します。

天津に戻った周恩来青年は、天津の学生を中心に、軍閥政治と闘い、侵略者日本と闘うために「覚悟社」という組織を結成します。そのときの周恩来は20歳。周恩来青年の考え方の中にあったのは「革新と革心」ということです。初めの“かくしん”は革命の「革」に「新しい」の「革新」。これは世の中の仕組みや制度を変えることです。次の“かくしん”は革命の「革」に「心」です。自分を変える。自分が変わらなければ、社会を変えることができない。まさに「人間革命」の思想です。それ以後、日本の対中国全面侵略があり、周恩来の長い、苦しい闘いが続きます。

その後、日本は軍国主義一色になります。政治は軍人が牛耳り、メディアは戦争を煽り、多くの国民は戦争に浮かれます。そのような状況にあっても、断固軍国主義に反対し、平和を掲げて戦った人たちがいます。その中の1人が創価学会初代会長の牧口常三郎です。「世論」というものは2つの顔を持っています。世論の大勢、世論の大きな流れ、世論の多数は必ずしも正しいとは限りません。正義が、初めは少数である、孤立している、そういう歴史は多々あります。あの軍国主義の時代、政治家も、経済人も、ジャーナリズムも、宗教界も、そして国民も、その多くは権力に取り込まれ、なびきます。それに反対すれば非難され、逮捕され、拷問され、殺される危険さえあったのです。牧口常三郎は、国家神道に反対し、軍国主義絶対支配に反対し、特高警察に監視され、そして逮捕されます。しかし牧口はどんな脅しにも、拷問にも屈服せず、転向を拒否しました。そして獄死します。軍国主義に殺されたのです。73歳でした。これは皆さんよくご存じだと思います。

1945年、第2次大戦は終結します。ホットな戦争が終わった、それはクールな戦争の始まりでした。中国大陆では国民党と共産党勢力による「国共内戦」が勃発しました。米国は日本を占領しました。当時のアメリカの日本占領政策は非常に明確なものでした。それは、日本の軍国主義的要素を根絶やしにする、軍国主義が再び立ち上がれないように一切の力を取り除く。そのためにアメリカの強い影響力の下で新憲法が制定されます。この新憲法は「武力保有権」と「参戦権」の放棄が明記されています。これは世界に類のない憲法で、今は「平和憲法」と呼ばれています。その一方で、当時アメリカは冷戦の中で、冷戦に対処するためにアジア戦略を立てます。それは中国大陆の国共内戦で、おそらく勝利するであろう国民党の中国をもって、アジアにおける対東側陣営の「防波堤」にするということです。

しかし、国共内戦の結果は世界が予想できないものでした。中国大陆において、民衆に支持された共産主義勢力が勝利し、東側陣営に属する社会主義の中華人民共和国ができたのです。アメリカはアジア戦略の立て直しを余儀なくされます。アメリカは全ての武力を奪い取った日本を対東側陣営、対中国の「防波堤」にすることを決定します。そのためには日本に一定の力、一定の武力を持たせなきゃいけない。まさにアメリカのジレンマです。あらゆる武力を取って置いて、さらに武力を持たせる。ここから日本のいわゆる再軍備が始まり、警察予備隊、保安隊、そして自衛隊ができました。そして今、この自衛隊は現実と憲法の乖離というものが拡大して、大きな問題になっています。

皆さんご存じのように冷戦は激しい軍備拡張競争を生みました。特に核兵器の登場と核軍拡競争は人類滅亡の危険さえ孕んでいました。このような非常に危険な時代に2つの大きな出来事がありました。

1つは1954年、中国の周恩来とインドのネルー首相が会談し、「平和5原則」を決めたことです。領土・主権の尊重、相互不可侵、内政不干渉、平和平等、平和共存。これが基礎となり、1955年、インドのネルー首相、インドネシアのスカルノ大統領、中国の周恩来首相、エジプトのナセル首相が中心となって、「第1回アジア・アフリカ会議」、いわゆるバンドン会議というものが開かれ、そこで「世界平和と協力の推進に関する宣言」、いわゆるバンドン10原則というものが採択されます。これは当時の冷戦構造に大きな風穴を開ける力になりました。

2つ目の出来事、大変有意義な大きな出来事は、1957年、創価学会の第2代会長戸田城聖が「原水爆禁止宣言」を発表したことです。当時の世界の緊急かつ最重要課題は、人類にとって最大の脅威である「核兵器」を排除することでした。東西対立の冷戦が人類を滅ぼすかもしれない。そういう状況だったのです。戸田城聖はきっぱりと、明確に核兵器に反対し、廃絶を世界に訴えました。

さて、時間が進み1960年代は、冷戦が最も激しく、そして複雑な時代でした。戸田城聖が心配していたことが現実になりました。1962年のキューバ危機です。米ソ両超大国がお互いに核のボタンを解除しました。そして双方が相手を核攻撃する準備が整ったのです。一触即発です。もし、米ソの核戦争が始まったら、人類は滅亡です。というのは、核兵器を使った核戦争に勝利者はいません。敗者は人類です。このとき世界はこぞってこの核戦争に反対し、ローマ法王まで動いて、かろうじて人類滅亡を免れたのです。

この冷戦の最中、1960年池田大作は戸田城聖の後を継いで創価学会第3代会長に就任しました。弱冠32歳です。池田新会長は、国内外の厳しい、複雑な情勢に立ち向かわねばならなかったのです。

核戦争は免れましたが、2つの核大国であるアメリカとソ連の対立は解消されず、アメリカと中国も激しく対立していました。さらに東側陣営内部でも亀裂が生まれました。中国とソ連の関係が悪化したのです。中ソ対立が生まれました。冷戦はますます複雑になっていきます。この状

況を深刻に憂えたのは周恩来でした。周恩来の頭の中には3つのことがありました。①長い軍閥支配、列強の侵略、内戦で疲弊した中国をいかに復興させるか。そのためには周辺地域の平和的な環境が不可欠である。②何とかして危険な冷戦を終結させなければならない。そうしなければ、人類は滅亡の危機に晒される。しかし、当時の中国は今と違って経済的に非常に貧しく、軍事的にも立ち遅れていました。世界に影響力を発揮し、米ソに強力に働きかけることなどできませんでした。③そこで周恩来が考えたのは日中関係の緩和と正常化です。中国の周辺地域、特に日中が協力して、アジアと世界に影響力を及ぼすことでした。周恩来は、これまでのアジアの歴史から「日中が相争えばアジアは乱れ、友好共存すればアジアは安寧となる」と考えたのです。

この内外の厳しい状況の中においても、池田大作は牧口常三郎、戸田城聖の意志を継いで、揺るぎない信念で「平和」を掲げました。池田も周恩来と同じくアジアを、世界を平和にしたい、それにはどうしたら良いだろうかと必死に考えたと思います。

周恩来の必死の努力が始まります。周恩来は危険な国際情勢と悪化する日中関係を見て、当面、日中両国政府の正常化交渉は無理だと考えました。そこで周恩来が打ち出したのは「民を以て官を促す」戦略、つまり幅広い日中の、各界各層の民間交流を「大河のような流れ」にして、民意の圧力で日中関係を改善と正常化の方向に導くということです。この周恩来の「民を以て官を促す」戦略は、日本で池田勇人政権が出たことによって力を得ます。自民党の中でも比較的反りバールな池田勇人さん、宏池会を作った人です。この人の考え方は経済第一、とにかく国民を豊かにしなきゃいけない。年配者が池田勇人と聞いたら何を思い出すかっていうと「所得倍増論」です。国民の所得を倍増させる、国民を豊かにする。つまり、池田勇人が唱えたのは軽武装、経済第一でした。そしてもう1つ、池田勇人の政策の中で大変重要なのは対中国政策で、その特徴は「政経分離」です。これは当時としては大変進歩的なものでした。つまりまだ中国を承認する条件は熟していない。しかし、貿易とか民間交流は大いにやってもいいという方向です。これは当時としては画期的なものでした。この流れの中で日中の貿易分野では、半官半民の「LT貿易」が生まれました。皆さんご存じだと思います。LT貿易というのは中国の側の代表が廖承志という人でLです。日本側の代表が高碕達之助、Tです。この頭文字を取ってLT貿易。これは半官半民の貿易で、政財界を含む各界各層の交流が進み、事実上日中関係は「半官半民」の時代に入ります。

この動き始めた日中関係の中で、周恩来は日本を見つめながら、頭の中には1つの疑問がありました。それは日本の創価学会という巨大な宗教団体はどのような組織なんだろう。我々が交流し、友好関係を樹立することは可能なのだろうかという問題です。周恩来の古い友人である政治家高碕達之助や、その後中国と交流を深めた女流作家の有吉佐和子さんなどが、折に触れ周恩来に創価学会との交流を進言していたのです。ところが周恩来の下で対日政策を担っていた多くの幹部は、創価学会は「軍国主義的宗教団体」であると、周恩来に報告したのです。それはどうしてかという、当時日本と中国の間にほとんど交流がなかった。ですから、その人たちがどこか

ら日本の情報を得ているかという、一部の左翼政党からです。そこからの情報しかないのです。これを聞いた周恩来は部下たちを叱ったそうです。「君たちは、創価学会は軍国主義的宗教団体だと言うけれども、どこに根拠があるのか、君たちは創価学会と接触し、話し合ったのか。それとも単なる伝聞なのか」。そして周恩来は部下たちに命じます。「創価学会と接触せよ、彼らの話をよく聞いて、客観的に判断せよ」。この役目を担ったのは、1964年に「LT貿易」が締結した「日中記者交換協定」によって日本に駐在するようになった中国メディアの記者たちでした。日中関係には、「雪解け」ムードが生まれましたが、国際情勢は相変わらず厳しいものでした。そして日本でも、比較的リベラルな池田内閣が退陣し、その次に現れたのは佐藤栄作内閣。佐藤さんは自民党の中でも最もタカ派的な人です。対中国政策においては反中国的な人です。この佐藤栄作政権が誕生し、まずやったのは池田政権の対中政策を転換させたことです。貿易を含む日中の民間交流は大きく制限されました。佐藤栄作首相は大変長い間首相をやったのです。その間に佐藤首相は3回アメリカを訪問しています。そして、日米首脳会談をやって共同コミュニケを出しています。第1回1965年。当時のアメリカの大統領はジョンソン。佐藤・ジョンソン会談によって対中国、強硬な共同声明が出されます。2回目は1967年、佐藤・ジョンソン会談。このときも同じく対中国、強硬な共同声明が出されます。そして3回目は1968年。このときはジョンソンからニクソンに変わっていました。佐藤・ニクソン会談。ここでも強烈に厳しい、対中強硬共同声明が発表されました。

中国ではこの時期に「文化大革命」が勃発し、政治も、経済も、外交も混乱に陥ります。中国では極左勢力が影響力を増し、暴力と破壊が吹き荒れます。そういう状況の中で、日中国交正常化を目指す友好運動は萎んでゆきます。

文化大革命で、中国では極左勢力により、周恩来の忠実な部下たちが次々と排除され、周恩来は丸裸にされます。中国は超大国アメリカ、超大国ソ連と対立し、さらに周恩来の努力で非常に良好な関係を築いてきた第3世界発展途上国との関係も、いわゆる「革命外交」によって関係が悪化します。中国国内における極左勢力の「打倒対象」は最終的には周恩来でした。そのために彼は丸裸にされる。最も周恩来にとって苦しい時代でした。

冷戦が複雑化し、日本では対中強硬姿勢の佐藤栄作政権が生まれ、日中関係が退潮する。中国では文化大革命で大混乱が起きる。周恩来が1番苦しいとき、この非常に複雑な時期に、日本でありえないことが起こりました。それは創価学会第3代会長池田大作が、創価学会第11回学生部総会（1968年）において、突然「日中国交正常化提言」（以下「日中提言」）を行ったのです。内外共に「反中国」一色という状況の中、池田大作は敢然と、この最重要問題でありながら、「誰も触れられない、触れてはならない」日中問題を真っ向から取り上げ、具体的提言を行ったのです。

提言の内容は皆さんよくご存じだと思いますが、①中国を承認し、国交正常化を図るため、即時交渉を始めるべきである。②中国の国連における議席を回復させるべきである。③日中貿易を始め、日本と中国の経済・文化交流を積極的に進めるべきである。政府は邪魔してはいけない。

今でこそ、おそらく当たり前のことです。当時、この提言は日本政府の方針に反し、アメリカのアジア戦略に反し、反中国的な社会の風潮に反し、大きな世論に反した。当時「日中友好」などと言ったら、白い目で見られ、右翼の攻撃に晒され、下手すると殺されます。1960年、当時日本社会党という政党がありました。今の社民党の前身です。この政党は一貫して日中友好を唱えてきた政党です。1960年当時の委員長は、浅沼稲次郎さんという人です。この人は常に、日中は国交を回復すべきだ、日中友好を図るべきと訴えていました。そして1960年のある日、日中の国交を回復せよという演説会を東京の日比谷公会堂で行いました。その演説中に右翼の青年が壇上に駆け上がり、浅沼委員長を刺しました。浅沼は即死でした。これが当時の状況です。つまり日中友好なんて言ったら、まして日本政府やアメリカに反して、日本の風潮に反して日中提言なんかしたら殺される、そういう時代です。

後に中国の文化副大臣になった、当時日本に駐在していた中国の新聞記者の劉徳有さんという人は池田の「日中提言」に驚き、感激し、「これは極めて重要だ」と直感。提言全文を打ち出して、中国語に直して、本国にすぐ送りました。この翻訳はすぐ周恩来の元に届けられました。周恩来は満面の笑みで喜んだそうです。この厳しい情勢の中、命を張って日中関係改善を主張し、勇気をもって具体的提案をする人がまた1人現れた。それは中国の中で孤立を深めつつあり、日本との関係改善を望んでいた周恩来にとって何よりの朗報でした。そのときから周恩来が日中関係を思う時、頭の中には常に「池田大作」がありました。一方、日中提言を行った池田大作は、右翼の攻撃に晒されました。いつ刺客が襲ってくるかわからない。それほど、当時の中国問題はデリケートな問題であり、多くの人は重要だと思っても、この問題を避け、口を噤んでいたのです。この時から、まだ会っていない周恩来と池田大作の心は繋がりました。

宗教指導者池田大作が、内外情勢が最も厳しい中、当時としては驚くべき大胆な提言を行ったその時期、誰も予想できない、世界を揺るがし、世界の枠組みを抜本的に変える大きな変化が水面下で進んでいました。その世界を変える大きな出来事は、言ってみれば「ニクソンの焦りと毛沢東のため息」が起こさせたといえると思います。アメリカにおいては、ジョンソンの後を継いだニクソン大統領が焦っていました。ジョンソンから受け継いだ「負の遺産」が大きく体にのしかかっていたのです。ベトナム戦争が泥沼化し、米国を含む世界規模での「ベトナム反戦運動」が高まり、アメリカがベトナムに派遣した軍人には犠牲が増え続け、軍内には厭戦気運が高まっていました。ニクソンにとっては大きなプレッシャーでした。アメリカにとって、そのベトナム戦争に勝るとも劣らないプレッシャーというものがもう1つありました。最もアメリカの由々しき問題は、アメリカがベトナムの「泥沼」に足を取られている間に、西ヨーロッパの軍事情勢が大きく変わりつつあったことです。当時、ソ連を中心とした「ワルシャワ条約機構」と、アメリカを中心とした「北大西洋条約機構（NATO）」の2つの大きな軍事ブロックがありました。アメリカがベトナムの「泥沼」に足を踏み入れている間に、この2つの軍事ブロックの力関係が大

きく変わりつつあったのです。

ベトナム戦争前、この「NATO」と「ワルシャワ条約機構」の力関係はまさに大学生と小学生くらいの差があった。ところがベトナム戦でアメリカが足を取られている間に、これが下手すると逆転する、このまま放置すれば逆転されると、アメリカは危機感を募らせます。そして、ニクソンはベトナムから足を抜くことを決意します。ニクソンは考えました。南ベトナムが北ベトナムに飲み込まれるのは仕方がない。アメリカはベトナムから出ていく、しかし、その空白にアメリカの最大のライバルであるソ連の勢力が入ってきたら困る、これだけは阻止せねばならない。そしてニクソンは、考えました。どうやってソ連の南下を防ぐのか。当時、ソ連と激しく対立している中国を利用しよう。そしてニクソンはキッシンジャー特別補佐官を呼んで密命を与えます。「極秘裏に中国と接触せよ」。

一方で、中国でもある大きな変化が起こっていました。2つの超大国、アメリカ・ソ連と対立し、第3世界との関係も悪化した中国は、国際社会の中で孤立を深めていました。国内では文革の嵐が吹き荒れ、政治は混乱、経済は破綻寸前でした。そんな中、1960年代末のある共産党上層部の秘密会議で、あの絶対的なカリスマ、まさに傲慢とも言えるような自信を持った毛沢東が初めてその会議で弱音を吐いた。「我々は孤立してしまった。どうすれば良いのだろうか。」そして毛沢東は、大きなため息をついたそうです。この毛沢東の様子を見て周恩来が動きます。周恩来は、当時「文化大革命」の中で、軍権を把握しつつあった林彪に迫害され排除されたベテランの元帥たち4人を極秘に呼び集めます。4人の元帥—陳毅、徐向前、聶榮臻、葉劍英。周恩来は彼らに1つの諮問をします。「我々の対外戦略は正しいのか、間違っているのか」。4人の元帥は協議して答申しました。「まだ経済的に立ち遅れ、軍事的にも遠く米ソに及ばない中国が、米ソ両超大国と同時に対立するなど、戦略的に大きな間違いである」。こう答申したのです。それを聞いた周恩来は第2の諮問を行います。「それでは当面、我々にとって最大の脅威はアメリカか、ソ連か」。4人の元帥は答申しました。「当面、我々の最大の脅威は、7300キロの国境を接し、強大な軍事力を持ったソ連である」。周恩来は静かにそれを聞いていて、そして、この状況をすぐに毛沢東に報告しました。毛沢東はそれを聞いてしばらく考えて、周恩来に命令します。「極秘裏にアメリカと接触せよ」。こうして同じ時期に、ニクソンはキッシンジャーに、毛沢東は周恩来に、「中国と接触せよ」「アメリカと接触せよ」。こうして周恩来とキッシンジャーの極秘外交が始まりました。そして世界はあっと驚きました。1971年7月12日、米中は同時に「ニクソン大統領が1972年5月までに北京を訪れる」と発表しました。中国は外交部スポークスマンが発表しました。アメリカではニクソンが自らテレビカメラの前で発表しました。アジアにおけるアメリカの最も重要な同盟国である日本の佐藤栄作首相が、アメリカからこの通知を受けたのはニクソンがテレビの前で発表する3分前です。これが国際政治です。

私はもちろん池田大作がこの水面下の出来事を知っていたとは思えない。しかし、池田は今後の世界は、中国抜きには考えられない、中国を国際社会に迎え入れるべきで、それは歴史の必然である、近い将来それは必ず実現すると確信していたのです。また、冷戦構造は将来必ず崩壊する、

世界は必ず変わると確信していたのです。その過程で米ソ、米中、中ソ関係も必ず変わる、いや変わらざるを得ないと考えていたと思います。だからこそ、最も厳しい時期に、池田大作は命を賭けて「日中提言」を行ったのです。

衝撃的な「ニクソン訪中」の発表の後、国際社会は雪崩を打って中国承認に向かいました。1971年10月、第26回国連総会において圧倒的多数で中国の国連における議席を回復しました。日本の政界は大混乱に陥ります。アメリカのいわゆる「ニクソンショック」、「頭越し外交」で大揺れになります。佐藤首相は、さすがに「日中国交正常化」に反対することはできませんでした。つまり、中国と国交正常化する一方で、台湾との関係はこれまで通り維持する。佐藤首相は事実上「2つの中国」の道を模索したのです。しかし当時この「2つの中国」論に関しては、中国、台湾とも反対でした。双方とも「中国は1つである」と主張していたのです。佐藤政権は万策尽きて退陣します。これからは皆さんよくご存じのことです。ポスト佐藤を争ったのは、田中角栄と福田赳夫です。いわゆる角福戦争。田中角栄のスローガンは「日中国交正常化即時実現」、一方の福田赳夫は「日中国交正常化実現、しかし台湾との関係維持」でした。激しい「角福戦争」は田中の勝利に終わりました。日中国交正常化実現を掲げる田中角栄内閣の出現です。

周恩来は世界の変化、日本の変化を見て、ここは一気呵成に対日正常化を実現させるべきだと考えました。ところがこの時点での日本は、台湾のいわゆる国民党政権を中国の唯一合法政権としていて、中華人民共和国は承認していなかったのです。承認していない国の政府とどう交渉するのか。交渉実現のためには、正規の交渉をするためには、水面下で交渉をお膳立てする「仲介者」が必要です。仲介者は多くいました。自民党の中にも当時、大勢の親中派がいました。先ほど申し上げましたように、当時の日本社会党は一貫して日中関係を重視してきた。大きなパイプを持っていた。つまり、客観的に見ても、あるいは主観的に見ても、自薦他薦の「仲介者」はたくさんいたのです。ところが、周恩来が「仲介者」に選んだのは公明党でした。これは当時メディアの間でも謎でした。公明党は当時新しい党で、これまで中国との付き合いはほとんどありませんでした。中国の対日関係者も、公明党についてはほとんど知らない。ところが、周恩来は躊躇なく公明党を選びました。周恩来の頭の中にあったのは、池田大作であり、そして、その池田による1968年の「日中提言」だったのです。公明党は創価学会の池田大作が創設した党で、実質的に池田の指導下にある、だから信頼できる。これが周恩来の確固たる考え方でした。

公明党の、水面下での活躍があり、日中両国政府は正式な国交正常化の交渉に入る環境が整いました。ここで日本では、政界・財界・メディアがあっと驚きます。何と田中角栄首相が、ほとんど何の準備もなく、何の議論もなく、いきなり北京に飛んだのです。田中角栄政権ができたのは1972年7月です。北京に飛んだのは9月です。自民党の中でも国会でも全く審議もしていません。後に田中が述べているように、内外情勢に鑑みて、ここで一気にやらなければならない、しかし勝算は何もなかったと言っています。田中角栄唯一の「頼り」は、公明党からもたらされ

た中国側と周恩来の基本的な考え方、その情報だけでした。

田中の懸念は3つありました。①もし、私が北京に行って、交渉の過程で、膨大な戦争の賠償を求められたらどうするか。とても払えません。②台湾との関係をどうするか。③中国が日米安保条約の破棄を求めてきたらどうするか。つまり、それまで日米安保条約の対外的機能の中心は、中国封じ込めだったわけです。ニクソン訪中で、米中関係が大きく緩和し、日中関係も正常化が実現しようとしている。これまでの「中国封じ込め」という米国のアジア戦略に奉仕してきた日米安保条約はもう要らないだろうと中国が言ったらどうするのか。

周恩来は日本側の立場に配慮しつつ、これらの問題に明確に対処し、交渉は比較的順調に進み、日中国交正常化実現で一致しました。周恩来は対日賠償を放棄すると明言しました。台湾問題は田中、大平の知恵でいわゆる「日華条約は終了した」と、事実上台湾との「国交」を断絶しました。日米安保について、中国は何ら言及しませんでした。

日中国交正常化は画期的な出来事でした。田中政権が電光石火、正常化を実現できたのは、幾つかの要素が田中の背中を押したからです。①世界情勢の大きな変化。②「バスに乗り遅れるな」という財界の意志。③長年積み上げてきた民間交流の力。④これらの大変化を背景にした公明党の水面下での活躍。その上に田中の決断があるのです。

つまり、ここまで歴史を遡れば明らかになると思います。日中国交正常化実現の根底には、長年にわたる創価学会の軍国主義反対と平和実現のための戦いがあるのです。その延長線上にあるのが、池田大作が1968年に行ったいわゆる「日中提言」です。それを周恩来は一貫して重視し、その結果公明党の活躍と田中角栄の決断があり、短期間に、比較的スムーズに日中国交回復は実現したのです。あの最も厳しい時期、池田大作が提言し、多くの人が当時、「できもしないことを、何でこんな時期に言うのか」と嘲笑しました。それがなんと4年後には全部実現したのです。

この日中国交正常化、中国の国連復帰、世界情勢の変化、この流れを喜びながらも冷静に見つめていた人がいました。周恩来と池田大作です。2人の考えは全く同じでした。つまり、これで終わりではない。日中国交正常化は「小目的」ではあるけれども、「大目的」ではない。世界は依然として冷戦下にあり、米中は和解したが同床異夢であり、アジアと世界の平和と安定には程遠い。米ソ関係、中ソ関係はなお厳しい状況にある。対日国交正常化をなし遂げた周恩来は、突然体調不良に陥ります。実は早くから予兆はあったのですが、ニクソン訪中、日中国交正常化に集中すべく、周恩来は頑なに検査入院を拒み続けていました。「党の命令」で入院検査した時には、すでに膀胱癌の末期でした。医学的には一刻の猶予も許されない状態でした。即時入院して、手術をする必要がありました。しかし、周恩来は入院を拒みました。「私にはやることがまだたくさんある。今入院している暇はない」。周恩来は自分の命がもう長くないことを知っていました。やるべきことはたくさんありました。その1つは、どうしても生きているうちに池田会長に会いたいということでした。これまで2人はもちろん会ったことがありません。激動する歴史の中で、

考え方が交差していました。心は繋がっていました。池田大作との会見は、周恩来のたつての希望でした。周恩来の命の炎が消え去ろうとしているときです。周恩来の希望は池田大作に伝えられました。

池田大作を団長とした創価学会第1次訪中団は、1974年5月に北京を訪問しました。ちょうどそのとき、周恩来の容体が急変、急遽大手術が行われたのです。記録によると、周恩来が入院してから逝去するまで、大手術が10回、小手術が8回行われていました。したがってこの5月には、周恩来・池田大作会談は実現しませんでした。

この年の9月、池田大作はモスクワに飛びます。目的は中ソ衝突を防ぐためです。コスイギン首相に向かい、池田大作は単刀直入に話します。「あなた方は中国を攻めるつもりですか」。コスイギンは答えます。「攻めるつもりも、孤立させるつもりもない」。

池田大作は第2次訪中団を率いて、同年12月再訪中します。周恩来は動ける状態ではなかったのですが、まだ仕事をしていました。周恩来にとっての入院は、仕事を事務室から病院に移しただけのことです。医師団、秘書団がいくら懇願しても、周は仕事を止めませんでした。しかしほとんどベッドから立ち上がることもできなくなっていました。

周恩来の病状が悪化する中で、池田大作に会いたい、これは池田にも伝えられました。池田は、周総理には少しでも長く生きてほしいと会見を辞退しました。しかし、どうしても周恩来は会うということで、あの会談が実現したのです。医師団の条件は「5分」でした。周恩来の病状はとても人に会える状態ではなく、歩くこともままならない状況でした。ところが、池田大作が病院を訪れたとき、周恩来はベッドから起き上がり、ドアまで歩いて行ってそこで迎えたのです。それが周恩来の誠意でした。そして、池田大作を迎え、病人とは思えない力でしっかりと池田の手を握りました。

もちろん私はその場に居ませんでしたので、具体的にどのような会話が交わされたのかは分かりません。しかし、私はこう理解します。2人の気持ちは、言葉には出さなくても同じだったと思います。完全に気持ちは通じていた。日本と中国は仲良くしなければならない。世々代々の友好を築く努力をしなくてはならない。決して国民同士が憎み合ってはならない。まして絶対戦争をしてはならない。周恩来の気持ちを察することができます。「池田会長、両国に平和な美しい『金の橋』を架けてください。そこを両国の国民が、民衆が、青年が笑顔で渡るのを、私はどこかで見ています」。池田大作の気持ちも手に取るように分かります。「総理、私は全力を挙げて、日中の友好、世界の平和のために努力します。多くの同志とともに」。

この周恩来、池田大作会談について、日中双方の多くの研究者はこう言います。「周恩来はこれからの日中関係を池田大作に託した、そこにこの会見の大きな意義がある」と。私も同感です。しかし、ただそれだけならば、この会見の深遠な意義を理解できないと思います。周恩来と池田大作の頭にあったのは、今後の日中関係をどう構築していくかと、もう1つは日本と中国だけで

はない。彼らの頭にあったのはアジアであり、世界、そして人類であったと思います。そして。つまり、周恩来が池田大作に託したのは、日中関係だけではなく、冷戦の終結、世界の平和の実現だったと私は思います。

周恩来、池田大作会見の2年後の1976年1月、周恩来はこの世を去りました。冷戦の終結、中ソ、米中関係の緩和は15年後の1989年に実現します。池田大作は周恩来との約束を守り、日中間に金の橋を架けました。この橋を両国の多くの人々が渡り、交流しています。

この2人の日中関係と世界平和への貢献は巨大なものだと思います。ただ2人の理想はまだ実現していません。この未完の任務を継ぐのは、我々であり、特に日本、中国、アジア、世界の青年だと思います。

大変にありがとうございました。

大公・大智・大信・大愛

——周恩来総理と池田大作先生の友誼

紀 亜 光

創価大学が開催する、「周恩来・池田大作会見 50 周年記念」シンポジウムにおいて、このような貴重な機会をいただき、大変光栄に存じます。本日は、周恩来総理と池田大作先生の友情について、私なりの理解を述べさせていただきます。

周総理と池田先生の会見は、実際にはわずか 30 分程度であったとされています。その短時間の会見に、果たしてどれほどの歴史的意義があったのかと疑問を抱かれる方もおられるかもしれません。

しかしながら、西園寺先生が先ほど指摘されたように、この会見には極めて深い歴史的意味と、世界を見据えた広い視野が込められていました。すなわち、この会見には、歴史的な重層性と国際的視点が確かに存在していたのです。

本日は、この点について、私は次の 4 つの視角から考察したいと思います。

1. 大公結縁（大いなる公益に基づく結縁）
2. 大智立業（大いなる智慧で事業を成す）
3. 大信伝世（大いなる信頼を後世に伝える）
4. 大愛永生（大いなる愛は永遠に生き続ける）

周総理と池田先生の友情は、注意深く味わい、深く考察するに値する、きわめて重要な事例です。一方は中国人、もう一方は日本人であり、年齢差は約 30 歳。一方は国家の総理として政界の中枢に立ち、他方は民間団体の会長として社会を導く立場にありました。また、一方はマルクス主義者、他方は宗教者であり、思想的立場も大きく異なっていました。さらに、両者はいずれも 20 世紀の中日戦争を経験しながら、当時は互いに敵対する陣営に属していたという歴史的背景も共有しています。にもかかわらず、両者の人生における直接の接点は、1974 年 12 月 5 日の、わずか 30 分間の会見のみでした。

これほど多くの相違があり、しかも直接の対面が極めて短かったにもかかわらず、両者の友情は、大海のように広大で深遠なものでした。それは時空を超え、イデオロギーを超え、さらには

Ji Yiguan（南開大学マルクス主義学院教授）

本稿は周恩来・池田大作会見 50 周年記念シンポジウム（2024 年 11 月 30 日～12 月 1 日、於・創価大学）の全体会 2「周恩来・池田大作会見の今日的意義」における基調講演に加筆修正を施したものである。

生死をも超越し、中日の平和と世界の友好事業に深い影響を与え、中日関係史において消えることのない美談として刻まれています。

なぜ、これほど多くの違いを抱えながら、これほど深い友情と広大な影響力を持つことができたのでしょうか。

周総理と池田先生の友情は、単なる個人的な親交ではなく、中日友好と世界平和という事業に根ざした、広い公の精神——すなわち「大公」の友情であったと言えます。そこには、多様な文化の中で調和の世界を築こうとする「大いなる智慧」と「真の信頼」、そして「人民本位」という深い愛の精神が貫かれていました。

両者の歴史的会見から 50 周年を迎える今日、その色あせることのない友情を総括することは、単に感動的な歴史を振り返ることにとどまりません。それは、「百年に一度の大変局」といわれる現代において、危機を好機へと転じ、人類社会が平和と友好の大道を歩みながら、新たな未来を切り開いていくための、きわめて重要な示唆を与えるものです。

1. 大公結縁（大いなる公益に基づく結縁）

まず、周総理と池田先生の「大公結縁」について述べたいと思います。中日友好と世界平和の事業こそが、この 2 人を結びつけた最も重要な絆であり、両者の友情の基盤でした。

1960 年代初頭、周総理は、池田先生が率いる創価学会が、中日友好を推進する上で「決して無視できない力」であることに注目しました。これを契機として、周総理は池田先生および創価学会への関心を一層深めていきます。1960 年に池田先生が創価学会会長に就任してからわずか 3 年の間に、会員数は 150 万世帯から 300 万世帯へと倍増し、日本社会の各界から大きな注目を集める存在となっていました。

1962 年 9 月から 10 月にかけて、松村謙三氏と高碇達之助氏が訪中した際、創価学会と池田大作を重視し、「ぜひ友人になるべきだ」と相次いで周総理に進言しました。同年には、周総理に対して池田先生と創価学会について紹介を行っています。

また、当時「中日覚書貿易」の中国側首席代表であった孫平化氏は、訪日後、帰国して間もなく、池田先生と創価学会の状況を特別に周総理へ報告しました。その際、周総理は、池田先生が「若く、勤勉で、『毛沢東選集』を通読している人物」であることを知るようになります。

当時、日本国内では創価学会に対する評価は賛否が分かれており、中国国内でもその認識にはさまざまな意見の違いがありました。孫平化氏の回想によれば、「当初、私たちは創価学会を、非常に組織化された、動員力の強い危険な団体ではないかと考えていた。日本軍国主義復活の可能性が議論されていた時代であり、こうした団体を恐ろしく、危険だと感じていた」と述べています。

しかし、周総理は中国人民外交学会に対し、創価学会について体系的に研究するよう指示します。当時、日本課の所長を務めていた金蘇城氏（後の駐日大使）は、資料分析の結果、創価学会の組織が軍隊のように見え、その本質を把握することは容易ではなかったと回想しています。し

かし、ここで周総理の優れた判断力が発揮されました。周総理は、創価学会が反戦・平和を追求し、大衆の中から生まれた民衆基盤の組織である点に着目し、中日友好を推進する上で無視できない存在であると判断しました。そして、創価学会との接触を図るべきであるという明確な方針を示したのです。

この時期、林麗韞氏（周総理通訳）は「調査を通じて、私たちは創価学会が民衆を基盤とし、中日友好を目指す団体であると認識した」と証言しています。また同氏は、創価学会について「周総理は常に交流の方法を模索していた」と述べています。奇しくも、池田先生も会長就任以降、中日関係の現状を注視し、いかにして国交正常化への道を切り開くか深く模索していました。

1963年、高崎達之助氏が池田先生を訪問し、池田先生が中日友好の新たな推進力となることを強く期待したことを受け、池田先生は「日中友好に金の橋を」という決意をいっそう固めました。池田先生は、中日友好の扉を開くには、政治の力が不可欠であると確信し、1964年に公明党を設立します。中国との国交回復を公明党の最重要外交政策として掲げました。これに並行して、1966年には、有吉佐和子氏を通じて周総理と池田先生の初めての間接的な交流が生まれました。周総理から訪中招待のメッセージが届けられると、池田先生は深く感動し、「このご厚情は決して忘れない」と述べました。

その後、周総理の指示を受けて、創価学会との接触は実質的な進展を見せることになります。孫平化氏と、当時『光明日報』の東京駐在記者であった劉徳有氏が、東京において創価学会青年部の責任者と初めての会合を持ち、ここから中国政府と創価学会との交流の扉が正式に開かれました。学会側の責任者は秋谷栄之助氏であり、創価学会にとっても、これが中国側との初めての接触でした。会合に先立ち、双方ともに大きな緊張を抱えていたと伝えられています。周総理の一貫した誠意は、池田先生に「いよいよ日中友好を本格的に推進すべき時が到来した」と強く実感させるものでした。

こうした流れの中で、当時の中日関係の緊迫化を踏まえて膠着状態を打破し、正常化へ道筋を切り拓くため、池田先生は、両国が国交を正常化する4年前にあたる1968年9月8日、2万人が参加した創価学会学生部大会において「日中国交正常化提言」を公に発表しました。池田先生は其中で、中国問題を解決するための3つの道筋を提示し、その内容は各界に大きな驚きをもって受け止められました。

この提言は世界各地で大きな反響を呼び、深い歴史的影響を与えました。その後も池田先生は中日友好を粘り強く推進し続け、1969年6月には『聖教新聞』で連載していた『人間革命』の中で、「日中平和友好条約」の締結を呼びかけるなど、あらゆる手段を通じて中日友好の前進に尽力しました。特筆すべきは、この「日中国交正常化提言」が発表されるや否や、周総理が強い関心を示し、この提言をきわめて高く評価した点です。一方で、この提言は日米両国当局の意向とは異なる内容を含んでいたため、池田先生ご自身が危険にさらされる局面も生じました。しかし、周総理はこの提言を極めて重要なものとして受け止めていました。では、周総理はこの提言を、どのような経緯で、またどの時点で知ることになったのでしょうか。

林麗韞さんは、「1968年に池田先生が発表した中国に関する提言の内容は、速やかに総理の手元に届けられたと考える。周総理が池田先生の提言を非常に高く評価していたことは間違いない」と証言しています。さらに彼女は、「当時は中日両国の間には国交がなく、真の意味で戦争が終わっていなかった。しかも中華人民共和国は国連に代表権すら持っていなかった。国民の識字率も高くなかった。このような状況下で、池田先生が『日中友好こそ世界平和の鍵である』と位置づけたことは、特に注目に値する」と述べています。周総理も日本のメディア情報を注視していました。私たちも日本最大の宗教団体の創価学会が中日友好の活動を始めたということを、非常に喜んでいました。1970年には、周総理が長野大学名誉教授の菅沼正久氏と会談した際、「創価学会にはどのような特色があるのか」「この学会は普段どのような活動をしているのか」など、30分以上にわたり熱心に質問したと伝えられています。

1971年6月、公明党の代表団が中国を訪れた際、周総理は「知り合うのは遅かったが、長年の知己の如し」と語りました。この発言からは、周総理が、池田先生のわが身を顧みない中日友好への尽力を深く理解していたこと、そして公明党が池田先生の提唱した中日国交正常化を外交政策の柱としていたことを、十分に把握していたことがうかがえます。これは、周総理が1960年代初頭から創価学会に関心を寄せ、その動向を理解してきた結果であり、同時に池田先生の「日中国交正常化提言」に対する全面的な肯定の証しとも言えます。

周総理が池田先生と創価学会を重視した背景には、中日友好事業をいかに戦略的に推進するかという視点がありました。創価学会が日本社会の民衆の中に幅広く根を張る、一般市民を基盤とする大衆団体であること、平和を希求し、戦争、とりわけ日本軍国主義による中国への侵略戦争に反対してきた団体であること、一貫して中日友好を掲げて推進してきた団体であること、正しい歴史観を持ち、その会員を長期にわたり教育してきた団体であること、そして、中日友好関係の確立と発展、また両国民が末永く友好を育んでいくうえで、卓越した貢献を果たしている団体であることを、周総理は的確に見抜いていました。また、創価学会のこうした方針と性格は、歴代会長、なかでも長年指導的立場にあった池田先生の英断と指導と深く結びついています。これこそが、周総理が創価学会に強い関心を寄せ、病床にありながらも池田先生の会見を強く望んだ理由にほかなりません。

以上の歴史的経緯を踏まえると、周総理と池田先生、そして創価学会との交流は、両国の国民が世代を超えて友好を育んでいくという共通の目標を基盤として築かれたものであると結論づけることができます。このような広い公の心、すなわち「大公の心」こそが、周総理と池田先生の深い友情を支えた根本的な基盤だったのです。

2. 大智立業（大いなる知恵で事業を成す）

中日両国は、二千年以上にわたる友好交流の歴史を有しています。しかし近代以降、日本の度重なる中国侵略は中国人民に計り知れない被害をもたらしました。さらに冷戦構造のもとで、両国が異なる陣営に属していたという政治的現実も重なり、中日関係の正常化は、通常の政府間外

交だけでは解決困難な課題となっていたのです。

こうした状況の中、周総理と池田先生は、真理を求める姿勢と理性的な態度、そして卓越した知恵によって、民間外交というルートからこの極めて重い課題に取り組み、その過程で両者の友情はますます深まっていきました。周総理は、中華人民共和国建国以来、「民間外交こそが、中日両国民が世代を超えて友好を築き続けるための鍵であり、中日両国の関係は何よりも両国民間の友好を基礎としなければならない」と繰り返し強調していました。1950年代には、中日関係の膠着状態を打破するため、「民間先行、民が官を促す」という独自の外交思想を打ち出しました。

周総理は、「中日国交の困難な局面を打破するには、どのような手順を踏むべきか。我々の考えでは、まず中日両国民の間で国民外交を進め、そこから半官半民の外交へと発展させ、そしていつの日か必ず、中日は国交を回復するだろう」と述べています。さらに、「人民が往来するだけでなく、人民が政府に影響を与え、政府の態度を変えていくことで、両国は真に友好になれる」と述べ、「以民促官」という民間外交の理念を明確にしました。周総理自身、この理念を実践し、1953年7月1日から1972年9月23日までの約20年間に、日本からの来訪者や代表団を287回、延べ323団体も接見しています。この莫大な努力と献身は、日本国民からの深い敬愛を集める結果となりました。日本の元首相・三木武夫は、「周恩来総理ほど、日本のあらゆる階層の人々から多くの友人を持ち、尊敬された外国政治家はいない」と語っています。

一方、池田先生も同じく、「天下の事を自らの使命とする」という信念のもと、民間レベルの外交活動を重視してきました。民間交流を出発点として、一般の人々と連帯しながら、世界の平和を目指して行動してきたのです。中日関係について池田先生は、「国家と国家」ではなく、「民衆と民衆」に視点を置くことこそが、現状を突破する鍵であると確信していました。

こうした思想に基づき、1968年9月8日、池田先生は命を賭して「日中国交正常化提言」を公に発表しました。複雑に絡み合った中日国交正常化の問題に対し、演繹的な方法による解決を提示しました。まず両国の首脳が対話を通して平和に対する基本的共通認識を確認し、大局的視点と基本方針から協議を始め、それを実行に移した上で細部の問題に進むべきだと指摘したのです。

さらに池田先生は、中国問題解決のための「三位一体」の包括的構想を示しました。それは、①中日国交正常化の実現、②中国の国連における合法的地位の回復、③中日貿易の拡大という、相互に切り離すことのできない3つの要素から成るものでした。日本の著名な中国文学研究者・評論家である竹内好氏は、この提言について、「形式上は宗教団体内部での発言であるが、本質的には国民全体に関わる重大問題を提起したものであり、信仰の立場を超えた共通課題として受け止めるべきだ」と高く評価しています。

総じて、周総理と池田先生はともに、「中日両国が世代を超えて友好を保つための鍵は、両国人民の友好にある」という確信を共有していました。池田先生はこれを、「総理が最も重視していたのは第一に民衆、第二も民衆であり、日中友好においても『民衆本位』で推進していた」と語っています。この共通認識こそが、両者が中日世代友好という偉大な事業に尽力する精神的基盤となったのです。

中日国交正常化を進める具体的な過程においても、周総理と池田先生の知恵は随所に光を放ちました。なぜ公明党が中日友好のパイプ役となったのか。その発端は、松村謙三氏が池田先生を誘い、共に訪中することを提案し、「周恩来総理に紹介する」と明言したことにありました。池田先生は松村氏の期待を十分に理解していました。しかし、国交回復の推進は本質的に政治の領域であり、政治家でなければ効果的に動かせないと考えていました。また、自分が宗教者として文化大革命のさなかに中国を訪れることで、松村氏や中国側の友好関係者に迷惑をかけ、中日国交正常化という大事業に支障をきたすのではないかと案じていました。そのため、彼は丁寧に辞退し、代わりに自ら創設した公明党が旗振り役を担うことを強く望んだのです。

松村氏の紹介により、1971年6月に公明党代表団が初めて訪中を実現し、「中日友好協会代表団と日本公明党訪中代表団による共同声明」を発表しました。ここで示された「復交五原則」は、その後の政府間交渉の重要な指標となりました。その後、ニクソン大統領の訪中が発表された時、日本政府はまだ慎重な姿勢を取っていましたが、1972年7月の第3次訪中において、公明党が中日両政府間の連絡パイプとして機能し、田中角栄首相が、自ら代表団を率いて訪中する決断を下すことを後押ししました。政権発足から2ヶ月での訪中実現は、松村氏、池田先生、公明党などの水面下の推進があってこそその歴史的展開であったと言えるでしょう。

さらに、中日国交正常化の実現には、周総理の卓越した判断力が大きく寄与しました。例えば、公明党代表団が初めて訪中した際、交渉を担当した中国側は、共同声明に「米帝国主義への反対」を明記することを主張しましたが、公明党側は、それでは今後の交渉が立ちゆかなくなるとして受け入れを拒み、撤退を検討する事態となりました。代表団が荷物をまとめ、帰国を視野にいていたと伝えられています。この状況を知った周総理は、直ちに中国側の代表者を呼び寄せ、「最も重要なのは国交正常化であり、核心は台湾問題だ。彼らはこの点を明確にしているではないか」と指摘しました。これは、大局を重んじる周総理の知恵を如実に示すものでした。こうして決裂寸前だった交渉は収拾され、周総理は外交慣例を破り、交渉継続中にもかかわらず自ら公明党代表団と会見しました。

会見冒頭、周総理は「池田会長によろしくお伝えください」と述べ、代表団を驚かせました。そして、「公明党の結党以来、私はあなた方の主張にずっと注目してきた。中日関係に関して、あなた方には素晴らしい意見があり、我々も高く評価している。この度、私たちが皆さんをお招きしたのも、こういうところから出発しています」と述べました。この会見を契機に交渉は急転直下で合意に至ります。

1971年7月2日、両代表団は共同声明に署名し、「復交五原則」を正式に打ち出しました。これは、中国の唯一合法政府の承認、台湾問題の中国内政問題化、「日台条約」の破棄、米軍の台湾撤退、中国の国連における合法的地位回復などを明確にしたものであり、後の政府間交渉の土台となりました。

この過程を通じて、周総理と池田先生の友情もさらに深まりました。池田先生は宗教者として前面に立つことを控えましたが、中国側は彼が果たした決定的役割を十分に理解していました。

黄世明氏の回想によれば、池田先生の「提言」は交渉資料として配布され、公明党の五原則にもその思想が色濃く反映されていました。周総理が公明党代表団に最初に述べた言葉が、池田先生への挨拶であったことは、その象徴と言えるでしょう。

1970年代初頭に『朝日新聞』北京支局長を務めた秋岡家栄は、「周総理は、公明党代表団を池田大作会長の使者として見ていた」と述べています。

3. 大信伝世（大いなる信頼を後世に伝える）

周総理と池田先生の間には、まさに心からの深い信頼関係が築かれていました。その象徴的な出来事が、今からちょうど50年前の1974年12月5日夜に行われた会見です。重篤な病に伏していた周総理は、医師団の強い反対を押し切り、池田先生との会談に臨みました。本来は5分程度の予定であったにもかかわらず、会談は30分余りに及んだと伝えられています。

会談の中で周総理は、「池田会長は中日両国人民の友好関係の発展はどんなことをしても必要であるということを何度も提唱されている。そのことが私にはとてもうれしい。創価学会と公明党がその目標に向かって積極的に取り組んでおられるが、私たちがともに抱く願望に合致しています。中日友好が今日まで発展できたのは、私たち双方の努力の結果であり、そして、私たちはその努力をこれからも続けていくよう希望します」と語られました。

続いて周総理は、深い思いを込めて「20世紀最後の25年間は、世界にとって最も大事な時期です。お互いに平等な立場で助け合い、努力しましょう」と述べました。そして池田先生に向けて、「あなたが若いからこそ、大事につきあいたいのです」と言葉をかけました。

この会見に直接立ち会い、日本語通訳を務めた林麗韞氏も、20年以上が経過した今なお、その場面を鮮明に記憶していると語っています。彼女が強く印象に残った点として挙げているのは、第一に、両者が「相見雖晩、相知甚深（出会うのは遅かったが、長年の知己の如し）」という関係であったことです。会見冒頭、池田先生は周総理の右腕に手を添え、抱き寄せるようにその手を握っていました。周総理も池田先生を深く見つめ、心から喜んでいる様子だったといいます。会談中の2人は非常に打ち解け、初対面とは思えないほど自然で温かな雰囲気の中で語り合っていたと、林氏は回想しています。

第二に、病中の周総理が、池田先生の中日友好への貢献を高く評価し、中日関係、さらにはアジアと世界の平和についても熱心に語り続け、まるで池田先生に中日友好交流の未来を託しているかのようであったといいます。

この短い会見は、池田先生にも忘れがたい体験となりました。重病の身でありながら会見に臨んだ周総理の姿に心を打たれ、自らが担う責任の大きさを痛感したのです。池田先生は、この会見を、周総理が命の火が尽きようとするその直前に、命を賭して若い世代に伝えようとしたメッセージであったと受け止めました。その核心は「中日は世々代々友好を続け、永遠に戦争を起こさず平和を守り抜くべきだ」という強い願いでした。

池田先生は周総理について、「真に政治を理解した人」、「人々の心をつなぐ人」であったと評

しています。難題に直面しても、周総理はまず互いの心を開き、誠実で揺るぎない精神で問題解決にあたったからです。

1999年、私が創価大学を訪問した際、池田先生にお会いする機会があり、私は「周総理の言葉をどのように受け止めておられますか」と質問しました。すると池田先生は、「最も重要なのは互いの信頼であり、信義を貫くことです。人間としての相互理解と尊重を基礎に、共に未来を見据えていくことだと強く感じています」と語りました。

「民をもって官を促す」という周総理の姿勢は、日本に対する一貫した行動方針でもあり、常に民衆を中日友好の基盤に据えるという理念が、周総理の対話には貫かれていました。政治や経済の関係も重要ではあるが、それ以上に、民衆の意志を重視し、民衆同士の交流を深めてこそ真の相互理解が育まれる、というものでした。池田先生は、周総理から託された使命を深く自覚し、中日友好、さらにはアジアの平和と幸福のために尽くすことを誓いました。

このような経緯から、池田先生は1974年から1997年にかけて、10回にわたり中国大陆を訪問しました。国交正常化によって軌道に乗り始めていたものの、その基盤はまだ盤石とは言えませんでした。21世紀に向けた中日友好の希望は確かに芽生えていたものの、その輝かしい朝陽を迎えるためには、さらに多くの努力が求められていたのです。

そのため、中日友好の未来を左右する重要な時期に行われた池田先生の10回の訪中は、いずれも格別に大きな意味を持っていました。これら10回の訪中が、周総理が会見の際に特に強調した「20世紀の最後の25年間」という、世界にとって最も重要な時期に集中している点は、特筆に値します。文化交流や教育交流を主軸とした池田先生の10回の訪中は、まさしく周総理から託された「中日友好を推進する」という使命を、具体的に実践した歩みであたったと言えるでしょう。

さらに池田先生は、「文化交流は相互理解を育み、精神的交流は相互の信頼を生み出す」と確信していました。人民と人民の「心の交流」を育み、開拓していくことこそが、「不信と憎悪を、信頼と友情へと転換させる力になる」と考えました。

この理念に基づき、池田先生が指導する創価学会や創設した民主音楽協会、東京富士美術館、創価大学などの諸機関は、30年以上にわたり中日友好を目的とした多様な文化・教育交流活動を展開してきました。

こうした友好活動について、元中国駐日大使の陳健氏は次のように高く評価しています。「池田大作先生は、これまで何度も大規模な代表団を率いて中国を訪問し、両国の間に友好の“金の橋”を築かれた。また、教育・文化分野の交流にも並々な情熱を注がれた。創価大学は、日本で最も早く、新中国からの留学生を受け入れ、中日友好を担う人材の育成に大きく貢献された。これらの事実は、民間における教育と文化の交流こそが中日関係発展の重要な基礎であり、原動力であることを確実に示している」。

さらに池田先生は、中日友好を世々代々に伝えるため、日本の青年に大きな期待を寄せ、日本の青年が中国への理解や親しみを育み、中日両国の世代を超えた友好の基盤を築くことを、特に

重視していました。

池田先生はかつて、第一次の訪中の際、中国側から、誰と会いたいかと聞かれ、「青年に会いたい」と答えられたといいます。まさに政治家以上に偉大な教育者であられたといえます。「世々代々の友好」を築くことによってこそ、「明るい中日の未来」を開くことができる。その点において、周総理も池田先生も、常に最も重視していたのは青年でした。

私も南開大学の学生団体「周恩来・池田大作研究会（以後、周池会）」の教職員として、私自身も池田先生のこの思いを強く感じてきました。

2006年、周総理と池田先生の会見から32周年を迎えた際、南開大学において学生団体「周池会」を発足させました。同会は、次世代を担う青年たちが、周総理と池田先生の精神を受け継ぎ、中日友好、世界平和のために尽力できる人材へと成長することを目的としています。

池田先生は、周池会に参加する教職員や学生に向けて、これまで4回にわたりお手紙を寄せてくださいました。いずれも青年への深い期待と、周総理への敬慕の念に満ちたものでした。発足当初、最初にいただいたお手紙には、次のように記されています。「当時、周総理は40代の若い私に最大の礼を尽くしてくださり、『あなたが若いからこそ、大事に付き合いたいのです』と言われました。私も周総理への感謝と報恩の心を込めて、青年たちを重視し、共に行動してきました。私は、21世紀の世界の指導者となる皆さんが、周総理の人民のために全力を尽くされた崇高の精神を受け継ぎ、世界平和と日中友好の志のために戦っていくことより素晴らしいことはないと思います」。さらに、「皆さんが一堂に集いあうことは、21世紀の日中友好の新たな道しるべとなり、そして世界平和の新たな出発点となるでしょう。時間の経過につれ、皆さんが偉大な計画を推進され、ますます光彩を放っていかれることでしょう」と励まされました。

2007年1月2日には、周池会の学生が、池田先生の誕生日に際して、お祝いカードと、自作の会歌『私たちの誓い』を録音したテープをお贈りしました。それに対し池田先生より、「皆さんこそが、21世紀の日中友好と世界平和を担う若きリーダーです」との力強い激励の言葉が込められたメッセージをいただきました。

また、2015年に池田先生から寄せられたメッセージの中では、周総理と鄧穎超夫人が若き革命戦士として掲げた目標が「革心」と「革新」であったと言及しています。あらゆる悪を打破する力の根源として、新たな価値を生み出す「革新」を実現するには、精神を磨き鍛えていく「革心」が不可欠であるという洞察です。池田先生は、青年たちの対話こそが「明日の希望を響かせるメロディー」であり、青年の友情こそが「平和の絆を結ぶ鍵となる」と強調されました。

また、2015年12月5日、池田先生は南開大学周池会に向けてメッセージを寄せ、「南開大学の至るところに、私が尊敬してやまない周恩来総理の偉大な精神が息づいている。中日の青年たちが交流する姿には友誼と希望の未来が溢れています。周総理が、この温かな交流の様子をご覧になったら、どれほど喜ばれることだろうか」と励ましを送ってくださいました。この周池会は、周総理と池田先生が切り開いてきた事業を「未来に向けて若い世代が継承する」という使命を担っています。

4. 大愛永生（大いなる愛は永遠に生き続ける）

以上の考察から、周総理と池田先生の友情は、単なる個人的な親交にとどまらず、人類の平和という「大公の心」を持ち、多様な文化の中で調和ある世界を築こうとする「大いなる智慧」に溢れ、困難に直面したときに身を挺して行動する「大いなる勇氣」、そして違いを直視し、率直に交流することで築かれる「真の信頼」を体現していました。この「大公」「大智」「大信」の精神の背後には、常に「人民を最も大切にする」という大いなる愛の価値観が貫かれています。ここにこそ、周総理と池田先生の友情の神髄があると言えるでしょう。

周総理と池田先生の最も重要な共通点として、「人民根本」があります。お2人はそれぞれの関心や問題意識から出発しながらも、「一人ひとりの心の深い部分を豊かにしていく」という姿勢を持ち続けました。その歩みは、人々が幸せを実感し、平和へと向かっていく上で、実に大きな影響を及ぼしてきたと思います。

私が創価大学の学生や、創価学会の若い会員と接するたびに感じるのは、池田先生が若者一人ひとりにどれほど心を砕き、気をかけてこられたかということです。それは単なる普遍的な配慮ではなく、困難に直面する個々の胸に届くような、きめ細やかな配慮だったと強く思います。

池田先生は常に、「一人に寄り添う」ことを原点とし、その行き着く先は「人類の幸福」でした。人類の幸福のために力を尽くすことこそ、周総理と池田先生が生涯をかけて追求した目標だったのです。「人民がまず幸福でなければならない」という考えを中心に据え、民間外交を政府外交の壁を突破する重要な手段として重視されたのもそのためです。結果として、中日国交正常化という歴史的な偉業を成し遂げただけでなく、中日が世々代々の友好を築くための根幹と道筋を示し、未来に向けて平和と友好の扉を開かれました。

池田先生と周総理にとって、最終的なゴールは単に国交正常化ではありません。お2人が目指したのは、「世々代々にわたる永遠的な友好」であり、中日友好を世界平和の基礎とするという考えでした。その根底には、言うまでもなく「人民本位」の精神があります。

お2人の見据えていた「人民」とは、国家や民族を超えた「世界の民」であり、人類の平和的共生こそが最終目標でした。お2人は実践において、人間生命の尊厳を基盤とし、人と人の平等な交流と対話を道とし、国と国の相互尊重を橋渡しとして、人類運命共同体の構築へ向かう平和友好の道を模索されました。多くの民衆の力を結集することで、世界の秩序を正しい方向へ進められると考えられたのです。

今日、経済のグローバル化が試練に直面し、世界の構造と国際秩序が大きく揺れる時代にあります。この「百年に一度の大変局」にどう向き合い、危機の中から新たな機会を育み、変動の中で新たな局面を切り開くかは、人類の存亡に関わる極めて重大な課題です。この時代にあって、周総理と池田先生の平和友好の思想と実践を深く、体系的に総括し、その中核をなす人民本位の理念を明らかにすることは、理論的にも現実的にも極めて大きな意義があります。

人民本位の理念は、人類文明の本質を体現すると同時に時代の潮流を示すものです。周総理と池田先生が人類文明の進歩を導いた偉大な政治家であったことを鮮明に伝えます。またこの理念

は、国家・利益集団間に築かれた壁を打ち破り、平等で開かれた対話と交流の体制づくりに寄与します。広範な民衆の力を結集し、世界の秩序を協力と共生の方向へ押し進めることを可能にします。

トインビー博士との対談にも示されたように、21世紀は経済の一体化を基盤に、政治や文化の分野でも統合の突破口が求められる時代に入りました。周総理と池田先生の「世界市民」の視点には、人民・民族・人類を結びつけようとする一貫した理念が貫かれています。それは人類社会における政治的・文化的一体化を実現するための思想的基盤となっています。

昨年11月15日、敬愛する池田先生が逝去されました。私たちは「ポスト周・池田時代」に入りましたが、この重要な時期に創価大学を訪問し、周総理と池田先生の研究を進める皆様と交流できたことは、大変意義深いことです。

今後、周総理と池田先生の精神と遺産をどのように未来へ受け継ぐか。それを確かな形で次世代へ伝えることには大きな価値があります。今後さらにお2人の会見に込められた精神を学び、その理念を行動として体現し、世界と未来へ広げていくことが重要だと強く感じています。

今後とも皆さまのご支援とご指導を賜りたく存じます。本日は、私自身の思いも交えてお話しさせていただきました。誠にありがとうございました。

韓国における池田思想研究の展開と課題： 民衆幸福思想の視座から

三 浦 大 樹

1. はじめに

韓国において、創価学会および池田大作に関する本格的な学術研究は1990年代に始まり、徐々に蓄積されてきた。筆者の調査では、2025年末の時点で、累計約80本の関連論文、7冊の関連研究書が確認できる¹。その主要な領域、あるいは流れは、大きく2つに分類できる。第1に、新興宗教団体としての創価学会の特質や発展要因に特に注目する宗教学・宗教社会学的研究であり、第2に、多様な学問分野を基盤とし、池田の思想や活動を扱う研究である。本稿は、韓国における関連研究を詳細に整理・分類し、池田自身の韓国および日韓関係に対する思想的認識を分析視座として、今後の研究課題を提示することを目的とする。これらのテーマは韓国知識人との対話や挨拶の中で、彼が頻繁に取り上げたものであり、韓国社会での池田思想の現実的なイメージに大きく影響していると考えられるためである。

本稿では「池田思想研究」を、日蓮仏法および牧口・戸田思想を主な背景とし、人間および人類の現代的課題に応答する池田大作の思想的ビジョンを扱う研究として暫定的に設定するが、この定義の妥当性自体は別稿に譲る。本稿はできる限り広い範囲から関連研究を抽出し、韓国内での現実的な発展方向を検討することに焦点を当てる。したがって、文脈によってはより簡単な言い方として「創価・池田研究」とも表記する。この定義によるならば創価学会に関する研究はもちろん、日蓮・牧口・戸田研究そして人物論としての池田研究も、その裾野に含まれる。

本論は3部構成とする。次の第2節では、議論の背景として、韓国における創価学会（韓国SGI）の登場と発展を簡潔に紹介し、それに沿って展開した関連研究を体系的に分類する。第3

Hiroki Miura（韓国国立ソウル大学）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の分科会における発表内容に加筆修正を施したものである。

¹ 論文は1）韓国研究財団に登録および予備登録された学術雑誌の掲載論文（KCI論文）、2）韓国内研究者による英文学術誌の掲載論文、3）単行本に掲載された論文を含む。研究書は一般の学術書および博士論文のうち、創価学会を含む池田思想を単独で扱ったものに限定する。韓国SGIおよび関連機関の出版物と池田自身の著作物はここでは含めない。新聞や月刊誌の記事そして修士論文等も多数あるが、ここでは含めないこととする。

節では、池田の韓日友好活動および韓国人識者との対談を素材に、韓国および日韓関係に関する池田の思想的特徴を検討する。第4節では、このような思想的特徴が韓国における池田思想研究の類型別の内容や傾向に与える含意として、今後の重要な研究課題を提示する。

2. 韓国における創価学会の発展と創価・池田研究の6つの流れ

(1) 韓国における創価学会の発展

韓国において創価学会は1950年代後半に広まり始めた。当初は在日韓国人や日本に住む家族や知人等を通して済州島やソウル、大邱（テグ）などの各地域に信仰グループが散在する形となった²。ところが、その急速な発展に対し、1964年1月、韓国政府は日本の国家主義に追従する邪宗として布教禁止の方針を発表した。これは主に創価学会に対する誤解と当時の朴正熙政権の政治的思惑による³。日本からの財政支援を重視して日韓国交正常化を推進することに対し、国民的な反政府運動・反日運動が起きたのだが、その目をそらすためのスケープゴートとして創価学会を利用したのである。これに多くのマスコミや一部の学者・宗教関係者からも同調した⁴。この問題は1969年10月の大法院（最高裁判所に該当）の判決により、信教の自由は認めるが政府の対応は容認するという中間的な決着を見た。この事件で生じた社会的レッテルがその後韓国SGIを苦しめることになったが、実際には草の根の布教活動はより勢いを増し、日本の創価学会との協力関係も強まり、分散していたグループは1974年に韓国日蓮正宗仏教会としてまとまった。会員数に関しては、1970年代末には50万人、1980年代末に80万人、1996年には100万人を超え、2003年には約150万人に至った⁵。1970年代から全国的なボランティア運動としての国土大清掃運動や環境保護運動、図書贈呈運動、平和文化祭等を展開し、90年代からは大学生によるキャンパス平和文化活動、2000年代に入ってから小中高生対象の文芸祭等を毎年開催した。2000年4月には財団法人韓国SGIとして政府の認可を受けた。これらにより「完全ではないものの、そのイメージは徐々に変貌した」と指摘されている⁶。それを証明する指標として、1990年代後半

² 韓国SGIの発展史および組織の概要は多くの韓国語文献で整理されている。代表的なものとして朴承吉『현대한국사회와 SGI : 한국 SGI와 대승불교운동의 사회학』(現代韓国社会とSGI：韓国SGIと大乘仏教運動の社会学) テイル社、2008年；伊藤貴雄『한국 SGI 조직의 과거, 현재, 미래 : 인간혁명의 종교, 관성유포를 위한 조직』(韓国SGI組織の過去・現在・未来：人間革命の宗教、広宣布布のための組織)『新宗教研究』41集、2019年がある。日本語文献としては趙誠倫『韓国SGI運動の歴史と現況：朴政権下の苦難時代を中心に』『SOCIOLOGICA』42巻1-2号、2018年；李和珍『韓国SGIの展開と現況』宗教情報リサーチセンター編『海外における日本宗教の展開：21世紀の状況を中心に』宗教情報リサーチセンター、2019年、161-182頁。

³ 趙誠倫『1964년: 어느 종교 이야기』(1964年：ある宗教の話) 堂山書院、2019年。この日本語訳は趙誠倫『韓国1964年：創価学会の話』論創社、2024年。

⁴ 政府の方針を背景に、創価学会に対する批判的な学術論文が1960-70年代に複数発表されたことは事実である。しかし、これらは露骨な批判や誤解に基づく解釈が多いため、「本格的な研究」とは言い難い。

⁵ 韓国SGIの資料を基に研究者が発表した統計である。李元範・南椿模『한국속 일본계 종교의 현황』(韓国の中の日本系宗教の現況) 木旺社、2008年、136-137頁；趙誠倫前掲『韓国1964年：創価学会の話』181頁。

⁶ 李元燮『한국 창가학회의 내외적 갈등의 역사적 이해 : 절복 개념을 중심으로』(韓国創価学会の内・外的紛争の歴史的理解：折伏概念を中心に)『宗教学研究』38号、2020年、74-75頁。

以降、SGI 会長である池田に対して、国内の自治体から 82 の名誉市民証、高等教育機関から 20 の名誉学術称号、その他各種の文化・教育機関から 214 の顕彰・感謝状等が贈られた⁷。2009 年には国家勲章である花冠文化勲章も贈られた。2018 年に韓国政府がまとめた宗教調査によれば、自国民の約 43.9%が何らかの宗教を信仰し、仏教が 15.5%、プロテスタント約 19.7%、カトリック約 7.9%であるが、この中で信徒数約 150 万人を公称する韓国 SGI は人口比 3.2%を占め、国内でも有数の宗教団体である⁸。創価学会の国家別規模としては日本に次ぐものである。全国に 350 の地域文化会館を設置し、「日蓮仏法に基づき、社会の中で平和・文化・教育運動および隣人のための社会貢献活動を活発に展開し、幸福の価値を創造する大乘仏教団体」として成長している⁹。

(2) 創価・池田研究の 6 つの流れ

上記を背景とし、韓国において創価・池田研究が展開した。冒頭で紹介した主要な流れの内、宗教学・宗教社会学の研究は方法論あるいは研究意図の違いにより 3 つの類型に、その他の分野の研究も思想や活動の扱い方の違いにより 3 つの類型に細分化できる¹⁰。いくつかの研究は例外的な性格を有し、複数の類型に重複する。以下、各類型の概要と代表的な研究を要約する。

1 つ目は、1960 年代に登場した誤解や偏見とは距離を置き、主に「創価学会とは何であり、なぜ韓国内で発展したのか」を叙述的に説明する、宗教学・宗教社会学の基礎研究群である。具体的に 1990 年代から日本系の新興宗教に関する学術研究が発展したのだが、その一環として韓国 SGI も取り上げられた¹¹。先駆的な研究として、1994 年の朴承吉論文が挙げられる¹²。彼は日蓮仏教の教義を整理し、牧口に始まる創価学会の主要な歴史や日蓮宗との分離等を詳細に紹介した。後続の研究も含め、宿命転換や師弟不二そして地湧の菩薩や絶対的幸福等をその独特な思想として注目し、2008 年には『現代韓国社会と SGI』とのタイトルで単行本を出版した。これは創価

⁷ 韓国 SGI ホームページ「大韓民国顕彰」<https://www.ksgi.or.kr/ikeda/certification/certification2ksgi>.

⁸ 韓国政府文化体育観光部『宗教実態調査 2018』、2018 年、91 頁、99-122 頁。宗教別人口は人口センサス、宗派別信徒数は個別の団体調査によるため、両者の結果には違いがある。団体調査結果として信徒数 100 万人を超える宗教団体には、大韓イエス教長老会（2700 万）、キリスト教監理会（1330 万）、大韓仏教曹溪宗（1200 万）、大韓仏教太古宗（600 万）、カトリック韓国教区（580 万）、大韓仏教天台宗（250 万）、大巡真理会（160 万）、円仏教（120 万）、大韓仏教総和宗（119 万）、大韓仏教観音宗（110 万）がある。

⁹ 韓国 SGI ホームページ「소개」（紹介）<https://www.ksgi.or.kr/cgi/koreasgi/koreasgi01.ksgi>。

¹⁰ 英語圏の研究動向に関する分類方法も参考にした。Inukai, Nozomi. “Ikeda/Soka Studies in Education : A Review of the Anglophone Literature.”『創価教育』14 号、2021 年。

¹¹ 韓国には日本から天理教、本門仏立宗、キリスト教同信会、日蓮正宗、立正佼成会、PL 教団、霊友会等が流入し、その中で創価学会は圧倒的である。2003 年の日本系新興宗教に対する実態調査では、14 教団に約 200 万人の信徒が属することが確認されたが、その内 75%が創価学会員である。李元範他『한일 종교의 상호 수용실태에 관한 조사』（韓日宗教の相互受容実態に関する調査）報告書、2005 年、https://www.krm.or.kr/krmnts/link.html?dbGubun=SD&m201_id=10004635&res=y。

¹² 朴承吉「일본 신종교의 이해」（日本新宗教の理解）金鍾瑞・朴承吉・金洪喆著『현대신종교의 이해』（現代新宗教の理解）韓国精神文化研究院、1994 年、155-240 頁；朴承吉「창가학회의 국내 성장과 그 의의」（創価学会の国内成長とその意義）『宗教研究』10 号、1994 年。

学会の沿革や歴代会長の思想、中心的教義、韓国 SGI の歴史と活動等、広範な内容を含む。宗教学・宗教社会学における基礎研究はその後多角化し、最近では韓国 SGI の国内での平和運動や社会貢献活動を詳細に整理し、その教義的基盤や韓国市民社会の中に溶け込んだ実践的特徴を解説した研究もある¹³。

2 つ目は、基礎研究の流れから派生した宗教学・宗教社会学の実証的研究群である。代表として李元範を中心とした一連のプロジェクトが挙げられる¹⁴。彼らは 2000 年代に入ってから 2 度以上にわたり、韓国内の日本系新興宗教に対する大規模な実態調査を行い、韓国 SGI に対しても約 1000 名をサンプルとして調査した。その結果として、特に創価学会員は他宗教よりも入信後の生活満足度や信仰心の水準が高い点を確認し、複数の論文を通してその主要な発展要因を次のように挙げた¹⁵。1) 即効性のある現世指向主義、2) 単純明快な宗教実践、3) 和光新聞（聖教新聞の韓国版）の配布等のきめ細かな布教活動、4) 家族の中での祖母や母、妻、姉等の女性からの布教の影響、5) 小グループとしての座談会の活用、6) 組織的かつ現地化した人材育成システム、7) 戸田や池田が進めた「形式からの脱皮」などである。調査に参加した諸点淑は結論として、韓国 SGI は既存の仏教やキリスト教とは異なる宗教的価値観を持ち、「座談会や体験談・唱題等を通して会員自らが人生の重要性を生活の中で認知し、平和な人生を希求する意志が何よりも強い」と指摘した¹⁶。また、調査メンバーの金炫石は 2022 年に韓国 SGI を正面から扱った、国内初の博士学位論文を発表した¹⁷。同論文で彼は「韓国 SGI 総論」を目指し、日本及び韓国での創価学会の展開や 3 代会長の思想と行動、そして上記調査に基づく会員の実態分析結果と全国の文化会館の活用状況等を網羅した。その他の実証的研究の取り組みとしては和光新聞における高齢者の体験談シリーズ（9 編）を素材に、テキスト分析を通して、宗教活動が与える教育・老化緩和

¹³ 劉光錫「한국창가학회와 국제창가학회의 평화주의에 대한 비교연구: 종교유형론적 관점에서」(韓国創価学会と国際創価学会の平和主義に対する比較研究: 宗教類型論的観点より)『新宗教研究』46 号、2022 年; 李銀善「한국 SGI 공익활동의 현황과 사상적 배경」(韓国 SGI の公益活動の現況と思想的背景) 劉光錫・金鐘萬編著『시민사회 맥락에서 한국 SGI 이해』(市民社会の文脈における韓国 SGI の理解) 茶山出版社、2025 年、202-242 頁。

¹⁴ メンバーは李元範・朴承吉・趙誠倫・南椿模・諸点淑・李賢京・車次錫らであり、2016 年の調査には金炫石も加わった。プロジェクト・タイトル（日本語訳）および調査時期は次の通りである。「韓日宗教の相互受容の実態に関する調査（2003～2004 年）」、「日本大衆文化の開放に伴う日本系宗教の教勢および受容者意識の変容に関する調査（2004～2005 年）」、「韓国における日本系宗教の流入と土着化の過程に関する調査研究（2016～2019 年）」。

¹⁵ 調査結果の一部を日本の学術誌に掲載したものもある。李元範・南椿模「韓国における日本系宗教信者の意識と態度変容に関する調査」『宗教と社会』12 号、2006 年。

¹⁶ 諸点淑「한국 SGI 회원의 종교적 가치관과 생활 만족도에 관한 연구」(韓国 SGI 会員の宗教的価値観と生活満足度に関する研究)『大東文化研究』120 集、2022 年、365 頁。

¹⁷ 金炫石「한국 SGI 종교조직과 활동에 관한 사회학적 연구: 조직화 과정과 문화회관의 활동을 중심으로」(韓国 SGI の宗教組織と活動に関する社会学的研究: 組織化過程と文化会館の活動を中心に) (韓国東西大学博士論文、2022 年)。

効果を7領域28項目にわたって検証した研究もある¹⁸。

3つ目は、創価学会の思想や運動を別の理論的観点から創意的に再解釈する宗教学・宗教社会学上の発展的研究群である。主要なものを挙げると次の通りである。1) 上述した朴承吉は韓国 SGI が公共的宗教 (public religion) へ変容していると見た¹⁹。これは宗教社会学においてホセ・カサノバ (J. Casanova) らが主張する概念であり、現代社会の変化に伴い、伝統的な宗教がもはや私的領域に留まらず、公共的問題や公共的価値へと関心と関与を拡大し、政治や経済の道德化を促すというものである。彼は韓国 SGI の平和・文化・教育活動がまさにこの概念に該当し、これに対する池田の役割を転換的リーダーシップ (transformative leadership) として評価した。2) 金容煥は日蓮の『御書』や池田の様々な文献を参照した多くの論文を通して、SGI を「幸福協創」の組織と説明した²⁰。それは現代社会において個々の生命をより良く活かす「活命連帯」を推進し、公共哲学 (public philosophy) で言うところの「活私開公」(単なる共同的価値の追求ではなく、個々人の変革や智慧を通して、公共的価値を新たに創造すること) を実践していると指摘した。3) 劉光錫や金鐘萬、金恩基等は主要な対談集や『法華経の智慧』等の教学講義等の文献を参考に、創価学会の理念や池田思想が、代替的な宗教的エコロジー思想として重要である点に注目している。西洋における2つの生態神学 (ecothology) の傾向、つまり自然を道具と見る「人間中心主義」と、キリスト教を中心に諸宗教や人間の質的違いを論じる「神中心主義」に対する第3の思想として、生命次元の平等や開かれた宗教、世界市民教育を目指す池田の多面的宗教観 (multifaceted religiosity) や仏教的環境主義に注目し、その本質的意味や役割および限界を探求した²¹。4) 金在榮はユングの深層心理やデューイの「宗教的なもの」の概念の実践的活用を論じたウィリアム・ジェームス (W. James) が主張するところの、宗教心理学者としての特徴を池田に見出した²²。その主要な役割とは、個々人が宇宙生命として深い次元で繋がっていることを、巧みな比喩や言葉・対話によって人々に喚起させることである。

4つ目は、様々な学問分野に基盤を置き、池田思想の全体的および中心的な特徴を捉えようとする包括的研究群である。これに関しては、「平和」をキーワードとする政治学やその他社会科学的研究が中心である。1) 朴祥弼は池田平和思想を現代平和学で言う積極的平和概念、すなわち「武力を使用した戦争や紛争の不在のみならず、自由・人権・福祉・環境等に対する保障を通

¹⁸ 李允眞 “학습 관점에서 본 종교활동을 통한 성공적 노화 경험에 관한 연구: 한국 SGI 고령 회원을 중심으로” (学習の観点から見た宗教活動を通じた成功的な老化経験に関する研究: 韓国 SGI の高齢会員を中心に) 『宗教研究』85集2号、2025年。

¹⁹ 朴承吉前掲『現代韓国社会と SGI』(注2) 309-360頁。特にこの第5部 “공공정교로서의 창가학회와 한국 SGI” (公共宗教としての創価学会と韓国 SGI) にて論じている。

²⁰ 金容煥 「한국 SGI 의 공공 행복 연구」 (韓国 SGI の公共幸福に関する研究) 『宗教研究』77集2号、2022年。

²¹ 金鐘萬 「종교 생태사상에 대한 이론적 연구: 이케다 다이사쿠의 생태인식을 중심으로」 (宗教生態思想に対する試論的研究: 池田大作の生態認識を中心に) 『新宗教研究』42集、2020年; Yoo, Kwang Suk & Hyun Woo Kim. “Understanding Faith-Based Ecological Citizenship: A Case Study of Korea Soka Gakkai International (KSIG).” Religions 14-11(2023); Kim, Jongman & Andrew Eungi Kim. “Religious Pluralism and a Study on Daisaku Ikeda’s Thoughts on Interreligious Dialogue.” Religions 15-12(2024).

²² 金在榮 “宗教心理学者としての池田大作: その素描” 『東洋哲学研究』57巻2号、2018年。

して実現する安楽な生活状況」の枠で認識した上で、SGI 記念提言のテキストをデータとしたキーワード分析を通じ、社会的倫理観が最も重要視されている点を解明した²³。2) 金銖甲もまた積極的平和の観点からアプローチし、池田思想は戦争の不在だけでなく、身体や心・靈魂の状態としての内的平和、そして地球上の全人類および国家の幸福・自由・平和が保障された理想的な状態を目指すものと見た²⁴。3) 呉永達は池田思想の中で特に平和の重要性に注目し、その特徴を法華経で説く一念三千論や十界互具論、そしてインド・ギリシャ哲学における唯識学等に基づく人間論を基盤とする「人間主義」とし、それは「究極的に人間の共同体である国際社会において、人間生命の尊重を通じた平和の成就を目指す」点において、韓国の慶熙大学創立者である趙永植の「人間中心主義」に通じると結論した²⁵。これら以外でも、平和をキーワードとする研究は、提言や大学講演を中心に参照しつつ、やはり包括性を目指す傾向が見られる²⁶。また少数ではあるが、創価学会が母体となり設立された公明党を題材とする研究があり、王仏冥合や中道概念等を創価・池田の平和思想の特徴として列挙した²⁷。

5つ目は、様々な学問分野に基盤を置き、特定のテーマに絞って池田思想を探究する個別的研究群である。韓国においてもやはり創価教育に関する研究は多い²⁸。しかし、その多くは理論的で解説的なものであり、日本や英語圏で蓄積されているような、実際の教育的実践結果を検討する性格ではない。その他の分野としては、池田の平和教育や創価大学の世界市民教育²⁹、芸術や

²³ 朴祥弼「이케다 다이사쿠의 평화사상의 배경과 평화실현 방법」(池田大作の平和思想の背景と平和実現方法)『日本研究叢書』45号、2017年。

²⁴ 金銖甲「평화추구의 사상과 실천」(平和追求の思想と実践)河峽愛編著『조영식과 이케다 다이사쿠의 평화창출 리더십』(趙永植と池田大作の平和創出リーダーシップ)韓国学術情報社、2025年、28-47頁。

²⁵ 呉永達「미원조역식과 이케다 다이사쿠의 평화론의 사상적 기초: 인간(중심)주의를 중심으로」(美源趙永植と池田大作の平和論の思想的基礎：人間中心主義を中心に)『OUGHTOPIA』37巻1号、2022年。

²⁶ 河峽愛「조영식과 이케다 다이사쿠의 평화운동실천의 비교연구」(趙永植と池田大作の平和運動の実践に関する比較研究)『平和学研究』16巻5号、2015年；林正根・三浦大樹「이케다 다이사쿠의 평화사상과 지속가능개발」(池田大作の平和思想と持続可能な開発)『人文社会 21』7巻4号、2016年。

²⁷ 白昇憲『종교정당 공명당과 중도주의』(宗教政党公明党と中道主義)トゥナム社、2002年；趙誠倫「헐거운 브레이크: 창가학회와 공명당의 관계」(ゆるいブレーキ：創価学会-公明党関係)『宗教文化批評』29集、2016。

²⁸ 河峽愛『조영식과 이케다 다이사쿠의 교육사상과 실천』(趙永植と池田大作の教育思想と実践)韓国学術情報社、2016年；李允眞・金南淑「마키구치의 소카교육론에 대한 연구」(牧口の創価教育論に関する研究)『教育問題研究』70号、2019年；金保延「이케다 다이사쿠의 창가교육 관점에서 본 교육과 문화예술의 본질적 가치」(池田大作の創価教育の観点による教育と芸術文化の本質的価値)河峽愛前掲『趙永植と池田大作の平和創出リーダーシップ』(注24)221-237頁；李允眞「마키구치의 교육사상을 통한 교육에서 행복의 방향성 탐색」(牧口教育思想を通じた教育における幸福の方向性の探求)劉光錫・金鐘萬前掲『市民社会の文脈における韓国SGIの理解』(注13)333-367頁。

²⁹ 俞在永「이케다 다이사쿠의 평화교육에 대한고찰」(池田大作の平和教育に対する考察)河峽愛編著『조영식·이케다 다이사쿠의 평화사상과 계승』(趙永植・池田大作の平和思想と継承)韓国学術情報社、2018年、222-254頁；申賢貞・全攸鎬「소카대학(創價大學)의 세계시민교육에 관한 연구」(創價大学の世界市民教育に関する研究)『韓国日本教育学研究』25巻2号、2020年。

文化等がある³⁰。前述した諸点淑・金炫石はSGIの文化・教育活動、「文化会館」の活用状況、オン・オフラインでの書籍や映像、イベント等のコンテンツ配信等を調査し、その基盤として牧口・戸田・池田の文化・教育思想を関連付けている³¹。西洋政治哲学を専門とする徐東恩は「生命哲学」分野として、池田思想をキルケゴール哲学やシュバイツァー神学と比較した。彼の「池田の生命思想と師弟不二の解釈学」というタイトルの論文では、神（聖書）・仏（法華経）という師に対して、弟子が精神的直観能力としての実践意志（volition）により、それを信解（解釈）し、行動することによって、神・生命の一体性としての師弟不二が成立するという図式を、池田とシュバイツァーに共通して見出せるとした。

6つ目は、様々な学問分野に基盤を置き、個々の学問的テーマに関する研究のために池田思想を活用する間接的研究群である。活用の仕方や水準はそれぞれの研究で大きく異なるが、池田思想の拡張の可能性や課題を深めるという点で、意義のある研究類型である。ただ、このタイプの論文や研究書を正確に特定・抽出することは難しい。確認できるものとして、朴鍾茂や鄭榮植は法華経や仏教思想の理解を深めるために、池田思想や創価学会の出版物を活用した³²。鄭世喜は分断された朝鮮半島における南北環境協力をテーマとする研究において、池田が国連提言において提示した「目的・責任・行動の共有」というビジョンを考察の指標として活用した³³。李允眞による韓国SGIの高齢会員に関する研究は、宗教学の学術誌に掲載された実証的研究ではあるが、実質的内容としては生涯教育をテーマとし、SGIを事例として活用した間接的研究でもある³⁴。

(3) 研究基盤の動向および憂慮される点

以上、韓国における創価・池田研究の主要な6つの類型を整理した。関連することとして、研究基盤の動向および憂慮される点を少々追記する。まず、基盤として、韓国宗教学会では2015年以降、毎年の学術大会においてSGI特別セッションを設けている。SGI会員および非会員の研

³⁰ 孫希姪「이케다 다이사쿠와 도쿄후지미술관」(池田大作と東京富士美術館)河映愛前掲『趙永植・池田大作の平和思想と継承』(注29)255-287頁；三浦大樹「이케다 다이사쿠의 문화사상：인간과 사회의 내재적 변혁」(池田大作の文化思想：人間と社会の内在的変革)『社会思想과文化』23巻3号、2020年；金度希“SGI 교리와 문화운동：음악 관련 활동을 중심으로”(SGIの教理と文化運動：音楽関連活動を中心に)『종교와사회』(宗教と社会)13巻1号、2025年。

³¹ 諸点淑「일본 신종교의 문화사업과 콘텐츠：일본 창가학회의 활동을 중심으로」(日本新宗教の文化事業とコンテンツ：日本創価学会の活動を中心に)『新宗教研究』39集、2018年；金炫石前掲『韓国SGIの宗教組織と活動に関する社会学的研究』(注17)。

³² 朴鍾茂「21세기 문명과 동아시아：한중일 3국과 생명존엄」(21世紀文明と東アジアの精神文化：韓中日3国における生命尊厳)河映愛編著『문화세계의 창조와 세계시민』(文化世界の創造と世界市民)韓国学術情報社、2022年、142-186頁；鄭榮植「한일 양국의 근대불교와 신흥종교의 성립에 관한 비교연구：법화경신앙을 중심으로」(韓日両国の近代仏教と新興宗教の成立に関する比較研究：法華経信仰を中心に)『한국사상과 문화』(韓国思想と文化)46号、2009年。

³³ 鄭世喜「평화를 향한 한반도의 지속가능한 개발：환경인식과 행동의 공유」(平和に向けた朝鮮半島の持続可能な開発：環境認識と行動の共有)河映愛編著『조영식·이케다 다이사쿠의 생태문명과 평화운동』(趙永植・池田大作の生態文明と平和運動)韓国学術情報社、2023年、125-151頁。

³⁴ 李允眞前掲「学習の観点から見た宗教活動を通じた成功的な老化経験に関する研究」(注18)。

研究者が宗教学分野の研究を発表・討論している。近年、このようなスタイルが韓国新宗教学会のような他の宗教関連学会へと波及している。2016年には慶熙大学において趙永植・池田大作研究会および宗教市民文化研究所が設立された。前者は様々な研究分野の教員や関連研究者が運営し、韓国 SGI 学術部と共に、毎年、趙永植・池田大作平和フォーラムを共催している。後者は生態宗教、つまり、生命の存在を含めた地球全体のエコシステムに対する宗教的理解をテーマに活発な研究を行っている³⁵。特に、現代の気候変動の危機を乗り越えるためには、生命観や宗教観・市民観の改革が必要であると認識し、池田思想にその方向性を見出している。同研究所と韓国新宗教学会は、2025年10月ソウルにて「池田思想学術大会」を開催した。これは池田思想を単独で行事名に冠したものとしては、韓国初である。これら複数の機関の努力により、近年では少なくとも3～6編程度の関連研究が毎年発表されている。量的な規模では日本や英語圏・中国語圏には及ばないが、様々な学問分野にわたり、SGI 会員の研究者とそうでない研究者が共に議論しながら研究の土壌や領域を作り上げている点に韓国的特徴が認められる。

次に、多少憂慮されることとしては、次の点が指摘できる。第1に、朴祥弼（平和学と宗教学）や劉光錫（宗教学と市民社会論）のように、個人レベルで学際的研究を進める研究者もいるが、全体としては、似たような研究における相互の参照や積み重ねがまだまだ弱い点が挙げられる。独自性や多様性を追求することは研究発展の動力とはなるが、学術大会の討論等で頻繁に指摘されることは、既存研究との関連付け不足や学際的な相互協力の必要性である。第2に、批判的・論争的ではない研究展開が挙げられる。例外もあるとは言え、研究動機や意義に関して、新興宗教としての韓国 SGI の急速な発展に関する情報の少なさ、あるいは韓国の学術界において池田思想がほとんど知られていない点を挙げる研究が大多数である。つまり、文献としての希少性や領域としての斬新さを研究の強みとして掲げる傾向が、今のところ非常に強い。量的な発展の後に派生する質的転換、要するに、根本的な学術的疑問の提示や批判的な議論等が今後増えていくだろうと予測できる。この点に関し、日本にあふれている反創価学会的な書籍や偏見または批判的な研究はほとんど参考にされていない。この背景としては、1960年代の政府とマスコミが一体となった政治的弾圧に対する反省が活かされているとも言えるが、それら日本の事情自体があまり知られていない。また上記の点に関しより重要なことは、韓国社会および学術界の中でキリスト教の広がり根強いことであろう。つまり、キリスト教との対比としての本格的な宗教論争を呼ぶほどに、創価・池田研究が注目されているとはいえない。徐東恩論文のような先駆的な試みがすでにあるが、池田思想とキリスト教との比較がどのように展開するかは、今後の研究展開に大きな影響を与えるであろう。次節において、池田思想の特徴自体を再解釈した上で、より内容的な観点かつ前述した研究類型に即した形で、今後の研究課題に再び立ち戻ることにする。

³⁵ 宗教市民文化研究所英語ホームページ参照。https://ircc-khu-en.imweb.me。劉光錫・金鐘萬・金恩基等の論文は同研究所のプロジェクトの結果である（注21）。同研究所の研究叢書として編纂された『市民社会の文脈における韓国 SGI の理解』（注13）は韓国政府教育部（文部科学省に該当）により、2025年度の宗教部門の優秀学術図書（世宗図書）に指定された。

3. 池田大作の韓日友好活動と日韓関係観

(1) 池田大作の韓日友好活動

池田は「兄の遺言であった中日友好」活動をより広げる文脈において、「父の念願であった韓日友好」活動を1980年代末に開始した³⁶。前者を金の橋、後者を宝の橋と、一貫して形容してきた。韓国への訪問は3度であり(1990年9月、1998年5月、1999年5月)、それと前後する形で多くの韓国人識者と対談した。大学や自治体からの学術称号や名誉市民証等の授与も、このタイミングで急増した。ところで、韓国・朝鮮半島の歴史や文化に関する池田の発言や考察自体は1960年代に始まり、小説や随筆・挨拶等に記された。1983年に始まったSGI記念提言でも、朝鮮半島の分断問題や北東アジアの地域協力を主要テーマとして何度も取り上げた。何よりも、1960年代からその逝去に至るまで、在日韓国人、留学生、在韓日本人、そして韓国SGI会員らに対して無数のメッセージを送り続けた。これらが全体として、池田の韓日友好活動または韓日対話を形成している。

具体的には、対談集を出版したのは趙文富(元済州大学総長)1人であるが³⁷、対談内容が随筆や新聞記事として掲載された人物としては、趙永植(慶熙大学創立者)、李壽成(元首相)、李寿晤(昌原大学総長)、権彝赫(国立韓国教員大学総長)がいる。その他にも李建熙(サムスン・グループ会長)、申鉉禧(元首相)、鄭宗澤(忠清大学学長)、済州大学や慶熙大学の訪問団とも懇談した。また、その著作を池田が詳しく紹介し、書簡の交換や出会いがあった人物として、李御寧(作家、文化部長官(文部科学大臣に該当))、趙廷來(作家)等がいる。それらを土台として池田は、韓国の自然・地理・歴史・文化を地方レベルに至るまで細かに認識し、6つの長編詩で繊細に詠った³⁸。挨拶や随筆等で言及した韓国・朝鮮半島の歴史的人物は20名以上に及ぶ³⁹。これら対談・挨拶・人物考・詩・提言等を特集した本や小冊子が韓国語でいくつも翻訳・発行されており、韓国内に

³⁶ 国立韓国教員大学権彝赫総長との対談(1987年1月31日)池田大作『인간혁명의 세기로: 이케다 다이사쿠 선집』(人間革命の世紀へ: 池田大作選集)中央日報J & P、1999年、17頁。

³⁷ 池田大作・趙文富『希望の世紀へ 宝の架け橋: 韓日の万代友好を求めて』徳間書店、2002年および池田大作・趙文富『人間と文化の虹の架け橋: 韓日の万代友好のために』徳間書店、2005年。

³⁸ 「無窮花の国から: 韓国教員大学総長権彝赫先生に贈る」(1987年8月3日); 「新しき千年の黎明: 慶熙大学創立者趙永植博士に贈る」(1997年8月); 「大恩の宝土 心清き大人: 韓国・忠清大学鄭宗澤学長に贈る」(1998年7月); 「三麗三寶の平和の島に 麗しき心の宝: 済州大学趙文富学長に贈る」(1999年1日); 「四季の調べ 民衆の賛歌 文化の大恩人の国 尊敬する韓国の友に贈る」(1999年4月11日); 「敬愛する韓国の同志に捧ぐ」(2000年7月17日)。

³⁹ 主要な人物としては安昌浩・柳寛順・金マリア・金九・尹貞媛・韓龍雲・咸錫憲・安重根(以上、独立運動家)、世宗・金庚信・李舜臣・呂運亨(以上、将軍・政治指導者)、洪世泰・李滉・李珥・申師任堂・朴趾源・丁若鏞・姜沆・申維翰・尹東柱・羅憲錫(以上、学者・文化人)、崔承喜・金容植(以上、芸術家・スポーツ選手)等がいる。

において池田の韓日友好活動の文献は既にある程度まとまっている⁴⁰。

スピーチやメッセージ、対談等、入手可能な文献を全体的に見渡すと、その内容としては次の4つが挙げられる。1) 韓国・朝鮮半島の歴史・文化・社会等を、日本または日本人への教訓として論じたもの、2) 韓国の歴史上の人物や出来事等を通して、正義・勇気・団結・友情等の普遍的価値や人格そしてそれを育む文化と教育の重要性を、一般的な観点から論じたもの、3) 世界平和を構築する上での韓国・朝鮮半島問題や日中韓の地域的協力等の重要性を論じたもの、4) 世界市民や日蓮仏法の信仰者としての、個人や組織の成長を激励したものである。広く見るならば、普遍的価値や信仰に関するものと、世界平和の中での日韓の課題や役割を広く論じたものとに分類できるが、1つの挨拶や詩の中にこれらすべてが圧縮している場合もある。以下に、そのような重複性を手掛かりに、池田の日韓関係観に関するエッセンスを読み取ってみる。

(2) 池田大作の日韓関係観

池田は日韓関係に関し様々な政策的議論を展開し、刻々と変わりゆく世論も注視しているが、それ以上に掘り下げているのは、近現代の日韓関係を悪化させた根本的問題である。これに関し彼は、日本社会に繰り返し蔓延してきた、アジアに対する差別意識を一貫して主張してきた。

“現在、韓国と日本の間に横たわっている問題は、一面では、二十世紀の人類全体が残してきた問題の縮図と言えます。歴史教科書の問題、従軍慰安婦の問題、在日韓国・朝鮮人の人権問題などは、次の世代に持ち越してはならない課題です。今こそ、解決への手を打っていかねばなりません。問題の根底には、人間が本能的に持ち合わせている「差別意識」、あるいは「マイノリティー（少数派）への優越感」などが含まれております。それらは今なお戦火を交える世界各地の紛争にも、共通した底流ではないかと思います⁴¹。”

“今、真の「韓日友好の花」を育てるためには、どうしても公正な歴史認識が不可欠なのである。過去の権力者が日本人の体内に植えつけた「隣邦の民族への偏見」という毒草を、徹底的に駆除し、根絶しなければならない。そうしなければ、日本人の人間性の回復はできないだろう。韓日友好は、だれのためでもない。第一に、日本人自身の魂の浄化のためなのである⁴²。”

⁴⁰ 池田大作前掲『人間革命の世紀へ：池田大作選集』（注36）；『평화의 아침：SGI 회장이 말하는 한국 독립 열사들』（平和の朝：SGI 会長が話す韓国の独立烈士たち）韓国 SGI、2010 年；『감사합니다 한국』（ありがとう韓国）朝鮮ニュースプレス、2012 年。池田の韓国関連の主張や行動をまとめた日本語文献としては尹龍澤「在日韓国人の地方参政権問題についての一考察：池田大作先生の人権思想を知る一つの手がかりとして」創価大学通信教育部学会編『創立者池田大作先生の思想と哲学』1 巻、第三文明社、2007 年、212-226 頁。

⁴¹ 趙文富・池田大作前掲『希望の世紀へ 宝の架け橋』（注37）262 頁。

⁴² 池田大作「人生は素晴らしい：第5回李寿晤昌原大学総長」『聖教新聞』2002 年 5 月 25 日付 1 面。

差別意識を根底として、近現代において韓国・朝鮮半島に対する日本の偏見や無視・無関心そして偏狭な国家主義が醸成されてきたという。では、なぜ日本社会にこのような意識や態度が再生産されてきたのか。池田は明治以降の脱亜入欧路線という日本政治の大枠も問題ではあるが、より重大なこととして、人間性を軽視した歪曲された教育、さらにその背景にある、哲学の不在を根本的な原因と見ている⁴³。そして、この哲学の再構築を日韓関係の課題のみならず、日蓮仏法を信仰する創価学会が目指す普遍的目的として捉えている。例として、忠清大学からの名誉教授推戴式と創価学会7・3記念幹部会を同時開催した際の池田のスピーチでは、師匠である戸田が戦時中に信教の自由を固守したために投獄された体験を踏まえて、日韓関係の根本的問題の解決と創価学会の目指すべき道を、次のように明確に結びつけている。また代表作『新・人間革命』の中でも、在日韓国・朝鮮人が抱える日本での生活の困難さに関し、その解決と創価学会の理想とを深く結びつけている。

“獄中体験のいちばんはじめに描かれた出来事は、いったい何であったか。それは、罪もない貴国の一人の青年が、理不尽に侮辱され、拷問されている光景だったのであります。文化の大神ある隣国の民衆を、日本の国家権力が、いかに非道に苦しめて続けたか。この罪は、永遠に消えるものではありません。戸田先生は、血涙を絞りながら、憤怒しておりました。思えば、牧口先生も、貴国に国家神道の信仰を強制した日本の傲慢に激怒し、対決していました。創価の人権闘争は、貴国はじめアジアの民衆と、最も深く強く連帯するところから出発しているのであります。(中略)要するに、日本の「国家主義」に屈服しない、確かなる「人間主義」の平和勢力を拡大していく以外にありません。そうでなければ、真の「韓日友好」もあり得ないし、アジアとの本当の信頼関係も結べない。また、日本は世界の孤児となって苦しむことになるでしょう。その意味からも、日本の柱たる創価の正義の連帯は、いよいよ力強く、いよいよにぎやかに、すべてを勝ち越え、乗り越え、断じて勝利の前進をしてまいりましょう⁴⁴。”

“戦後の、日本政府の在日韓国・朝鮮人への冷酷な対応もさることながら、日本人の根強い偏見と差別の意識も変わらなかった。(中略)彼(戸田、筆者注)は、常に民衆の幸福を念願していた。それが、創価学会の目的であった。学会が弘めんとする日蓮仏法は、人種、民族、国籍、性別、年齢等のいかにかわらず、すべての人が、必ず幸福になる方途を説き明かした生命の法理であるからだ。すべての人が幸福になる権利をもっている。いな、最も

⁴³ 池田大作「恒久平和へ対話の大道を」第11回「SGIの日」記念提言、1986年、『池田大作全集』1巻、聖教新聞社、1988年、163-192頁；慶熙大学名誉哲学博士号授与式での池田の挨拶（1998年5月15日）『池田大作全集』53巻、聖教新聞社、2008年、140-146頁。

⁴⁴ 韓国・忠清大学名誉教授推戴式兼7・3記念幹部会での池田のスピーチ（1998年7月4日）。池田大作『池田大作全集』89巻、聖教新聞社、2001年、227-229頁。

苦しんだ人こそが最も幸せになる権利がある。それを実現してきたのが創価学会である⁴⁵。”

社会的問題の温床としての人間性に関する哲学の不在と日蓮仏法的重要性を、韓国・朝鮮半島問題に即して深く論じたものとして、戸田が1951年5月に発表した「朝鮮動乱と広宣流布」という論文がある。戦時の日本および朝鮮半島にて、なぜ戦争の災禍が繰り返されたのかの問題に対し、戸田は仏法の観点、特に法華経および日蓮の『立正安国論』で説かれた「仏の不在」という観点・教義から考察し、「この騒乱のすがたこそ、日蓮大聖人の仏法が東洋に広宣流布する兆し」であるため、「かつて仏法を我が国に伝来させた朝鮮に、大聖人の仏法を渡そうではないか」との実践的結論に至った⁴⁶。池田はこれに対する熟考を経て、日本の敗戦から朝鮮戦争そしてサンフランシスコ講和条約へと至る戦後処理に関する考察の結論として、「人間の一念を転換し、仏の生命を顕現していくことが平和建設の要諦」であるとした⁴⁷。これらの点から、池田の朝鮮半島情勢に対する言及や日韓関係観は、個別・独立したイシューとして形成されたものではなく、彼の思想の本体・本質と深く結びついていることが分かる。

日韓関係が向かうべきビジョンに関しても池田は、民衆の幸福を目的とすることをまず強調し、国家・地方・社会等、多様なレベルでの対話や交流拡大の必要性を指摘してきた。特に、人間の善の側面を引き出すための文化交流・教育交流の重要性を何度も強調した。そして、重要なポイントとして、このような日韓交流がアジア・世界へのモデルになる点を訴えてきた。

“大学こそ、国家も、民族も、文明も、思想・信条も、ありとあらゆる差異を超え、「生命の尊厳」という最も高い次元から、英知と人道の結合を、未来へ広げゆく究極の人間連帯の広場なのであります。尊敬する慶南大学の先生方と手を携えながら、無限の希望に燃えて、民衆の幸福の道を、世界市民の共生の道を、人類の平和と繁栄の道を、共に開いていこうではありませんか⁴⁸。”

“韓日友好とは、単に二国間の関係性を指すものではなく、その帰結がそのままアジアの安定と世界平和へのモデルとなり、世界市民の在り方への大いなる示唆となることは、間違いありません。両国のこれからの歩みを、世界が注目しているからです⁴⁹。” “韓日両国が、さらに友好を深めながら、互いの文化の善の力をさらに発揮し合っていくことは、必ずや世界の文化を豊かにする一助となっていくと信じます。ゆえに、これからも、アジアと世界を見

⁴⁵ 池田大作『新・人間革命』8巻、聖教新聞社、2000年、322-333頁。

⁴⁶ 戸田城聖「朝鮮動乱と広宣流布」『戸田城聖全集』3巻、聖教新聞社、1983年、74-87頁；池田大作『小説・人間革命』5巻（『池田大作全集』146巻、聖教新聞社、2013年、123-124頁）。

⁴⁷ 池田大作前掲『小説・人間革命』5巻、141頁。

⁴⁸ 韓国・慶南大学名誉教育学博士号授与式での池田の謝辞。『聖教新聞』2015年9月21日付3面。

⁴⁹ 趙文富・池田大作前掲『希望の世紀へ 宝の架け橋』（注37）262頁。

据えつつ、両国の文化と教育の交流に尽力していく決心です⁵⁰。”

また、「交流」をより深い次元で意味する時に池田は「連帯」や「結合」という表現を使う。“元来、人間には国境などなかった。(中略)ゆえに、私共は、国境の奥の次元の人間連帯に到達し、生きゆくことを忘れまい⁵¹”、“人間と人間の連帯の詩を、また民衆と民衆の結合の絵巻を、いよいよ創造し、後世にとどめゆくことを、心からお誓いするものであります⁵²。”“信ずる同志がいることが「最大の幸福」である。団結こそが「最大の力」である”などである⁵³。

ではなぜ、日韓交流や日韓民衆の連帯が世界平和のモデルとなり得るのか。これに関しては、池田が何度も指摘してきた「文化大恩の国」というキーワードが関係する。基本的にこれは、農耕・衣食住・芸術・学問・社会制度等、歴史的に日本が朝鮮半島から受けた数々の文化的な恩恵を意味し、その中でも特に「絶大なる恩恵のなかの大恩」としての仏法の伝来を指す⁵⁴。またこの言葉は日蓮の説明に由来する。池田は特に韓国の識者との対談や挨拶の中で、文化の受け取り側である日本・日本人はその恩を決して忘れてはならず、心の底からの感謝と反省・学びが必要だと何度も訴えた。ところで、韓国・日本の創価学会員らを励ます文脈においてもこの言葉や関連する日蓮の教えが登場し、その場合にはより深い意味が込められる点にも留意すべきである。上述したように戸田は恩のある国（朝鮮半島）の動乱に対して実践的に報いることとして、日蓮の哲学を再び朝鮮半島へ「渡す」ことを主張した。池田はさらに、韓国と日本の創価学会の青年会員が集う行事において、次のようなメッセージを送った。

“日蓮大聖人は、「法華経の肝心・諸仏の眼目たる妙法蓮華経の五字・末法の始に一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に日蓮さがけ(魁)したり、(中略)」と仰せになりました。それは、文化大恩の国・韓国から仏教が伝来して700年を経てのことでありました。(中略)そして、真っ先に仏法西還へ、一閻浮提広宣流布へ先駆し、二陣三陣の人材の流れを起こしたのが、韓国の誉れの同志なのです。若き創価の地涌の菩薩は、一人ももれなく、満を持して、この時に、それぞれの宿縁の国土へ躍り出ました。若くして偉大な妙法を持った皆さんは、わが偉大な使命を晴れ晴れと自覚し、誓願の題目を唱え抜いて、いかなる試練も勇敢に勝ち進み、一人ももれず最高の栄光の青春を生き切っていただきたい。(中略)皆さんは、この共生と生命尊厳の大哲理を掲げ、先陣を切って、自他共の人間革命の運動を自身の周囲から展開していきましょう⁵⁵。”

⁵⁰ 趙文富・池田大作前掲『人間と文化の虹の架け橋』(注37)79頁。

⁵¹ 在日韓国人学生への池田のメッセージ。前掲『聖教新聞』(注48)。

⁵² 済州大学名誉文学博士授与式での池田の挨拶。『池田大作全集』53巻、聖教新聞社、2008年、218頁。

⁵³ 韓日友好代表者会議への池田のメッセージ。『池田大作全集』91巻、聖教新聞社、2002年、221頁。

⁵⁴ 池田大作前掲『新・人間革命』8巻(注45)316頁。

⁵⁵ 日韓青年友好大会での池田のメッセージ。『聖教新聞』2018年8月5日付3面。

戸田と池田は「文化大恩」という精神的歴史を、仏法の宿縁概念や生命哲学に基づき、より実践的に捉えている。つまり、韓国と日本の地において、幸福を目的とする日蓮仏法を日常にて実践し、地域社会に広めている民衆とは、そもそもそのような役割・使命を持って生まれてきたという解釈である。日蓮仏法が日本の枠を抜け出し世界に広がるためには、その第一歩としての彼らの役割は非常に重要なのである。そのようなレベルでの日韓民衆の連帯とは、日蓮仏法の普遍化を促すため、そのさらなる広がりとしての世界平和の先駆け・モデルとなるのである。これは教義的には地涌や仏法西還という言葉で説明される。1999年5月に池田が記した「韓日友好の碑」の碑文でも、「湧き出でたる地湧の同胞」が人道と正義の韓日新時代への敢闘の前進を始め、それがアジア・世界へ広がることを願うと展望した⁵⁶。韓国 SGI 会員へ送った長編詩の中でも地涌や宿縁・誓願によって生まれたこれら同志が、仏法西還を通して地球社会を照らしゆく「全世界の模範」となることを詠った⁵⁷。日韓関係に対する池田のビジョンは、このような深い次元にまで掘り下げて理解すべきである。「文化大恩」だけではなく、池田は「真の韓日友好」や「新しい文化」そして「宝の橋」という表現もこのような文脈や意図によって使い分けてきた。

要約として、池田の韓日友好活動や日韓関係観には、以下のような思想的認識が読み取れる。

- 1) 差別や悪等の対極にある人間性の善の側面や尊厳性・平等性といった普遍的価値、そしてこのような善・悪の規範の歴史がどのように刻まれるのかという歴史観や宗教観が何よりも重要である。そのような人間性の側面・価値は制度的に保障されるというよりは、人々が能動的に自覚および実践する中で、実質的に達成・蓄積されるものである。そのことを「最も深く」説いたものがアジア・韓国を経て日本の地で再形成された日蓮の哲学である。韓国の多くの独立運動家や歴史上の人物もまたそのような普遍的価値の実現のために命を懸けて闘争してきた。
- 2) 近現代の日韓関係上の侵略や差別といった重大問題の根本的原因はこのような哲学の不在による、人間性の悪の側面の蔓延である。この構造はその他多くの人類の問題にも当てはまる。この問題の最も重要な解決とは日蓮哲学の実践である。したがって、韓国および日韓関係とは、このような善の側面・価値を追求する根本的な哲学を世界に送り出すための、重要な第一歩となる。
- 3) この役割を、誰よりもまず、日蓮哲学に共鳴する韓国と日本の民衆が担う。日蓮仏法の宗教観や生命哲学観に基づくならば、これら人々はそのような役割・使命を持ってこの地に生まれてきた。彼らがリードする連帯的な哲学的実践そしてその広がりとしての民衆レベルでの文化交流・教育交流こそが、日本および韓国の民衆自身の幸福を有意義に実現し、さらには日蓮哲学の世界的波及のための基盤を構築する。

このような思想をベースとし、池田は日本における歴史認識・朝鮮史認識の強化、在日韓国人への参政権付与、南北分断問題における多角的対話の推進、離散家族問題・人道的問題の優先的解決、非武装地帯の平和的活用、日中韓での世界市民教育や自治体交流の活性化、北東アジアに

⁵⁶ 『聖教新聞』1999年5月16日付2面。

⁵⁷ 「四季の調べ 民衆の賛歌 文化の大恩人の国 尊敬する韓国の友に贈る」『池田大作全集』43巻、聖教新聞社、2002年、492-506頁。

おける国連の機能強化等、多くの政策提言へと議論を進めた。思想と政策の全容を見るならば、それが一般的に論じられる日韓関係論や国際関係論の論理や構造と大いに異なることは言うまでもない。

(3) 韓国知識人らの共感と民衆幸福思想としての暫定的解釈

上記の池田思想の特徴をより明確に確認するために、3人の代表的韓国人識者が池田との対談を通して得た「結論」を紹介する。

(趙文富、池田の済州島訪問を受けて) “その時、私はこう思った。戦争のない状態が平和なのではない。日常の人間関係の中で、穏和な品性からにじみでる真心の笑顔によって、周りが幸せな気持ちを感じるほど、相手のことを尊重していく心と心の交わりこそ、本当の平和の姿であり、平和の根源ではないかと⁵⁸。” “池田会長が、韓国のことを「文化大恩の国」と讃えてくださったからこそ、日本人のみならず、私たちもまた、相手の国の人に感謝できる「価値創造の人間」へと成長する方途に、気づくことができたのです。また池田会長は、日本人だとか韓国人だとかに関係なく、全人類が、そのような人間になることを、切に願っているというのが、私の「結論」となったのです⁵⁹。”

(李壽成) “池田先生のまなざしは常に民衆に注がれてきました。政治的立場や経済的利害を超えて 民衆が幸福な世界を築かねばならないというのが池田先生と創価学会の精神であり、それは創価学会の初代会長牧口先生が軍部に反対し獄死された信念の姿からも確認することができます。(中略) 国と国の間の葛藤を解消するためには政治、経済、外交、安全保障の次元などでのアプローチも大切ですが、池田先生が言われている通り、もっと根本的な解決策は、民衆の間で交流を広げていくことだと私は信じています⁶⁰。”

(趙永植) “21世紀は、ものすごく難しい世紀です。本格的な変化の時代です。変化それ自体が、いいものであると漠然と期待している人が多いが、そうではない。人間性が破壊された、とんでもない世紀になる危険があります。(中略) 何とか歴史の方向を転換しなければならない。そこに今、心血を注いでいるのが池田会長と私なのです。” “池田先生の言葉の通り、人類は一家族にならねばなりません。先生の人間革命と私の人間中心主義は、文字は違うけれども思想は同じです⁶¹。”

⁵⁸ 趙文富・池田大作前掲『希望の世紀へ 宝の架け橋』(注37)9頁。

⁵⁹ 同上、275頁。

⁶⁰ 李壽成「アジアの平和の連帯を目指して」『東洋学術研究』57巻1号、2018年、165頁。

⁶¹ 池田大作「韓国と日本が力を合わせて文化世界の創造を：韓国慶熙大学創立者趙永植氏」『21世紀と人生を語る：世界の有識者との対談集』1巻、聖教新聞社、2000年、264頁、267頁。

3人は共通して、政治・社会的な次元での平和を目指すことはもちろん重要であるが、その内実あるいは過程において、人間あるいは民衆が能動的に連帯して、真の幸福や人間性を追求する生き方の重要性に共感している。これら3人との対話では、仏法的生命観や宿縁観、宗教観等が扱われたわけではないが、日韓関係の根本的問題やビジョンに関しては、上にまとめた池田思想の方向とおおむね一致していると評価できる。

以上の議論を通し、本稿では韓日友好活動や対話において表れた池田思想の特徴を「民衆幸福思想」あるいは「民衆主義的幸福実践思想」と暫定的に解釈する。言うなれば池田思想とは、人間あるいは民衆の実践的な幸福を究極かつ遠大な目的とし、その過程に日韓関係を含む世界平和に関する具体的課題や文化・教育の課題を重層的に組み込むものである。韓国のSGI研究の大家である朴承吉もまた、彼の後期の研究において、日蓮・創価学会の理想的性格を「民衆幸福論」と表現した⁶²。

ところで、池田が言う幸福とは、物質的な繁栄や欲望の解消等に留まらない。創価学会の教義や日蓮仏法において、幸福は最重要キーワードの1つとも言えるため、その意味に関して注意が必要である。ここで細かくは論じないが、主要な教義用語として「自他共の幸福」や「絶対的幸福」等が挙げられる。また「自分だけの幸福も、他人だけの不幸もない」という表現も池田はよく使う。この文脈における幸福とは、自己のみならず、他者の救済や成長を真摯に望み、そのために能動的に努力する姿勢およびその結果であり、そのように行動できる人間としての「生きていること自体の喜び」を自覚するようなイメージである。また、社会的または精神的な悪に立ち向かう闘争的なイメージも含まれる。この意味での幸福は「目的」であると同時に、過程的な性格も合わせ持つ。教義的にはさらに、幸福とは生命力であり、仏界という心の状況（境涯）であり、小我から大我への自我の拡大である等との深い解説があり、その根本的レベルにおいては、祈りや信仰の行為と直結する⁶³。このような幸福の意味に関しては、池田の先師である牧口の説明も重要であろう。彼は、他者と共に幸せになるということこそ、誰にとっても、どの時代においても、人生の最高・最大の目的であり、その下に全ての中小の目的が合理的に位置づけられると明確に主張した⁶⁴。さらにそのような「大善生活」を送る根本的な形態が日蓮仏法の実践であると結論づけた。こうして見ると、民衆の幸福を最高目的とし、その過程において日韓関係の課題を論じ、世界平和を展望する構図は、まさに牧口思想とも一致する。

4. 韓国における池田思想研究の発展に向けた課題：民衆幸福思想の視座から

上記の思想的特徴および前述した6つの類型分類を踏まえ、韓国における今後の池田思想研究

⁶² 朴承吉 “일련불법 (日蓮佛法) 신종교운동의 근대성 이해의 두 얼굴: 정통국체론 vs 민중 행복론: 국주회 (國柱會) 와 창가학회 (創價學會) 의 사례를 중심으로” (日蓮佛法系の新宗教運動の近代性理解に関する2つの顔：正統國體論對民衆幸福論：國柱會と創價學會の事例) 『韓國宗敎學大會資料集』2017年。

⁶³ 池田大作『幸福と平和を創る智慧』第1部、聖教新聞社、2015年。

⁶⁴ 牧口常三郎 (古川敦訳注) 『創価教育法の科学的超宗教的実験照明』第三文明社、2023年、125-137頁。

の発展のための課題を、以下に4つ指摘する。1つ目に、「平和」を池田思想の中心として捉える4番目の包括的研究群に関し、議論の深化や多角化が求められる。池田が平和を強調していること自体にはもちろん間違いはなく、その政策的主張は積極的平和概念と多くの点で一致する。しかし、上記の通り、池田が要請する民衆連帯や信仰の運動は、平和実現のための「手段」ではなく、自他共の幸福観から直接導かれた目的性を持つ。これに関し、韓国の劉光錫は池田思想を始め、宗教的な平和論を平和学上の積極的平和概念と同一視すべきではないと指摘した⁶⁵。カナダの平和学の権威ラバポートも「SGIは平和とは人々の喜びと幸福が実現することであると、一歩深い次元から平和運動を進めています」と指摘した⁶⁶。さらに言えば、戦争・核兵器を「絶対悪」として断固反対した池田の語調を相対的に過小評価してもいけない。つまり、池田の主張は積極的平和概念以前の、「戦争の不在」としての消極的平和概念ともある意味で一致する。要するに、包括的研究群は、幸福をより重視しつつ、積極的平和および消極的平和概念の枠を超えるような議論を目指すべきである。これに関し、日本での研究動向を見ると、やはり池田思想と積極的平和概念との関連性には注目するが、対案的平和観を探る傾向が確認できる。例えば中山は池田平和思想をガルトゥング流の積極的平和観とガンジー思想に通じる絶対的平和観、そしてカント思想に由来する能動的平和観を合わせ持つと指摘した⁶⁷。川田は人間の内なる精神・コスモスの発露としての人間革命運動を通して、政治・経済・社会を変革し、積極的平和を実現していくビジョンを根源的平和論と表現した⁶⁸。高村はその本質的特徴を1) 深遠な人間主義、2) 創造的・建設的ビジョン、そして3) 人々に希望を与える楽観主義とし、単なる学問的理論の次元には収まらないものと捉えた⁶⁹。

2つ目に、宗教学・宗教社会学上の発展的研究群における議論の改善である。この類型で提示されている理論的解釈は民衆幸福思想の構図と似ていて、幸福や信仰の延長線上、あるいはそのような価値実現を目指す池田のリーダーシップや教育実践に付随するものとして、公共的道德や世界市民・世界平等の促進を見出している。したがって、この類型の発展が池田思想の中心的特徴の解明にむしろ直結するかもしれない。しかし、いくつかの問題点を抱えている。まず、現実的にこれらは英語圏での理論を取り入れた初期的な研究段階であり、本格的な議論や検証はこれからである。その際、やはり、国内で展開しているこれら類似の観点・理論との整合性を強化することは、第1の課題となる。この過程において、それぞれの研究が沿って立つ文献情報についての相互の確認は重要であろう。特に、対談集やSGI記念提言といった社会的なものと、教学解説やスピーチといったSGI会員に向けたものとのバランスよく扱うことは、現在の状況に

⁶⁵ 劉光錫前掲「韓国創価学会と国際創価学会の平和主義に対する比較研究」(注13)、187頁。

⁶⁶ 『聖教新聞』2001年7月7日付4面。

⁶⁷ 中山雅司「池田大作の平和観と世界秩序構築についての一考察：人間・非暴力・民衆をめぐる」『創価教育』5号、2012年。

⁶⁸ 川田洋一「仏教平和論の特質：文明間対話における仏教の貢献」『東洋学術研究』52巻1号、2013年。

⁶⁹ 高村忠成「池田先生の平和思想の形成と構造」創価通信教育学部学会前掲『創作者池田大作先生のご思想と哲学』1巻(注31)141-166頁。

関して、重要なカギになると思われる。次に、幸福の実践や公共的価値の形成に関して、理念や心理的側面の抽象的な説明に留まるのではなく、社会生活の実証レベルの議論と結びつけることが、今後の研究発展のためには必要である。つまり、2 番目の類型である実証的研究への含意をより明確に示すことである。最後に、幸福や価値創造の主体側、特に池田が主張する「民衆」についての検討が共通して欠けている。発展的研究群では SGI の存在や運動を既成事実として扱い、その何らかの社会的あるいは精神的結果を重要視する傾向がある。しかし池田は地涌や宿縁といった教義そして使命や自覚という表現を通じて、なぜそのような人々が存在するのかを説明し、励ますことに力を注いだ。池田思想を説明する理論であるならば、このような独特でダイナミックな主体者観や民衆観も適切に取り入れるべきである。さらに言うならば、これら既存の発展的研究群が「文化大恩」や「仏法西還」といった池田思想の持つ独特な特徴、あるいは彼の韓日友好活動の現実的内容と論理的に結び付くのかも、まだまだ不明である。

3 つ目に、やや重複する指摘ではあるが、韓国の現状で最も欠けているのは全体的な体系化の試みである。これもやはり包括的研究群の課題とはなるが、基礎研究群や発展的研究群そして個別的研究群の成果をより効果的に活かしていく課題でもある。全体像に言及した既存研究がいくつかあることは事実である。金鐘萬は池田思想全体を木に例え、根っこが宗教思想、幹が生命思想、枝や果実として教育・平和・人権思想が広がっていると展望した⁷⁰。権賛皓は人間性の拡大という幸福観を根本に、重層的連帯や相互依存的制度を構造とし、教育・文化運動や提言活動をその実践として、池田の「平和理念」の構図を提示した⁷¹。これら先駆的研究が重要な一理を持つことに疑いはないが、どれも特徴や要素間の関係を深く説明しているとは言い難く、かつ、全体を論じるための方法論や文献情報を適切に構築しているとも言い難い。一方、体系化という課題に関して日本の研究動向を見ると、少なくとも 2 種類の方向性がある。1 つは関連領域やテーマを列挙するものであり、もう 1 つは思想の歴史的系譜に基づき、その展開の仕方や意義に着目した、より深い体系化である。後者に関しては特に松岡がリードしているようである。生命に関する智慧・真理・慈悲を説く日蓮仏法の独特な思想が、牧口価値論・戸田生命論・池田人間論として実践的に展開してきたと理解し、この上で池田思想の特徴をさらに細分化し⁷²、それを社会的・信仰的活動としての創価学会思想とも両立させ⁷³、この全体的体系を「創価信仰学」という新たな学問領域として打ち立てるところまで進んでいる。このような日本の研究動向も、韓国ではほとんど知られていない。韓国の研究でも金容煥が言う「個を活かす活命連帯」などは松岡の解釈に

⁷⁰ 金鐘萬前掲「宗教生態思想に対する試論的研究」(注 21) 100-101 頁。

⁷¹ 権賛皓「전환기 세계 평화 구축을 위한 리더십의 방향과 과제」(転換期の世界平和構築のためのリーダーシップの方向性と課題) 河暎愛前掲『趙永植と池田大作の平和創出リーダーシップ』(注 24) 175-195 頁。

⁷² 松岡による池田思想の特徴の挙げ方を列挙すると、1) 生命復権の思想、2) 自由自在の主体性の思想、3) すべてを活かす思想、4) 変化の信仰の思想、5) 知恵に生きる思想である。松岡幹夫『日蓮仏法と池田大作の思想』新版第三文明社、2018 年。

⁷³ 松岡幹夫『創価学会の思想的研究』上・下、第三文明社、共に 2020 年。

通じる点もあるが⁷⁴、高度な体系化にはまだまだ時間と労力が必要であろう。もちろん、池田思想の体系化は簡単な作業ではなく、基準や目的も様々である。その過程で幸福、平和、宗教、人間、教育といった中心的概念を再定義し続けることにもなるであろう。その深さと広さ故、解明というような次元には到達できないかもしれない。

4つ目に、池田の民衆幸福思想は、日本から東洋そして世界へ広まるという、具体性を持っている点に、韓国の研究者らはもっと注目すべきである。デジタル化時代において、思想自体は空間的な制限無しに拡散するかもしれない。しかし、池田思想では、人間性の悪と善およびその実践を深遠的に説く日蓮仏法の現実的・地理的・長期的な展開を重要視している。韓国・東洋はその国際的な出発点であり、日本の地で再形成された日蓮仏法が、この時代に、文化や言語を超えた多くの人々の生き方や社会に本当に変化をもたらすことができるのかどうか、実証的なテスト対象としての重要性を持つ。韓国において最も意義ある学術的功績がなされるとするならば、このテーマであろう。これは2つ目の実証的研究群の重要性を意味し、かつ、個別・間接的研究群とも関連する。実際に日本を除く世界のSGI組織の中で韓国が圧倒的な規模であり、日本系宗教のみならず、キリスト教や在来仏教等を含めた「宗教市場」に関する比較・実証研究が活発に進んでいるため、このテーマに取り組む基盤は既に十分に存在する。これまで李元範らの実証的研究プロジェクトでは、特に入信動機や満足度の側面から韓国SGIの基本的特徴や発展要因を明らかにした。李允眞による『和光新聞』記事を活用した先駆的な実証研究もある。今後、幸福や平和に関する深層的理解や国家観や社会変革観に至るまで、池田思想がどれだけ、またどのように、韓国SGI会員やその理解者の認識の中に、そして韓国社会の中に、体現・肉付けされているのかを、よりダイナミックに解明する努力に期待する。別言すれば、「提供者側」ではなく「受容者・主体者側」からのより本格的な思想研究である。同じ論理として、個別的研究群や間接的研究群を発展させることは、韓国では特に重要な意味を持つ。これらの研究は、すでにいくつかの研究が試みているように、韓国内のより広い学問分野あるいは学術界において、池田思想の意義や普遍的活用性を直接問いかけることになるからである。

以上で述べたように、池田の韓日友好活動から得られた民衆幸福思想という視座は、韓国におけるこれまでの創価・池田研究の類型に対して、研究の質的改善や望まれる方向性そして発展的な研究意義に関する含意を提供する。もちろん、これら以外の現実的あるいは分析的な課題も多々あるが、このような統合的な考察は長期的かつ広範囲の観点から課題を発見する点で意義があると考えられる。

⁷⁴ 金容煥 “한국 SGI 활동연대 법화신행 연구” (韓国SGIの活命連帯・法華信行研究) 『韓国教授仏子連合学会誌』26巻1号、2020年。

5. 結論にかえて：幸福と平和の関係に関する発展的考察

最後に、本稿の議論を踏まえ、幸福と平和の関係について整理する。創価学会の紹介文（ホームページ）には「万人の幸福と世界の平和という価値の創造を目指します」とある⁷⁵。会員が毎日の朝夕に行う祈りの共通事項を定めた「御祈念文」の最終文章は「世界の平和と一切衆生の幸福」を誓うことである。幸福と平和はどちらが上か下かというわけではなく、最重要の2大目標として明記されている。しかし、日本の関連研究では、どちらかと言えば平和思想が幸福思想に対し優勢と見える。どちらも共通して、九識論や十界論・依正不二論等の生命哲学から出発するが、幸福を主題とする研究は欲望やウェルビーイング・倫理等のキーワードと結びつく⁷⁶。一方で平和研究は人間主義・世界市民・民衆連帯等と結びつき、池田思想のより広い範囲をカバーしつつ、内容もダイナミックである⁷⁷。ともあれ、どちらにおいても、そもそも池田思想がなぜこの2つの究極的目標に行き着くのか、これらがどのような関係にあるのかという基本的疑問は、意外にも説得力をもって答えられていないようである。両者の関係について、池田自身の代表的な説明を挙げると次の通りである。このテーマは特に「一身の安堵を求めるならば四表の静謐を目指せ」と主張した日蓮の『立正安国論』を巡って掘り下げられている。

“「一身の安堵」とは、個人の幸福を指します。「四表の静謐」とは、東西南北の四方の安穩、すなわち社会全体の平和のことであります。個人の幸福を願うがゆえに、まず社会の平和を祈る。そのために真剣勝負で行動する。この両者を追求し、実現しゆくのが真の宗教です。惑星の運行に譬えるならば、「一身の安堵」とは「自転」であり、「四表の静謐」とは「公転」に当たります。自転と公転が運動して、大宇宙の調和の軌道が成り立っている。どちらか一方だけということはありません⁷⁸。”

“大聖人の仏法は、あくまでも民衆の生活のなかに躍動する文化の大海でなくてはならない。個人の内面の変革をとおして時代をリードするものであり、全人類の生命にひそむ魔性に挑戦し、悲惨と苦悩を絶滅することが仏法の本意であります。（中略）横には全世界、全人類の崩れざる平和、縦には未来永遠にわたる生きいきとした幸福の確立こそ、日蓮大聖人の終

⁷⁵ 創価学会「創価学会とは」<https://www.sokagakkai.jp/philosophy>。

⁷⁶ 吉川成司「ポジティブ心理学におけるウェルビーイング理論の展開と池田思想における幸福観」創価大学通信教育部学会編『池田思想研究の新しい潮流』第三文明社、2016年；叢暁波「時代の精神状況から見た池田大作幸福思想の三つの領域」『創価教育』13号、2020年；川田洋一「現代文明と欲望論：仏教幸福論の視座から」『東洋学術研究』49巻2号、2014年。

⁷⁷ 中山、川田、高村等の研究（注67-69）以外にも前川健一「仏教の平和思想とSGI」『東洋学術研究』44巻2号、2015年；松岡幹夫『現代思想としての日蓮』長崎出版、2008年。

⁷⁸ 池田大作『御書と師弟』2巻、聖教新聞社、2010年、122-123頁。

極の目的なのであります⁷⁹。”

池田の韓日友好活動や対話では、民衆の幸福や連帯の重要性が強調された。その点に関して、韓国の識者らとの共感が形成されたことも事実である。幸福が目的であり、平和はそこに含まれるという思想的特徴である。本稿はこのような解釈を手掛かりとして、韓国における研究発展のための課題を提示した。しかし、上述した創価学会の基本的立場や池田のより広い説明では、思想の全体的特徴として、幸福と平和のどちらか一方を重視するような解釈は成立しないように思える。その関係を適切に理解するためには、より遠大なスケールが必要であろう。民衆幸福思想という解釈は、池田思想研究の韓国での発展を促すための、議論の通過地点として位置づけられる。

⁷⁹ 池田大作「人間勝利の大文化を創造」（1970年5月3日、第33回本部総会スピーチ）『池田会長講演集』3巻、聖教新聞社、1971年、17-18頁。

「人間主義の行動準則」

——池田大作のSGI提言における対話の規範の一考察——

山 田 竜 作

はじめに

本稿の目的は、池田大作が2005年1月の『SGIの日』記念提言（以下、「SGI提言」と記す）で提唱した「人間主義の行動準則」（以下、「行動準則」と記す）を検討し、分断を結合へと転換させゆく対話に求められる規範の一端を明らかにすることである。

その「行動準則」とは以下の通りである（池田2005（上）：3面）。

「全ては変化——相互依存（縁起）し合っており、調和や全一性はもとよりのこと、矛盾や対立といえども、結びつきの一つの現れである。故に、矛盾、対立の内なる制覇に発する、悪との戦いは、大きな結びつきに至るまでの避けられぬ、避けてはならぬ^{けいきよく}荆棘である」

この非常に短い文章の中に池田の思想の多くが凝縮されており、安易な解釈を許さない。2005年はSGI（創価学会インタナショナル）発足より30周年という年であり、また2001年「9・11」テロ以降、セキュリティの名における軍拡への傾向性や人権の制限などが憂慮される中、池田はいかなる冷笑を浴びようとあくまで「対話こそ平和の王道」と叫びぬかなければならないと主張した。そのような文脈で提唱された「行動準則」は、さらなる分断と暴力の応酬が進み20世紀後半の世界的民主化に対する逆行とさえ見える2020年代の現代世界においてこそ、再検討されるべきものと筆者は考える。

その際、問われるべきは、池田の「人間主義」とはいかなるものであり、なぜその根幹に「対話」がなければならないのか、またそこで考えられている「対話」とはいかなるものか、といういささか大きな問題である。もとより限られた紙幅の中で、対話や人間主義に関する池田の思想の全体像を明らかにすることは不可能であるが、以上の問いへのアプローチとして、本稿では「行動準則」を主に次の3つの論点から検討する。第1に、「すべては変化し相互依存し合っている」という視点につながるであろう池田の「善悪二元論」批判である。第2に、「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」とする池田の対話観である。第3に、池田が示す「内なる制覇に発する悪と

の戦い」が、対話において意味することについてである。最後に、池田の提唱する「行動準則」が直ちに何らかの結果を出そうとする対症療法であるよりも、むしろ無限に続けられるべき抜本療法であることを示したい。なお、以上の議論のため、2005 年前後の SGI 提言や、池田の海外大学講演等も適宜参照することとする¹。

1. 予備的考察

さて、「行動準則」それ自体の検討に入る前に、予備的考察として、対話をめぐる池田の議論の前提と考えられるものを 3 点考えてみたい。

第 1 に、善の本質は「結合」であり悪の本質は「分断」である、との池田の信念である。これは、1993 年の SGI 提言で披歴されているが（池田 1993a: 1 面）、本稿の主たる議論に直接関係する 2005 年の同提言でも再度言及されており、ここではその信念こそ「人間主義」であり、21 世紀に要請される対話の基盤こそがそれであると語られている（池田 2005（上）：1 面）。結合を善、分断を悪とする池田の信念は、さまざまな形で論じられており、冷戦後の民族紛争をめぐる文脈で「自」と「他」を分断していく「閉じた心」の指摘はその一例である（池田 1993a: 1 面）。後に検討する「善悪二元論」批判の前提にあるものが、この池田の信念であることを、まずここで確認しておきたい。

第 2 に、池田の眼目がどこまでも人間自身の変革にあるという点である。昨今の社会科学において対話に最も関係する議論の 1 つは、政治学等における熟議民主主義（deliberative democracy）論と考えられる。ユルゲン・ハーバーマスやジョン・ロールズら政治哲学者による「理性の公共的使用」に基づく熟議論は、もはや古典の部類に属すると言える。しかし、特に政治学における熟議民主主義の研究は、合理的な意思決定へとつながる熟議をいかに制度化するかという点に重きが置かれているようであり、熟議をする人間自身のありようには焦点が当てられにくいと考えられる²。それに対して、「人間革命」を唱える池田の目は、制度よりも人間それ自体に徹底して向けられている。もちろん池田は制度の重要性を否定しないが、しかし彼は、人間の外部にあるもの——それが制度であれ何らかのイデオロギーであれ宗教的ドグマであれ——によっ

¹ もちろん、40 年にわたる SGI 提言を本報告で網羅的に扱うわけではない。

² 熟議民主主義の 1 つのポイントは、他者との熟議・対話・コミュニケーションを通じて自身の選好が変容するという点と言えるが（cf. Young 2000）、他者の声に耳を傾けようとしない人間、自らの見解や立場に固執する人間をどうするか、という問題は制度論には馴染みにくいであろう。むしろ、熟議民主主義論であまり取り上げられない思想家・理論家——ジョン・デューイ、カール・マンハイム、ハロルド・D・ラスウェルら——の、民主的人間ないし民主的パーソナリティ（およびその育成）という関心の方が、対話する人間をめぐる池田の思想に親和的ではないかと筆者は考える。

て人間が支配される転倒を繰り返し論じている³。人間の内面を、先に触れた「閉じた心」から「開いた心」へと転換させ、対話の回路を縦横無尽に張り巡らせていこうとするのが、池田の根本的な発想であり、また生涯をかけた実践だったと言えよう（池田 1993a: 4 面）。

第3に、まさに「人間主義」である。2005 年提言において、池田はその「行動準則」の前提を「人間主義の結構」として以下の通り3項目に要約している⁴。

- (1)すべての事象は相対的、可変的である。
- (2)ゆえに事象の相対性、可変性を見極めていく眼識を養い、事象の相対性に紛動されない強靱な主体を築くことが欠かせない。
- (3)そうした眼識、主体をベースにするがゆえに、人間主義は、人間である限り、対象を選別しない。イデオロギー、人種、民族によって、人間を「定型化」したり、「限定性」を付与したりして、対話の道を閉ざさない。

そして、以上の人間主義に要請される「眼識」の果てにもたらされるのが、すべての事物が相互に縁となり依存し合いながら生起する多様性に満ちた「縁起」の世界であるというのである（池田 2005（上）：3 面）。これらの3項目は、本稿の考察対象である「行動準則」の中に編み込まれていると考えられるので、ここで1つ1つ検討することはしないが、すべての事象が可変的であるとの自覚、および人間の属性にとらわれない対話、という点の重要性に注目しておく必要がある⁵。

以上の3点を前提として、「行動準則」そのものの検討へと進んで行きたい。

2. 「行動準則」の検討（1）：「善悪二元論」批判と自己規律

まず着目したいのは、「行動準則」の冒頭での「すべては変化し相互依存（縁起）し合っている」という点である。ここで池田は相互依存を明確に「縁起」と示している。ありとあらゆる物事や事象は単独で存在したり生起することはなく、相互依存の網目の中にあるというのが、仏法者としての池田の「縁起」観であり、前節の最後に触れたように彼の世界観とも言える。ここでは「縁起」観それ自体を検討するというよりも、それと密接に関係すると思われる池田の「善悪二元論」批判を考えてみたい。この点こそ、分断に満ちた現代世界を根源的に捉え直す際に重要と考えら

³ 1990 年代の池田の海外講演をいくつか瞥見するだけでも、それは明らかであろう。例として（池田 [1991] 2000）（池田 [1992b] 2000）を参照。2005 年提言においても、過激主義や教条主義が陥る「イズムの功罪」が語られ、人間の自由な思考や判断を拘束した果てに「イズム」が人間に君臨するという逆倒が指摘されている（池田 2005（上）：3 面）。

⁴ この3項目は、すでに 2002 年の SGI 提言でそのあらましが語られている（池田 2002（2）：2 面）。

⁵ なお池田自身、ここでの人間主義が「人間中心主義」でないと断っており、マルティン・ブーバーの『汝と我』と牧口常三郎の『人生地理学』に言及しつつ、人間の伴侶としての自然、および自然と人間との対話について論じている（池田 2005（上）：4～5 面）。この点についての検討は本稿の射程外だが、現代の地球環境問題を根源的に考える際に不可欠のポイントであろう。また（池田 [1993c] 2000:29-30）も参照。

れるからである。

池田が繰り返し議論するのは、戦争であれイデオロギー対立であれ民族紛争であれ、「自」と「他」を分断し、他者を「敵」「悪」と見る人間の発想である。特に彼は、「悪」は常に相手側（すなわち外部）にあるとする固定的発想を問題視する。例えば池田は、「悪」というものが常に他人の中に具体化されてしまい、決して自分の中ではないという T・S・エリオットの指摘を参照している（池田 1990：4 面）。それに対して、「縁起」観に基づく池田の発想からすれば、善と悪は相対的である。これは決して、善も悪もないというニヒリズムではない（池田は「何でもあり」につながる過剰な価値相対主義に与することはない）。そうではなく、「悪」は自分の内部にもあり、「善」は自分の外部にもあるのであり、その意味で善と悪が相対的なものである以上、「敵」や「悪」を固定的に見ることはできないということである。「縁起」観からすれば、自分の内側から「善」の側面が出るか「悪」の側面が出るかは、いかなる縁に触れるかに左右されるのであり、相手の場合もしかりである。そのように見る「眼識」が何よりも要請されるのであり、「自＝善」「他＝悪」という固定的な二元論を克服することが重要な課題となるのである。

その克服の第一歩として池田が主張するのが、まず自分自身の内なる「悪」を見つめる徹底した内省、すなわち「自己規律」である。そしてその「自己規律」に不可欠なのが「他者」、具体的な人間としての「他者」の存在であり、その他者が持つ痛みや苦しみへの想像力こそが「自己規律」につながるというのである。例えば「9・11」テロの翌年 2002 年の SGI 提言では、この点が強調されており、同時多発テロの実行犯の側も、それに報復する側も、こうした痛覚および「自己規律」を欠いているのではないかと指摘している⁶。戦うべき「悪」は、他者の痛みを感じず「自」と「他」を分断しゆく「人間不在」という状況それ自体であり、池田はカール・G・ユングを参照しつつ、そうした状況こそ真の敵、現代の悪霊であるとさえ述べている。池田にとってはまさに、敵対勢力が「悪」なのでなく、自己を「善」、相手を「悪」として分断していく作用そのもののこそ、真なる「悪」だと理解できよう。また、「人間不在」は「人間主義」の対極と考えられ、相手を「敵」とすると「定型化」して問答無用の対話拒否へと追いやるものと考えられるが、対話を可能にするためには、相手に「自己規律」を要求する前にまず自らに「自己規律」を課す——このことを池田は同年の提言で「一人ひとりが全存在をかけて自分自身をつくり替える（人間革命の謂です）ほどの覚悟と緊張、実存的決断を要」すると主張している（池田 2002（1）：3 面）⁷。

以上のように、「他者」の痛みへの想像力と「自己規律」が連動しているとする池田の思想は、

⁶ テロへの報復攻撃としての空爆について、池田が同提言で述べている以下の一節は、無人機や AI 兵器の時代たる今日において再度注目すべきと思われる——「味方の人的損失が限りなくゼロに近いのに、相手には甚大な被害を与え、しかもその規模さえ定かでないというような状況が、人間の生き死にという根本事への不感症を亢進させ、魂の次元など、はるか遠くに置き去りにしてしまいはしないか」（池田 2002（1）：3 面）。

⁷ 2003 年および 2004 年の SGI 提言で池田はさらに、「自制心のかたち」を示す必要性、「他者への眼差し」に基づく自己規律を語る中で、同様の内容を再説している（池田 2003（上）：2～3 面）（池田 2004（上）：1～3 面）。

「行動準則」で語られている「相互依存」（すなわち縁起）に相当し、人間は縁次第で善にも悪にもなり得るという点で「すべては変化」（つまり固定的なものは何一つない）と表現されていると考えてよいであろう。

3. 「行動準則」の検討（2）：結びつきの一つの現れとしての矛盾・対立

次に、「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」とする池田が持つ対話観の検討に移ろう。本稿の冒頭で、池田が「対話こそ平和の王道」とあくまで主張する際、「いかなる冷笑を浴びようと」と述べていることに触れた。21世紀に入っただけで四半世紀が過ぎつつある現在、つまり社会の分断、戦争と新たな軍事安全保障への傾斜、SNS上にあふれ返る誹謗中傷や「フェイクニュース」、果ては「ポスト・トゥルース」が語られる現代にあって、池田が長年懸念してきた言葉に対する「軽信」と「不信」の両極への振れ⁸ははるかに悪化しているように見える。特に昨今は、根拠の有無にかかわらず自らが信じたいものだけ信じ、異なる信条や価値観を持つ者はそれだけで「敵」と決めつけ、理性的に相手を説得しようとする対話など成り立たない「分極化」が甚だしくなっている。このような中で「対話こそ平和の王道」と主張し続けることは、以前にも増して冷笑の対象にされかねない。

だが筆者はかつて、対話に対して冷笑的であるのは、対話を予定調和的に丸く収まるものとイメージしているからではないか、という趣旨のことを論じた（山田 2010b）。池田の考える対話は、そうしたもののからは程遠い。むしろ、対話とは「闘い」であるというのが池田の対話観であると考えられる。彼の言説からいくつか例を挙げれば、

「ソクラテスがそうであったように、言葉と言葉の撃ち合いが、果ては死をもたらすかもしれないほどの緊迫した状態さえ覚悟した、退くことを知らぬ徹底した対話」（池田 [1993b] 2008:176）

「もとより対話といっても、春風のようなものばかりではなく、時には火を吐くごとき言論のつぶてが、相手の傲り高ぶる心を撃つ場合もあります」（池田 [1993c] 2000:21）

「火花を散らすような出会いと対話の精神闘争を通じて、人間をひとつことに拘泥、拘束させているこだわりの結び目を、一つ一つ、丹念に解きほどこいていく労作業」（池田 2005（上）：1面）

⁸ 言葉への軽信はイデオロギーや民族主義などへの狂信へとつながる一方、言葉への不信は「言論嫌い（ミソログス）」＝「人間嫌い（ミサントローボス）」に通じることを、池田は折に触れて論じてきた。ここでは（池田 1993a: 1面）（池田 [1993b] 2008:176-177）を参照。

等々、以上だけでも、池田の考える対話が仲良く穏やかに共感や相互理解や合意をもたらすようなイメージでないことが分かつろう。対話には、容易に解けない矛盾や対立が必然的に伴うということである。

では改めて、「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」とはいかなることか。2005 年提言には、過激主義、教条主義、人間主義等々と言っても「主義と主義の対峙といった漠たる対立があるわけでは決してなく、あくまでそれを体現した人間同士の、腹を割った一対一の対話こそ、原点であり実像」だとの言及がある（池田 2005（上）：1 面）。つまり、異なる考えや信念を持つ人間としての「他者」を相手にするのが対話であり、やはり池田の焦点は具体的な人間である。そして相手が「他者」である以上、容易に自分の意のままにならない。しかし、その「意のままにならない」という現実、あるいは相手から受ける抵抗や相手との間にある壁を意識するからこそ、「自」と「他」はリアリティを持った存在となる。つまり、他者との撃ち合いや関わり合いといった手応えを通じて、自らのアイデンティティを獲得することができる、というのが池田の主張であり（池田 2004（上）：1～3 面）、端的に「他者なくして自己なし」とも述べられている（池田 2003（上）：3 面）。こうした撃ち合いや関わり合いといった「闘い」こそ「結びつき」であると理解できる。ここでの「闘い」とは、相手を倒すことではなく果敢に「関わっていく」ことと言え、筆者なりに言い換えれば「切り結び」となろうか⁹。このような「闘い」としての対話を手放さない限り、文字通り「矛盾や対立も結びつきの一つの現れ」と言うことができよう。

そして池田にとって、対話を手放すことこそ、このような「闘い」としての「結びつき」に耐えられず「易き」につこうとする人間の弱さの現れであり、彼の「人間主義の結構」で語られた「強靱な主体」の逆であると言えよう。池田はその例として、一方では、特定のイデオロギーなどを安易に絶対視して相手の痛みへの想像力を失い、自分の意のままにしようと欲する傾向性（仏法で言う「他化自在天」＝魔性）を論じ、他方では、リアルな他者と関わるという根気がいり苦痛さえ伴う営みを避け、葛藤やぶつかり合いを無しに済まそうとする現代のバーチャル化の風潮に言及している（池田 2004（上）：2 面）。いずれの場合も、失われているのは「他」と「自」との生きた関係である。ここで、2002 年の SGI 提言からの池田の言葉を引用してみよう（池田 2002（1）：3 面）。

「人間は『他者』を意識し、『他者』の眼差しの中でしか『自己』になりようがなく、その『自他』の魂の撃ち合いを通して人間は人間になっていく——人間が成熟していくプロセスとして、いわば常識であります。／このプロセスを欠けば、人間は、いつまでたってもわがままで自己陶醉の幼児性、発育不全を脱することができない。」

⁹ かつて筆者は、他者を打倒すべき「敵」ではなくむしろ必要な「対抗者」と捉える闘技的多元主義（agonistic pluralism）を検討する際、それが批判する熟議民主主義と実はそう違いものではないのではないかと論じたことがある（山田 2007）。池田の「闘い」としての対話観は、まさに熟議民主主義と闘技的多元主義を架橋するものと考えられる。

ここで言う「魂の撃ち合い」こそ対話であるならば、その対話の道を閉ざしてしまえば、第1節で言及した池田の言う「人間主義」とは真逆となり、分断作用という「悪」に対して無防備となろう。矛盾や対立もまた結びつきであるとする池田の「行動準則」は、先に述べた「他者なくして自己なし」という縁起観の表れであり、このような「闘い」としての対話や他者との関わり合いを避けては、人間は人間たり得ないということになろう。

4. 「行動準則」の検討(3)：内なる制覇と漸進主義

さらに続けて、「行動準則」で語られている「内なる制覇に発する悪との戦い」への検討に移ろう。すでに論じたところから、「内なる制覇」とは「自己規律」につながり、「悪との戦い」とは善悪二元論に見られる「分断作用」の克服を意味し得る、と考えられよう。第2節で、相手に「自己規律」を要求する前にまず自らに「自己規律」を課すと論じたが、ここで、「制覇」すべき自己の内面について池田が語る際の1側面を見てみたい。それは、1992年と2009年のSGI提言で論じられた「抽象化の精神」の問題である。

「抽象化の精神」とは、池田がガブリエル・マルセルを援用して論じているものである。簡潔に述べるならば、戦争のように相手を「敵」として滅ぼさなければならぬ事態になった場合、相手が持つ個人的実在を一切捨象し、「コミュニスト」「反ファシスト」「ファシスト」等々の抽象概念へと変えてしまわなければならなくなる（それによって、敵対する相手も生きた人格であることが容易に忘れられる）、ということである（池田1993a:3面；池田2009（上）：1面）。かつて政治哲学上でいわゆる「リベラル＝コミュニタリアン論争」が華々しかった1980年代から今世紀初頭にかけて、リベラリズムが前提とする「個人」が一切の属性を持たない抽象概念であると批判され、歴史的・社会的・文化的背景を持つコミュニティ（共同体）こそ人間の具体的なアイデンティティの基盤となる、という論点が見られた¹⁰。しかし、マルセル的視点を重視する池田の議論はそこにとどまらない。人々をアトム化し社会をバラバラに断片化させる行き過ぎた個人主義的リベラリズムも問題だが、しかし具体的なアイデンティティに見える「〇〇人」「〇〇民族」「〇〇主義者」「〇〇教徒」「〇〇派」等も実は、1人1人の具体的な顔を見えなくする抽象概念となり得るのである。しかも池田は、「抽象化の精神」が決して価値中立的なものではなく、抽象概念化された側の人々の価値を貶める決めつけを伴い、ルサンチマンへと容易に陥ることを指摘している（池田2009（上）：1面；cf. 山田2010a:276）¹¹。この「抽象化の精神」こそ、池田にとっては、自分の意のままにならない他者に「敵」「悪」とレッテルを貼り、対話を拒否する、

¹⁰ さしあたり（藤原1993）を参照。この論争にはおびただしい論点が含まれていたが、それを検討するのは本稿の目的ではない。

¹¹ 池田は1993年のSGI提言では、マルセルと並んでウォルター・リップマンの「ステレオタイプ」に言及し、決めつけやレッテル貼りが不寛容さを生み対話を阻む様を論じている（池田1993a:4面）。

人間の弱さの1つの元凶であると言えよう。

1993年のハーバード大学講演で池田は、人間の「差異へのこだわり」を釈尊の言葉を用いて「見がたき一本の矢」と表現したが（池田 [1993c] 2000:18-19）、「抽象化の精神」もまたそれに当てはまり、「自己規律」による「内なる制覇」を通じて乗り越えるべきものと考えられよう。「内なる制覇」を考える場合、すでに第2節で触れた、「悪」をもっぱら外部に求め、自らは「善」であるとする善悪二元論に再び立ち戻ってみよう。仮に相手に対するルサンチマンを意識しておらず、自分の言動が善意によるものと信じている場合であっても、池田は「人間の素朴な善意などというものは、自らの内なるエゴイズムとの徹底した対決がない限り、いつ支配欲に——それも、むき出しのそれではなく、イデオロギー的粉飾をほどこされたもっともらしい支配欲に転じてゆくか」しれたものではないと断じている（池田 1992a: 3面）。自分が「善」である以上、「善」を実現するには早い方がよく、そのためには力づくでも言うことをきかせよう——とする危険なあり方を、池田は「急進主義」として批判するが（cf. 池田 [1992b] 2000:111-112; 池田 [1993b] 2008:171-174）、ここでの「支配欲」につながると言ってもよいであろう。ゆえに「内なる制覇」とは、善意の底に潜むエゴイズムの制覇、相手を意のままにしようとする支配欲の制覇、自ら「善」と考えるものを吟味しなおす内省・自制心、さらには、そのように自らの内面と向き合う勇気のなさの制覇、等を意味すると考えられる。それは、問答無用の暴力につながりかねない「急進主義」に対して、いかに相手との差異や溝——思想であれ民族であれ宗教であれアイデンティティであれ——が大きくとも、たとえ容易に理解や合意に達することができなくとも、対話を手放さないという意味で「漸進主義」と言えよう。

実際、対話が「闘い」であるとしても、それは言葉を通しての撃ち合いであり、非暴力による闘いである。しかも、自分が一方的に相手を説得しようとするのみならず、自分に足りないものを自覚して相手から学ぶのも対話である。暴力が渦巻く世界において対話より実力行使の方にリアリティがあるとされがちな中、池田は非暴力の闘士であったマハトマ・ガンジーの言葉「善いことというのは、カタツムリの速度で動くものである」をしばしば引用している（cf. 池田 [1992b] 2000:110）。これは文字通り「漸進主義」であり、池田にとって「内なる制覇」と「他者との対話」が人間として譲れないものであったとすれば、「漸進主義」への志向性は必然的なものであったと考えられよう。「急進主義」への誘惑に負けず「漸進主義」を貫く（＝対話を手放さない）とすれば、「矛盾、対立の内なる制覇に発する、悪との戦い」とは、やはり対話による分断作用（悪）との戦いだと結論できるだろう。

以上の議論を、いささか図式的に整理すれば、次のようになろう。

- 抽象化の精神——対話拒否——急進主義——分断作用（悪）
- 自己規律——1対1の対話——漸進主義——結びつき（矛盾・対立を含む）

5. 避けてはならぬ荆棘——結びにかえて

最後に、「行動準則」について論じ残した点に若干触れて本稿を閉じよう。以上述べてきた「悪との戦い」は、「大きな結びつきに至るまでの避けられぬ、避けてはならぬ荆棘である」と池田は語る。「荆棘」（いばらの道）である以上、それは容易ならざる道であり、にもかかわらず「避けてはならぬ」道であるというのである。しかもそれが目指すものが「大きな結びつき」であるならば、すぐに目に見える結果が出せるものではなく、あくまで忍耐強く「漸進主義」に徹しゆくことを池田は要請していると考えられる。

では、この「大きな結びつき」とは何であろうか。2007年のSGI提言では、池田自らが「行動準則」を再説する中で、それを「人類意識」と述べている（池田2007：3面）。ここで言う「人類意識」とは、単に「人間みな同じ」という安易な心情次元の問題ではなく、「矛盾、対立の内なる制覇」の果てに得られる意識、先の引用で言われた「全存在をかけて自分自身をつくり替えるほどの覚悟と緊張、実存的決断」の果てに得られる意識であると言える。まさに「自己規律」という精神的緊張感を自らに課すと同時に、敵対する相手からも「善」なるものを引き出す可能性を信じ抜くことこそ、分断作用という「悪」を乗り越えて「大きな結びつき」（人類意識）へと至る道ということになり、自己の「内なる善」と他者の「外なる善」とを触発させる対話¹²こそ、いかに迂遠の道に見えようと、いかに困難を極めようと、避けてはならないいばらの道である。そして、相手の出方にかかわらず、まず自らがそうした「自己規律」に立脚して対話の回路を開いていく——このような、「大きな結びつき」を目指した行動を促す規範こそこの「行動準則」ということになると考えられる。

そうであるならば、「人間主義の行動準則」とは、現に今起きているさまざまな問題を解決する対症療法というよりも、池田自身が述べるように、もっと根源的次元から人間自身の変革（すなわち「人間革命」）を要請する根本療法であると言ってよい。自他の（矛盾や対立を含む）開かれた対話を通じて、悪（分断）を善（結合）へと常に常に転じてゆく、あくなき挑戦を要請するものこそ、池田が提示した規範としての「行動準則」であるというのが、本稿の結論である。

〔付記〕

本稿は、2024年11月30日に創価大学で開催された周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム「対話による平和と発展」の分科会1「平和のための対話」での筆者の報告原稿に、加除修正を加えたものである。シンポジウム当日に有意義な質問をくださった参加者諸氏に感謝申し上げたい。

¹² 池田はしばしば対話を「生命の触発」と呼ぶが、自己からも他者からも善なるものを引き出す営みとしての対話の作用を、「薫発」という言葉で表現することが多い。

文献一覧

- 池田大作（1990）「第 15 回『SGI の日』記念提言『希望の世紀へ 「民主」の凱歌』」、聖教新聞、1990 年 1 月 26 日、1～5 面。
- 池田大作（〔1991〕2000）「ソフト・パワーの時代と哲学——新たな日米関係を開くために」（ハーバード大学講演）、『21 世紀文明と大乘仏教——海外諸大学での講演選集』所収、第三文明社。
- 池田大作（1992a）「第 17 回『SGI の日』記念提言『希望と共生のルネサンスを』」、聖教新聞、1992 年 1 月 26 日、1～5 面。
- 池田大作（〔1992b〕2000）「不戦世界を目指して——ガンジー主義と現代」（ガンジー記念館講演）、『21 世紀文明と大乘仏教——海外諸大学での講演選集』所収、第三文明社。
- 池田大作（1993a）「第 18 回『SGI の日』記念提言『新世紀へヒューマニティーの旗』」、聖教新聞、1993 年 1 月 26 日、1～5 面。
- 池田大作（〔1993b〕2008）「新しき統合原理を求めて」（クレアモント・マッケナ大学講演）、『「人間主義」の限りなき地平——海外諸大学での講演選集 II』所収、第三文明社。
- 池田大作（〔1993c〕2000）「21 世紀文明と大乘仏教」（ハーバード大学講演）、『21 世紀文明と大乘仏教——海外諸大学での講演選集』所収、第三文明社。
- 池田大作（2002）「第 27 回『SGI の日』記念提言『人間主義——地球文明の夜明け』」（1～4）、聖教新聞、2002 年 1 月 26 日、1～3 面、同年 1 月 27 日、2～3 面、同年 1 月 28 日、3 面、同年 1 月 29 日、3 面。
- 池田大作（2003）「第 28 回『SGI の日』記念提言『時代精神の波 世界精神の光』」（上・下）、聖教新聞、2003 年 1 月 26 日、1～3 面、同年 1 月 27 日、2～3 面。
- 池田大作（2004）「第 29 回『SGI の日』記念提言『内なる精神革命の万波を』」（上・下）、聖教新聞、2004 年 1 月 26 日、1～3 面、同年 1 月 27 日、2～4 面。
- 池田大作（2005）「第 30 回『SGI の日』記念提言『世紀の空へ 人間主義の旗』」（上・下）、聖教新聞、2005 年 1 月 26 日、1～5 面、同年 1 月 27 日、2～4 面。
- 池田大作（2007）「第 32 回『SGI の日』記念提言『生命の変革 地球平和への道標』」（上・下）、聖教新聞、2007 年 1 月 26 日、1～4 面、同年 1 月 27 日、2～4 面。
- 池田大作（2009）「第 34 回『SGI の日』記念提言『人道的競争へ 新たな潮流』」（上・下）、聖教新聞、2009 年 1 月 26 日、1～5 面、同年 1 月 27 日、2～5 面。
- 藤原保信（1993）『自由主義の再検討』岩波新書。
- 山田竜作（2007）「包摂／排除をめぐる現代デモクラシー理論——『闘技』モデルと『熟議』モデルのあいだ」、日本政治学会編『年報政治学』2007-I。
- 山田竜作（2010a）「グローバル・シティズンシップの可能性——地球時代の『市民性』をめぐって」、藤原孝・山田竜作編『シティズンシップ論の射程』所収、日本経済評論社。

山田竜作（2010b）「現代社会における熟議／対話の重要性」、田村哲樹編『政治の発見 5 語る——熟議／対話の政治学』所収、風行社。

Young, I.M. (2000). *Inclusion and democracy*. New York: Oxford University Press.

閉会挨拶

田 代 康 則

この度は、周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございました。この記念すべき節目の年に、世界各国から多くの研究者の皆様や一般参加者の方々をお迎えし、意義深い学術交流の場を持つことができました。また、昨年11月15日にご逝去された創立者池田先生の一週忌の意義を留める機会ともなりましたことに、心より感謝申し上げます。

本シンポジウムには、中国、アメリカ、韓国、フィリピン、スペイン、イタリア、日本をはじめとする45の大学・機関から、数多くの優れた研究者の方々にご参加いただきました。また、発表された論文とサマリーの数はいくつに上り、それぞれが未来への貴重な指針を示してくださいました。特に先ほどの基調講演では、周恩来総理と池田先生の会見が持つ歴史的意義や、現代社会への示唆について深い洞察を伺い、大きな感銘を受けました。

これまで、世界各地で池田思想に関する研究が積み重ねられ、その成果は約50冊の専門書、さらに約1000本の関連論文として発表されています。この成果は、研究者の皆様お一人おひとりのたゆまぬ努力と熱意、そして未来を切り開くとの信念の賜物であると思います。改めて、皆様のご尽力に心より感謝を申し上げます。

創価大学では、創価教育100周年にあたる2030年に向け、2年に一回のペースで国際シンポジウムを開催する計画をたてております。2026年には、「第2回世界市民教育シンポジウム」をアジア諸国におけるデューイ教育論をテーマに開催する予定です。2028年には、池田先生の日中国交正常化提言60周年を記念するシンポジウムを開催し、2030年には「第3回世界市民教育シンポジウム」を「創価教育の100年と世界市民」と題し開催する予定です。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

以前、周総理の母校である南開大学で行われたシンポジウムにおいて、池田先生は周恩来総理との会見の意義に触れ、次のようなメッセージを研究者の皆様に送られました。

「私も、グローバルな民間外交のさらなる推進とともに、平和と調和の大地たる新たな『対話の文明』の創造のため、そして両国の永遠の友好のために、尊敬する皆様方とともに、さらなる貢献を果たしていきたいと、強く決意しております。」と。

この場に集う一人ひとりが、国や文化の違いを超えて、世界平和に向けて共に行動する姿こそ、周総理と池田先生が50年前に抱かれた志を体現するものであると確信しております。私たち創価大学も、本シンポジウムを通じて、平和と共生の未来を皆様とともに歩み続ける決意を新たにしております。

最後に、改めて、周恩来総理と池田先生に対し、心からの敬意と感謝を捧げます。本日は誠にありがとうございました。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作 —実現に至らなかった会談をめぐる—

塩 原 将 行

目 次

はじめに

1. 冷戦下におけるケネディの“対話”による緊張緩和
2. ケネディから池田への会談申し入れとその背景
3. ケネディの意向を伝えた人物
4. 戸田城聖の遺命実現とケネディとの会談
5. 自民党大物代議士の“横やり”による会談中止
6. 会談中止後の実現可能性
7. 池田にとってケネディは“心の盟友”

おわりに

資料1～8

ジョン・F・ケネディと池田大作関係事項年表

はじめに

一昨年、思いがけなく、*The Japan Times* 紙（1963年2月16日付）に掲載された池田大作へのインタビュー記事（巻末の資料1）を手にすることができた。そこには、“Soka Gakkai Plans JFK Meeting” “Group’s Leader Eyes K’chev Parley Too” という2段の見出しとともに、“Actually, it was planned that the Soka Gakkai leader would meet Kennedy sometime this month or early next month, but because of political reasons the plans fell through” と書かれていた。これは、創価学会第3代会長の池田大作（1928～2023年）が、ケネディからの会談要請に応じて、1963（昭和38）年の2月か3月のはじめにアメリカ合衆国（以下「アメリカ」と略す）第35代大統領ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ（1917～1963年）（以下「ケネディ」と略す）と会談する予定であったが、何らかの“政治的理由”で頓挫したことを意味している。この記事は、中止決定から間もない時期に池田から直接聞き取った記録である。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

インタビューが行われたのは、1963（昭和 38）年 2 月 14 日（木）である。インタビューが掲載された 2 月 16 日付の記事には“*Ikeda told The Japan Times in an interview Thursday*”（下線引用者）と書かれている。

ちなみに、創価学会が対外的に初めて会談申し入れとその中止を発信したのは 2 月の男子部幹部会（『聖教新聞』への記事掲載は、2 月 5 日）で、*The Japan Times* 誌関係者も、この時知ったと思われる¹。

ケネディから申し入れがあった時期は、その後池田が行ったトインビー、周恩来、ゴルバチョフなど数多くの国家指導者・文化人・学者との会談の最初期にあたる。1967（昭和 42）年 6 月に会ったモーリス・ジャベール（ベルギー国立二十世紀バレエ団主宰者）とロベール・ギラン（フランスのジャーナリスト）や、同年 10 月に会い、後に池田にとって初めての対談集に結実したリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー（パン・ヨーロッパ運動提唱者）との会談より前ということになる²。

この記事を読んで、次のような疑問が湧いてきた。

- (1) ケネディは、なぜ池田との会談を希望したのか。そして、どんなことを池田と語り合いたかったのか。
- (2) 池田の存在を誰がケネディに伝え、ケネディの会談希望の意向を誰が池田に伝えたのか。
- (3) ケネディに会った際、池田は何を語ろうと考えていたのか。
- (4) *The Japan Times* 紙に書かれている「政治的理由により頓挫」とは、どのようなことだったのか。
- (5) *The Japan Times* 紙の見出しに「J F K との会談を予定」とあるが、会談中止後も実現の可能性はあったのか。
- (6) *The Japan Times* 紙の見出しにある「フルシチョフとの会談も視野に」の意味することとは。

このような疑問を解決するため、本稿では、*The Japan Times* 紙の記事だけでなく、このインタビュー以前に開催された創価学会男子部幹部会（1963 年 2 月 1 日）と女子部幹部会（同月 4

¹ 高瀬広居は『週刊読売』1963 年 2 月 17 日号（2 月 7 日発売）において、「〔2 月度男子部幹部会の〕来賓席には、評論家協会のメンバーが来ていた。そして席について間もなく、政治評論家の細川隆元氏がやってきた」（13 頁）と記している。また、『週刊文春』の記者も、1963 年 2 月 25 日号（2 月 18 日発売）に掲載される「折伏に生きる若き指導者・池田大作 この人と一週間」の密着取材（2 月 1 日から 7 日）のため、幹部会の会場である早稲田記念会堂に来ていた（同誌 88 頁参照）。*The Japan Times* 紙の論説委員長斎藤忠は、小平芳平『創価学会』（鳳書院）の再版（1962 年 8 月 15 日刊）に収録された識者による「私の見た創価学会」に「重大なる責任の自覚」と題した文章を寄せている。男子部幹部会には、同紙関係者も臨席していた可能性がある。

² 「池田 S G I 会長が会見した海外の主な人物一覧」（東洋哲学研究所編『池田大作 世界との対話—平和と共生の道を開く』、第三文明社、2010 年）、280 ～ 318 頁参照。

日)における池田講演(資料2,3)、1970(昭和45)年に出版された浅野秀満『あすの創価学会』(経済往来社)の池田からの聞き取りに基づく記述(資料4)、ケネディとの会談に言及した主な池田の記述・発言(資料5)、などを精査した。

さらに、池田がケネディとの会談について最も詳細に記しているのは、創価学会の歴史を自ら綴った小説『新・人間革命』第7巻(資料6)である。そのため、同書も視野に入れて考察を進めることにした。

1. 冷戦下におけるケネディの「対話」による緊張緩和

a. 核戦争の危機から緊張緩和へ

最初に、冷戦下のケネディ政権が、危機的な国際情勢に対して、どのような姿勢で臨んだのかを概観しておきたい。

1962(昭和37)年10月、ソビエト社会主義共和国連邦(以下「ソ連」と略す)が、核弾道ミサイルを含む攻撃用兵器をキューバに持ち込んでいることが明らかになった。このことについて、当時アメリカの国防長官だったロバート・S・マクナマラは、「核時代到来以来、最大の破滅的戦争の危険に直面した³」と記している。

青野利彦は、『「危機の年」の冷戦と同盟—ベルリン、キューバ、デタント 1961-63年』(有斐閣、2012年)において、次のように述べている。

「〔ケネディが大統領に就任した1961年1月から〕自身がこの世を去る六三年十一月までの間、ベルリン、キューバ、ラオス、ベトナム、コンゴ、中東と、世界中で紛争に直面した。(中略)ケネディ政権期の二年一カ月は、アメリカが『グローバル危機』に直面した『危機の年(the crisis years)』であった。

この『危機の年』の冷戦対立の中で、最も危険だったのは、一九六一年から翌年にかけて発生したベルリン危機と、一九六二年十月のキューバ・ミサイル危機とであった。特にキューバ危機は、第二次世界大戦後、人類が熱核戦争に最も近づいた瞬間であった⁴。しかしキューバ危機の終息後、アメリカとソヴィエト連邦は関係改善へと向かった。その結果、六三年七月に部分的核実

³ ロバート・ケネディ著／毎日新聞社外信部訳『13日間 キューバ危機回顧録』(中公文庫、2014年改版)、マクナマラの序文「非凡に結合した人間」の9頁。1962年10月16日、閣議室で米軍偵察機がキューバに建設中のミサイル基地を発見したことについて正式な事情説明が行われる。10月22日、ケネディ大統領が国民に事態を公表し、キューバを海上封鎖すると発表。10月24日にソ連の輸送船が封鎖線に近づき一触即発の状態になったが、10月28日にソ連のフルシチョフ首相がミサイル撤去を正式に発表し、最悪の事態は回避された。

⁴ ちなみに池田は、キューバにおける危機事態について、1962年10月28日に行われた創価学会本部幹部会において、「これは絶対に、戦争を起こしてはならない。この祈りが大事になってきました。」と強い危機感をもって語っている(『聖教新聞』1962年11月1日付2面参照)。

験禁止条約（the Partial Test Ban Treaty; PTBT）⁵が締結され、一定の緊張緩和状況——デタント状況——が達成されたのである」（下線引用者、2頁）

続けて青野は、1963（昭和38）年のデタントは、その後の米ソ関係安定化の出発点とみなすものだと言えようが、実際のところ解決のできなかった問題、具体的には相互に絡まりあった5つの争点（ドイツ統一、東西ベルリン問題、核不拡散、東西不可侵協定、核実験禁止）が存在していたことを指摘している。ちなみに、この5つの争点は、アイゼンハワー前政権から継続している課題であった⁶。

キューバ・核ミサイル危機⁷直後のケネディとフルシチョフ（ソ連首相）について、青野は、次のように記している。

「翌〔1962年10月〕二十八日朝、フルシチョフはミサイル基地撤去を宣言したが、この宣言に対する回答の中でケネディは、『おそらく、危険から一歩後退した今なら』米ソは、軍縮という『決定的に重要な領域で、共に歩むことができるでしょう』と強調し、特に核不拡散問題と核実験禁止問題を最優先すべきであるという見解を示した。（中略）

他方、フルシチョフも、キューバ危機直後から、危機の解決を米ソ合意につなげる意志を示している。（中略）二日後の十月三十日にフルシチョフは再び書簡を〔ケネディに〕送り、キューバ危機のような深刻な紛争の再発防止を訴えた。そして、東西緊張緩和のために、核実験禁止条約や東西不可侵協定を締結し、またドイツ問題を解決することを提案したのである⁸」

なお青野は、このようなやりとりが米ソ冷戦を大きく変えたとする見方に対して疑問も投げかけている。

「キューバ・ミサイル危機は、冷戦史上の大きな転換点だとされてきた。カリブ海で核戦争の可能性に直面した米ソが緊張緩和に大きな関心を抱き、それがPTBTの締結に象徴される一九六三年のデタントへとつながったと描かれてきたのである。しかし実際のところ、キューバ危機後、米ソ関係は直線的に緊張緩和へと向かったわけではない。危機後の六二年秋から翌年春にかけて、米ソ関係はジグザグの道筋をたどった⁹」（下線引用者）

⁵ 地下での核実験をのぞき、大気圏内外あるいは水中での核実験を禁止する条約。アメリカ・イギリス・ソ連のほか、発効日までに105カ国が調印した。ただし、フランス・中国などは不参加（前田寿『軍縮交渉史 1945年—1967年』、東京大学出版会、1968年、637頁参照）。PTBTについては、「部分的核実験禁止条約」もしくは「部分的核実験停止条約」と訳されている。本稿では、引用を除き前者を使用した。

⁶ 前出、青野利彦『「危機の年」の冷戦と同盟』、2～8頁参照。

⁷ 従来、「キューバ危機」もしくは「キューバ・ミサイル危機」と記されることが多いが、当時国務長官だったマクナマラによれば、「一九六二年にキューバに駐留していたソ連軍は、中距離ミサイルの核弾頭だけでなく、核兵器も戦術核兵器の弾頭までも持っていた」（ロバート・S・マクナマラ著／仲晃訳『マクナマラ回顧録 ベトナムの悲劇と教訓』、共同通信社、1997年、「付章 一九六〇年代の核による危機と二一世紀への教訓」の453頁）とのことなので、八木勇『キューバ核ミサイル危機』（新日本出版社、1995年）の表記も踏まえ、本稿では「キューバ・核ミサイル危機」とした。あわせて、シオドア・C・ソレンセン著／山岡清二訳『ケネディの遺産 未来を拓くために』（サイマル出版会、1970年）の347頁などを参照。

⁸ 前出、青野利彦『「危機の年」の冷戦と同盟』、182～183頁。

⁹ 同前、182頁。

「キューバ危機の経験は、危機後の米ソ関係の展開にも影響を与えた。この論点については長らく、危機の経験が米ソに緊張緩和を模索する動機を与えた、という『ポジティブ』な側面のみに光が当てられてきた。しかし（中略）キューバ危機の影響には、アメリカの対ソ不信を強めるという『ネガティブ』な側面も存在していた¹⁰⁾」

このような米ソ間の交渉に加え、1962（昭和 37）年夏までには中華人民共和国（以下「中国」と略す）の核保有の懸念が高まっていた¹¹⁾。1963（同 38）年中には中国が核実験を行うことが予想されており¹²⁾、中国への対応がケネディ政権にとっての難題になってきていた。さらに、同じ社会主義国である中ソの関係も、1960（昭和 35）年以降悪化の一途をたどっていたのである¹³⁾。

ともあれ、キューバ・核ミサイル危機の回避には、ケネディとフルシチョフによる書簡や特使を通しての「対話」があったことは事実である。ケネディの弟ロバート元司法長官は、自著『13 日間 キューバ危機回顧録』において、相手の立場に立って考えることの大切さを次のように述べている。

「キューバ危機の究極的な教訓は、われわれ自身が他国の靴をはいてみる、つまり相手国の立場になってみることの重要さである。危機の期間中、ケネディ大統領は、自分のやっている行動の中で、なによりもまず、こういう行動をとったらフルシチョフあるいはソ連に、どんな影響を与えるかをはかり知ろうと、より多くの時間を費やした。彼の慎重熟慮を導いたものは、フルシチョフを侮辱したり、ソ連に恥をかかせたりしないという努力であった。それは、彼らに付託されているソ連の安全保障とか国益のゆえに、対米対応策をエスカレートしなければならないと思い込ませないようにすることだった¹⁴⁾」

「危機がすべて終わったあとでさえ彼〔ケネディ大統領〕は、有頂天になって喜び、ソ連に屈辱を忍ばせるような言動を、いっさい許さなかった。彼はこの事件を、彼自身あるいはケネディ政権の、手柄であることを示すような声明は、いっさい行なわなかった。彼は、エクス・コム¹⁵⁾と政府の全員に対し、どんな形でも勝利をうたうようなインタビューや言明を、いっさい行なってはならないと指示した。

彼は、なにが自国の利益で、なにが人類の利益かを、適切に判断したフルシチョフを尊敬した。

¹⁰⁾ 同前、4～5 頁。

¹¹⁾ 同前、188 頁参照。『朝日新聞』東京本社版 1962 年 8 月 5 日付朝刊 3 面には、中国外相陳毅の談話として、「原爆製造の研究進む」という見出しの記事が掲載されている。

¹²⁾ 『読売新聞』東京版 1962 年 8 月 28 日付朝刊 2 面には、「中国が数か月内に核実験」という見出しの記事が米軍縮局筋談として掲載されている。ただし、中国が実際に初の核実験を行ったのは、1964 年 10 月 16 日。67 年 6 月 17 日には、初の水爆実験が行われ、中国はアジア初の核保有国になった（平松茂雄『中国 核大国への道』、勁草書房、1986 年、178 頁参照）。

¹³⁾ 穴戸寛『中ソ対立の歴史的経過』（菊地昌典他『中ソ対立 その基盤・歴史・理論』、有斐閣選書、1976 年）、146～185 頁参照。同書で穴戸は、「中ソ会談の決裂、部分核停条約の締結で中ソ関係は決定的な対立の段階に入った」（179 頁）と記している。

¹⁴⁾ 前出、ロバート・ケネディ『13 日間 キューバ危機回顧録』、105 頁。

¹⁵⁾ キューバ・核ミサイル危機に対応するために設置された「国家安全保障会議執行委員会」のこと（同前、20 頁参照）。

もしこれが一つの勝利であったとするならば、それは次の世代にとっての勝利であって、特定の政府や、特定の国民にとっての勝利ではなかったのである¹⁶⁾

ケネディが池田との会談を打診したのは、このように世界が最も緊迫したキューバ・核ミサイル危機の緊迫感が残っていた頃のことである。ちなみに、1970（昭和45）年の浅野によるインタビューの後、池田がケネディからの会談要請について次に語るのは、1990（平成2）年に出版されたライナス・ポーリングとの対談集『「生命の世紀」への探究—科学と平和と健康と』に結実した対談においてである¹⁷⁾。ポーリングが、ケネディが部分的核実験禁止条約締結を決断した時のことを話した後、池田は次のように語っている。

「ケネディ大統領といえば、私にも一つの思い出があります。当時、ケネディ大統領から招待状をいただいてお会いする予定でした。折悪しく私のほうの都合でお会いすることができず、今もって残念な思いが残っております¹⁸⁾

b. 大統領在任3年間の功績

ケネディの大統領就任式を現地で取材した大森実は、ケネディがダラスで凶弾に倒れた直後に「偉大な指導者を失う」と題して、次のように記している。

「ケネディ政治の真骨頂は、強烈な指導性、である。その指導性、を裏打ちの考え方は、真実に対する大胆なる対決であり、真実に対応する政策を真一文字に突きさせること。ただし、ケネディ列車は、ただ一本の軌道を走るだけでなく、彼のことばを借りれば『現実的、実利的に世の中の無限の複雑さに対して誤った行動をとらぬようにすること。それ以外の原則はない』という政治原則を貫くこと。それがケネディそのものであり、過去三年間のケネディ政治は実際にこの原則で貫き通されたといつてよい¹⁹⁾

また、西洋史・アメリカ史の研究者である中屋健一は、ケネディの死から4年後に次のように述べている。

「在任わずか二年十か月という短い期間ではあったが、彼が大統領に就任した一九六一年一月と彼がこの世を去った一九六三年十一月の世界情勢を比べるだけでも、その間に大きな変化と進歩が起り、その変化と進歩をもたらした原動力が、彼の努力にあることを知ることができよう。アメリカ国内においては、景気は後退し、失業者の数は増加していた。

しかし、一九六三年には景気はまったく回復し、失業者の数も減少していた。彼の主唱したニュー・フロンティア諸政策は、議会勢力の反対にあつて、完全に実現したとはいえないまでも、

¹⁶⁾ 同前、108～109頁。

¹⁷⁾ 同書は、1987年2月以降4度の語らいをもとに出版された。ポーリングは、1954年にノーベル化学賞を受賞。さらに、核兵器廃絶への取り組みにより、1962年にノーベル平和賞を受賞している。

¹⁸⁾ ライナス・ポーリング／池田大作『「生命の世紀」への探究—科学と平和と健康と』（読売新聞社、1990年）、166頁。

¹⁹⁾ 『毎日新聞』東京版1963年11月23日付夕刊3面。大森実は、1954年から62年まで、毎日新聞社ワシントン特派員・ニューヨーク支局長・ワシントン支局長を歴任している。

公民権、社会保障、教育、宇宙競争、インフレ克服などにおいて相当の成果を収め、次の大統領ジョンソンの『偉大なる社会』政策に引き継がれて着実に前進している。また、外交政策の面においても、暗雲たちこめていた東西関係の改善に全力を傾け、ついに部分的ながら核実験停止条約の成立にこぎつけ、また、キューバへのソ連ミサイル持込みによる危機を巧みに切り抜け、平和共存体制の基礎をつくることに成功し、第三次世界大戦の危険を遠ざからしめたことは、私たちにとっても幸いなことであった。ケネディと反対の立場に立ち、異った思想を持っていた、ソ連の前首相フルシチョフも『彼は情勢を現実的に把握し、現在世界を分裂させている国際問題を、交渉によって解決する道を見いだそうと努力した、幅の広い見解を持った政治家であった』と賞賛している。まさに、ケネディは、偉大なる世界の指導者であったということができよう²⁰⁾

c. 核管理の取り組み

ケネディとフルシチョフとの間の非公式な使者²¹⁾を務めたノーマン・カズンズは、「ジョン・F・ケネディの遺産」の中で、ケネディがアメリカ大統領の職をどのように考えていたかを次のように述べている。

「彼〔ケネディ〕は彼の地位には、単にアメリカ人だけでなく、世界のあらゆる地域の何千万という人々の希望が托されていることを知っていた。国家的利益と人類の利益は一致すると彼は深く信じ、それをしばしば口にした。歴史的に、また哲学的に、これはいつも重要な思想であったが、核時代において、それは厳然たる現実となり、支配的な原理になった。彼は二億に近いアメリカ人から成る国家の大統領に選ばれたのであるが、彼の責任の、ある部分は全人類に及んでいた。

(中略)彼の仕事は人類の全将来につながっていることを彼は知っていた。人類の歴史において、ひとりの人間がこれ以上大きな責任を背負わされたことはないのである²²⁾」(下線引用者)

そのうえでカズンズは、ケネディの最大の功績を次のように記している。

「ジョン・ケネディの政策はそれ〔分別のある対話〕を通じてソ連が他国の犠牲において国家的、イデオロギー的利益をおし進める可能性のあるあらゆる隙間をふさぐと同時に、共同の利益ならびに人類の利益のために両国による分別のあるとりきめができるようにあらゆる道を開けておく

²⁰⁾ 中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』(旺文社文庫、1967年)、3～4頁。細野軍治は、ケネディが、その在任中に取り組まなければならなかった問題は、主なものだけでも、対外的には、ベルリン問題、ラオス・ベトナム問題、キューバの問題などがあり、国内的には、黒人問題、宇宙計画問題、社会保障や失業問題があった、と記している(細野軍治『勇気ある指導者 ケネディ』、偕成社、1971年、258～259頁参照)。

²¹⁾ ジェフリー・サックス著／櫻井祐子訳『世界を動かす ケネディが求めた平和への道』(早川書房、2014年)、100頁参照。

²²⁾ ノーマン・カズンズ「ジョン・F・ケネディの遺産」(米国大使館文化交流局出版部編『日米フォーラム』第10巻第4号、永見社、1964年4月)、44頁。©1963 by Saturday Review Inc. 執筆当時彼は、サタデー・レビュー誌編集長。1961年6月のケネディ・フルシチョフ会談の後、カズンズはケネディに、「ロシアの人々に対して、息をのむような新しい姿勢をうち出し、冷戦の終結と米ソ関係の再スタートを呼びかける」よう熱心に勧めている(前出、サックス『世界を動かす』、100頁参照)。

ことだった。この政策の実例はキューバだった。もう一つは核実験禁止だった。この二つは全く反対の方向を目標しているように思われるが、ともに同じ基本的な目的の一部であった。すなわち侵入に抵抗する決意と恒久的な平和を築くためにあらゆる機会を採る決意。

大統領のこの政策は一九六三年六月十日のアメリカン大学の卒業式の演説²³のなかにもっともはっきり述べられている。一九六一年九月二十日の国連総会での演説を除くと、アメリカン大学での演説は彼の在任三年間のもっとも歴史的な、もっとも重要な人間記録である。六月十日の演説においてケネディは新しい現実に直視しようとした。彼は増大する核貯蔵と増大する敵意の狂気を断ち切ろうとした。彼は重大な国際問題に人間的な展望をあてはめようとした。彼はロシア人に直接話しかけ、説教するのでも、叱るのでもなく、彼らの苦しい試練と困難を強調し、共通の希望はもっとも古い敵意をさえ解消することができることを認めた。この演説の全文はソビエトの新聞に掲載された。

六月十日の演説は外交政策の分野における大統領の多分最大の勝利と思われるものを直接生み出した。これは、彼の言葉を使えば、核兵器という鬼をもう一度ピンに押しこめるための戦いの成功であった。彼は核兵器禁止条約に対するソ連の同意をものにし、ついで上院の批准をものにしなければならなかった。そして二つながらものにした。彼はこの条約をそれ自身目的とは考えないで、二国間にあるはるかに困難、かつ重大な問題に打ちこまれたくさびであると考えた²⁴」(下線引用者)

このようなケネディの平和への強い信念を形成したものの一つに、太平洋戦争中、南太平洋において魚雷艇の艇長として従軍した経験が考えられる。1943（昭和18）年8月2日、彼が乗る魚雷艇PT 109は、日本の駆逐艦に衝突されて沈没。乗員13人中2人は行方不明となり、生き残ったケネディとその部下10人は、島から島へ泳ぎ、5日後に救出されるまでの間、過酷な体験（戦争というものの現実）を経験している。この時ケネディは、自らも深い傷を負いながら、負傷した部下を救助したなどとして、名誉戦傷章と海軍海兵隊勲章を受けている²⁵。また、ヨーロッパの戦場では、ケネディの長兄ジョセフ・ジュニアが戦死している。

戦後ケネディは、弟ロバート・妹パトリシアともに、1951（昭和26）年の中近東・アジア旅

²³ 大森実は、「第十八回国連総会と世界政局」（『公明』第12号、公明新聞社、1963年9月）において、「さる六月十日のアメリカン大学のケネディ演説は、言葉を強めて、『ソ連を理解しよう』と説いている。おそらく、歴代アメリカの大統領の言葉として、最初のものであろう。もちろん、ケネディは、ソ連を信頼しようというのではない。『信頼』ではなく『理解』を説いているのである。従って、私は、現段階の米ソ関係を『相互不信』から『相互理解』への過渡期の段階でもないかと考える。そして、その過渡期的段階の意味する変化の意義は、極めて重大である。ワシントンとクレムリンの間に、ホットラインと呼ばれる、直通テレタイプ線が架設され、ついで、部分核停条約が調印された。さらに、米英ソ三国は、国連でも外相会議を開き、相互理解のための努力を継続することによって、東西の緊張を一つ一つ、揉みほぐそうという態度に出ている」(下線引用者、20頁)と述べている。

²⁴ 前出、ノーマン・カズンズ「ジョン・F・ケネディの遺産」、46～47頁。

²⁵ 前出、細野軍治『勇気ある指導者 ケネディ』、164頁などを参照。

行の途次、10月下旬頃に1日東京に立寄っている²⁶。その折出会った青山学院大学教授の細野軍治に、彼が乗っていた魚雷艇を沈めた駆逐艦の艦長を探してほしいと依頼。早速細野が調査し、その艦は「天霧」で当時の艦長は花見弘平だと判明した²⁷。ちなみに、ホワイトハウスの私的応接室には、天霧の生存者17人の寄せ書きが表装されて飾られている²⁸。

ロバート・ドノヴァンは、次のように述べている。

「この魚雷艇でのケネディ大統領の体験と、その結果彼が耐え忍ばなければならなかった苦痛が、彼を賢明で強い、一層自信に満ちた人に鍛え上げていたのであった。もしPT109の体験がなかったならば、彼はホワイトハウスの主人公にはなりえなかったかも知れないのである²⁹」

d. 「平和部隊」に参加した青年たちへの期待

ケネディは、平和社会実現のため、青年に大きな期待を寄せていた。特にそれが表われているのが、ニュー・フロンティア政策の一環として、就任まもない1961（昭和36）年3月1日に大統領令に署名し発足させた「平和部隊」（Peace Corps）である³⁰。中屋健一は、次のように記している³¹。

「ケネディの考え方によれば、平和というものは、戦争さえなければそれでよいというものではなかった。共産主義によって引き起こされた不安と闘争から脱して、自由で独立した諸国家による国際社会をつくるのが平和のため必要であった。それには、恵まれた国々が欠乏と貧困に苦しんでいる国々を援助することが、まず大切だと、彼は考えた³²。（中略）新興国は、国によってその進歩の程度が異り、また、それぞれ異った問題に直面していた。だから新興国の近代化のためには、それぞれの国の資源を動員して長期計画をたてさせなければ、いくらアメリカが援助しても効果がないことをケネディは知っていた」

「〔ケネディは〕二つの特別の計画を進めた。一つは、平和のための食糧、計画で、（中略）もう一つの特別計画というのは平和部隊であった。（中略）平和部隊は、アメリカの青年男女をアジア、ラテン・アメリカ、あるいはアフリカのおくれた国々に送って、それらの国の教育や生活の向上に役立たせようという雄大な試みであった。（中略）初め発表されたときは、『文明から遠

²⁶ ロバート・F・ケネディ著・波多野裕造訳『自由の旗の下に 正義の友として勇敢な敵として』（日本外政学会、1962年）の13～15頁、および、図録『「JFK—その生涯と遺産」展』（国立公文書館、2015年）の26頁などを参照。

²⁷ 細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」（『拓殖大学百年史研究』第6号、拓殖大学創立百年史編纂室、2001年）、4～5頁参照。著者は、細野軍治の次男。

²⁸ 朝海浩一郎「ケネディ大統領の憶い出—精通していた日本の問題—」（『経済往来』第16巻第1号、経済往来社、1964年1月）の84頁、および、細野軍治「訪米記（四）」（『ニュースレター』第252号、日本外政学会、1961年3月21日）の7頁を参照。

²⁹ ロバート・ドノヴァン著／波多野裕造訳『PT109 太平洋戦争とケネディ中尉』（日本外政学会、1963年）、345頁。

³⁰ 日本では、同様の趣旨の青年海外協力隊が1965年に発足した。

³¹ 前出、中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』、183～187頁参照。

³² 牧口常三郎が『人生地理学』で提唱した「人道的競争」と相通じる考え方である。

いアフリカやアジアのジャングルの中で、二年間も働き、大切な青春を棒にふるようなもの好きがあるものか』と笑った人たちもいた。しかし、『諸君の国が諸君のために何をなしうるかを聞いたもうな。諸君が諸君の国のために何をなしうるかを聞いたまえ』というケネディの就任演説の言葉はアメリカの青年たちに大きな勇気を与えた。アメリカの青年たちは、これにこたえて立ち上がった。彼らは無気力になっていたのではなかった。彼らに機会と目標を与えるものが今までなかっただけのことである」

「平和部隊に対しては、ケネディは特別の関心をはらった。彼らは帰国するとホワイト・ハウスに招かれ、ケネディは一々労をねぎらって握手した。一人一人が大使なみに取り扱われたのである。隊員は「ケネディの子どもたち、と呼ばれるときもあった」

平和部隊は、1年目(1962年)には698人のアメリカの青年男女が12カ国で働き、2年目(1963年)には3,992人が41カ国で働き、1,017人の志願者が訓練を受けて14カ国に配属されることになっていた³³。この平和部隊は、共和党政権下でも中断されることなく継続し、1997(平成9)年までに約14万3千人がおよそ130カ国の開発援助に参加している³⁴。

2. ケネディから池田への会談申し入れとその背景

a. 会談申し入れの時期と経緯

ケネディからの池田への会談申し入れについて、浅野は『あすの創価学会』において、次のように記している。

「かつて池田は、アメリカの故ケネディ大統領から『内密の会見』を申しこまれたことがある。

東京・信濃町にある学会本部に、ある有力民間人が意向打診に現われた。

アメリカ国務省の意を受けてきたといい、

『ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている³⁵。国務省が私に、使者として意向をたしかめてほしいと依頼してきた。いかがですか』

池田は、突然の話に驚いたが、二人の会見がケネディ大統領の強い希望であることを確認したあと、しばらく考えたという。

池田が会長に就任して三年目の〔昭和〕三十七年十二月で、当時、日米安保条約締結による混乱が尾を引き³⁶、左右両翼が激しい対立をみせていた。学会は、そうした国内情勢のなかで、参議

³³ 米国大使館文化交流局出版部『日米フォーラム』第9巻第5号(永晃社、1963年5月)、口絵頁参照。

³⁴ 栗木千恵子『ケネディの遺産 平和部隊の真実』(中央公論社、1997年)、4頁参照。

³⁵ 池田は、『新・人間革命』第7巻の「操舵」の章で、「個人的に会いたい旨の要請」があったと記している(聖教ワイド文庫、2004年、333頁)。

³⁶ 1960年6月、改定日米安全保障条約に反対するデモ隊が連日国会議事堂を取り囲み、革命前夜の様相を呈していた。6月15日、国会議事堂構内に突入した全学連の学生と制圧する警官隊がぶつかり、混乱の中、東京大学学生の樺美智子が犠牲になった。日本国内が騒然としたことで、6月20日に予定されていたアイゼンハワー大統領(ケネディの前任)の訪日は中止になった(田中浩『戦後日本政治史』、講談社学術文庫、1996年、167～172頁参照)。

院に進出するなど、政治的にも比重が大きくなりつつあった。ケネディ大統領の会見意図はなにか。内外に政治的に利用されないか。アメリカ布教のこともある……。

『お会いしましょう。私もお話ししたいことがいろいろあります』³⁷⁾ (下線引用者)

以上のように浅野は、アメリカ国務省の意向を受けた有力民間人が学会本部に池田を訪ねて来たのは、1962 (昭和 37) 年 12 月と書いている。池田も、「ケネディ大統領から、私に会いたいと連絡が入ったのは、一九六二年 (昭和三十七年) の暮れであった³⁸⁾」と記している。

ケネディはなぜこの時期に池田に会談を申し入れたのだろうか。その理由を池田は、*The Japan Times* 紙のインタビューで、「ケネディはきっと、学会が将来、どちらの方向に行くのか、反共になるのか、容共になるのか、じかに聞きたかったのだでしょう」と述べている³⁹⁾。これは、会談の意向打診に訪れた人物の話からケネディの意図を推し量ったものと思われる。

秋山栄子によれば、夫の秋山富哉 (当時、創価学会のニューヨーク支部長) は、1963 (昭和 38) 年 1 月 14 日に池田から「ケネディ大統領と会見するかもしれない。来月、もう一度、アメリカに来るからね」と聞いたとのことである⁴⁰⁾。また、池田に同行して渡米していた渡部一郎も、同年 1 月 14 日頃に「今度、ケネディ大統領と面会することが決まったよ」と池田から聞いている⁴¹⁾。

b. ケネディのアジア政策

大統領に就任したケネディは、1961 (昭和 36) 年 8 月のベルリンの壁の問題や 1962 (同 37) 年 10 月のキューバ・核ミサイル危機の回避など、共産主義の大国ソ連との困難な課題に取り組んできた。そして、次に取り組むべき大きな課題は、もう一つの共産主義の大国中国との関係だった。その前に、1960 (同 35) 年の安保騒動以来こじれていた日米関係を修復する必要があった⁴²⁾。

1962 (昭和 37) 年 12 月 3 日 (現地時間)、ケネディは、第二回日米貿易経済合同委員会に出席した日米双方の閣僚をホワイトハウスの昼食会に招き、「現下の問題は侵略主義、スターリン主義と結びついた中共勢力の増大である。いかにしてアジアの共産勢力を封じ込めておくかが問題である。米国は広範な地域に責任を持っているので手薄である。日本も協力者として共産侵略

³⁷⁾ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、55 頁。

³⁸⁾ 池田大作「随筆 人間世紀の光 61」(『聖教新聞』2005 年 1 月 14 日付 2 面)。

³⁹⁾ *The Japan Times* 紙 1963 年 2 月 16 日付 4 面参照。

⁴⁰⁾ 『大白蓮華』第 713 号 (聖教新聞社、2009 年 6 月)、30～31 頁参照。

⁴¹⁾ 吉村元佑が 2025 年 8 月 8 日に記した筆者への書簡による。

⁴²⁾ 松山幸雄「知性、若さ、先見性ある政治家 私が見たケネディ大統領」(日本記者クラブホームページの取材ノート、2013 年 11 月掲載)を参照。松山によれば、ケネディは日米関係修復のために、「まず日本に精通しているライシャワー・ハーバード大教授を駐日大使に任命、次いで、日米貿易経済合同委員会を新設して第 1 回会議にはラスク国務長官ら 5 人の閣僚を日本に派遣、さらに弟のロバート・ケネディ司法長官を訪日させるなど、『日本重視』の政策を次々と打ち出した」とのことである。

阻止に協力してほしい」という趣旨の演説をした⁴³。

ケネディと親交が深い細野軍治は、「恐らくケネディさんとしては再選後アジアの問題と取組み、日米連携して解決しようと考えておつたのであろう⁴⁴」と述べている。

c. ケネディによる対日政策の変化

春名幹男は、1961（昭和36）年1月にケネディが大統領に就任したことで、対日政策が変化してきたとして、次のように述べている。

「若い民主党の大統領が登場して、それまでの基本的な対日政策に変化の兆しが見えた。アメリカの自民党支持に微妙な変化が現れたのだ⁴⁵」（下線引用者）

「ケネディは、大統領就任後、池田勇人首相に会うより三カ月も先に、民社党を支持する労働団体、全労の議長、滝田実をホワイトハウスに招いた。その舞台裏では、こんな政策転換があったのだ⁴⁶」

1961（昭和36）年6月の池田勇人首相訪米前の3月3日、全日本労働組合会議（以下「全労」と略す）初代議長の滝田実は、ホワイトハウスで40分ほどケネディと単独で会った。滝田は、「〔ケネディが〕外国の労働代表との会話ははじめてだそうで、異論もあったらしいが、大統領自身が決断されたのではなかろうか⁴⁷」と記している。彼は、『忘れえぬ人々』に次のように記している。

「ケネディ大統領と私が会談したのは一九六一年（昭和三十六年）三月三日、ホワイト・ハウスの大統領執務室であった。（中略）アメリカ側の私を招きたいとの意向は、マッカーサー駐日大使からうけた。私は当時、総評〔日本労働組合総評議会〕が階級闘争至上主義に走り、容共路線に深入りしすぎることに反対して総評から分かれ、全労会議（後の同盟）を結成して議長の立場にあった。

どうしたわけか、中国やソ連からも招きの打診があり、もしそちらに行けば毛沢東主席やフルシチョフ書記長との会見もありうるとのことであった。私はその意思がないので、訪米するとしたら政治的に全く自由な立場で、出来れば大統領に直接会って日本の労働者や大衆の声を伝えたい旨希望した。

折しも池田首相の五月訪米^(ママ)を控え、それ以前に前例のない労働代表と大統領会談は確約できな

⁴³ 『日本経済新聞』1962年12月5日付朝刊1面参照。

⁴⁴ 細野軍治「ケネディ米大統領を悼む」（『自警』第46巻第1号、自警会、1964年1月）、50頁。飯野海運社長の俣野健輔は、「私の会ったケネディさん」という特集で、1959年4月14日に上院議員だったケネディと会った時、開口一番「日本は中国問題にどのように対処していくつもりか」と尋ねられたのにはびっくりしたと回想している（『週刊朝日』〈緊急増刊〉第68巻第53号、朝日新聞社、1963年12月10日、30頁参照）。

⁴⁵ 春名幹男『秘密のファイル（下）—CIAの対日工作』（共同通信社、2000年）、284～285頁。

⁴⁶ 同前、286頁。

⁴⁷ 滝田実「魔よけの獅子頭を贈ったが」（『週刊朝日』（緊急増刊）第68巻第53号、朝日新聞社、1963年12月10日）、29頁。なお、ライシャワーは、1961年1月31日には既に駐日大使就任を受諾していた。外交委員会と上院本会議で承認されるのは、同年3月28日。

い、が、『とにかく』ということで訪米を応諾した。

二月二十日、ワシントンに着いたが、ただならぬ歓迎の気配であった。まずボールドウィンと会って、日本の国内事情を話した。それからマイアミに飛び、労働界を代表するAFL・CIO(全米労働総同盟・産別会議)のミーニー会長ら幹部らと会談した。そこで就任早々の大統領との会談が決定したことを伝えられた。ただし、『公表するまでは内密に』ということだった。(中略)

テレビやカメラの砲列を早く退け、儀礼的なあいさつ抜きで、二人は単刀直入の話を始めた。

まず私がアメリカの対外政策について、軍事より経済の優先、安保、貿易について意見を述べ、日米間の改善のため、国民各階層との交流を促進するために日本人が親しみ易い人を駐日大使にしたいと希望した。重要な発言だった。大統領は耳をかたむけ、こんな重要な内容を私に語っていいのかと思うほど率直に国内事情や考えを語った。さらに平和部隊の構想を中心に青年への期待などを熱く説いた。最後に、『日米間の各階層の交流』と『訪日』を約束した。信頼の対話だった。会議を終えてブレアー・ハウス(迎賓館)で昼食がもたれた⁴⁸⁾(下線引用者)

まず興味深いのは、ソ連や中国からは最高指導者と会う前提で誘いがかかっていたことである。滝田が議長を務める全労は、共産主義とは一線を画して民社党を支持していたが、アメリカと共産主義を掲げる国の双方から声がかかったというのである。さらにケネディが、青年への期待と訪日の意向を語っていたことも興味深い。

d. 1962年2月のロバート・ケネディ司法長官の来日

池田大作への会談申し入れの約10カ月前、1962(昭和37)年2月4日から10日まで、ロバート・ケネディ司法長官夫妻が、同夫妻歓迎日本青年委員会⁴⁹⁾(以下「RK委員会」と略す)と法務省の招へいで来日している(ただし、4日、5日は政府賓客)。ロバート訪日の目的は大統領訪日の地ならしの意味を持っていたというが⁵⁰⁾、吉次公介は「その最大の目的は、日本における反米感情の緩和だった⁵¹⁾」と述べている。帰国後、ロバートは詳細な報告書を提出し、ケネディは興味深く読んだという⁵²⁾。

ロバート司法長官(当時36歳)は、政府要人だけでなく、青年・学生や労働団体の関係者と

⁴⁸⁾ 滝田実『忘れえぬ人々』(私家版、1996年)、41～43頁。

⁴⁹⁾ 実行委員長は、小坂徳三郎。主な委員は、中曽根康弘・五島昇・藤川一秋・永末英一・鹿内信隆・湯浅佑一・平沢和重・犬養道子。事務局長は、岩堀喜之助。顧問には、紹介者の細野軍治などがついた(『財界』第10巻第3号、財界研究所、1962年2月15日、18～19頁ほかを参照)。中曽根は、『週刊平凡』第4巻第6号(平凡社、1962年2月7日)の「ニュースの広場」で、「昨年の三月十日に、わたしがワシントンで、ロバート・ケネディに会いまして、約一時間半、彼と話をしました。会わしてくれたのは、細野軍治さんと、ジョン・W・マコーマックという当時の民主党の院内総務です」(下線引用者、87頁)と語っている。

⁵⁰⁾ 前出、細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」、7頁参照。

⁵¹⁾ 吉次公介「日米関係史のなかのロバート・F・ケネディ司法長官訪日」(『沖繩法学』第33号、沖繩国際大学法学会、2004年)、79頁参照。

⁵²⁾ 『朝日新聞』東京本社版1962年2月24日付夕刊1面参照。来日前の同紙東京本社版1962年2月3日付夕刊1面にも、「あす来日のケネディ長官／大統領名代、の色彩／注目される視察報告」という見出しが一面トップに出ている。

も積極的に会って、ケネディ大統領のイメージアップとともに、「じかの見聞⁵³」に基づいた確実かつ信頼できる情報を得ようとしていた⁵⁴。

以下、来日時のロバートの行動をできるだけ詳しく挙げてみる⁵⁵。ただし、時間帯は新聞によって異なる場合があるので、おおよその時間帯である。

▽2月4日＝19：26 羽田空港着。米大使館に入る。毎日新聞の波多野裕造記者と単独会見。

▽5日＝6：30～朝日新聞の取材に応じる（米大使館）。7：30～産経新聞・中日新聞・東京新聞の合同取材に応じる（同）。8：30～9：30 池田首相と会談（新宿区信濃町の私邸）。9：40～10：10 小坂外相と会談。10：15～11：20 植木法相と会談。11：20～12：10 衆参両院議長を訪問。衆議院予算委員会を傍聴。12：15～14：00 植木法相主催の昼食会に出席。14：00～14：40 最高裁判所長官・検事総長を訪問。15：00～15：55 NHKで平沢和重（*The Japan Times* 紙編集主幹・産経新聞社論説顧問）と対談（21：00～NHKテレビ録画放送）。16：00～17：30 法律家協会主催のティー・パーティに出席。18：00～米大使館での歓迎レセプションに出席（池田首相はじめ200人）。その後、NHK番組「わたしは誰でしょう」に出演。20：00～22：00 小坂外相主催の夕食会。22：00～中曽根康弘および労組幹部と懇談・夕食。

▽6日＝8：00～9：15 若手財界人10人と懇談。9：15～10：15 社会党議員5人と懇談。10：20～10：55 民社党代表5人と懇談。11：00～自民党若手議員6人と懇談。12：00～学生・青年団体代表17人と懇談。14：00～日本大学の名誉学位記授与式で20分講演（日大講堂、1万5千人）。15：25～16：20 早稲田大学で学生討論会に出席（大隈講堂、4000余人、16：50～NETテレビ録画放送）。18：15～18：55 フジテレビで「ロバート・ケネディ夫妻を囲んで」を収録（18：25～フジテレビ録画放送・21：40～ニッポン放送録画放送・7日22：50～TBSテレビ録画放送）。18：45～19：35 内外記者団100余人と会見（23：35～日本テレビ録画放送）。21：40～22：20 読売新聞社で編集首脳と懇談し、社内を見学。労組幹部とも会う。

▽7日＝5：30～聖ジョセフ修道院訪問。9：30 東京羽田発、10：13 伊丹着。10：45 丸善石油学院授業参観・学生と質疑応答。その後隣接する箕面第一中学校の生徒と交歓。11：20～13：00 松下電器茨木テレビ工場訪問、労働組合代表らと昼食をともにして懇談。13：30～香里団地で主婦らと懇談。14：00～開成小学校を訪問し、授業参観。15：30～奈良東大寺大仏殿を見学。16：15～

⁵³ 『朝日新聞』東京本社版1962年2月4日付朝刊1面。

⁵⁴ 『週刊朝日』第67巻第8号（朝日新聞社、1962年2月23日）は、「こんどのケネディ長官は、明らかに、選挙ボス。よりも選挙民。ひとりひとりに語りかけ、一票一票を確実につかみとるという熱意をみせていた。ことに、アメリカ青年の典型というべき、持ち前の善意と探求心が、日本人に強い印象をのこした」（26頁）と記している。

⁵⁵ 『朝日新聞』東京本社版・『読売新聞』東京版・『毎日新聞』東京版・『日本経済新聞』・『産経新聞』・『東京新聞』・『京都新聞』・『大阪新聞』・『中日新聞』・*The Japan Times*・*The New York Times*などのロバート日本訪問関係記事、および、前出のロバート・F・ケネディ『自由の旗の下に』の32～34頁などを参照。細野軍治は、ロバート・ケネディ司法長官の来日を以前から促進していたので、訪日前に2度ロバートと会って具体的な打ち合わせをしている（『ニュースレター』第282号、日本外政学会、1962年1月21日、4面参照）。

17:00 記者約 60 人と会見（奈良ホテル）。移動のバスの中でも記者と懇談。17:20～17:40 山城町役場で職員と懇談。19:00～R K 委員会主催で関西財界人と懇談。22:00～大学教授 4 人と懇談。
▽8 日＝朝、京都のカトリック教会訪問。7:00～8:00 全労代表 6 人と懇談。8:00～学生 5 人と懇談。9:00～裏千家今日庵で茶会。9:30～京都御所の紫宸殿を見学。11:00～川島織物を見学。12:00～京都新聞記者と会見。13:00～14:30 関西若手財界人約 50 人と懇談。その後、会社員・学生と懇談。15:05～長岡町役場で生活改善展示会を見学。乙訓農協おとくにで農民・職員 20 人と懇談。その後農家訪問。17:00 大阪空港発、18:20 羽田空港着。21:20～22:20 言論界代表 24 人と懇談。
▽9 日＝6:15 ホテル発。大使館そばの霊南坂幼稚園で園児と交流⁵⁶。6:40～合気道道場（養神館）見学。7:15～7:45 理研光学職員・学生約 500 人と後楽園アイスパレスでスケート、中学生と懇談。8:15～川崎工業地帯をバスで見学（ソニー工場を見学し、その後労働者と懇談。日本鋼管水江製鉄所で労働者と懇談後、圧延工場見学。富士電機川崎工場の食堂で労働者と一問一答の後、主要 2 工場を見学。12:40～日本外国特派員協会の昼食会で講演。14:30～総評・炭労・中立労連代表と懇談。15:30～全労・新産別労組代表と懇談。16:30～財界実力者と懇談。18:30～日本外政学会主催のレセプションに出席（天霧乗組員 6 人も出席）。20:00～21:40 R K 委員会主催のサヨナラ・パーティに出席。21:45～産経新聞社訪問、編集・印刷職員と懇談。22:05～毎日新聞社訪問。その後、朝日新聞東京本社訪問。23:00～米報道関係者と懇談。
△10 日＝9:00～京都新聞・産経新聞の記者とそれぞれ会見。宮内庁で記帳。10:10 羽田空港着。香港経由でインドネシアへ向け出発。

このような極めて過密なロバート・ケネディ司法長官の来日日程から見てくることは、ケネディ政権が、政財界の実力者や各政党の代表者だけでなく、むしろ、これからの日本を担う学生や青年、労働者や婦人といった庶民の声に耳を傾けようとしていることである⁵⁷。これは、ケネディがなぜ池田との会談を望んだかを考える上で、大事な視点である。

この訪日は、アメリカ國務省筋も非公式ながら「全体として大成功だったと思う」と語ったようだが、課題もまた見えたようである。『朝日新聞』ワシントン特派員は、次のような記事を寄せている。

「こんどの訪日はとくに政治的な交渉はふくまれていなかったが、同司法長官がケネディ大統領名代の親善使節といった形をとったため、一行の動静には米政府は強い関心を示した。米国の新聞も出発以来細大もろさずとってよいくらい詳細に報道し、ニューヨークタイムズ紙などは岩井総評事務局長との対談の模様を情景描写入りで記事にするほどの力の入れ方だった。（中略）

いちばん派手に報道されたのは早稲田大学で左翼学生のヤジにかこまれた時で、一部には『全学連（これはもう英語になっている）がケネディ夫人の腹にぶつかった』というような刺激的な

⁵⁶ 『産経新聞』1962 年 2 月 10 日付朝刊 3 面参照。

⁵⁷ さらに、『毎日新聞』東京版 1962 年 2 月 6 日付夕刊 1 面によれば、各政党代表者との懇談の中で、沖縄・小笠原返還問題、核実験禁止、中華人民共和国の国連加盟問題などについて、各党の見解を聞いたという。

書き方をする新聞もあったが、全体としては『ケネディ長官が興奮した左翼学生にマイクロフォンを渡したのは言論の自由の何であるかを自ら教えたもの』（クリスチャン・サイエンス・モニター紙）というように日米双方にとって有意義な経験だとする論調が多かった。

（中略）かんじんの国務省では『今後の外交政策にきわめて有益』と双手を挙げて賛成しており、日本の一部に極端な主義者のあることをじかに見ることで自体がよいことだった、と評価している^{58）}（下線引用者）

左翼の学生たちは、ロバートとの会談を拒否したり、デモやプラカードを掲げて彼の行動を邪魔しようとしたりしたのである。弟ロバートからの詳細な報告書を読んだケネディ大統領は、日本の世論をどうしたら好転させることができるか思慮したことと思われる。

ちなみに、凶弾に斃れる3日前の1963（昭和38）年11月19日にケネディは、アジア訪問についてロジャー・ヒルズマン国務次官補らと協議しており^{59）}、細野軍治によれば、1964（同39）年2月のケネディ来日がほぼ確定していたという^{60）}。

e. 参議院の第三勢力になった公明政治連盟

1962（昭和37）年7月1日に投票が行われた第6回参議院議員選挙で、公明政治連盟の9人全員が当選し、全国区7人の総得票数は412万4267票、得票率は11.53%に及んだ。非改選も併せると15人となり、民社党の11議席を抜いて、参議院では、自民党（142議席）、社会党（66議席）に次ぐ第三会派になった^{61）}。公明政治連盟は、7月3日に参議院の院内交渉団体「公明会」結成を発表。7月20日に結成式を行い、12月6日には公明会結成国民大会（台東体育館、約12000人）が開催されている^{62）}。2. a. で述べたように、ケネディから会談の要請があったのは、この年の暮れであった。

ちなみに、公明政治連盟は前年の1961（昭和36）年11月27日に結成され、結成時の議員勢力は、284人（参議院9人、都道府県議会7人、市区議会268人）だった。基本政策は、①核兵器反対（いかなる核兵器の製造、使用、実験のいっさいに反対）②民主的平和憲法の擁護（主権在民、戦争放棄の現憲法を擁護し改悪に反対）③公明選挙、政界の浄化 ④参議院の自主性確立の4項目であった^{63）}。

^{58）} 『朝日新聞』東京本社版1962年2月11日付夕刊1面。

^{59）} 前出、春名幹男『秘密のファイル（下）』、286頁参照。

^{60）} 細野軍治「ケネディ大統領の死を悼む」（『ニューステラ』第349号、日本外政学会、1963年12月1日、8面）参照。

^{61）} 『増訂版 大衆とともに 公明党50年の歩み』（公明党史編纂委員会、2019年）、29～30頁参照。第6回参議院議員選挙の結果、民社党は改選前の16議席を11議席に減らした。ちなみに、『週刊朝日』は、1962年7月の参議院議員選挙前から創価学会の動向を注視しており、1962年6月8日号（5月31日発売）には創価学会についての記事が組まれ、「池田会長との一問一答」が掲載されている。

^{62）} 『聖教新聞』1962年7月24日付1面・12月8日付1面参照。公明政治連盟は、参議院に15議席を得たことで、本会議での代表質問権や法案提出権を持つ院内交渉団体の資格を得ることになり、「公明会」という会派を結成した。

^{63）} 前出、『増訂版 公明党50年の歩み』、28頁参照。

1962（昭和 37）年 7 月 3 日付の『日本経済新聞』朝刊 2 面には、「創価学会台風の目に 護憲勢力のカギを握る」の中見出しで、次のように書かれている。

「創価学会は全国区七名、地方区二名の候補者が全員当選し、一躍参院での第三党にのし上がった。これにより同会は非改選議員を含めて十五の議席を持つことになり、議案発議権、同修正発議権、議院運営委員会委員および常任委員長のポストの割り当てを要求する権利のある 〃院内交渉団体、の資格を獲得した。これは一宗教団体の国会進出としてはわが国の政治史上、空前のものであり、今後の参院の運営に当たっては同会の存在が 〃台風の目、の役割を果たすことは必至である⁶⁴」（下線引用者）

公明政治連盟の躍進は、日本国内だけでなく、アメリカにも伝えられ、一躍創価学会が注目されるようになった。半年後の記事になるが、アメリカ『リポーター』誌の 1963 年 1 月 31 日号には、次のように記されていた。

「七月の〔参議院議員〕選挙で起こった最も驚くべき現象は、創価学会と称する宗教団体の目ざましい進出であった。創価学会からは九名が当選して、参議院の議席数は民社党を上まわって十五議席となり、自民党がたとえば憲法の不戦条項の修正といった憲法改正に必要な三分の二の多数を獲得しようとするような場合には、その成否を左右する潜在的にきわめて重要な勢力となった⁶⁵」

また、当時、読売新聞政治部記者であった渡辺恒雄⁶⁶は、その頃のことを「創価学会に期待するもの」と題して、次のように記している。

「私は昨年〔1963 年 3 月～6 月〕欧米旅行をした際⁶⁷、各地で日本での創価学会の驚異的進出が話題になっているのを知った。特に米国での関心はかなり強いものがあった。国防省やアジア財団の幹部たちからも私はさかんに質問を受けた。彼等の質問は一樣に『ヒトラーの再現ではないか』というのである。学会の統一ある秩序ある行動を見たり聞いたりした彼らは、池田会長の強力な指導力をヒトラーのそれと同一視しかけていた。

私は彼等の質問に答えていった。『ファシズム、ナチズムの特性は独占資本や軍需資本と結

⁶⁴ 『日本経済新聞』1962 年 12 月 5 日付 1 面の「記者手帳」には、「大平外相の留守中外相臨時代理となった川島行管長官が四日閣議後外務省に姿をみせ記者会見を行なった。（中略）話が日韓問題におよぶと『西尾民社党委員長まで日韓会談賛成だから楽だよ。民社党と社会党では国際感覚が自民党と社会党以上に違っているんだ』と民社党はわが陣営といわんばかりだったが、そのすぐあとで『もともと西尾さんより創価学会がああいうことを言ってくれたほうがより影響が大きいんだがね……』」と書かれている。

⁶⁵ エドワード・ネイラン「日本の社会主義の四つの顔＝日本社会党を分析する＝」（内閣調査室監修・内外情勢調査会編『国際情勢資料』第 872 号、1963 年 2 月 19 日）、8 頁。

⁶⁶ 渡辺恒雄（1926～2024 年）は、日本の新聞記者・実業家。株式会社読売新聞グループ本社代表取締役主筆。政治部長時代、池田大作と宮本顕治にそれぞれ単独インタビューを行い、創共十年協定をスクープしている（渡辺恒雄『増補版 わが人生記 青春・政治・野球・大病』、中央公論新社、2021 年）、33～34 頁参照。

⁶⁷ 『読売新聞』東京版 1963 年 6 月 14 日付朝刊 1 面には、「渡辺記者帰社 読売新聞政治部渡辺恒雄記者はアメリカ国務省の招待で二か月間アメリカ各地を視察、そのあと欧州各国を約一か月歴訪し十三日午後九時十五分羽田着、帰社した」という記事が出ている。出発したのは、1963 年 3 月 4 日。渡辺は、2 か月間のアメリカ視察の間、政治家・政治学者・政治記者と会っている。

託すること、および戦争と侵略を是認し、暴力と宣伝を政権獲得の手段に使うことだ。だが創価学会は戦争や原水爆実験を否認し、暴力を否定し、またいっさいの資金も会の財務部員の浄財によってまかなっている。私は学会の教理を詳しくは知らないが、創価学会の政治行動は、ファシズムとはまったく別のものだ』と。

私はさらに、日本の議会政治が、財界の利権と結託し、次第に腐敗して行く保守勢力と、労組幹部の公式主義と出世主義に毒されつつある革新勢力との激突の形で展開し、このままで行けばふたたび議会政治の否認思想が一般化する恐れがある。その現情から、財界や労組の紐のついていない第三勢力としての創価学会の進出は、日本の議会政治の浄化、正常化のために大いに役立つだろう——と説明した。

帰国後、今日まで私は外国人に対するこの説明が間違っていなかったことを確信している。私は学会の信徒ではまったくないが、日本の民主政治の健全かつ正常な発展のために公政連がさらに一層進出し、地方政治だけでなく、中央政界で大活躍してもらいたいと期待している⁶⁸」(下線引用者)

ちなみに、ケネディのもとには、池田に対して好意的でない情報も入っていたと思われる。高瀬広居は『週刊現代』1963(昭和38)年3月7日号において、「きくところによると、在日米大使館は池田会長を第二のヒトラーではないかというとらえ方をし、本国にリポートしているといわれる⁶⁹」と書いている。

f. ケネディと部分的核実験禁止条約

ケネディは、大統領在任中に核実験禁止について強い意志を持つようになっていた。部分的核実験禁止条約の締結に向けては、次のようなステップが踏まれている⁷⁰。1962(昭和37)年12月の池田への会談申し入れは、その過程のことであった。

1961年 1月20日	ケネディ、第35代大統領に就任。
6月3日、4日	ケネディとフルシチョフがウィーンで会談。
9月25日	国連での演説で核実験禁止条約の早期締結を提唱。
1962年 10月	キューバ・核ミサイル危機
12月	ケネディ、池田大作へ会談を申し入れる。
1963年 6月10日	ケネディ、アメリカン大学の卒業式で「平和の戦略」と題して演説し、核実験禁止条約の重要性を訴える。ソ連のイズベスチャ・プラウダ両紙は、

⁶⁸ 「私が見た創価学会」(小平芳平『創価学会』4版、鳳書院、1964年4月)、222～223頁。小平芳平『創価学会』には、初版から4版まで「私が見た創価学会」が掲載されているが、版によって掲載されている人物が加除されている(資料6参照)。

⁶⁹ 高瀬広居「戦後異色人物探検33 創価学会会長池田大作」(『週刊現代』第5巻第9号、講談社、1963年3月7日)、75頁。高瀬は、1951年暮以降、少なくとも5度池田と会っている(同前参照)。

⁷⁰ 前出、中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』の198～201・年譜の221～224頁などを参照。

演説全文を掲載。

- 7月2日 ソ連フルシチョフ首相、地下を除く核実験禁止条約の締結に合意。
- 8月5日 米英ソが部分的核実験禁止条約を正式承認。9月24日には、アメリカ上院が80対19の大差で批准⁷¹。

中屋健一は、次のように述べている。

「核実験停止条約は、平和への終着駅ではなく、スタートにすぎなかった。しかし、このスタートを切るためのケネディの忍耐強い、そして慎重な努力はまことに驚嘆に値するものだったといわなければならない。この条約は核兵器を持たない国々も参加できるものだった。日本を初め百を超える国々がこの条約に署名した。フランスと中国は署名しなかった。しかし、冷たい戦争はゆるみはじめ平和共存への道はともかく開かれた⁷²」

ケネディが核実験禁止についての考えを表明する前まで、核実験禁止活動に対するアメリカ政府の対応は極めて厳しいものがあつた。同活動を推進してきたライナス・ポーリングは、池田との対談で次のように語っている⁷³。

「ポーリング 私はバリー・コモナー、エドワード・コンドンと共同で、核実験停止の請願を書き、回覧して署名を集めました。その後、一九五八年一月十五日、ハマーショルド国連事務総長に世界各国の科学者が署名した請願を手渡しました。この請願書は『核実験の即時停止を要請する国連への請願書』と題したものです。

核実験反対の請願書に署名した科学者の数は、最終的に一万三千人になりました。これは一つの声明文に署名した科学者の数としてはおそらく最大のものでしょう。

(中略)

池田 科学者の発言は、核兵器の脅威を細部にわたって知悉しているだけに重みがあり、政治家にとって耳が痛いものであつたにちがいません。

ポーリング ですから、政治家の反応も大変厳しいものがありました。私の平和活動に対する当局の素早い反応は、米国上院国家安全保障小委員会に出頭せよ、という召喚状でした。しかし聴聞会は数年間延期されました。米国上院侮辱罪で禁固と罰金を科すと脅されましたが、これらの脅しは実行されませんでした。

ジョン・F・ケネディ大統領が部分的核実験禁止条約締結を決断したときから、当局の私に対する態度に変化が現れました。私に対する大統領の話から判断すると、私の活動が大統領の決断にある程度の影響を与えたと思います。

(中略)

ポーリング 私は大気圏核実験再開について、ケネディ大統領に手紙を書き、そのなかで次の

⁷¹ ロバート・ダレク著／鈴木淑美訳『JFK未完の人生 1917-1963』（松柏社、2009年）、657頁参照。

⁷² 前出、中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』、201頁。

⁷³ 前出、ライナス・ポーリング／池田大作『「生命の世紀」への探究』、164～167頁。

ように述べました。『あなたが核実験を再開したのは邪悪なことです。なぜなら、核実験は奇形児——つまり遺伝子の損傷による欠陥をもった子供——が生まれる原因となるからです。また人々がガンに侵される原因となるからです』

大統領からは返信がありませんでした。私が彼と唯一の会話を交わしたのはホワイトハウスに行ったときのことです。レセプションがあり、私はその晚餐に招かれていました。

大統領夫人が私を大統領に紹介してくださいました。大統領は私に会えてうれしいと話した後、『ボーリング博士、これから先もあなたの信念を堂々と発表してください』と言いました。それが大統領と私が交わした唯一の会話でした。

私はうれしく思いました。当時、政府は当然のことながら私を攻撃しておりました。しかし、ケネディ大統領が、アメリカは部分的核実験禁止条約を締結すべきであるとの見解を表明したとき、私の立場が正当化されたのです。それはレセプション直後ではなく、二年ほど経ってからのことでした。ホワイトハウスで晚餐会があったのは、一九六一年のことでした」(下線引用者)

g. 池田は「日本の青年 100 万人」の代表

ケネディはなぜ、池田に会談を申し入れたのであろうか。*The Japan Times* 紙は、記事の冒頭の「拡大を続ける宗教団体・創価学会の 35 歳の会長池田大作は、近いうちに“日本の青年 100 万人”の代表としてジョン・F・ケネディ大統領との会談を予定している」に続いて、次の池田の発言を掲載している。

“Our organization now has one million youths. This means that we have Japan's future in our hands.”

“Representing these one million young men and women, I would like to meet President Kennedy and ask him to stop testing nuclear weapons.”

「我々の組織には現在 100 万の青年がいます⁷⁴。これは日本の未来は我々の掌中にあるということです」

「私は、この 100 万の男女青年を代表してケネディ大統領とお会いし、核実験をやめるよう伝えたい」

池田は、日本の 100 万人の青年の代表としてケネディに会うと言っている。ケネディも、日本の青年のリーダーである池田と語り合いたいと伝えていたのかもしれない。当時創価学会の副理事長・青年部長であった秋谷栄之助によれば、ケネディとの会談に男子青年部幹部が同行するこ

⁷⁴ 1962 年 10 月 27 日の本部幹部会では、総世帯数が 298 万 6676 世帯と発表されている（『聖教新聞』同年 10 月 30 日付 1 面参照）。

となり、略礼服の様な黒い背広を用意したとのことである⁷⁵。また黒柳明も、ケネディとの会談には、自分を含めた青年が同行する予定だったと語っていた⁷⁶。

続いて *The Japan Times* 紙の記事は、池田について次のように紹介している。

「核実験への反対自体は目新しくもない。しかし、眼光鋭くがっしりとした池田がそういう場合、人畜無害で陳腐なスローガン以上の意味を帯びてくる。彼は、日蓮正宗の熱心な信者 600 万人を率いる指導者で、その宗教政治団体は日本の第三の政治勢力へと急速に発展しているからだ。

さらには、創価学会は海外でも拡大している。池田は5回目となる海外布教の旅から帰国したばかりだ。今回はアメリカと、欧州・東南アジア合わせて 10 カ国を、8 名の側近と共に歴訪した。

池田は、海外訪問の目的を「激励と正しい指導、を海外の会員に与えるためとした。アメリカには約 3,700 世帯、欧州に 200 ～ 300 世帯、東南アジアに数千世帯の会員がおり⁷⁷、ほとんどが日系だという」（下線引用者）

先に紹介した全労の滝田の場合、渡米前からケネディと会うことが決まっていたわけではなかった。池田の場合、ケネディから会談を申し入れたということは、ケネディの意向が強く働いていたと考えられる。

3. ケネディの意向を伝えた人物

a. 伝えた人物についての池田の言及

池田は、次のように述べている（下線引用者）。

「私が会長に就任した少しあと、大統領が『お会いしたい』とのことであると、大統領の関係者から連絡があった⁷⁸」

「かつて私も、ケネディ大統領の関係の方から、ご招待をお受けしたことが懐かしい⁷⁹」

「かつて大統領との会見の要請が関係者からあったが、実現しなかった⁸⁰」

池田は、『新・人間革命』第7巻において、「ある著名な民間人が伸一を訪ね、ケネディとの会見の意向を打診したのだ。その人は言った。『私は、本日は国務省の意向を受け、その使者としてまいりました（以下略）⁸¹」（下線引用者）と書いている。1963（昭和38）年2月1日の創価学

⁷⁵ 2024年12月13日に行った秋谷栄之助からの聞き取りによる。

⁷⁶ 吉村元佑が2025年8月8日に記した筆者への書簡による。

⁷⁷ 高瀬広居『第三文明の宗教 創価学会がめざすもの』（弘文堂、1962年）の（付）5頁には、「海外支部及会員数（昭和37・10現在）」として、アメリカ総支部3,600人、東南アジア総支部1,500人、台北支部800人、ヨーロッパ連絡所100人以上、合計約6,000人と書かれている。

⁷⁸ 『聖教新聞』1993年11月23日付4面。

⁷⁹ 『聖教新聞』2004年4月10日付2面。

⁸⁰ 『聖教新聞』2004年8月11日付3面。

⁸¹ 『聖教新聞』1997年5月31日付3面。

会男子部幹部会では、「ケネディ大統領、ラスク〔国務〕長官⁸²にも、その主張がいえるような機会のルートができたのであります⁸³」と述べている。

また、浅野著『あすの創価学会』には、「東京・信濃町にある学会本部に、ある有力民間人が意向打診に現われた。アメリカ国務省の意を受けてきたといい、『ケネディ大統領が両国政府に關係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている。国務省が私に、使者として意向をたしかめてほしいと依頼してきた。いかがですか』(中略)あわただしく準備が進むうち、当時の駐日大使であったライシャワーが二人の会見計画を知って驚き、渡米前に会見したいと申しこんできた⁸⁴」(下線引用者)と書かれている。これは、会談申し入れにアメリカ大使館が関与していなかったことを意味している。

これらから、会見の意向を伝えた人物は、「著名な民間人」で「ケネディの關係者」、さらには、国務省の使者が務まる人物に絞られる。

b. ケネディと面識のあった民間人

池田は、『新・人間革命』第7巻で、「ある著名な民間人」からケネディからの会談の意向が伝えられた、と述べている。そこで、まず日本人でケネディと面識があった人物を挙げることから始めたい。凶弾に斃れたケネディの死去を受けて、1963(昭和38)年11月23日の新聞各紙には追悼文が掲載されている。その中で実際にケネディと言葉を交わしたことがあるのは、次の人々である⁸⁵。

『朝日新聞』：朝海浩一郎(前駐米大使)・犬養道子(小説家)・細野軍治(日本外政学会理事長)、『読売新聞』：細野軍治、『日本経済新聞』：細野軍治と長女治子・朝海浩一郎、『産経新聞』：細野軍治・朝海浩一郎、『東京新聞』：細野軍治・朝海浩一郎、『中部日本新聞』：朝海浩一郎・細野軍治。

以上のように、新聞に最も掲載されたのは、朝海と細野である。

『週刊朝日』(緊急増刊)第68巻第53号(1963年12月10日)の「私の会ったケネディさん」では、佐藤栄作(国務大臣)、三木武夫(自民党政調会長)、田中角栄(大蔵大臣)、滝田実(全労初代議長)、**俣野健輔**(飯野海運社長)、**阿部孝次郎**(東洋紡会長)、朝海浩一郎、細野軍治がケネディとの思い出を語っている。そのうち「民間人」は、太字の4人。ケネディとの關係は、以下の通り。

⁸² 大森実は、『ケネディ 挑戦する大統領』(講談社、1978年)において、「国務長官ポストは閣僚最右翼としてナンバー・ワンの権威があった。国防長官にしてもCIA長官にしても、大統領の不在時は閣僚ポスト第一順位のラスク国務長官の発言には楯をつけない。それがアメリカの慣習だったし、ラスクはそういう権威主義者であった」(39頁)と記している。ラスクについては、デイビッド・ハルバースタム著／浅野輔訳『ベスト&ブライテスト1 栄光と興奮に憑かれて』(サイマル出版会、1976年)の40～58頁に詳しい。

⁸³ 『聖教新聞』1963年2月5日付1面。

⁸⁴ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、54～56頁。エドウィン・O・ライシャワー『ライシャワー自伝』(文藝春秋、1987年)には、「創価学会の池田大作会長とも何度か会った」(292頁)と記されている。

⁸⁵ 1963年11月23日付の『朝日新聞』東京本社版夕刊10面・『読売新聞』東京版夕刊11面・『日本経済新聞』夕刊5面・『産経新聞』夕刊7面・『東京新聞』夕刊6面・『中部日本新聞』夕刊5面、などを参照。

細野軍治は、1951(昭和26)年10月に当時GHQに勤務していた友人ガーディナーの紹介で、下院議員だったケネディ・弟ロバート・妹のパトリシアと新橋で会食。この時依頼された調査の報告をケネディに伝えたところ、そこから二人の交流が始まり、大統領就任式に招待されて再会。最後に会ったのは、1961(同36)年11月。『主婦の友』1964年1月号にも、細野軍治の談話「ケネディさん夫妻と私」が掲載されている。さらに、長女治子のアメリカ留学中の保証人は、ケネディだった。

俣野健輔は、細野と同じコロンビア大学の大学院で学ぶ。1952(昭和27)年に細野の依頼で、来日した妹のパトリシアと友人数人の歓迎会を両家族で開いた。その縁で、上院議員になったケネディと1959(同34)年4月14日にホワイトハウスの執務室で会う。ケネディとは何度か手紙を交わしており、長女の慶子は、細野治子と同じアメリカの大学に留学していた⁸⁶。

阿部孝次郎は、対米経済使節団(8人)の一人として、1961(昭和36)年4月21日にホワイトハウスで会っている。

滝田実は、前述(2.c.)のように、1961(昭和36)年3月3日にホワイトハウスで単独で会っている⁸⁷。

また、NHK総合テレビでは、1963(昭和38)年11月26日の「時の人」に細野軍治・治子。同日のケネディ追悼の特別番組の座談会には、朝海浩一郎・細野軍治・花見弘平・滝田実と官房長官の黒金泰美が出演⁸⁸。さらに、『週刊朝日』第68巻第52号(朝日新聞社、1963年12月6日)の「荒垣秀雄連載対談 時の素顔③」の対談者は、細野治子⁸⁹だった。

あわせて、後に池田と関係が確認されている若泉敬・渡辺恒雄・大森実について可能性を検討しておきたい。若泉⁹⁰は、1961(昭和36)年5月10日にワシントンD.C.近郊の大学に学ぶ留学生(日本人は24人)が招待されたホワイトハウスでのレセプションでケネディに会っている⁹¹。しかし、1962(同37)年当時は防衛庁勤務で、民間人とはいえない。渡辺は、前出の著書『増補版 わが人生記 青春・政治・野球・大病』では、ケネディのことに触れていない。大森⁹²は、

⁸⁶ 俣野とケネディの関係については、南日本新聞社編『俣野健輔の回想：昭和海運風雲録』(同書刊行会、1972年)の354～362頁も参照。

⁸⁷ 『週刊読売』第22巻第49号(読売新聞社、1963年12月8日)では、滝田実と朝海浩一郎がコメントを寄せている。

⁸⁸ 『読売新聞』東京版1963年11月26日付朝刊11面・『産経新聞』同日付朝刊11面などを参照。

⁸⁹ 細野治子は、アメリカの大学への留学の際、保証人になったケネディとは何度か会っており、大統領就任式には父軍治とともに出席し、後日ホワイトハウスでケネディと言葉を交わしている。

⁹⁰ トインビーに池田を紹介した若泉敬は、1954年4月から保安庁保安研修所(のちの防衛庁防衛研修所)教官を務め、その間、60年から米国ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究所へ研究留学。66年から京都産業大学教授。

⁹¹ 1969年9月23日付のトインビーから池田宛の書簡、ジョン・F・ケネディ大統領記念図書館博物館所蔵資料、『読売新聞』大阪本社版2022年8月11日付朝刊23面の福井版、などを参照。記事によれば、越前市で開催された企画展では、ケネディ大統領の末弟エドワードと若泉が写った写真も展示されていたという。

⁹² 大森は、池田との共著に『革命と生と死—大森実直撃インタビュー』(講談社、1973年)があるが、ケネディについては触れられていない。

大統領就任式の取材はしているが、ケネディと話したとは語っていない。

c. ケネディと日本をつないだ細野軍治

以上のことから、日本の「民間人」でケネディと最も親交が深いと考えられるのは、細野軍治（1895～1969年）である。彼は、ケネディが下院議員の時代に、駆逐艦天霧の艦長花見弘平を探し出したことをきっかけに、ケネディ大統領だけでなく、弟ロバート、妹パトリシアやユニース、ケネディの母ローズなどとも親交を深めていた。

実は細野は、10年間アメリカの大学で学び、7年間国際機関で働いていた。まず、ケネディと出会う前の略歴を見てみたい。

- 1895年5月5日 東京府南多摩郡南村鶴間（現在の町田市鶴間）に生まれる。
- 1915年3月 早稲田実業学校を卒業。12月より、アメリカへ留学。
- 1921年2月 南カリフォルニア大学政治科を卒業。9月より、コロンビア大学修士課程に進学。
- 1921年11月 ワシントン軍縮会議を大阪新報の記者として取材。
- 1926年6月 博士論文 International Disarmament（国際軍縮論）で、コロンビア大学から Ph.D. を授与される。
- 1926年11月から7年余 ジュネーブで国際労働機関の帝国事務所嘱託として会議に出席。政府代表は前田多門、国際連盟事務次長は新渡戸稲造。
- 1934年3月 ジュネーブより帰国。外務省嘱託に。
- 1939年5月 博士論文「国際裁判と安全保障—集团的平和機構の研究」で、東京帝国大学から法学博士の学位を授与される。国際平和機構を研究した博士論文は、日本の大学で初めてだったという。
- 1947年12月 日本国際連合協会常務理事に就任。
- 1950年4月 青山学院大学教授に就任。
- 1953年9月1日 財団法人日本外政学会理事長に就任。

以上のように、細野は、日本の平和学研究の先駆けとなった一人である。次に、彼とケネディの交友を見てみたい。

1951（昭和26）年10月 来日した33歳の下院議員ケネディらと築地の小料理屋で昼食をともにする。この時、ケネディからは是非協力してほしいと、次のような依頼をされる。

「私はソロモン海で1942年に日本海軍と戦った。そのとき自分の指揮していた魚雷艇を真っ二つにした勇敢な駆逐艦の艦長と、父が駐英大使だったときの日本の駐英大使重光葵氏に会いたい」

細野は「かつての敵に敬意を表したい」というケネディの話に感激して調査。その駆逐艦は「天霧」で、艦長は福島県耶麻郡塩川町在住の花見弘平であることが判明したが、急なことでケネデ

ィに会わせることはできなかった。一方、重光とはすぐに連絡が取れた。この日細野は、半日ケネディと行動を共にした⁹³。

1953（昭和28）年2月18日 ケネディが細野に、「日本を訪れたい。私は上院議員として両国の緊密なる関係を維持することに全力を尽くしたい」との書簡を送る。以後細野は、ケネディの来日を促進する活動を精力的に行う⁹⁴。後日細野は、ケネディの死去の報に「私はケネディ大統領の訪日にすべてをかけていたので、それを前にしての今回の訃報程私を驚かし、また悲しませたものはない⁹⁵」（下線引用者）と記している。

1958（昭和33）年6月15日 ピューリッツァー伝記賞を受章したケネディ著『勇氣ある人々』を細野が理事長を務める日本外政学会から出版。

1961（昭和36）年1月20日 大統領就任式に、長女治子とともに個人的友人として招待される。パレード終了後、退場するケネディと握手し、短時間語り合う。18日のレセプション、19日のコンサート・舞踏会にも出席⁹⁶。

1961（昭和36）年1月25日 昼過ぎ、ホワイトハウスの執務室で、長女治子とともに、ケネディに大統領就任を祝う池田勇人首相からの書簡と天霧の乗組員17人が書いたお祝いの寄せ書きを手渡す。ケネディは自著『勇氣ある人々』就任式特別版に、池田首相へ宛てて「最高の敬意をもって日本のために祈る」と書いて託す。30分近く懇談。この時ケネディは、改めて訪日の希望を表明した。細野にとって10年ぶりの再会だったが、ケネディが大統領就任以来外国人で面会した初めての人になった。このことは日本の新聞各紙で報道され、細野の存在は広く知られることになった⁹⁷。

1961（昭和36）年11月7日 ホワイトハウスの執務室でケネディと細野軍治・次男徳治の3人で30分位懇談。その際もケネディは訪日の意向を語る⁹⁸。

1962（昭和37）年2月21日 日本外政学会が主催する第9回奨学論文コンテストの最優秀者2名には、アメリカ視察旅行とともにケネディ大統領と会見が予定されていると同学会の『ニュースレター』に掲載⁹⁹。

また、日本外政学会（理事長：細野軍治）では、次のようなケネディ関係の書籍が出版されている。

⁹³ 『ニュースレター』第246号（日本外政学会、1961年1月21日）、7頁参照。

⁹⁴ 細野軍治「ケネディ大統領の死を悼む」（『ニュースレター』第349号、日本外政学会、1963年12月1日、8面）、および、前出の細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」の5頁を参照。『女性自身』（光文社）の特派員として世界各国をまわってインタビューを行っていた大野典子は、『花：世界のトップレディをいける』（河出書房、1964年）の中で、「民間大使といわれるほど日米親善に尽くしておられる細野軍治氏には、〔ジャクリーン夫人宛の〕紹介状を書いていたいただいた」（17頁）と記している。

⁹⁵ 細野軍治「ケネディ大統領の追憶」（『国防』第12巻第12号、国防研究会、1963年12月）、13頁。

⁹⁶ 前出の『ニュースレター』第246号の7頁および『毎日新聞』東京版1961年1月21日付夕刊1面を参照。

⁹⁷ 『読売新聞』東京版1961年1月19日付夕刊2面・1月26日付夕刊7面・2月13日付朝刊11面・2月14日付夕刊2面、『毎日新聞』東京版同年1月26日付夕刊7面、『朝日新聞』東京本社版同年1月26日付夕刊5面・2月13日付朝刊10面、『日本経済新聞』同年2月13日付11面、などを参照。

⁹⁸ 前出、細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」、7頁参照。

⁹⁹ 『ニュースレター』第285号（日本外政学会、1962年2月21日）、8頁参照。

ジョン・F・ケネディ著／下島連訳『勇気ある人々―良心と責任に生きた八人の政治家―』（1958年）

ジョン・ケネディ著／細野軍治・小谷秀二郎訳『平和のための戦略―新時代の探究―』（1961年）

J・M・バーンズ著／下島連訳『ジョン・ケネディ：その生いたちと政治的横顔』（1961年）

ロバート・F・ケネディ著／波多野裕造訳『自由の旗の下に―正義の友として 勇敢な敵として―』（1962年）

ロバート・F・ケネディ著／波多野裕造・横堀洋一共訳『内部の敵』（1962年）

ディーン・ヘラー、デヴィット・ヘラー著／細野治子訳『ジャクリン・ケネディ』（1962年）

ジョン・F・ケネディ著／下島連訳／中屋健一解説『勇気ある人々―青少年版―』（1963年）

ジョン・F・ケネディ著／下島連訳『英国はなぜ眠ったか』（1963年）

ロバート・ドノヴァン著／波多野裕造訳『P T 1 0 9 太平洋戦争とケネディ中尉』（1963年）

ジョセフ・ディニン著／中曽根由紀訳『ケネディ家の人々』（1964年）

細野は大統領の訪日は簡単には実現できないので、弟の司法長官ロバート・ケネディの来日を促す活動も精力的に行った。ロバートは、次のように記している。

「それ〔大統領就任式〕から数日の後、細野博士は司法省に私（訳注＝著者は司法長官に就任していた）を訪ねてきた。博士は大統領の日本訪問を望み、それが不可能な場合は私がかわりに訪日することを切望した。『日本にニュー・フロンティア精神を知らせることは絶対に必要です』と博士はつぎのように強調した。

『一九六〇年の反米安保騒動¹⁰⁰は米国のみならず、日本にもあと味の悪さを残しています。日本国民の大部分はアメリカに対して温かい気持を持っているのです。だから米国の代表的人物から何らかの呼びかけ――殊に青年や自由主義的な考え方の政治家に対して訴えるような呼びかけが行なわれることは非常に意義があると思います。』

私は新しい職責を負っているので、そのような旅行をすることは、なかなか難しいだろうということを説明した。博士はいささか失望したような顔をしたが、それで思いとどまった様子はない。博士はライシャワー駐日大使を説き、ついに大使を賛同者にしてしまった。しかも博士はそれだけで満足しなかった。

私のもとには博士から数週間ごとに日本訪問の重要性を説いた手紙が舞い込んだ。十日にあけず、細野博士の紹介状を持った日本からの訪問客が私を役所に訪れた。訪問客たちは、握手をして座につくやいなや、申し合わせたように私に向かって、できるだけ早い機会に日本に来るべきだと切り出すのだった¹⁰¹」

以上述べてきたように、日本の民間人で、ケネディ大統領が池田との会談を希望していることを共有できるのは、細野軍治が最有力である。なお、彼は池田と面識はないが、政財界に幅広い人脈を持っている。池田とつながりのある人物に取り次いでもらって、池田と会ったのではない

¹⁰⁰ 本稿の注36を参照。

¹⁰¹ 前出、ロバート・F・ケネディ『自由の旗の下に』、16頁。

か。『新・人間革命』第7巻の「萌芽」の章には、「ある筋を通して、私に会いたいという連絡があったんです」（下線引用者）と書かれている。

d. ケネディに池田との会談を提案した人物について

池田は、前出の「随筆 人間世紀の光 61」において、「大統領との会見を推進してくださったアメリカの方々もおられた」と記している。おそらく、アメリカ在住の人物が、池田と会うことをケネディに働きかけたと推察される。

『池田大作—思想と行動』『池田大作—平和への旅』などを著した吉村元佑は、以前、渡部一郎（1963年1月の池田のアメリカ在住創価学会員への指導に同行）から聞き取った話を、次のように記している。

「ケネディ大統領と面会することが決まった、というビッグニュースを渡部に伝えた池田は、『大統領は、世界中の良い青年に会おうとしている』と、その背景を語ったそうです。

ケネディは、1961（昭和36）年3月に発足した平和部隊（本稿1.d.参照）に参加した青年たちと会っていました。その出会いの中で、渡部の言葉に従えば、“そこへ食い込んだ人がいる”とのこと。アメリカの青年部員が、大統領との会話の中で、池田と創価学会の存在を熱っぽく語り伝えたのでしょう（趣意）¹⁰²」（下線引用者）

ちなみに、ケネディが池田への会談を申し入れた1960年代は、創価学会に関する欧米の研究が増え始めた時期にあたる。この時期の研究で特徴的なのは、政治活動が大きく扱われていることだ¹⁰³。それは、創価学会が推薦する公明政治連盟の候補が1962（昭和37）年7月の参議院議員選挙で全員当選し、その後公明党が結成されたことも影響していたと思われる。このような創価学会の伸長は、今後のアジア政策や訪日を考えていたケネディにとって、インパクトのあるニュースではなかったか。

1961（昭和36）年3月には、全労議長の滝田実とホワイトハウスで単独会見した先例がある。池田を語り合うべき青年とみたケネディは、「一私人」として会うことを望んだのではなかろうか。

4. 戸田城聖の遺命実現とケネディとの会談

a. 池田がケネディに伝えたかったこと

以下の *The Japan Times* 紙のインタビュー記事によると、池田が会談を承諾したのは、“今日の世界において責任ある指導者”2人のうちの1人であるケネディに、戸田城聖の遺訓である核実験停止と地球民族主義を伝えたいと考えていたことがわかる。池田は次のように語っている（下線引用者）。

¹⁰² 吉村元佑が2025年8月8日に記した筆者への書簡による。

¹⁰³ 栗原淑江「欧米における創価学会研究の動向」（『東洋哲学研究所紀要』第6号、東洋哲学研究所、1990年）、216頁参照。

Ikeda told The Japan Times in an interview Thursday that he wanted to meet Kennedy because the President is one of the two “responsible leaders of the world today.” The other is Premier Nikita Khrushchev of the Soviet Union, whom Ikeda also hopes to meet.

池田は、2月14日、本紙とのインタビューで、ケネディ大統領との会談を望むのは、“今日の世界において責任ある指導者”二人のうちの一人であるからだと言った。もう一人は、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相で、そちらとも会談を望むと述べた。

“Representing these one million young men and women, I would like to meet President Kennedy and ask him to stop testing nuclear weapons.”

「私は、この100万の男女青年を代表してケネディ大統領とお会いし、核実験をやめるよう伝えたい」

“The second purpose of my meeting with President Kennedy is to tell him that the solution for ending present world tensions is inherent in the gospel of St. Nichiren,” Ikeda said. He termed it “global racialism.”

「ケネディ大統領と会談する第二の目的は、今日の国際的緊張を解消する方途は、日蓮大聖人の教えに内在していることを伝えるためです」池田はこれを「地球民族主義」と言った。

“Although I am not at all sure whether President Kennedy will listen to me on this point,” he added with a smile.

「ただし、その点に関してはケネディ大統領が耳を傾けてくれるかは分かりませんよ」と池田は笑顔で付け加えた。

池田は、1963（昭和38）年2月1日の創価学会男子部幹部会において、次のように述べている。

「私も、三百万世帯を越えた今日、なんとか、原水爆禁止の主張と、それから東洋仏法の神髄たる、唯心・唯物二大思想をも指導する色心不二の大生命哲学でなければ、絶対に、この行き詰まりを、どうしようもないということを、世界の大国の指導者に教えたい、聞いても聞かなくてもいいから訴えておきたい、こういう念願でございました¹⁰⁴」

また、3日後の2月4日に開催された創価学会女子部幹部会では、次のように述べている。

「先日は男子部の幹部会の時に、恩師戸田先生の原水爆禁止の主張を再確認して、しっかりそれを世界に流布していこう、こういうふうに申しました。その一つの具体的な方法といいますか、または日本民族の行き方として、全世界に向かって、日本の国だけが原水爆の洗礼を受けた犠牲

¹⁰⁴ 『聖教新聞』1963年2月5日付1面。

の国です。どんなことがあっても、原水爆の戦争はあってはならない。禁止をすべきだといえる資格のあるのは日本民族です。

で、戸田先生の主張は、とうぜん私も、第一線に立って死ぬまでいいきっていきます¹⁰⁵」

浅野著『あすの創価学会』（1970年刊）では、次のように書かれている。

「『お会いしましょう。私もお話したいことがいろいろあります』

早速、北条浩副会長（当時、総務）ら最高幹部を集めて「ケネディ会見」を伝え、必要な準備を指示した。

公明党（当時、公明政治連盟）幹部にも秘かに会見のことが伝えられた。会見に備えて内外の情勢分析が池田を中心に専門家を集めて行なわれた。池田はアメリカのアジア政策や核政策について一つの構想をいっていた」（下線引用者）

加えて池田は、『新・人間革命』第7巻の「操舵」の章では、ケネディとの会談において「米ソ首脳会談の早期再開」と「世界首脳会議の開催」も提案したいと考えていたと述べている。

「伸一は、世界の平和を打ち立てていくには、戸田城聖の『原水爆禁止宣言』の精神を、現実化せねばならぬと思っていた。彼は、そのために、ケネディに提案したいことがあった。それは、米ソ首脳会談の早期再開であった。（中略）

また、伸一は、核を廃絶し、恒久平和への流れを開くために、米ソ首脳会談とともに、世界各国の首脳が同じテーブルに着き、原水爆や戦争の問題などを忌憚なく語り合う、世界首脳会議の開催も提案しようと考えていた¹⁰⁶」（下線引用者）

実は、世界首脳会議の開催については、2月4日の女子部幹部会で、その構想が語られている。

「〔首脳会議では〕どんなことを論じてもよいけれども、究極の目的は、ぜんぶ世界の平和、人類の幸福、戦争は絶対に禁止、こういうふうに話し合いを一年、二年つづけていくなれば、私はひじょうにいい、有意義な結果になるだろうと思うし、また指導者にそれだけの雅量がなければならぬと私は思うのですけれど、どうでしょうか¹⁰⁷」

さらに池田は、先に紹介した『あすの創価学会』の下線部分によれば、アメリカのアジア政策（より具体的には、対中国政策）についてケネディに尋ねる意向があったようだ。

b. 池田の根底にある核兵器廃絶と地球民族主義

ケネディからの会談の申し入れがあった半年後の1963（昭和38）年の初夏、池田は作家の杉本苑子に次のように語っている（下線引用者）。

「ぜったいに、私どもは戦争反対です。どのような犠牲を払っても平和は守られるべきだと思うのです。国と国とが対立し合うという現状は悲しむべきことで、世界は民族、国境を越えて、

¹⁰⁵ 『聖教新聞』1963年2月7日付1面。

¹⁰⁶ 池田大作『新・人間革命』第7巻（聖教ワイド文庫、2004年）、322～323頁。

¹⁰⁷ 『聖教新聞』1963年2月7日付1面。

ひとつにならなければいけません。学会の理想は、地球民族主義です¹⁰⁸」

また、核兵器廃絶について池田は、*The Japan Times* 紙の連載の中で、次のように述べている。

「わが師〔戸田城聖〕が、なぜ、これほどまで激しい表現をもって、核兵器を弾劾したのか。

それは、核兵器のもつ本質が、世界の民衆の生存の権利を奪う『絶対悪』であることを、明らかにするためにほかならなかった。

他者をほしいままに支配せんとするエゴイズムの魔性が、核兵器の保有という究極の姿で国家に体现された時代状況に対して、師は『生命論』の深き次元から強く警鐘を鳴らしたのである。

核兵器の存在を戦争抑止の『必要悪』とする思考が、核兵器廃絶への最たる障害である。この障害こそ、取り除かれなければならない。

恩師の宣言は、核兵器を『絶対悪』にとらえたがゆえに、イデオロギーや国家の利害にとらわれず、力の政治、の議論にも惑わされることがなかった¹⁰⁹」

それでは、このような池田の根底にある核兵器廃絶と地球民族主義の思想はどのようにして形作られたのであろうか。

池田は、自身の戦争体験を次のように語っている。

「終戦のとき、私は17歳であった。

長兄はビルマ〔＝現・ミャンマー〕の戦線で戦死し、次兄は中国で戦線に参加。3番目の兄も同じく中国で戦わされた。4番目の兄も、中国戦線に参加した。

昭和20年8月15日、日本は終戦を迎えた。(中略)

しかし、わが家の三人の兄が中国から帰ったのは、戦後1、2年経ってからだった。皆、命からがら、わびしそうに帰ってきた。

わりあい立派だったわが家も、戦争中、強制疎開させられた。東京・蒲田の梶谷から移って、馬込の親戚のそばに作らせてもらった家も、空襲で全焼した。

父親がリウマチを患うなか、母親は、精いっぱい、一家を守ってくれた。長男から4男まで戦争に取られ、5男の私は肺病であった。わが家は戦争に翻弄された。

あまりにも不平等であり、あまりにも理不尽な現実があった。

ゆえに、私は絶対に戦争に反対である。

戦争と権力に対して、反対する精神を、その時に持った。

これが、私が戸田〔城聖〕先生のもと、立ち上がった大きな原点である¹¹⁰」(下線引用者)

¹⁰⁸ 杉本苑子「大石寺詣での人々とともに 創価学会ルポルタージュ」(『主婦と生活』第18巻第9号、主婦と生活社、1963年8月)、195頁参照。8月号は、7月17日発売。

¹⁰⁹ 池田大作『明日をみつめて 池田大作の最新エッセイ集』(The Japan Times、2008年)、42～43頁。なお、同書は、*The Japan Times* 紙に2003年9月11日から2008年1月31日まで掲載された池田のエッセイに加筆・編集したもの。1975年5月にモスクワ大学が池田へ名誉博士号を授与した理由の二番目は、「核兵器禁止の構想」であった(『聖教新聞』1975年5月29日付1面参照)。これは、池田にとって初めての名誉学術称号。

¹¹⁰ 「全国最高協議会での名誉会長のスピーチ①」(『聖教新聞』2006年9月25日付)、2面。

池田は、戸田と出会った1年半後の1949(昭和24)年1月に戸田が経営する日本正学館に入社し、少年雑誌の編集を担当。6月からは編集長になった。池田が編集した同年10月号と11月号の『少年日本』では、GHQによる検閲がある中で、原子力と原子爆弾についての特集を組んでいる。まず10月号では、小松崎茂の画による「原子力機関車と原子力空中船 近づく輝く原子力時代は。」と、沢田謙の「世紀の科学者 アインSTEIN 相対性原理から原子爆弾へ」を掲載。沢田の文章は、「アインSTEINは、自分のつくらせた原子爆弾の将来について、大へん心配している。『科学の上からみて、原子爆弾をふせぐ方法は考えられない。人類がほろびてしまうのをすくうには、世界に正しい平和をうちたてるほかはない』といま一生けんめいそのことを考えている」(下線引用者)で終わっている。

続く11月号では、秋永芳郎の小説「原子野の花」と、新進気鋭の理論物理学者である中村誠太郎の「原子力とこれからの世の中」を掲載している。「原子野の花」は、原爆が投下された1945(昭和20)年8月6日の広島を描いたもので、結びの「ああ、荒野。この荒野に、美しい平和の花が咲くのはいつだろうね」という言葉が印象的である。当時、原爆の惨禍を描いた児童小説が発表されることは、ほとんどなかった¹¹¹。

社長である戸田は、11月号を6万部印刷し¹¹²、全国17の新聞に広告を掲載している¹¹³。発行を続けることが経営的に困難になり次号までで休刊していることを考えると、この時期に増刷し広告を出すのは、彼によほどの意志がなければできないことである。池田は、この経験を通して、戸田の原爆に対する強い怒りを感じ取ったに違いない。

一方、戸田はどうであったか。

『評伝 戸田城聖』下巻の「あとがき」では、「戸田の願いを端的に表現した三つの言葉」として、「地上から、`悲惨、の二字をなくしたい」「自らの思想は`地球民族主義、である」「たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずる」を挙げている¹¹⁴。これに、若干の補足を加えたい。

戸田は、1番目の言葉「地上から、`悲惨、の二字をなくしたい」という趣旨の話をたびたび語っている¹¹⁵。池田が戸田と初めて会った時(1947年8月)にも、「私は、この世から一切の不幸と

¹¹¹ 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 戸田城聖』下巻(第三文明社、初版第2刷、2024年)、66～67頁参照。

¹¹² アメリカ合衆国メリーランド大学ホーンベイク図書館ゴードン・W・ブランゲ文庫提供のカラー画像による。戦後戸田が出版した少年雑誌『冒険少年』『少年日本』各号の発行部数の中で、1949年11月号の6万部は飛び抜けて多い(前出、『評伝 戸田城聖』下巻、初版第2刷、61・83・87頁参照)。

¹¹³ 前出、『評伝 戸田城聖』下巻(初版第2刷)、68頁参照。

¹¹⁴ 同前、525頁参照。

¹¹⁵ 『聖教新聞』1957年1月1日付第一元旦号1面の年頭の辞「仏法で民衆救済」、および、『池田大作全集』第73巻(聖教新聞社、1996年)の288頁などを参照。戸田は、「仏法の目的は、全人類の人格を宇宙大の最高の境涯に高めていくことだ。そうすれば戦争も不幸もなくなるだろう」と語っていたという(アレクサンドル・セレブロフ／池田大作『宇宙と地球と人間』、潮出版社、2004年、295頁参照)。

悲惨をなくしたいのです！」と語っていたという¹¹⁶。

2番目の言葉は、戸田が創価学会の第1回男女合同青年部研究発表総会（1952年2月17日）で「自らの思想は地球民族主義である。」と述べたことによる¹¹⁷。彼がこの言葉を語った記録は、この時のものしか残っていない。池田は、次のように述べている。

「宇宙の根本法たる仏法の真髓を覚知された戸田先生は、つねに宇宙的視野から、物事を考えられていた。（中略）民族、国家、イデオロギーなどを超え、人類が『地球家族』『世界は一つ』という認識に立って、共存への道を開かなくてはならないというのが、先生のお考えであられた¹¹⁸」

「一国を超え、一民族を超え、人類という見地から、一人一人が地球民族、世界民族としての自覚をもつ時、おのずと争いのない平和な社会が現出するにちがいない。

戸田先生は、イデオロギーを「主」、人間を「従」とする、当時、支配的であった思想から、人間を「主」、イデオロギーを「従」とする新しき思想への転換の必要を鋭く見とおしておられた¹¹⁹」

このような世界の民衆の幸福と平和社会を希求する考え方は、戸田の先師である牧口常三郎以来、一貫したものであった。1930（昭和5）年11月に発刊された牧口著『創価教育学体系』に序文を寄せた一人に、第一次世界大戦後誕生した国際連盟の初代事務次長を務めた新渡戸稲造がいる。彼は、牧口と二十数年の親交があり、牧口をよく知る人物である。この序文は、新渡戸が書いた76の序文の中でも格段に長く¹²⁰、牧口が創価教育学に込めたものが鮮明に浮かび上がってくる。彼は、「殊に其の論述する所人生の目的より教育の目的を演繹し、国家社会生活に於ける人類の幸福を主眼とせる点に於て、従来の観念的な天上の幻影にも似たる教育目的を、科学的な地上の教育にまで現実化したるは偉大なる教育の転向であるといへる」（下線引用者）と述べている。つまり、牧口が掲げる教育は、児童の幸福に止まらず全人類の幸福（＝平和な社会実現）を目指しており、観念的な目的ではなく現実的な目的へと偉大なる教育の転換を果たしている、と洞察しているのである。

このように新渡戸が創価教育学に込められた核心部分を鋭く洞察できたのは、牧口が「人道的競争」を提唱した『人生地理学』（1903年刊）を熟読しており、青年期からの牧口の考えを深く理解していたからに他ならない。さらに、新渡戸自身が、軍国主義の色を濃くしていく日本の現状に強い危機感を抱いていたからだと考えられる¹²¹。

¹¹⁶ 山本伸一「随筆 我らの勝利の大道 112 地涌の誉れの『八・二四』」（『聖教新聞』2013年8月24日付3面）を参照。8月24日は、池田が創価学会に入会した日。「山本伸一」は、池田のペンネーム。

¹¹⁷ 『聖教新聞』1952年3月1日付1面参照。

¹¹⁸ 『池田大作全集』第129巻（聖教新聞社、2004年）、247～248頁。

¹¹⁹ 『池田大作全集』第75巻（聖教新聞社、1997年）、42頁。

¹²⁰ 塩原將行「新渡戸稲造と牧口常三郎（上）」（『新渡戸稲造の世界』第34号、新渡戸基金、2025年）、98～99頁参照。

¹²¹ 塩原將行「創価教育学を生み出した牧口常三郎の教育実践〔前編〕」（『灯台』第776号、第三文明社、2025年5月）、71～72頁参照。

3番目の言葉は、1957（昭和32）年9月8日に開催された創価学会第4回東日本青年部体育大会における、戸田が遺訓の第一とした次の発言である。後にこの発言は、「原水爆禁止宣言」と言われるようになり、池田の核兵器廃絶への強い意志の原点になっている。以下、紹介する。

「今、世に騒がれている、核実験、原水爆実験に対する私の態度を、本日ははっきりと声明したいと思うものであります。

いやしくも私の弟子であるならば、わしの今日の声明を継いで、全世界にこの意味を透徹さしてもらいたいと思うのであります。それは核、あるいは原子爆弾の、実験禁止運動が今世界に起こっているが、私はその奥にかくされているところの爪をもぎ取りたいと思う。

それはもし原水爆をいずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利を持っております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、怪物であります。それをこの人間社会、たとえ一国が原子爆弾を使って勝ったとしても、勝者でもそれを使用したものはことごとく死刑にされねばならんということを、私は主張するものであります。

たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずるものであります¹²²」

戸田がこの宣言のなかで、原水爆を使用した者は『ことごとく死刑に』と叫んだのは、決して、彼が死刑制度を肯定していたからではない。池田によれば、「彼〔戸田〕の眼目は、一言すれば、原水爆を使用し、人類の生存の権利を奪うことは、『絶対悪』であると断ずる思想の確立にあった¹²³」のである。

池田は『新・人間革命』第1巻（聖教新聞社、1998年）の「はじめに」で、次のように記している。「戸田先生は、一九五七年（昭和三十二年）九月八日、あの原水爆禁止宣言を発表され、遺訓の第一として、その思想を全世界に弘めゆくことを、門下の青年に託された。

恩師は、間断なき世界の戦火や、暴政に涙する民衆の声なき声に耳をそばだてながら、しばしばこう語った。

『この地球上から悲惨の二字をなくしたい』

それは先生の願いであり、ご決意であられた。師弟は不二である。不二なればこそ、私もまた、恩師の心を抱き締めて、世界を駆け巡り、『平和と幸福の大河』を切り開いてきた。『源流』の偉大さを物語るものは、壮大な川の流れにほかならない」（下線引用者）

このように池田の心の中には常に戸田の「原水爆禁止宣言」があり、その実現に向けて行動していたのである。

¹²² 『聖教新聞』1957年9月13日付1面参照。あわせて、2013年に創価学会が制作した映像『恒久平和を目指して 核兵器廃絶への挑戦』を参照。以前から戸田は、たびたび原水爆に言及した発言を行っている（前出、『評伝 戸田城聖』下巻、初版第2刷、388～389頁参照）。

¹²³ 池田大作『人間革命』第12巻（聖教ワイド文庫、2013年）、135～136頁。

5. 自民党大物代議士の「横やり、による会談中止

a. 「横やり、を入れた人物とその時期

ケネディから池田へ会談の申し入れがあったのは、1962（昭和37）年の暮れ¹²⁴である。その後池田は、1963（同38）年1月8日午前10時27分に羽田の東京国際空港を発ち、アメリカを含む11カ国訪問の海外指導を行い、同月27日午後9時6分に東京国際空港に降り立っている¹²⁵。会談中止について池田は、2月1日の男子部幹部会で語っているので、「政権政党の大物といわれている古老の代議士¹²⁶」（『新・人間革命』第7巻）と会ったのはそれ以前、1月28日から31日に絞られる。ただし池田は、1月28日（月）には、午後5時から約1時間、1月度教授会を聖教新聞社別館で行っている。また、『聖教新聞』に帰国の記事が掲載されたのは29日であり、この日彼は、午後5時50分から7時50分まで千駄ヶ谷の東京体育館で行われた本部幹部会に出席している¹²⁷。

ケネディとの会談中止の因となった「自民党の故人となった大物代議士」（浅野秀満『あすの創価学会』、1970年刊、56頁）とは、誰か。まず、浅野が出版した1970年時点で故人となった自民党の大物衆議院議員でなければならない。その条件に当てはまるのは、当時首相の池田勇人（1899～1965年）、大野伴睦（1890～1964年）¹²⁸、河野一郎（1898～1965年）、川島正次郎（1890～1970年）の4人と考えられる。次に、「自由民主党役員一覧 昭和37・8・30現在」によれば、総裁池田勇人、副総裁大野伴睦、幹事長前尾繁三郎。また、選挙対策委員会の委員長が池田、副委員長が大野、河野・川島は委員である¹²⁹。そのため大野は、1963（昭和38）年4月17日の都知事選挙の選対本部長を務めていた¹³⁰。さらに、同一覧で当選回数を見ると、池田勇人6回、大野伴睦12回、川島正次郎11回、河野一郎10回で、党内で大野が最多である。

なお大野は、この時期に池田と会っており、都知事選での支持の有無について、池田に会った際の感触を1963（昭和38）年3月18日に地元岐阜で、次のように語っている。

「東京都知事選は創価学会がカギを握っているといわれているが、同会では今月末か四月早々声明を発表すると言っている。先日池田会長に会ったときの呼吸ではわが党を支持してくれるだ

¹²⁴ 前出の池田大作「随筆 人間世紀の光 61」には、「ケネディ大統領から、私に会いたいと連絡が入ったのは、一九六二年（昭和三十七年）の暮れであった」と記されている。

¹²⁵ 『聖教新聞』1963年1月1日付2面・1月10日付1面・1月29日付1面参照。

¹²⁶ 前出、池田大作『新・人間革命』第7巻（聖教ワイド文庫）、325頁。

¹²⁷ 『聖教新聞』1963年1月31日付1面・2月2日付1面、および、池田大作『会長講演集』第9巻（創価学会、1964年）の39頁を参照。

¹²⁸ 大野伴睦については、『大野伴睦—小伝と追想記—』（大野伴睦先生追想録刊行会、1970年）の年譜を参照。彼は、通算7期副総裁を務めた自民党の実力者。

¹²⁹ 『自由民主』第156号（自由民主党本部、1962年8月30日）、1面参照。

¹³⁰ 『週刊読売』第22巻第8号（読売新聞社、1963年2月24日）、95頁参照。藤原弘達「花の都の巖流島騒動」（『新世代』第1巻第1号、学習研究社、1963年4月1日）には、「〔都知事選挙の〕全体のさい配をふるうのが大野伴睦、これに中村梅吉と安井謙が加わって、必勝態勢を期しているというところである」（64頁）と書かれている。

ろう¹³¹」(下線引用者)。

以上のことから、「政権政党の大物といわれている古老の代議士」は、上記いずれかの人物ではないかと推察される。

ちなみに、公明政治連盟は、1963(昭和38)年4月1日、自民党が推薦する東龍太郎支持を発表した¹³²。ただし、『財界』(財界研究所、1963年6月1日)の「市長選に振られた大阪財界」という記事には、「東京〔都知事選挙〕では、はっきり東氏推せんを明らかにした創価学会も、大阪では態度を決めなかった。大野伴睦老が池田大作会長に、『大阪もはつきり佐藤、和爾推せんをきめてくれ』と頼んだが奏功しなかった」(25頁)と書かれている¹³³。

また、1963(昭和38)年2月22日の佐藤栄作¹³⁴の日記には、次のように書かれている。

「本会議の後公正〔明〕会に原島〔宏治〕幹事長を訪れて、石田〔次男〕九州班長に杉本並に鬼丸君推薦方を依頼する¹³⁵」

このように、この年4月の統一地方選挙では、大阪府や福岡県の知事選挙などにおいても、創価学会が当落に影響すると見られていたのである。

b. 〃横やり、が入った背景

自民党の「大物代議士」は、有力な対立候補が立ったことで苦戦が予想されている東京都知事選挙(1963年4月17日)において、ケネディとの会見を取引材料にして、都内50万人の創価学会員の自民党推薦候補への支持を確実にしたいとの思惑があった¹³⁶。The Japan Times紙では、このことが次のように書かれている。

「実際のところは、池田会長は今月か来月はじめ頃にケネディと会談する予定であったが、政治的理由により頓挫したのだ。情報筋によれば、自民党幹部らはケネディ会談の後押しをする見返りとして、池田から4月の都知事選で東龍太郎への支持確約を取り付けようとした。しかし、この取引の提案は、池田の逆鱗に触れたのだと言う。

池田大作にそのような圧力がかけられるのには、十分すぎるほど理由がある。

東京に会員50万人を擁する創価学会は、保守系の東と、社会党系の元兵庫県知事・阪本勝が争う東京都知事選の勝者を決定するだけの力を手にしているのだ。

¹³¹ 「内閣改造、大幅に／幹事長は七月交代か／大野氏語る」(『読売新聞』東京版1963年3月18日付夕刊1面)。池田は、央忠邦の問いに、会ったことがある政治家として、歴代総理大臣と河野一郎と大野伴睦を挙げている(前出、央忠邦『日本の潮流 創価学会発展の歩み』年、1968年、142頁参照)。また、2025年12月13日に行った秋谷栄之助からの聞き取りによれば、池田は大野と何度か会っていたとのことである。

¹³² 『読売新聞』東京版1963年4月2日付朝刊1面参照。

¹³³ 「佐藤」は、大阪府知事選挙の候補左藤義詮。「和爾」は、大阪市長選挙の候補和爾俊二郎。現職の左藤は、当選。和爾は、落選。

¹³⁴ 佐藤栄作は、1964年11月から72年7月まで、第58代から第60代の総理大臣を務める。

¹³⁵ 『佐藤栄作日記』第二巻(朝日新聞社、1998年)、43頁。「杉本」は、北九州市長選挙の候補、杉本勝次。「鬼丸」は、福岡県知事選挙の候補、鬼丸勝之。ともに、日本社会党推薦候補に敗れ、落選。

¹³⁶ 『政治経済』第16巻第2号(政治経済研究会、1963年2月)、27頁参照。

前回1959年の都知事選で、東は169,157票差で社会党系の有田八郎を破った。東の得票数は1,821,346に対し、有田は1,652,189であった。創価学会員は東に投票したとする確かな根拠がある。

池田は本紙に対し、創価学会員の参議院議員15名から成る政治団体・公政連は、両候補のいずれかを選び、それに追随するよう創価学会員に促すことになるであろうと語った。

『我々は、どちらの候補がより東京都民の福祉のためになるのか、厳正にその判断に基づいて選択をします¹³⁷。両候補およびその支援者から、金銭その他のいかなる形であれ圧力があれば、それはその候補にとってマイナスになるでしょう』と池田は警告した。

池田はまた、どちらかの候補を選んだからといって、必ずしも創価学会がその候補を推している政党を支持するという意味ではない、とも強調した。池田は、今日の日本の政党は派閥争いに明け暮れていて、自分たちを選んでくれる民衆に奉仕する義務を怠っていると語った。

『日本に真の安定をもたらすのが我々の願いです。終戦から17年、諸政党はまったくそれが出来なかった。そのために民衆は苦しんできた。それもすべて、日本人には指針がないことが原因です。他の国々には、考え方や行動の基盤となる偉大な哲学がある。しかし日本人には、そのような基盤がありません』

また池田は、1963（昭和38）年2月1日の創価学会男子部幹部会における講演で、「いろいろ方法もあると思いますが、どうしても政治的に複雑になってしまったり、その〔ケネディとの会談の〕機会がとられなかった」と語っている。

浅野著『あすの創価学会』（1970年刊）では、次のように書かれている（下線は引用者）。

「あわただしく準備が進むうち、当時の駐日大使であったライシャワーが二人の会見計画を知って驚き、渡米前に会見したいと申しこんできた。会うことになった。

その前夜、自民党の故人となった大物代議士が、池田の前に現れたのである。

『ケネディに会うそうだが、自民党内には異論の声もある。なんとか私が骨を折ろう。そこで、一つだが、力をかしてくれないか』

政治的圧力で会見などどうにでもなるとほのめかしながら、目前に迫っていた東京都知事選の協力を、暗にちらつかせたいらしい。

池田は会見計画に、政治の暗い影がさしてきたのを察知すると怒った。

『それでは話が違ってきます。またの機会をまちましょう』

その場で、大物代議士のさそいを断わり、ケネディとの会見をとりやめた。

ライシャワーとの会談も中止した。有力民間人を介して、池田の丁重な断わりのあいさつがケネディ大統領に伝えられた。

池田とケネディ大統領の会見準備は、二人とも一私人としてすすめていたので、池田が旅券申請するまで、外部では知らなかった。

池田の日程に「大統領会見」が組みこまれていることがわかると、間もなく、自民党筋の知る

¹³⁷ 『公明新聞』1963年1月1日付3面には、自民党推薦と社会党推薦の「二人の都知事候補に聞く」を掲載している。

ところとなったという」

c. さまざまな憶測

このようにケネディからの会談の申し入れがあり、ワシントンで会うことも決まっていたにも関わらず実現しなかったことから、さまざまな憶測がささやかれることになった。

雑誌『政界往来』1963年6月号に掲載された、清水貞夫（毎日新聞政治部）・福富達（読売新聞政治部）・山本弁介（NHK政治部）による記者座談会では、「米国布教と交換条件で東支持」の中見出しで、次のように書かれている。

「B 池田大作会長が、政策の面で自民党を叩いていながら、自民党についたということは、アメリカさんの力も大いにあずかったんじゃないか、という話もありますよ。

A ライシャワーが二回あったそうです。池田大作に。

B 池田会長がアメリカに行ったときに、『アメリカでも布教を許しましょう。だから一つ東を応援してやってくれ。自民党を支援してやってくれ』ということ、アメリカのさる高官から交換条件にだされたというんですがね。『それじゃやりましょう』ということで、池田大作が買って出たという話も伝わってる。

C 池田大作が外遊するにあたって、ケネディと会いたいという話を、アメリカ大使館のほうにもって行ってるんですよ。自民党のある筋を通して。

それも池田は、ケネディに会うとともに、ソビエトのほうも回って、フルシチョフとも会いたいという、両^レまた^レをかけていたわけです。

ところがアメリカの圧力があって、ケネディと会うことをやめ、フルシチョフに会うこともやめた。これは事実です¹³⁸」

また、『週刊読売』1963年2月17日号（2月7日発売）において、高瀬広居は次のように述べている。

「ケネディー池田会談。これはすでに早くから下交渉が進められ、アメリカの大使館も積極的に動いていたという。では、政治的妨害、とはなんだろう。右翼の工作とも消息筋はいう。だが、はたしてそうだろうか。政界某実力者が中に立ち、池田首相が会長との会見を申し入れ、池田会長がこれを断わったという情報がある。

とすると、これは私の推測だが、そこには都知事選五十万票をめぐる「取り引き」があったのではあるまいか。それが、あまりにも露骨だったため、池田会長はケネディー会談を不調に終わらせたのではないか。私はそう考える。

〔早稲田〕記念会堂を出るとき、政治部の参謀に『会長は、はっきりとケネディーのことをいい

¹³⁸ 「記者座談会 地方選挙のツメ跡診断書」（『政界往来』第29巻第6号、政界往来社、1963年6月）、142頁。

ましたね』と声をかけると、彼は笑いながら『学会には、取り引きは成り立たないんですよ』と白い歯を見せていた¹³⁹⁾

さらに、央忠邦も『日本の潮流 創価学会発展の歩み』(1968年刊)において、次のように書いている。「いまは亡き、ケネディ大統領と会見するという話が、ある時あったのも事実である。それが実現しなかったことも事実である。何故、そうなったのか。『紹介に当たった人物が、そのことを実現させることによって利用しようとする下心(したごころ)があると感じたからです。こちらで手を引いたのです』と、その当時、私はある幹部からそんな話を聞いたことがある¹⁴⁰⁾

6. 会談中止後の実現可能性

a. 完全中止ではなかった会談

The Japan Times 紙(1963年2月16日付)に掲載された次の池田の発言は、ケネディとの会談が後日実現する見込みだったことを示している。

He declined to say when he would go to Washington, but indicated that it would be in the not too distant future.

池田は、ワシントン行きがいつになるか明言は避けたが、そう遠くない未来になるだろうと示唆した。

池田が1963(昭和38)年2月1日の創価学会男子部幹部会で話した内容は、『聖教新聞』では次のようなまわりくどい表現になっている。

「いろいろ方法もあると思いますが、どうしても政治的に複雑になってしまったり、その機会がとらえられなかった。今回も、ときには、まず、ケネディ大統領、ラスク〔国務〕長官にも、その主張がいえるような機会のルートができたのでありますけれども、日本の為政者が、なんとなくじゃましたり、おせっかいかけて、ひじょうに、そういうものに迎合するのは私はいやであります。今回は見送ろうと思っておりますけれども¹⁴¹⁾

しかし、同幹部会に臨席した高瀬広居は、次のように記している。

「男子部幹部会の最後に演壇に進み出た池田大作会長は『世界連邦への道は、学会の地球民族主義であり、その平和実現のために原水爆禁止に学会は実力行動をとる。原水爆を使用する国の責任者は死刑にせよ』と叫び、この訴えを、世界の大国の指導者にしたいと思う、と前置きして『実は、ある人を通してケネディとの会見をあっせんしようという話があったが、いろいろ政

¹³⁹⁾ 前出、高瀬広居「都知事選五十万のカギをにぎる創価学会」、17頁。

¹⁴⁰⁾ 前出、央忠邦『日本の潮流』、143～144頁。なお、央は、創価学会に関する次著『池田大作論』(大光社、1969年)では、ケネディとの会談について触れていない。

¹⁴¹⁾ 『聖教新聞』1963年2月5日付1面。

治的妨害があって、私は今回は見送った。しかし、このつぎは率直に語り合うつもりだ』

と述べている¹⁴²」（下線引用者）

「〔その後〕有力民間人を介して、池田の丁寧な断わりのあいさつがケネディ大統領に伝えられ¹⁴³」、池田としては次の機会を待つことにした。実は、ケネディは1964（昭和39）年2月に訪日を考えており、二人はワシントンではなく東京で会う可能性もあったのである。しかし、ケネディが凶弾に倒れたことで実現に至らなかった。

池田は、突然の死去を悼み、弔電をジャクリーン夫人とアメリカ総支部の学会員一同あてに送っている¹⁴⁴。

ケネディの国葬が終わってジャクリーン夫人から謝電がきた時、池田は『本当に会って話したい人だった』とポツリ、側近の幹部にもらしたという¹⁴⁵。

また池田は、浅野に対して、次のように語っている。

「仏法の絶対平和主義を話したら、ケネディならわかるでしょう¹⁴⁶」

池田としては、ケネディとの会談は、あくまで延期であり、機会をとらえてぜひとも話しあいたいと考えていたのである。*The Japan Times* 紙のインタビュー記事からは、改めてそのことが読み取れる。

池田は、1993（平成5）年11月21日に開催された創価学会の中部祝賀大総会において、「私が会長に就任した少しあと、大統領が『お会いしたい』とのことであると、大統領の関係者から連絡があった。準備を進めていたのだが、さまざまな状況があり、お会いできないでいるうちに、大統領は凶弾に倒れた¹⁴⁷」（下線引用者）と語っている。

また、ケネディのもとでインド大使を務めたJ・K・ガルブレイスとの1990（平成2）年10月5日の対談でも、次のように語っている。

「私も実は、ケネディ大統領から連絡があり、お会いする予定になっていました。準備も進んでいましたが、結局、大統領が凶弾に倒れられ（一九六三年十一月）、実現しませんでした。三十年近く前になりますが、今なお残念な思いが胸にあります¹⁴⁸」（下線引用者）

このように、ケネディからの会談の要請が私的なものであったにもかかわらず¹⁴⁹、それがあったからか、創価学会に関する情報がケネディのもとに寄せられるようになった。CIAは、1963（昭

¹⁴² 前出、高瀬広居「都知事選五十万のカギをにぎる創価学会」、17頁。

¹⁴³ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、57頁。

¹⁴⁴ 前出の浅野秀満『あすの創価学会』の57～59頁、および、『聖教新聞』1963年12月10日付8面・11月26日付1面を参照。

¹⁴⁵ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、58頁参照。

¹⁴⁶ 同前、58頁。

¹⁴⁷ 『聖教新聞』1993年11月23日付4面。

¹⁴⁸ 『聖教新聞』1990年10月7日付2面。

¹⁴⁹ 前出の浅野秀満『あすの創価学会』では、「ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている」（55頁）と記されている。

和38)年8月2日付で創価学会についてレポートを作成し、ケネディのもとに提出している¹⁵⁰。また、全米で740万部発行されているフォト・ジャーナル誌 *LOOK* 1963年9月10日号の日本特集(15～40頁)では、その大半を創価学会のことに割いている。

b. ケネディ家の末弟エドワード上院議員と池田の会談

日本とケネディ家との交流の要であったロバート・ケネディが、1968(昭和43)年6月6日に凶弾に斃れた。それから10年。末弟のエドワード・ケネディ上院議員が1978(昭和53)年1月の中国訪問の帰途、京都を経て、広島医師会館での講演や原爆資料館の見学などを行い¹⁵¹、11日夜に上京。12日に聖教新聞社で池田と会談している¹⁵²。池田は、「忘れ得ぬ出会い22」の中で、この時のことを次のように記している¹⁵³。

「訪中を終えたばかりの氏からは、興味深い中国事情や米中関係、日中関係をめぐる意見を聴くことができた。また、核軍縮と南北問題についても意見を交換した。私は核兵器廃絶に向かって全生命を賭しても奔走しゆくことが氏の使命であろう、と申し述べた。氏は大きくうなずいて、核絶滅は人類共同の目的として取り組むべきだ、と賛同してくれた」

また、ホフライイトネルとの対談で池田は、次のように語っている。

弟のエドワード・ケネディ上院議員とは、一九七八年一月に東京でお会いしました。

冷戦がまだ続いていた最中の会見でした。私は申し上げました。「大事なものは人間的価値観です。国際社会に多くの課題があることは当然です。しかし、ソ連も人間です。中国も人間です。『人類は、一つの共同体である』との国際世論を高めていくべきです」と。

上院議員は、答えられました。「私は思います。人々が互いに理解し合うには『まず自分が人間的行動を起こす』ことです」「帰すべきところは『人間』です。『人間に帰れ』です」と¹⁵⁴

この会談を報じた『読売新聞』東京版は、「〔ケネディ上院議員は〕池田大作会長と約五十分、会談した。この会談では、特に日中、米中関係について活発な意見の交換が行われ、池田会長が『核廃絶こそ人類の課題』と強調、これに対しケネディ議員も『全人類的な共同目的で遂行して行かなくてはならない』と述べ、核軍縮に向けて努力することで一致した。また、南北問題について

¹⁵⁰ SPECIAL REPORT OFFICE OF CURRENT INTELLIGENCE として、BUDDHIST MILITANTS IN JAPANESE POLITICS のタイトルで作成された。ジョン・F・ケネディ大統領記念図書館博物館所蔵。

¹⁵¹ エドワード上院議員の広島訪問には、故ケネディ大統領の長女キャロライン(当時、ハーバード大学に在学中)も同行していた。後に、オバマ政権の駐日大使になったキャロラインは、オバマ大統領の広島訪問に尽力している(『中国新聞』1978年1月12日付朝刊2・14面、および、『読売新聞』東京版2017年1月18日付朝刊11面を参照)。

¹⁵² 『聖教新聞』1978年1月13日付1面・14日付2面参照。

¹⁵³ 『サンデー毎日』第37巻第37号(毎日新聞社、1978年12月31日)、48頁。

¹⁵⁴ リカルド・ディエス=ホフライイトネル/池田大作『見つめあう 西と東—人間革命と地球革命』(第三文明社、2005年)、148頁。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐる—

も、同議員が『豊かな国が貧しい国に果たすべき責任』について強調したのに対し、池田会長も宗教者の立場から『今後、生涯にわたって、あらゆる努力を積み重ねて行きたい』と決意を述べた¹⁵⁵』と報じている。

c. フルシチョフ首相との会談への意欲

それでは、フルシチョフとの会談についてはどうだったのか。

The Japan Times 紙（1963年2月16日付）の池田へのインタビュー記事には、次のように書かれている。

Ikeda told *The Japan Times* in an interview Thursday that he wanted to meet Kennedy because the President is one of the two “responsible leaders of the world today.” The other is Premier Nikita Khrushchev of the Soviet Union, whom Ikeda also hopes to meet.

池田は、2月14日、本紙とのインタビューで、ケネディ大統領との会談を望むのは“今日の世界において責任ある指導者”二人のうちの一人であるからだと言った。もう一人は、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相で、そちらとも会談を望むと述べた。

記事の見出しには、“Group’s Leader Eyes K’chev Parley Too”（「フルシチョフとの会談も視野に」）と書かれているが、それはケネディからと同様に、先方から申し入れがあれば会いたいとのメッセージではないだろうか。

ちなみに、高瀬広居『第三文明の宗教 創価学会がめざすもの』の「エピローグ」には、次のように書かれている。

「昭和三七一年一月の寒い日、創価学会聖教新聞の一室で、青年参謀がアラブ連合の代表者と語りあっていた。その一週間前には、イスラエルの学者が来た。アメリカ大使館、ソビエト大使館と、学会へはいつも外交官がくる。一体何のためにくるのだろう。（中略）学会はいま、池田会長中心に、北条浩副理事長、秋谷城永〔栄之助〕青年部長を両脚に、青年参謀、理事の集団指導で動いている。この指導者層に共通していえることは、学会青年首脳部が『政治はソビエトにある』とみていることだ。ことにフルシチョフが、キューバ問題でみせた外交手腕を高く評価し、そこから学びとろうとしている¹⁵⁶」（下線引用者）

また高瀬は、次のようにも書いている。

「池田大作氏にむけられている世界の眼は、もちろんアメリカだけではない。むしろソビエトの方が早いし熱心だ。私は、某日、ソビエトの通商代表部の人から、学会のもつ信仰内容・組織・とくに池田会長のめざす『新社会主義社会の構想』やそのリーダーシップ・権威性について執拗な質問をうけた。原水爆禁止を訴えるなら、現在の革新系団体との共同戦線結成の可能性が

¹⁵⁵ 『読売新聞』東京版1978年1月13日付朝刊2面。

¹⁵⁶ 前出、高瀬広居『第三文明の宗教 創価学会がめざすもの』、288～289頁。

かどうか、ともたずねられた。そして、私が、創価学会が単純な個人救済を主眼とした信者集団ではなく、思想団体であり、変革を志向する実践的集団であることを説明すると、彼らはしばらく暗然とし、腕を拱いて沈思していた¹⁵⁷」(下線引用者)

ちなみに、1963(昭和38)年9月25日、創価学会青年部長秋谷城永ほか青年部幹部2人が、ソ連の『今日のアジア・アフリカ』編集局の招きでソ連国民の生活視察に出発、モスクワ・レニングラード・キエフ(キーウ)・トビリシを訪問している¹⁵⁸。そして、視察者の一人である渡部城克(一郎)の「ソ連の印象記」が『公明新聞』同年10月22日付7面に掲載されている。創価学会とソ連との交流の第一歩が記された。

7. 池田にとってケネディは「心の盟友、

a. 「平和的人間革命、を目指したケネディ

ケネディ政権で大統領特別顧問を務めた、シオドア・C・ソレンセンは、『ケネディの遺産 未来を拓くために』(1970年刊)において次のように述べている。

「『ケネディの遺産』の本質が前進する平和革命の哲学として偉大な重要性を持つのは、こういった政治的枠組み〔参加する民主主義〕においてである。二人の特異な人間〔ケネディ兄弟〕とその部下たちの生活、発言、行動を通じて、それはほとんどの場合偶然にそして時には一貫性に欠けるような形で発展したのだが、私の見るところでは最終的に統一された原理の体系になったと思われる。

(中略)

ケネディ兄弟の生涯を通じて示され残された先例と原理、二人が理性と和解と平和革命にかけた期待、われわれの子孫の将来に対する強い関心、平和と自由への信仰——これらすべてが今日の必要に対して適用されなければ、『ケネディの遺産』が意味するところは非常に少なくなってしまう。

(中略)

私が『ケネディの遺産』と呼んだアプローチだけが、現代の平和的人間革命の達成に必要な原理と重点を明示できるものである。それは二人のケネディだけがその遺産を形成したからではなく、二人の生涯と哲学がその遺産を最も集中的に具現したからである¹⁵⁹」(下線引用者)

さらにソレンセンは、同書の日本語版に寄せた「ケネディ兄弟と日本の針路」において、次の

¹⁵⁷ 前出、高瀬広居「戦後異色人物探検 33 創価学会会長池田大作」、74頁。

¹⁵⁸ 『聖教新聞』1963年9月12日付1面・9月28日付1面、および、*The Seikyo News* 紙1963年9月16日付1面・9月30日付1面・10月14日付1面・10月21日付1面を参照。2025年12月13日に行った秋谷栄之助からの聞き取りによれば、この話はイズベスチャ紙の東京支局長から持ち込まれたもので、当時「鉄のカーテン」でうかがいがい知れなかったソ連国内の様子をつぶさに視察することができた。ただし、その後のソ連との交流には、つながらなかったとのことである。

¹⁵⁹ 前出、シオドア・C・ソレンセン『ケネディの遺産』、290～291頁。ソレンセンの原文では、“sets forth the priorities and principles needed to achieve a peaceful human revolution in our time”と記されている。

ように記している。

「ジョン・ケネディとロバート・ケネディの『遺産』」は、日本国民の皆さんにとって、特別の意味を持つものであると、私は信じています。両ケネディが世界と米国内の諸問題に取り組んだ姿勢——暴力と悪罵の代わりに理性と和解を強調するアプローチ——は、貴国においてとりわけ尊重される理由があるのであります。

ケネディ兄弟は、生前、平和と繁栄と進歩を体現する世界共同体の建設にあたって、日本が重要な指導的役割を演ずる国であることを、明確に認識していました。私は本書がこの目的達成に、何らかの貢献を果たしうることを、念願してやみません。

(一九七〇年二月)¹⁶⁰」(下線引用者)

ケネディには、日本に対する深い理解とともに、平和な地球社会建設に日本が指導的役割を担うことへの強い期待があったのである。それはまさに、出会うことが叶わなかった池田と響き合うものであった。

後年池田は、『新・人間革命』第8巻の「激流の章」において、ケネディの死を次のように書き綴っている。

「彼〔池田〕は、〔公民権法案など〕ケネディに共感するところが多かった。もし、ケネディの立場にいたならば、多くの面で、同じことをしていただろうと思えた。

彼には、ケネディの死が盟友の死のように感じられてならなかった。語るべき相手を、ともに世界を担うべき人を亡くした無念さが、今、ひたひたと伸一〔池田〕を包んでいた。

伸一は、心の盟友として、自分は何をもって、ケネディの死に応えるべきかを考えた。答えは明白であった。ケネディの理想を受け継ぎ、この地上から、人間への差別をなくすことだ。この世界に、永遠の平和を築き上げることだ¹⁶¹」(下線引用者)

b. 池田への寄稿要請の増加

1963(昭和38)年に池田とケネディとの会談は実現することはなかった。しかし、ケネディが会談を申し入れた人物ということもあったからか、この年から池田に雑誌や新聞への寄稿を求められることが増えている。1952(同37)年7月に公政連が参議院の第三勢力となったことで、彼の存在感が増してきたのである。

その端緒といえるものが、『中央公論』1963年5月号に掲載された「宗教と政治理念」である。同誌の目次には、「焦点に立つ創価学会会長が初めて筆をとって所信を世に問う」と書かれている。

池田は、この寄稿の最後を次のように結んでいる。

「どうか、公政連¹⁶²の、今後十年、二十年の活動を見守っていただきたい。私も選挙民の一人として、公政連を見守るとともに、公政連の議員はもちろん、すべての議員の堕落等に対して

¹⁶⁰ 同前、1頁。

¹⁶¹ 池田大作『新・人間革命』第8巻(聖教ワイド文庫、2004年)、302頁。

¹⁶² 1964年11月に公明党が結成される。

は、嚴重に監視し、いましめてゆく決心である。

私たちは、あくまでも日本の安泰のみを願っている。そして世界の平和実現を心から願っている。日本が安泰となり、世界平和に寄与しうるりっぱな国になったならば、創価学会は解散してもよいとも考えている¹⁶³」(下線引用者)

次に、核兵器廃絶に対する池田の考えを端的に示すものとして、『週刊朝日』1967(昭和42)年8月11日号の特集「私の中のヒロシマ 日本を動かす各界70人の原爆意識」(下線引用者)に掲載された質問と池田の回答を紹介しておきたい¹⁶⁴。

質問は、次のとおりである。

- ① 将来地球上のどこかで「第二のヒロシマ」が起る可能性はありますか。あるとすれば、どこでしょうか。
- ② 「第二のヒロシマ」を防止するのに日本がとりうる有効な方法がありましたら、提案してください。
- ③ 原爆について小説、詩、手記、映画、演劇などが数多く発表されています。その中で感銘をうけたものがありましたら、一つだけ挙げてください。

それに対する池田の答えは明快である。

- ① 可能性はあるが、断じておこさせてはならない。
- ② 現在、世界平和は「力の均衡」によって保たれている。だが力による抑止は、あくまで相対的なもので「第二のヒロシマ」を完全に防止することはできない。理性に訴え、人間性に基づく「絶対平和主義」の思想を浸透せしめる以外に方法はないと思う。
- ③ 井伏鱒二『黒い雨』

c. 識者との対話と平和提言の開始

池田は、戸田の遺訓である「原水爆禁止宣言」から11年後の1968(昭和43)年9月8日に「日中国交正常化」を提言。さらに、6年後の74(同49)年5月に初訪中し、9月8日にはソ連(現在のロシア)を初訪問。12月には再度中国を訪れ、対立関係にあった両国の和解へ向けた民間外交を行っている。

かつて戸田は、次のように語ったという。

「戦争をなくすためには、社会の制度や国家の体制を変えるだけではだめだ。根本の『人間』を変えるしかない。民衆が強くなるしかない。民衆が賢くなるしかない。

そして、世界中の民衆が、心と心を結び合わせていく以外にない!¹⁶⁵」

池田は戸田の思いを受け継いで、生涯に54カ国・地域を訪問し、記録に残っているだけでも

¹⁶³ 『中央公論』第78年第5号(中央公論社、1963年5月)、309頁。

¹⁶⁴ 『週刊朝日』第72巻第34号(朝日新聞社、1967年8月11日)、22頁。

¹⁶⁵ ジョセフ・ロートブラット／池田大作『地球平和への探求』(潮出版社、2006年)、「はじめに」の18～19頁参照。

国内外の識者 7000 人以上と語り合っている¹⁶⁶。

各国の識者と膝詰めの対話を重ねてきた池田は、1972（昭和 47）年以降、数多くの対談集・鼎談集を発表している。トインビー、キッシンジャー、ガルブレイス、カズンズ、ポーリング、ロートブラットなど、主なものだけでも 93 冊（28 カ国 87 人）を数えることができる。その中では、ケネディも目指していた平和な地球社会実現のための率直な対話が交わされている（資料 8）¹⁶⁷。また池田は、1983（昭和 58）年以降 2022（令和 4）年まで、Soka Gakkai International（S G I）会長として、S G I 結成の日である 1 月 26 日に、毎年平和提言を発表している¹⁶⁸。

おわりに

本稿においては、「はじめに」で提示した 6 つの疑問に対して、*The Japan Times* 紙（1963 年 2 月 16 日付）のインタビュー記事などによって、以下の考察を行うことができた。

① ケネディは、なぜ池田との会談を希望したのか。そして、どのようなことを池田と語り合いたと考えたのか。

1962（昭和 37）年 10 月のキューバ・核ミサイル危機を回避した後、ケネディが最も苦慮していたのは、核兵器保有の懸念が高まっていた中国への対応だった。そのためにも、日本との良好な関係構築が望まれた。そのような中、同年 7 月に行われた参議院議員選挙の結果、創価学会が推薦する公明政治連盟が参議院の第三会派になり、今後さらに飛躍する可能性を秘めていた。創価学会の若き会長池田大作は、恩師である戸田城聖の遺命である核兵器廃絶と地球民族主義を強く主張していた。核不拡散と核実験禁止条約の締結に向けて強い意志を持っていたケネディは、そのような池田と一人の私人として会うことにしたのではないか。

② 池田の存在を誰がケネディに伝え、ケネディの会談希望の意向を誰が池田に伝えたか。

誰がケネディに池田との会談を勧めたかは明らかではない。ただ、渡部一郎からの聞き取りにあるように、平和部隊に参加したアメリカの青年部員の可能性は考えられる。次に、ケネディからの会談申し入れを伝えた人物について、池田は名前を明かしていない。ただ、ケネディが一人の私人としてこのようなことを依頼できるのは、日本の民間人では、細野軍治が最も有力である。

¹⁶⁶ 池田大作「随筆 人間世紀の光 192」（『聖教新聞』2009 年 6 月 28 日付 2 面）参照。国外の主な知識人の会見者と会見年月は、前出の『池田大作 世界との対話』の 280～318 頁を参照。

¹⁶⁷ そのほかに、章ごとに対談者が入れ替わる対談集、池田からの聞き取りを主とするもの、創価学会の教学に関するものなどもあるが、資料 8 では割愛した。

¹⁶⁸ 1983 年から 2008 年までの平和提言の骨子は、東洋哲学研究所編『世界市民池田大作 識者が語る平和行動と哲学』（第三文明社、2008 年）の 312～317 頁に掲載されている。

③ ケネディに会った際、池田は何を語ろうと考えていたのか。

池田は、核実験の停止と「地球民族主義」の思想、さらには、米ソ首脳会談の早期再開および原水爆や戦争の問題などを忌憚なく語り合える「世界首脳会議」の開催を提案したかったと述べている。

後年池田は、「ケネディ大統領も、東西の冷戦下にあつて、新しき対話の道を切り開こうと、命を賭して挑戦されていた。会話が実現すれば、いかなる語らいが広がったことか¹⁶⁹」「もしも、ケネディと会っていれば、世界の平和や人類の未来のことなどについて、どんなに有意義な語らいができたかと思うと、残念でしかたがなかった¹⁷⁰」と記している。戸田城聖から託された「地球民族主義」と核兵器廃絶を実現したいと考える池田との会談は、ケネディにとっても自らの信念を補強する実りあるものになったであろう。

④ *The Japan Times* 紙に書かれている『政治的理由により頓挫』とは、どのようなことだったのか。

自民党の大物代議士が、ケネディとの会談を認める代わりに、政治的取引を求めたことで、1963（昭和38）年2月か3月始めに予定されていた会談の中止を池田が決断したことを意味する。

⑤ *The Japan Times* 紙の見出しに「JFKとの会談を予定」とあるが、会談中止後も実現の可能性はあったのか。

1963（昭和38）年2月頃に予定されていたケネディとの会談については実現することはできなかったが、池田は次の機会を待っていたことが、*The Japan Times* 紙（1963年2月16日付）のインタビュー記事や、彼の発言から読み取れる。

⑥ *The Japan Times* 紙の見出しにある「フルシチョフとの会談も視野に」の意味することは。

ソ連のフルシチョフ首相から同様の申し出があれば、ぜひとも語り合いたいということであり、すでに具体的な話があったということではない。

¹⁶⁹ 池田大作「随筆 人間世紀の光124」（『聖教新聞』2007年2月21日付3面）。

¹⁷⁰ 池田大作『新・人間革命』第8巻（聖教ワイド文庫、2004年）、290～291頁。

キューバ・核ミサイル危機後、米ソが融和の兆しを見せる中で、ケネディにとって大きな外交課題は、国連に加盟していない中国といかに向き合うかということであった。当時アメリカは、共産主義の拡大を阻止するために、中国封じ込め政策を取っていた¹⁷¹。しかし池田は、ケネディ死去から1年後の公明党結成大会（1964年11月17日）前に、党の外交政策の骨格として「中華人民共和国を正式承認し、日本は中国との国交回復に努めるべきである」と提案している。これは、公明党結成にあたり創立者である彼からの唯一の提案であった¹⁷²。

その後池田は、1968（昭和43）年9月8日に開催された創価学会第11回学生部総会で、[＊]日中国交正常化提言、を発表¹⁷³。西園寺一晃は、池田がこの提言を発表した当時の背景を振り返りながら、次のように述べている。

「池田名誉会長が日中国交正常化を提言された当時（一九六八年）は〔日中間の関係が〕非常に陰悪でした。『中国と付き合う』というだけで白眼視されていました。そういう時代に、堂々と『日中友好』を訴えるということは、大変なことでした。時代状況からいって、本当に『命懸けの戦い』であったはずだ¹⁷⁴」

しかし、時流は日中平和友好条約の締結へと向かっていった。日中国交正常化は、ケネディからの会談申し入れがあった頃には、すでに池田の中にあった考えかもしれない。戸田が掲げた[＊]地球民族主義、からすれば当然行き着くことだからである¹⁷⁵。その後池田は、中国・ソ連を相次いで訪問し、両国首脳との対話によって中ソ融和に向けた[＊]民間外交、を行なった。まさに、ケネディがやり残した[＊]むつかしい宿題、¹⁷⁶に取り組んだといえよう。池田は、恩師である戸田から常々「世界中に大きく平和を作る人生であれ」と教えられてきたという¹⁷⁷。まさにその通りの人生を歩んだのである。

池田は、平和な地球社会実現への確かなロールモデルを私たちに示した。「創価」に対する信頼という財産を残した。彼は、1971（昭和46）年4月の創価大学開学にあたって、建学の精神

¹⁷¹ 1949年10月に中華人民共和国が成立したが、アメリカとは国交がない状態が続き、72年に関係が改善されたものの、正式に国交が樹立されたのは79年である。1960年6月の朝鮮戦争以降、アメリカは台湾の中華民国政府をもって中国を代表する正統政府として支持・援助し、中華人民共和国に対しては、国家としての承認を拒み、軍事的・経済的に封じ込める政策を継続していた。しかし、ケネディ政権の時代になって、もはや中華人民共和国を無視しては国際関係を考えることができないとの認識が行政部からも出されたこともあり、ケネディは1963年11月10日の記者会見において「中共の態度いかんでは中国政策を変える用意がある」と発言している。このことについては、山際晃『米中関係の歴史的展開 一九四一年～一九七九年』（研文出版、1997年）、3・13・46～47頁、『読売新聞』東京版1963年11月15日付朝刊3面、『朝日新聞』東京本社版同日付夕刊1面、などを参照。

¹⁷² 前出、『増訂版 公明党50年の歩み』、36頁参照。池田は、『現代の眼』第5巻第9号（現代評論社、1964年9月）の丸山邦男「池田会長への六つの質問」でも同様の発言をしている（80頁参照）。

¹⁷³ 提言の骨子は、『朝日新聞』東京本社版1968年6月8日付朝刊1・2面で紹介されている。総会前日までには、プレス・リリースされていた。

¹⁷⁴ 『聖教新聞』1997年5月17日付3面。

¹⁷⁵ 『聖教新聞』1968年9月10日付5面参照。

¹⁷⁶ 前出、『俣野健輔の回想』、359頁。

¹⁷⁷ ドジョーギーン・ツェデブ・池田大作『友情の大草原—モンゴルと日本の語らい』（潮出版社、2007年）、70頁参照。

のひとつとして「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を掲げ、多くの青年が続くことへの大きな期待を表明している。

本稿は、あくまで途中経過の報告である。今後新たな資料が発見され、ジョン・F・ケネディと池田大作についての研究が進展することを心より期待してやまない。

資料1 *The Japan Times* 紙 1963年2月16日付のインタビュー記事(英文および和訳)

<原文>

Group's Leader Eyes K'chev Parley Too

Soka Gakkai Plans JFK Meeting

By GYO HANI

Daisaku Ikeda, 35-year-old head of the ever-growing religious body Soka Gakkai, is planning to meet President John F. Kennedy before long as the representative of "one million youths of Japan."

Ikeda told *The Japan Times* in an interview Thursday that he wanted to meet Kennedy because the President is one of the two "responsible leaders of the world today." The other is Premier Nikita Khrushchev of the Soviet Union, whom Ikeda also hopes to meet.

"Our organization now has one million youths. This means that we have Japan's future in our hands."

"Representing these one million young men and women, I would like to meet President Kennedy and ask him to stop testing nuclear weapons."

Opposition to nuclear weapons tests is nothing new. But when it comes from the sharp-eyed, stocky Ikeda, it becomes more than a harmless, hackneyed slogan for he is the leader of more than six million devout followers of Nichiren Shoshu Buddhism, a religious-politico group that is rapidly growing into Japan's third political power.

Furthermore, the Soka Gakkai is expanding abroad. Ikeda is just back from his fifth world preaching tour during which he visited the United States and 10 countries in Europe and Southeast Asia together with his eight top aides.

Ikeda said that the purpose of his world tour was to give "encouragement and correct guidance" to overseas members—about 3,700 households in the U.S., a few hundred families in Europe and several thousand households in Southeast Asia, most of whom are of Japanese extraction. He denied any ambition of making Nichiren Shoshu a world religion. He noted, however, that the existing great religions of the world, including Christianity, have become stalemated, and that the time was now ripe for the propagation of the gospel of St. Nichiren, 13th century Buddhist saint.

"The second purpose of my meeting with President Kennedy is to tell him that the solution for ending present world tensions is inherent in the gospel of St. Nichiren," Ikeda said. He termed it "global racialism."

"Although I am not at all sure whether President Kennedy will listen to me on this point," he added with a smile.

He declined to say when he would go to Washington, but indicated that it would be in the not too distant future.

Actually, it was planned that the Soka Gakkai leader would meet Kennedy sometime this month or early next month, but because of political reasons the plans fell through. According to informed sources. Liberal-Democratic Party leaders tried to secure Ikeda's commitment to support Ryotaro Azuma in the April election for Tokyo governor in exchange for backing Ikeda's meeting with Kennedy. However, the proposed deal reportedly angered the Soka Gakkai leader.

There is every reason for such pressure being brought to bear on Daisaku Ikeda.

Soka Gakkai, with its 500,000 Tokyo members, has the power in its hands to decide the winner of the Tokyo gubernatorial race, being fought between Tory-backed Azuma and Socialist-supported Masaru Sakamoto, former governor of Hyogo Prefecture.

At the last election in 1959, Azuma beat his Socialist-backed opponent Hachiro Arima by a margin of 169,157. Azuma had 1,821,346 votes and Arima had 1,652,189. There were strong reasons to believe that Soka Gakkai members voted for Azuma.

Ikeda told The Japan Times that Koseiren, the political body composed of 15 House of Councillors members from Soka Gakkai, will pick one of the two candidates and urge Soka Gakkai members to follow that choice.

"We will make the choice strictly on the basis of our judgment as to which of the two men will better serve the welfare of the people of Tokyo. Money or any other form of pressure from the candidate or his supporters will work against the candidate," he warned.

Ikeda also emphasized that choosing one of the two does not necessarily mean that Soka Gakkai is throwing its support to the political party which is backing the candidate. He said Japanese political parties today are riddled with factional strife and are neglecting their duty of serving the people by whom they are elected.

"Our hope is to provide true stability for Japan. For the past 17 years since the end of the war, political parties have been completely unable to do this. As a result, the people have suffered. All this derives from the fact that the Japanese have no guiding concepts. Other countries of the world have some great sustaining philosophy that serves as the foundation of their thinking and behavior, but the Japanese lack such a fundamental base"

"The gospel of St. Nichiren fills this vacuum. That is why we have such a great number of youths in our organization."

He said it was no exaggeration to claim a membership of one million youths—men and women between the ages of 12 and 30.

"If this is a lie—it won't live long without betraying itself. The claim on our

membership is tested at each election by the number of votes we collect.”

Through the militant face-to-face crusading method known as “shakubuku,” the religious group’s membership grew from several thousand in 1951—the year the body aggressively expanded under its second president Josei Toda—to about a million in 1956. Today, it includes more than six million members.

This year Soka Gakkai has set its goal for expansion at 400,000 new households. Except for last year, this increase is actually below the annual average of 500,000 new households. According to Ikeda, this limit has been set in order to deepen the understanding of St. Nichiren’s gospel among the present members.

Soka Gakkai now has 15 representatives in the House of Councillors, but none in the House of Representatives. Asked if it would be more effective to send men into the Lower House to further Soka Gakkai’s political goal, Ikeda said:

“I am not considering it at present. But I can’t speak about the future because the need may arise and the people may desire to have our men elected to the Lower House in the days to come.”

<日本語訳>

創価学会はJFKとの会談を予定

会長、フルシチョフとの会談も視野に

羽仁翹記者

拡大を続ける宗教団体・創価学会の35歳の会長池田大作は、近いうちに「日本の青年100万人」の代表としてジョン・F・ケネディ大統領との会談を予定している。

池田は、2月14日、本紙とのインタビューで、ケネディ大統領との会談を望むのは、“今日の世界において責任ある指導者”二人のうちの一人であるからだと言った。もう一人は、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相で、そちらとも会談を望むと述べた。

「我々の組織には現在100万の青年がいます。これは日本の未来は我々の掌中にあるということとです」

「私は、この100万の男女青年を代表してケネディ大統領とお会いし、核実験をやめるよう伝えたい」

核実験への反対自体は目新しくもない。しかし、眼光鋭くがっしりとした池田がそういう場合、人畜無害で陳腐なスローガン以上の意味を帯びてくる。彼は、日蓮正宗の熱心な信者600万人を率いる指導者で、その宗教政治団体は日本の第三の政治勢力へと急速に発展しているからだ。

さらには、創価学会は海外でも拡大している。池田は5回目となる海外布教の旅から帰国したばかりだ。今回はアメリカと、欧州・東南アジア合わせて10カ国を、8名の側近と共に歴訪した。

池田は、海外訪問の目的を「激励と正しい指導」を海外の会員に与えるためとした。アメリカには約3,700世帯、欧州に200～300世帯、東南アジアに数千世帯の会員がおり、ほとんどが日系だという。池田は、日蓮正宗を世界宗教にする野望はないと否定した。しかし、キリスト教を含む世界の偉大な諸宗教は行き詰まっており、13世紀の仏教僧である日蓮大聖人の教えを広める時が熟したと語った。

「ケネディ大統領と会談する第二の目的は、今日の国際的緊張を解消する方途は、日蓮大聖人の教えに内在していることを伝えるためです」

池田はこれを「地球民族主義」と言った。

「ただし、その点に関してはケネディ大統領が耳を傾けてくれるかは分かりませんよ」と池田は笑顔で付け加えた。

池田は、ワシントン行きがいつになるか明言は避けたが、そう遠くない未来になるだろうと示唆した。

実際のところは、池田会長は今月か来月はじめ頃にケネディと会談する予定であったが、政治的理由により頓挫したのだ。情報筋によれば、自民党幹部らはケネディ会談の後押しをする見返りとして、池田から4月の都知事選で東龍太郎への支持確約を取り付けようとした。しかし、この取引の提案は、池田の逆鱗に触れたのだと言う。

池田大作にそのような圧力がかけられるのには、十分すぎるほど理由がある。

東京に会員50万人を擁する創価学会は、保守系の東と、社会党系の元兵庫県知事・阪本勝が争う東京都知事選の勝者を決定するだけの力を手にしているのだ。

前回1959年の都知事選で、東は169,157票差で社会党系の有田八郎を破った。東の得票数は1,821,346に対し、有田は1,652,189であった。創価学会員は東に投票したとする確かな根拠がある。

池田は本紙に対し、創価学会員の参議院議員15名から成る政治団体・公政連は、両候補のいずれかを選び、それに追随するよう創価学会員に促すことになるであろうと語った。

「我々は、どちらの候補がより東京都民の福祉のためになるのか、厳正にその判断に基づいて選択をします。両候補およびその支援者から、金銭その他のいかなる形であれ圧力があれば、それはその候補にとってマイナスになるでしょう」と池田は警告した。

池田はまた、どちらかの候補を選んだからといって、必ずしも創価学会がその候補を推している政党を支持するという意味ではない、とも強調した。池田は、今日の日本の政党は派閥争いに明け暮れていて、自分たちを選んでくれる民衆に奉仕する義務を怠っていると語った。

「日本に真の安定をもたらすのが我々の願いです。終戦から17年、諸政党はまったくそれが出来なかった。そのために民衆は苦しんできた。それもすべて、日本人には指針がないことが原因です。他の国々には、考え方や行動の基盤となる偉大な哲学がある。しかし日本人には、そのような基盤がありません」

「その空白を埋めるのが、日蓮大聖人の教えです。だから我々の組織には、これだけ多くの青年がいるのです」

池田は、12歳から30歳までの男女青年部員100万人という数字は、決して誇張ではないと述べた。

「それが嘘ならば、すぐにばれてしまうでしょう。創価学会の公称会員数は、選挙のたびに我々が集める票の数で検証されています」

創価学会の会員数は、「折伏」として知られる対面／ひざ詰めの強硬な／過激な布教方法によって、戸田城聖第二代会長のもとで猛烈に拡大した1951年の数千人から、1956年には約100万人に増加し、現在は600万人を超える。

創価学会は今年の拡大目標を40万世帯としている。昨年を除き、年平均50万世帯の拡大を下回る目標だ。池田によると、これは既存の会員間で日蓮大聖人の教えに対する理解をより深めるために、低く設定したのだという。

現在、創価学会は参議院に15名の代表を送っているが、衆議院にはゼロだ。衆議院にも代表を送れば、創価学会の政治目的実現のために、より効果的ではないかと質問すると、池田はこう述べた。

「今は考えておりません。しかし将来はどうか分かりません。今後、必要が生じて、創価学会の代表を衆議院にも送りたいと民衆が望むようになるかもしれませんから」

付記：インタビューをまとめた羽仁翹記者について

The Japan Times 紙は、1897年に創刊された英字新聞。インタビューにあたったのは、当時、同紙記者であった羽仁翹^{はにぎょう}。このインタビューが行われた背景として、同紙の論説委員長の斎藤忠^{ちゅう}が小平芳平『創価学会』（鳳書院）の「私の見た創価学会」に、再版（1962年8月15日刊）から文章を寄せていること¹⁷⁸、および、取締役・編集主幹の平沢和重がロバート・ケネディ夫妻歓迎日本青年委員会の実行委員であり、ケネディ大統領に深い関心を持っていたことをあげておきたい。

羽仁は、1931年、自由学園創立者羽仁吉一の弟賢良の三男として東京に生まれる。自由学園初等部、男子部中等科、高等科をへて最高学部を1953年に卒業。英字新聞を発行するジャパントタイムズ社に入社、編集局勤務。1960年にフルブライト全給費奨学生として米国コロンビア大学大学院ジャーナリズムスクールに入学。翌61年、修士号を得て卒業。1977年、取締役編集局長、82年、同編集担当を務め、85年退社。同年4月、学校法人自由学園の副学園長に就任。1990年、学園長に就任。2004年、学園長を退任する。2004年4月、名誉学園長。同年10月死去¹⁷⁹。この

¹⁷⁸ 斎藤忠の文章は、第4版（1964年4月2日刊）まで掲載されている。第5版以降は、「私の見た創価学会」の部分がなくなった。

¹⁷⁹ 羽仁翹『よく生きる人を育てる 偏差値ではなく人間値』（教文館、2005年）の「著者紹介」、および、自由学園100年史編纂委員会『自由学園100年史』（自由学園出版局、2021年）を参照。

インタビューは、帰国2年後に行われている。

羽仁は、初等教育から高等教育まで自由学園で学んでいるが、自由学園の小学校主事佐藤瑞彦(1893～1981年)について触れておきたい。彼は、現在の岩手県水沢市出身。岩手県師範学校附属小学校の首席訓導であった佐藤は、1928(昭和3)年4月の自由学園小学校設立申請にあたり招聘され、1971(昭和46)年7月の退職まで38年間主事を勤める。1963(昭和38)年から68(同43)年まで、日本私立小学校連合会の会長を務めている。

佐藤は、『東京朝日新聞』1931年3月27日付朝刊6面に「教育指導の原理 創価教育学体系第一巻」という書評を掲載。牧口常三郎の創価教育学を高く評価し、「続刊を待望しているものである」と記している。牧口と自由学園および佐藤瑞彦との交友関係は明らかになっていないが、大正新教育運動の中で接点があったであろうことは推察できる。

また羽仁は、ジャパントイムズ社を退職後、母校自由学園の三代目の学園長として14年間勤めているが、彼の著書のタイトル『よく生きる人を育てる 偏差値ではなく人間値』の「人間値」という言葉に着目したい。偶然かもしれないが、創価大学の教職員学生を精力的に取材してまとめられた『シリーズ大学は挑戦する 創価大学』(栄光教育文化研究所、1996年)の著者悠木夏文は、創価大学を評するのに「人間値」という言葉を使い、「二一世紀の世界に必要なものは高い偏差値ではなく、優れた人間値に違いない。新たな四半世紀に向かう創価大学の挑戦が、それを実証し続けることを期待している」で結んでいる。

羽仁と池田には通じ合うものがあつたのではないか。ちなみに、*The Japan Times* 紙は、本学の開学について1971(昭和46)年4月3日付2面で紹介している。

資料2 1963(昭和38)年2月1日の創価学会男子部幹部会(早稲田記念会堂)での池田講演から(『聖教新聞』1963年2月5日付1面)

私も、三百万世帯を越えた今日、なんとか、原水爆禁止の主張と、それから東洋仏法の神髄たる、唯心・唯物二大思想をも指導する色心不二の大生命哲学でなければ、絶対に、この行き詰まりを、どうしようもないということを、世界の大国の指導者に教えたい、聞いても聞かなくてもいいから訴えておきたい、こういう念願でございました。

いろいろ方法もあらうと思いますが、どうしても政治的に複雑になってしまったり、その機会がとられなかった。今回も、ときには、まず、ケネディ大統領、ラスク〔国務〕長官にも、その主張がいえるような機会のルートができたのでありますけれども、日本の為政者が、なんとなくじゃましたり、おせっかいかけて、ひじょうに、そういうものに迎合するのは私はいやであります。今回は見送ろうと思っておりますけれども、いずれにしても、はやかれおそかれ、たとえ聞いても聞かなくても、その恩師の主張をば、下は民衆の大きい波とし、上は全世界の責任ある指導者に、われわれのこの恩師の主張を、情熱をこめ、真心こめて、ともに訴えきっていかうではありませんか。

資料3 1963（昭和38）年2月4日の創価学会女子部幹部会（早稲田記念会堂）での池田講演から（『聖教新聞』1963年2月7日付1面）

先日は男子部の幹部会の時に、恩師戸田先生の原水爆禁止の主張を再確認して、しっかりそれを世界に流布していこう、こういうふうに申しました。その一つの具体的な方法といいますが、または日本民族の行き方として、全世界に向かって、日本の国だけが原水爆の洗礼を受けた犠牲の国です。どんなことがあっても、原水爆の戦争はあってはならない。禁止をすべきだといえる資格のあるのは日本民族です。

で、戸田先生の主張は、とうぜん私も、第一線に立って死ぬまでいいきっていきます。皆さん方の努力も得ますし、皆さん方も同じようにがんばっていただきたいと思います。私は、ひとつの例として、世界の指導者、すなわち、大統領、首相、総理大臣など、世界には国が百前後あると思いますが、その百人の世界の指導者が、それは通訳を連れてきてよいでしょう。二月にいっぺんでも、また三月にいっぺんでもいいと思います。できれば毎月やってもらいたい。なぜかなれば、一日でフランスでもアメリカへも、どこへでも行けるジェット機の時代であります。忙しいといったって、一日や二日、どうということはありませんよ。学会人のほうがよほど忙しいですよ、忙しいといえ（笑い）。また旅費といっても、そんな大統領や、それから首相はみんなたくさんお金を持っていると思うのですよ。持っていないのは、皆さんか、私だけです。（中略）ぜんぶ指導者も世界の平和のために、協議をしてもらいたい。

指導者であるならば、世界の平和を念願するのはとうぜんです。それを念願しない指導者があるならば、指導者ではありません。みんな全人類がしあわせになるために、一刻もはやくしあわせになるために、戦争をさせないために、一生懸命に、百人が、今月はタイ国で会議をしよう、全体会議でもよい、名前はいつでもよい、それから、この次はエチオピアでやろう、その次はソ連でやろう、モスクワでやろう、その次はアメリカでやろう、その次は日本でやる、その次は中共でやる、こういうふうに、どんなことを論じてもよいけれども、究極の目的は、ぜんぶ世界の平和、人類の幸福、戦争は絶対に禁止、こういうふうに話し合いを一年、二年つづけていくならば、私はひじょうにいい、有意義な結果になるだろうと思うし、また指導者にそれだけの雅量があればならないと私は思うのですけれど、どうでしょうか。

どうか私どもは、個人の幸福はとうぜんのこと、または、その個人も、社会、一国、世界というものに影響をうけた個人でありますから、不幸な人、それから社会のため、民族のために、しっかりまた力を合わせて、今月も有意義にがんばっていこうではありませんか」

資料4 浅野秀満『あすの創価学会』（1970年刊）の池田からのインタビューに基づく記述

かつて池田は、アメリカの故ケネディ大統領から‘内密の会見。を申しこまれたことがある。
東京・信濃町にある学会本部に、ある有力民間人が意向打診に現われた。

アメリカ国務省の意を受けてきたといい、

「ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている。国務省が私に、使者として意向をたしかめてほしいと依頼してきた。いかがですか」

池田は、突然の話に驚いたが、二人の会見がケネディ大統領の強い希望であることを確認したあと、しばらく考えたという。

池田が会長に就任して三年目の〔昭和〕三十七年十二月で、当時、日米安保条約締結による混乱が尾を引き、左右両翼が激しい対立をみせていた。学会は、そうした国内情勢のなかで、参議院に進出するなど、政治的にも比重が大きくなりつつあった。ケネディ大統領の会見意図はなにか。内外に政治的に利用されないか。アメリカ布教のこともある……。

「お会いしましょう。私もお話したいことがいろいろあります」

早速、北条浩副会長（当時、総務）ら最高幹部を集めて‘ケネディ会見。を伝え、必要な準備を指示した。

公明党（当時、公明政治連盟）幹部にも秘かに会見のことが伝えられた。会見に備えて内外の情勢分析が池田を中心に専門家を集めて行なわれた。池田はアメリカのアジア政策や核政策について一つの構想をいだけただけに、このさい、腹藏なくケネディにぶつけてみる気になった。

早速、訪米計画を立て、会見日程を組みこむことになった。日程はケネディ大統領のスケジュールと合わせた。

手土産は池田が選んだ日本の名刀一振り。

「ケネディに、日本人の心を語るのにちょうどいいですからね」

と後に語っている。

洋服屋が呼ばれ、タキシードも新調。ディナー・パーティに備えてだった。

あわただしく準備が進むうち、当時の駐日大使であったライシャワーが二人の会見計画を知って驚き、渡米前に会見したいと申しこんできた。会うことになった。

その前夜、自民党の故人となった大物代議士が、池田の前に現れたのである。

「ケネディに会うそうだが、自民党内には異論の声もある。なんとか私が骨を折ろう。そこで、一つだが、力をかしてくれないか」

政治的压力で会見などどうにでもなるとほのめかしながら、目前に迫っていた東京都知事選の協力を、暗にちらつかせたいらしい。

池田は会見計画に、政治の暗い影がさしてきたのを察知すると怒った。

「それでは話が違ってきます。またの機会をまちましょう」

その場で、大物代議士のさそいを断わり、ケネディとの会見をとりやめた。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

ライシャワーとの会談も中止した。有力民間人を介して、池田の丁重な断わりのあいさつがケネディ大統領に伝えられた。

池田とケネディ大統領の会見準備は、二人とも一私人としてすすめていたので、池田が旅券申請するまで、外部では知らなかった。

池田の日程に「大統領会見、が組みこまれていることがわかると、間もなく、自民党筋の知るところとなったという。

それから一年後、ケネディはダラスで凶弾に倒れた。池田はそのニュースを地方指導先きの鹿児島県指宿のホテルで聞き、即座に東京の学会本部に、ジャクリーヌ夫人とロスアンゼルスの本部に、それぞれ弔電を打つように指示、また、ロスアンゼルス本部には「ジャクリーヌ夫人に弔電を打つこと」と電報を打たせた。

池田はこんな細かな配慮をわすれない。国葬が終わってジャクリーヌ夫人から謝電がきたとき、「本当に会って話したい人だった」

とポツリ、側近の幹部にもらした。

最近になって池田は、

「あのときは洋服までつくって損しちゃいましたよ」

笑いで茶化しながら、

「ケネディはきっと、学会が将来、どっちの方向に行くのか、反共になるのか、容共になるのか、じかに聞きたかったのでしょう。私もアメリカのアジア政策についてあれこれ聞いたりしたかった」

と、私に語った。そして、「流れた会見、を残念ながらがらいった。

「仏法の絶対平和主義を話したら、ケネディならわかるでしょう」

資料5 ケネディとの会談に言及した主な池田の記述・発言（資料1～4を除く）

No	会合名・書名	実施年	会合もしくは 会談の月日	掲載年	掲載月日	主な内容	池田大作全集	
							巻	頁
1	ライナス・ポーリングとの対談 『生命の世紀への探究』			1990	10月2日	ケネディ大統領から招待状をいただいたとお会いする予定でした。折悪しく私のほうの都合でお会いすることができず、今もって残念な思いが残っております。	14	148
2	J・K・ガルブレイスとの2度目の対談	1990	10月5日	1990	10月7日	私も実は、ケネディ大統領から連絡があり、お会いする予定になっていました。準備も進んでいましたが、結局、大統領が凶弾に倒れられ（一九六三年十一月）、実現しませんでした。三十年近く前になりますが、今なお残念な思いが胸にあります。	—	—
3	中部祝賀総会	1993	11月21日	1993	11月23日	私が会長に就任した少しあと、大統領が「お会いしたい」とのことであると、大統領の関係者から連絡があった。準備を進めていたのだが、さまざまな状況があり、お会いできないでいるうちに、大統領は凶弾に倒れた。	83	367
4	『新・人間革命』第7巻「文化の華」の章			1997	5月31日	アメリカのケネディ大統領から、会見を申し込まれたのである。ある著名な民間人が伸一を訪ね、ケネディとの会見の意向を打診したのだ。その人は言った。「私は、本日はアメリカの国務省の意向を受け、その使者としてまいりました。（以下略）」	—	—
5	『新・人間革命』第7巻「萌芽」の章			1997	7月24日	実は来月、ワシントンでケネディ大統領と会うようになっていると思います。ある筋を通して、私に会いたいという連絡があったんです。	—	—
6	『新・人間革命』第7巻「操舵」の章			1997	10月8日	伸一とケネディとの会見は、先方の要請もあり、極めて秘かに準備を進めてきたが、伸一が海外訪問から帰った時には、渡航手続きなどの関係からか、外部の知るところとなった。そして、政権政党の人物といわれている古老の代議士が、突然、伸一に会見を求めてきたのである。	—	—
7	世界の指導者と語る14 エドワード・ケネディ			1998	8月23日	実は私は、かつてケネディ大統領から会見の申し込みを受け、お会いする予定になっていた。しかし、日本である横植が入って会見を取り止めたという経緯があった。	123	313
8	第25回本部幹部会	1998	8月27日	1998	9月1日	ケネディ大統領とも、お会いする予定があったが、横植が入って中止になった。その後、凶弾に倒れられ、私たちの会見は、ついに実現しなかった。残念である。	89	260
9	第29回本部幹部会	1998	12月8日	1998	12月13日	大統領から会見の申し出があったが、実現する前に、大統領は凶弾に倒れてしまった。	90	30
10	ブラジリア連邦区のクリストヴァン・ブアルケ前知事との会見	1999	1月16日	1999	1月17日	ジョン・F・ケネディ米大統領との会見も妨害によって実現しなかったことや、トインビー博士との会見にも反対があったことを述懐した。	—	—
11	随筆 新人間革命 360			2003	12月1日	一九九一年九月、私がハーバード大学で第一回の講演を行った会場は、ケネディ政治大学院のウィナー講堂であった。かの若きケネディ大統領からは、かつて私も会見のお話をいただいており、その足跡が偲ばれてならなかった。	134	408

No	会合名・書名	実施年	会合もしくは 会議の月日	掲載年	掲載月日	主な内容	池田大作全集	
							巻	頁
12	随筆 人間世紀の光 22			2004	4月10日	かつて私も、ケネディ大統領の関係の方から、ご招待をお受けしたことが懐かしい。昭和三十八年（一九六三年）の二月、ワシントンで大統領と会見の予定となっていた。しかし、日本のある政治家の嫉妬の邪魔が入り、実現を見ぬまま、その年の十一月、大統領が凶弾に倒れられ、まことに残念な思いをした。	135	220
13	各合同同研修会	2004	8月7日	2004	8月11日	かつて大統領との会見の要請が関係者からあったが、実現しなかった。	—	—
14	『第三文明』連載のリカルド・ディエス＝ホフフライトネルとの対談「見つめあう西と東」第9回			2004	12月1日	実はケネディ大統領からは、私も、一九六〇年に創価学会の会長に就任してまもなく、会見の申し出をいただいていた。それらが実現できないうちに、大統領が凶弾に倒れてしまったことは、残念でなりません。	117	119
15	随筆 人間世紀の光 61			2005	1月14日	ケネディ大統領から、私に会いたいと連絡が入ったのは、一九六二年（昭和三十七年）の暮れであった。大統領との会見を推進してくださったアメリカの方々もおられた。語り合いたいことは山ほどあった。しかし、年が明けてから、日本の政治家の下劣な嫉妬と政略によって、会見の話は結局、押しつぶされてしまったのである。	136	179
16	随筆 人間世紀の光 124			2007	2月21日	振り返れば、ハーバード出身の方々との最初の縁は、ケネディ大統領であった。一九六三年の二月、私が首都ワシントンを訪問し、お会いする予定で進んでいたのである。（中略）ケネディ大統領も、東西の冷戦下において、新しき対話の道を切り開こうと、命を賭して挑戦されていた。会話が実現すれば、いかなる語らいが広がったことか。	138	58
17	山梨最高協議会	2007	9月9日	2007	9月19日	私には、ケネディ大統領と会見する予定もあった。残念ながら、実現しなかったが、後に、大統領の心を携えて、弟のエドワード・ケネディ上院議員が、わざわざ聖教新聞社に來訪してくださいました。	—	—
18	新時代第15回本部幹部会	2008	2月6日	2008	2月13日	じつは私は、ケネディ大統領から会見の申し込みを受け、お会いする予定になっていた。しかし、日本で、ある横槍が入って会見が取り止めになった。	—	—
19	創価学園特別文化講座 創立者大詩人ダンデを語る 4			2008	5月15日	実は、私は、ケネディ大統領からの要請もいただき、お会いする予定がありました。しかし、日本の政治家から邪魔が入って、会見は中止になった。その後、大統領が亡くなってしまったのです。	—	—
20	新時代第23回本部幹部会	2008	10月28日	2008	11月3日	兄のケネディ大統領とお会いする予定もあったが、さまざまな事情で実現しないうちに、大統領が暗殺されてしまった。	—	—
21	全国代表幹部会	2009	9月25日	2009	9月30日	アメリカのケネディ大統領からも会見の要請があった。残念ながら実現しなかったが、弟のエドワード・ケネディ上院議員が、東京の聖教新聞社へ来てくださった。	—	—
22	新時代第33回本部幹部会	2009	10月24日	2009	11月4日	ケネディ大統領からは、会見の要請があった。しかし、さまざまな事情で実現しないうちに、大統領が亡くなられてしまった。本当に残念であった。	—	—

資料6 小説『新・人間革命』第7巻（聖教ワイド文庫、2004年刊）におけるケネディ大統領との会見に関する記述

「ベキューバ危機。を経て間もなく、アメリカのケネディ大統領から、会見を申し込まれたのである。ある著名な民間人が伸一〔池田〕を訪ね、ケネディとの会見の意向を打診したのだ。

その人は言った。

『私は、本日はアメリカの国務省の意向を受け、その使者としてまいりました。突然の話で驚かれるかもしれませんが、ケネディ大統領は、あなたと個人的に会見を希望されております。そして、あなたに、会見する意向があるのか確かめるように依頼されたのです。あなたのお気持ちをお聞かせください』

一瞬、伸一は回答に窮した。会見を希望する意図がどこにあるのか、即座に判断しかねたからだ。しかし、その瞬間に、彼の頭脳は、目まぐるしく回転した。

——学会は同志を参議院に送り、今や十五議席を確保し、公明会を誕生させるに至った。また、三百万世帯を達成し、事実上、日本最大の宗教団体となった。しかも、民衆のなかから生まれ、民衆を組織した全く新しい勢力といえる。

それだけに、ケネディは、創価学会に対して、大きな関心をいだいているにちがいない。

また、学会の存在は、日本の社会にあって大きな比重を占めるだけに、左右両勢力のいずれにつくのか、確認しておこうという意図もあるのかもしれない。

それは、世界の指導者としては、当然の着眼といえよう。しかし、伸一は、その会見が政治的に利用されることを憂慮した。

彼は、東西両陣営のいずれにも与する意志はなかった。社会主義か自由主義かといっても、本来は社会制度上の概念であったはずである。

人間性を最大限に生かしていかなければ、社会主義も人間を抑圧する機構と化していくし、自由主義も退廃を免れない。創価学会がめざしているのは、政治・経済体制を超えた、『人間主義』であり、『地球民族主義』である。

だが、伸一は、東西の冷戦に終止符を打ち、核戦争を回避していくためには、西側陣営の指導者であるケネディと会い、忌憚のない語らいをしていく必要性を痛感していた。

さらに、アメリカでの布教を考えるなら、大統領の創価学会への正しい認識が大事になる。誤解に基づく無用な摩擦は避けたかった。

何秒間かの沈黙のあと、伸一は、静かに答えた。

『わかりました。ケネディ大統領とお会いすることにいたしましょう』

ケネディ大統領と山本伸一の会見は、その後、具体的に煮詰まっていった。

会見の日は、ケネディのスケジュールに合わせ、年が明けた二月と決まり、伸一がワシントンを訪問することになった。

伸一は、一月八日から二十七日まで、海外メンバーの指導のため、アメリカ、ヨーロッパなど

を歴訪することになっていたので、帰国後、またすぐに渡米することになる。

伸一は、その会見には、将来のために、男女青年部や学生部の幹部の代表も、同席させたいと思った。さらに、土産の品にも心を砕き、日本の文化の一つの象徴として、日本刀を贈ることにした。伸一の妻の峯子も、大統領夫人へのプレゼントに、真珠のネックレスを用意した」(98～101頁)

「山本伸一は、海外訪問から帰った翌日の二十八日には、この年初の教学部の教授会に出席し、さらに、二十九日には、本部幹部会に臨んだ。

その一方で、彼は二月に予定していたアメリカのケネディ大統領との、会見の準備に力を注いでいた。伸一は、ケネディとは、語り合いたいことがたくさんあったが、時間的な制約もあるだけに、話す内容を整理しておく必要があった。

彼が、なんとしてもケネディに伝えなければならないと考えていたのは、師の戸田城聖が『第一の遺訓』とした『原水爆禁止宣言』であった。

伸一の脳裏には、あの三ツ沢の陸上競技場での恩師の叫びがこだましていた。

『……核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今、世界に起こっているが、私はその奥に隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う。

それは、もし原水爆を、いつこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。

なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、サタンであり、怪物であります』

常々、仏法者として死刑には反対の立場をとっていた戸田が、あえて『死刑にせよ』と叫んだのは、原水爆を『絶対悪』と断ずるゆえであった。

彼が『原水爆禁止宣言』を行った一九五七年(昭和三十三年)当時、大国の核兵器の開発と製造が加速されていた。そして、この核兵器を正当化していたのが、いわゆる核抑止論であった。つまり全面核戦争になれば、人類は滅びるかもしれないという恐怖が、戦争を“抑止する。というのである。

しかし、人類の生存の権利を“人質。にとり、その恐怖を前提としたこの思考こそが、“魔性の爪。を育んでいるといってよい。

戸田の宣言は、その魔性を、根本から打ち砕こうとするものであった。

(中略)

その〔キューバ・核ミサイル危機〕緊張のなかで、彼〔ケネディ〕は強い精神力と冷静な判断をもって、核戦争の回避のために、最大限の努力をしたといってよい。

そのケネディならば、恩師の『原水爆禁止宣言』の心を深く理解するであろうし、彼の偉大な人格は、全人類の幸福と平和を願う恩師の精神と、共鳴の調べを奏でるにちがいないと、伸一は確信していた。

伸一は、世界の平和を打ち立てていくには、戸田城聖の『原水爆禁止宣言』の精神を、現実化

せねばならぬと思っていた。

彼は、そのために、ケネディに提案したいことがあった。

それは、米ソ首脳会談の早期再開であった。

(中略)

また、伸一は、核を廃絶し、恒久平和への流れを開くために、米ソ首脳会談とともに、世界各国の首脳が同じテーブルに着き、原水爆や戦争の問題などを忌憚なく語り合う、世界首脳会議の開催も提案しようと考えていた。

(中略)

伸一は、戸田城聖が叫んだ、地球民族主義の大理念をもって世界を結び、恒久平和を実現しなければならない時が来たことを、深く自覚していた。

彼は世界の平和への突破口を開くために、ケネディとの語らいに多大な期待を寄せていた。いや、そこに掛けていたといつてよい。

——ところが、その後の事態は思わぬ展開を遂げることになる。

伸一とケネディとの会見は、先方の要請もあり、極めて密かに準備を進めてきたが、伸一が海外訪問から帰った時には、渡航手続きなどの関係からか、外部の知るところとなっていた。そして、政権政党の大物といわれている古老の代議士が、突然、伸一に会見を求めて来たのである。

伸一は、無下に断っては失礼であると考え、会見に応じることにし、彼の方から出向いていった。

代議士は、あいさつもそこそこに、横柄な馴れ馴れしい口調で語り始めた。

『山本君、今度、君はケネディに会うことになっているらしいが、それに対して、わが党のなかで、強い反対意見が出ていてね。』

早い話が、*外交問題にもかかわってくるのだから、勝手なまねはさせるな。なんで、そんなことを放置しておくのだ、というわけなんだ。

実は外務省の方でも、君の動きに対して、かなり神経を尖らせているようだ。

今のままでは、一波乱起こることは間違いない。政権を担っているわが党のなかで、強硬に反対している者がかなりいるとなれば、この会見の実現も、極めて危ういことになるのではないかと思う』

それは、自分たちの圧力で、いつでも会見などつぶしてみせるぞという、威嚇であった。

伸一は強い憤りを感じながらも、静かに相手の話を聞いていた。

代議士は、上目遣いで彼を見て、反応をうかがいながら語っていった。

『山本君にとっては、ケネディと会うことは創価学会の会長として箔をつけることにもなるし、社会に学会をアピールする絶好のチャンスであることはよくわかる。しかし、状況はあまりにも厳しい。わが党にも、外務省にも、君の対応によって、日米関係に支障をきたすようなことになっては大変だという、強い気持ちがあるからね。』

だが、私は、なんとか君を守りたい。学会の青年会長である君には、まだまだ未来がある。君は、これから、もっともっと大きくなっていく人物だと、私は思っている。それだけに、今回の

チャンス、ぜひものにしてほしい。

だから、私が骨を折ろうと思う。私が動けば、反対を押さえ込むことはできる。これは私の親心と思ってもらってよい。誠意から言っているのだ。

その代わりといっちはなんだが、君にも、力を貸してもらいたい。これからは、お互いに協力し合っていこうじゃないか。そうすれば、君も得るものは大きいはずだ。

たとえば、学会は参議院に公明会をつくったが、はっきり言ってしまえば、まだ取るに足りない力だ。しかし、もし私と一緒にやるなら、もっと政界での力をもてるようにしよう』

伸一は黙って聞いていたが、彼の頭は目まぐるしく回転していた。

——この代議士の狙いは明らかだ。私に恩を着せ、それを糸口に、学会を政治的に利用しようというのであろう。政治権力の薄汚れた手で、この純粋な学会の世界が掻き回されるようなことは、絶対に避けなければならない。しかし、この政治家の意向を無視すれば、ケネディ大統領との会見をつぶしにかかるだろう。そうして自分たちの力を見せつけ、勝ち誇ったように、何度でも、自分の軍門に下れと言ってくるにちがいない。

こんな政治家たちに付け入る隙など、与えてなるものか！

そのためには、まことに残念ではあるが、この際、ケネディ大統領との会見は取りやめるしかないだろう。守るべきは学会である。私は、自分のために会おうというのではない。彼らにお願いしてまで、会わせてもらう必要はない——。

伸一は、航路を急旋回させたのである。

山本伸一は、代議士の話が一段落すると、微笑を浮かべて、しかし、きっぱりと言った。

『お話の趣旨はよくわかりました。あなた方のご意向を尊重いたします。ケネディ大統領との会見の話は、なかったことにいたしましょう。すべて中止します。

またの機会を待つことにしましょう』

伸一の回答は、あまりにも、予想外であったのであろう。狼狽したのは、代議士の方であった。『会見は中止する？ し、しかし、そんなことをして、この大事な機会を逃してしまえばだね……』

伸一は、相手の言葉を遮って言った。

『私は、皆さんのお力をお借りして大統領とお会いするつもりは、毛頭ありません。それでは話が違ってきます。

また、アメリカの大統領と会って、箔をつけようなどという卑しい考えも、私には全くありません。それが政治家の方々の考え方なのかもしれませんが、甚だしい勘違いです。

私がケネディ大統領とお会いしようとしたのは、人類の平和への流れをつくりたかったからです。東西両陣営の対話の道を開きたいからです。そして、それが日本の国のためにもなると考えているからです。

公明会をつくったのも、民衆のための政治を実現させたいからです。現在の政権が、あまりにも民衆を度外視しているから、私たちが一石を投じたんです。

私には、公明会を使って政治権力を手に入れ、国を支配しようなどという野望めいた考えは、いっさいありません。民衆の幸福を、社会の繁栄を、世界の平和を、純粹に、一途に考え、行動しているのが創価学会です。その学会に、私利私欲の絡んだ政治的な駆け引きは通用しません。

私は、誠実には、大誠実をもって応えます。傲慢には、力をもって応えます。邪悪には、正義をもって戦います。それが私の信条であり、信念です』

代議士の額には、汗が噴き出していた。彼はそれをハンカチで拭いながら、狼狽を押し隠し、鷹揚さを装って言った。

『いやあ、実に見事な決断だ。前々から私は、山本君は見どころのある青年だと思っていたが、ますます確信がもてたよ。頼もしいかぎりだ。また、会って話し合おうじゃないか』

会見は終わった。

ケネディと伸一との会見は、こうして白紙に戻った。

山本伸一は、学会に迫る、政治権力の影を感じた。

彼は代議士との会見が終わると、この`横槍、の背後に、何があるのかを考えざるをえなかった。`多くの政治家たちは、三百万世帯を超えた創価学会に恐れをいさぐ一方、自分の傘下に置いて、自在に操りたいと、考えているのであろう。その学会の会長である自分が、政権政党の頭越しにケネディと会見することになったことが、悔しくてならないにちがいない。彼らの本質は、嫉妬以外の何ものでもない。

そう考えると、伸一は、日本の国を動かしている政治家たちの狭量さに、情けなさを覚えた。同時に、学会は、これからも、政治権力に、永遠に狙われ続けるであろうことを、覚悟しなければならなかった。

学会は民衆を組織し、民衆の力をもって、人類の幸福と世界の平和の実現をめざしてきた。それゆえに、民衆を支配しようとする権力から、さまざまな圧力が加えられるのは、むしろ当然とあってよい。

(中略)

『来年の四月には、戸田城聖先生の七回忌を迎えますが、先生亡きあと、いつも私の胸に響き渡っているのが、あの`原水爆禁止宣言、の叫びであります。

この宣言には、核戦争の脅威から人類を解放しゆく、大原理が示されております。

私は、この宣言の精神を、どんなことがあっても、人類のため、子孫のために、世界の指導者に、絶対に伝え抜いていかなければならないと、強く決意しておりました。

そして、その機会を考えていたところ、ある有力な民間人を通して、アメリカのケネディ大統領から、個人的に会いたい旨の要請があり、会見が具体化していました。

ところが、日本の政界から横槍が入ったのです。そして、恩着せがましい、お節介なことを言い出す政治家がおりましたので、いろいろ考え、今回は見送ることにいたしました。そうした動きに迎合し、学会が政治的に利用されるようなことを、私はしたくありません』(319～333頁)

資料7 小平芳平『創価学会』（鳳書院）各版の「私の見た創価学会」に掲載されている人物

▼初版（1962年5月12日刊）

内閣総理大臣 池田勇人、日本社会党書記長 江田三郎、衆議院議員・自由民主党 南条徳男、衆議院議員・日本社会党 赤松勇、参議院議員・民主社会党 永末英一、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、東京都知事 東龍太郎、東京都民銀行頭取 工藤昭四郎、東京駅長 大橋猛敏、日本旅行会専務取締役 南新太郎、政治評論家 藤原弘達、東洋大学助教授 高木宏夫、作家 山岡荘八、塚本総業株式会社社長 塚本素山、東京都医師会医道審議委員 平沢益吉、日本大学教授 小沢省吾、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、東京工業大学助教授 岩井津一、大阪府立大学教授 植田勇、コレジ・ド・フランス研究員 山崎鋭一、洋画家 二重作龍夫、声楽家 船越玲子、創作インド舞踊家 和井内恭子、ピアニスト 川村深雪

▼再版（1962年8月15日刊）

内閣総理大臣 池田勇人、日本社会党書記長 江田三郎、衆議院議員・自由民主党 佐藤栄作、同藤山愛一郎、衆議院議員・日本社会党 赤松勇、参議院議員・民主社会党 永末英一、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、東京都知事 東龍太郎、東京都民銀行頭取 工藤昭四郎、毎日新聞社常務取締役 山本光春、政治評論家 御手洗辰雄、政治評論家 藤原弘達、東洋大学助教授 高木宏夫、ジャパントイムズ論説委員長 斎藤忠、作家 佐藤春夫、作家 山岡荘八、作家 平林たい子、俳人 石田波郷、写真家 三木淳、日本画家 児玉三鈴、日本ビクター株式会社専務取締役 北野善朗、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、医学博士（外科）岸寿、医学博士（内科）藤田朝雄、東京工業大学助教授 岩井津一、徳島大学助教授 荒谷文雄、衆議院議員・自由民主党・弁護士 林博、弁護士 松井一彦、ピアニスト 川村深雪

▼三版（1963年5月12日刊）

内閣総理大臣 池田勇人、建設大臣 河野一郎、衆議院議員・自由民主党 佐藤栄作、衆議院議員・自由民主党 藤山愛一郎、衆議院議員・自由民主党 弁護士 林博、衆議院議員・日本社会党 江田三郎、衆議院議員・日本社会党 赤松勇、参議院議員・民主社会党 永末英一、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、東京都民銀行頭取 工藤昭四郎、毎日新聞社常務取締役 山本光春、三和銀行専務取締役 村野辰雄、政治評論家 御手洗辰雄、ジャパントイムズ論説委員長 斎藤忠、作家 佐藤春夫、作家 山岡荘八、作家 平林たい子、俳人 石田波郷、日本画家 児玉三鈴、金原舜二、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、医学博士 藤田朝雄、早稲田大学教授 根本誠、東京外国語大学教授 土井久弥、東京工業大学助教授 岩井津一、高知大学教授 今西襄、日本電波映画取締役・本門講々員 伊藤史郎、弁護士 松井一彦、ピアニスト 川村深雪

▼四版（1964年4月2日刊）¹⁸⁰

内閣総理大臣 池田勇人、衆議院議員・自由民主党 中曽根康弘、日本社会党書記長 江田三郎、

¹⁸⁰ 1964年4月2日発行の3版が存在する。ただし、「私の見た創価学会」は、4版と同じ。

衆議院議員・日本社会党 赤松勇、衆議院議員・民主社会党 西尾末広、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、政治評論家 御手洗辰雄、神奈川大学教授 大熊信行、朝日新聞記者 富重静雄、読売新聞政治部記者 渡辺恒雄、ジャパントイムズ論説委員長 斎藤忠、作家 平林たい子、俳人 石田波郷、日本画家 児玉三鈴、日本勧業銀行頭取 中村一策、三菱銀行頭取 宇佐美洵、毎日新聞社常務取締役 山本光春、清水建設株式会社社長 清水康雄、大林組社長 大林芳郎、日本大学会頭 古田重二良、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、早稲田大学教授 根本誠、東京工業大学助教授 岩井津一、高知大学教授 今西襄、弁護士 松井一彦、ピアニスト 川村深雪

※ 五版（昭和43年1月15日刊）以降は、小平芳平『創価学会』に「私の見た創価学会」の部分はなくなった。

資料 8 池田大作が出版した主な対談集・鼎談集

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書 名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全 集の巻数
1	リヒャルト・クーデテンホー フ＝カレルギー	パン・ヨーロッパ運動提唱者	オーストリア ／日本で出生	文明・西と東	サンケイ新聞 社出版局	1972	◎	102
2	大森実	国際問題ジャーナリスト	日本	革命と生と死—大森実直撃インタビュー 古典を語る	講談社	1973	○	—
3	根本誠	創価大学教授	日本		潮出版社	1974	○	16
4	アーノルド・J・トインビー	王立国際問題研究所前研究 部長、ロンドン大学教授	イギリス	二十一世紀への対話（上・下）	文藝春秋	1975	◎	3
5	松下幸之助	松下電器産業創業者	日本	人生問答（上・下）	潮出版社	1975	○	8
6	宮本顕治	日本共産党委員長	日本	人生対談	毎日新聞社	1975	◎	—
7	後藤隆一	東洋哲学研究所所長	日本	仏法・西と東	東洋哲学研究所	1976	○	—
8	アンドレ・マルロー	作家・政治家	フランス	人間革命と人間の条件	潮出版社	1976	◎	4
9	井上靖	作家	日本	四季の雁書 往復書簡	潮出版社	1977	◎	17
10	ルネ・ユイグ	美術史家、コレージュ・ド・ フランス教授	フランス	闇は暁を求めて—美と宗教と人間の再発見	講談社	1981	○	5
11	アウレリオ・ベッチェイ	ローマクラブ創設者・会長	イタリア	二十一世紀への警鐘	読売新聞社	1984	○	4
12	ブライアン・ウィルソン	国際宗教社会学会元会長、 オックスフォード大学教授	イギリス	社会と宗教（上・下）	講談社	1985	○	6
13	アナトーリ・A・ログノフ	モスクワ大学総長	ロシア	第三の虹の橋—人間と平和の探求	毎日新聞社	1987	◎	7
14	ヘンリー・A・キッシン ジャー	アメリカ合衆国元国務長官	アメリカ/ ドイツ出身	「平和」と「人生」と「哲学」を語る	潮出版社	1987	◎	102
15	カラン・シン	世界ヒンディ語財団会長	インド	内なる世界—インドと日本	東洋哲学研究所	1988	◎	109
16	ヨーゼフ・デルボラフ	ボン大学名誉教授	ドイツ/オース トリア出身	二十一世紀への人間と哲学—新しい人間 像を求めて（上・下）	河出書房新社	1989	◎	13
17	土井健司	創価大学教授	日本	吉川英治 人と世界	六興出版	1989	○	16
18	ライナス・ポーリング	ノーベル化学賞・平和賞受 賞者	アメリカ	「生命の世紀」への探求—科学と平和と 健康と	読売新聞社	1990	◎	14
19	常書鴻	敦煌研究院名誉院長	中国	敦煌の光彩—美と人生を語る	徳間書店	1990	○	17
20	土井健司	創価大学教授	日本	人間と文学を語る—ロマン派の詩人ヴィ クトル＝ユゴーを語る	潮出版社	1991	○	106

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全集の巻数
21	ノーマン・カズンズ	ジャーナリスト、元世界連邦協会会長	アメリカ	世界市民の対話—平和と人間と国連をめぐって	毎日新聞社	1991	◎	14
22	児玉良一	ブラジルへの第一次移住者・日伯交流の功労者	ブラジル／日本出身	対談・太陽と大地 開拓の曲—ブラジル移住八〇年の庶民史	第三文明社	1991	○	61
23	チンギス・アイトマートフ	作家、ソ連邦最高会議員	キルギス	大いなる魂の詩（上・下）	読売新聞社	1991・1992	◎	15
24	チャンドラ・ウイックラマシング	天文学者・ウェールズ大学教授	イギリス／スリランカ出身	「宇宙」と「人間」のロマンを語る—天文学と仏教の対話（上・下）	毎日新聞社	1992・1993	○	103
25	アナトーリー・A・ログノフ	モスクワ大学元総長	ロシア	科学と宗教（上・下）	潮出版社	1994	○	7
26	アウストレジェ・ジロ・デ・アタイデ	ブラジル文学アカデミー前総裁	ブラジル	二十一世紀の人権を語る	潮出版社	1995	○	104
27	ヨハン・ガルトウング	オスロ国際平和研究所創設者	ノルウェー	平和への選択	毎日新聞社	1995	◎	104
28	ミハイル・S・ゴルバチョフ	ソ連初代大統領	ロシア	二十世紀の精神の教訓（上・下）	潮出版社	1996	○	105
29	フィリップ・モワンス／パトリック・モウラ／高村忠成	ヴィクトル・ユゴフ記念館館長／パリ第5大学研究室員／創価大学教授	フランス／フランス／日本	波瀾万丈のナポレオン—「人間」と「歴史」のロマンを語る	潮出版社	1997	○	106
30	バトリシオ・エイルウイン・アソカル	チリ共和国前大統領	チリ	太平洋の旭日	河出書房新社	1997	◎	108
31	金庸	中国武俠小説の作家	中国	旭日の世紀を求めて	潮出版社	1998	○	111
32	アリベルト・A・リハノーフ	ロシア国際児童基金協会総裁	ロシア	子どもの世界—青少年に贈る哲学	第三文明社	1998	○	107
33	アクシニア・D・ジュロヴァ	国立ソフィア大学教授	ブルガリア	美しき獅子の魂—日本とブルガリア	東洋哲学研究所	1999	○	109
34	ルネ・シマール／ギョー・ブルジョ	モントリオール大学前学長／モントリオール大学教授	カナダ	健康と人生—生病死を語る	潮出版社	2000	○	107
35	マジッド・テヘラニア	ハワイ大学教授、戸田記念国際平和研究所所長	アメリカ／イラン出身	二十一世紀への選択	潮出版社	2000	◎	108
36	デイビッド・クリーガー	核時代平和財団所長	アメリカ	希望の選択	河出書房新社	2001	◎	110
37	シンティオ・ヴィティエール	ホセ・マルティ研究所所長	キューバ／アメリカ出身	カリブの太陽 正義の詩—「キューバの使徒 ホセ・マルティ」を語る	潮出版社	2001	○	110
38	ヴィクトル・A・サドーヴニチ	モスクワ大学総長、ロシア大学総長会議議長	ロシア	新しき人類を 新しき世界を—教育と社会を語る	潮出版社	2002	○	113

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全集の巻数
39	季義林／蔣忠新	中国敦煌トルファン学会会長／中国社会科学院教授	中国	東洋の智慧を語る	東洋哲学研究所	2002	○	111
40	ロケッシュ・チャンドラ	インド文化国際アカデミー理事長	インド	東洋の哲学を語る	第三文明社	2002	○	115
41	趙文富	国立済州大学前総長	韓国	希望の世紀へ 宝の架け橋—韓日の万代友好を求めて	徳間書店	2002	○	112
42	ヘイゼル・ヘンダーソン	未来学者、市民運動家	アメリカ／イギリス出身	地球対談 輝く女性の世紀へ	主婦の友社	2002	○	114
43	ヴィクトル・A・サドヴニチ	モスクワ大学総長、ロシア大学総長会議議長	ロシア	学は光—文明と教育の未来を語る	潮出版社	2004	○	113
44	アレクサンデル・セレブロフ	宇宙飛行士、全ロシア宇宙青少年団「ソユーズ」会長	ロシア	宇宙と地球と人間	潮出版社	2004	○	141
45	趙文富	国立済州大学前総長	韓国	人間と文化の虹の架け橋—韓日の万代友好のために	徳間書店	2005	○	112
46	ベッド・P・ナンダ	世界法律家協会名誉会長	アメリカ／インド出身	インドの精神—仏教とヒンズー教	東洋哲学研究所	2005	◎	115
47	J・K・ガルブレイス	経済学者、ハーバード大学名誉教授	アメリカ／カナダ出身	人間主義の大世紀を—わが人生を飾れ	潮出版社	2005	◎	—
48	リカルド・デイエス＝ホフライトネル	ローマクラブ名誉会長	スペイン	見つめあう西と東—人間革命と地球革命	第三文明社	2005	○	117
49	エリース・ボールディング	平和学者、社会学者	アメリカ／ルウェー出身	「平和の文化」の輝く世紀へ！	潮出版社	2006	○	114
50	モンコンブ・S・スワミナサン	バグウォッシュ会議会長	インド	「緑の革命」と「心の革命」	潮出版社	2006	◎	140
51	ジョセフ・ロートブラット	バグウォッシュ会議名誉会長	イギリス／ポーランド出身	地球平和への探求	潮出版社	2006	◎	116
52	ロナルド・ボスコ／ジョエル・マイアソン	ソロ協会前会長／同協会前事務総長	アメリカ	美しき生命 地球と生きる—哲人ソロとエマソンを語る	毎日新聞社	2006	—	—
53	ドウ・ウエイミン	ハーバード大学教授	アメリカ／中国出身	対話の文明—平和の希望哲学を語る	第三文明社	2007	○	117
54	フェリックス・ウンガー	ヨーロッパ科学芸術アカデミー会長、医学博士（心臓外科）	オーストリア	人間主義の旗を一寛容・慈悲・対話	東洋哲学研究所	2007	◎	—

No	対談者・開談者名	対談者・開談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全集の巻数
55	スール・ヤーマン	文化人類学者、ハーバード大学教授	アメリカ／トルコ出身	今日の世界 明日の文明—新たな平和のシルクロード	河出書房新社	2007	○	140
56	ドジョーギン・ツェデブ	文学者、モンゴル国立文化芸術大学学長	モンゴル	友情の大草原—モンゴルと日本の語らい	潮出版社	2007	○	—
57	ハービー・コックス	宗教学者、ハーバード大学教授	アメリカ	二十一世紀の平和と宗教を語る	潮出版社	2008	◎	141
58	ニーラカンタ・ラダクリシュナン	マハトマ・ガンジー非暴力開発センター所長	インド	人道の世紀へ—ガンジーとインドの哲学を語る	第三文明社	2009	○	—
59	饒宗頤／孫立川	香港中文大學終身主任教授／文学者、魯迅研究の第一人者	中国／中国	文化と芸術の旅路	潮出版社	2009	○	—
60	ロナウド・モウラン	天文学者、作家	ブラジル	天文学と仏法を語る	第三文明社	2009	○	116
61	アドルフ・ペレス＝エスキバル	人権活動家、ノーベル平和賞受賞者	アルゼンチン	人権の世紀へのメッセージ—「第三の千年、に何が必要か」	東洋哲学研究所	2009	◎	—
62	ハンス・ヘニングセン	アスコロ国民高等学校元校長	デンマーク	明日をつくる「教育の聖業、一デンマークと日本 友情の語らい」	潮出版社	2009	○	—
63	張鏡湖	中国文化大学理事長	台湾	教育と文化の王道	第三文明社	2010	○	—
64	アブドゥルラフマン・ワヒド	インドネシア共和国元大統領	インドネシア	平和の哲学 寛容の智慧—イスラムと仏教の語らい	潮出版社	2010	○	—
65	章開沅	華中師範大学元学長	中国	人間勝利の春秋—歴史と人生と教育を語る	第三文明社	2010	○	—
66	ルー・マリノフ	アメリカ実践哲学協会会長	アメリカ／カナダ出身	哲学ルネサンスの対話	潮出版社	2011	○	—
67	ミハイル・ズグロフスキー	ウクライナ国立キエフ工科大学総長	ウクライナ	平和の朝へ 教育の大光—ウクライナと日本の友情	第三文明社	2011	○	—
68	シャルル・ナポレオン	ナポレオン家当主	フランス	21世紀のナポレオン—歴史創造のエスプリ（精神）を語る	第三文明社	2011	○	—
69	アンワフル・K・チャウドリ	元国連事務次長	バングラデシュ	新しき地球社会の創造へ—平和の文化と国連を語る	潮出版社	2011	○	—
70	高占祥	中国「中華文化促進会」主席	中国	地球を結ぶ文化力	潮出版社	2012	○	—
71	顧明遠	中国教育学会会長	中国	平和の架け橋—人間教育を語る	東洋哲学研究所	2012	○	—

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全集の巻数
72	ピンセント・ゴードン・ハーディンゲ	人権運動家、キング記念センター初代所長	アメリカ	希望の教育 平和の行進—キング博士の夢とともに	第三文明社	2013	○	—
73	ウェイン・シヨーター／ハービー・ハンコック	ジャズ奏者、作曲家／ジャズピアノリスト、作曲家	アメリカ	ジャズと仏法、そして人生を語る	毎日新聞社	2013	◎	—
74	ヴィクトル・A・サドヴニチ	モスクワ大学総長、ロシア大学総長会議議長	ロシア	明日の世界 教育の使命—二十一世紀の人間を考察する	潮出版社	2013	◎	—
75	サラー・ワイダー	エマソン協会元会長	アメリカ	母への讃歌—詩心と女性の時代を語る	潮出版社	2013	○	—
76	ジム・ガリソン／ラリー・ヒックマン	バージニア工科大学教授、ジョン・デューイ協会会長／南イリノイ大学教授、ジョン・デューイ研究センター所長	アメリカ	人間教育への新しき潮流—デューイと創価教育	第三文明社	2014	○	—
77	スチュアート・リリース	シドニー平和財団理事、シドニー大学名誉教授	オーストラリア／イギリス出身	平和の哲学と詩心を語る	第三文明社	2014	◎	—
78	エルンスト・U・フォン・ヴァイツェッカー	環境学者、ローマクラブ共同会長	ドイツ／スイス出身	地球革命への挑戦—人間と環境を語る	潮出版社	2014	◎	—
79	ユッタ・ウンカルト＝サイフェルト	声楽家、ヨーロッパ青年文化協会会長、オーストリア政府元文部次官	オーストリア	生命の光 母の歌	聖教新聞社	2015	○	—
80	ホセ・V・アブエバ	カラヤアン大学学長、元フィリピン大学総長	フィリピン	マリノロードの曙—共生の世紀を見つめて	第三文明社	2015	○	—
81	劉連義	香港中文大学第6代学長	中国	新たなグローバル社会の指標—平和と経済と教育を語る	第三文明社	2015	○	—
82	バラティ・ムカジー	ラビンドラ・バラディ大学元副総長	インド	新たな地球文明の詩を—タゴールと世界市民を語る	第三文明社	2016	○	—
83	ケビン・クレメンツ	オタゴ大学国立平和紛争研究所所長	ニュージーランド	平和の世紀へ 民衆の挑戦	潮出版社	2016	◎	—
84	王蒙	作家、元文化相	中国	未来に贈る人生哲学—文学と人間を見つめて	潮出版社	2017	○	—
85	アクシニア・D・ジュロヴァ	国立ソフィア大学教授	ブルガリア	大いなる人間復興への目覚め	東洋哲学研究所	2026	○	—

◎：核兵器廃絶にまで言及しているもの。—：『池田大作全集』（全150巻、聖教新聞社、1988～2015年）に未収録

ジョン・F・ケネディと池田大作関係事項年表

西暦	和暦	月日	事 項
1943	昭和 18	8 月 2 日	ケネディが艇長を務める魚雷艇 P T 1 0 9 が、南太平洋のソロモン海で、日本の駆逐艦天霧の体当たりで沈没。
1945	20	3 月 9 日～10 日	東京大空襲。死傷者 12 万人。
		8 月 6 日・9 日	アメリカ軍が広島・長崎に原子爆弾を投下。死者は、広島約 14 万人、長崎約 7 万 4 千人。
		8 月 15 日	戦争終結の詔書を放送。
1949	24	10 月・11 月	池田、編集長を務める少年雑誌『少年日本』において、原子力の利用と原爆の悲惨さを特集。
1950	25	6 月 25 日	朝鮮戦争始まる（～1953 年 7 月 27 日）
1951	26	10 月下旬頃	下院議員だったケネディが、弟ロバート・妹パトリシアとともに中東・アジアを視察旅行の途次、来日。東京で細野軍治と会い、自身が艇長を務めていた魚雷艇に体当たりした日本の駆逐艦の艦長を探してほしいと依頼。
1952	27	10 月	ケネディ、マサチューセッツ州から連邦上院議員に当選。
1954	29	3 月 1 日	中部太平洋のピキニ環礁で行われた水爆実験で、第五福竜丸ほか多数の漁船などが被ばく。
1957	32	9 月 8 日	戸田城聖創価学会第 2 代会長、横浜市三ツ沢の陸上競技場で「原水爆禁止宣言」を発表。
1960	35	5 月 3 日	池田、創価学会第 3 代会長に就任。
1961	36	1 月 20 日	ケネディ、アメリカ合衆国第 35 代大統領に就任。
		6 月 3 日～4 日	ケネディとフルシチョフ、ウィーンで会談。
		6 月 20 日～22 日	ケネディ、ワシントンで池田勇人首相と会談。
		8 月 13 日	東ドイツ、東西ベルリンの境界に壁を構築。
		9 月 25 日	ケネディ、国連での演説で核実験禁止条約の早期締結を提唱。
		11 月 27 日	公明政治連盟結成。基本政策の第一に核兵器反対を掲げる。
1962	37	2 月 4 日～10 日	ロバート・ケネディ 司法長官来日。
		7 月 1 日	第 6 回参議院議員選挙で、公明政治連盟の候補者が全国区 7 人地方区 2 人全員当選。非改選と合わせて 15 人となり、参議院の第 3 会派となる。
		10 月 22 日	ケネディ、ソ連がキューバにミサイル基地を建設中と公表。海上封鎖を発表。（キューバ・核ミサイル危機）
		10 月 27 日	池田、創価学会 10 月度本部幹部会でキューバ危機について言及。
		10 月 28 日	フルシチョフ、キューバからの「攻撃的武器」の撤去を命令。（キューバ・核ミサイル危機収束）
		11 月 27 日	会員 300 万世帯を達成したと創価学会 11 月度本部幹部会で発表。
		12 月 3 日	ケネディ、第 2 回日米貿易経済合同委員会出席の日米双方の閣僚に、アジアにおける共産主義の脅威を力説。
		12 月 6 日	公明会結成国民大会（台東体育館、15000 人参加）。
		暮	ある著名な民間人が池田を訪ねて来て、ケネディの池田と個人的に会いたいとの意向を伝える。
1963	38	1 月 1 日	『公明新聞』3 面に、自民党推薦と社会党推薦の「二人の都知事候補に聞く」を掲載。
		1 月 8 日	池田一行、アメリカほか 10 カ国歴訪に出発。

西暦	和暦	月日	事 項
		1 月 14 日	池田、ニューヨーク支部長に任命した秋山富哉にケネディと会見するかもしれないと発言。
		1 月 27 日	池田一行帰国。
		1 月末	自民党大物代議士の横やりで、池田は2月末か3月のはじめに決まっていたケネディとの会談中止を決める。
		2 月 1 日	池田、創価学会2月度男子部幹部会で、ケネディとの会談中止について発言（発言要旨は、『聖教新聞』2月5日付に掲載）
		2 月 14 日	<i>The Japan Times</i> 、池田へのインタビューを行う。
		2 月 16 日	<i>The Japan Times</i> 、池田へのインタビューを掲載。
		4 月 2 日	公明政治連盟が『公明新聞』で、自民党推薦の東龍太郎支持を表明。
		4 月 17 日	東京都知事・大阪府知事・大阪市長選挙など、第5回統一地方選挙実施。
		5 月 1 日	池田、『中央公論』5月号に「宗教と政治理念」を寄稿。
		5 月 24 日	創価学会、アメリカで海外初の法人格が正式に認可される。
		6 月 10 日	ケネディ、アメリカン大学卒業式での演説「平和の戦略」において、核実験禁止を訴える。
		8 月 5 日	米英ソが、部分的核実験禁止条約に正式調印。9月24日、アメリカ上院が80対19の大差で批准。10月発効。
		8 月 28 日	アメリカで人種差別撤廃と雇用拡大を求めるワシントン大行進が行われ、20万人が参加。この日、キング牧師ら代表が、ケネディと会見。
		11 月 22 日	ケネディ、ガラスで凶弾に倒れる。池田、弔電を打つ。
1964	39	5 月 3 日	創価学会第27回本部総会で、池田が「公明党」結成を提案。満場一致で決まる。
		10 月 15 日	ソ連首相フルシチョフの解任が発表される。
		11 月 17 日	公明党結成大会。党結成にあたり、創立者の池田は、外交政策の骨格として、中華人民共和国を正式承認し国交回復に努めるべきであると提案。
1968	43	4 月 4 日	黒人運動指導者キング牧師がメンフィスで狙撃され、死亡。
		6 月 5 日	ロバート・ケネディがロサンゼルスで銃撃され、翌日死亡。
		9 月 8 日	池田、創価学会第11回学生部総会で「日中国交正常化」を提言。
1978	53	1 月 12 日	池田、エドワード・ケネディ上院議員と会談。
1991	平成3	9 月 26 日	池田、ハーバード大学ケネディ政治大学院で、「ソフト・パワーの時代と哲学」と題して講演。
1993	5	9 月 23 日	池田、ケネディの生家を訪問。
		9 月 24 日	池田、ハーバード大学ケネディ政治大学院で、「21世紀文明と大乘仏教」と題して講演。

牧口常三郎の国体観

—「国体明徴論」における逆用のレトリック—

岩 木 勇 作

【目次】

はじめに

1. 教授上の国体観

2. 1930年代の国体観

3. 牧口の「国体明徴論」

おわりに

はじめに

本研究¹は、牧口常三郎（1871—1944）の国体観を明らかにすることを目的としている。牧口の国体観については、体制に従順であったとか、方便的に国体を賛美しただけ、といった様々な解釈が行われ、それを基に多様な牧口の人物像が描かれてきた。

第三文明社版『牧口常三郎全集』全10巻の第9巻において収録される予定だった「国体明徴と宗教革命」は、結局全集に収録されることはなかった。その事情は不明だが、推測するに倒閣を目的とする政局、軍部の要求などを背景とした国体明徴運動の矛先が、天皇機関説にあったことから、国体明徴に言及していること自体が天皇機関説排撃²を支持したと見られるリスクがあると判断されたということなのだろうか³。

牧口常三郎の「価値論」は、従来の真・善・美の価値体系を利・善・美に再構成した。牧口の「価値論」は、美＝個体的部分的価値、利＝個体的全体的価値、善＝社会的価値で構成されている。

Yusaku Iwaki（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

¹ 本研究は牧口記念教育基金会より委託を受けたものである。資料収集にあたっては、創価大学池田大作記念創価教育研究所の協力を得た。なお、本稿の引用文の字体は新字・旧仮名遣いで統一している。[] 内で訂正および補足の字句を挿入している。

² 1935年2月、貴族院議員・東大名誉教授の美濃部達吉の天皇機関説が右翼・軍部勢力等によって非難されたことに端を発した問題である。天皇機関説は、大日本帝国憲法下で確立された憲法学説で、統治権は法人である国家にあり、天皇は政府の最高機関の一部として、他の機関からの補弼を得ながら統治権を行使すると説くもの。

³ 牧口常三郎「国体明徴と宗教革命」『新教』第6巻第2号、日本小学館、1936年2月15日、1～2頁。第三文明社版『牧口常三郎全集』未収録。本号資料紹介に掲載。

美・利は個人が評価し、善は社会が評価する価値である⁴。そして牧口は、この個体的価値（美・利）と社会的価値（善）がすべて揃っている状態を理想とした。つまり、個人の幸福と社会の繁栄の両立を理想としたのである。それは、個人の幸福を欠いた価値観に対して「空目的」、善の価値を欠いた価値観に対して「盲目的」というネーミングを行ったことから窺える⁵。利とは、個人の生命が存続する価値のことである。個人の生命の価値が著しく損なわれる戦時下において、この利の価値を価値体系に据えた牧口の考えは、多くの人間に勇気を与えるものであったのではないだろうか。

真・善・美の価値観が、戦争を真の極致、善の極致、美の極致と言ってはばからない時代において⁶、牧口の「価値論」は、松岡幹夫（2019）のいう「見えない反戦」の余地をもっていた⁷。松島庸貢は、牧口・戸田が検挙された1943年7月6日の約2ヶ月半後に、ルードルフ・ホフマン編、松島庸貢訳『最後の手紙 第一次世界大戦に於ける独逸の戦歿一般将兵の書簡集』（三亜書房、1943年9月20日刊）を出版している。訳者あとがきで、「終りにのぞみ本書出生の機縁をお開き下さった恩師創価教育学会会長牧口常三郎先生、本書の出版を快諾せられた大道書房主創価教育学会理事長戸田城外氏」と、牧口・戸田のことに触れて感謝を述べ、次のような注目すべき文言を残している。「とにかく人間が自分の属する国家乃至民族のためにあらゆるものを犠牲にして生死の巷に活躍してゐる生活は善の極まれるものであると共に美の極致でもある」⁸。

「創価教育学会」の牧口を恩師と呼ぶ松島は当然、牧口の「価値論」を共有していたと推測することができる。松島は、美と善において戦争をよいものとして形容するが、利については触れなかった。真の価値に触れないことで自身の価値論の立場を表明し、利の価値に触れないことで戦争に対する抵抗を示唆している。これは消極的な抵抗かもしれないが、戦時下の言説として注目されるものだろう。牧口の「価値論」を共有している人であれば、なぜ「利」の価値に触れないのかということが理解できる。この文章自体も皮肉めいていて「利」について全く触れないことで、表面上は褒め称えながらも、戦争を批判しているように解釈できる。戦争は明確に個人の生命を脅かすものであるからである。

⁴ 牧口常三郎『牧口常三郎全集』第5巻、第三文明社、1982年、325～333頁参照。以降、第三文明社版の『牧口常三郎全集』を『全集』と略す。

⁵ 『全集』第9巻、1988年、312頁。

⁶ 一例を挙げると、河飯捨蔵「現在の飛躍」（『大東亜』第11巻第1号、大東亜建設社、1943年1月）には、「それ故に戦争は、最も真なるものであり、最も善なるものであり、最も美なるものである。吾々は、此の真善美の極致を現実に見聞しつつある。飛行機、潜水艦、巨砲、高速兵器等は悉く人間智識の限りを尽くし、真理のエキスとして組立てられたものである。将軍、提督、参謀官等が戦略を慮り、戦術を究めることは、国家民族の運命を賭して、人間智能の限りを尽くすことである。是等こそ、人間世界の真の極致なるものである。将兵は命令一下、全生命を捧げて、君国のために御奉公する。是れ以上の道徳が何処にあらうか。実に善の極致である。斯かる真の極致、善の極致こそ、美の極致なるものである。」（78頁、傍線引用者）とある。

⁷ 松岡幹夫「仏教者の戦時対応に対する解釈の可能性——創価教育学会の事例に即して」『東洋学術研究』第58巻第2号、東洋哲学研究所、2019年、123～124頁参照。

⁸ 前掲同書、324頁。

牧口は、1944年11月18日に獄中で逝去するが、戦後、戸田城聖のもと編纂発行された『価値創造』⁹には、牧口の思い出が度々掲載されている。この中で、岩本他見男は、「時に今でも記憶に新なる所は先生の価値論と国体明徴論であります。」¹⁰と、牧口の「価値論」と並べて「国体明徴論」を挙げている。牧口の「国体明徴論」とは一体どういう内容であったのか。「価値論」については、『創価教育学体系』第2巻の内容として、1931年3月に出版されている。「価値論」は1931年を出発点として、修正・発展しつづけた。

一方、牧口の「国体明徴論」はどうだろうか。独立した牧口著作として「国体明徴論」というタイトルは現在のところ、確認できていない。しかし、岩本の反応から「価値論」と同様に通説の構造を大きく変える可能性をもっていたことは推測できる。「価値論」と並んで記憶に残ったという牧口の「国体明徴論」が、政府の国体明徴論と軌を一にするとは考えがたい。本稿では、牧口の国体観の変遷を辿り、牧口の「国体明徴論」を再構成することを試みたい。

牧口の国体観を分析した先行研究としては、村尾行一（2002）、松岡幹夫（2002）（2005）、伊藤貴雄（2004）（2009）（2011）、島蘭進（2006）がある。

村尾行一（2002）は、1937年3月に刊行された『国体の本義』（文部省）のテキストを参照しながら、国体の批判者として牧口を解釈している。それは特に牧口の獄中闘争において見られるとして、特高第二課によって作成された訊問調査（抜萃）における牧口の天皇凡夫説、忠孝説、そして天皇一元論を取り上げている。牧口の実一元論は、『国体の本義』の「祭政教一致」の見出しで始まる「天皇は祭祀によつて、皇祖皇宗と御一体とならせ給ひ」¹¹を逆手にとって、伊勢神宮への参拝と神宮の大祓奉祀の拒否論を展開したと評価する。また牧口が獄中で天皇凡夫説を供述し、世間で現人神説に言及していることから、世間での言説（体制融和的）と獄中での言説（反体制的）のスタンスが立て分けられており、本心としては反体制的だが、弟子を守るために体制融和的な言説を行っていたと解釈する¹²。

松岡幹夫（2002）は、従来の戦時下の牧口の言動について、政府の宗教統制をかわしながら、宗教運動をすすめるというような外面的妥協説や、公然と日本政府に戦いを挑み、その政策、その方針を批判した、とするような全面対決説が提出されてきたが、いずれも本質を捉えた理解とはいえないとする。国家との教育的対決を試みた牧口の言説は、妥協か対決か、といった二者択一的論理で割り切れるものではなく、牧口の場合、当時の軍部政府に対して妥協的にみえる部分には教育的態度が、また対決的にみえる部分には国家超越の態度が、それぞれ見え隠れしており、

⁹ 『価値創造』（創価学会）は「創価学会会報」として第1号（1946年6月1日発行）～第17号（1948年11月15日発行）までが確認されている。

¹⁰ 前掲『価値創造』第7号、創価学会、1947年12月1日、8頁。

¹¹ 前掲『国体の本義』26頁。

¹² 村尾行一『国家主義と戦った牧口常三郎』第三文明社、2002年、150～183頁。村尾の先行研究が執筆された背景が同書のあとがきに書いてある。それによると、ある大学教員による「牧口常三郎は平和主義者でもなければ反軍国主義者でもない。むしろ『国家のための教育』という教育観に染まっていた」という乱暴な牧口批判論に対する反論を書いてほしいという依頼がきっかけとなっている。

しかもこの両態度が、国家との教育的対決として実践的に統一されているとする。また、牧口の言う日蓮仏教と国体の一致は、田中智学が国体＝日蓮仏教と同一視し、国体を絶対化するのに対し、牧口は、国体を相対化しつつその内的超越を唱えていたとする¹³。また松岡（2005）は、牧口の天皇凡夫説を引いて、合理的思考によって神秘主義的な天皇＝現人神観を否定したとする。ただし、現人神に牧口が言及していることに対して、本音としては天皇凡夫説であるが、時局に配慮して会員に語ったのが現人神観であって、その現人神観も、天皇機関説的な解釈における現人神（人法一致によって現人神となる）であったとする¹⁴。

伊藤貴雄（2004）は、牧口の訊問調書（抜萃）のテキスト分析を行い、牧口の戦時下抵抗の特徴として、①天皇凡夫説、②教育勅語批判、③法罰論、④国家神道批判を取り上げて報告している。国家神道批判のセクションでは、牧口の実一元論を取り上げて、「天照大神一元論」と対比する形でその意義の説明を試みている。また伊藤（2009）では①②を、伊藤（2011）では③を詳細に取り上げ、同時代のコンテキストから、牧口の戦時下抵抗のあり方を丁寧に浮かび上がらせている。また、天皇凡夫説の解説において、牧口の「現人神」への言及は、方便的なものとも解釈できるが、牧口は「現人神」を政府とは全く異なる意味で用いており、その独自解釈は大正期以降一貫して唱えてきたリベラリズムに立脚したものであることを指摘している¹⁵。

島蘭進（2006）は、牧口の訊問調書（抜萃）の供述を取り上げて、牧口には、神社参拝の強制に対してあくまで抵抗しようとする戦略的な意志があったと思われるが、伊勢神宮への宗教的崇敬を否定する一方、天皇崇敬を肯定して、天皇一元論の立場をとる。宗教と天皇崇敬を区別して、天皇に感謝することは謗法にはあたらないという考えにたって信仰の自由を守ろうとしたとする。また、牧口の実一元論、現人神への言及は、村尾が解釈しているように弟子を守るための方便であって、本心ではないと受け取ることも可能ではあるが、天皇崇敬を説く裏面には当時の天皇の治世に対する批判的な評価があることを指摘している¹⁶。

岩木（2023）は、『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』のテキスト分析を行い、牧口は日蓮仏教と国体との一致を法華経受容の日本史を取り上げて説明し、国家生活の改造の基礎のためには、日蓮教義的な五重相対の批判によって国体観念の研究に進む必要のあることを述べていたことを取り上げている。そして、牧口がたとえ「国体」等の支持をしていたとしても、手

¹³ 松岡幹夫「牧口常三郎の戦争観とその実践的展開」『東洋哲学研究所紀要』第18号、東洋哲学研究所、2002年、22～28頁。

¹⁴ 松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開』ミネルヴァ書房、2005年、243頁および266頁の注57を参照。

¹⁵ 伊藤貴雄「基調報告—牧口常三郎は国家政策の何に抵抗したか—」（『創価教育研究』第3号、創価教育研究センター、2004年、115～136頁）、同「牧口常三郎の戦時下抵抗（第1回）—天皇凡夫論と教育勅語批判を中心に—」（『創価教育』第2号、創価教育研究所、2009年、2～51頁）、同「牧口常三郎の戦時下抵抗（第2回）—聖戦思想批判を中心に—」（『創価教育』第4号、創価教育研究所、2011年、137～169頁）。

¹⁶ 島蘭進「抵抗の宗教／協力の宗教—戦時期創価教育学会の変容」（『日常生活の中の総力戦』倉沢愛子他編、岩波書店、2006年、239～268頁）。

放しではなく、五重相対を援用した5つの批判を経ている可能性を指摘している¹⁷。

岩木（2023）を除いて、先行研究が戦時下の牧口の国体観を分析するために対象とした主要テキストは、特高第二課作成の訊問調書（抜萃）¹⁸と、1942年11月22日に開催された第5回総会の「全員座談会」における牧口の発言¹⁹である。どちらの資料においても、天皇一元論が提唱されているが、前者では「天皇陛下も凡夫であって（中略）天皇陛下も間違ひも無いではない」²⁰（天皇凡夫説）があり、後者には「今上陛下こそ現人神であらせられる。即ち 天照大神を初め奉り、御代々の御稜威は現人神であらせられる」²¹（現人神説）との言及があるため、その解釈が研究者によって分かれてきた。

本稿では、牧口の「国体明徴論」を再構成することによってその解釈に補助線を引くことをねらいとしている。近年の国体論研究を代表する昆野伸幸（2019）によれば、そもそも国体論は「国体」に関する議論のことであるが、「国体」自体が極めて曖昧なものであって、時代状況や解釈者によってその定義に大きく幅が生じるものであるとする。また、国体論を最大公約数的に表現すれば、「皇室典範・帝国憲法制定に関する告文や教育勅語に端的に示されるように、日本の独自性を万世一系の皇統に求め、いわゆる天壤無窮の神勅に代表される神代の伝統と、歴史を一貫して変わらぬ国民の天皇に対する忠とがその国体を支えてきたと強調する議論だとひとまずいえる」と述べている²²。

本稿タイトルで、「国体論」ではなく「国体観」を用いたのは、牧口がいわゆる国体論者として誤解されることを避けるためであり、さらには国体に関する断片的な見解等も拾い挙げる必要があるだろうという問題意識からである。以下、『牧口常三郎全集』全10巻を主な対象として、牧口の「国体」に対する言及の変遷を辿っていきたい。

¹⁷ 岩木勇作「治安維持法下における思想犯転向輔導施策への牧口常三郎の対応に関する研究—牧口常三郎の『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』を読み解く—」（『創価教育』第16号、池田大作記念創価教育研究所、2023年、169～206頁）。

¹⁸ 「創価教育学会々長牧口常三郎に対する訊問調書抜萃」（内務省警保局保安課『特高月報』昭和十八年八月分、1943年9月発行）。『全集』第10巻、1987年に収録。『全集』第10巻の解題には「本巻収録の「訊問調書」は、特高第二課によって作成されたものである。なお、牧口に対する訊問は、特高第二課長自らが当たり、難解な個所など大半は牧口自身が筆答と判明している。」（370頁）とある。特高第二課で牧口の取調にあたったのは木下英二警部である。牧口を1943年7月6日に検挙した後、検事の指揮の下、警視庁では特高第二課によって調書が作成され、同年9月3日に検事局に送致した。牧口は同年9月25日に東京拘留所へ移送される。特高第二課の調書を参照して山口弘三検事による取調が行われ、検事が作成した調書に基づいて、同年11月20日に東京刑事地方裁判所に起訴（予審請求）される。訊問調書は、警察がでっちあげて調書を作成するケースや、警察が作成した調書をそのまま流用して検事が調書を作成するケースもあるようだが、宗教運動の研究資料として摘録が『特高月報』に掲載された「創価教育学会々長牧口常三郎に対する訊問調書抜萃」は、その資料的価値から牧口の作文あるいは供述がかなり正確に反映されている可能性がある（『創価教育の源流』編纂委員会編『評伝 牧口常三郎』第三文明社、2017年、444～450頁および459頁参照。ほか荻野富士夫『治安維持法の「現場」』六花出版、2021年、75～106頁参照）。

¹⁹ 『大善生活実証録 第五回総会報告』創価学会、1942年12月31日、47～48頁に収録。

²⁰ 前掲『全集』第10巻、203頁。

²¹ 前掲『大善生活実証録 第五回総会報告』47頁。

²² 昆野伸幸『増補改訂 近代日本の国体論〈皇国史観再考〉』ベリかん社、2019年、7頁参照。

まずは、教授上において牧口が国体に対するどのような言及を行っているかを確認しておきたい。すでに同作業は部分的に松岡（2002）でも行われているが、同論文の研究成果も参考にしながらその国体観の変遷を辿る。

1. 教授上の国体観

牧口は、『人生地理学』（文会堂、1903年）のひな形となる「山と人生」の講演において「我日本は島国にして又山国なり、愛国の情は二者によりて養成せらる。宜なる哉、万国比類なる〔なき〕国体を維持するや。」²³と述べている。ここでは、島と山によって養成された愛国心が比類なき国体を維持してきたことが言及されている。また『人生地理学』（第19章気候、第4節風と人生）において弘安4年の台風に触れて「本邦が建国以来、国脉に於て些の外寇によりて傷けられざりしは重に島国の影響なることは既に観察したり。」²⁴と島国という環境・位置が国体に寄与したと言及している。

牧口は、『人生地理学』（第28章国家地論、第3節国家の種類）において、一般的には政体による区別があるとして、君主政体、貴族政体、民主政体あるいは、専制君主政体、立憲君主政体、共和政体という区別を紹介している。とはいえ、この区別は単に各国家の内政上の形式の違いを示すに過ぎないため、地理学上の必要が認められない。地理学上に於いては国家の区別をする場合、単に政体だけでなく、種々の方面により行うとして国体上の区別、国権上の区別を挙げている。その国体の区別を次のように述べている。

（一）、国体上よりの区別 国民結合の強度は国勢上に重大なる影響を与ふるものにして其程度は自然的民族の単複と建国の歴史に等差あること前陳の如くなれば、国家にして若しも此点より区別せらるべきものあらば其か地理学上要用なることは前の政体上の区別の比にあらず。然るに欧米各国を見るに合衆国、聯邦国、聯合王国等の名称ありて自ら国体の特質を表はし、且つ吾人の要求を表はすに最も近きもの、如ければ吾人は此等に対比すべき名称を附加して一種の区別をなすも不当にあらざるべし。但し此のみにては民族の単複と其結合の或る状態を表はすのみなれば尚ほ歴史的條件を表はすに足る一の区別を要す。然るに實際に於ては此條件を適当に表はし得べき特質を有する国家は世界中、唯だ一あるに過ぎざれば是と他の国とを区別すれば足れり。此等の考察により国脉上より国家を区別すること左の如し。

一、万世一系の君主を奉戴する単純民族 渾円球上唯だ日本あるのみ。其民族に於ては其起源上より見れば単一とは云ふ能はざるも、此等は既に大和民族に同化せられ、多少の異種のプロトタイプなきにあらざるも是れ立国の上に何等の勢力を有するものにあらざれば、以て単純民族国と云ふも得へし。

二、単純民族国 特別の名称なき君主国及共和国を含む

²³ 『全集』第7巻、1982年、341頁。

²⁴ 『全集』第2巻、1996年、60頁。

三、合衆国 大不利顛及愛蘭合衆国、北米合衆国等

四、聯合國 同一の君主を戴くも、領土的區別を存するもの、奧斯太利、匈牙利国及び瑞典那威国等

五、聯邦国 聯合せる小邦には各旧来の君主ありて、内治的權力を握り、其上に更に共通の君主を戴きて結合するもの独逸は其例なり。

是れを法理學上より觀ば固より確然たる區別とは云ふ能はざらんも、現在に其名称ありて、而かも其間には依て生ずべき地的原因の説明せられ得べきものあれば地理學上に於ては之れを見逃し能はざるなり。²⁵

この記述で興味深いのは、地理學的に考えた場合、国體上の區別とは、日本と他の国を區別するためだけに用意されたものという牧口の認識である。次いで、1912年に以文館から出版された『教授の統合中心としての郷土科研究』（第2章郷土科特設の必要を論ず、第2節基礎的觀念なき歴史教授と郷土科）において次のように述べている。

試に尋常小学日本歴史の第一頁を繙け、課題が「天照大神」で、欄外の見出しが「天皇陛下の御先祖」、「大日本帝国」ではありませんか。本文になれば「遠き御先祖」、「其の御威徳」、「天日のかがやける」、「伊勢の皇大神宮」、「まつり奉る」、「治め」、「国」、「子孫」、「君」、「宝祥」、「天壤」、「建国のもとゐ」、「代代の天皇」、「皇位」、「日向」等と、僅か三頁の間に続々と六ヶ敷い詞が出で来るではありませんか。諸君。此如き詞の意味を如何にして僅か十歳許りの児童に了解せしめんとはなさる。（中略）そこで極々讓歩した處で、よし明瞭確實に教科書編纂者の意志は悉く解せずとも止むを得ずとするも、少くとも此の一課を終つた以上は朦朧ながらも我が国體の尊嚴、皇祖の國を肇め給ひしことの高達等だけは會得させ、之によつて忠君愛國の熱情を多少なりと養成するでなければ教科の目的は皆無となる訳であります。う。（中略）

今の 天皇陛下が解らずして何として天照大神が得解りませう。單に御眞影を拝し奉つたのみの解り方で、果して皇祖の御威徳の高いことが解りませうか。郷土に於ける父母師長の

²⁵ 『全集』第2巻、1996年、350～351頁。傍線引用者。牧口常三郎『人生地理學』改訂増補第8版、文會堂、1908年も確認したが、初版と説明の異同はない。また當時の地理學教科書における「國體」の説明も紹介しておく。一例として、山崎直方『地理學教科書』（東京開成館、1903年）では「第二節 國體／いづれの國家を問はず、其統治權は或る少數者により、國民一般に対して行はるゝものなり。而して其權力の所在により、國體を別ちて君主國・共和國・豪族國の三種となすを得べし、國家の主權が一人の元首に屬するときは、其國を稱して君主國と云ひ、更に之を小別して專制君主國・立憲君主國となすを得、前者にありては統治の全權は君主一人の專用に任せられ、後者にありては君主は其權を總攬すれども、其運用は規定の典章に従ふべきものにして、國民の代表者は政治に參與するを得るを常とす。若し國家の統治權は國民全体にありて、國民は代表者を選んで之に其權を行はしむるときは、之を稱して共和國と云ひ、又統治權が國民中一部の階級に存するときは、其國を名づけて豪族國と云ふなり、此最後のものは今は甚だ少し。」（24～25頁）と記述されている。

所謂威徳なるものが直接観察（即ち直観）にて解つたでなくして、如何にして 天皇陛下の御威徳が解し得られませうか。児童各自の家庭に於ける先祖なるもの、觀念なくして遠き御祖父の觀念が如何にして得られませうか。町村に於ける鎮守の氏神様の直観的觀念なくして果して皇大神宮が想像されませうか。単に村社の外観、建物を知ったのみの小供に如何にして「大神をまつり奉れる」の意味が解せられませうか。郷土に於ける地方的区劃の大概にても觀念なくして如何にして伊勢なる詞の意味が解せられませうか、地図によることなくして如何にして伊勢の大体の方位と彼等の地方との関係が解りませうか。郷土観察による地図の了解力なくして如何にして伊勢の地図を解する事が出来ませうか。単に日本全図を示したのみで、それで大日本帝国の觀念を得せしめたと云はれませうか。郷土に於ける複雑多方面なる直観に基く智識の綜合によらずして如何にして大体ながらも国なる觀念を得しめられませうか。単に郷土に於ける有形的土地を観察せしめたのみで、それで国家なる全面の觀念を得しめることが出来るとはいへませうか。郷土に於ける家庭、学校、町村等に行はれて居る所の「治める」と名けらるゝ現象の直観なくして如何にして「瓊瓊杵尊をして治めしめ給ふ」といふ意味を解せしめられませうか。もしも郷土観察の素養を得させなくして卒然と「君なるべき」なる君を提出したならば、恐らくは児童は日常友人間に於て使用しつゝ、ある君僕の君、と其の意味を取り違ふではあるまいか。²⁶

牧口が冒頭に掲げている、難しい言葉をどうやって子どもに理解させようとするのか、という問題は、特に教育勅語や聖勅の文言等を子どもに教える場合、同時代の教育者の誰もが頭を悩ませていた。それに牧口は郷土における複雑多方面なる直接観察に基づく知識の総合という観点から一応の回答を試みている。天皇という觀念も郷土の父母の直接観察から、「瓊瓊杵尊をして治めしめ給ふ」（天孫降臨）も郷土の家庭・学校・地域の「治める」という現象の直接観察から、獲得すると述べている。これは近くから遠くへ、具体から抽象へといった知識教授上の順番の問題とも言えるが、子どもが觀念（知識）を獲得する方法でもあることが、同書（第28章政治現象の観察と実験、第1節政治の意義と権力の直観）を見るとよく分かる。

其処で本当に政治と云ふ觀念を与へるには、どうしても先づ以上に於ける各方面の現象を直観させ、是れを以て国家の非常に複雑にして壮大なる政治機関を想像させる様にしなければ、到底言語や文章を以つて説明し得べき物では無からうと思はれます。郷土に於ける政治機関と云つても已に余程複雑な物でありますから、其の前に猶ほ学校に於ける政治、次に家

²⁶ 『全集』第3巻、1981年、19～22頁。傍線引用者。牧口常三郎『教授の統合中心としての郷土科研究』改訂増補第10版、創価教育学会、1933年は、教科書の記述の変更のため冒頭の「課題が「天照大神」で、欄外の見出しが「天皇陛下の御先祖」「天照大神の御徳」でありませんか。本文になれば「御先祖」「御徳極めて高き御方」「機屋」「けがす」「天の岩屋」「岩戸」「伊勢の皇大神宮」「神楽」「国」「王たるべき地」「皇孫」「皇位」「万世一系」「国体」「日向」「神器」等と、僅か三頁の間に続々と六ヶ敷い詞が出て来るではありませんか。」（同16頁）に変更はあるが、他の説明については初版とほぼ異同はない。

屋に於ける政治的現象等を観察させ、さうして先づ権力と云ふ事を認識させ、其処で権力の発動する機関が、乃ち所謂政治現象であると云ふ様に彼此比較対照させ、夫れから相似寄る点を抽象させて初めて無形の権力と云ふ觀念に達すべき物であらうと思ひます。

仮へば泥棒は誰れが捕へるか、巡査さんは誰れに命ぜられるか、普通の人民に出来ないことを巡査さんに出来るのは何故か、泥棒が巡査を恐るゝのは何故か。

何にか吾々に持たずして巡査のみ有する何にかあるであらうとの問ひによつて、力、権力、の觀念を小供に明確ならしむ。

かくして捕へられた泥棒は何処へ行くか、警察署からは何処へ送らるゝか、裁判所は何処にあるか、其処へ行つてから其の罪人は如何にされるか、誰れが調べるか、誰れが処分するか、裁判官は誰れに命令されるか。

吾々には勿論警察官にも持つて居ない或る力を裁判官が持つて居ることゝを推究させて、然る上に権力といふ觀念の内容を更に広くすること。

斯くして処分された罪人はそれから何処へやらるゝか、牢屋とはどんな所か、罪人が監獄におとなしくして命令を守つて居るのは何故か、誰れを恐れてか、其の恐れる力は何か、何れより監獄の役人は得るか。

斯くして尚ほ権力の觀念内容を拡張す。

斯の如き権力の源は何処か、天皇陛下は誰れが為めにかゝる罪人を御取り押へになる様に命令なさるか、もしかゝる悪人をこのまゝに放任しておいたら、誰れが其の害を受くべきか、然らばこれを取り捕へた結果幸福を直接に受けるものは誰れか。

吾等は斯の如き権力の下に安心して生活し得るのである。もし斯く取締るものがなかつたなら、銘々が刀劍、鎗、鉄砲等を用意して之を拒がねばならぬ。かゝる事をなすことを治め、又政治と云ふのである。

是れを學校に於ける教師が悪い生徒を処罰し、或は家屋に於ける父が腕白の小供を詰譴するのと比べさせて見ると其処の間に殆ど違ひはないのでありますから、つまり国家の権力が學校家庭に於ける権力の大きな物に過ぎないと云ふ事を了解させる。

権力を直観すると其の権力の源は何処かと云ふ事に思ひ当る事は当然の順序であります。其の権力の源は何かと云ふ点に至つて又學校の権力の源は何れかと觀察させ、其の段々大元は校長にある事が解るとしたなら、夫れが果して最上の権力であるかどうかと研究させ、校長の上に又更らに監督官庁と云ふ上級の権力があり、結局其の一番大元は何処かと云へば、吾国の如き国体に於て 天皇陛下に歸する訳であります。²⁷

牧口は、學校や家庭の権力に対する直観からその源を辿つていくと天皇に歸着するが、その國家権力は學校や家庭の権力の大きな物に過ぎないと述べている。天皇の神格化などは入る余地の

²⁷ 前掲『全集』第3巻、317～319頁。傍線引用者。前掲『教授の統合中心としての郷土科研究』改訂増補第10版は、引用箇所の説明について初版と異同はない。

ない認識である。また、同書（第28章第5節国家）において次のように述べている。

以上各説の国家の働きの其の源が天皇の大権に帰するので、其天皇の大権と云ふのは然らば何目的に依つて発動せられて居るかと思ふ事を更らに切り込んで観察させると、此処に初めて天皇の国家に対する位置と云ふ物が小供の頭に了解され得る事であらうと思はれます。

天皇陛下が日常の御政務と云ふもの、及び其御親任を戴いて輔弼の任に当る國務大臣、其の指揮監督を受けて働らいて居る幾多の文武百官夫等の関係と云ふ物は恰も吾々の手足や目や、耳や、口や鼻などが脳髓なる中枢の命令を守つて活動して居るやうな物である事を認識させる事が出来ませう。大権の発動する其の主体たる 天皇陛下は此等の文武百官なる機関を透して活動する、其の理由は決して天皇御自身の為めにするのにあらずして全く国家全体の御頭首となり御主人公となりて、下万民の為に御尽し遊ばされて居るのである、されば吾国に於ては国及び国の首長たる天皇は全く同心一体と申すべきで、君に忠を尽すのは乃ち国を愛する所以であると云ふ事を充分小供に了解させて置かなければなりません。²⁸

牧口は、美濃部達吉の天皇機関説によりつつ、天皇は、天皇自身のためではなく、国民のために大権を発動するのだと述べている²⁹。次いで1916年に目黒書店から出版した『地理教授の方法及内容の研究』（第32章日本地理総論の教授、第1節位置の教授）において、国際間に於ける位置について、「然る処幸に日本の国は歐洲の強大なる国と遠ざかつて居るが為めに、嘗ては、我國の文明の起原たる東洋の諸国が大概白哲人種の国に圧倒せられたに拘はらず、建国以来何等の国体に傷くることなく、世界万国に類なき国体を維持し得た所以のものは全く其の位置の然らしむる処であると云ふことまでに論及しなければ、真実に国の位置が了解せられたとは云へないのである。」³⁰と述べている。これは『人生地理学』と同様の島国という環境・位置によって国体を維持しえたという言及である。

また、『地理教授の方法及内容の研究』（第32章第2節面積及び人口の教授）において、「国家を形成くる要素として土地と人民があることは、前に通論に於て述べたことであるが、此の土地と人民との諸要素は単に連絡のない群集であつては国をなすに至らない。之を統一する権力が確立しなければ国家をなさぬと云ふことは既に郷土地理に於て説明してあると思ふから、此の基礎觀念の上に我國の主権は、即ち万世一系の天皇にましまして、吾々国民から言へば上に万世一系の皇室を戴き奉るのであると云ふことを説明しなければならぬ。此の万世一系の皇帝を戴いて忠君愛国に富んで居り、さうして平和で円満に共同生活をなしつゝあると云ふことを説明しなければならぬ。」³¹と述べ、国家を形成するために、統一する権力を確立する必要があること、その基

²⁸ 前掲『全集』第3巻、325～326頁。前掲『教授の統合中心としての郷土科研究』改訂増補第10版は、引用箇所の説明について初版と異同はない。

²⁹ この解釈については、前掲伊藤（2009）の32～33頁を参照。

³⁰ 『全集』第4巻、1981年、273頁。傍線引用者。

³¹ 前掲『全集』第4巻、277頁。傍線引用者。

礎観念を説明してから、追加情報として万世一系云々を説明しなければいけないこと。さらに、同書（第32章第3節日本地形の教授）について、「建国以来少なくとも前後三回は近隣の大陸国と生存競争上の大交渉があつたに拘はらず、此の金甌無欠の国体を維持して来た所以は大陸と接続しないと云ふことが大に与つて力があると云ふことは彼の蒙古の来襲に依て想像し得ることである。」³²と、先ほどの記述と同様、島国という環境・位置によって国体を維持できていることを述べている。

ここまで見てきた牧口の教授上の国体観は、「万国比類なき」「万世一系」「金甌無欠」といった一通りの美辞麗句は付くものの、島国という環境条件によって維持しえなすぎないといった地理学的認識に基づくもので、かつ、学校・家庭の権力の拡張といった教育学的な原理原則および認識に基づくものであった³³。むしろ、国体に関連する説明は、基礎的な観念を説明した後の追加分であったり、国体という区別が日本と他の国を区別するためだけに存在するというある意味で余分なものであることを明かしている。

2. 1930年代の国体観

ここでは、1930年11月18日に『創価教育学体系』（創価教育学会）第1巻を出版してから、1937年9月に『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』（創価教育学会）の小冊子を出すまでの、1930年代の牧口の国体観を確認しておきたい。

1932年に創価教育学会から出版した『創価教育学体系』第3巻（第1章教育改造政策の要諦、第2節所謂思想善導の本末と緩急）において、国体観念の涵養について次のように述べている。

今までの教育指導階級は国体観念の涵養にあり、道德教育の振興にありで教育の実績が挙ると考へて居た。而して「如何にしたら国体観念が涵養されるか」「如何にしたら道德教育が振興されるか」に迄は考へ及ばずとも、教育家が何とかするであらうとして居た。然るを何ぞ知らん、幾年経つても其の方法は案出されず、其の人さへも見つからず。現在の行詰りを来したではないか。今になつて尚ほ且つそんな粗放なる鼓吹だけで安心が出来るであらうか。茲に至つて経世者も政治家も、今少し親切に教育家を鞭撻し督励し、擁護し協力して、組織的方案を樹てさすべき時期となつたではないか。

教育家は然らばその後を如何にすべきか。斯様に鼓吹は大であるに拘はらず「何故に国体観念が涵養されぬのか、何故に道德教育が振興しないのか」との点を反省し、真面目に前途の方策を講ぜねばなるまい。³⁴

³² 同 282 頁。傍線引用者。

³³ 前掲松岡（2002）では、『人生地理学』、『教授統合の中心としての郷土科研究』、『地理教授の方法及内容の研究』の国体に関する記述の分析から、「国体を理想化し、それによって現実の国体及び国体論を批判する、という牧口の改革主義的手法」（26 頁）を見出している。

³⁴ 『全集』第6巻、1983年、21～22頁。

牧口は、共産思想などの危険思想の流行問題に対して、思想善導の声が高まっているが、指導者階級は、国体観念を涵養する必要性を叫ぶだけで、その方法を全く考慮しないことを批判している。どのように国体観念を涵養するかという方法に関する意識は、国体とは何かという内容への問いと繋がっている³⁵。また、同書（第1章第3節教育の重要性並に其の特殊性）において教育行政の特殊性に触れた後に、

政治に於ては国民の意見を最も公平に代表する普通選挙に基づく立憲政体が既に実現され、経済に於ては階級間の闘争から共存共栄が次第に理解されんとし、道徳に於ては社会意識に基づく貢献的生活、学問に於ては社会学の発達が次第に完成に近づかんとし、漸次に高唱せられ、斯くてフランス革命によつて覚醒された個人本位の思想が世界大戦によつて今や社会本位の精神に革まらんとして居る。此等の明確なる意識〔義〕の基礎の上に建つてこそ世界唯一の国体として発達して来た我が国に理想郷が実現するであらう。

此慾求を裏切る現実社会の醜悪が精神上の欠陥に基因すること前陳の如しとすれば、之が救済は教育によつて為されなければならぬ。教育も終局に於ては最高なる宗教の力に基づかねばならぬのであらうが、併し昔思想善導を一手に引き受けて居た僧侶乃至宗教家が殆ど信用を失墜して、活社会と絶縁した今日では、教育のみによる外には具案の方策は立たないであらう。³⁶

と、普通選挙に基づく立憲政体、共存共栄的な経済競争、社会意識に基づく貢献的生活、社会学の発達、社会本位の精神、といった基礎の上に建つてこそ、日本に理想郷が実現するとしている。この文章では「世界唯一の国体」というのは、「理想郷」の基礎ではない。また、この理想を裏切るような精神上の欠陥は従来の宗教ではなく、教育によって救済されなければならないとする。

1935年には、政府から第一次国体明徴声明（8月3日）、第二次国体明徴声明（10月5日）が発せられる。この頃から牧口にも国体明徴に関する言及が見られる。1935年8月29日に、当時創価教育学会の顧問でもあった学習院初等科長の石井國次³⁷の自宅へ牧口と創価教育研究所所員の渋谷信義が訪れている。その際に、石井の国体論を拝聴した牧口がその所感を述べている。石井は、「大体子供といふものは利己心が強く、破壊性があり、残忍性があり、競争心が盛んな半面には嫉妬心が強く、卑劣にして不正直等といふ、種々な悪徳を備へて居る者であるが、神の御末であらせ給ふ陛下には、御幼少の時から、斯様な卑しい御性質の御持合せが無かつた。いつも御真面目で御正直で御公平で御情深くあらせられた。」³⁸と昭和天皇の子ども時代を回想している。

³⁵ 前掲岩木（2023）の202～204頁参照。

³⁶ 前掲『全集』第6巻、34～35頁。傍線引用者。

³⁷ 1902年に学習院教授、初等科長となり、1936年2月に辞任。昭和天皇が学習院初等科に入学してから6年間主管（学級担任）を務めた。学習院を辞任後は、1936年に宮中顧問官に任ぜられた。『人事興信録』第11版改訂版上、人事興信所、1938年、イ170頁参照。

³⁸ 石井國次「今上陛下の御盛徳」『新教』第5巻第10号、1935年10月15日発行、2頁。

そして次のような国体論を披露する。

陛下が斯様にあらせ給ふのは、神の御末であらせられるからである。神代の昔から何千年連綿たる皇統、金甌無欠純粹清浄なる神様の御血統であらせられるからである。特に大正元年皇太子とならせられてからの御態度、将来天皇におなりになるのだといふ御自覚の出来させられてからは実にお立派なもので、全く生神様であらせられる。古来我国では天皇を現御神アキツミカミと申上げて居るが、真に陛下は現御神であらせられる。しかもかやうな現御神は吾が皇室にして御生れになるので、実に国体の精華であると思ふ。私が学校で大勢の子供を見てみると、徳川とか島津とか毛利とかの大大名の子や、近衛一條鷹司等大公卿の子は、他の子供等とは違って、どこか鷹揚な上品な、こせ／＼しない美しい性格を持つて居る。謂はゆる氏索性といふものは争はれないものである。僅か五百年や千年やの遺伝境遇でも斯の如くであるから、況して何千年か何万年か悠久の昔から絶対の御位置にあらせられて、臣下と競争する必要無く、臣下のえらくなるのを嫉視する必要も無く、不正直な事や卑劣な事を為さる可き必要も無い、其の御遺伝御境遇が現御神を産み奉る事は当然のことである。是が他の易性革命の国や共和政治の国と大いに違ふ所であつて、大日本は現御神を中心に奉戴して、一君万民一致団結せる神国であるのであります。

(中略) 御歴代天皇の御理想は此の天照大神であります。御歴代の天皇には此の天照大神が宿らせ給ふのであります。今上陛下が御幼少の時から非凡であらせられ、特に皇太子に立たせられて、やがては天皇にならねばならぬといふ御自覚の出来させられた時は、即ち天照大神の宿らせ給ふた時と申上げてよいであらう。日本といふ国は有難い国であります。日本民族は恵まれた民族であります。吾等の中心には太陽と其徳を等しうする現御神を奉戴して居るのであります。

(中略) 今上陛下は未だ御年若ではあらせられるが、御前へ出ると誰でも御威厳に打たれる。きれいに澄み渡つた御心鏡に、こちらの醜い姿がはつきり写るから、卑しい心が持てなくなり、虚偽を申上げることが出来なくなる。伊勢の大神宮様の神前にぬかづく時の気分と同じになる。そこでどの政党と雖も甚しき勝手な政治が出来なくなつて、正しい政治に落付くのである。是が共和政治の国は勿論、其他の国々と比較して、我が国体の非常に優れて居る点であります。³⁹

これが昭和天皇が学習院初等科に在籍していた際に6年間主管(学級担任)を務めた石井の国体論である。初等科時代を知っているからか、成長や自覚また遺伝や環境といった条件によって「御現神」となったとする。また日本の国体の優れている点として、天皇の人格を挙げている。

牧口は、石井の国体論に一通りの謝礼を述べた後、国体明徴問題に触れている。そして、指導

³⁹ 前掲、石井國次「今上陛下の御盛徳」2～3頁。傍線引用者。

者階級の認識作用と評価作用の混乱に触れ、その混乱の源泉である嫉妬軽蔑の感情に言及した。「美濃部博士の「天皇機関説」の論争などにしても、三十年間も黙認してゐた今日初めて起つた事及び起つては来たもの、敵も身方も冷静に真理を追求し、あくまで真理には服従せんとする純真さよりは、怨嫉軽蔑の情が湧き立つために、結局は有耶無耶の水掛け論に終りはしな [い] であらうとか想像するに難くないことなども、畢竟この禍といはねばなるまい。」と天皇機関説事件を真理上の問題というよりは、単に感情の問題であると切り捨てている。さらに、法華経が正邪善惡の鑑定に欠かせないとして次のように述べる⁴⁰。

幸に斯かる明天子を奉戴する世界無比の国民の指導階級に位する教育者、智者、賢者等が、其の地位を自覚し、真に国体の明徴を期し、その使命を完了せんとするならば、退いてその独を慎しみ、己の欲せざる所を人に施す勿れ、といふが如き消極的小乗教的道德の実行に安んじ、一己の安全を謀るよりは、進んで積極的大乗教的道德に覚醒し、国家社会の安全繁榮のその中に自己の幸福を見出すことでなければならぬ。それが為には惡に対する直接の反抗は、これをその筋の分担者に任せておいて可なりとしても、己の如かざる善の中でも大善に対しては、傍觀的日和り見の態度であつてはならぬ。況やたとへ些でも嫉妬心を以て冷眼視したる結果、その大善の流布を妨げるが如きに至つては 陛下の御高德に対し奉つて、誠に申訳ないことと云はねばなるまい。現在の憂婁には混濁したる末流の浄化に勞するよりも、上流の混濁を予防するのが急務にして且つ賢明の策であらふ。

「嫉妬軽蔑」といふ唯これだけの一心さへも、吾々が駆除することが出来たならば、如何なる思想でも人間でも、少しの忌憚もなくまた畏るる所もなく、明かに認識することが出来、然る上で正しき評判が下されるであらう。果して然らば、それが出来なかつたために昔から未解決のまゝに持ち越されて居る教育宗教上の幾多の問題が解決されるであらう。斯くて正邪善惡の価値判定が真に出来た上で初めて思想の善導も可能とならふ。⁴¹

牧口は、天皇機関説事件は、認識作用と評価作用の混乱であり、「怨嫉軽蔑」の感情問題であると述べた後に、指導者階級が、「真に国体の明徴を期」するのならば、「進んで積極的大乗教的道德に覚醒し、国家社会の安全繁榮のその中に自己の幸福を見出すことでなければならない」としている。これは日蓮仏法に目覚め、牧口の「価値論」を共有するということになるのだろうか。また、指導者階級の感情問題が駆除できれば「天皇機関説」も正しく認識され、評価されるだろうと述べている。

現在確認されている資料として、牧口が「宗教革命」を提唱し始めるのは、巻頭言「教育改造と宗教革命」（『新教』第5巻第11号、日本小学館、1935年11月15日）からである。この頃から、

⁴⁰ 牧口常三郎「御盛徳拝聴所感——教育者は如何にして此の大御意を奉体し且つ教材化するべきか」『新教』第5巻第10号、1935年10月15日発行。4～6頁。『全集』未収録。本号資料紹介に掲載。

⁴¹ 同6頁。傍線引用者。

宗教革命と国体を関連付けて論じるようになる。同第11号掲載の巻頭言は、次号掲載の牧口論文「赤化教師の完全転向は如何にして可能なるか」とセットになって、1936年初頭頃に小冊子として配布される。そのタイトルが『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』（創価教育学会）である⁴²。

巻頭言「教育改造と宗教革命」は、教育改造も宗教革命まで及ばなければ不十分なものとなるとして、「然らばその宗教革命は如何にするか。現代の科学とは背反するものとして、マルキスト並にすべての科学者達から擯斥を受け、阿片の如く信を失墜してゐる既成宗教を、思ひ切つて抛棄しなければならぬ。然して後、更に科学的文化生活に合致して一害なく、且つ完全に国体に契合すべき真実の宗教を選定しなければならぬ。」と宗教革命の方法として、現代科学と背反する既成宗教を放棄して、科学的文化生活および国体に合致する宗教を選定することを挙げる⁴³。

1936年の『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』では、巻頭言「教育改造と宗教革命」で示された宗教革命が、赤化青年の完全転向⁴⁴の根拠になっている。巻頭言で言及されていた宗教革命とは、現代科学と背反する既成宗教を抛棄し、科学的文化生活、国体に合致した宗教を選定することであるが、牧口は改めて「さてその宗教革命の問題に入るに当つて、如何なる宗教を選定すべきか。（中略）要するに科学に背反せずして、しかも現当二世の生活原理たるべきものたること、「古今ニ通シテ謬ラス、中外ニ施シテ悖ラス」と教育勅語に仰せられた神ながらの大道に合致して、所謂日本精神の根柢たるべきものでなければならぬ」⁴⁵と条件付けている。

つまり、科学的で、現在未来の生活を保証する原理を持ち、今も昔も間違いなく、どこであっても道理に背かない宗教を選定すべきということになる。牧口によれば、その最高の宗教とは、「日蓮正宗」および法華経である。そして国体と一致するかどうか、を次のように説明している。

されば日本国体に違背したる幕府に容れられないのは徳川時代でも同様であらう。是に於てか当時の政權に阿附迎合して、その勢力を得てゐた諸宗並に日蓮各派の中にありて、あくまで宗祖の正意を頑強に伝へて屈するところないのが、日蓮正宗唯一つあるのみとせば、明治の世になつて初めて顕はれることに怪しむ所はあるまい。蓋し覇道をしりぞけ、皇道を顕揚し、天壤無窮の神勅に合致するが故である。

聖徳太子や桓武天皇は申すに及ばず、和氣清麿でも、菅原道実でも、楠正成でも国史中の最大忠臣は皆法華経の信者であり、徳川光圀、加藤清正、大石良雄、大塩平八郎、相馬大作、佐久間象山、勝海舟等諸英雄なども悉く法華経の信者であつたことを思ひ合せると歴史家の

⁴² 牧口常三郎『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』（創価教育学会）は、『創価教育』第16号、池田大作記念創価教育研究所、2023年に収録されているので参照されたい。また、『新教』第5巻第12号掲載の牧口常三郎「赤化教師の完全転向は如何にして可能なるか」（傍線引用者）と同小冊子を比較するとタイトルのみに異同があり、本文は同一である。

⁴³ 『全集』第9巻、第三文明社、1988年、5頁。

⁴⁴ 前掲岩木(2023)を参照。赤化青年の完全転向は、一応は、転向者の生活保証と解釈しておいて差し支えない。

⁴⁵ 前掲、牧口常三郎『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』（『創価教育』第16号、273頁。）

宗教に対する無識、歪曲から殊更に之に触れることを避けた為に教育社会には一向注意をされないで来たのであるが、法華経が日本国体といかに親密の関係があるかを察せられやう。「古今ニ通シテ謬ラス中外ニ施シテ悖ラス」と仰せられた「神ナカラノ大道」と契合するからである。と断定するに異議はあるまい。⁴⁶

ここでは、歴史性によって「日蓮正宗」および法華経と国体との一致の説明を試みている⁴⁷。そして、創価教育学との関係を論じるに及んで、創価教育学は教育方法の研究が主であるが、教育内容の研究対象である国体観念の徹底にまで及ぶ必要があること。また赤化青年の完全転向とは、宗教革命を前提とした教育改造によってのみ可能となると結論付けている⁴⁸。

1935年11月以降、牧口は宗教革命と国体を関連付けて論じるようになったが、牧口常三郎「国体明徴と宗教革命」（『新教』第6巻第2号、日本小学館、1936年2月15日発行。1～2頁）には、タイトルにそれが表れている。牧口は、第一次・第二次国体明徴声明およびその問題に触れつつも、筆路を別の方に向けていく。「それよりか遙か適切なことは、小・中学校の実際生活に於ける国体明徴の取扱ひ方の問題であらう。国史中の最大忠臣の一人としての和気清麿を、学校で教授するに当り、「宇佐八幡宮の神託を如何に取扱つてゐるであらうか」の疑問がそれである。」⁴⁹と小中学校の国史における国体明徴の取り扱いに言及し、宗教問題である神託を、捏造等の唯物論的解釈ですましてよいのか、と政府の神社非宗教論の立場にゆさぶりをかけている。

斯やうにして敢て事実の否定はしないでも、進んで肯定もせぬ不即不離の指導に従つた学校教師は、やはり半信半疑の態度を以て、架空想像のお伽噺くらゐにしかして居ないではないかと思はれる。果して然らば、虚妄なる伝説の上に、歴史の事実を結び付けて国民の信念を確立せしめんとするもので、影響するところの甚大なる由々しき問題ではないか。こんな事で国体の観念の涵養が出来るであらうか。

（中略）

是は決して平凡なる歴史上の小事ではない。天壤無窮の御神勅の現実なる証明となつてこそ、初めて万邦無比なる日本国体の明徴の根柢が得られる。さもなければ肇国の御神勅でさへも、やはり非現実の一神話と見做されるの危険がないと限るまい。然らば形式的に国体の明徴を何ほど繰り返した所で、徒勞であることが解るでないか。

国史教育をこゝまで徹底しなければ、国民教育の価値がないことが解ると共に、宗教革命にまで至らなければ、その徹底が期し難いことが明かとなつたであらう。吾々が袖手傍観し

⁴⁶ 前掲、牧口常三郎『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』（『創価教育』第16号、276～277頁）。傍線引用者。

⁴⁷ 前掲松岡（2002）でも、「歴史的観点から“反国体の武家政権に反対した日蓮正宗こそ真に国体に合致した宗教である”との主張がなされた」（26頁）と述べている。

⁴⁸ 前掲、牧口常三郎『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』（『創価教育』第16号、277頁）。

⁴⁹ 前掲、牧口常三郎「国体明徴と宗教革命」1頁。

能はぬ所以である。

然らば各自の宗教革命を断行して最高宗教の信仰にまで達すればその辺の理解も出来るであらうか。吾々は出来ると断言し得る確信を持つ。ともかくも、宗教上の史実を宗教無視の唯物論的解説だけでは、断じて理解し得られぬといふことだけは、是非共明記しなければならぬ。⁵⁰

牧口は、神託という存在を適切に扱えぬのであれば、虚妄の伝説の上に、歴史的事実を結び付けるもので、影響の大きい問題である。こんな事で国体観念の涵養は出来るのか。宇佐八幡宮の神託が現実的な証明となつてこそ、国体明徴の根拠が得られる。でなければ、御神勅も非現実の神話と見做される危険性がないとも限らない、と述べている。これは、ほとんど皮肉めいた言辞で神託を適切に扱えないことを分かった上で、あえて言及していると考えられる⁵¹。

1937年9月5日発行の小冊子『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』（創価教育学会）では、第7章（宗教研究法の革新と家庭国家の宗教革命）において、宗教革命を論じている。宗教革命によって「科学的検討に堪へるものにして、しかも現在未来の二世に亘つて、安全生活を保証する力を有するもの」⁵²を選定し、「国体との関係を徹底して、すべての宗教を検討すると、結局は無上最大なる仏法の極意を伝える「日蓮正宗」唯だ一となる」⁵³と述べている。注目したいのは、国体との関係の大きな部分を「日蓮正宗」が担っているということである。ここでも国体との一致は重要な問題となっており、「所謂日蓮主義者の多くの中には、右翼的団体として、国体と背反するが如き詭激の行動をなすものがあつたには相違ないが、そこに初めて「日蓮正宗」の真価が表はれるのである。」⁵⁴、「其上に、日蓮大聖人の本意を少しも曲げず、仏教の極意を最も忠実に伝統したがために、徳川幕府の終りまで、絶へず非常なる圧迫を受け、幾多の法難に遭ひ、明治に至つて初めて、忌憚なき生存権が確定された日蓮正宗こそ、自ら国体と親密不二の関係を証明してゐるものである。」⁵⁵と、牧口の説明によれば「日蓮正宗」の歴史性が国体との一致に大きな役割を果たしていた。

1935年に入つて、国体との一致に言及するようになるのは、第一次・第二次の国体明徴声明や赤化青年の転向者らを機関誌の編集員などに受け入れたことと無関係ではない⁵⁶。何より国体と一致していると表明することは治安維持法下では、生活保証の基礎となる。

⁵⁰ 同1～2頁。傍線引用者。

⁵¹ これも後述の「逆用」事例の一つとして解釈することができる。

⁵² 『全集』第8巻、1984年、81頁。

⁵³ 同90頁。

⁵⁴ 同88頁。

⁵⁵ 同89頁。

⁵⁶ 1935年6月以降から渋谷信義を筆頭に、赤化青年の転向者らを受け入れている。前掲岩木（2023）の174～175頁を参照。

3. 牧口の「国体明徴論」

「はじめに」で岩本他見男の「国体明徴論」証言に言及したが、戦前に刊行された『価値創造』の最終号である第9号2面に岩本の体験談が掲載されている⁵⁷。その体験談によると、1941年10月に信仰し始めていることから、1941年10月頃以降に牧口の「国体明徴論」に触れたのだと考えられる。

その「国体明徴論」の手がかりが、『価値創造』第6号にある。1941年11月初旬に前文部次官石黒英彦を神尾武彦、片山尊、辻武寿が「指導者階級折伏行」として訪問している。その際の話の目次立てが、簡潔に『価値創造』第6号（1942年2月1日付4面）に掲載されているがそこには「○石黒前文部次官折伏（片山氏）／イ、教育論、平重盛は大不忠臣／ロ、国体明徴論」とだけ記載されており、そこからは肝心の内容までは分らないが、片山が石黒に対して、「国体明徴論」を話したことが窺えるのである。当時の創価教育学会の指導方針は牧口常三郎によるものであるから、この「国体明徴論」も牧口の言説をベースにして展開していることが推測できる。この石黒との対話の内容は、『大善生活実証録 第4回総会報告』（創価学会、1942年8月10日発行）に「前文部次官石黒英彦訪問記」として掲載されている。内容を確認すると、さきほど見た目次立て通りに、教育論、平重盛に触れて、最後に「国体明徴論」とおぼしき内容を片山が語り、石黒が答える様子が描写されている。

次に片山より、閣下は文教の府たる文部省に於て指導的地置〔地位〕にありたる方なるが、現今、天皇陛下と天照大神とを二元的に見奉るが如き、教派神道的思想の跋扈を許すは如何にと質問し、国体観につきて明確且つ整然たる理論を展開すれば、石黒氏、あまりの整然さに驚きの目を睨りつゝ、之に聴き入り、君等はさすがに大きな問題を持つて来たといはれしが、年来寛博士に養はれたる謬見の一度に改めることもなし得ざりしか、余五十年來寛博士の弟子にして今日あるなり、諸君に如何に云はれるとも信念なるが故に動ぜずと。⁵⁸

石黒に対して片山は、天皇陛下と天照大神の二元論的な考えについて難詰している⁵⁹。つまり、「国体明徴論」としては、天皇と天照大神を一元論的に見做すということが主たる内容となるわけである。この天皇一元論は、それだけだと表面的には政府の「国体明徴声明」や、それを受けて書かれた『国体の本義』（文部省、1942年）が「大日本国体」の見出しで記述している「かくて天皇は、皇祖皇宗の御心のまに／＼我が国を統治し給ふ現御神であらせられる。この現御神（明神）或は現人神と申し奉るのは、所謂絶対神とか、全知全能の神とかいふが如き意味の神とは異なり、皇祖皇宗がその神裔であらせられる天皇に現れまし、天皇は皇祖皇宗と御一体であらせられ、永久に臣民・国土の生成発展の本源にましまし、限りなく尊く畏き御方であることを示すの

⁵⁷ 小泉隆「不良少年善化の証明」『価値創造』創価教育学会会報第9号2面、1942年5月10日発行。

⁵⁸ 前掲「前文部次官石黒英彦訪問記」50頁。

⁵⁹ この二元論的な考えは、各教派の最高神と天照大神の序列によるものと推測できる。

である。」(23～24頁)と軌を一にした、単に天皇現人神説を容認したもののように見えてしまわないだろうか。

次いで、天皇一元論を説いた牧口の発言を確認しておきたい。牧口は、1942年11月22日に開催された第5回総会の「全員座談会」において、神社問題が議題に上がり、次のように発言している。

牧口先生 この問題は将来も起ることと思ふから、此際明確にして置きたい。吾々は日本国民として無条件で敬神崇祖をしてゐる。しかし解釈が異なるのである。神社は感謝の対象であつて、祈願の対象ではない。吾々が靖國神社へ参拝するのは「よくぞ国家の為に働いて下さつた、有難うございます」といふお礼、感謝の心を現はすのであつて、御利益をお与へ下さいといふ祈願ではない。もし、「あゝして下さい、こうして下さい」と靖國神社へ祈願する人があれば、それは恩を受けた人に金を借りに行くやうなもので、こんな間違つた話はない。天照大神に対し奉つても同様で、心から感謝し奉るのである。独り天照大神ばかりにあらせられず、神武以来御代々の天皇様にも、感謝し奉つてゐるのである。万世一系の御皇室は一元的であつて 今上陛下こそ現人神であらせられる。即ち 天照大神を初め奉り、御代々の御稜威は現人神であらせられる 今上陛下に凝集されてゐるのである。されば吾々は神聖にして犯すべからずとある「天皇」を最上と思念し奉るものであつて、昭和の時代には 天皇に帰一奉るのが国民の至誠だと信ずる。「義は君臣、情は父子」と仰せられてゐるやうに、吾々国民は常に天皇の御稜威の中にあるのである。恐れ多いことであるが、十善の徳をお積み遊ばされて、天皇の御位におつき遊されると、陛下も憲法に従ひ遊ばすのである。即ち人法一致によつて現人神とならせられるのであつて、吾々国民は国法に従つて天皇に帰一奉るのが、純忠だと信ずる。天照大神のお札をお祭りするとかの問題は万世一系の天皇を二元的に考へ奉る結果であつて、吾々は現人神であらせられる天皇に帰一奉ることによつて、ほんとうに敬神崇祖することが出来ると確信するのである。またこれが最も本質的な正しい国民の道だと信ずる次第である云々。⁶⁰

牧口の説明によれば、国民として敬神崇祖するが、解釈が異なる。感謝の対象と祈願の対象は別である。感謝の対象に、ご利益を与えてくださいというのは、あまりに筋違いである。神社、天照大神、歴代の天皇は感謝の対象である。今上天皇を現人神とすることによって、天照大神から万世一系の皇室の歴代天皇を一括りにして、感謝の対象として一元化する。また現人神となるのも無条件ではなく、徳を積み、天皇の位について、憲法に従うことによって現人神となる。その憲法に従っている天皇に帰一するのが国民の忠であるとする。むしろ現人神であることによって一元化できているのであつて、天皇が現人神でないとすると一元化できない。そもそも天皇一

⁶⁰ 『大善生活実証録 第五回総会報告』創価学会、1942年12月31日、47～48頁。傍線引用者。

元論は、現人神説を含意しているはずである。

また、牧口が1943年7月6日に治安維持法違反及び不敬罪の容疑で検挙されて以後、作成された訊問調書（抜萃）では、「御本尊と所謂日本の神々との関係は如何」という問に対して牧口の天皇一元論に関する供述が行われている。

日蓮正宗は始めから、此の硬派〔参詣無用〕の旗頭で「神天上」とは各神社に祭られた神々は天へ上つて社殿は空虚になつて、其の代を悪鬼が後に入つて居るから、参詣する必要はなしと謂つて神社参拝を拒否して居たのであります。

伊勢の皇太神宮に対しましても、同様の意味で天照皇太神は天へ上つて後は空虚で悪鬼が入代つて居るから、そんな処へ参拝する必要なしと云ふのであります。

之は本尊に帰依しながら他の神仏を拝む事は謗法になりますので、宗門では謗法を強く戒しめて居ります処から、左様な理窟を付けたのであると思ひます。

私の伊勢皇太神宮に対する観念の真意は矢張り其処にあるのでありますが、左様に説いては世間の誤解を招く虞れもありますし、問題を起しますから私は学会員に対しては天照皇太神、天皇と謂ふ二元論で無く 天皇一元論を樹てて居ります。

即ち天照皇太神は御皇室の御祖先でありますから、其御神徳は歴代の天皇の御位に継承されて現在では、今上天皇陛下に悉く伝へられ、それが御稜威として現世に輝き下万民を照し幸福なる生活が出来る所以でありますから、憲法第三条にも「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と御定めになつて居るのであります。

故に私達は忠孝の場合と同様一元的に「天皇一元論」で天皇陛下を尊崇し奉ればそれでよし、伊勢の皇太神宮に参詣する必要なしとの信念で来ました。天皇陛下を尊崇し奉れば天照皇太神も尊崇し奉る事になります。

所謂敬神と祈りとを区別して信仰の対象を定める事が生活上大切な事と思ひます。過去の功德功勞を感謝し奉ることと其の上に報恩の誠意を現はすと共に、其れを身に行ふのみならず未来に希望を申し上げて祈りを為す事の二階級がそれであります。「心だに真の道にかなへなば祈らずとても神や守らむ」と日本国民の古来よりの信念は現在の生活に於て各々国民が誰れでも実証して疑ふ能はざる処であります。

天照皇太神に対し奉つて今上陛下より特別の仰せがある者は別として吾々国民が直接に御祈願の途は、今上天皇陛下を通じ奉らねばあり得ない訳と存じます。感謝以上の御奉公の途も然りと存じます。天皇陛下の御稜威は文武百官の機関を通じて、国民の安全幸福に現はれて居ります。万一足らない所があれば議会其の他の機関に依つて請願が出来るのであります。

果して然らば吾々は現在の 天皇陛下以外にどなたに対し奉つて祈願すべきでありませうか、但し尊敬、感謝の誠意を凡ての神々に怠つてならぬ事は知恩報恩こそ人間の途であるが故であります。

畏くも 陛下におかせられても、御病気には医師の申上げを嘉納して御全快を計られざる

能はすと同様、御病気になられない法等の御生活の法を御採用になり、因果の法則に御従ひ遊されなければなりません。若しも其の根本大法が御明らかにならせ給ふならば如何に御安泰に国家が繁栄し、国運が隆昌になり桓武天皇の延暦の御代が再現されます事でありませうかと存ずる次第であります。

天照皇太神に対する私達の観念は、只今申上げた通でありまして、宗祖日蓮聖人以来宗門が採用して来た謗法折伏の信念は誠に強烈なもので、他の神宮神社や他宗信仰に就ても前と同様の観念でありまして、殊に他宗派信仰の謗法を破折する為に念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊等の格言を極言せられたのであります。⁶¹

この二つの資料が、牧口自身が語ったものとして現在確認できるところの「国体明徴論」の内容と言ってよいだろう。牧口の「国体明徴論」は、「神天上」説により神社参拝を拒否したいのが本意であるが、世間の誤解を避け、会員が問題を起こさないように立てたレトリックである。感謝と祈願の対象を区別し、天皇一元論で、天照大神から歴代天皇および今上天皇を現人神として、感謝の対象としてひとまとめにする。そうすることで信仰の対象を確保した。

さらに、この牧口の「国体明徴論」の意図を明確にする資料として片山尊の遺稿（以下、「遺稿」と略す）⁶²を提示しておきたい。前述の石黒との対話で行った「国体明徴論」の意図が片山の「遺稿」によって明らかになっている。「遺稿」は片山の1938年の入信時期から出獄後の1944年を書いた自叙伝である。以下で引用するのは、片山が1943年7月20日に検挙された後、警視庁において特高第二課に取調を受ける中で、「日蓮正宗の信仰と皇大神宮の礼拝に就いて」という題で、調書作成用の作文を書かされている場面である。人名等の表記は、諸資料を参考に引用者が補足した。

四五日掛けて経歴関係の調べが終わると、いよいよ信仰思想の本筋の問題が取り上げられ始めた。

恐らくは特高二課を指揮している検事からの出題なのであらう、本番に掛ったら徹底的に破折し尽くしてやろうとの意欲が猛然と湧き上がって来た。

——日蓮正宗の信仰と皇大神宮の礼拝に就いて——

⁶¹ 『全集』第10巻、1987年、205～208頁。

⁶² 片山尊の直筆遺稿（上・下巻）、A4の400字詰め原稿用紙227枚（197枚目が欠落）。御遺族より資料提供があった。片山尊（1917—1995）の入信時期（1938年4月頃）から出獄後（1944年8月頃）までを三人称視点で書いた自叙伝である。登場人物には仮名が使用されており、「遺稿」の表紙には、片山尊の実弟・瑞氏作成による登場人物の仮名・本名の対応表のメモが貼り付けられている。執筆時期は1958年頃と推定される。片山尊は、創価教育学会の初代青年部長を務めた人物で、牧口・戸田の検挙後、片山も治安維持法違反及び不敬罪の容疑で検挙され、1943年7月20日～1944年8月12日まで拘留された。片山尊の略歴および当該資料については、本研究所客員研究員の塩原將行氏にご教示いただいた。ほか、「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝牧口常三郎』（第三文明社、2017年）、『全集』第10巻（1987年）、および堀日亨編『富士宗学要集』第9巻（富士宗学要集刊行会、1957年）も参照。

「更紙は幾らでも追加するから、此の題で君の頭の中に在る事を全部書いて見て呉れ給へ。」と云ふと高崎〔高橋利一〕警部補は、さっさと昨日迄の調書の清書を始めた。

さあ、いよいよ御出でなすった。彼の頭の中には一昨年の暮牧田〔牧口〕先生から、清水に居る父松三〔松治郎〕へ宛てて送られた葉書の文句が浮かんできた。「御令息を始め幾多青年が覚醒し呉れ過日は元文部次官白石〔石黒〕氏等にまで強折其の「神ながらの道」人の納得を受ける等の活躍——」

今年初めの矢平週造〔矢島周平〕氏の学校退職問題以来、俄に活発化して来たのであるが、以前から研鑽を重ねて屈指の論客として会長からも一応は許された命題である。

先に「人世地理学〔人生地理学〕」を、後に「郷土科研究」を著された先生の思想の中には、嘗て柳田国男氏を中心に、新渡戸稲造・田辺寿利氏等と共に十二名の学者グループの中に在って御専門の地理学を提げて民俗学的或は社会科学の魁として云ふべき学問の研究に没頭された事があり、其の頃の御縁で川面凡児氏等と神道の研究もされたことがあって、神道の禊行などは改宗された後も毎朝の冷水浴、冷水摩擦の健康法として続けて居られた位であったから、当然日本神道に關しての御造詣も深かったのである。

牧田〔牧口〕先生の御説は神道家の最も得意とする「祭政一致論」の逆用⁶³とも云ふべきもので、巧みに彼の得物を用いて破折されたのである。

今宗祖の立正安国論の「神天上他界説」を論ずれば一言の下に事足りる訳であるが、「安国論」を批判しようとする思想に対しては先づ彼の中に誤りを糺して自家撞着を起させる事を計らなければならない。

尊は先生の御説を更に是を發展させて一つの決着を付ける事にして鉛筆を執った。

「大日本帝国天皇は皇祖天照太神其の身に入り換らせ給ふ故に現人神と申し上げる。

即ち生身の天照太神である。八百万の神々とは現在の国民の事であると信ずるのが日本古神道の精神であり、日本国民の信念でなくてはならない。

我々国民は絶対に現在の天照太神で在られる天皇中心でなくてはならない。

天皇を差し置いて国民の我々が直接神宮中心の信念に立つ事は天皇を軽んずる事となつてしまふのである。

天皇御自身が神宮を祀られるではないかと云ふかも知れないが、是は天皇の御立場から祖廟を祀られる事は当然であるが臣下の立場からは不可とすべきものである。

其の証拠には延暦の儀式帳等の歴史に徴しても明らかに人民の拝礼の事はないとされているのである。

即ち専ら皇室のみの祖廟であつたので神宮の生活も其の御庇護の下に何不足もなかつたのである。

中世に及んで武家の政治となり、次第に此の風が衰へ、特に応仁の乱以後皇室の衰微と共に

⁶³ ここでは祭政一致論＝神社非宗教論の逆用と理解してよいだろう。

其の庇護も途断え勝ちとなつてから、神宮は仏教の講中制度を真似て伊勢講中の成立を許し、果てには奨励した。

伊勢は元来内宮と外宮があり、内宮は天照太神、外宮は豊受太神を祀り、外宮は格が一段下がるのであるが、その劣等感の為にも内宮に先んじて種々の対民衆活動を始めて、外宮が中心となつて一般民衆の参拝を認めて其の維持を図る様になつたのである。

特に「御師^{おし}」と呼ばれる今日の交通公社の勧誘員の様な連中の発生を奨励して、全国的に各市、町、村を分担して伊勢参りの講中を組織させたのである。

そして当時一般に発売されては居なかつた暦の民間配布の特権を得て、是を仮名書きにして「御師」の任地へ土産として持たせると云ふ商売上手であつたのである。

此の「御師」連中が翌年の伊勢参り講を盛んにする為に、先達の家々に神棚を作らせ、こっそりと製造して来た神札なるものを暦と一緒に配布して団体募集の能率増進を計[図]つたのである。

人々の競争心を利用した巧妙な方法であつた。

然し此処に特筆すべき事は所謂大麻に就いては、時々厳重な制止があつたと云う事である。平田篤胤等の似非神道家のコザツケ論等に胡麻化されて追々に不問に附される様になって来たのであつたが、昭和の今日に於ては逆に政府が是を各家毎に祀る事を奨励する様になり、昨今はむしろ強制の風が起つてゐるのは全く奇妙な変化であり、黒を白と云はんとするものであらう。

国体明徴と云ふ事を徹底するならば、平田篤胤等の不敬を鳴らし、むしろ大麻を全面的に大々的に取締りを強化をこそなすべきであると思ふが如何ん？」⁶⁴

まず、片山は牧口の葉書の言句とともに1941年11月初旬の石黒との対話を想起している。石黒との対話で片山が論じた「国体明徴論」は牧口からも一応論客として話すことを許された命題であつたと証言している。その内容は、牧口の「国体明徴論」から学んだものであつた。片山は、「遺稿」のこの場面で、牧口の「国体明徴論」を更に発展させて、御師や大麻の歴史を取り上げて問題に決着をつけようとしている。

牧口の「国体明徴論」は、神道家の「祭政一致論（神社非宗教論）」の逆用ともいふべきもので、相手の得物（現人神説など）を巧みに用いて、教義解釈の誤りを指摘するものであつた。神社非宗教とするのであれば、それは祈願の対象にはならない。よって感謝の対象として、神社、天照大神、天皇を一元化する。逆用、いわゆる逆手に取るとは、ある物事を本来とは反対の目的に利用することや、自分の都合のよいように利用することを指すが、牧口の他の逆用の例として、前出の国史教育における「神託」の問題や、伊藤（2009）で詳細に論じられている忠孝一本（忠は孝に含まれる＝孝一元論）を挙げることができるだろう。訊問調書で「故に私達は忠孝の場合

⁶⁴ 同遺稿下巻43～49枚目。傍線引用者。

と同様一元的に「天皇一元論」で」⁶⁵と述べているのもその証左で、牧口は一元論を戦略的に組み立てていたのであろうと推測できる。

おわりに

以上、本稿では、牧口常三郎の「国体」に関する言及の変遷、およびその「国体明徴論」の再構成を試みた。「国体明徴論」を再構成することで、牧口の国体観を解釈するにあたっての補助線を引けたのではないかと考えている。従来は、検挙前と獄中でのスタンスの変化などが解釈上の難点となっていたが、牧口の天皇一元論に改めて着目することによって、逆用のレトリックという戦略的な側面、クレバーでしたたかな側面が見えてきたのではないだろうか。

牧口は、国体問題に関わらない程度に、という形で普選運動に関わってはいたが、その後、赤化青年転向者らの転向輔導に取り組むことになったことで、宗教運動および国体問題に関わらざるを得なくなった。前提として国体を変革や否定することはできず、国体を支持した上で、換骨奪胎的に国体を研究し再構成していくという方向性をとった。その再構成の大きなポイントが、忠孝一本（孝一元論）と天皇一元論である。この天皇一元論は、牧口の「国体明徴論」として、戦時下において「価値論」と同様のインパクトをもっていたと評価していた会員も存在した。牧口の天皇一元論は、神社、天照大神、天皇を感謝の対象として集約し、信仰の対象を確保するしたたかな一元論であった。検挙前（天皇現人神説）と獄中（天皇凡夫説）でスタンスを変えたという解釈もあるが、検挙前、獄中どちらも天皇一元論を唱えている。天皇一元論は、論理的には現人神説を容認するわけだから牧口はスタンスを変えたわけではない。

牧口の教育・宗教運動は、革命と生活保証がセットになっている。社会主義者たちとの対話の中で牧口は次のように述べていた。『『なるほど現社会の構成には幾多の欠陥があるにより、改革を要すといふ議論には賛成する。けれども破壊しただけで、之に代はる建設案が成立しない間、国民の苦しみは恰も応仁の乱以後の戦国時代の再現とならぬか』との余が反問に、彼等は『維新の革命は如何。当時の所謂志士なるものに何の対案があつたか。然れども破壊後に立派な維新の社会となつて今日に及んだではないか』と。これに対して余の良心は最早防禦の辞に窮したのであつた。（中略）果して然らば破壊的運動のみによらずとも、建設的穩健手段により、資産階級の理解に訴へても、改革可能の時機が来ぬことはなからう。然らば之こそ教育者として相応しき途であらう。依つて国体問題に触れない範囲に於ける社会改良運動として普通選挙までの同伴に留めて以後は彼等と別れたのである。』⁶⁶

この問題意識は、牧口の「価値論」にも流れている。革命（善の価値）と生活保証（美・利の価値）である。このバランス感覚が、彼の戦時下の言説にも現れているのであろう。

今後の課題としては、片山が言及していた教派的神道の二元論や川面凡児、寛克彦らの神社宗

⁶⁵ 前掲『全集』第10巻、206頁。

⁶⁶ 前掲『全集』第6巻、22～23頁。傍線引用者。

教論と牧口一元論の比較検討が残っている⁶⁷。この検討によって牧口のスタンスが更にはっきりするだろうと考える。

⁶⁷ 河野省三によれば「寛博士と川面氏の神道説は哲学的組織の中に宗教的信仰が力強く動いてをり、又加藤博士の神道説は宗教学的の研究がその特色を為してゐる（中略）尚、寛博士の哲学的思索と宗教的信仰とによつて力説された神道説はその行的修養法と相待つて、大正時代から昭和の初にかけて著しくなつた時代思想の一傾向に投合して、我が思想界に多大の反響を与へ、神道の存在を力強く意識せしめる所があつた」（河野省三『神道読本 修訂』森北書店、1943年、86頁）と評価されている。

創価教育と通信教育の歴史

岩 木 勇 作

はじめに

創価大学は2021年に開学50周年を迎えました。開学後に設置された通信教育部も2026年に50周年を迎えます。本寄稿は、創価大学通信教育部50周年に向けた企画として、通信教育部の機関誌『学光』の2024年春夏号No.7～2025年冬号No.12に全6回掲載した「創価教育と通信教育の歴史」を編集したものです。必要な修正は加えましたが、内容は掲載時と変わりません。連載の目的は、通信教育部50周年に先立って、改めて、創価教育と通信教育の結節点である牧口常三郎（1871-1944）、戸田城聖（1900-1958）、池田大作（1928-2023）を歴史的な視点から掘下げ、創価教育における通信教育の意義を明らかにするところにあります。学内・学外問わず沢山の方に御味読いただければ幸いです。

1. 若き牧口常三郎とその時代

若き牧口常三郎

渡辺長七（後の牧口常三郎）は、1871年（旧暦）6月6日に柏崎県刈羽郡荒浜村（現在の新潟県柏崎市荒浜）で生まれました。1873年からは、日本でも太陽暦が採用されるため、旧暦の6月6日は、新暦で換算すると7月23日になります。ただし、牧口自筆の履歴書を確認すると、生年月日欄には「6月6日」と記載されているため、改暦後であっても6月生まれという意識があったようです。改暦を一つの例として取り上げましたが、牧口が生まれ育ったのは、このように日本の近代化により様々な制度・文化・習慣が目まぐるしく変わっていくような時代でありました。教育の分野においても、1872年8月に学制が公布され、日本で初めて近代学校制度が法令として定められました。学制という青写真をもってスタートしますが、教育の現状に鑑みて修正、近代化への反動から改められるなど、近代学校制度は、紆余曲折を経ながら普及していきます。

長七は、1877年に牧口善太夫の養嗣子となり、その後、第六大学区第四中学区私立第四番小学第一分校（後の荒浜小学校）で学んでいます。当時は不就学者の割合が高く、荒浜村では

1874年時点で学齢児童のうち就学者の数が17%程度でした。家業の手伝いなどで、行きたくても行けないような状況があったのだらうと思います。1884年頃には、牧口は親類を頼りに北海道の小樽に移り住みました。そこから1889年4月に札幌の北海道尋常師範学校に入学するまでの期間について、詳細は分かりませんが、小樽警察署の給仕をしながら独学で学んでいたようです。北海道尋常師範学校での学びが、1893年3月に同校を卒業してからの牧口の仕事や著作に大きな影響を与えていることは言うまでもありませんが、同様に、北海道の小樽に移り住んでからのおよそ5年間にわたる、働きながら学んだ経験は、自身の教育学を考えるにあたって重要な要素として構成されていたのではないかと思うのです。

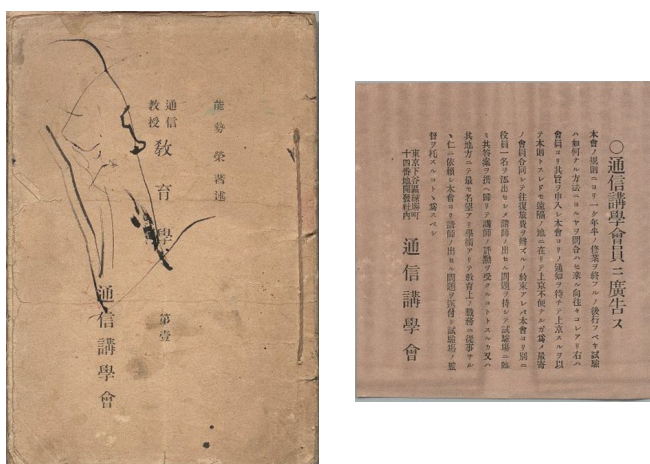
師範学校卒業前に名を常三郎に改め、卒業後は学校教員として授業・運営を行いながら、精力的に研究を続け、北海道教育会の機関誌『北海道教育雑誌』に論考を投稿しました。同会の理事や同誌の編集員も担当しています。牧口常三郎名義の文章は、上京する1901年4月までの間、同誌に計61回掲載されています。また、師範学校在職中には、難関の文部省中等学校教員検定試験（通称「文検」）を受験し、北海道出身者としての合格は、地理地誌科で第1号、教育科で第2号となっています。そして1903年10月にはベストセラーとなる『人生地理学』（文会堂）を出版しました。

日本の通信教育の始まり

日本で大学レベルの通信教育が始まるのは、英吉利法律学校（後の中央大学）、東京専門学校（後の早稲田大学）、通信講学会（開発社）などから講義録が発行された1886年頃と言われています。

この中では、英吉利法律学校が最も早く、1885年から講義録を頒布しています。英米の法律という新しい知識を教えるにあたって日本語の教科書が存在しないことが講義録を作る最大の理由でありました。欧米諸国の学問を直輸入していた時代から、その学問を日本人が咀嚼し自説の展開を行うという知の転換がその背景にはあります。

講義録は教室で講義を受けるのと同等の内容を学習できるようにした刊行物で、高等教育の分野から始まり、次いで中等教育でも講義録の発行は盛んになりました。月謝を払い、毎月印刷物を届けてもらって学ぶのです。完結した講義録は単行本として購入することもできました。学校に来ることのできない学習者に学習の機会を提供することを目的とした講義録は、近代的な印刷・出版業の発展と全国的な郵便制度を前提として成立しました。とりわけ通信講学会は、アメリカの通信大学に範を取った通信教育の嚆矢として一時は2万人の会員を獲得しましたが、学位資格の認定が無く、学校という組織体を持たなかったために継続が困難になり、1891年に活動を停止しています。しかし、同会で『政治学』のテキストを担当した高田早苗は、この講義録執筆の経験から着想を得て、有名な早稲田大学講義録の事業に着手するのです。そうして日本の通信教育が普及していきました。



通信講學會の広告と講義録。池田大作記念創価教育研究所所蔵。

牧口常三郎の学び

牧口の小樽時代の学びを書誌的に解明しようとした斎藤正二『若き牧口常三郎』（上巻、第三文明社、1981年）では、当時発行された新聞・雑誌・百科全書・教育雑誌・通信講義録をリストアップしながら、接触し得た可能性のあるもののひとつとして通信講學會の講義録に着目しています。通信教育とのつながりは小樽時代からあったのかもしれませんが、「勉強給仕」というニックネームを得るほど読書をしていたと言われる牧口は、どのような学習観をもっていたのでしょうか。牧口がペンネームで書いた「少女の自修」（『少女界』第2巻第2号、金港堂、1903年2月、2～6頁）という作品にはそのヒントがあります。同作品では少女に対して、普段から、教師に就かないでも自分一人で学問を修める工夫をすることを勧めており、“いつも一冊程度は懐に入れておいてほしい”と特に書物に親しむことを推奨しています。このアドバイスは、牧口の経験に裏打ちされたものなのでしょう。

2. 牧口常三郎と通信教育

大日本高等女学会の設立

1903年に『人生地理学』を出版した牧口常三郎は、その後『教育』（茗溪会）の編集、弘文学院の講師、私立東亜女学校の講師などの職務の傍ら、1905年5月28日に女性のための通信教育団体として大日本高等女学会を設立しています。

1899年2月8日には、高等女学校令が公布されます。この法令によって、高等女学校は女子中等教育機関として独立した学校令をもって設置運営されることになりました。以降、高等女学校は著しい振興がみられることとなりますが、すべての入学希望者を受け入れるまでには至りませんでした。

大日本高等女学会は、高等女学校への通学が困難であったり、学資に困窮したりして、女子中

等教育を満足に受けることのできない女性たちに修学の機会を提供しました。月謝は廉価で、修学期間は2年間（後に1年半に短縮）。牧口は主幹として、講義録『高等女学講義』（発行兼編集人は牧口常三郎）を発行しました。講義録の執筆陣も著名な教育家を揃え、内容は分かりやすく行き届いたものとなっています。この講義録は月2回発行で、第1号から第12号までの1学年分のテキストが半年間で配布されています。講義録では、牧口は第2学年の外国地理を担当しました。また同会が発行した月刊雑誌として『家庭楽』があります。『家庭楽』は、立ち上げたばかりの大日本高等女学会をアピールし、入会希望者を増やす役割を持っていました。

『高等女学講義』は、各科目の内容だけでなく、小説なども掲載されていました。その中に教育家・豊原南村の「小説蘭子」という作品があります。これは、蘭子という女性が大日本高等女学会で学ぶ様子を描いたものです。編者の牧口はこの作品について「全国に亘る熱心なる我会員の情態を写して遺憾なきものゝ如し。」（豊原南村「小説蘭子」（『高等女学講義』〈第5回〉第2学年第3号、大日本高等女学会、1907年11月）とコメントを付しています。

主人公である17歳の女性・岩谷蘭子は山間の辺鄙な場所に住んでいて、毎日、両親と家事や畑仕事をして暮らしています。東京に遊学中の姉と仙台の中学校に在学中の弟がいるのですが、蘭子はきょうだいの学費を考えて進学を踏みとどまりました。ある時蘭子は、姉が東京から送ってくれた『家庭楽』を愛読しているうちに、大日本高等女学会の存在を知ります。姉から同会の評判を聞き、早速入会を決意して、節約して貯めたお金を当てて入学します。朝起きて家事の合間に講義録を読み、人が昼寝を貪る時に調べ物をし、夜は人の雑談の間に復習して、日夜怠らず学習を続けました。蘭子の成功を聞きつけ、同会の会員や卒業生が集まるようになり、同会の支部が結成されます。支部会員は定期的に交流を続けて互いに学習を助け合いました。そして、蘭子は女子高等師範学校に入学することを決意します。それは、高等女学校の通学課程で学んだ女性より、却って講義録等で独学した者が確実な知識を備えていて、实际的であるという評価があることを知ったからです。ここに何か教育方法等の原因があり、この原因を明らかにするには教育者になるしかないと考えました。

以上がこの作品のあらすじです。小説の体裁をとる形でロールモデルの蘭子を通して同会の理想像が描かれています。

また、この作品の中では、学習の方法に注意するようにと具体的に項目を挙げて呼びかけられています。その一つを紹介すると、“一時に多くを学ぼうとせず、少しずつ継続して学習し確実な知識を得るようにすること。その次に復習をして、応用することが大切である”ということが述べられています。現代でも通用する見解といえるでしょう。

『家庭楽』は1907年11月頃までは誌名が確認できます。以降は後継誌の『大家庭』がその機関雑誌的役割を担ったようです。「大家庭」はちょっと聞き慣れない言葉かもしれませんが、当時、小集団や学校、国家などを形容して「大家庭」と表現することがあったようです。『大家庭』は、1908年8月頃に『女子学芸雑誌』と改題されますが、この時期には牧口は病を患っていたようで同会から離れています。



『高等女学講義』1学年分のテキスト。同研究所所蔵。

通信教育の興隆

1907年2月刊の『学生タイムス』（学生タイムス社）には、「各種講義録の反面」という記事が掲載されており、大学や各分野の講義録を批評しています。その中で大日本高等女学会のほか大日本女学会、大日本淑女学会、帝国高等女学会、家庭女学会といった女子通信教育の各団体も取り上げられています。

記事によると大日本高等女学会は「講義の内容平易にして懇切趣味をも具備し編輯の苦心思ひやらる。また時々府下に会員の集会を催し質疑応答実地演習をなしつゝありとか。信用するに価す。」（天使救世軍「各種講義録の反面」（『学生タイムス』第2巻第3号、学生タイムス社、1907年2月、10頁）と当時のほかの女子通信教育団体と比べても高い評価を得ていたようです。各団体の修学期間は多少違いがあるものの、1年～2年間となっています。通学課程の高等女学校は4年制なので、その約半分の期間で同程度の内容を学ぶことができます。いつでも、どこでも学べる通信教育は、学ぶ機会を得ることができなかった女性にとって希望の存在だったのでしょう。また、それは女性に限った話でもありません。同時代の新聞、特に地方紙を見ると、ほぼ毎日と言ってよい割合で、大学講義録等の通信教育の広告が掲載されているのを確認することができます。それだけ反響が大きく、需要の見込める事業だったということが言えるでしょう。



大日本高等女学会が発行した雑誌。同研究所所蔵。

半日学校制度論

牧口常三郎は、従来の一日の内容を半日で修めるようにし、半日学び、半日働くという「半日学校制度論」を1932年に出版した『創価教育学体系』第3巻の中で提唱しています。創価教育学の研究は、一日の内容を半日に修めることができるようにするためにありました。この半日学校の構想を牧口はすでに1906年に『教育界』（金港堂）という教育雑誌の中で語っています。大日本高等女学会を立ち上げた翌年の事です。牧口は、どこから一日の内容を半日で修めることができるという根拠を得たのでしょうか。一つの仮説として、大日本高等女学会ならびに通信教育の成果によるものということが考えられます。実際に、大日本高等女学会では、通学課程で4年間をかけて学ぶ高等女学校の課程相当の内容を、2年間あるいは1年半で修学することに成功していたわけです。もちろん、成功事例ばかりではないと思いますが、牧口が、この成功の原因を究明して教育界に貢献しようとしていた、という見方はあながち的はずれとも言えないでしょう。そのように仮説を立てて「小説蘭子」を読むと、蘭子と牧口の問題意識が通底していることに改めて気づかされるわけです。

3. 若き戸田城聖とその時代

若き戸田城聖

戸田甚一（後の戸田城聖）は、1900年2月11日に石川県江沼郡塩屋村（現在の加賀市塩屋町）で生まれました。1904年には、家族と共に北海道の厚田村（現在の石狩市厚田区）へ移住しています。1906年には、厚田尋常高等小学校尋常科に入学し1912年に同校尋常科を卒業しますが、ちょうどこの時期に、6年制の義務教育が成立しました。1900年の小学校令改正によって保護者は学齢児童を就学させる義務を負うことになり、公立小学校の授業料は原則無償になったことで、学齢児童の就学率は9割以上になりました。小学校の普及と就学率の上昇を背景に、1907年の小学校令改正で義務教育の期間は4年間から6年間に延長されます。

甚一は、尋常科を卒業後、高等科に入学。1914年に高等科を卒業した後は、厚田村で家業を手伝い、その後、家族の勧めで札幌の小六商店に入社します。小学校を卒業した14歳から18歳まで間には、商業的大成を志した甚一の人知れぬ奮闘がありました。最終的には商業で身を立てたいのですが、目先の進路として、学問を修めて教員の道を行くという選択肢もあり葛藤しています。また、1914年に日本は第一次世界大戦に参戦し、1918年に大戦が終結しました。世界の動乱の中で、働きながら学び、人生の分岐路で懊悩し、自分の使命の道を切り開いていく軌跡が彼の手記には刻まれています。

1917年に尋常小学校准教員検定試験を受験し合格。1918年4月に小六商店を退社した後は、夕張町で小学校の教員を務め、尋常小学校本科正教員検定試験にも合格しましたが、向学心のままに1920年に上京。この頃から甚一は自身のことを城外と名乗ります。上京後、東京での職を得るために当時西町小学校で校長を務めていた牧口常三郎と出会うことになります。この出会い

から、数々の苦難を共にした牧口と戸田との間には師弟関係が形成され、戸田のその後の人生を導くことになりました。

小学校の教員として職を得る傍ら、受験予備校に通い、1922年に高等学校高等科入学資格試験に合格。小学校を退職後、牧口の助言により、幼稚園の一室を借りて補習塾を始めます。1925年に中央大学予科第一部に入学し、間借りしていた幼稚園の近くに、補習塾の建物を建てて「時習学館」を開設。1928年に中央大学予科第一部を卒業し、本科経済学部に入學。

1927年頃から新聞等では中等学校入学試験の「入学難」、「試験地獄」が盛んに報道されるようになります。その対応として、文部省は1927年に中等学校の試験を全廃し「考査」に改めます。入学者の選抜は、出身小学校長の報告書である「内申書」、口頭試問による人物考査、身体検査の3つの方法で行われることになりました。しかし、この変更によって「試験地獄」が終わることではなく、新たな混乱も生み出しました。戸田はこの状況に対して1929年に『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂）で一石を投じました。

1930年3月に牧口の教育学理論の普及を支援する創価教育学支援会が発足した頃、戸田は中央大学を中退しています。戸田は『創価教育学体系』の編集・出版に全力を以て応えました。また同年6月には、ベストセラーとなる戸田城外著の『推理式 指導算術』（創価教育学支援会）を出版しました。同書背表紙タイトルの「推理式 指導算術」の上部には「創価教育学原理による」という文章が記載されています。同年11月に『創価教育学体系』第1巻（創価教育学会）が出版されますが、その前に、創価教育学を応用した成果が戸田の手によって、一早く世に送り出されているのです。『推理式 指導算術』に序文を寄せた牧口は次のように述べています。「余の説かんとする所は、理論上の確信に止まつて其の真理の実証は未だ余の企図する能はざる所なりしも、兼て余の学説を支持せられたる戸田城外氏が多年の経験を包容せる本書によりて我学説の万遺憾なき実証と普遍性を見しは余の最も愉快とするところである。」（牧口常三郎『牧口常三郎全集』第9巻、第三文明社、1988年、204頁）。



『推理式 指導算術』の表紙と背表紙。同研究所所蔵。

入学試験と学歴主義の時代

日本は「入学試験」の国と言われています。中等教育から高等教育まで上級学校への進学に入学試験がつきまとうのは日本特有のことのようです。主な理由として2つのことが挙げられます。ひとつ目は小学校から大学まですべての段階の学校が一斉に作られてしまったために、上級の学校はそれぞれ独自に学校の教育レベルに合わせて入学者を選ぶ必要があったこと。ふたつ目は入学定員の問題。つまり、学校教育全体の未発達による過渡的な選抜の方法として入学試験が始まったということです。

そして、明治末頃には入学試験が学歴主義と結び付き、永続的な制度として根を下ろしていきます。学校の発行する卒業証書（学歴）は、企業によって採用等の基準として利用されるようになり、企業への就職をめざす若者は、よりよい学歴を求めて学歴獲得競争の中に身を投じていきました。こうして入学試験が学歴獲得競争の場に変質していきます。

明治末期から大正初期には高等小学校を卒業して上級学校に進学するのは2割程度でした。中等学校に行けない高等小学校卒業生のエネルギーのはけ口として、働いて学資を得て学問をする「苦学」、中学校講義録などの通信教育による「独学」のブームが起きました。とはいえ、どちらもその多くが脱落していく困難な道でありました。「苦学」の典型的なルートは、上京し遊学するというものですが、当時盛んに出版されていた苦学ハウツー本のおかげもあってか、東京に人のつながりが全くない状態でも「苦学」が可能になっていました。

中学校講義録は上京遊学できない者、上京の準備中の者によく読まれていたようです。また、試験の内容が中等普通教育程度である尋常小学校准教員検定試験、尋常小学校本科正教員検定試験のテキストとしても利用されています。若き日の戸田も手に取ることがあったのかもしれません。

戸田甚一の学び

小六商店での戸田の主な仕事は荷車に商品を積んで得意先の小売店に届けることでした。就業時間の前後で勉強し、働きながら学び続けました。また仕事を大急ぎで終わらせて、野原へ行って荷車を放り出して、寝転んでよく本を読んでいたようです。自分の目的と現状とのギャップに悩む中でも、本を読み続けています。後年彼は、「青年よ、心に読書と思索の暇をつくれ」という文章を発表しますが、その中で次のように述べています。「読書と思索のない青年には、向上がない。青年たる者は、たえず向上し、品位と教養を高めて、より偉大な自己を確立しなければならぬ。それがためには、吾人は、「読書と思索をせよ」と叫ぶものである。（中略）一日を総計すれば、一時間や、二時間の読書の時間は、必ずあるはずである。また、二十分や三十分の思索の時間は、ないとはいえない。ただし、問題はその習慣をつけるか、つけないかということにある。」（戸田城聖『戸田城聖全集』第1巻、聖教新聞社、1981年、158～159頁）。この言葉は戸田の経験を踏まえたものと考えられます。思索するには読書が不可欠です。読書の習慣は、思索の習慣でもあるのです。戸田が働き、思索し、学んだ軌跡は前述の手記にも見受けられます。読書と思索の習慣が戸田の青年時代を形成していったと言えるでしょう。

4. 戸田城聖と通信教育

戸田の教育事業

戸田甚一（城外）は、牧口常三郎の『創価教育学体系』の出版を支えながら、数々の教育事業を行っています。その一つに「時習学館」があります。元は幼稚園の一室で始めた補習塾でしたが、1925年に幼稚園の近くに建物を設けて本格的な塾経営に取り組みました。基本的には受験志望の小学生を対象に補習授業を行っています。1929年頃の「時習学館」の通知簿には「小学校中等学校の補助機関として最前の努力を尽すと共に、吾人自らも教育革新の大旗^{たいはひ}を高く掲げて聊か我が国教育の進展に貢献せんとするものである」（『創価教育の源流』編纂委員会編『評伝戸田城聖』上巻、第三文明社、2019年、185頁）と、その目的が掲げられています。前述の戸田城外『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂、1929年）および同著『推理式 指導算術』（創価教育学支援会、1930年）も「時習学館」での経験を基に執筆されたものです。「時習学館」では中等学校への進学希望者のために模擬試験を始め、1929年頃には「時習学館」以外の生徒にも対象を広げた「東京府総合模擬試験」を主催しています。

また、戸田は1929年に出版社である城文堂（1934年に日本小学館と社名を改める）を設立します。この出版社からは、現在確認できている範囲ではありますが、数十冊の学習参考書を出版しています。その多くは、戸田が1930年に出版したベストセラーの『推理式 指導算術』の「推理式」を各科目に応用したものです。読方、理科、歴史、地理等の科目で推理式の学習参考書や学習帳が出版されています。さらに、1930年には教員らを対象にした教育雑誌『新進教材 環境』を刊行します。同誌は、『進展環境 新教材集録』、『新教材集録』、『新教』、『教育改造』と順に改題を重ねますが、『新教』辺りからは創価教育学会のメンバーの機関誌的な位置づけになっていきます。この教育雑誌には、創価教育学に基づいた学習指導案も複数掲載されました。さらに1940年には、子どもを対象とした月刊の学習雑誌『小学生日本』（五年生用と六年生用）を刊行しました。

戦時下の学習雑誌

戸田はなぜ戦時下において学習雑誌を刊行したのでしょうか。そもそもこの時期に雑誌を刊行すること自体極めて困難なことでした。用紙の確保や検閲といった幾重もの制約を乗り越えなければ成すことのできない事業です。『小学生日本』が創刊された1940年は「紀元二千六百年」や「八紘一字」といった戦意昂揚のスローガンが巷にあふれ出す画期であり、もちろん学校教育にも戦時下の影響が色濃く表れています。学帽は戦闘帽に、制服の色も国防色（茶褐色）になっていきます。翌年4月に小学校は「国民学校」と改称され、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的」（国民学校令第1条）とする教育が行われるようになります。そして同年12月には日本軍の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まるのです。

『小学生日本 五年』創刊号に掲載された戸田の「創刊号のことば」には、「『小学生日本』は、

楽しんで読んでためになる読物と、読む学習と一緒に問題を解きながら記入して行ける勉強室を持つ、新しい雑誌です。新しい時代には、新しい精神の糧が必要です。」(『小学生日本 五年』第1巻第1号、日本小学館、1940年1月、1頁)とあります。

この「勉強室」とは誌上では「明るい教室」または「明るい勉強室」と名づけられています。『小学生日本 五年』創刊号を見ると、「明るい教室」には、小学五年程度の修身科、読方科、算術科、国史科、理科、地理科、綴方科、図画科の内容と問題が掲載されており、読者は問題を解いて記入することができます。また、「明るい教室」の内容についてのみでなく国定教科書についての質問もすることができ、各科の担当者と郵送でやりとりをすることができました。各科のほかには「休憩室」が設けられ、室内のあそび、クイズ、マジックの手引き、笑い話等が紹介されています。「明るい教室」の最後には、切り取り線の入った「誌上考查問題」が付いています。力試しに問題を解いて切り取って応募すれば、点数によっては、メダルや記念品をもらうことができます。応募した解答も返送用の切手が同封されていれば、添削して、指導・批評した上で返送するといった懇切丁寧なものでした。「誌上考查問題」の参加者は次第に増えていき毎回12000人を超えるまでになっていきます。この「明るい教室」は、誌面の約3分の1を占めています。まるで、かつてどこにでもあった“明るい教室”を誌上で再現しようとしたかのようです。

戦時下文学・戦時下ジャーナリズム研究家の高崎隆治氏は、戸田の学習雑誌事業を「教育が崩壊を始めたというより、崩壊した瓦礫の中に放り出される子どもたちをどうやって救出するか、一人でも二人でも救うにはどうすればいいかというのが、この時の戸田城外の緊急の課題であった」(高崎隆治『戸田城聖 1940年の決断—軍国教育との不屈の闘い』第三文明社、2002年、110頁)と位置づけています。戦時下の教育の崩壊を目の当たりにした戸田は、なんとしても子どもたちに“新しい精神の糧”を贈りたかったのでしょう。とはいえ、それは容易な道のりではありませんでした。子どもたちに「明るい教室」を届けるためには、用紙の調達はもちろん、内容についても検閲を乗り越えるために様々な苦心があったと推測されます。執筆者の選択にはじまり、目次の編成、時局読物や枕詞として国家を礼賛する文言を入れるなど、戦時下で雑誌を発行するための妥協を最小限にしながら、子どもたちに“新しい精神の糧”を届け続けました。1940年10月に『小学生日本』は、「五年生用」と「六年生用」を統合せざるをえなくなってしまう。「誌上考查問題」は「誌上常識考查問題」として誌面に残りましたが、各学年の内容に応じて掲載されていた「明るい教室」は誌面から無くなってしまいました。それでも戸田は「明るい教室」を諦めませんでした。別冊附録として作成し、送料分の切手を同封して申し込めば、各学年用の「明るい教室」が子どもの元に届くようにしています。

しかし、戦時統制の下で学習雑誌を刊行し続けるのは至難であったのでしょう。『小学生日本』は1941年に『小国民日本』、1942年頃に『少国民日本』と誌名を変え、1942年4月頃に廃刊になり、戸田の学習雑誌事業は2年余りで幕を閉じました。



『小学生日本 五年』および『小学生日本 六年』の第1巻第1号。同研究所所蔵。

戦後の通信教育事業

戸田は、1943年7月6日に治安維持法違反および不敬罪の容疑で検挙されます。同日に牧口も同容疑で検挙されています。獄中生活は続き、牧口は1944年11月18日に獄中で逝去。戸田は、1945年7月3日出所した後「城聖」と名乗るようになります。同年8月15日に日本は敗戦を迎え、そのわずか5日後の8月20日に戸田は日本正学館の事務所を開き、通信教育の事業に着手しました。戦後に戸田が初めて手を付けた事業が通信教育でした。戸田が始めた通信教育の内容は、当初は、中等学校程度の数学と物象（物理・化学・鉱物学など）の学び方、考え方、解き方を教えるものでした。教科書の主要問題を月2回解説し、月1回試験問題を添削する。そして、この解説を綴じ込めば参考書となるように配慮されています。翌年には、英語の読み方、話し方、作り方も追加されました。翌年には、高等学校・専門学校の入試添削も始めました。反響は大きく、多数の応募が殺到しました。全国紙・地方紙にも何度も広告を掲載しています。

戸田の弟子である池田大作は、戸田の真実を描いた小説『人間革命』において通信教育の事業を始める際の心境を次のように吐露させています。「戦争が、どれほど最悪になろうと、あるいは敗戦という事態にいたったとしても、ひたすら太陽に心に向ける無垢な少年たちの向学心を、彼は信じることができた。学問に渴いている少年たちの心を、彼は思いやった。“渴ききっている心に、学問を送ろう。それには、現状において通信教授以外に方法はない”」（池田大作『人間革命』第1巻、聖教ワイド文庫、2013年、70頁）。

戸田は『小学生日本 五年』の「創刊のことば」で「新しい時代には、新しい精神の糧が必要です。」（前掲『小学生日本 五年』第1巻第1号、1頁）と述べていますが、戦時下で教育が崩壊した暗い時代も、終戦直後の混迷の時代も一貫して子どもを信じ、子どもに“新しい精神の糧”を届け続けました。その手立てが通信教育でした。戸田の心はどこまでも子どもたちに寄り添うものであったのです。

5. 若き池田大作とその時代

若き池田大作

池田太作（後に大作に改名）は、1928年1月2日に東京府荏原郡入新井町（現在の東京都大田区大森北二丁目）に生まれました。1934年には、羽田第二尋常小学校へ入学し、1940年に同校を卒業します。同年4月に羽田高等小学校へ入学しますが、在校中に羽田高等小学校は、萩中国民学校と改称されます。国民学校令により1941年4月から小学校（尋常科6年間・高等科2年間）は国民学校へと変わりました。これは、単に名称の変更に留まらない変化で、初等教育が戦時体制の下に刷新されたことを意味しています。同年12月には太平洋戦争が始まります。国民学校の教育は、「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」（国民学校令第1条）とあるように、教育勅語に示された国体の精華と臣民の守るべき道（皇国の道）を修練させることを目指すものでした。

1942年に萩中国民学校を卒業した後は、蒲田の新潟鉄工所へ入社し、同社内の青年学級で学びました。1945年の終戦後、新潟鉄工所は閉鎖され、同年9月に東洋工業学校（1946年5月に東洋商業学校へ改称）の夜間部に中途（二年度）入学をします。戦後、価値観や社会の混迷した状況の中で、青年たちは誰もが、どう生きるかという人生の命題に直面することになりました。また終戦直後は、押さえつけられてきた向学心があふれ出ていたような時期でもあります。戦争で多くのものが失われはしましたが、青年たちは寄り合い、読書会を開くなどして飢えた心を満たしていました。池田もその一人でした。地域に住む青年たちと読書サークル「郷友会」で、ある本の一節の解釈で議論したり、彼らと一緒に、地域の住民や子どもが気軽に本を読めるように貸本屋「草水文庫」の運営も行いました。その頃、友人から「生命哲学についての会」があると誘われて参加し、出会ったのが生涯の師となる戸田城聖です。1948年3月に東洋商業を卒業後、大世学院政治経済科夜間部に入学し、1949年1月には戸田の経営する日本正学館へ入社します。

当時、日本正学館が刊行していた少年雑誌『冒険少年』の編集を担当しますが、経営状況が悪化し、誌名を『少年日本』に変更するなど、最善を尽くしましたが廃刊となってしまいます。戸田は、既に会社の主力となっていた池田に対し、大学の夜間部を辞めて業務に注力してもらうよう説得しました。代わりに、学問的なことについてはすべて個人教授するからと申し含めて、戸田と池田の個人教授、いわゆる戸田大学が始まります。池田は、戸田大学を振り返って次のように述べています。「私自身、ほとんどの教育を、私の人生の師・戸田城聖の個人教授から受けました。／約十年の間、毎朝、そして、日曜日は朝から一日中、個人教授を恩師から一対一で、歴史、文学、哲学、経済、科学、組織論等々、万般にわたって受けたのであります。」（池田大作『池田大作全集』第101巻、聖教新聞社、2011年、427頁）。

戦後日本の大学通信教育

戦後、1947年の教育基本法によって教育の機会均等が明記され、大学等の高等教育に対しても門戸が開かれることになりました。大学通信教育は、同年の学校教育法第45条の「高等学校は、通信による教育を行うことができる」を同第70条より大学に準用させるところから始まり、「通信教育認定規程」、「大学通信教育基準」の制定を経て整備されていきます。戦前においても高等教育における通信教育は講義録という形で行われてきましたが、基本的に大学卒業資格を保証するものではありませんでした。1948年には、法政大学、慶應義塾大学、中央大学、日本女子大学、日本大学における通信教育の開設が認定されます。この段階ではまだ社会通信教育として認定されていたわけですが、1950年3月14日付で、この5校に玉川大学を加えた6校が学校教育法に基づく正規の大学教育の課程として認可されます。ここで初めて、大学通信教育で卒業すれば通学課程と同じく学士号を取得できるようになったのです。こうして働きながら通信教育で学び、大学卒業資格を得るということが可能になり、戦後の勤労青年や戦争によって学業を諦めた多くの青年に迎えられて、大学通信教育は大きな反響を呼びました。

池田大作の学び

若き日の池田の学びの特徴をあえて挙げるとするならば、読書を通じた人格形成と言えるでしょう。池田大作『完本 若き日の読書』（第三文明社、2023年）などを見ても戸田と出会う前から読書家であったことが窺えますし、まさしく戸田大学は読書を通じた訓練の場でもありました。創価大学中央図書館に1997年に開設された池田文庫は池田の約7万冊にわたる蔵書の寄贈がもとになっています。このことから、池田は最初からあらゆる本を自由自在に読みこなしていたかのように想像してしまうかもしれません。しかし、池田が10代後半頃から付けている雑記帳を分析していくと、その想像を修正せざるを得ないことが分かります。前掲『完本 若き日の読書』には、雑記帳に書かれた本の抜き書きが「読書ノート」として収録されています。この「読書ノート」に記載されている本の抜き書きを始めのほうから並べてみると、「一書の人を恐れよ」、「書を読み、書に読まれるな」、「今日の大学は、書籍の蒐集なり」といった読書に関する格言が続きます。順に、ラテン語の格言、出典は不明ですが孟子の「悉く書を信ずれば即ち書無きに如かず」の註釈としてよく用いられる言葉、トマス・カーライルの言葉となります。この格言を3つとも収録している本として該当するのが田中菊雄『現代読書法』（柊谷書店、1941年）という読書ガイド本です。1987年に出版された同書の講談社学術文庫版で解説を書いた紀田順一郎氏によれば、著者の体験に基づいて勉強の仕方が具体的に記されており、戦前や戦後にかけての読書論のほとんどが精神論や自己の読書回想などでお茶をにごす一方で、こうした傾向に飽き足らない独学者（自ら学ぼうという人々）に熱い支持を受けていたようです。当然、手にした読書ガイド本は他にもあるでしょうが、10代後半頃の池田が、自分の人生と向き合い、読書を始めるに当たって、「何を読むか」、「どう読むか」について優れたガイドを必要としていたと考えるのはごく自然なことと考えられます。田中菊雄は同書の中で次のように述べています。「今日の大学は書

籍の蒐集なり」といつたカーライルの一言の意義は深い。今日は如何なる業務に従事しようと、如何なる山間僻地に居らうと、書籍によつて大学教育を受け得るのである。(中略) されば各人は自らの置かれた境遇に於て、職域に於て、迷ふことなく、自己に最善の大学教育を自らの手を以て自らのために獲得すべきである。而うして之を可能ならしむるものは実に書籍である。」(前掲『現代読書論』柁谷書店、1941年、24～25頁)。この言葉は現代の大学教育を考える上でも重要と言えるでしょう。



田中菊雄『現代読書法』柁谷書店版と講談社学術文庫版。筆者所蔵。

6. 池田大作と通信教育

池田の教育事業

牧口常三郎は戸田城聖と共に、創価教育学の樹立と普及を目指し、著述活動や講演等を行っていますが、自身の教育学理論を基にした学校設立についても次のように語っていたようです。「将来、私が研究している創価教育学の学校を必ず僕が、僕の代に設立できないときは、戸田君の代で作るのだと、小学校から大学まで私の研究している創価教育学の学校ができるのだ。」(『月報』『牧口常三郎全集』第6巻、第三文明社、1983年、6頁)。

学校の設立を託された戸田は、少年雑誌事業から撤退し、自身の経営が最も厳しい状況の中、日本大学の食堂で大学設立について「大作、創価大学をつくろうな。私の健在なうちにできればいいが、だめかもしれない。そのときは大作、頼むよ。世界第一の大学にしようではないか」(池田大作『青春対話 普及版』2、聖教新聞社、2006年、177頁)と語っています。1950年11月16日のことです。その年は、戸田が池田に大学の夜間部を辞めて、業務に注力してもらうよう説得し、個人教授を約束した年でもあります。また、1955年1月22日に戸田は「今に学校をつくるよ。幼稚園から大学まで一貫教育の学校を。日本一の学校をね(趣意)」(『創価教育の源流』編纂委員会編『評伝 戸田城聖』下、第三文明社、2021年、273頁)とも発言しています。

池田大作は、戸田城聖から個人教授という形で約10年に亘って間断なく薫陶を受けてきまし

た。その個人教授は、始業前の早朝の時間を利用して行われることもあれば、実務の中であつたり、移動中であつたり、時には休日の歓談の中であつたりと、時と場所を選ばず、縦横無尽に、常に戸田の人格と共にありました。これを池田は、戸田大学と呼んでいます。

戸田大学の薫陶は、1958年4月2日の戸田の逝去間際まで続けられました。その数年後、牧口、戸田の志を受けついで池田は、自身の「最後の事業は教育である」と定めて、次々と学校設立の具体的な手立てを打っていきます。1964年6月30日に1万人の大学生の前で創価大学の設立を発表し、1965年11月に創価大学設立審議会が発足。1968年に創価学園が開校し、1971年に創価大学が開学します。その後も、池田によって着実に創価教育の学び舎は設立されていきます。

池田は、「「創価教育」、すなわち価値創造を掲げた一貫教育のシステムは、私が受けてきた、[戸田城聖による]このような人間教育を、未来の世代にも贈りたいとの願いを込めて創立したものであります。」(池田大作『池田大作全集』第101巻、聖教新聞社、2011年、408頁)と、述べています。



文學乃池

創価大学通信教育部の「開学」

池田の小説『新・人間革命』第23巻の「学光」の章には、通信教育部の開学と草創期の様子が描かれていますが、できうる限り歴史的事実としても押さえておきたいと思います。池田は、1969年5月3日に創価大学の建学の精神「人間教育の最高学府たれ」、「新しき大文化建設の揺籃たれ」、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を紹介した後に、夜間部あるいは通信教育をなるべく早く開設したいという希望を吐露しています。

大学の理事を務めた岡安博司氏は、「それから、通信教育部についてです。これは何としてでもつくらなければと考えておりました。創立者のご構想は、牧口先生の創価教育の柱である、半日学校制度を現代に具現化する「通信教育部」の開設を一日も早く実現することにあります。それは、時代が強く求める「生涯教育」にも対応する重要課題だったのです。文部省に行き、経・法・文3学部の開設と同時に、通信教育部をつくることにつき相談に行きました。」(岡安博司「創

創価大学の開学を語る一創立者の大学構想を中心に―（『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2005年、178頁）と証言しています。1971年に創価大学は開学と同時に通信教育部を開設するつもりだったのですが、前例が無いため断われ、卒業生が出てから再度申請をすることになりました。ただし、岡安氏は、既設の学部を土台にして通信教育部を作るという前例を踏襲する判断は、開学1年目で通信教育部も開設した場合の混乱を考えると、結果的に間違っていなかったとも述べています。

第1回目の卒業生を待って、ついに1976年5月16日に通信教育部が「開学」します。当日、開学式に池田は参加することが叶わなかったため、通信教育部開学式のメッセージをテープに吹き込んで届けました。「5月16日は、重大な歴史の日となりました。晴れやかな開学式、誠にありがとうございます。また、皆さんの入学を心よりお祝い申し上げます。通信教育部の設置は、創価大学設立の構想を練りはじめて以来の、私の念願でありました。」（池田大作「創価教育体现の第一期生たれ——働きながら学ぶことこそ適切な環境条件——」『学光』第1巻第4号、創価大学通信教育部、1976年7月、3頁、傍点引用者）で始まるメッセージを、原稿の代読ではなく池田自身の声で聞いた通信教育部の第一期生は、感激したそうです。

さらに池田がどれだけ通信教育部を重視していたかを理解するために、「開学」という言葉に着目したいと思います。大学が通信教育部を新たに設ける場合、一般的には「開設」や「設置」などの表現が用いられます。実際、上記のメッセージの中では、通信教育部の「設置」とも表現されているので、見逃してしまいがちですが、池田は、通信教育部を「開学」という位置づけで考えているのです。「開学」は通常、新しく学校が創立される時に用います。池田は通信教育部の20周年特別寄稿で、間違いなくはっきりと「通信教育部の設置は、創立当初からの私の念願で、いわば『第二の開学』ともいうべき慶事でした。」（池田大作「開設20周年特別寄稿 真の教育は働き学ぶ人生の中に」『学光』第20巻第2号、創価大学通信教育部、1995年5月、4頁）と、創価大学の通信教育部を「第二の開学」と意義付けているのです。大学と同じ4月2日ではなく、あえて5月16日に開学式を設けたのも「第二の開学」という意識からだったのではないかと推察することができます。



学光の碑

通信教育部の草創期

池田の開学式のメッセージは、「どうか第一期生の皆さんこそ、通信教育部の創立者であります。それを忘れないでいただきたい。開拓の道は険しくも、その向学の軌跡は、創価大学の名とともに永遠に顕彰されていくことでありましょう。」（前掲「創価教育体现の第一期生たれ——働きながら学ぶことこそ適切な環境条件——」、6頁）という言葉で締めくくられていくのですが、この「皆さんこそ、通信教育部の創立者」という呼びかけは、学生のみでなく教職員をも含むもので、文字通り「創立者」としての奮闘を求めるものでした。

通信教育は、自学自習が基本です。学校に集まる機会は限られています。時間や場所を選ばない反面、通教生同士で顔を合わせることも少ないのです。また普段は、仕事や様々な活動に従事している通教生は、日々の生活に追われて学業が手に付かないことも稀ではありません。通信教育部は、全国に散らばっている通教生をどうやって組織し、創立者の池田に繋げていくのかという難題を抱えて出発していきます。

「創立者」のバトンを受けついで、ある職員は、全国を回って通教生のグループを組織していきます。これが基になって各地に光友会が作られていきます。また、ある職員は当時、大学や周辺に宿泊施設等が整っていない状況を考慮して、大学行事に参加する通教生を自宅に泊めてその奮闘を支えていました。そういった地道な奮闘の連続の中で、池田の通教生への思いが共有されていきました。

池田も「創立者たち」に応えるように、通教生を激励していきます。1976年8月18日、初めて迎えた第1回夏期スクーリングに駆けつけ、各教室を回って「第一期の通信教育の学生として、真剣なそしてまれにみる向学の姿を拝見して、私は創立者として大へんよろこんでいます」、「学長を通じて皆さん方の報告を受けています。私もひとしお大なる期待と、ひとしお大なる応援を惜しみません。私もそういう勉強をしてきました。1年間で普通の学生がやるところを、2週間前後で吸収できるよう努力してください。また来年も再来年もわが母校を愛して、学問を修得していただきたい。大変もり上がった教育であり、学問の最中にお邪魔して申し訳ありませんでした。お体を大切にしがんばって下さい。」、「来年も再来年もわが母校を愛していただき、社会の労働と勉学を一致させてほしい。みごとな理想的な学問、学生としての卒業という栄冠を勝ちとっていただきたい」（「第1回夏期スクーリングダイジェスト」『学光』第1巻第7号、創価大学通信教育部、1976年10月、32～33頁）と声をかけています。

また同日、通教生の代表者らとブロンズ像の前で記念写真を撮っています。池田は、1971年の創価大学の開学に際して、アレクサンドル・ファルギエール作の天使と印刷工、天使と鍛冶職人の2つのブロンズ像を寄贈しました。そのブロンズ像の碑文には、それぞれ「英知を磨くは何のため 君よ それを忘るるな」「労苦と使命の中にのみ人生の価値は生まれる」と刻まれています。理想（天使）と現実（労働者）の調和を象徴するこのブロンズ像は、創価大学の使命を見事に表現したものでした。天使と鍛冶職人のブロンズ像の前で記念写真を撮った通教生のグループは、その碑文から名前をとってその場で「通信使命会」と命名されました。北海道、東北、関東、東

海、中部、信越、関西、中国、四国、九州の各方面の代表として選ばれた男性5名、女性5名のメンバーで、通教生の模範として、連絡を取り合いながら卒業を目指し、卒業後も様々な分野で活躍し、毎年池田にその報告を届けていきました。

夏期スクーリング中に開催される恒例の学光祭も、第1回目は夏期スクーリングに参加してから初めて通教生も学光祭があることを知るような状況でした。そこから「創立者」として彼等は、呼びかけ、集まり、テーマから何からすべてを一から作り上げていきます。準備期間などはありません。スクーリングが始まってから残された日数で準備していきました。通教生および多くの教職員が準備にかかって、ついに1976年8月25日の夕刻に、第1回学光祭は開催されました。簡単に『学光』の誌面からその様子を拾っていくと、まず通教部長、学部長、学長の挨拶があり、創立者の差し入れが紹介されます。司会も玄人顔負けで大盛り上がりの様子です。滝山東寮グループによる大騎馬戦で始まり、朝霧寮グループの朝霧音頭、シュプレヒコールで「全員卒業するぞー!」、滝山南寮グループの応援団、「巨人の星」の主題歌に合わせて珍プレー実演、寮長の決意文朗読。女性職員の花笠音頭、男性職員のソーラン節。第二部は、本館ロビー（文系A棟）で模擬店やゲームコーナー、S201教室では飛び入りの歌合戦。そこには青春の横溢した姿、「創立者たち」の建設の奮闘を讃え分かち合う姿があります。

通信教育部は、孤独に学ぶ通教生を、教職員も学生も一緒になって励まし合いながら、卒業に向かうボートに乗せて、「池田先生の作った大学で学べる」という歓喜の灯火を頼りに、前進していきました。1980年3月には、通信教育部の第1回の卒業生を229名輩出しています。通信教育部の草創期に在籍していたある通教生は、次のように感想をもらしていました。「スクーリングに参加して一番驚いたのは、職員の方たちでしたね。職員の方たちが、とにかく池田先生の代行だと、学生第一、学生を大切に、『池田先生だったら〜?』、そういう思いで通教生に関わり、行動してくださっている姿に感動しました。それが私自身の一番学んだこと、人生の原点になりました（趣意）」。



天使と印刷工



天使と鍛冶職人

機関誌『学光』の誕生

このように、通信教育部の草創期の様子を知ることができたのは、通信教育部の機関誌である『学光』の存在によるところが大きい。『学光』の創刊号は1976年4月1日に発行されました。通信教育部開学式の5月16日より前に誕生しています。ちなみに「学光」という命名は、池田によるものです。岡安氏の証言によれば、教員が集まって、ああでもないこうでもないで機関誌の名前を検討しましたが、意見がまとまらなかったため、池田に話を伝えると「即座に『『ガッコウ』でいきなさい」と。私は驚きました、「創価大学も学校ですが……」と言いましたら（笑い）、創立者は、「そうじゃないんだよ。『学は光』ということだよ。ある哲学者の言った『無学は闇。学は光』の言葉だよ」と。それを委員会にはかりましたが、もう誰も反対せず、『学光』が雑誌の名前になったわけです。今や、「学光」は通信教育部の根本精神を示すモットーとなっております。」（前掲「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」、179頁）という経緯があったようです。創刊号からしばらくは、「学光」はソクラテスの言葉が由来であるという説明書きがあるのですが、実際調べて見ると「学は光」という直接的な言及はありません。池田自身は「かつて私は、牧口先生が愛された「学は光なり、無学は闇なり」との言葉から、通信教育部に「学光」の二文字を贈りました」（池田大作『池田大作全集』第61巻、聖教新聞社、2002年、44頁）と語っています。牧口も「無学は闇、学は光ということばもあるが」（辻武寿編『牧口常三郎箴言集』、第三文明社、1979年、191頁）と述べており、どちらの言及も牧口がよく口にしていた言葉ではあるものの牧口自身が作った言葉ではないことを示唆しています。名言辞典などでは、ロシアの諺や、ツルゲーネフの『処女地』が出典となっていることが多い言葉です。由来はともかく、池田は、次のように意義づけています。「「学光」——学の光をもって、わが人生を、そして、社会を照らしゆくのだ。それは、創価大学の通信教育を象徴する永遠の指針が決まった瞬間でもあった。」（池田大作『新・人間革命』第23巻、聖教ワイド文庫、2015年、124頁）。



機関誌『学光』創刊号と、開学式のメッセージが掲載された第1巻第4号。同研究所所蔵。

おわりに：創価教育における通信教育の意義

「創価教育と通信教育の歴史」というテーマを執筆するに当たって、先行研究として参考にしたのは、塩原将行「創立者の大学構想についての一考察(1) 通信教育部開設構想とその沿革」(『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2006年)です。1978年に創価大学通信教育部の職員となった塩原氏は、それから7年間学生係として通信教育部に尽くし、その後2000年に開設された創価教育研究センターでは初代事務長に就任しました。広汎な資料収集を基に、牧口・戸田・池田の基礎的研究の土台を作ろうとした塩原氏の研究成果の一つが同論文になります。この論文では、池田の開学式のメッセージを分析し、創価教育における通信教育の特色として、①すべての人々に開かれた大学、②働きながら学ぶ学習形態、③通信教育と人間教育、の3点を挙げて考察しています。

ここでは、この3点を踏まえつつ、池田が通信教育部を「第二の開学」と位置づけたことに着目して考察します。創価大学は1971年に開学しますが、その同時代的な背景として、大学紛争があります。大学紛争は、大学当局と学生の対立を主要因とする紛争ですが、1960年代には過激化の一途を辿ります。池田は、この大学紛争における学生運動を単なる世代間闘争や政治闘争ではなく、既存の大学の在り方や社会の矛盾と不合理への反発として捉えていました。創価大学は、大学紛争の暴風が吹き荒れる最中に、新しい大学として出発します。池田は、この新しい大学の特色として、教授陣は青年のような研究意欲を持ち教育に生命をかけて取り組む人を中核にして構成すること、教授と学生の関係はともに学問の道を歩む同志的なもので民主的な関係であること、学内運営は学生参加の原則を実現することなどを述べています。創価大学が新しい大学として開学した5年後に、通信教育部は「第二の開学」として誕生します。

池田が通信教育部の「開学」後に語った「これで創大も人材育成に本腰が入る」(『学光』第1巻第9号、創価大学通信教育部、1976年12月、32頁)、第1回秋期スクーリングでの「この人達の中からダイヤモンドのような人達が出てくる可能性が高いのです」(同31頁)という発言からも通信教育部への期待の高さが窺えます。

これまで述べてきた牧口・戸田・池田の人物および歴史をふまえて通信教育の意義を3点挙げておきたいと思います。まずは、①学校教育の崩壊に対するセーフティーネット、という点です。学校教育は、時代の要請等により干渉や制限がかかることも少なくありません。また、特定の場所・時間を条件とするため、経済的負担と強制力を必要とします。自学自習を基本とする通信教育は、経済的負担と強制力も控えめで、教材さえあれば学習のタイミングや方法も比較的自由に選べます。さらに、人的・外的な事情によって学校教育が崩壊するようなことがあったとしても、通信手段と教材さえあれば、学習の最終的な受け皿として機能することが可能です。

次に、②誰にでも開かれた教育のシステム、という点です。かつては学校教育、特に大学は、一部のエリート層や富裕層のものであって、誰にでも開かれていた訳ではありませんでした。近代学校教育が始まって以来、それを年齢・性別・所属等を問わず誰にでも開かれた教育にしていこうと工夫されていったのが通信教育というシステムです。特定の場所・時間を必要とする教育

は、何かしらの変数をもって選抜せざるを得ないのです。

最後に、③生活との強いつながり、という点です。牧口の考えた創価教育学では半日学校制度が提唱されます。この制度の現実態の一つの在り方として、通信教育は想定されています。生活から出発し、研究（真理の認識・価値の創造）を経て、生活に還元していく。このサイクルによって幸福な生活を獲得していく。そのために生涯に亘って学習生活と実際生活を並行していくことが、半日学校制度の意義です。

創価大学が新しい大学として出発した後、創価大学としての共通性を保ちながら通信教育の意義を備えて「第二の開学」を果たした通信教育部も、2026年5月16日に50周年の節目を迎えます。本稿が、次の半世紀に向けて「創立者」のバトンを受けついでランナーたちへのエールになれば幸いです。



新光友ポスト

<引用・参考文献>

天野郁夫『教育と近代化』玉川大学出版部、1997年

天野郁夫『学歴の社会史—教育と日本の近代—』平凡社、2005年

天野郁夫『増補 試験の社会史—近代日本の試験・教育・社会—』平凡社、2007年

池田大作『池田大作全集』第61巻、聖教新聞社、2002年

池田大作『若き日の日記』〔1〕、聖教ワイド文庫、2005年

池田大作『青春対話 普及版』1・2巻、聖教新聞社、2006年

池田大作『新・人間革命』第15巻、聖教ワイド文庫、2007年

池田大作『池田大作全集』第101巻、聖教新聞社、2011年

池田大作『人間革命』第1巻、聖教ワイド文庫、2013年（第2版）

池田大作『新・人間革命』第23巻、聖教ワイド文庫、2015年

池田大作『私の履歴書』聖教ワイド文庫、2016年

池田大作『完本 若き日の読書』第三文明社、2023年

伊藤貴雄・岩木勇作・川口雄一「池田大作における「若き日の読書」の予備的研究—「読書ノート」と創価大学池田文庫とをめぐって（1）」（『創価教育』第16号、池田大作記念創価教育研究所、2023年）

池田大作記念創価教育研究所編「池田大作における「若き日の読書」の予備的研究—「読書ノート」と創価大学池田文庫とをめぐって（2）」（『創価教育』第18号、池田大作記念創価教育研究所、2025年）

岩木勇作「牧口常三郎のペンネーム「澎湃」名義の作品について」（『創価教育』第17号、池田大作記念創価教育研究所、2024年）

岩木勇作「戦後東京都大田区の青年文化運動—池田大作のベートーヴェン講義に着目して—」（『創価教育』第18号、池田大作記念創価教育研究所、2025年）

岩木勇作「池田大作の「師弟」観——普遍的な教育論としての「師弟」——」（『東洋学術研究』第64巻第1号、東洋哲学研究所、2025年）

岡安博司「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」（『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2005年）

「学光」編集委員会『学光』創価大学通信教育部、1976年4月～1980年6月刊行の各号および1985年5月号・1995年5月号

斎藤正二『若き牧口常三郎』上巻、第三文明社、1981年

佐藤秀夫『教育の文化史1 学校の構造』阿吽社、2004年

塩原将行「創立者の大学構想についての一考察（1）通信教育部開設構想とその沿革」（『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2006年）

塩原将行「戸田城外著『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（1）～（3）」（『創価教育』第3～5号、創価教育研究所、2010～2012年）

- 塩原將行「池田大作が“戸田大学”で学んだこと」(『創価教育』第15号、2022年、池田大作記念創価教育研究所)
- 菅原亮芳「『独学』史試論—中学講義録の世界をめぐって—」(寺崎昌男編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規、1993年)
- 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 牧口常三郎』第三文明社、2017年
- 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 戸田城聖』上・下巻、第三文明社、2019・2021年
- 創価大学50年の歴史編集委員会編『創価大学50年の歴史』創価大学、2021年
- 高崎隆治『戸田城聖1940年の決断—軍国教育との不屈の闘い』第三文明社、2002年
- 竹内洋『立志・苦学・出世—受験生の社会史—』講談社現代新書、1991年
- 田中菊雄『現代読書法』舵谷書店、1941年
- 田中菊雄『現代読書法』講談社学術文庫、1987年
- 天使救世軍「各種講義録の反面」(『学生タイムス』第2巻第3号、学生タイムス社、1907年)
- 東洋商業五十年誌編纂委員会編『東洋商業五十年誌 附東洋商業卒業生名簿』東洋商業高等学校、1956年
- 戸田城外編『小学生日本 五年』第1巻第1号、日本小学館、1940年
- 戸田城外編『小学生日本 六年』第1巻第1号、日本小学館、1940年
- 戸田城外編『小学生日本』第2巻第8号、小学生日本社、1940年
- 戸田城外編『小国民日本』第2巻第12号、小国民日本社、1941年
- 戸田城外編『少国民日本 国民学校上級生』第3巻第10号、少国民日本社、1942年
- 戸田城聖『若き日の手記・獄中記』青娥書房、1970年
- 戸田城聖『戸田城聖全集』第1巻、聖教新聞社、1981年
- 豊原南村「小説蘭子」(『高等女学講義』(第5回)第2学年第3号、大日本高等女学会、1907年)
- 日本大学百年史編纂委員会編『日本大学百年史』第3巻、日本大学、2002年
- 辻武寿編『牧口常三郎箴言集』第三文明社、1979年
- 牧口常三郎『牧口常三郎全集』第6巻、第三文明社、1983年
- 牧口常三郎『牧口常三郎全集』第9巻、第三文明社、1988年
- 文部省編『学制百年史』本編・資料編、帝国地方行政学会、1972年
- 安田生「教育茶話会記事(第拾三回)」(『教育界』第5巻第5号、金港堂、1906年)
- 山中恒『ボクラ少国民』辺境社、1974年
- 悠木夏文『シリーズ「大学は挑戦する」創価大学』栄光教育文化研究所、1996年
- 石神豊氏へのインタビュー(2025年9月9日)
- 稲光禮子氏、坂本安氏、藤原秀二氏、田中真弓氏、依田文雄氏へのインタビュー(2025年9月20日)
- 創大名所マップ <https://www.soka.ac.jp/edu/document/spot/> (2025年11月25日閲覧)
- ※大学キャンパスの写真はすべて筆者撮影(2025年11月25日)。執筆にあたり、ご協力いただいた関係者各位の皆様はこの場を借りて感謝申し上げます。

斎藤正二と牧口常三郎研究

——回想・方法・継承——

塩原 将行・牛田 伸一・岩木 勇作・伊藤 貴雄

シンポジウムの趣旨

伊藤 それでは、「創価教育論」の授業を始めます。これまで牧口常三郎の思想について何度か講義が行われてきたと思いますが、今回は、改めて、この「創価教育論」という授業で扱っている研究内容を、そもそもどのような方法で研究するのかという点に焦点を当て、シンポジウム形式で考えてみたいと思います。

本日のテーマは「斎藤正二の牧口常三郎研究」です。ご登壇いただく皆様は、さまざまな意味で牧口研究を牽引してこられた現役の研究者です。はじめに、本日の登壇者をご紹介します。

まず、塩原将行さんです。創価教育研究の客員研究員であり、『評伝 牧口常三郎』という決定版とも言うべき牧口常三郎の伝記を著された方です。

次に、牛田伸一さん。教育学部教授、教育学研究科長であり、『教育的教授論における学校批判と学校構想に関する研究』など多くの著作があります。

続いて、岩木勇作さんです。東洋哲学研究所で研究員をされており、『近代日本学校教育の師弟関係の変容と再構築』というご著書があります。

私は文学部教員で、図書館長をしています。専門は哲学・思想史です。最近、『哲学するベートーヴェン』という本を出しました。今日は司会を兼任します。

それでは本題に入ります。今日は「斎藤正二」という人物に焦点を当てます。斎藤正二は牧口研究の第一人者と言われた方ですが、創価学会の会員ではありません。著名な教育学者で、第三文明社版の『牧口常三郎全集』を編集した人物です。1925年生まれで、今年はちょうど生誕100周年にあたります。2011年に85歳で亡くなられ、没後すでに15年近く経過し

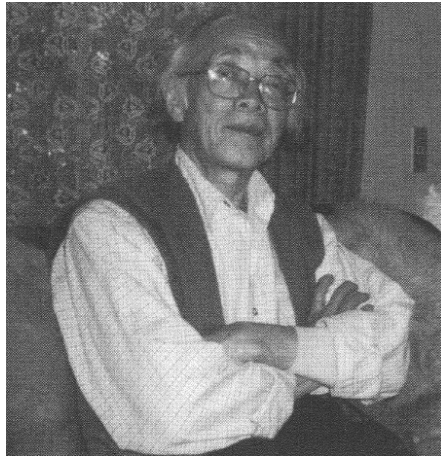
Masayuki Shiohara（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

Shinichi Ushida（創価大学教育学部教授）

Yusaku Iwaki（創価大学）

Takao Ito（創価大学文学部教授）

本稿は2025年10月20日に大学科目「創価教育論」で行われたシンポジウムの記録である。本稿の作成に際して、上原淳司氏より校閲ならびに有益な助言をいただいた。



斎藤正二氏近影

『創価大学学生平和論集 第三集』（創価大学学生平和論集編集委員会編）所収

ています。我々は、さまざまな形で斎藤正二の研究上の指導を受けてきた世代でもあります。

斎藤正二略歴

伊藤 まず略歴をご紹介します。斎藤正二は1925年（大正14年）に八王子で生まれ、東京大学文学部を卒業しました。長年にわたり短歌評論を手がけており、日本文学史や短歌史の分野でも名前が挙がる研究者です。『現代日本詩人全集』など、数多くの編集にも携わりました。代表作としては、『「やまとだまし」の文化史』や『日本の自然観の研究』などが挙げられます。また、アラン、ランボー、マーク・トウェイン、ラフカディオ・ハーンなど、英仏文学の翻訳も行っており、たぐいまれな語学力を持っていました。『斎藤正二著作選集』という著作集も刊行されています。

斎藤は半世紀以上にわたって牧口常三郎研究を続けた人物です。補足すると、名古屋大学に提出した教育学博士論文が『日本の自然観の研究』です。この著作では、日本人が古来より自然を愛してきた民族であるという通念を問い直し、日本社会が歴史的に環境破壊を繰り返してきた事実を、文献的に明らかにしました。その問題意識は、水俣病や四日市ぜんそくといった公害問題とも深く結びついており、「自然を愛する」とは本来どういうことなのかを鋭く問い直しています。当時、柳田國男や南方熊楠といった著名な学者の著作に連なる研究として、高く評価された名著です。

斎藤の代表的な研究の一つに、『日本人と桜』という著作があります。桜は日本固有の花だと考えられがちですが、斎藤はその起源が中国、さらに遡ればヒマラヤ付近に由来し、桜は本質的にグローバルな存在であることを強調しました。この研究は桜の文化史研究を代表する業績として、現在でもよく引用されています。

斎藤は日本文化史の研究者であると同時に教育学者でもありました。彼の教育思想史研究

は、従来の教育学が見落としてきた人物を、一流の教育者として再評価する試みでした。たとえば、法律家のモンテスキューや発明家のフランクリンなどを教育思想史の文脈で再評価しています。その中に、牧口常三郎研究も位置づけられました。また、翻訳家・書評家としても知られています。今年放送されている朝の連続テレビドラマ「ばけばけ」では、ラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲が取り上げられていますが、斎藤は『ラフカディオ・ハーン著作集』の編集・翻訳もしています。『怪談』の翻訳でも知られています。

英米文学の分野では、バイロン、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン』や『トム・ソーヤの冒険』なども、斎藤の翻訳で角川書店から刊行されました。なぜこのような学者が牧口研究に取り組んだのかについては、あとのディスカッションで触れられると思いますが、牧口研究において画期的だったのが『若き牧口常三郎』です。牧口が15歳に至るまでの人生を扱った著作で、約700ページの大著です。資料に基づく実証的研究とはどういうものであるかを明確に示し、それまで伝承や噂に依拠していた牧口像を一つ一つ検証し、刷新しました。

斎藤は亡くなる直前まで研究を続け、未刊行論文が約30本残されていましたが、それらは『牧口常三郎の思想』として一冊にまとめられました。これも約700ページ以上の大著です。また、『牧口常三郎全集』（第三文明社、全10巻）を編集し、『人生地理学』や後期教育論集など、重要な巻の校訂・注釈・解題を斎藤が担当しました。この全集自体も、斎藤が長年収集してきた牧口の著作コレクションを基礎に編まれたものです。それ以前は、牧口の著作がどれほど存在するのかを正確に把握している研究者はほとんどいませんでした。

塩原さんをはじめとする後進の研究者が牧口の未発見の論文を発見できたのも、斎藤が切り拓いた実証研究の道筋があったからです。斎藤が担当した『牧口常三郎全集』の脚注では、本文中の語句一つ一つについて、意味や用法を詳細に注記しています。斎藤は漢和辞典の編集にも携わっており、日本語の出典を徹底的に調査しています。本文で説明しきれない内容は補注としてまとめられ、当時の日本語における語義が資料に基づいて解説されています。たとえば『人生地理学』（上）では、全体約600ページのうち、本文が約330ページ、残りの約270ページが斎藤による注釈です。

さらに、紀伊國屋書店の映像シリーズ「学問と情熱」（第33巻）では、福沢諭吉や津田梅子の巻と並び、斎藤正二の監修による「牧口常三郎」巻が制作されました。皆さんもこの授業の冒頭で視聴したと思いますが、英語版やスペイン語版も制作され、海外で牧口を紹介する際の重要な資料となっています。制作からすでに20年ほどが経過していますが、現在も最良の牧口入門の教材です。

以上、簡単ではありますが、斎藤正二という学者の研究業績とその意義の一端をお話ししました。

ここからは、本日は事前に「この点について話そう」といった打ち合わせや、シナリオ、いわゆる仕込みは一切行っていない。さまざまな意味で斎藤正二から学問的・研究的な指

導を受けてきた私たちが久しぶりに集まり、牧口常三郎研究が、斎藤以前と斎藤以後とで、どのように変わったのか、そして今後どのような牧口研究を目指していくべきなのかについて、率直にディスカッションしたいと思っています。

以上で、私のイントロダクションを終わります。

斎藤との出会い

伊藤 それでは、どこから始めましょうか。まず、今日の参加者の中で最初にお会いになったのは、牛田さんでしょうか。斎藤正二は、長年にわたり諸大学で教授を務めたあと、最後に創価大学の教授となりました。その経緯としては、創価大学教育学部に大学院が設置される際、大学院では博士号を持つ教員でなければ教育にあたれないという条件があり、そのために斎藤が招聘されて、教育学部の教授に就任したという事情があります。牛田さんは、ちょうどその時期に教育学部に入学されたのですね。

牛田 そうですね。私が入学したのは1992年で、伊藤先生とは同期になります。

伊藤 僕と牛田さんは同い年なのですが、学生の皆さんからすると、もうずいぶん昔の話ですね。1992年と聞いて、「いつの時代だ」と思う方も多いのではないのでしょうか。

牛田 斎藤先生に初めてお会いしたのは、1994年の秋学期か、あるいは春学期だったと思います。

伊藤 ということは、大学3年生くらいのときですね。

牛田 はい。大学3年生のときに、斎藤先生の「教育哲学」の授業を履修しました。3年生になると専門科目に分かれていきますが、そのタイミングで初めてお会いしたことをよく覚えています。

伊藤 塩原さんは、何年頃でしたか。

塩原 はっきりとした年は覚えていないのですが、八王子駅前に東急スクエアができた年であることは間違いありません。

伊藤 今のオクトーレというビルですね。ああ、思い出しました。駅前にこのビルができる際に、塩原さんが市民向けの大学講座を企画されましたよね。

塩原 はい、そうです。創価大学として初めて、大学の外で市民に開かれた講座を行おうということになり、東急スクエアの中で開催することになりました。その際、ぜひ6月6日に斎藤先生にお願いしたいということで、斎藤先生の子安町のお宅を訪ねたのが、最初の出会でした。

伊藤 90年代の終わり頃でしょうか。

塩原 はい、その頃だったと思います。

伊藤 私はおそらく、牛田さんの翌年ですね。1995年だったと思います。大学4年生のときで、私は文学部でしたから、本来であれば教育学部の授業を取る必要はなかったのですが、自由聴講で履修しました。有名な先生でしたし、やはり非常に博学で、学問的には厳しい方でした。私は、自分を学問的に鍛えてくれる人に出会いたいと思っていました。今では、あのよう

な教育の仕方はあまり行われなくてもいいかもしれませんが、自分の勉強がまだまだ足りないということを実感したくて、圧倒的に打ちのめされるような「巨人」に出会いたいと考えていたのです。そのとき、友人から「それなら斎藤正二の授業を取るといい」と勧められました。ですから、1995年ですね。岩木さんは、いつ頃でしょうか。

岩木 私は、牛田先生や伊藤先生の10年ほど後になります。2004年か2005年頃だったと思います。私は通信教育課程出身で、当時は働いていたのですが、アルバイト先の先輩から斎藤正二という人物を教えてもらい、その論文を読み始めました。読んでみて、この人はすごいと思い、ぜひ実際に会ってみたいと考えるようになりました。

斎藤正二が担当している授業を自分で調べて、2回ほど、いわば潜りで聴講しに行きました。多少質問をしたかもしれませんが、個人的な面識という意味で言えば、直接お会いできたのはその頃です。その後、意思疎通ができるようになり、私のことを認識していただいて、きちんと話ができるようになったのは、さらに2、3年ほど後、2008年頃だったと思います。

伊藤 ということは、もう晩年の頃ですね。80歳を超えておられて、当時は非常勤講師として80歳まで教えておられましたよね。

岩木 その、本当にぎりぎりのところに滑り込んだ、という感じですね。

牧口への傾倒（牛田の回想）

伊藤 ということで、今のところでは、牛田さんが一番関わりが古そうですね。まず牛田さんから、思い出話のようなものをお願いしたいと思います。

牛田 そうですね。どこからお話しすればよいのか、とても難しいのですが、まずは人となりの印象からお話しします。斎藤先生の講義は、一言で言えば、非常に緊張感を伴うものでした。講義中、しばしば強い言葉を用いられることがあり、その意味では「厳しい」「切迫感のある」語り口であったと言えると思います。ただし、それは決して感情的に学生を叱責するというようなものではありませんでした。

もちろん学生に対して注意されることも、まれにはありましたが、それ以上に、世の中そのものに対して怒っておられたという印象が強いです。世の中の在り方について、あれほど強い問題意識と感情をもって語る講義は、当時も、そして今でも、ほとんど聞いたことがありません。

斎藤先生は、必ずその週の新聞記事を取り上げ、それを素材にして教育や哲学の講義をされていました。私自身、その影響を強く受けており、現在でも同じような授業を行うことがあります。社会で起きている具体的な出来事を取り上げ、そこに潜む不正や、あってはならない事態に対する怒りを、真正面からぶつける。その一方で、その怒りは決して感情論ではなく、講義の中で明確な根拠を示しながら展開されていました。大学の講義というものが、社会の現実と深く結びついているのだということを、身をもって教えていただいたという記憶が、今も強く残っています。

大学とは、世の中の問題に目を背ける場所ではなく、むしろその問題から思考を紡ぎ出し、ある種の学問的・科学的知見として消化していく場なのだ、ということを、斎藤先生はご自身の生涯を通じて体現された方だったのだらうと、今振り返って思います。先ほど伊藤先生が紹介された『やまとだまし』の文化史』も、私自身、読むのに非常に苦労しましたが、冒頭から、日本社会が右傾化していく状況への強い問題提起がなされていました。

伊藤 ご自身がお兄さんを戦争で亡くされているので、軍国主義に対する怒りは、晩年に至るまで非常に強いものがありましたね。

牛田 そうした背景も含めて、先生の姿勢は私に非常に大きな影響を与えてくださいました。もう一つ、少し思い出話になりますが、学生に対しても、時に厳しく怒っておられました。これは強く印象に残っているエピソードです。斎藤先生は、創価大学に来ていながら、大学教員を含めて牧口常三郎に関心を持つ人がほとんどいないことを、いつも非常に残念がっておられました。「手に取ったことすらない」と、よく嘆いておられたのを覚えています。

先生には大学の講義用の教科書として出版された著作があるのですが、自身の授業ではそれを用いず、教育哲学の授業では牧口の『人生地理学』をテキストとして、一文一文を丁寧に読みながら解説してくださっていました。当時は、私自身も無知で、そのありがたさが分かっていませんでしたが、今思えば、本当に貴重な時間だったと感じます。しかし残念なことに、当時の学生の多くは、牧口常三郎について、「名前は知っている」「すごい人らしい」「信仰へ導く人」といった程度にしか理解しておらず、学術研究の対象として捉える人は、ほとんどいませんでした。

そのため、『人生地理学』を読む授業であっても、教科書として購入してくる学生がほとんどいなかったのです。それを知ったとき、斎藤先生は大変お怒りになりました。なぜそれに気づかれたかという、後ろの席で「内職」をしている学生がいたからです。今で言うスマートフォンは当時ありませんでしたから、「内職」といえば、別の勉強をしているか、あるいは別の新聞か何かを読んでいる、といった光景でした。

斎藤先生はその学生を見て、「君は何をしているのか。牧口を読む時間でしょう」と、最初は比較的穏やかに声をかけました。そして「では、そこを読んでみなさい」と言ったところ、その学生が『人生地理学』すら持っていないことに気づかれたのです。先生は少し表情を曇らせ、「私の本を買えとは一言も言っていない。しかし、牧口の本すら買えないのか」と叱責されました。さらに周囲を見回して、「君はどうなのだ」と問いかけると、受講者の多くが持っていないでした。それが分かった瞬間、先生の怒りは最高潮に達しました。

私は「この授業はどうなってしまうのだらう」と不安になりましたが、ほとんど全員が持っていないことを確認したところで、先生はそれ以上怒ることをやめ、その日の授業は静かに終わりました。

そして、私にとって残念だったのは、その翌週の出来事です。受講者が大幅に減っていたのです。おそらく、怒られたことに対する抗議だったのだと思います。

斎藤先生は、『人生地理学』を20冊ほど抱えて、研究室のある5階から一度教室に降り、また研究室に戻って、さらに20冊ほど持ってきて、再び教室に現れました。そして開口一番、「皆さんが買わないので、私が買えばいいということが分かりました」とおっしゃいました。『人生地理学』は一冊3000円ほどだったと思いますが、それをすべて購入され、「授業が終わるまで貸し出しますから、これを使って読みなさい」と言ってくださったのです。

さらに驚いたのは、その後の話です。斎藤先生のお宅にはチューリップ畑があり、毎年、雑草取りをしなければならないそうです。「そのアルバイトをしに来なさい。アルバイト代を出すから、そのお金で『人生地理学』を買いなさい」と学生に話していました。不思議な先生だと思いつつも、私は本当に誠実な方だと感じながら授業を受けていました。

おそらく、その週から履修を取り消した学生たちは、先生のことを「かなり変わった先生」「怖い老人」としか思わなかったかもしれません。それはとても残念なことです。私にとって斎藤正二という人物は、言葉にはうまく表現できないのですが、とても大事なことを伝えてくれた先生でした。

伊藤 斎藤正二は50代のときにがんを患いました。手術後に医者からは、余命5年と告げられたそうです。それでも彼は、文字どおり命をかけて『牧口常三郎全集』の編集に取り組んでいました。全集の編集には非常に時間がかかり、その作業とともに、結果的には自身の寿命も延びていったと回想しています。実際、亡くなった時には86歳でした。命と引き換えに、誰よりも牧口研究を続けた人物でした。

しかも、斎藤正二は創価学会の会員ではありません。当時、今から50年ほど前の状況を考えると、「牧口常三郎」という名前は、「創価学会初代会長」というイメージと強く結びついていました。斎藤はそれまで角川書店や創元社など、さまざまな出版社から本を出してきた研究者でしたが、牧口研究に取り組むことで、「お前は創価学会に入ったのか」といった言葉を周囲から投げかけられ、さまざまな不利益も受けたと聞いています。それでもなお、牧口常三郎に対する深い尊敬の念を失うことなく、研究を続けました。

そうした中で、創価大学に招聘された際には、「創価大学の学生と一緒に牧口を読もう」と楽しみにして来られたのです。しかし実際に授業が始まると、学生の多くは牧口の本を買わず、読もうとしない。非常に悲しまれた。しかし、そうであれば、「自分が買って貸し出せばいい」と考えた。そのような方だったのだと思います。研究者としての業績もさることながら、教育者としても傑出していました。

学問の姿勢（塩原の回想）

伊藤 では、塩原さんはいかがでしょう。塩原さんは多くの研究上のやり取りをされたと思いますが、何か思い出があればお願いします。

塩原 斎藤先生のお話をする前に、なぜ私自身が牧口常三郎について研究するようになったのかを、少しお話したほうがよいと思います。私は創価大学の2期生で、大学院は創価大学大

学院の法学研究科に進み、その後、大学職員として勤務してきました。

2000 年前後という時期は、日本の大学にとって、「これからは全入時代になる」「大学というものが大きく変わっていく」と盛んに言われていた時代でした。そのような状況の中で、創価大学はこれからどのような大学になるべきなのか、いわゆる建学の精神に込められた意味とは何なのか、ということが、私自身、常に気になっていました。

そうしたことを考える中で、あるときふと、「なぜ創価大学の目の前に東京牧口記念会館があるのだろうか」「もしかすると、牧口先生は八王子にいらっしゃったことがあるのではないか」という疑問を抱くようになりました。

そんな折、名古屋を訪れた際、ふと一枚の写真に目が留まりました。それは、高尾山の頂上で牧口先生と子どもたちが写っている写真でした。関西出身の方であれば「たかお」と聞くと京都の高雄山を思い浮かべるかもしれませんが、私は八王子に住んでいますので、「これは高尾山だ、つまり八王子だ」と直感的に思いました。そして、「この写真はいったい誰が提供したのだろう」と考えました。

以前私は通信教育部を担当していたので、ある通教卒業生のことを思い出しました。そこで、その方に「この写真を提供したのはあなたか」と尋ねたところ、そうだという返事が返ってきました。ただし、創立者に報告するにあたって、万が一にも誤りがあってはならないと思い、実際に自分で高尾山に登り、現地を確認しました。駆け足で登った記憶がありますが、間違いないと確信したうえで、「牧口先生が八王子にいらっしゃっていました」という報告を創立者に行いました。

ちょうどその一週間後に、大学祭、いわゆる創大祭がありました。その場で創立者は「今日は臨時ニュースを申し上げます」と切り出され、一つは福島県で創価大学の研究チーム――私も参加していましたが――が古代の銅鏡を発見したという話、もう一つが、「牧口先生が八王子にいらっしゃっていた」という話でした。

いずれにしても、創立者がいかに牧口先生を大切にされているかを実感し、私はせめて牧口先生に関することを少しずつでも報告していこうと思い、それ以降、仕事とは別に、地道に調査を続けてきました。その一つ一つの報告に対して、創立者が本当に喜んでくださったことから、牧口先生への深い思いを強く感じました。

そうした流れの中で、先ほども触れましたが、八王子駅前に市民と大学をつなぐ交流拠点ができることになりました。創価大学として初めての試みでしたが、その最初の企画として、牧口先生の生誕日である 6 月 6 日に、斎藤先生に講演をお願いしようということになりました。ちょうどチューリップが咲いている季節でしたが、そのお願いのために斎藤先生のお宅を訪ねました。

そこではじめて斎藤先生とお会いしたのですが、講演当日の冒頭の言葉には、正直、啞然としました。6 月 6 日の講演であるにもかかわらず、「6 月 6 日は牧口先生の誕生日ではありません」という言葉から話を始められたのです。実は、旧暦であるため、現在の暦とは異な

るのだ、という説明でした。そこから、「学問とは、正確に学ぶことが何よりも大切なのだ」という話をされたことが、非常に強く印象に残っています。

また、話は前後しますが、斎藤先生のお宅を初めて訪れた際に、私は「創価教育とは、いったいどういうことですか」と質問しました。そのとき斎藤先生は、「創大生の悪いところは、自分で考えずに、すぐ人に尋ねるところだ」と言われ、「創価教育とは、考えるということだ」と、はっきり言い切られました。一見すると冷たく、突き放したような言い方でしたが、後から振り返ると、「創価」そして「創価教育」の根底には、「考えること」があるのだということをお教えたのだと思います。

それが、私にとっての斎藤正二という人物の第一印象でした。懇談の後、ご自宅のチューリップ畑を案内して下さったことも、今では懐かしい思い出です。

二育論について（岩木の回想）

伊藤 岩木さんはいかがですか。

岩木 そうですね。先ほども少し触れましたが、私が受講したのは、おそらく最終講義か、特別講義のような位置づけの授業だったと思います。内容は、ショーペンハウアーの読書論、あるいはD・H・ロレンスの恋愛論を通して教育を語る、といった趣旨の講義だったと記憶しています。それを受講して、非常に感動しました。その前から斎藤先生の論文を読んでいて、「この人がいるなら、創価大学に進学したい」と思っていたのです。

伊藤 2005年度の最後の講義ですから、2006年の1月ですね。そのとき、岩木さんは通信教育部生でしたか。

岩木 通信教育部……学部研究生だったと思います。

伊藤 では、そこから創価大学に進学しようと思ったのですか。

岩木 そうですね。進学したいと思ったのですが、ちょうどそのタイミングで斎藤先生が退職されてしまいました。

伊藤 では、最後の講義を、自由聴講したということですね。

岩木 そうなります。ただ、斎藤先生が進学の大きな動機であったことは確かですが、それだけではなく、「創価大学で学びたい」という気持ち自体も消えなかったもので、そのまま進学しました。

斎藤先生の論文は本当に面白いのです。とりわけ「二育パラダイムと三育イデオロギーの間」という論文は、非常に印象的でした。これは教育をどのように区分するかという問題を扱っていて、日本の伝統的な教育観では、知育・徳育・体育という三育が一般的です。現在でも、この考え方は、ある意味で基本的な枠組みとして残っていると思います。

ところが斎藤先生は、この三育という区分そのものを「イデオロギーだ」と言い切ります。そして、知育と体育という二育で捉えるほうが、むしろ合理的ではないか、さらに牧口常三郎も同様の考え方をしていた、という議論を展開するのです。三育という枠組みが、いかに

イデオロギーに満ちたものであるかを論証していくその論文を読んで、「こんなことが書けるのか」と、まさに目から鱗が落ちる思いでした。

その論文をきっかけに、私自身も斎藤先生に引きずられるようにして、日本教育史という分野に入っていったと言えます。修士課程に進学し、1年目は、斎藤先生がいなくても何とかやっていけたのですが、1年目が終わる頃になると、どうしても何らかの形で斎藤先生と接点を持ちたいという思いが強くなりました。単に授業を受講しただけで、特別に声をかけられたわけでもありませんでしたし、完全にこちらの一方的な思いだったのですが、それでも「何とか指導を受けたい」と考えました。

そこで、斎藤先生のご自宅宛に手紙を書きました。「何でもやります」と、かなり熱烈な内容だったと思います。当時も働いてはいましたが、新聞社での仕事をはじめ、大工仕事など、いろいろなことをしていたので、「家の手入れでも、屋根の修理でも、何でもしますから、とにかくお近くに置いてください」といった趣旨の手紙を、直接お送りしました。

すると、「岩木さんという方から手紙をもらったのだけれども、知っていますか」という確認が、伊藤先生のところにいったようです。

伊藤 たしかご自宅に何った折に、「岩木さんという方から手紙をもらったのだけれど、ご存じですか」と聞かれて、私は「本当に真面目に学ぼうとしている方で、斎藤先生の本もたくさん読んでいます」とお答えしました。すると、「では、一度連れていらっしやい」という話になり、それでお連れしたのです。

岩木 そこから伊藤先生が間を取り持ってください、斎藤先生のご自宅を訪ねるようになりました。退任後に図書を寄贈される際のお手伝いなど、さまざまな作業を通じて、直接お話しする機会をいただきました。斎藤先生との出会いは、そのような形だったと思います。

牧口とカント（伊藤の回想）

伊藤 斎藤正二は、本当に多くの人材を輩出しました。もともとシリーズ本「世界子どもの歴史」など、西洋教育史に関わる研究も数多く手がけておられたので、その系譜では、牛田さんが西洋教育史を代表するお弟子さんになられたと言えるでしょう。また、斎藤先生は日本教育史の大家でもありましたから、その点では岩木さんが輩出された。そして、牧口常三郎の評伝的研究、すなわち実証的な資料に基づいて牧口先生の生涯を丹念に追う研究という意味では、塩原さんが育ってこられたわけです。他にも、塩原さんの同級生で、牧口研究の本を多く出された古川敦さんという学者もいらっしやいますし、長く教授を務めたので多くのお弟子さんがおられます。

私は文学部で、ある意味では一番直接の関係が薄かった立場ですが、今でも強く印象に残っている出来事があります。1995年、私が大学4年生だったとき、卒業論文に何を書こうか迷っていました。そのとき、文学部のゼミの先生から「卒業論文では、カントくらいはやっておいた方がいい」と言われ、岩波文庫で『純粹理性批判』を読んでいました。4年生の春か秋だっ

たと思います。

当時、斎藤正二の授業は30人ほどが履修していました。闘病しておられたので非常に痩せておられましたが、教室の中をぐるぐると歩き回りながら講義をされていました。あるとき、たまたま私の席の横に来られて、机の上の『純粹理性批判』を見られて、「君はカントを読んでいるのか」と声をかけられました。私が「卒業論文でカントについて書こうと思っています」と答えると、「カントを読むと感動するよね。平和主義で、理性を愛している」とおっしゃって、情熱的にカントについて語られました。それ以降、覚えてくださったのです。

私は、「なぜこの方は、カントにここまで反応されるのだろう」と思いました。たまたま机の上に置いていた岩波文庫を見ただけで、ここまで話が広がるのかと驚いたのです。しかし、後になって『若き牧口常三郎』や『斎藤正二著作選集』を読み進めるうちに、斎藤がカントについて深い造詣を持っていることを知りました。斎藤は、牧口常三郎という人物を、「カント哲学に本気で取り組んだ、日本における希有な思想家」と捉えていたのです。

その後、私は『牧口常三郎の思想』の編集作業をお手伝いすることになり、その過程で多くのことを教えていただきました。たとえば「価値創造」という言葉は、カント哲学に由来するものであり、『人生地理学』に登場する「世界民」、すなわち「世界市民」という概念も、元をたどればカントから来ています。さらに言えば、人間と地理との関係をグローバルな視点で捉えようとする『人生地理学』というプロジェクト自体が、カント系統の近代地理学に着想を得たもののなのです。

カントは哲学者でありながら、教育学や地理学といった新しい学問を大学のカリキュラムに導入した最初の哲学者でした。一方、牧口常三郎は、教員として出発し、地理学者となり、教育学者へと歩みを進め、「価値論」という哲学書を書き上げました。そして最後には獄中でカント哲学を精読しました。哲学から教育学・地理学へと進んだカントと、教育から地理学、哲学へと進んだ牧口は、一見すると逆の道を歩んでいるようですが、人間の理想、平和、成長といった問題を真剣に考え抜いた結果、非常に近い思考に到達しているのだと、斎藤は考えていました。その視点から、牧口常三郎がなぜ「価値創造」という概念に行き着いたのかを、カント哲学から捉え直していたのです。

その意味で、私自身も、日本のカント研究者の端くれとして、斎藤正二の研究に強く導かれた一人だと思っています。もっとも、専攻が異なっていたため、大学院進学後しばらくは、斎藤との直接的な接点はありませんでした。ところが、修士論文を書く25歳頃、私は自分の研究テーマに完全に行き詰まっていた。ショーペンハウアーという哲学者について論文を書いていたのですが、どこに活路を見いだせばよいのか、悩んでいたのです。

そんな折、八王子の古書店で、偶然斎藤正二と再会しました。1998年頃と記憶しています。八王子にお住まいで、よく古本屋に通っておられました。久しぶりにお会いしたにもかかわらず、私のことを覚えておられ、「あなたは伊藤さんだね。カントをやっていたよね。今は何をやっているの」と声をかけてくださいました。私が「今はカントからショーペンハウ

アーに移りました」と答えつつ、正直、叱られるのではないかと思います。「なぜカントをやめたのか」と言われるのではないかと身構えたのです。

ところが、斎藤はそうではなく、間髪を入れず「それは素晴らしい」と言ってくださったのです。「19世紀において、ロマン主義やナショナリズムへと時代が傾く中で、カント哲学の理念を正しく守ろうとしたのがショーペンハウアーだ。あなたは、その研究をきちんとやり遂げなければならない」と、力強く励ましてくださいました。私は深く感動しました。その後、斎藤が『牧口常三郎全集』第1巻の『人生地理学』に付した注釈を読んで、彼の西洋哲学への造詣の深さに打たれました。

その後、大学院博士課程に進学した25歳のとき、斎藤の研究室を訪ね、「何とか弟子にしてくださいませんか。授業を自由聴講させてください。何でもします」とお願いしました。それ以来、週に3回、4回ほどのペースで授業に通い、結果的に約10年間、斎藤先生のもとで学び続けることになりました。当時取ったノートは、今も15冊残っており、私にとって非常に貴重な財産です。今でもそれを読み返すと、新しい研究の発想が次々と湧いてくるのです。

資料に語らせる

伊藤 ということで、これまで斎藤正二の思い出を中心に、ずいぶんと話してきましたが、ここからは本題に入りたいと思います。斎藤正二以前と以後とで、牧口常三郎研究は何が変わったのか、あるいは斎藤正二からどのような研究上のヒントや方法を得たのか。ご自身の研究に引き寄せてでも構いませんし、牧口研究に直接結びつけてでも結構ですので、ぜひお話を伺いたいと思います。まずは塩原さんからお願いできるでしょうか。

塩原 斎藤先生以後の牧口研究という点で、まず触れておきたいのは、『牧口常三郎全集』に未収集の論文などを最初に見つけたのが、実は創価大学の学部4年生だったという事実です。それも斎藤ゼミに所属していた山口徹さん（23期生）という学生が、卒業論文の準備過程でさまざまに調査を進める中で、牧口先生の論文のうち、全集に収録されていないものがあることに気づきました。確か7本ほどだったと思います。その後、彼は必死に各地の図書館を巡り、見つけるたびに斎藤先生に報告し、さらに創始者にも報告するということがありました。若い学生が新たな研究の道を切り拓くという事実、私は大変な驚きを覚えました。

もう一つ重要な例として、牧口先生の『人生地理学』が中国語に翻訳されているという話は、以前から噂としては知られていましたが、具体的な書誌情報は不明でした。その存在を突き止めたのが、本学出身で当時首都大学東京（現・東京都立大学）大学院生だった松田大作さん（23期生）という方です。「このようなタイトルの本があり、ここに牧口先生の翻訳が含まれている」という情報を見つけてくれました。その後、創価大学の先生方の尽力によって、中国の大学や図書館に所蔵されている牧口先生の翻訳書を実際に確認することができました。

こうした学生や若い研究者が新たな道を切り拓いていく姿に、私は大きな感銘を受けましたし、まだまだ私たちがやるべきことは多く残されているのだと実感しました。それ以来、私自身も国会図書館をはじめ、全国各地の図書館を回りながら、これまで見つかっていなかった牧口先生の著作を探し続けてきました。

『評伝 牧口常三郎』には、他の評伝とは異なる特徴があります。それは、巻末に牧口先生の著作一覧を掲載するだけでなく、全集に未収録の著作についてはアスタリスクを付し、「これだけの未収録文献が存在する」ということを明示した点です。さらに、存在が知られており、タイトルも判明しているものの、現物が未発見の著作があることも分かってきました。そうした文献については、私自身が見つけられたものもありますが、限界もあります。そこで、後進の研究者や学生の皆さんにぜひ挑戦していただきたいという思いから、「未発見リスト」、いわゆる指名手配リストという形で掲載しました。評伝巻末の「未発見リスト」をコピーしていただき、もし発見できたなら、それは極めて大きな前進になります。ぜひ多くの方に挑戦していただきたいと思っています。

もう一つ、斎藤先生からいただいた言葉として、皆さんにぜひ紹介しておきたいことがあります。先ほども申し上げましたが、私は正規の意味で学者の道に進んだわけではありません。それでも牧口先生のことが大事だと思い、調査研究を行い、その成果を創立者に届けてきました。あるとき、創立者が「これは学術雑誌に載せたらどうか」と提案してくださったことがあります。しかし、その学術雑誌の担当者からは、「学者が書いたものではないから論文ではない」と、冷たく言われてしまいました。

そのことを斎藤先生に報告したところ、先生は一貫して「資料に語らせろ」という言葉を私にかけてくださいました。「君は職業は学者ではないかもしれない。しかし、資料に語らせていけば、事実は事実として積み上がる。それによって人を納得させることができる」という、極めて明確な方法論を示してくださったのです。この言葉があったからこそ、『評伝 牧口常三郎』、そして『評伝 戸田城聖』を執筆することができました。

現在は、教育雑誌『灯台』で連載をしています。『評伝 牧口常三郎』は、どうしても分量が多く、細部まで書き込んだ本になっていますので、より分かりやすく、シンプルな形で学んでいただけるようにという思いで執筆しています。また、現在取り組んでいるもう一つの挑戦として、牧口先生を高く評価していた人物である新渡戸稲造に注目し、「新渡戸稲造と牧口常三郎」という長編論文を、新渡戸稲造研究の書籍に3回連載という形で掲載しています。

こうした仕事を通じて、牧口常三郎という人物が、決して宗教界にとどまる存在ではなく、日本において極めて大きな思想的・教育的意義を持つ人物であることを、微力ながら伝えていきたいと考えています。学生の皆さんにも、ぜひさらに努力を重ね、多くの人々に、日本の貴重な財産とも言うべき牧口常三郎の思想と業績を紹介していただければと、心から願っています。

教育批判・教育学批判

伊藤 少し補足しておきます。先ほど塩原さんが触れられた、牧口常三郎全集に未収録の論文を発見した山口徹さんですが、彼は私の一学年下の後輩になります。山口さんが斎藤ゼミに所属していて、あるとき私に「絶対に斎藤正二の授業は取った方がいい。目から鱗が落ちる」と強く勧めてくれました。それで誘われる形で授業に行ったのですが、結果的には大正解でした。今で言えば、まさに「推し活」ですね。山口さんの“推し”に導かれた形でした。それでは次に、牛田さん、お願いします。

牛田 そうですね。私も、たしか古本屋で斎藤先生にお会いしたことがあります。新書を熱心に漁っておられました。

斎藤先生というと、非常に立派で清廉潔癖な人物像を思い浮かべる学生さんも多いかもしれませんが、実際にはかなり型破りな方でした。無謬的で近寄りがたい存在というよりは、極めて個性的な研究者だったと思います。先生は、私自身の研究にも大きな影響を与えています。

斎藤先生は、「教育学者でありながら、教育を信用していない」という点が、私にとっては最も衝撃的でした。普通、教育学者になると、「どうすれば人をよりよく教育できるか」「教育が目指す理念とは何か」といったように、教育を基本的に「善いもの」だと前提にして思考を始めます。しかし、斎藤先生はまったく違っていました。教育そのものは、決して無条件に善いものではない、という地点から思考を始める人でした。

これは私にとって、そして教育学そのものにとっても、極めて重要な視点だったと思います。経済を全面的に疑う経済学者がほとんどいないのと同じで、教育を根本から疑う教育学者も、ほとんどいません。その姿勢が私の中に強く残っています。なぜ斎藤先生が教育を信用しなかったのか。この点については、伊藤先生のほうが詳しいと思いますが、端的に言えば、戦中世代であったことが大きいと思います。教育と国家が結びついたときに、どのような事態が起こったのか。その記憶が消えることなく、先生の身体に刻み込まれていたのだと思います。

私は斎藤先生の最後の著作『牧口常三郎の思想』をここに持ってきました。この書籍は、伊藤先生が中心となって編まれたものです。伊藤先生はご自身ではあまりおっしゃいませんが、正直に言って、伊藤先生がいなければ成立しなかった本だと思いますので、ここではつきり申し上げておきます。

先ほど岩木さんが触れた最終講義の話とも関係しますが、斎藤先生は同著の中で、ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を引きながら、教育について語っています。教育とは何かという問いに対して、私なりに単純化してまとめると、先生は、教育とは人間の三大欲を超えた欲求なのだというのです。人は教育を通して、相手が自分の思いどおりに変わったとき、強烈な快感を覚える存在なのだ、と。その言葉を自分自身に引きつけて考えたとき、私は強

い衝撃を受けました。

人を教育し、その力で人が変わる。このときに得られる快感は、もしかしたら食欲・性欲・睡眠欲といった三大欲を超えるほどのものなのかもしれない。そしてそれは、権力欲そのものでもあるという。こうした認識は、私に決定的な転換を迫るものでした。教育を考えると、あるいは牧口常三郎が教育をどのように考えていたのかを考えると、この問題は確実に地続きになっていると思います。私は現在52歳ですが、この言葉はいまも鮮明に記憶に刻まれています。これが、私の研究の源泉の一つです。

斎藤先生のお話を聴きながら、本当にそうだなと思って「なるほど」と言うと、叱られたことがありました。先生によると、『『なるほど』の後には『しかし』が続く。『しかし』の後を言うための言葉だ』『『なるほど』は、相手を否定するための準備となる言葉にすぎない』『だから、私の話に感心した顔で『なるほど』と言ってしまうのは誤りである』と指摘されました。

さらに、数字の「七」を「なな」と言ったときに叱られることもありました。「七」は「しち」が本来的な読み方だと、その場で辞書を引くように促され、「しち」の意味を解説いただきました。斎藤先生は、言葉に対する感覚が非常に鋭く、文章表現にしても、ある種の芸術性があったように思います。

いま挙げたエピソードは、まるで冗談のように思えるかもしれませんが、私にとっては、懐かしい叱られた思い出であると同時に、言葉の厳密性への姿勢として、深く根付いています。それはもちろん、「教育とは権力欲の発露である」という根本的な命題とも、私の中で結びついて残っています。

伊藤 斎藤は1925年生まれの戦中世代として、戦時中の軍国主義教育の記憶を、学問的にも背負っていました。戦争が終わった20歳の時点で、家族を失い、深い苦しみを味わっていた。そのような背景があったからこそ、斎藤は、牧口常三郎が牢獄で亡くなったという事実、強い衝撃を受けたのだと思います。

私は以前、「なぜ斎藤先生は牧口研究を始めたのですか」と尋ねたことがあります。この質問は、斎藤自身もよく受けていたようです。もともと斎藤は、柳田國男、折口信夫、新渡戸稲造といった研究者の仕事に取り組んでいました。彼らは「郷土会」と呼ばれるグループを形成し、生活空間を社会学者がチームで研究する、今日で言う社会学やフィールドワークの先駆的な共同研究を行っていました。

この郷土会を主宰していた柳田國男や新渡戸稲造が、牧口常三郎をその活動に誘っていたのです。斎藤正二が柳田や新渡戸の研究を進める中で、郷土会の資料を精査していくと、毎回、著名な知識人たちに混じって一人、「正体不明」の人物が参加していることに気づきます。それが牧口でした。

そこで斎藤は、「牧口常三郎とは何者なのか」と考え、古本屋に「牧口の本が見つかったら知らせてほしい」と依頼します。そうして最初に手に入ったのが『人生地理学』でした。

1903年10月に刊行されたこの本は、日露戦争直前の、日本全体が反露感情に煽られ、戦争へと突き進もうとしていた時代に書かれています。その中で牧口は、「世界民」という言葉を用い、世界を公平に認識する視点を提示していました。斎藤は「1903年の段階で、これはどれくらいで平和主義的な思想家がいたのか」と、まず強い衝撃を受けたそうです。

その後、再び古本屋から連絡が入り、次に見つけたのが『創価教育学体系』でした。戦後、日本で爆発的に拡大した宗教団体・創価学会の創始者、そして獄中で亡くなった牧口常三郎。その人物と、『人生地理学』の著者が同一人物であることを知り、斎藤は再び、衝撃を受けたと言います。そして「この牢獄で死んだ思想家を、自分の人生をかけて、きちんと再評価しなければならない」と決意したのです。

山口さんの話によれば、斎藤自身が、この思い出を語るときには、眼鏡を外すジェスチャーをして（『人生地理学』と『創価教育学体系』を知って）「二度、目が飛び出るほど驚いた」と話していたそうです。

論文のスタイル

伊藤 それでは、研究の側面について、岩木さんからぜひお願いします。

岩木 私の場合は、大学で斎藤先生から直接教えるを受ける機会は、それほど多くありませんでした。そのため、主として論文を読みながら学んだという形になります。ただ、その斎藤先生の論文には、言葉では言い尽くせない魅力があります。引用が非常に多いのも特徴で、一般的な学術論文の形式からすると、「引用が長すぎる」と言われるかもしれません。しかし、読む側の感覚としては、論文を読んでいるというよりも、斎藤先生の講義を受けているような感覚になるのです。

実際、私は斎藤先生の論文を図書館で集め、自分で製本してまとめていました。論文を読みながら、まるで語りかけられているような感覚を覚えたことを、今でもよく覚えています。その中でも、先ほども触れた「二育・三育論」は、私にとって本当に衝撃的でした。何度も言いますが、まさに「目から鱗が落ちる」体験でした。

教育をいくつかの領域に区切るのかという問いに対して、「そもそも、その区分にはどのような根拠があるのか」という点を、斎藤先生は徹底的に説明してくれます。そして、その背後には歴史的・思想的な背景があるのだということを、丁寧に語ってくれる。そのこと自体が、非常に衝撃的でした。教育というものは、実はかなり恣意的で、ある時代の慣習や支配的な考え方によって形づくられているのではないか、という認識を強く持つようになりました。

私自身、この二育・三育論文に大きな影響を受け、研究の出発点も、斎藤先生の方法に強く依拠しています。私が着目したのは、「被教育者」という概念でした。子どもや若者は、「児童」「生徒」「学生」など、さまざまな呼称で区分されていますが、明治近代の初期には、基本的にすべて「生徒」と呼ばれていました。それが、ある時点から「生徒」と「学生」という呼称に分離していきます。では、この分離はいったい何を意味しているのか、その原因は

何なのか。そこを突き詰めていったのが、私の修士論文のテーマです。

調べていくと、明治前半期において、この分離が生じていることが分かってきました。一つには、軍学校の影響があり、もう一つにはフランス語圏の教育制度の影響があって、「学生」という用語が導入されたという背景があります。さらに、東京大学では明治14年頃から「学生」という言葉が使われるようになりますが、そこには初代総長である加藤弘之の進化論的な思想が関係しており、「学生」という呼称が、ある種の自己規定的な尊称として与えられたのではないかと、という見解に至りました。この発見の過程は、非常に刺激的で、研究の楽しさを強く実感した経験でもあります。

そして次に、「では教師側はどうか」という問いが浮かび、それが博士論文の発想へとつながっていきました。このように振り返ると、斎藤先生の研究や論文は、私の研究スタイルそのものを形づくり、進むべき方向を示してくれた存在だったと、あらためて感じています。

また、修士論文を完成させた際には、自分で製本したものを斎藤先生にお送りし、読んでいただきました。返却された論文には、下線やコメント、「ここは正しい」「これはどうだろう」といった丸や三角の印が、細かく書き込まれていました。そのときは、本当に嬉しくて、「どうしてここまでしてくださるのだろう」と、泣きながら受け取ったことを覚えています。思い出しても、胸が熱くなります。それまで、これほど丁寧に向き合ってくれる人に出会ったことはありませんでした。

研究者としての斎藤正二という側面もちろん大きいのですが、私にとっては、直接授業を受けた回数が少なかったからこそ、「教育者としての斎藤正二」という存在を、より強く考えさせられたのだと思います。その意味で、私は計り知れない恩恵を受けてきたと、実感しています。

創立者との交流

伊藤 斎藤は、多摩地域の作文コンクールで長年、審査員・選考委員を務めました。40年ほどにわたり、入選作品すべてにコメントを付されています。中学生の作文も、一つ一つ丁寧に読み、温かい言葉をかける、非常に優しい方でした。

非常に印象的なこととして記憶に残っているのは、私が26歳のとき、大学院博士課程に進学し、改めて斎藤正二の門を叩いた際のことです。牧口常三郎の『創価教育学体系』の冒頭には「産業合理化」という言葉が出てきます。これは本来、経済学の用語です。私は「なぜここで経済学の『産業合理化』という言葉が出てくるのですか」と斎藤に尋ねました。すると、「来週まで待ちなさい」と言われました。

翌週、斎藤は数十冊の本を抱えて教室に来ました。「1930年前後の日本で、『産業合理化』という言葉は、この著者のこの本ではこういう意味で使われている」「こちらの著者では、こういう文脈で使われている」と、当時の言論空間を一つ一つ再現してみせてくださったの

です。そのうえで、座標軸を組み直し、「このあたりに牧口常三郎の主張が位置づけられる」と推測していく。まさに圧巻でした。

その方法論が最もよく表れているのが、『牧口常三郎全集』所収の『人生地理学』に付された詳細な注釈です。そこには、「この著者のこの本では、この語はこういう意味で使われている」といった形で、徹底した資料提示がなされています。その中で、牧口常三郎が当時の日本社会において、どの位置に立っていたのかが、立体的に浮かび上がってくるのです。

私はここが非常に重要だと思っています。斎藤正二という人は、晩年に創価大学の教授になりましたが、それ以前から一貫して、非創価学会員の牧口研究者として、牧口常三郎を徹底的にアカデミックに、学術的に研究してきました。そのおかげで、牧口は、単に宗教的観点から捉えられる存在ではなく、日本近代の政治史・教育史、さらには哲学史においても再評価されるべき思想家として位置づけられるようになったのです。

もちろん、創価大学の中には、信仰に篤い学生が「先生は、なぜ創価学会に入れないのですか」と率直に問いかけることもありました。斎藤正二は、もともとキリスト教の家庭に生まれ、青春時代に多くの遍歴を重ね、最終的に学問の道を選んだ人です。だからこそ、信仰を持つ人の気持ちも理解していました。しかし、特定の立場に立ってものを書くのではなく、複数の視点から対象を捉える学者として仕事をした。その姿勢があったからこそ、牧口は一宗教団体の創始者という枠を超え、日本の軍国主義・国家主義と真正面から対峙した巨大な思想家として浮かび上がったのだと思います。

私にとって、斎藤正二の人生と仕事は、計り知れないインパクトを持っています。彼は『牧口常三郎全集』を全巻編集しました。また、斎藤の主要著作を納めた『斎藤正二著作選集』の刊行が決まったときのことも、よく覚えています。当時、先生は75歳前後で、まさに晩年でしたが、その業績が改めて高く評価され、出版社が刊行を決断しました。

その1冊目（第6巻『「やまとだまし」の文化史』）が刊行された際、斎藤は「私は創価大学で長くお世話になった。ぜひ、この本を創立者の池田先生に捧げたい。伊藤さん、届けてくれますか」と言われました。そこで私は、斎藤の書簡とともに、著作選集をお届けしました。すると間もなく、創立者の秘書の方から電話があり、創立者が大変感動されて、ぜひ斎藤先生に次のように伝えてほしいとの伝言がありました。

「お手紙をありがとうございました。涙が出ました。どうかお身体を大切にしてください。」

さらに、創立者の最新刊の写真集に揮毫されたものを斎藤先生に贈りたいので、届けてほしいとのことでした。その写真集には創立者の直筆で「大徳敦化」という言葉が記されており、現代語に訳せば「偉大な徳を備えた人は、世界に影響を与える」という趣旨の言葉でした。私はその文字を、今でもはっきり覚えています。

また、斎藤正二が75歳で創価大学を定年退職された際の卒業式のことも忘れられません。当時は創立者が卒業式に列席されており、名誉教授称号の授与式において、創立者が自らの手で斎藤に称号を授与されました。こうしたシーンは、私が出席した創価大学の行事でもほ

とんど目にしたことはありません。そのとき、さすがの斎藤も感極まって涙を抑えきれなかったそうです。あまりに感動して、対面ではお礼を言えず、後日手紙で感謝を伝えた、というやり取りがあったことも覚えています。

私自身の人生を振り返っても、学問というものは、厳しく育ててくれる人がいなければ成り立たないのだと、強く感じます。30年前、「牧口研究」という分野は、ほとんど存在していませんでした。「創価教育論」という授業もない時代です。

その中で、日本教育史学会などの学術の場で牧口研究を正面から発表し、論文として積み重ねてきたのが、斎藤正二をはじめとする研究者たちでした。彼らの努力があったからこそ、今日、牧口を学術的対象として研究することが可能になっています。その貢献の大きさを、改めて強調しておきたいと思います。

膨大な蔵書

伊藤 このあと質疑応答に入ろうと思いますが、その前に皆さんから何か言い残したことがあれば、この時間をつないでいただければと思います。

塩原 では、斎藤先生のご自宅や奥様について、少しお話ししたいと思います。斎藤先生の蔵書は、本当に並外れたものでした。一軒の家が、天井近くまで本で埋め尽くされていたのです。さらに、お風呂場までもが本で埋まり、通路すらない状態でした。最初に蔵書整理を始めたときは、まず通路を確保するところから取りかからなければならぬほどでした。斎藤先生がお持ちだった本の数は、おそらく数万冊を超えていたのではないかという印象があります。膨大な読書を基盤に、さまざまな学問を構築してこられた方なのだと、あらためて実感しました。

蔵書整理でご自宅に伺っていた際だったと思いますが、奥様が、ふとこんなことをおっしゃったのが印象に残っています。「主人の恋人は牧口先生なのです」と。冗談めかした言い方ではありましたが、その一言に、斎藤先生がいかに牧口常三郎を心から尊敬し、その研究に人生を捧げてこられたかが凝縮されているように感じました。牧口先生への深い敬意を土台に、多くの学問的成果や文章を生み出してこられたのだと、強く思われました。私にとって、斎藤正二は本当に尊敬すべき大先輩であり、大きな偉人でした。

伊藤 蔵書があまりにも増えたため、もともとの家の横に新しい家を建て、ご夫妻はそちらに移られました。奥様はよく、小さい方の家にご夫婦が住み、元の家はほぼすべて書庫になってしまった、と笑いながらおっしゃっていました。

その後、牧口常三郎研究の資料などを寄贈してくださるお話があり、現在では「斎藤正二文庫」として、創価教育研究所に所蔵されています。その資料整理のために、塩原さんや岩木さんと何度もご自宅を訪れました。そのたびに、奥様はお茶菓子を出してくださったり、時には食事まで用意してくださったりしました。

斎藤正二は30年以上、闘病しながら研究を続けられたので、奥様の献身的な支えがあり、

まさに二人三脚で研究が進められていたのだと思います。そのことへの感謝の気持ちも、今あらためて思い起こされます。

岩木 私も大学院生の頃、その蔵書整理に関わらせていただきました。和風建築の家の中に、本が本当にぎっしり詰まっていて、結局、廊下から少しずつ本を出していく以外に方法がありませんでした。通路を確保するのが精一杯だったと思います。それでも、数万冊という規模で、本当に本に人生を投資されていたのだと感じました。

その影響か、私自身も自分の部屋に本を置くことへのリミッターが外れてしまい、いくらでも本を置くようになってしまっ、今でもよく叱られています（笑）。

もちろん、斎藤先生が蔵書の一冊一冊を最初から最後まで読まれていたわけではないと思いますが、興味深いのは、同じ本が何冊も出てくることでした。そして、それを見比べると、付箋の位置や書き込み、線を引いている箇所がそれぞれ違っているのです。同じ本を、異なる関心や問題意識のもとで何度も読み返していたのだと思います。徹底した読書と書き込みを通じて、思考を深めていく研究スタイルだったのだと感じました。

蔵書整理の作業を通じて、斎藤先生の研究の方法や読書の姿勢が、自然と伝わってきました。作業自体もとても楽しく、ひと段落すると、斎藤先生と懇談する機会をいただき、さまざまな質問をすることができました。今思えば、少し失礼な質問をしたこともあったかもしれませんが、その場で牧口常三郎研究や、斎藤先生ご自身の研究について、直接話を聞くことができました。期間としては2～3年ほどだったと思いますが、私にとっては本当に貴重で、ありがたい時間だったと、今でも強く感じています。

質疑応答

伊藤 現在、学生の皆さんからフォーラムにいくつか質問が寄せられています。1つ目は、「斎藤先生は若い頃、何を専攻されていたのか」という質問です。

斎藤正二は、文学部を卒業していますが、いわゆる専門分野に早くから閉じこもるタイプの研究者ではありませんでした。20歳前後という非常に若い時期から、すでに評論家として活動しており、学問と評論の両面で頭角を現していました。

具体的には、斎藤茂吉という著名な歌人の門下に入り、短歌評論家として学問的なキャリアをスタートさせています。その後、美学研究へと関心を広げ、カンディンスキーをはじめとする、当時の日本ではまだ十分に評価されていなかったヨーロッパ近現代の芸術家や思想家の著作を、原語で読み、紹介していきました。ドイツ語・フランス語・英語など多くの言語文化を自在に行き来して翻訳・研究を行っていた点は、特筆すべき特徴です。

さらに、日本の古典にも深い造詣を持ち、『古事記』の現代語訳にまで取り組んでいます。このように見てくると、斎藤正二は、単一の専門領域に収まる研究者ではなく、文学・美学・教育学・思想史を横断する、きわめて稀有な知の実践者でした。私自身の率直な印象を言えば、斎藤正二は、まさに「現代におけるレオナルド・ダ・ヴィンチ」のような存在だったと

思っています。

次に、質問の2つ目ですが、『創価教育学体系』を少し読んだけれども、昔の専門用語が難しくて読めない」という点と、あわせて「良書と悪書はどのように線引きされるのか」という問いです。どなたか回答をお願いします。

牛田 ご質問にある通り、『創価教育学体系』が非常に難解だというのは、率直なところ本当だと思います。ただ、難しいと感じてなかなか読み進められない場合には、一人で抱え込まず、仲間とみんなで読むという方法が有効だと思います。

創価大学には、私が学生だった頃からそうなのですが、インフォーマルな読書会があまり多くないと感じてきました。難しい本ほど、数人で集まって音読してみる、あるいは読む箇所をあらかじめ決めておいて、各自読んできたうえで議論する。そうしたやり方がとても大切だと思います。私自身も、今でもそうしています。「これは一人では挫折しそうだな」と感じる本については、研究者同士で読書会を開いて、読書に挑戦するようにしています。

良書と悪書の区別については、伊藤先生がお話しされた方がよいかもしれません。私から言えることは、良書か悪書かは、実際に読まなければ分からない、ということに尽きることです。大事なものは、読んでいくプロセスで、「なぜ違和感を持ったのか」「どうして心に引っかかるのか」「これはどういう点が良いのか」といった感覚や問いが、自分の中で少しずつ育っていくことにあります。そうやって、書物に対する鑑識眼が養われていくのだと思います。

絵画でも音楽でも同じで、たくさんの絵や曲を見て、聴いている人は、「これはよい絵画だ」「よい曲だ」などと、何となく自分なりの判断ができるようになることがあります。最初からそうした判断がうまくできるわけではありません。結局のところ、そうした力は、多くの作品に触れることで、その意味では時間をかけて培われるものです。その意味では、いわゆる「古典」と呼ばれるものは、長い時間を経て人々に読み、聴かれ、鑑賞され続けてきたという事実があるのですから、そうした力を身につける参照先として、有意義なのではないかと感じています。

伊藤 3つ目に、「牧口先生のあらゆる教員人生を通して、一番大切にされてきたことは何だったであろうと思いますか。牧口先生は明治26年に単級教室を担当されていますが、その時のことを詳しく知りたいです」という質問がありました。塩原さん、いかがでしょう。

塩原 そうですね。最初に2つ目の質問に触れておくと、『創価教育学体系』を読むのは確かに難しいですし、『人生地理学』も同様に難しいと思います。現代語訳も出ていますが、正確に現代語に置き換えること自体が、非常に難しい作業だと感じています。

私自身が『評伝 牧口常三郎』を書こうと思った背景の一つには、まず牧口先生がどのような問題意識を持ち、どのような行動を重ねてきたのか、その流れを理解してもらいたいという思いがありました。その流れをつかんだうえで『人生地理学』を読み、さらに『創価教育学体系』に進んでいくと、比較的スムーズに入っていけるのではないかと考えたのです。

また、『体系』という書物は、牧口先生の思考が完成されたものというよりは、思考が発展し、深化していく過程の中に位置づけられるものだと思います。牧口先生が、どのように考えを積み重ね、変化・成長させていったのか、そのプロセスを押さえることが、理解の鍵になるのではないのでしょうか。

「単級教室」について言えば、これはまさに、恵まれたとは言えない教育環境の中で、どうすれば子どもたちが本当に楽しく学べるのかを探求した実践だったと思います。先日、教育者の勉強会で「牧口先生は『楽しくなければ創価教育ではない』と言っていた」という話をさせていただきましたが、改めて根拠を確かめたいと思って調べてみました。すると、昭和16～17年頃の発言の中に、「児童にわかりやすく、たのしく、能率的な授業でなければ、創価教育とはいえない」という趣旨の言葉を話されていたという証言が見つかりました。

牧口先生の単級教室の実践も、どのような環境に置かれた子どもであっても、その子どもたちが学ぶことを楽しいと感じ、すっと理解できるようにするにはどうすればよいかを、徹底的に考え抜いた営みだったのではないかと思います。その点において、単級教育は、牧口教育の原点の一つを示しているのではないのでしょうか。ただ、この点については、岩木さんにぜひ専門的なお話をお願いしたいところです。

岩木 難しい問いですね。『創価教育学体系』が難しいという点についてですが、私自身の読み方としては、最初からすべてを読み切ろうとしない、ということ大切にしています。まずは目次や章タイトル、見出しなどを眺めて、「この本のどこに、だいたいどのような内容が書かれているのか」という全体の地図をつかむようにします。そうすると、たとえ全部を理解できなくても、「このテーマはこのあたりに書かれている」という見当はつくようになります。

そのうえで、「ここだけはどうしても知りたい」「このテーマは気になる」という箇所を一つ見つけ、そこを徹底的に読む。私自身も、研究ではよくこの方法をとっています。ただし、その部分を本当に理解しようとする、どうしても前後の文脈を読まざるを得なくなり、さらに背景となる思想や時代状況も必要になってきます。結果的に、そこから少しずつ読む範囲が広がっていく、という形です。キーワードやキーフレーズを手がかりに読み進めていくことが、とても重要だと思います。

次に「単級教室」についてですが、「単級学級」という形態は、明治30年頃までは、日本の学校では比較的一般的だったようです。一人の教員が、複数学年、場合によっては全学年の子どもたちと一緒に教えるというスタイルです。そこでは、家族に近い関係性が生まれやすく、教員が親のような存在になり、生徒同士も兄弟姉妹のような関係になると言われています。

興味深いのは、年上の子どもが年下の子どもの面倒を見るという関係が自然に生まれる点です。現代のように、同学年の子どもたちが一斉に同じ内容を学ぶクラス編成とは異なり、年齢の異なる子どもたちが一緒に学ぶため、過度な競争や対立が起こりにくいという特徴も

あります。また、年上の子が年下に教えるだけでなく、年下の存在があるからこそ、年上の子が「しっかりしよう」「頑張ろう」とする側面もあったとされています。

牧口常三郎が「単級教室」そのものを専門的に研究していたかという点、必ずしもそうではありません。彼は、自らが経験した教育実践を語り、その中で得た気づきを理論化していった教育者でした。ただ、研究として「単級教室」に関する論考も残していますので、牧口がこの教育形態をどのように捉えていたのかについては、そうした資料を参照するとよいのではないかと思います。

伊藤 次に4つ目の質問です。「もし斎藤正二の研究を、現在の教育実践に応用するとしたら、どのような点が活きると思いますか」という問いです。岩木さん、いかがでしょうか。

岩木 まず前提として、「斎藤正二研究」そのものを、私たちがきちんと行っていく必要があるのではないかと感じています。

その点で言えば、伊藤先生がすでに先鞭をつけてくださり、「斎藤正二による牧口常三郎研究」というテーマを、体系的に整理し、提示してくださっています。今後は、それを引き継ぐかたちで、私たちが斎藤正二の研究をさらに深めていくことが求められているのだと思います。

その際には、斎藤正二を研究者として捉える視点と、教育者として捉える視点の両方を、丁寧に取り組んでいくことが重要ではないでしょうか。その二つを切り分けるのではなく、相互に関係づけながら検討していければと考えています。

伊藤 斎藤正二の論文や著作を読むと、何よりもまず感じるののは、牧口常三郎の言葉を、徹底して「聞き取ろう」とする力です。これは、現在の教育用語で言えば、「傾聴力」と呼ばれるものだと思います。斎藤は、40年にわたって多摩地域の中学生作文コンクールの審査員を務めていましたが、その際にも、単に評価を下すのではなく、「この作文のこの一節が一番よかった」と具体的に引用し、そこにコメントを添えていました。これはまさに、書き手の声を丁寧に聞き取ろうとする姿勢の表れです。

私は、現場の教育も、過去の思想家や哲学者の研究も、本質的には同じだと考えています。つまり、相手が発している言葉やメッセージを、どのように聞き取り、受け止めるのかという点に尽きるのではないのでしょうか。そのためには、受け手である私たち自身の「感度」を高めていく必要があります。そうでなければ、真の相互作用は生まれません。

斎藤正二という人は、牧口常三郎の言葉や思想に対しても、徹底した傾聴の姿勢で向き合い続けました。そして、その姿勢は、中学生の作文に向き合うときにも、まったく同じ形で貫かれていたのだと思います。その点こそが、斎藤正二の研究を、現代の教育実践に活かすうえで、最も重要な示唆ではないかと考えています。

最後に、5つ目の質問です。「現代の創価大学において、斎藤正二は何を考えるとするか」という問いです。牛田さん、いかがでしょうか。

牛田 この機会に、ぜひ学生のみなさんにお伝えしたいことがあります。斎藤先生は、私たちに

「頑張るな」と繰り返していました。これは、今回の質問への回答とも関係しています。

正直に言えば、当時の私は、「頑張る」ということは、創価大学の文化的な価値観として、とても大切にされてきたものではないか、と感じていました。今でも、そう感じています。しかし、斎藤先生は「頑張る」という言葉を肯定してはいませんでした。

斎藤先生は『広辞苑』を紐解いて、「頑張る」という言葉の意味を説明されました。「頑張る」は「我を張る」に由来する、というのです。相手の意見に耳を貸さず、自分の考えに固執し、どうにかそこに踏みとどまることを指します。こうした由来をもつ「頑張る（我を張る）」に、先生は強い違和感を持たれていました。

それでは、「頑張る」の反対の言葉は何か。それは「諦める」です。「諦める」というと、投げ出す、断念するという残念な意味で受け取られがちですが、本来の「諦める」は「明らかに（あきらむ）」であり、「物事を明らかに見る」「冷静に状況を見定める」という意味を持っています。

斎藤先生が「頑張るな」と言ったとき、それは「何も考えずに、状況を見極めないまま、自分の思いや信念、あるいは意地によって、不合理なことを押し通してはならない」という戒めだったのだと思います。感情や思い込みを、信念や思いといった美しい言葉で塗装し、それをより所に判断するのではなく、事態をよく観察し、冷静に考え、その上で判断せよ、ということです。

その意味で、「頑張るな」という言葉の裏には、「よく見よ」「よく考えよ」「頭を使え」という、非常に厳しくも、また大事なメッセージが込められていたのではないのでしょうか。「頑張るな」。これは、現代の創価大学も、広くは社会一般も、思いを致すべき言葉だと思っています。

伊藤 ありがとうございます。それでは、時間となりましたので、ここでシンポジウムを終えたいと思います。

本日のシンポジウムを通して改めて感じたのは、学問とは知識を蓄積する営みである以前に、人の言葉に耳を澄まし、時代の声を聞き取ろうとする姿勢そのものだということです。斎藤正二が生涯をかけて示してくれたのは、牧口常三郎という思想家の再評価であると同時に、学問と教育に向き合う際の一つのモラルだったと言えると思います。今日の議論が、皆さん一人ひとりにとって、自分自身の問いを深め、これからの学びを考え直す小さな起点となることを願って、本日の結びとしたいと思います。

多くの貴重な話をしてくださった塩原さん、牛田さん、岩木さん、本当にありがとうございました。

高崎隆治と戸田城聖研究

——回想・方法・継承——

塩原 将行・伊藤 貴雄

シンポジウムの趣旨

伊藤 今日ご紹介するのは、戸田城聖の研究者である高崎隆治という人物です。1925年生まれで、今年が生誕100周年に当たります。今日は、前回のシンポジウム（「斎藤正二と牧口常三郎研究」、本誌本号所収）でも登壇された塩原将行さんと、私で担当いたします。

最初に塩原さんのご紹介をしておきますと、創価教育研究所の客員研究員をされています。『評伝 牧口常三郎』に続いて、『評伝 戸田城聖』を執筆されました。これが1冊400ページほどの非常に分厚い本で、上下2巻から成っています。そのご執筆者です。

また、私は博士論文をショーペンハウアーで書き、先日ベートーヴェンに関する本を出しましたが、実はこの2冊とも、今日ご紹介する高崎隆治という学者に影響を受けて執筆したものです。今から20年前に、私をベートーヴェン研究でデビューさせてくれたのも高崎隆治でした。ですから今日は、歴史研究の内容と同時に、そうした個人的な思い出も出てくると思います。

この「創価教育論」という15回授業の中では、戸田城聖という人物を扱う機会は、あまり多くありません。牧口常三郎については4回、池田大作については7回扱っていますが、戸田については1回です。これは軽んじているということではなく、牧口・池田に比べて、学術的な研究が進んでこなかったという事情によります。将来、もっと戸田を扱う回数が増えるように研究が蓄積されてほしいと願っています。

戸田は、牧口から見れば教え子に当たり、池田から見れば先生に当たります。いわば中間に位置する存在で、創価大学の建学の理念を語る際には、牧口・戸田・池田と3人並べて語られることが多いわけですが、戸田の研究はそれほど多くないのです。今日は、現時点で戸田城聖研究において望み得る、第一線のエキスパートとして塩原さんにお越しいただいていますので、戸田についてもたくさんお話を伺えるのではないかと考えています。

Masayuki Shiohara（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

Takao Ito（創価大学文学部教授）

本稿は2025年10月27日に大学科目「創価教育論」で行われたシンポジウムの記録である。本稿の作成に際して、上原淳司氏より校閲ならびに有益な助言をいただいた。



高崎隆治氏近影

『創価大学学生平和論集 第三集』（創価大学学生平和論集編集委員会編）所収

ここで重要なのは、戸田城聖を研究する意味とは何か、という点です。詳しくは後ほどお話ししますが、今日取り上げる高崎隆治という人物は、20世紀後半の日本で活躍した文学研究者の一人です。高崎は、前回取り上げた斎藤正二と同様、創価学会の会員ではありません。斎藤正二は晩年に創価大学で教鞭を執りましたが、高崎隆治は創価大学の教員でもありません。つまり、長い研究キャリアをもつ一人の文学研究者が、学問的関心から戸田という人物に焦点を当てて研究を行ったということです。これが一体どういう意味をもつのか、そこが今日の大きなテーマです。

高崎隆治は、戦時下の文学やジャーナリズムの研究者として知られています。その視点から戸田城聖に光を当てたわけですが、彼には明確な研究上の命題、すなわち方法論上の重要な方針がありました。それは、「戦時下の言論や行動の一切は、その時代のコンテキスト、すなわち歴史的文脈の中で考えなければ、何一つ理解することはできない」というものです。高崎は、戸田という人物を、近代日本の歴史において重要な一人の人物として捉え、その意義を考えようとした。

今日は冒頭の30分ほどを、私から戸田城聖の人物像の紹介に充て、足りない点は、戸田研究のエキスパートである塩原さんに随時補っていただこうと考えています。その後に高崎隆治の戸田城聖研究をめぐるシンポジウムへと進めていきたいと思います。

戸田城聖の生涯

伊藤 戸田城聖は、1900年に生まれ、1958年に亡くなりました。その生涯は、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、第二次世界大戦、日米開戦と敗戦、さらに戦後の朝鮮戦争、ベトナム戦争と、まさに戦争が連続する時代と重なっています。戸田城聖は、そうした時代を生きた思想家でした。同時代の思想家としては三木清や戸坂潤がありますが、彼らと同じく、

戸田城聖もまた戦時下を牢獄で過ごしました。戸田という人物を理解するためには、戦争の歴史を抜きにして考えることはできません。

戸田城聖は1900年、石川県に生まれました。生まれたときの名前は甚一（じんいち）です。1904年、4歳の頃に一家で北海道の厚田に移住します。このあたりの詳しい背景については、塩原さんの著書をご参照ください。厚田は当時、漁業で栄えた土地でした。そこで戸田は小学校教育を受けますが、彼を教えた教師たちは非常に個性的で、後に北海道の郷土文学史に名を残すような作家たちでした。青年教師として戸田を教えた彼らが、後に北海道では著名な文学者になるのです。この事実も、塩原さんによって掘り起こされたものです。

私は、一人の人間が歴史に爪痕を残していく背景には、その人を支え、育てた多くの人々の存在があると考えています。皆さんが今日、創価大学で学び、この授業を受けているという事実の背後にも、皆さんを送り出してくれた多くの人がいるはずです。それは両親だけではなく、小学校や中学校、高校の先生、塾の講師、親戚、友人など、さまざまな人々でしょう。皆さん自身も、そうした人々から陰に陽に影響を受けてきたのではないのでしょうか。私は、そうした出会いや影響こそが、人間にとって最も大切な成長の契機だと思っています。

さて、戸田城聖は、働きながら学んだ人物でした。家業の事情から、いわゆる高等教育への進学を断念せざるを得ませんでしたが、丁稚奉公をしながら勉学を続け、検定試験に合格して教員となります。北海道の真谷地という地域で教壇に立ちました。

時間の関係上、ここでは要点のみを述べますが、戸田は19歳前後で上京します。北海道の先輩であり、教育界で活躍していた牧口常三郎を頼ったのだと思われます。さまざまな縁をたどって牧口の勤める学校を訪れ、対話するなかで、戸田の内に眠っていた教育者としての情熱が呼び覚まされたのでしょう。このとき何が起こったのか、その詳細は明確には分かっていませんが、戸田が牧口を慕い、「牧口のような教育を自分はどうすれば実現できるのか」と考え始めたことは確かです。

興味深いのは、戸田が牧口と同じ学校にとどまるのではなく、途中から独自に学習塾を立ち上げた点です。時習学館と名づけられたこの施設は、現在で言えばフリースクールや学習塾に近いものです。戸田はまだ23歳という若さで、いわばベンチャー的に教育事業を始めたことになります。

当時の日本では受験制度が急速に整備され、子どもたちや親の意識は次第に受験へと向かい、「受験地獄」という言葉が時代を象徴するキーワードとなっていました。この時期、日本で大学などの高等教育へ進学できた人は、人口のわずか1～2%程度に過ぎません。激しい競争社会の中で、戸田の塾から学び、後に東京教育大学教授になった歴史学者の和歌森太郎や、東京大学教授になったドイツ文学者の山下肇といった学者もいます。

その後、戸田は中央大学の予科に学び、英語の教員免許も取得します。そして30歳を迎える前後には、学習参考書の分野で大きな成功を収め、「受験の神様」とも呼ばれる存在になります。1929年には『家庭教育学総論 中学校入学試験と愛児の優等化』という本を

著しており、こうした著作の存在も、塩原さんによって歴史の中から発掘されました。この時期の戸田は「城外」と名乗っていました。

1930年、牧口の『創価教育学体系』刊行に先立ち、『創価教育学原理による推理式指導算術』という算数の学習参考書を出版します。この本は最終的に100万部を超える発行部数を記録しました。現在でも1万部売ればベストセラーとされることを考えると、当時として驚異的な数字です。

この算術教育については、昨年まで本学学長を務めた教育学者の鈴木将史教授が、『推理式指導算術と創価教育』という本を著しています。戸田の算数教育は、算数問題を考えること自体が、すでに価値創造への第一歩である、という発想に立っています。その意味については、ぜひ皆さん自身で考えてみてください。関心があれば、鈴木教授の著書を手に取ってみてほしいと思います。

その後、戸田は雑誌編集者としても活躍します。戦前・戦中には雑誌編集に携わり、牧口とともに教育のための雑誌や、学習参考書を数多く刊行しました。特筆すべきは、国定教科書に対しても盲従せず、国の命令どおりには必ずしも従わないという姿勢を明確にしていた点です。軍国主義教育が強まる時代にあって、そこには自由な精神が表れていました。

また、戸田は小学生向けの学習雑誌『小学生日本』を創刊します。その後小学校が国民学校に改称されたことに伴い、『小国民日本』と改題。1941年、文部省は小学校を「国民学校」と改称し、それにより、児童は「少国民」と呼ばれるようになりました。これは「少（わかい国民）」という意味で、「将来、国家のために命を捧げる国民となれ」という思想が込められていました。ところが戸田は、同じ発音でも「小さい国民」という意味の漢字を用い、異なる価値観を示しました。こうした姿勢は当然、監視対象となり、雑誌は改題を余儀なくされ、最終的には廃刊に追い込まれます。このことの歴史的な意味を明らかにしたのが、今日ご紹介する高崎隆治です。この件についてはあとで改めて触れます。

さて、戸田は、大衆文学の出版でも重要な役割を果たしました。北海道時代から面識のあった作家・子母沢寛の『大道』を出版し、大道書房を設立します。佐藤春夫、長谷川伸、野村胡堂、久生十蘭といった著名な大衆小説家を擁し、最盛期には17社もの関連会社を運営していました。

しかし、戦時下の出版界は極めて厳しい状況に置かれていました。政府は紙の配給を通じて出版社を統制し、少しでも批判的と見なされた出版社には紙を配給しないという方法で圧力をかけました。そうした中で、戸田は自由な教育と表現を守ろうと、ぎりぎりまで抵抗を続けたのです。たとえば、英米が「鬼畜」と罵られていた時代に、戸田はイギリスやアメリカの文学を子ども向けに紹介しました。子どもたちに、世界へと開かれた視野をもってほしいという強い思いが、そこにはあったのだと思います。

牧口常三郎と戸田城聖は、1943年に治安維持法違反と不敬罪の容疑で逮捕されます。日本の戦争に対して非協力的である、あるいは天皇制国家に対して不敬である、といった理由

が挙げられましたが、実態としては国家による言いがかりでした。その結果、牧口・戸田は約二年間、獄中生活を送ることになります。牧口は1944年11月に獄中で老衰により死去しました。

戦争末期、敗戦直前に戸田は釈放されますが、その時点で日本社会は深刻な飢餓状態にありました。国民の多くが栄養失調に苦しみ、1943年には栄養失調を原因とする結核患者の数が日本史上最大となっています。そうした状況のなか、牢獄の中で十分な食事が与えられはらずもなく、戸田は極度の栄養失調状態にあり、もはや長くはもたないと判断された可能性もあります。そのため、敗戦の約一か月前に出獄することになります。

しかし戸田は、出獄後すでに日本の敗戦を予感し、戦後を見据えて出版事業再開の準備を進めていました。敗戦からわずか五日後には、通信教育講座の解説書を準備し、各新聞社に広告を打ち出します。こうした迅速な行動の一つひとつが、どのような順序で行われたのかについては、塩原さんの著書に詳しく記されています。

この頃から戸田は、自らの名を「城聖」と名乗るようになります。私たちが今日知る「戸田城聖」という名前は、戦後に確立された呼称だと言えます。戦後、戸田は『民主主義大講座』などの書籍を刊行します。このシリーズには、室伏高信や今中次麿といった論者が関わり、さらに日本の立憲政治の象徴的存在であった尾崎行雄が推薦文を寄せています。この推薦文の存在も、近年になって塩原さんによって確認されました。

このように戸田城聖は、戦前・戦中・戦後を通じて、多様な思想や自由でリベラルな言論を守ろうとした出版人であり、言論人でした。戦後も、子どもたちのために『冒険少年』という雑誌を創刊します。この児童向け雑誌の編集長に、当時20歳前後で抜擢されたのが、若き日の池田大作でした。

晩年の戸田は、青年育成に力を傾注します。戦時中の栄養失調の影響により、心臓疾患などの内臓疾患や、その他複数の病を抱えながらも、若い世代に良質な教養を身につけてほしいと願っていました。また女性に対しては、男性に従属する生き方ではなく、自立した主体として新しい時代を切り開いてほしいとの思いから、女性のための読書会も主宰していました。そこで取り上げられたのは、『水滸伝』『三国志』、アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』、ヴィクトル・ユゴーの『九十二年』、ヘンリック・イブセンの『人形の家』など、古今東西の文学です。戸田は、こうした作品を青年や学生たちに徹底して読ませようとしました。

一方で、戸田は自ら、また恩師である牧口常三郎の生涯を描くために、小説『人間革命』の執筆を開始します。実は「人間革命」という言葉は戸田の造語ではありません。もともとはカント哲学に由来する概念であり、それを東京大学総長であった南原繁が「人間革命」と訳しました。戸田はこの南原の言葉に強く共鳴し、どれほど政治制度を改革しても、根本である人間が歪んでいれば政治もまた歪むとして、人間そのものの変革こそが重要であると明言します。そして「人間革命」を、自らの思想と実践の中心に据えていくのです。

1957年当時、日本は二度の原爆投下に加え、第五福竜丸事件によって、いわば三度目の被曝を経験していました。こうした状況を背景に、戸田は「原水爆禁止宣言」を発表し、原爆・水爆、すなわち核兵器の廃絶という理想を世界に向けて訴えます。しかし、戦前からの病が重なり、1958年、戸田城聖は58歳の若さで亡くなりました。その生涯は、戦争と抑圧の時代にあって、言論と教育、人間の尊厳を守ろうとし続けた歩みであったと言えるでしょう。

以上、戸田城聖の人生を、駆け足で概観しました。ここには、戸田城聖の評伝をお書きになった専門家である塩原さんがいらっしゃいますので、塩原さんのほうで、もし補っていた点があればお願いいたします。

戸田城聖を研究する意味

塩原 最初に、今年、私自身も見つけて嬉しかった話からさせていただきたいと思います。料理愛好家の平野レミさんをご存知の方はいますか。番組を見ていた際に、平野レミさんのご家庭の話が出てきまして、お父さんの話になりました。実は、お父さんが、ここに持ってきましたが平野威馬雄さんという方で、児童文学を書いている作家なんです。そこで私は驚いて、「レミさんのお父さんが平野威馬雄さんだったのか」と思いました。

この平野威馬雄さんは、先ほど紹介された戸田先生の出版社から本を出しているのです。しかも刊行時期が、戸田先生が牢獄に入る一年前、いや半年前くらいの時期に当たる。平野レミさんのお父さんはアメリカ人と日本人のハーフで、当時は何かと目をつけられやすい立場でもありました。実際に憲兵や警察に引っぱられ訊問されたこともありました。そうした中にあっても、子どもたちに本当に良い本を届けようとして、正面から、ぎりぎりまで努力していた。そのことを、私は改めて実感しました。

続いて、戸田先生について学ぶことの意味を、3つ挙げておきたいと思います。第1に、牧口常三郎について勉強したい、もっと深く学びたいと思う方がいるとしたら、牧口常三郎という人物を最もよく知っているのは誰か。それは、戸田城聖です。ですから、戸田先生を学ぶことは、牧口常三郎の姿を正確に学ぶうえで、必須だと私は考えます。

第2に、戸田先生は時習学館をつくり、またそれ以前には北海道の真谷地という場所で小学校教員も務めました。戸田の教育を一言で表すなら、「どんな劣等生も優等生にしてみせます」という言葉に尽きます。皆さんの中で将来、学校の先生を目指している方は、当然、さまざまな子どもたちと向き合うことになります。その中には対応が難しい子どももいるでしょう。そうした子どもたちを、どうすればのびのびと、その子らしく伸ばしていけるのか。そのヒントは、戸田城聖の教育を学ぶことで得られるのではないかと思います。そのために非常に大事な本としては、『推理式指導算術』の前に出版され、戸田先生の教育の総論に当たる『愛児の優等化』という書籍があります。ここには、勉強が得意でない子を、どのようにして勉強できる子にしていけるかが、体験的に書かれており、非常に参考になるはずです。

第3に、創価大学の創立者は池田先生です。この池田大作という人物が、最も影響を受け、

最も尊敬したのは誰か。それは当然、師匠である戸田城聖です。したがって、戸田城聖について学ぶことは、創立者について、より正確に、より深く学ぶことにもつながると思います。それでは、戸田城聖に学ぶ際のポイントは何かということ、いわゆる「戸田大学」と呼ばれる部分です。戸田大学という場で、池田大作という一人の青年を育て上げ、世界のさまざまな知識人や指導者と対等にやり取りできる人物に育て、また多くの人々の幸福を切り開いていくリーダーへと導きました。そういう意味において、戸田城聖を学ぶことは、池田大作という人物をより深く知ることにもなるのです。

最後にまとめます。いわゆる牧口・戸田・池田という三代を貫いて流れているものは、一体何なのか。途中で投獄されたり、池田先生の場合も会社が倒産して大変な思いをしたりしながら、それでも一歩も引かずに戸田城聖についていった。なぜそういう生き方ができたのか。それは、それぞれが牧口という人物に、戸田という人物に、「本物の人間」を見たからだと思います。

では、「本物の人間」とは一体何か。戦前に国際連盟の事務次長を務めた国際人、新渡戸稲造という著名な人物がいますが、この新渡戸が『創価教育学体系』の序文を書く際に、次の趣旨のことを書いています。すなわち、牧口常三郎が目指しているのは、単に目の前の子どもたちの幸福だけではない。世界の民衆、全民衆の幸福を願っていることが、牧口の思想の中に現れている、という指摘です。これは戸田城聖も、さらに池田大作という人物も、生涯を通じて貫いてきた部分ではないかと思います。

したがって、この「創価教育論」の授業においても、聞いた話をそのままにするのではなく、今度は自分で学ぶという形で、そうした人物が一体どのような人物だったのかを、自分のペースで考えていく。その中で、自分の中に一つ、尊敬できる存在を見いだしていただければよいのではないか——私はそのように考えております。以上です。

伊藤 今、戸田城聖の教育思想の側面についてのお話がありましたが、私も一つ、ここで触れておきたいことがあります。それは、『推理式指導算術』の「推理式」という言葉の意味です。

推理というのは、推測するということです。それがなぜ「価値創造」や「創価教育」という理念と結びつくのか。この点については、先ほどご紹介した鈴木教授の本を読んでいただくとよく分かるのですが、簡単に言えば、戸田は当時の算数の受験問題を徹底的に検討し、基礎的な問題から応用・発展的な問題へと順序立てて配列しました。そして、学習者が独学によって数学の核心に到達できるよう、全体を設計していたのです。

興味深いのは、20世紀後半の日本を代表する哲学者の一人である鶴見俊輔が、この『推理式指導算術』について言及している点です。鶴見俊輔はハーバード大学で学び、93歳で亡くなるまで日本思想や西洋哲学について語り続けた人物ですが、晩年に、戸田城聖の推理式指導算術を自学自習したことで自分は高等教育まで進むことができた、と述べています。創価学会というと宗教団体のイメージで語られがちだが、自分は戸田城聖の書いた本によっ

て学び、勉強が好きになることができた。だから自分には戸田城聖に対する学恩がある——鶴見俊輔はそうのように語っているのです。

ですから皆さんも、鈴木先生の『推理式指導算術』の入門書をぜひ手に取って、自学自習してみたいと思います。算数や数学と聞くと、「自分は苦手だ」「もう無理だ」と、その時点で拒否反応を示す人もいるかもしれません。しかし、できるものから始めてください。基礎問題と応用問題を比べて、何が同じで、何が違うのかを考える。戸田は、これを「同等性と差異性を見いだす練習」だと言っています。そうした思考の積み重ねが、新しい状況に直面したとき、過去の経験をどのように応用すればよいかを見極める「応用の知性」を育てるのです。

価値創造とは、まさにそういうことです。今までなかったところに、新しいものを生み出す。これまでの時代と、これからの時代の間に、何が同じで、何が違うのかを見極める。皆さんはこれから、未曾有の人工知能時代を生きていくことになります。今年は「AI エージェント元年」とも言われていますが、同時に世界を見渡せば、戦争、ナショナリズム、ポピュリズム、排外主義が各地で噴き出しています。こうした時代において、過去と未来の同等性と差異性を見極め、これまでの経験から何を応用できるのかを考える。その思考の原点が、実は算数の中にもあるのだ、ということです。

以上を踏まえて、戸田城聖という人物の歴史的意味をまとめておきたいと思います。先ほど塩原さんが、牧口を知るため、池田を知るため、そして学びを中心とする教育を知るための3点を挙げてくださいました。

それに加えて、私からも3点挙げたいと思います。まず、戸田城聖は偉大な出版人であったという点を強調したいと思います。日本では、学者や出版者というと、エリート中心で、学者が書いた難解な本や、いわゆる純文学が研究対象になりがちです。しかし戸田は、推理小説や大衆小説といった、多くの人が日常的に触れる文学にこそ力を注ぎました。その意味で、日本の大衆文学史、大衆文学雑誌史において極めて重要な人物です。

また、高崎隆治が評価しているように、戸田は戦時下の雑誌編集者として、権力や軍部の意向に全面的に屈することはありませんでした。当時の出版社は、多かれ少なかれ政府の方針に従わざるを得ませんでしたし、したがって、戸田の雑誌にも政府の意向が反映されている部分があることは否めないでしょう。しかし、高崎は、「日本のすべての雑誌を精査してほしい」と述べた上で、「100%軍国主義的な雑誌も存在する中で、戸田はその度合いを最小限に抑えようとした。その努力が活字からひしひしと伝わってくる」という趣旨の評価をしています。戦時下の言論史を理解するためにも、戸田城聖という人物は欠かすことができません。

そして最後に、戸田が最晩年に行った「原水爆禁止宣言」です。なぜ戸田は、核廃絶こそが最も重要だと考えたのか。核兵器は生命軽視の象徴であり、人間の尊厳を損なうものである——戸田はそう見抜いていました。今日、ようやく核廃絶を訴える団体がノーベル平和賞

を受賞する時代になりましたが、戸田はその半世紀以上に、この問題を正面から提起していたのです。その意味で、戸田城聖は、核廃絶という20世紀の最重要課題に向き合った、先駆的な思想家の一人として再評価されるべき人物だと私は考えています。

戦時下で抵抗した雑誌編集者として、日本の大衆文学の支援者として、そして核廃絶という人類の未来を見据えた思想家として——戸田城聖は、そうした多面的な評価に値する人物である。私はそのように考えています。

高崎隆治の略歴

伊藤 以上のような見方について、私が何よりも大きな影響を受けたのは、これからお話しする高崎隆治という人物からでした。ここから、今日の主題に入っていきたいと思います。最初に高崎の略歴を紹介しておきます。

高崎隆治は1925年に神奈川県横浜で生まれ、2013年に88歳を迎える直前に亡くなりました。法政大学文学部を卒業し、戦時中は学徒兵として戦争の現場に送られ、一兵士として非常に過酷な体験をしています。戦後は高校教師として、また大学の非常勤講師を務めながら、戦時下文学、戦時下ジャーナリズムの研究に生涯を捧げました。

十五年戦争、とくに太平洋戦争中、日本の著名な文学者や作家の多くは、戦争に協力していました。率直に言えば、九割以上が戦争協力をしていたと言ってよいでしょう。しかし戦後になると、多くの人がその事実を忘れたかのように振る舞い、あたかも初めから平和主義者であったかのように語り始めます。高崎隆治は、そうした偽善的態度を決して許しませんでした。

高崎は、戦時中に実際に何が起きていたのかを明らかにするため、作家たちの行動や発言を徹底的に調査しました。ありとあらゆる出版物、雑誌、日記、書簡を精査し、戦時下文学研究、戦時下ジャーナリズム研究という未踏の分野を切り拓いていきます。戦時下文学研究という分野が本格的に注目されるのは、ようやく近年になってからですが、高崎はその半世紀以上に、この研究に取り組んでいたのです。

高崎は最終的に、非常勤講師として教える道を選びました。専任教員になると業務に追われ、研究時間が奪われることを避けたためです。収入は減りましたが、その分、時間を研究に注ぎ込むことを選んだのです。彼は、自費で、いわばボランティアのような形で、戦争中に作家たちが発表した出版物を全国から集め続けました。戦争協力をした作家の中には、戦後、自らの戦時作品を焼却した者も少なくありませんでした。しかし高崎は、古書店や倉庫などを巡り、残された資料の一つひとつを確認し、日本の戦時下言論が実際にはどのようなものであったのか、記録を発掘して分析しました。

インターネットもない時代に、自ら書き、自ら印刷し、発表し続けたその成果が、やがて書籍として結実したのが『戦争文学通信』です。高崎は、文学とは有名作家の作品だけを指すのではなく、戦争で命を落とした無名の兵士たちの詩集や手記も、正当に文学作品として

評価されるべきだという立場を貫きました。

また、高崎は戦時下の雑誌資料をほぼ個人で収集し、国立国会図書館にも所蔵されていない資料を数多く所持していました。国会図書館から寄贈を求められた際にも、「自分の研究に一元も支援しなかった機関に、なぜ生涯をかけて集めた資料を渡さなければならないのか」として、これを断っています。その貴重な研究資料は、最終的にご遺族の手によって創価大学池田大作記念創価教育研究所に寄贈されました。

高崎隆治は、戦時下ジャーナリズム研究の第一人者であり、また大手出版社——たとえば文藝春秋社や新潮社——が戦争中にどのような形で戦争協力をしていたかについても、厳しく検証しました。高崎が編集顧問を務めた『昭和万葉集』（後述）の版元である講談社に対しても、例外ではありませんでした。

さらに高崎は、戦争史研究、とりわけ南京事件の研究においても先駆的な役割を果たしました。南京事件については、事件否定論から大虐殺説まで多様な見解がありますが、高崎は、日本軍が南京に進軍した際に参加していた作家たちに注目しました。これらの作家が書いた戦場レポートを徹底的に収集・分析し、その記述をもとに、高崎は少なくとも約20万人の中国民衆が犠牲になったと結論づけています。この見解によって、高崎は日本の右派勢力から攻撃を受けましたが、それでも事実を事実として冷静に見つめる姿勢を崩しませんでした。日本最初の南京事件研究会においても、高崎は4人の先駆的研究者の1人でした。

戦争は人間を変えてしまう——これは多くの作家が戦争体験の中で語ってきたことですが、高崎は、その変質を感情的にではなく、事実に基づいて記録し、反省することこそが歴史研究の責務だと考えていました。日本軍による慰安所の設置や毒ガス開発といった問題についても、公開資料だけでなく未整理資料を収集し、日本史研究として後世に残しています。

1996年には、その長年の功績、とくに著書『従軍作家・里村欣三の謎』に対して、京都大学人文科学研究所から表彰を受けています。この著作についてもものちほど触れようと思います。

こうした多面的な業績を踏まえると、高崎隆治は、戦後日本を代表する偉大な人文科学者の一人であったと言えるでしょう。とりわけ、戦場における女性作家たちに光を当て、戦争とジェンダーの関係を掘り起こした点も、高崎研究の重要な意義の一つです。

里村欣三研究・戸田城聖研究

伊藤 高崎隆治の代表作の一つに、『従軍作家・里村欣三の謎』という本があります。日本の作家の多くが戦争に協力していった時代にあって、里村欣三という作家は、もともと日本軍に強い嫌悪感を抱き、徴兵忌避した人物でした。当時、徴兵忌避は、発覚すれば投獄に処されるほどの重罪でした。そのため里村は、本名を隠し、別名を用いて作家として活動を始めます。非常に過酷な境遇を生きた作家だったと言えます。

里村欣三は最終的に再び戦場に送られ、戦争の中で命を落とします。ところが戦後、生き

残った作家たちは、あたかも里村欣三が日本の戦争に積極的に加担した作家であったかのよう
に語り、戦争責任を彼一人に押し付けるかのような言説が広まりました。

これに対して高崎隆治は、里村欣三が書いたあらゆる作品、書簡、資料を丹念に調査しま
す。その結果、里村が軍隊内での抑圧やいじめの経験をもち、日本国家によって排除された
不幸な人々に寄り添おうとした作家であったことを明らかにしました。彼の従軍経験は、日
本の戦争を賛美するためのものではなく、むしろ戦争の現場がいかに過酷で、悲惨なもので
あるかを冷静に見つめる視点に支えられていたのです。

さらに高崎は、里村欣三が最終的には日本を脱出しようとしていたのではないか、という
仮説を立てています。以上のような高崎の研究によって、岡山県（和気郡福河村、現在の備
前市日生町）出身の里村欣三は「忘れられた作家」から再評価される存在となり、2010年
には里村欣三顕彰碑が建立され、記念行事も行われるようになりました。その記念事業には
高崎自身も関わり、現在、記念碑には高崎隆治の里村研究の言葉が刻まれています。

さらに興味深いのは、高崎が調査を進める中で、里村欣三が戦時中の創価教育学会——す
なわち牧口常三郎・戸田城聖による戦時下の創価教育学会——の会員であったことを突き止
めた点です。里村は戦時中、創価教育学会の仲間たちに宛てて手紙を送っていました。こう
した事実から高崎は、創価教育学会という存在が、戦時下の日本において、国家権力によっ
て排除されがちな弱い立場の人々を包摂する場であったのではないか、という問題意識を抱
くようになります。

加えて高崎は、戦時下ジャーナリズムの研究を進める中で、一冊の奇妙な雑誌に注目しま
す。それが『小国民日本』という雑誌でした。当時、文部省は児童のことを「少国民」とい
う漢字で表記していましたが、その雑誌では「少」ではなく「小」という字が用いられてい
たのです。しかも、戦意高揚的な内容が極めて少なく、「のびのびと、明るく」といった編
集方針が掲げられ、イギリスやアメリカの児童文学が紹介されていました。

高崎が発行人を調べると、そこには「戸田城外」という名前が記されていました。横浜出
身の高崎は、戸田城聖が神奈川で「原水爆禁止宣言」を行った人物であることを知っていた
ため、最初は親族ではないかと考えます。しかし調査を進めるうちに、「戸田城外」が戦時
下における戸田城聖のペンネームであることを知ります。

こうして高崎隆治は、自らの戦争史研究、文学研究、ジャーナリズム研究のすべてを背景
として、戸田城聖という人物研究へと深く踏み込んでいくことになります。その過程で、忘
れられた作家・里村欣三の著作集を編集したり、講談社の『昭和万葉集』全20巻という大
規模編集事業の編集顧問を務めたりと、日本文学史研究においても非常に重要な役割を果た
しました。

そうした仕事をふまえ、改めて戸田を中心にまとめた研究が、『戸田城聖——1940年の決断
軍国教育との不屈の戦い』です。この著作は、1940年前後、日本の文部省が「少国民教育」
を通じて、子どもたちを将来の兵士として育てようとしていた時代に、戸田城聖が「子どもた

ちは元気に、のびのびと、明るく、強く育つべきだ」という教育理念を打ち出し、子どもたちの命と人生、幸福を守ろうとしたことを、文献に基づいて実証的に明らかにしたものです。

当時の小学校一年の国語教科書、いわゆる「サクラ読本」では、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」という有名な一文の少し後に、「ススめ ススめ ヘイタイ ススめ」という文章が配置されていました。つまり、桜が散るように命を捧げよ、という思想を子どもたちに刷り込む教科書だったのです。昭和一桁世代、1930 年前後に生まれた人々は、皆この教科書で教育を受けました。戸田城聖は、こうした軍国教育のもとに置かれた子どもたちを何とかして守りたいという思いから、雑誌編集を続けていた。そのことを高崎隆治は、徹底した文献調査によって明らかにしました。

高崎隆治との出会い

伊藤 以上、高崎隆治とその戸田城聖研究について、私の方から簡単にご紹介しました。ここからは、塩原さんと私とで、当時の思い出を語り合いながら、高崎の戸田研究の意義を考えていきたいと思います。まず塩原さんにお伺いしたいのですが、最初にご縁ができたのは、どのようなきっかけで、いつ頃のことだったのでしょうか。

塩原 正確には覚えていないのですが、伊藤さんと一緒に伺ったような気がします。横浜のご自宅でしたね。創価大学の創価教育研究センター（現：池田大作記念創価教育研究所）でご講演いただいたのは 2001 年でしたよね。その講演依頼でお伺いしたと記憶しています。2000 年が斎藤正二先生の講演で、2001 年が高崎隆治先生でしたから、その少し前ですね。

伊藤 私も塩原さんと一緒に伺った記憶があります。あの頃のことを、私も今、思い出しています。私が高崎隆治と初めて出会ったのは、大学 1、2 年生の頃でした。1994 年か 1995 年だったと思います。横浜で、戦争体験についての講演をされていたのです。その講演では、ご自身の戦争体験とともに、「戸田城聖」という人物がいかに優れた存在であったかについて語られていました。

私はたまたまその講演を聴く機会があり、非常に強い感動を覚えました。高崎はまず、自身の戦争体験を語られました。そして、戦時下において、日本の文学者たちがこぞって戦争に協力していた事実について触れ、さらに戦後になると、それを恥じた作家たちが、自らの戦時中の作品を燃やしてしまったという話をされたのです。

中でも印象的だったのは、菊池寛についてのエピソードです。菊池は学生アルバイトを雇って古本屋から自著を回収させました。その理由は、自身の戦争協力を隠蔽するためで、回収後に書籍を焼却しています。高崎隆治がなぜそのような「秘密の話」を知っているのかというと、実はその回収作業を行った学生アルバイトの一人が、高崎自身だったというのです。

後になって、戦時中の発言がまるで存在しなかったかのように振る舞う作家たちの姿を目の当たりにし、高崎隆治は深い失望を覚えた。そのことが、戦時下文学研究を始める直接のきっかけだったと語られていました。この話は、私にとって非常に衝撃的でした。

さらに講演の後半では、戦時下ジャーナリズム研究の視点から、「戸田城聖」という人物が、いかに卓越した出版人であったかについて、一般向けの講演で熱を込めて語られていました。その姿に私は強く心を打たれ、講演終了後、控室を訪ねて、「ぜひ創価大学で講演をしていただませんか」とお願いしました。それが1995年頃だったと思います。

その後、1997年、あるいは1998年だったかもしれませんが、実際に創価大学で講演をしてくださいました。その流れの中で、塩原さんもまた「ぜひ高崎先生に講演をお願いしよう」と考えられたのではないかと思います。

ちょうどその頃、創価教育研究センターが設立され、塩原さんたちが準備委員会として中心になって立ち上げを進めておられました。その記念すべき最初の講演者が牧口常三郎研究の第一人者である斎藤正二で、続く2人目の講演者として選ばれたのが、戸田研究の先駆者である高崎隆治でした。そして2001年にふたたび創価大学で講演をしていただいた、という流れになります。

私自身も、こうして振り返りながら、当時の記憶が次々によみがえってきました。そこで改めて塩原さんにお伺いしたいのですが、高崎隆治について、特に心に残っているエピソードでも、お人柄でも、どのようなことでも構いませんので、ぜひ教えていただければと思います。

戸田編集雑誌コレクション

塩原 高崎先生がなさっていたことで、今ご紹介があった『小学生日本』『小国民日本』という雑誌の扱いは、非常に印象深いものでした。高崎先生はこの雑誌を長年にわたって古書店で収集し、本当に大切に保管されていました。「大切に」というのは、単に書棚に置くという意味ではなく、わざわざ銀行の貸金庫を借りて、そこに保存されていたのです。

この『小学生日本』という雑誌は、現存数が極めて少なく、号によっては世界に一冊残っているかどうか、というレベルの資料です。私がその雑誌を実際に見せていただいたとき、戸田城聖という人物を理解するためには、まだ発見されていない『小学生日本』『小国民日本』を掘り起こしていくことが、まず第一歩になるのだと強く感じました。そこから私は、高崎先生に導かれる形で、資料収集に本格的に取り組むようになりました。

この『小学生日本』には、寄稿者として、たとえば漫画家の長谷川町子さんが名を連ねています。ご存知の方も多いと思いますが、『サザエさん』を描いた長谷川町子です。彼女がまだ若い頃に、この雑誌に関わっていました。

また、『小学生日本』を小学校五年生のときに愛読していた少年がいます。後に漫画家となる人物ですが、手塚治虫です。『鉄腕アトム』や『リボンの騎士』などで知られる手塚治虫が、ちょうど小学生5・6年生の頃、この雑誌を読んでいたことが、さまざまな研究から明らかになっています。というのも、『小学生日本』には「感蛙（かんがえる）博士と飛男（とびお）君」という漫画が掲載されており、手塚治虫が後に『鉄腕アトム』を描く際、交通事

故で亡くなった少年「トビオ」をもとにアトムが製作されるという設定になっているのです。これは、この雑誌から着想を得たのではないかと指摘されています。

このように、『小学生日本』は非常に重要でありながら、なかなか現物が見つからない雑誌です。しかし、高崎先生の助言と支えを受けながら資料を集めていく中で、最終的には全体の85%を確認することができました。それによって、戸田城聖がどのような教育観に基づいて編集を行っていたのかが、かなり明確に見えてきました。

なぜ『小学生日本』がほとんど残っていないのかについてですが、その理由の一つとして、刊行された時期が、小学校教育そのものがほぼ機能を失っていた時代だったことが挙げられます。そのため、この雑誌では通信添削による学習が行われており、子どもたちは課題部分を切り取って郵送していました。結果として、雑誌そのものが破られ、保存されにくかったのだと思います。

以上のような経緯があり、私自身、『評伝 戸田城聖』を書くことができた最大の恩人は、やはり高崎先生であったと、改めて深く感じています。

伊藤 私も、横浜のご自宅のことをよく覚えています。「金庫なら火事があっても燃えないから」とおっしゃって、国会図書館でも所蔵していないような雑誌や書籍を大量に所蔵されていました。その中でも、戸田編集の『小学生日本』『小国民日本』については、11冊所蔵されていました。高崎隆治は、それらをすべて自費で集め、横浜の銀行の貸金庫に保管していました。私たちが一度、「コピーを取らせていただけないか」とお願いしたときには、わざわざその金庫から資料を取り出し、ご自宅で直接見せてくださいました。そして最終的に、その貴重な資料を創価大学に寄贈してくださったのでした。

戦時下研究の意義

伊藤 ここで、歴史的な資料の持つ意味について、少し補足しておきます。皆さんも実感していると思いますが、今は人工知能や生成 AI が急速に発達し、どこまでがリアルで、どこからがフェイクなのか、どこまでがファクトで、どこからが虚偽なのかが非常に分かりにくい時代です。インターネットの世界には、はっきり言えば、有象無象の情報があふれ、書きたい人が書きたいことを書いています。一見すると民主的に見えるかもしれませんが、実際にはファクトチェックのなされていない歴史記述が大量に流通しています。

たとえば、今から80年前の戦争中、日本では政府が紙の配給量まで統制していました。つまり、出版社が戦争を公然と批判することなど、ほとんど不可能な時代だったのです。そのような戦時下の出版物を、戦後に生まれた私たちが目にとると、「なぜこれほどまでに戦争協力をしているのか」と、皆が同じような「悪人」に見えてしまう。しかしそれは、戦後、あるいは21世紀の価値観で、80年、100年前の人々を裁いていることになります。100年前の人々は、今とは全く異なる世界観の中で生きていました。政府によって言論の隅々までが統制されていた時代です。だから、今の私たちの目には、一見「五十歩百歩」に見えてし

まう。「どうせ皆、戦争協力をしていたのだろう」と。

しかし高崎隆治は、こう言いました。権力に対して五十歩妥協するのか、五十一歩妥協するのか、五十二歩妥協するのか——それは一人ひとりまったく違うのだ、と。「五十歩百歩」などという言葉で、分かったつもりになって歴史を見るな、と。戦時中の日本人は皆戦争に協力した、などと簡単に言うってしまうのは、歴史をよく理解していない態度だ、と高崎は厳しく批判していました。実際には、人々はそれぞれの置かれた状況の中で、ぎりぎりのところで抵抗していた。五十歩の妥協なのか、六十歩の妥協なのか——その違いは、将来に大きな差を生むのです。

高崎は、そうした視点から、一人ひとりの状況の違いと、その選択がもたらした結果を、冷静かつ厳密に分析しました。たった一文字——それが「は」なのか「が」なのか。その違いによって、文章全体の意味が変わってしまうことすらある。なぜここでこの文字が使われたのか。10通り、20通りの仮説を立て、検証を重ねる。そうした地道な歴史研究の重要性を、高崎先生は非常に厳しく、そして真剣に語っておられました。

塩原さんに改めてお伺いしたいのですが、ほかに特に心に残っているエピソードはありますか。

塩原 本当に、会うたびに励ましてくださったことが、今でも強く印象に残っています。その意味では、改めて、とても温かい方だったと思います。また、奥様とのエピソードも印象深いです。学徒出陣の際、学生たちを見送った多くの女学生の中に、後に奥様となる方がいらっしやった、という話を、折に触れて語っていただきました。

伊藤 本当にそうですね。高崎隆治は、真実を探究する学者であり、いわゆる世間的に「儲かる」仕事とは無縁の道を歩まれていました。誰も手をつけようとしなかった分野、むしろ戦争中の文学には価値がないと、多くの文学者や歴史家が見向きもしなかった資料群に対して、「ここを研究しなければ日本の近代史は見えてこない」と考え、新たな研究分野を切り拓いた。しかも当時は、戦時中に活躍した作家たちがまだ存命で、高崎の研究は出版界からも冷遇され、「とんでもない研究だ」と批判されることも少なくありませんでした。そのような状況の中で、奥様はまさに二人三脚で、高崎隆治の研究人生を支えてこられたのだと思います。

温かい人だったという話で、私が思い出すことがあります。高崎隆治とは、晩年に至るまでお付き合いが続きしました。私は論文を書くたびに必ずお送りしていたのですが、すると毎回、必ず直筆の感想の手紙が届くのです。振り返ってみると、論文と手紙のやり取りは、全部で50回以上になります。手紙の中では、「伊藤さんの研究は、ここまではとても良い。しかし、まだここが足りない。この点をもう少し調べていけば、もっと歴史のリアルな真実が浮かび上がってくるはずだ」といった具合に、具体的で率直なコメントをくださっていました。

私は昭和生まれだからかもしれませんが、学問というのはやはり厳しく鍛えてもらいたい、という気持ちが強い人間です。今の皆さんからすると、私のこうした考え方は、少し威圧的に感じられるかもしれませんが。しかし私は、自分がいかに知らないかということを、きちんと

と教えてくれる人に学びたいと思ってきました。その点で、高崎の指導は本当に厳しくも温かいものでした。毎回、便箋に何枚も何枚も、分厚い手紙を書いてくださる。その手紙が届くのが、私は楽しみで仕方なかったのです。

高崎隆治と私とでは、年齢が50年ほども離れていました。感覚的には、祖父と孫ほどの差があったと思います。それでも私を一人の研究者として、また一人の人間として、常に対等に扱ってくださいました。そこには、分け隔ても、偏見も、一切ありませんでした。その姿勢に触れるたびに、高崎隆治という人は、学者としてだけでなく、人間としても本当に稀有な存在だったのだと、改めて感じさせられます。

さて、今日は、今から20年ほど前になりますが、高崎先生が創価大学で講演された頃、その講演会の準備と一緒にされていたOBの方がいらっしゃいます。その方が、今日「高崎隆治を記念するシンポジウムをやるなら、ぜひ行きたい」とおっしゃって、わざわざ来てくださいました。そこでぜひ、自己紹介とともに、高崎先生についてのお話をさせていただければと思います。31期生の上原淳司さんです。よろしくお願いします。

上原 はじめまして。31期生の上原淳司と申します。ほとんどの方にとって、知らない人から知らない人の話を聞くという状況になっているかと思いますが、少しお話しさせていただきます。

すでにご紹介がありましたが、高崎隆治という方は、何百万もの命を奪った日本の戦争について、一生をかけて考え続けた人です。ちなみに、ウィキペディアなどを見ると、「学徒兵として召集」と簡単に書かれていますが、これはかなり省略された説明です。正確には、志願兵になれば一定の特権を得られた時代に、あえて志願せず、召集されるまで兵士にならなかった人物です。そのため、入隊後も「なぜ志願しなかったのか」と、難詰され、殴打されるなど、過酷な目にあっています。

なぜ志願しなかったのかについては、いくつもエピソードがありますが、一つだけ紹介します。戦時中、売れっ子作家に火野葦平がいました。特に有名なのが『麦と兵隊』で、同じシリーズに『土と兵隊』『花と兵隊』があります。高崎隆治は、この中から『土と兵隊』を手に取ります。理由は特別なものではなく、小遣いで買える範囲だったから、というものです。

この『土と兵隊』には、中国戦線での戦闘の様子が描かれており、捕虜となった中国人少年兵が登場します。しかし、その少年の描写は、突然別の場面に切り替わってしまうのです。これは当時の検閲によるものでした。検閲への対応には、「××」のように伏せ字にするもの、書き換えるもの、そして削除するものがありますが、この箇所は削除されていました。それも、一つの空行もなく、削除の痕跡がわかりにくい形でした。

文学的な省略表現のようにも見えるのですが、当時の少年・高崎隆治は、何かしらの断絶があると考え、「この少年兵は、殺されたのではないか」と推測します。そして、捕虜となった少年を殺すような戦争は正義ではない、と判断し、不利益を承知で志願しなかったのです。事実、高崎の推理どおり、戦後に出た『土と兵隊』には、捕虜数十名が殺されたことが書か

れています。(なお、火野自身が、虐殺に加わったわけではありません。)

戦後の高崎は、「あの戦争はなんだったのか」と、問い続け、徹底して資料を集めていきます。高校教員でしたので、修学旅行なども利用して、地方の古本屋を探し回ったそうです。しかし、それでは時間が足りないと考え、給料が半分以上になることを承知のうえで、非常勤講師の道を選びました。こうした生き方からも分かるように、戦争や命に対する思いは強く、安易な言動や研究に対する目は、非常に厳しい方でした。その高崎隆治が、後半生の研究テーマとしたのが、戸田城聖、創立者・池田大作、そして創価教育学会と関わりのある里村欣三であったという事実を、重く受け止めたいと思います。

もう少し補足しますと、現在のウィキペディア記事に「創価学会・団体系の人物」と書かれています。確かに『第三文明』や『潮』への執筆は多いのですが、そのために、創価学会に批判的な人々からは、「高崎は学会に胡麻をすっている」と中傷されることもありました。一方で、ごく一部からではありますが、創価学会員から「信仰していないあなたに、戸田先生の何が分かるのか」と詰問されることもあったそうです。つまり、あまり良い目にあっていないのです。

それでも高崎隆治は、損得ではなく、戸田城聖の研究、池田大作の研究、里村欣三の研究を続けました。本日お集まりの皆さんの中で、お1人でもお2人でも、そうした姿勢や研究に興味を持っていただけたなら幸いです。以上です。

日米開戦時の5つの予言

伊藤 創価大学で行われた高崎の最後の講演があります。85歳のとき、90分間立ったまま、講義形式で最後の講演をしてくださいました。題は「戦時下の1943年、夏を語る——創価教育学会弾圧の前後」です。ここでは、高崎隆治の「証言」とも言うべき語りが、記録として残されています。この講演の中で高崎は、次のような回想を語っています。

1941年12月8日、日本が真珠湾攻撃を行い、アメリカに宣戦布告、太平洋戦争が始まった。当時、高崎は16歳でした。その日の夜に親の前で「戦争の見通し」を語ったと言います。しかも、5つの「予言」をしたのだ、と。

- 1) 東京と横浜は焼け野原になる。
- 2) その前に、頭の上に原爆が落ちる。
- 3) その直前に、ソビエトが参戦する。
- 4) しかし、そうなる前に、自分は戦場のどこかで死んでいる。
- 5) 戦争は昭和20年に終わる。

1941年は昭和16年ですから、高崎は、結果的に5年先までを見通していたことになります。では、なぜそれが可能だったのか。高崎はこう説明します。

高崎が学んでいた学校の教員に、海軍関係の事情に通じた人物がいて、日本の海軍が保有する石油、つまり艦隊を動かす燃料が、どの程度もつかという計算を教えてくれた。備蓄は

概ね2年分で、仮に艦艇が沈めば沈むほど燃料消費は減るから、最終的に3年程度は持つだろう。昭和16年から数えれば、昭和19年頃までが限界で、昭和20年には戦争は終わる——そういう現実的な見積もりが成り立つ、というわけです。

では、なぜ原爆が落ちることまで予見できたのか。高崎は、昭和16年の段階で、少年雑誌や科学雑誌に、すでに世界の科学者たちが原爆開発に取り組んでいることが紹介されていた、と述べます。そこには、原爆開発には2つの条件がある、と書かれていた。すなわち、最高の経済力と、最高の頭脳です。当時、「最高の頭脳」はドイツにあると考えられていた。しかし、ヒトラーによるユダヤ人迫害によって、アインシュタインをはじめとする著名な学者たちがドイツを離れ、アメリカへ亡命した。その結果、「最高の頭脳」はドイツからアメリカへ移る。アメリカは圧倒的な経済力をもつ。したがって原爆を開発するのはアメリカである。そして、そのアメリカに日本が戦争を仕掛ける以上、原爆は必ず日本に落とされる——高崎先生は少年ながら、そう判断したというのです。だからこそ、高崎は、政治家たちが「原爆が落とされるなど思いもしなかった」というのは、後になっての言い訳に過ぎない、と語っていました。

この講演は、1943年という戦時下のただ中で、牧口と戸田がどのような状況で投獄されていったのかを、同時代を生きた当事者の視点から証言するものでもあります。

塩原さん、上原さん、他に何か思い出されるエピソードはありますか。

上原 何度かお話しさせていただく機会がありました。ただ、私には専門的な話ができないので、何を質問すればよいのか分からず、それでも、高崎先生が非常勤講師として経済的な不利益を引き受けながら研究を続けていたことは有名でしたから、「なぜそこまで志を貫くことができるのですか」とお聞きしたことがあります。

すると先生は、こう答えてくださいました。——朝鮮の方たちが従事して建設された、ある駅がある。完成後、彼らの住んでいたバラックは突然壊された。その時にいたのは、女性と子どもだけだったが、警官たちはサーベルのさやで女性を叩きながら立ち退きをさせた。ちょうど自分は、母親とその場面を目撃し、ただただ震えるだけだった。ケガをした女性のなかに、知人がいて、その夜、包帯をした姿で別れを告げに来了。

自分は、その人たちを見て、決して彼らをいじめる側には立たない。必ず彼らのために生きる、と決めた。そうでなければ、自分が生きている価値はないと思って生きている——先生はそうにおっしゃいました。この言葉は、今でも私の心に深く残っています。

戸田研究の今後

伊藤 高崎隆治は本当に温かい方でしたし、既存の枠組み、世の中で「良い」「悪い」とされている通念を、いったんすべて自分の目で確かめ直す。徹底してファクトを確認する。そういう意味で、実に公明正大さを備えた方だったと思います。

最後に、高崎隆治の研究を踏まえつつ、今後の戸田城聖研究について伺いたいと思います。

塩原さんが、高崎から受け取った研究上のメッセージをどのように受け止め、今後どのような点に取り組もうとしておられるのか。また、現在進行中のご研究についてでも結構ですので、お話しいただければ幸いです。

塩原 これは、むしろ皆さんへのお願いという形になるかもしれません。戸田城聖という人物は、戦前、青年期にあたる時期だけでも、学習参考書を27冊執筆しています。しかし、そのうち現在までに何らかの形で確認されているものは、半数にも満たないのが現状です。今年（2025年）も、青森県弘前市の小学校が所蔵していたもので、これまで他では確認されていなかった戸田先生の参考書が1冊、新たに発見できました。

そういう意味で、戸田城聖研究の基盤を整えるためには、戸田が執筆した学習参考書がどこに存在しているのか、また、いつ、どのような形で再発見されるのか分からない中で、地道に探し出し、戸田の教育実践の全体像を明らかにしていく必要があると考えています。先ほど『推理式指導算術』の紹介がありましたが、実は戸田は『推理式指導読方』『推理式読方指導』という形で、国語の参考書も数多く執筆しています。弘前で見つけたのは指導読方普及版でした。さらに他の巻も見つけ出したいと考えています。

鶴見俊輔さんの話に関連して付け加えますと、鶴見さんは小学校時代、成績が振るわず、附属の上級学校への進学が難しいと教師から告げられたそうです。しかし、鶴見さんのご両親は、「そんなことを言う学校に行く必要はない」と判断し、『推理式指導算術』や『推理式指導読方』、さらに創価教育学会員の教師による家庭教育を受けさせました。その結果、当初は進学予定ではなかった学校に合格し、さらにハーバード大学へ進学するに至った、という経緯があります。

このエピソードからも分かるように、戸田城聖という人物は、「どのようにすれば子どもたちの可能性を最大限に引き出せるのか」という勘所を、実践を通してつかんでいた人物だと思っています。そうした視点から、ぜひ皆さんにも戸田城聖の教育を学んでいただき、そこから何らかのヒントを得ていただければと願っています。以上です。

伊藤 高崎隆治という名前を、日本の学術データベースであるCiNiiで検索すると、戸田城聖に関する論考が数多く出てきます。今、塩原さんから鶴見俊輔の話がありましたが、それ以外にも、戸田の出版社「日本小学館」が行っていた全国規模の模擬試験に関するエピソードがあります。

この模擬試験は、東京および神奈川を中心に実施されていましたが、高崎隆治自身も受験したことがあるそうです。高崎は晩年、こんな話をしていました。模擬試験を受けに行った際、会場に背の高い眼鏡をかけた監督員がいた。ところが、高崎の友人が受験票を忘れてしまい、受験できないと慌てていた。そこで高崎が、そこにいた監督員に「受験票を忘れてしまったのですが、受けられないでしょうか」と相談すると、その人物は即座に「受ければいいじゃないか。僕が書いてあげるよ」と言い、その場で受験票を作り、「1001番」と番号を書いて渡してくれたということです。

当時、その模擬試験の受験者は1000人もいなかった。つまり「1001番」という番号は、その友人ただ一人のためのものでした。誰の許可も仰がず、その場で判断し、行動したその監督員のおかげで、高崎の友人は模擬試験を受けることができた。高崎は後年、戸田城聖の写真を見て、「少年時代に友人を助けてくれた、あの優しい監督員は、もしかすると戸田城聖本人だったのではないか」と語っています。当時は名前を尋ねる余裕もなく、ただ試験を受けることに必死だった。しかし、日本小学館、戸田城外名義で行われていた模擬試験の主催者であった戸田城聖が、神奈川の会場に来ていた可能性は十分にある、と。

牧口常三郎は、受験地獄から子どもたちを救いたいという思いから『創価教育学体系』を著しました。しかし現実には、受験制度は存在し続ける。そこで戸田は、子どもたちが喜びをもって学び、自らの人生を切り拓けるようにと、父母や教師のために『愛児の優等化』などの教育書を著し、『推理式指導算術』『推理式指導読方』といった学習参考書を編み、さらに模擬試験まで実施しました。高崎隆治は、「自分は戸田城聖本人に、どこかで出会っていたのかもしれない」と、そんなふうに語っていました。

質疑応答

伊藤 残り時間で質問のある方はいらっしゃいますか。

学生 現代に生きる私たちは、高崎隆治先生のどのような考え方を、日常生活や社会の中で参考にとするとよいのでしょうか。

塩原 難しい質問ですね。ただ、一つ言えるとすれば、高崎先生の思考の根底には、「戦争は絶対にしてはならない」という、非常に明確で揺るがない信念があったと思います。そして、その信念こそが、戸田城聖という人物への強い関心と研究へとつながっていったのではないのでしょうか。

そういう意味では、ずるずると流されるようにして戦争や暴力に加担してしまうことが、決してあってはならない、という姿勢を、私たちは学ぶべきだと思います。戦争の悲惨さを実体験として知る人だからこそ発せられる言葉や態度があり、高崎先生はまさにそのような立場から、強い警鐘を鳴らし続けた方でした。

実は私は、ケネディについて少し研究をしています。ケネディがなぜ核実験の停止という決断に踏み込むことができたのか。その背景には、彼自身の戦争体験があると思います。戦時中、魚雷艇に乗っていて、日本の駆逐艦の体当たりによって、艇が真っ二つにされ、海に投げ出されるという極限の体験をしています。そうした体験を通して、戦争がいかに悲惨なものかを身体で知っていた。その時の体験が、大統領就任後の行動に深くかかわっているのではないかとと思っています。

この点では、池田先生も戸田先生も同様に、戦争というものを切実な現実として経験しています。そうした思いを受け継ぐ場として、「平和を守るフォートレス」という言葉をいただいている創価大学で学んだ学生として、また卒業生として、その責任を心に留めて生きて

いきたいと思っています。以上です。

伊藤 今のお話を聞いて、私自身、高崎隆治に初めてお会いしたときのことを思い出しました。当時、高崎は70歳前後で、私はお話を伺えること自体が本当に光栄で、感動していました。その講演後、講師控室で、私は一つ質問をしたのです。

高崎は、マスメディアが人々の考えを、ある方向へと偏らせていくことの恐ろしさを、非常に厳しく批判しておられました。そこで私は、「マスメディアを批判するためには、どうしたらよいのでしょうか。結局、マスメディアを批判するためにも、他のメディアを読まなければならない。情報を通してしか情報を批判できないのではないのでしょうか」と尋ねました。

すると高崎は、「その通りなんだ」とおっしゃいました。私たちは、どこまで行っても情報を通してしか情報を批判できない。だからこそ、できる限り多様な情報に触れながら、その情報が「誰にとって得をする情報なのか」、つまり、どのような文脈、どのような意図のもとで発信されているのかを、常に考え続けるしかないのだ、と。難しい問題だが、悩み、考え、努力し続けるしかないのだ、と語ってくださいました。

今、皆さんはインターネットやSNSをはじめとする、非常に複雑で厳しい情報環境の中に生きています。しかし、自分の知性を信じ、学び続けてほしい。その言葉を、私は今でも大切にしています。皆さんにも、参考になればと思ってご紹介する次第です。

本日、私たちは高崎隆治という一人の研究者の生涯と思想を通して、歴史に向き合うとはどういうことか、学問とは何のためにあるのか、そして戸田城聖という人物が現代に投げかけている問いの重さを、改めて考える機会になったと思います。権力や時代の空気に安易に流されず、事実を事実として見つめ、弱い立場に置かれた人々の側から歴史を問い直す姿勢は、現代においてますます重要になっています。今日のシンポジウムが、単なる過去の回顧にとどまらず、皆さん一人ひとりが自分自身の生き方や学び方を問い返す出発点となり、未来に向けて「何を守り、何を選び取るのか」を考える契機となることを願って、結びといたします。

塩原さん、上原さん、貴重なお話をお聞かせくださり、ありがとうございました。

池田大作とその時代

西園寺 一 晃

はじめに

皆さん、こんにちは。よろしくお願いします。若い方々とお話しできるのは大変嬉しいのですが、私これから全く個人の見解でいろんな話をしますので、どうぞ後で「それは違うぞ」ということがあれば、ぜひ批判していただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

今、よく言われます。「世界は百年に一度と言われる大転換、大変革の時代にある」と。大きく変化する時代、その中で私たちは何を指針にどう行動し、どう生きるか。私はそのヒントの1つは、これまで人類が歩んできた歴史にあると思います。私たちの先人たちが時代の変化にどう対処し、そこから何を学んできたのか。そこから学ぶべき点は多いでしょう。歴史というのは、意識的に記憶・記録しないと風化するものです。歴史を銘記し、忘れないようにするのは、単に思い出に浸ったり、成功の喜びや屈辱の憎しみを継承するためだけではなく、我々がこれまでの歴史の経験と教訓から何を学び、それを未来創造の糧としてどうしたらいいのか。特に、我々の先人たちが社会の変化をどう捉え、どう戦い、どう生きてきたのか、そこから学ぶべきだと思います。

人類の歴史は大変長いので、振り返ったらきりがありません。まず明治維新から紐解こうと思います。これは皆さんよくご存じでしょう。幕府、長州、薩摩、新選組、坂本龍馬、近藤勇など、様々な物語が生まれました。その時の若者たちは立場が違って、日本国の形、将来をめぐって激しい争いをしたのです。内戦です。当時の若者たちは必死に日本の将来を考えて行動しました。その中で1868年に明治となり、明治政府が樹立され、アジアで初めて日本は近代国家として出発するようになりました。アジアで初めてです。

アジアのほとんどの国が外国の列強に踏み躪られ、植民地にされる中で、インドも中国も、アジアの大国は皆植民地でありました。しかし、日本はその列強の植民地になりませんでした。それはどうしてか。日本が自己変革を行って、近代国家に脱皮したからです。すなわち明治維新です。

Kazuteru Saionji (東日本国際大学客員教授)

本稿は池田大作記念創価教育研究所主催の講演会(2025年6月2日、於・創価大学S201教室)における講演に加筆修正を施したものである。

明治維新と日本の選択

明治維新というのは、日本がアジアで初めて近代国家として脱皮したこと。これは素晴らしいことです。だから、他の国々（インドや中国、東南アジアの国々）が皆欧米の列強に蹂躪され、植民地になったのに、日本だけはなりません。そのため、そうした国々からたくさんの若者が日本に学びに来ました。「どうしたら日本のように近代国家に脱皮できるのだろうか」と。中国で言えば、その中には孫文がいました。魯迅がいました。周恩来もいました。

その時の日本には、2つの道がありました。1つの道は、そうした苦しんでいるアジアの国々を助け、彼らと一緒にアアジアの独立を守り、アアジアの繁栄と一緒に汗を流す道です。この考え方は、皆さんご存じの自由民権運動の中にあります。

もう1つの道は、強くなって軍勢力を強くし、富国強兵を行い、列強の仲間入りをして、彼らとともに植民地争奪戦に参加する道です。これは富国強兵、軍国主義の道です。この2つの道があった。残念ながら日本は軍国主義の道を選びました。

軍国主義とは何か

ただ、軍国主義といっても、私も含めて我々は軍国主義とはどんなものか、体験もしたことがありません。そういう中に身を置いたこともない。よく分からない。しかし、少なくとも民主主義の対極にあるものです。軍人が政治、経済、文化、メディア、ひいては宗教までも支配する体制です。軍人独裁のもと、彼らは特別な権限を持ち、反対するものは搜索令状も逮捕令状も持たずに片っ端から土足で家に入り込み、逮捕する。投獄する、拷問する。対外的には武力侵略です。当時の日本の目的地は朝鮮半島と中国、そして東南アジアと南西諸島です。

皆さんはおそらくよくご存じだと思います。「国家神道」というものがありました。軍国主義的な思想で国民を統一するために、軍部が国家神道というものを作ります。それは神社神道と皇室神道を結合させ、国家神道としたものです。全国民にこの国家神道を信仰するように強制する。その象徴が靖国神社です。全ての既存の宗教、これは仏教もキリスト教も含んで国家神道の下にあり、絶対服従を強いられました。ほとんどの宗教団体は国家神道の前でひれ伏しました。

軍国主義下での「ノー」

当時の日本は、ほとんど全ての政界、財界、文化界、メディア、宗教が軍国主義になびきます。多くの国民も同じです。日本の軍国主義の軍隊が朝鮮に攻め入る、中国に攻め入る。朝鮮や中国の都市を占領するたびに、日本では提灯行列が繰り広げられました。国民が狂喜して提灯を持って行進する。「勝った、勝った」と。

当時の日本社会はまさに軍国主義一色でした。世論の大勢は軍国主義になびき、対外侵略へとなびきます。皆さん、世論は重要です。その時々国民大衆が考え、何を望んでいるのか。いつの世にもこれは知らなければなりません。しかし、世論の大勢、多数世論が正しいとは限りません。歴史を見ても、正義、真理は往々にして初めは少数なのです。大きな誤った流れの中にあつ

て、「それは違う」、「それは間違いだ」と気づいた人はいます。

それでも軍国主義の「大勢」という圧力の前に、「それは違う、間違いだ」と言える勇気のある人はそう多くありません。言えばメディアに叩かれ、周囲からは白い目で見られ「村八分」にされてしまいます。それだけでなく特高警察に付け回され、逮捕され投獄される危険があります。投獄後に待っているのは拷問です。殺されるかもしれないのです。だから多くの人は間違いだと分っていても「間違った大きな流れ」に迎合するのです。

このような言葉があります。「千万人と雖も吾往かん」。これは吉田松陰が好んで使った言葉だそうです。しかし、もともとは孟子の言葉です。「自ら顧みて枉（まが）らざれば、千万人と雖も吾往かん」。自分の信念を貫き、どんな困難、非難、中傷があっても恐れず、多数に流されず、堂々と前に進むという意味です。

あの軍国主義の時代、体制に逆らい、政治に逆らい、反抗すれば死も覚悟しなければならない。しかし、その中でも「千万人と雖も吾往かん」という信念を貫いた人は少数ながらいました。その1人が皆さんの大先輩である創価学会第一代会長の牧口常三郎という人であることはよくご存じだと思います。牧口は当時の流れに逆らい、世論の大勢に逆らい、軍国主義に逆らい、対外侵略の国策に逆らい、軍国主義体制に公然と「ノー」と言ったのです。それに対し、もちろん弾圧が始まります。さらに弾圧を恐れた宗門は牧口を非難し、国家神道に、軍国主義権力にひれ伏すように命じます。それでも牧口の信念は揺らぎませんでした。そして当然のことながら逮捕され、投獄され、激しい拷問を受けます。

拷問と牧口常三郎の死

当時、少数ながら軍国主義に逆らい、「ノー」と言って捕まって投獄され、拷問された人はいます。でも、その人たちの多くは拷問に耐えられず転向します。転向というのは、信念を曲げ、信仰を捨て、権力にひれ伏すということです。それを公に宣言します。そうしたら命は助かる。

ところが、どんな拷問にも牧口は屈しませんでした。皆さん、「拷問」といっても我々には分からないですよ。時代劇に出てくるようなものです。あるいは、反社会的なヤクザの世界ではあるかもしれません。我々には分からないが拷問といえば「殴る」「蹴る」「刃物で傷つける」というようなことでしょう。しかし、究極の拷問というのはそうではないそうです。殴るんでも蹴るんでも、刃物で傷つけるのでもない。究極の拷問というのは食べさせず、飲ませず、眠らせない。これが究極の拷問だそうです。

牧口常三郎は獄中で亡くなります。獄死します。後で分かったことですが極度の衰弱、極度の栄養失調でした。食べさせず、飲ませず、眠らせずだったことが容易に想像できます。牧口はあの時代、「最大の問題は軍国主義の暴走を止める事だ。軍国主義が続けば国民大衆は傷つき、苦しみ、アジア諸国との関係は破壊され、国は滅びる」と考えたのです。そのために立ち上がり、命をかけて戦ったのです。

皆さん、私は考えました。もしそういう状況があったとして、私はそれなりに自分の意見を持っ

ているし、信念も持っています。どんな非難中傷にも屈しない。そういう決心はあります。しかし、もし私が鉄砲を突きつけられて、「お前の信念を曲げなければ撃ち殺すぞ」と言われたら、それでも「殺されても信念は曲げない」と言えるか。私はそうありたいけれども、正直言ってそういう自信はありません。

つまり、我々の先人たちは、本当に世界の平和のために、国や国民の将来のために、人間の尊厳、信念のために命をかけて立ち上がった。その結果、今の我々があるのです。

冷戦時代と核兵器廃絶

さて、日本の軍国主義は戦争に敗れました。ヒトラーのファシズムも敗れました。そして戦後が始まりました。大戦が終わったということは、熱い戦争（ホットな戦争）が終わったということです。しかし、それは冷たい戦争（クールな戦争）の始まりでした。冷戦です。世界は3つに分断されました。アメリカを中心とする西側陣営、当時「ソ連」と呼ばれたソビエト社会主義連邦を中心とする東側陣営、そしてその両方とも同盟を結ばない中立な第三世界、発展途上国です。当時の第三世界の代表はインドとかエジプトとかインドネシアでした。

東西両陣営の人たちは、お互いにお互いを悪魔と見なし、憎み合い、「悪魔から身を守ると同時に、隙あらば相手を滅ぼす」と考えました。どういう現象が起きたかということ、例えば敵対する2人がいます。相手がピストルを持った。自分も持たなきゃダメ。相手が機関銃を持った。自分も持たなきゃやられる。相手が大砲を持った。私も持たなきゃいけない。こうなりますよね。それが東西両陣営で起きた軍拡競争です。

第一次大戦、第二次大戦の戦争と違うのは、もし第三次世界大戦が起きたならば、それは大規模な核戦争です。当時、アメリカとソ連、2つの超大国、これが持っている核兵器で、人類は何回も消滅できる、それだけのものを持っている。しかし、大規模核戦争に勝者はいません。敗者は人類です。広島や長崎の惨状を見て、「核兵器は恐ろしい」と世界中の人はそう思った。しかし、まさかすぐに核戦争が起きるとは誰も考えない。それほど危機感を持って戦争が終わったばかりだった。だから、核兵器を廃棄せよという意見は世界中にありましたけれども、それが本当に緊急な事態だとはほとんどの人は思わなかった。

戸田城聖の核兵器廃絶宣言

このような状況の中で、日本から一人の宗教指導者が声を上げました。それは皆さんの先輩、創価学会の第二代会長、戸田城聖です。1957年9月8日、若者を前にして彼は核兵器廃絶を世界に呼びかけました。戸田は「今の世界にとって緊急最大の問題は核兵器の廃絶だ」と確信して、行動を起こしたのです。「今やらなければ人類は核兵器によって滅亡する」という危機感を持ったのです。

しかし、この戸田の叫びは、当時日本のメディアはほとんど取り上げませんでした。ほとんどの人は、核兵器が怖いと思っていても、核兵器廃絶という問題が緊急な課題だと思っていなかった。

たのです。

しかし、戸田が核兵器廃絶を叫んで数年後、戸田が危惧していた事態が起きました。キューバ危機です。皆さん、興味があればキューバ危機をネット検索してください。詳しく載っています。簡単に言えば、1959年にカリブ海で、キューバで革命が起きました。カストロやチェ・ゲバラといった指導者が率いた革命軍が、当時の支配者を打倒して社会主義のキューバを作った。カリブ海といったらアメリカの裏庭です。東西冷戦の中で、アメリカにとってはすぐ目の前まで社会主義が迫ってきます。これはアメリカの立場からすれば大変なことです。国家の存亡に関わるものです。まして、アメリカのすぐそばにできたキューバが社会主義であるから、そこにソ連のミサイル基地でも作られたら大変なことである。その危惧が現実になりました。ソ連がキューバに核ミサイル基地を作る。そして核ミサイル基地の資材とミサイルを積んだ運搬船がソ連を出発します。キューバに向けて。これがキューバに着いたらキューバは核ミサイル基地です。

キューバ危機と核兵器の脅威

アメリカはソ連に対して警告を発しました。そのソ連の運搬船がアメリカの近海に近づいたら、その船をミサイル攻撃する、撃沈する。それに対してソ連は、「もしアメリカがソ連の船をミサイル攻撃して撃沈したら、我々は核ミサイルをアメリカに撃つ」。アメリカも「もしソ連がアメリカに向けて核ミサイルを撃つなら、我々はモスクワに向けて核ミサイルを撃つ」。核戦争ですよ。

当時のアメリカ大統領はケネディです。当時のソ連のトップはフルシチョフという共産党第一書記です。この2人が核ボタンを解除しました。核ボタンに手をかけて、そしてソ連の船がどんどんキューバに近づいて、もしアメリカの近海に入れば、おそらく十中八九核戦争が起きる。核戦争には勝者はいない。人類は滅びる。世界はパニックに陥ります。

いろんな人が動いた。いろんな国が動いた。ローマ法王まで動いた。何とかしてやめさせる。まあ、いろんなことがありましたけど、結局、ソ連の運搬船はアメリカの近海近くまで来て、引き返します。そして核戦争は回避された。今の方々はこういうことがあったことを知らない。つまり、いつでも核戦争が起きうるんですよ。だから戸田城聖が「今の緊急な課題は、いかにして核兵器を廃絶するか。これが緊急な課題だ。でないと核戦争によって人類は滅びるかもしれない」と訴えた。これが現実なのです。

皆さん、今の核兵器は広島や長崎に落とした原爆なんか比べ物にならないほどの威力ですよ。あれの何十倍、何百倍もの威力です。今、世界にはどれだけの核弾頭・核兵器があると思いますか？ 今、ロシアが5500発持っています。アメリカは5000発持っています。中国は500発持っています。フランスが290、イギリスが225、インドが172、パキスタンが170、イスラエルが90、北朝鮮が50。全部足すと1万2千発です。これは専門家によると人類を20回くらい消滅させられる量だそうです。

ですから、このキューバ危機の後、核廃絶問題が大きな話題になって、その後、国連では核兵器禁止条約決議案が出されます。今現在、署名した国は94です。世界で唯一の被爆国、長崎・

広島で何十万人が死んだ日本。この日本は、国連の核兵器禁止条約に署名していないんですよ。

冷戦下の国際情勢と中国の存在

このキューバ危機以降、核兵器に対する脅威は増しました。戦争防止の議論も多くなりました。しかし、冷戦構造は変わりませんでした。複雑でした。東西両陣営の対立はますます激しくなる。そして複雑化したのは、1つは中国の存在です。中国は社会主義だから東側陣営に属しています。東側陣営の親分はソ連です。ところが、その中国は、あの誇り高い中国はソ連の衛星国になるのは嫌だ。「中国は独立主権国家である。ソ連の支配を受けない」ということで、ソ連との溝が深まります。つまり、東側陣営の中で分裂が起こりました。これが1つ。

それからもう1つは、中国の内戦が終結したことです。共産党勢力と国民党勢力が戦って内戦が起こった。共産党政府は勝った。国民党勢力が負けて、負けた一部の敗残兵は台湾に逃げ込んだ。あとは、台湾に行った国民党の残党が戦わず降参するのか、戦って玉砕するのかという問題。ところが、そこで朝鮮戦争が起きました。つまりアメリカは、中国の内戦では中立的な立場をとっていた。しかし、中国で革命が成功して、中華人民共和国という社会主義国ができて、これが台湾を制圧して統一をするという時になって、朝鮮戦争が起きて、アメリカと中国は敵対関係になります。そしてアメリカは最強の海軍第七艦隊で台湾を包囲し、台湾の政権を守る。それがなかったら、中国は台湾を制圧して統一したのですね。そこからいわゆる台湾問題が生まれたのです。

当時、中国の中でも大きな変化がありました。60年代の半ば、中国では文化大革命というものが起きました。皆さん、聞いたことがありますよね。中国の中で極左勢力が台頭して大混乱に陥る。外交もいわゆる「革命外交」をやって、それまで中国は周恩来外交のおかげで、第三世界の国々とは大変良好な関係にありました。それが、いわゆる革命外交によって、第三世界との関係も悪くなっていきました。そういう中国にとっては60年代というのは一番厳しい時期です。つまり、世界で最も強いアメリカとも対立し、もう一方で最も強いソ連とも対立し、国内は大混乱、経済も崩壊寸前。唯一の友達だった第三世界との関係も悪くなる。こういう状況です。

反中・嫌中と池田大作の「日中提言」

当時、そういう中で、日本の社会では反中・嫌中気運が蔓延していました。今の日本とちょっと似ていますが、当時は比べものにならないくらい凄まじいものでした。当時は中国問題とか日中友好なんて言ったら殺されますよ。当時、社会党という党がありましたが、それは今の小さな社民党の前身ですよ。当時は自民党、社会党の時代だったんです。だいたい議席の3分の2は自民党が持っていて、3分の1は社会党という、とても強い野党だった。

当時、この社会党の委員長は浅沼稻次郎氏です。この人は初めから「日本と中国は仲良くすべきだ、日本と中国は国交を樹立すべきだ」と叫び、そして1960年、彼は日比谷公会堂で演説会をします。演説の内容は、「日本は早く中国と国交を樹立して、日本と中国は仲良くすべきだ」というものです。その演説の最中、突然右翼の刺客が壇上に飛び乗ってきて、浅沼を刺しました。

浅沼稻次郎委員長は即死ですよ。そういう時代です。

私はまだ若かったけども、今でも覚えています。日中友好運動をしていた人は、今ではそんなことはありませんけど、何人も会社をクビになっていますよ。ある人、私の友人は必死になって日中の友好をやって、それを理由に小学生の子供が学校でいじめられる。それを見た奥さんが「あなた、子供のためにやめてください」と言いました。「でも俺が悪いことしたわけじゃない。正しいことやってるんだ」と。そして奥さんは子供のために離婚しました。そういう時代だったんですよ。

そういう時代に、みんながあっと驚くようなことが起こりました。それは池田大作、創価学会第三代会長が、1968年、突然第11回学生部総会において日中提言を行うのです。まず、どうしてこの時期に？冷戦が激しさを増し、中国は崩壊寸前、文化大革命で中国は混乱している。そういう中で、どうしてこの時期に？

池田大作の日中提言の内容

もう1つはその提言の内容です。今、皆さんに聞いたら当然と思うかもしれない。まず第一に日本と中国は国交正常化すべきだと。日本の政府は即時、中国の政府と協議を行って一日も早く国交正常化をすべきだと。当時の国際社会、日本政府の立場は「中国の代表は北京政府である中華人民共和国ではなく、台湾に内戦の時に逃げ込んだ国民党政権、あれが中国の正当な代表だ」という立場をとっていました。国連も中国を代表して参加したのは台湾の政権です。そういう中です。「日本は中国と即時に国交正常化すべきだ」と。

第二は、国連における中華人民共和国の議席は回復されるべきである。当時、毎年国連で中国の国連復帰問題が議論されていたが、米国や日本の反対で実現しなかったのです。

第三、日本は対中国貿易を大いに促進すべきである。

今聞けば別に当たり前のことです。でも当時はそんなこと言ったら殺されますよ。これはアメリカのアジア戦略に反し、日本の外交政策に反し、世論の流れに反するということ。当時、池田大作はこう言いました。「我々は前を見なきゃ。将来、必ず中国問題が最大の問題になってくる。世界で今こそ取り組むべきだ」と。

当時、日本の首相は佐藤栄作氏です。60年代、佐藤栄作氏は長期政権だったんですけどね。3回訪米、アメリカに行っています。首脳会談。その初めの2回はジョンソン大統領で、3回目はニクソン大統領です。3回とも共同声明を出して、それは中国に対して非常に強硬な声明でした。アメリカのアジア戦略の中心は中国を封じ込めること。これを促進し、中国は国際社会に出さない。封じ込めておく。政治分断、経済分断、軍事分断を行って、中国を国際社会に出さない。それが日本の政策で、アメリカの政策であり、日本の世論の流れでした。こんな時期にこんな内容の提言。口の悪い人は「池田さん、頭がおかしくなったんじゃないか」という人さえいた。しかし皆さん、戸田城聖が将来を見つめて声を大きく核廃絶を叫んだのと同じように、池田大作という人も将来を見つめて中国問題を真正面から取り上げたのですね。

ニクソン訪中と日中国交正常化

誰もが「中国はアメリカと関係が悪くなって、ソ連と悪くなって、第三世界とも悪くなって、経済は破綻寸前だ、このままでは中国は滅びるだろう」と思っていた。しかし皆さん、そういう中で、世界の情勢を根本から覆す大きな出来事が水面下で進んでいたんです。

まずアメリカです。ニクソンは非常に憂鬱でした。それはジョンソン前大統領から引き継いだ荷物があまりにも重かったのです。その荷物はベトナム戦争です。ベトナム戦争は泥沼化して、アメリカは最大時に53万の軍隊を投入し、核兵器以外、化学兵器を含む全ての武器を使った。皆さんよく知っていると思います。枯葉剤とかね。化学兵器ですよ。あれでも勝てない。南ベトナムのゲリラの勢力がどんどん増えている。

その時にアメリカの最大の憂鬱は「ベトナムで勝てない」ということじゃなかったんですよ。それは「アメリカという国は世界最強の国、最大の最強の世界国家である」ということ。「世界の警察官、世界の裁判官」と言われたアメリカが「ダメ」と言えばダメ、「悪い」と言えば悪い。それだけの力を持っている。そのアメリカにとって一番重要な地域はどこか。それは本国ですよ。アメリカ本国。これが一番大事です。当然ですよ。その次に大事なのは西ヨーロッパだ。西ヨーロッパには何があった？ アメリカを中心とした北大西洋条約機構（NATO）という軍事ブロックがある。片方には当時ソ連を中心としたワルシャワ条約機構という軍事ブロックがあって対峙している。アメリカがベトナム戦争の泥沼に足を突っ込む前のNATOとワルシャワ条約機構軍の力関係は大学生と小学生ほどの差があり、圧倒的にNATOが優勢でした。しかし、アメリカがベトナムの泥沼に足を突っ込んでいる間に、この力関係が劇的に変わってきた。このまま進めば、ワルシャワ条約機構軍がNATOを上回る。アメリカは何とかしてベトナムから足を抜いて、早く西ヨーロッパを立て直さなければならないということだった。

そしてニクソンは南ベトナムを放棄することを決断します。ただ、アメリカが一番恐れたのは、アメリカがベトナムから足を抜く、出ていった、その空白地帯に最大のライバルであるソ連が入ってくる。それだけは防ぎたい。こう思ったのです。そしてニクソンは考えました。「どうしたらいいのか。中国を利用しよう」と。ソ連と激しく対立する中国を利用し、中国の力をもってソ連の南下を防ぐという。ニクソンは特別補佐官のキッシンジャーを呼びます。そしてキッシンジャーに指示を与えます。「極秘に中国と交渉せよ」。

同じ時期、中国でも変化がありました。中国は先ほど言ったように、ものすごく孤立して経済も破綻寸前で大変な時期です。1960年代の終わりのある共産党の秘密会議で、あの自信満々の、傲慢と言われるほどのカリスマ的な指導者である毛沢東が初めて弱音を吐きました。「我々は孤立してしまっただろうか。どうしたらいいのだろうか」と。それを聞いて周恩来が動きます。周恩来は文化大革命の中で排除されたベテランの軍事指導者を秘密裏に招きます。皆さん、名前をご存じないかもしれませんが、葉劍英、陳毅、徐向前、聶榮臻というベテランの元帥ですよ。この4人を密かに呼んで質問します。「我々の対外戦略は正しいのか？間違っているのか？」4人は検討して答えます。「我々の対外戦略は間違っている。我々はまだ弱い。経済力も軍事力も弱い。なの

に2つの超大国であるアメリカとソ連を同時に敵に回すなど、戦略的にはあり得ない」と答申しました。

それを聞いて周恩来は第2の質問を行う。「それでは今の中国にとって最大の脅威はアメリカなのか、ソ連なのか？」軍人たちは色々検討して、また答申します。「我々にとって今現在、最大の脅威は、7000キロの国境を接しているソ連にある。今、ソ連に攻められたらひとたまりもない」。それを聞いて周恩来は毛沢東のところに行って報告します。毛沢東はしばらく考えて周恩来に指示を出します。「極秘裏にアメリカと交渉せよ」。

図らずもアメリカと中国が同じようなことを。同床異夢ですけどね。その後は皆さんよくご存じです。その周恩来とキッシンジャーの水面下での外交の後、突然1971年にアメリカと中国は同時に世界に向けて発表します。「ニクソン大統領が北京を訪問する」と。中国はアメリカが承認していない国ですよ。未承認の国。アメリカは最大の国ですよ。最強の国。そのアメリカのトップが未承認国の北京を訪れる。こんなことはありえない。アメリカと中国で同時に発表しました。中国では外交部（外務省）のスポークスマンが発表しました。同じ時間、アメリカではニクソンが自らテレビに出て発表した。

日本はアジアにおける最大の同盟国です。その同盟国の首相である佐藤栄作さんがそれを聞いたのは、ニクソンの発表の3分前ですよ。これが国際政治です。そしてここからは、あれよあれよという間に世界が変わる。世界はなだれを打って中国承認に走る。その時の国連総会では圧倒的多数で中国の議席が復活する。そして慌てたのは日本です。佐藤栄作さんはどうしようもなくなって退陣しました。

ポスト佐藤を争ったのは田中角栄と福田赳夫です。これ、皆さんご存じですよ？勝ったのは田中角栄です。田中さんはああいう性格でした。日中をやると決めたらやるんだと、党内でも、国会でも何の協議もしないで、いきなり北京に飛んだのです。田中流「ぶっつけ本番」外交、本当のところ成功する自信はなかったのです。ただ、その前には色々な、つまり日本と中国は国交も何もないですから、何の関係もない。国交正常化があるんだって、準備も何もできないわけですよ。接点もないわけですから。そこで自民党でもない、日本の政府でもない勢力が水面下で中国との橋渡しをする。橋渡しというのは、中国は何をを考えているのか、国交正常化でどういう条件を出すのか、日本は、日本の政府はどういう考えで、どういう条件を持っているのか、お互いにこう知らせ合う。その役割を担う人たちは日本にはたくさんいましたが、例えば社会党。一貫して中国とパイプを持って関係の深かった党でした。自民党の中にも親中派の議員はたくさんいました。松村謙三、石橋湛山、古井喜実など、色々な人がいました。そういう人たちは皆水面下で動いていました。ところが私、当時朝日新聞東京本社にいて、日本のメディアにとって謎があったんですよ。分からない謎があったんです。それは、中国の周恩来が水面下の話し合いの仲介役に選んだのは、社会党でもない、自民党の親中派でもない、公明党だったんですよ。公明党というのは、できたばかりの党で、中国との関係は何もない。交流もない。でも周恩来が選んだのは公明党だった。

ちょっとこんなこと言ったら公明党の方に怒られるかもしれないけども、公明党の当時の方々も頑張った。でも全然公明党じゃないんですよ、問題は。池田大作の日中提言なんですよ。あれが周恩来の頭にこびりついているんです。「池田大作という人がこびりついている、この人が作った党なのか。信頼できる」それだけです。まあ、こんなこと言っちゃいけないんですけど、当時、一部の公明党の人たちは「俺たちが全部やったんだ」って威張っていた。全然違うんですよ。

周恩来と池田大作の会談

つまり、「あの池田さんは頭がおかしくなったんじゃないか」と言われたほどの日中提言。あの時期、それが2年3年経って全部実現した。そういうことなんですよ。やはりこれが優れた指導者なのですね。分析力と決断力。大きな国際情勢の変化を読んだ、確信を持った決断だったのです。

それで国交正常化が実現しました。皆さんね、人間っていうのは面白いもんですよ。国交正常化が実現すると、政界も財界も誰も彼も皆こぞって北京詣ですよ。昨日まで反中を言っていた自民党の代議士が「俺は初めから日中友好だ」と言い出した。そういうものです。だから本当にやった人、池田大作という人は、北京に行かなかった。「行きたい人が行けばいい」と。本当に頑張っていた。自分からは言わないものでしょう、きっと。

でも、北京では周恩来がぜひ池田大作先生に会いたいと思っていた。当時、周恩来は癌に冒されていました。膀胱癌です。今の医学ならば治ったかもしれない、70年代です。彼は体調が悪くてもかかわらず、決して検査を受けなかった。それはニクソン訪中もあるし、日中正常化もある。それをやらないうちは断固検査を拒否した。癌がもう蔓延していた。それでついに1974年に入院します。もう膀胱癌の末期です。

周恩来は周囲の1人に「自分はもう長くない。生きているうちにやっておかねばならないことがある。会っておかねばならない人がいる」と言いました。その1人が日本の池田大作先生だ。「ぜひ会いたい」と。それが日本に伝わります。それを受けて、池田大作会長先生は北京に赴きます。そして1974年の第1次訪中が5月です。1974年の初めに入院して、1976年の1月に亡くなるまで、周恩来は10回の大手術をして8回の小手術をした。ほとんど動けない。第1次訪中の時は事態が急変して大手術が行われた。だから会えなかった。それを周恩来はとても嘆いていて、「もう私は長くない。ぜひぜひ会いたい」と。それで2回目の訪中はその年の12月です。先生が第2回の訪中をされた時、周恩来の部下で、周恩来は病気ですから政治を取り仕切っていた鄧小平が出てきて、池田会長に会って言いました。「大変申し訳ない。周恩来総理は人に会える状況ではありません。本人はどうしても会いたいと言っているけど、医者が許しません。申し訳ありません。私が代わりにお会いします」。

池田先生は言ったそうです。「もちろん総理の体は大事です。私が無理に会えば寿命を縮めるかもしれない。どうかご安静になさってください」。その間に舞台裏では大変なことが起こっていたんです。周恩来はどうしても聞かない。医者は反対した。医師団、秘書団も反対。それでも

会う。医師団も秘書団もどうしようもなくなった。周恩来を説得できるのは奥さんしかいない。奥さんというのは鄧穎超氏です。この人しかいない。それで医師団の代表と秘書団の代表が奥さんを訪ねます。「実はこうこうこういう状況です。今、人に会う仕事をしたら命を縮めます。それでも周総理は池田会長に会いたいと言っている。ぜひ止めてください」。

鄧穎超夫人はしばらく考えて言ったそうです。「会わせてやってください。人間は命をかけても、命を縮めても、やらなきゃいけないことがある、会わなければならない人がいる。それが今です。周恩来の希望は必ず叶えさせてあげたい」。

池田一行は最後の夜、お世話になった方を招いて答礼の宴会をやっていました。もう明日は帰る。その時に、ある中央の幹部が先生の耳にそっと囁いたそうです。「周恩来総理がお会いします。ぜひ来てください」。先生は断ったのです。「私が今お会いしたら、総理の命を縮める。私はご遠慮します」。しかし、「総理の意思は固い。ぜひ来てください」と。それで実現した会談です。病院の医師団の条件は5分でした。それが30分。もうそろそろ、もうそろそろとメモが何回もあった。総理は必要なしと判断し、無視する。

私はただ病気で、もう後が短い周恩来がどうしても日中提言などのお礼を言いたかったということだけではないと思います。それほどまでに命を縮めてまで会った。それは日中関係の将来を託したんですよ。米中の和解がなった。日中の国交は正常化した。周恩来も池田も、これが終わりだとは絶対思っていない。国交は正常化したけれども、日中平和友好条約はまだ結ばれていない。まだまだやる事はたくさんある。周と池田にとって、日中国交正常化は重要ですが、通過点に過ぎなかったのです。米中国交正常化、米ソ関係の改善、中ソ関係の和解、冷戦の終結。そして究極の目的は世界平和でした。それがあの30分に凝縮された時間。そして周恩来も池田大作も、その約束を次の世代に、若者に託したんです。私はそう思います。

日中青年交流と「指導者の条件」

実はですね、池田一行の第1回の訪中の時に私も若干関わっているんです。というのは、池田一行の訪中が決まった時、私は、ある人を通じて、周恩来からメモをもらいました。メモには何を書いてあったか？「池田先生の全てを知りたい。生活習慣、食べ物の好き嫌い、その他何でもいい。池田先生のことを知りたい」。周恩来は招くのであれば、誠心誠意接待したいと思ったんです。私は色々調べました。例えば、そのうちの1つは、これは先生に確かめてないから、本当かどうかは分かりませんが、先生の生活習慣の1つは、夜眠る時に真っ暗でないと眠れない。光がちょっと入っただけでも眠れないということだそうです。少なくとも私はそう聞いた。それを北京に伝えた。池田先生が北京に行った時、北京飯店に泊まったのですが、その部屋のカーテンが全部変えられていたそうです。厚い黒いカーテンに。あれだけの病気をしていながら、そうした配慮をされていたのです。

その先生の訪中の時に、私はたまたま同じホテルに泊まっていました。そして随行した方から電話がかかってきて、「先生の日程は9時には終わります。その後は部屋にいます。宜し

ければいらいしませんか」と。私は先生の部屋にお邪魔しました。先生と最近の話をした。もう時間ありませんので、先生とはいろいろお話をさせていただきましたが、1つだけご披露します。当時、日中国交正常化は既に実現していました。ところが国交正常化の共同声明で約束した日中平和友好条約の締結はまだ実現していませんでした。つまり国交正常化というのは、マイナスの関係だったのをゼロに戻した。この日中関係を前に進めるためには、平和条約が必要なんです。それを結ばなければいけない。ところが、当時の非常に複雑な日本、中国、アメリカ、ソ連との色々な関係の中で、この平和友好条約はなかなかできなかった。

私は池田先生に聞きました。「先生、今、日中関係の中で一番重要なことは何だと思いますか？」私は99%返ってくる答えは、「それは日中平和友好条約を結ぶことだ」とばかり思っていました。でも、先生は、「それは日中の青年交流だ」と即答したんですよ。私は理解できなくて、あんまり。先生はもっと遠くを見ていた。50年先、100年先を見ていた。それで先生はこう言いました。「青年交流と言っても、コミュニケーションを取らないといけないから言葉が必要だ。日本で中国語を学ぶ人はまだまだ少ない。多くの若者が中国語を学ばなければいけない。私のところには創価大学という大学がある。そこで中国語を学んでもらうと同時に、全国から中国語をやっている若者を集めてスピーチコンテストをやろう」と。先生の提案ですよ。

それでその年から創価大学で中国語弁論大会が始まりました。これは今でも続いています。先ほど大学の人ともお話ししたんですけども、その話が出たのは74年の5月ですよ。私がお会いした時。弁論大会が始まったのはその年の秋ですよ。大学というのはね、もうどこの会社もそうだけど、皆予算で動いているわけですよ。で、突然「弁論大会をやろう」って。そんな予算ないですよ、それは。で、我々困った。第1回の弁論大会の予算は、先生がポケットマネーを出した。そうやって始まったんですよ。

もう私はもっと色々なことを喋りたいんだけど、私が言いたいのは、やはり皆さんは今、一生懸命勉強して、ここを巣立って、いろんなところへ行って、リーダーになると思います。リーダーの条件。私は周恩来氏とは20回以上お会いしました。池田大作先生とも6回お会いしました。お二人とお会いして、いろいろな話をさせていただき、つくづく思った事があるのです。それは、「本当に強い人は優しい。本当に能力のある人は謙虚である。そして足元のことをしっかりと見据えてやると同時に、10年先、50年先を考える。これが指導者だ」と。まあ、我々多くは凡人ですから、そうなかなか簡単にはいきませんが、やはり我々が学ぶべきことはそういうことだと思います。そして、私はもう80過ぎまして、もう老い先短いですけど、やはりあの世代の先人たち、牧口、戸田、池田、周恩来、その他多くの人、世界のリーダーのやったこと、言ったことは我々に対する遺訓ですよ。我々に託したこと。我々がそれを引き継がなければいけないということだと思います。

皆さんの貴重な時間を使い、取り留めのない話をしました。もし皆さん、何か反論があれば、ぜひ頂きたいと思います。ありがとうございます。

質疑応答

司会：ありがとうございます。では、少し時間がありますので、質問の時間を取らせていただきます。皆さん、何かあったら少し手を挙げてください。

学生：本日はお越しいただき、貴重なご講演、本当にありがとうございました。私はちょうどアメリカから1年間留学をして帰ってきた中で、中国とアメリカの関係というのが本当に悪化しているなというふうに思いまして、日中は隣人だからこそ、友好というものを本当に大切にしなければいけないというふうに今すごく感じています。これまで外交を学んできた中でも、日本と中国やアメリカの架け橋になる必要があるということは自覚しているのですが、具体的にどのように架け橋になることができるのだろうかということを、すごくまだ模索中でして、もしそこに関して何かお考えであればお聞きしたいです。よろしく願いいたします。

西園寺：これは答えになるかどうかわかりませんが、やっぱり大きな友好というのは、個人と個人の友好から始まると思うんです。私は北京で学生生活を送っている頃、よく周恩来総理の家を訪ねました。あの周恩来が19歳の時、日本に来たんですね。日本に「中国はいかにして近代国家になれるか」という答えを見つけに来た。その時にもうすでに日本は朝鮮半島や中国に足を踏み入れていて、相当特高警察に追われたりしてひどい目にあったんでしょうね、周恩来青年は日本で。私はそれを知っているから、ある時思い切って周恩来に尋ねました。「周おじさん、あなた、本当は日本嫌いでしょ？」と言ったんです。私の質問に、周恩来は大笑いして「そんなことはないよ。私は日本が好きだ。日本人は礼儀正しいし、伝統文化を大事にしている。それに私は日本にいた頃大変貧しかった。お金がなくて、ご飯を食べられない時もあった。そんな時、下宿のおばさんが優しくしてくれて、時には家に招いてごちそうしてくれ、励ましてくれた。あの時の豆腐は美味しかった。今でもあの味を思い出すよ」と言った。

皆さん、もしね、その下宿のおばさんが意地悪な人で、周恩来をいじめたら、おそらく周恩来は日本に対してうんざりするほど悪い印象を持ったでしょう。そういうことだと思うんです。私自身がそうですよ。私、初めの頃、創価学会に偏見を持っていた。どうして偏見が取れたかということ、私の一番の素晴らしい友人が学会員だった。で、知らなかった。「こんな世の中に素晴らしい人がいるのか」と。それからですよ。つまり、個人と個人の交流というのはとても大事です。

今、日中韓、色々な問題があります。日本人が中国に違和感を覚えている。中国人が日本に違和感を覚えている。たくさんあります。違う国だからしょうがない。でもね、今、中国からたくさんの留学生が来ている。今、日本に住む中国人も多くなっている。皆さん、もし周囲に中国人だけでなく外国人がいたら、ぜひ優しくしてあげてください。そうしたら彼は必ず日本が好きになる。日本に対して良い印象を持ってくれるようになる。これが友好の始まりです。私はそういうことだと思っています。ありがとうございます。

学生：失礼いたします。まずは、貴重なご講演、本当にありがとうございます。ここで質問なのですが、中国だけでなく、将来、国際的な舞台で活躍するためには、まずこの大学生のうちに何か、言語を学ぶというのは大事だと思うのですが、その他に大事なものの、こういうものがあつたほうがいいというものがあれば教えていただきたいです。

西園寺：これも答えになっているかどうか分かりませんが、私の経験です。私は中学3年の時に北京に行って留学しました。北京に行った時は全く言葉が分からなかったので苦労しました。もちろん徐々に言葉を覚えてゆきましたが、つくづく思ったんですけど、まず言葉です。言葉が少しずつ分かっていくということは、世界が広がっていくということです。もう1つは、言葉というのは文化であつて、言葉の裏にはその国の政治、経済、歴史、文化がある。だから言葉を学ぶと同時に、文化、経済、政治を理解しないといけないと思います。ですから、特に文化ですね。文化と歴史、これと言葉の勉強と結びつけて、その国のことを知る。そうすると、もっともっと理解が深まっていくと思います。

学生：ご講演ありがとうございました。僕は最近、色々なニュースとかを見ていて、中国の方に限らず、日本の労働の体制が外国人労働者もたくさん受け入れる姿勢になってきて、でも日本人の国民性がまだ分からないですけど、言語以前に、排他的な姿勢というか、身構えてしまうのが現状多いと言われています。海外の友人とかも「日本で働きたいけど受け入れられるかどうか正直心配なところがたくさんある」と言っていて、僕自身も将来的に関わる上では本当にオープンな姿勢でいきたいと思ってるんですけど。言語以外にお互いが働きやすくするような状態を作るには、どういう意識を持っていた方がいいのでしょうか。

西園寺：私は中学3年から大学を出るまで、10年間北京で過ごしました。帰国して、長く新聞社に勤めたんですけども、新聞社を定年退職してから、いくつかの大学で、若い人たちとふれあつた経験がたくさんあります。全てがそうであるとは分かりませんが、私は例えば慶應で教えたし、工学院大学でも教えたし、名古屋の女子大学でも教えたし。

1つ、私がものすごく気になるのは、今の学生さんたち全てではないですが、あまり海外に興味がないということです。我々の世代は、何とかして外国に行きたい、外国に行って見てみたい、何でも見てみたい、体験してみたいという時代でした。それから今、会社なんかでも話を聞くと、海外出張したくない、駐在もしたくない。まあ、日本がそれだけ便利な国で、良い国だからかもしれないですけど、やはりそれは仕事であれ旅行であれ、何であれ、できれば色々なところに行くべきです。そうすると、世界には色々な価値観があることが分かります。今のこのグローバル化した世界というのは、色々な違ったものが存在している。国も民族も、言語も宗教も価値観もイデオロギーも色々なものがありますよね。それが分からないと、往々にして日本的な価値観だけで物事を判断してしまう。まあ、悪い言葉で言えば、

本当に井の中の蛙になってしまう。もっとたくさんものを見るべきです。

面白い話があるんですね。これもちょっと答えになるか分かりませんが。文化とかね、習慣とか知らないと誤解を生みます。よく日本人はね、「中国人はどうしてお礼を言わないのか」と。例えばお客さんが来て、その人にお土産だと言ってお菓子をあげたと。日本人ならば「ありがとうございます」ともらって、次に会った時に、また「あのお菓子、美味しかったです、ありがとうございました」と。3回目に会った時もお礼を言うかもしれません。中国人はその時にお礼は言うけど、2回目からは絶対お礼を言いません。どうしてお礼を言わないのか？2回目に「お菓子美味しかった、ありがとう」って言ったら、「またくれ」という意味になるんですよね。それは習慣が違うから、良いとか悪いとかの問題ではなく、つまりそんな小さなことから誤解が生じる。だから我々は、色々な世界には色々な価値観があって、色々な考え方があるということになるべく多く学ぶべきだと思います。

本日はありがとうございます。

兄・小澤征爾とともに

——戦争を越えて、芸術が奏でる平和——

小澤 幹 雄

講師紹介（伊藤貴雄副所長）

最初に私の方から、講師のご紹介をさせていただきます。

小澤幹雄先生は1937年、中国大連生まれ、早稲田大学仏文科を中退後、俳優・放送タレント・エッセイストとして活躍されました。『王様と私』、『風とともに去りぬ』、『放浪記』などの舞台や、NHK大河ドラマ『勝海舟』、『風と雲と虹と』、映画『歌麿 夢と知りせば』などにご出演。『勝海舟』では、ジョン万次郎という、日本人のいわば初の公認通訳、英語通訳である歴史上の人物を演じられました。先ほど伺ったところ、セリフはほとんど英語でトークをされたということです。

テレビ朝日「朝ワイド」の総合司会も務められました。ラジオ番組「小澤幹雄のやわらかクラシック」で好評を博されました。著書に、『松本にブラームスが流れた日——小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラ』『やわらかな兄 征爾』などがございます。今日、小澤征爾の芸術を語り継ぐ第一人者として、全国を飛び回ってご講演をされていると伺っております。

ここでお兄様の小澤征爾さんのご紹介も合わせてしておきますと、1935年に中国の奉天、現在の瀋陽で生まれました。桐朋学園で指揮者の齋藤秀雄に指揮を学び、フランスに渡航され、ブザンソン国際指揮者コンクールで一位を獲得。ニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者となりました。トロント交響楽団、サンフランシスコ交響楽団の音楽監督などを経て、ボストン交響楽団の音楽監督を29年にわたり務め、2002年にはウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任、セイジ・オザワ松本フェスティバル総監督、小澤征爾音楽塾塾長、小澤国際室内学アカデミー奥志賀理事長、水戸室内管弦楽団総監督等を務められて、昨年2024年にお亡くなりになりました。

ここから小澤幹雄先生に、小澤征爾先生との思い出を通して、また小澤幹雄先生ご自身が、ここまで歩んでこられた人生と芸術への思いを語っていただきたいと思います。それでは小澤幹雄先生どうぞよろしくお願いいたします。

Mikio Ozawa（放送タレント・エッセイスト）

本稿は池田大作記念創価教育研究所主催の講演会（2025年11月3日、於・創価大学S201教室）における講演に加筆修正を施したものである。

小澤幹雄氏講演

I 中国からの引き揚げ

年齢に免じまして、座ってお話をさせていただきます。

私は男ばかり四人兄弟の末っ子です。私のすぐ上が、指揮をしておりました征爾で、その上にさらに二人兄がおります。一番上の兄・克己は、若い頃は音楽をやっておりましたが、大学は東京藝術大学の彫刻科に進み、仏像を制作したり、京都の仏像を研究したりする彫刻家の道を歩んでおりました。その兄が音楽好きだったこともあって、私たち弟に音楽を仕込んでくれ、そのおかげで音楽に親しむようになったのだと思いますが、本人は彫刻の道へ進んでいきました。

次の二番目の兄・俊夫は、最初はドイツのグリム童話を研究し、グリム兄弟の研究をしておりました。しかし、柳田國男先生にお目にかかり、いろいろとお話をする中で、「グリム童話もいいけれど、日本の昔話もやってくれたまえ」と言われたそうです。それをきっかけに、日本中を回り、その土地に伝わる昔話を発掘する仕事を、柳田先生のご指導のもとで続けてきました。現在も九十代後半ですが、全国に四十カ所、「小澤昔話大学」とでも言うような研究所を作っています。若い頃は日本中を飛び回り、その四十カ所を回って一緒に研究をしておりましたが、最近は何年を取って足が悪くなり、動けなくなったため、自宅でインターネットを通じて、全国四十カ所の昔話研究所と交流をしているようです。私たち兄弟の中では、唯一の学者タイプと言える存在です。

このように男ばかり四人兄弟で育ちました。皆さんの中にもいらっしゃるかもしれませんが、女の兄弟がいないというのは、本当に殺風景なもので、子どもの頃には、お姉さんがいたらいいな、妹がいたらいいな、と思ったこともありました。親にしてみれば、三人目くらいで女の子を、という期待もあったようですが、四人目もまた男でしたので、私が生まれたとき、父はがっかりして名前も付けなかったと言います。「もう勝手に付けてこい」と言われたので、母は役場へ歩きながら、何という名前にしようかと考えたそうです。

父は「トラオでも何でもいいから付けろ」と言ったそうですが、私は丑年ですので、丑年でトラオというのもおかしい話です。ちょうどその頃、確かアムステルダム・オリンピックだったと思いますが、日本人で初めて織田幹雄さんという方が三段跳びで優勝され、当時は織田幹雄、織田幹雄と、国民的英雄のように騒がれていたそうです。その影響で、自分の子どもに「幹雄」と名付ける人が非常に多い時代があったらしく、私の世代には「幹雄」という名前がとても多いようです。母も役場へ行く途中で、その「幹雄」という名前を思いついたらしく、そうして私の名前は幹雄になったのだと、後になって聞かされました。名前のことはどうでもいいのですが、そのようにして、男ばかり四人兄弟の中で育ってきました。

私たち四人兄弟は、全員中国で生まれました。一番と二番目の兄は長春、征爾は奉天、そして私は大連です。こうして生まれた場所がばらばらということからも、父がいかに中国各地を転々

としていたかがお分かりいただけると思います。

父（小澤開作）はもともと歯科医で、小澤歯科医院をきちんと開業していたのですが、いわゆる政治運動といいますが、中国には満州青年連盟や新民会など、さまざまな民間の政治団体があり、そうした活動に参加するようになってから、次第にそちらの方にのめり込んでいきました。そして、いつの間にか歯医者の仕事はやめてしまい、政治運動に専念するような状態になり、中国各地を転々としていたようです。

最後是北京に移り、父が建てた家に住んでおりましたが、ご存じのように、次第に日本軍が勢力を伸ばし、中国人民への弾圧が強まっていきました。日華事変も起こり、そうした状況の中で、父は日本軍による中国人民への弾圧を、声高に批判し始めたらしいのです。自ら雑誌を作り、自宅に編集部を構えて、「河北新報」という政治雑誌を発行し、自分が編集長となって、その誌面で日本軍の横暴を激しく批判していたと聞いています。

当然のことながら、日本軍からは目を付けられ、ついに日本軍の憲兵が、朝から晩まで我が家に常駐し、父を監視するような状態になりました。それでも父は筆を折ることなく、活動を続けていたようです。

父の監視に来ていた憲兵は、小山さんという方でした。その小山憲兵は、朝から晩まで我が家において、家族と一緒に食事をし、夜には父と酒を飲んで過ごすうちに、次第に父に感化され、考え方にも共感するようになり、いつの間にか父の子分のような存在になってしまったそうです。その結果、本来の監視という役目を、まったく果たさなくなってしまったらしいのです。

しかもその上、その小山憲兵は、我が家との関わりが深くなりました。母（小澤さくら）は体があまり丈夫ではなく、家族も多く、来客も多かったため、母一人では台所が回らず、父が山梨の田舎から若い女性を二人呼び寄せ、手伝ってもらっていました。そのうちの一人を、小山憲兵が見染めたのかどうか分かりませんが、交際を始め、ついには結婚してしまったのです。しかも、その仲人を務めたのが、うちの両親だったという、何とも不思議な話です。つまり、監視に来ていた憲兵さんが、我が家で結婚式を挙げていたわけです。

私はまだ子どもでしたので、庭で毎日のようにその小山さんに遊んでもらっており、とても懐いていました。まさか父を監視しに来ている憲兵だとは知らず、父の仕事仲間だと思って一緒に遊んでいたのです。その小山さんが、我が家のお手伝いさんと結婚したあと、どうなったのかと、余計な心配ですが、後に聞いた話では、日本軍の中で立場が悪くなり、どこかへ飛ばされてしまったようです。

こうしたこともあって、結果的に父は中国にいられなくなり、日本軍から追放処分を受けることになったらしいのです。父は中国人の友人も多く、中国を深く愛し、いずれは中国に骨を埋めるつもりでいたそうですから、この追放処分は、父にとって非常に大きな挫折だったと思います。不本意ながら、中国を去らざるを得なくなったわけです。

私たちにとっては、その後に戦争が始まり、もし終戦まで中国に残っていたとしたら、満州には日本に帰ることができずに亡くなった日本人が何百万人もいたわけですから、まず生きて帰れ

なかっただろうと思います。そう考えると、結果的には、父の挫折のおかげで、戦前に日本へ戻ることができたという、今から言えば幸運な面もあったのではないかと思います。父にとっては大きな挫折であったと思いますが、昭和十六年の春、慌ただしく、母と私たち四人兄弟は中国から引き揚げ、神戸港に到着しました。父は残務整理のため中国に残り、私たちだけが先に帰国したのです。

神戸港に着いたとき、母は、中国独特の鍋を持ってきました。中央に煙突があり、周囲に肉や野菜を入れて煮るもので、「火の鍋の子」と書いて「火鍋子（ほうこうず）」と言いますが、母はその鍋が大好きで、「これがなければやっていけない」と言い、鍋を抱えて帰ってきたそうです。それに加えて、写真のアルバムです。父はカメラが趣味だったらしく、家族の写真を撮ったアルバムが十冊ほどあり、それをすべて持ってきました。そしてもう一つが、アコーディオンでした。

アコーディオンは、母の話によると、クリスマスか何かの折に、父が上の兄たちに買い与えたものだそうで、とても音色がよく、値段も高かったらしいです。母は、鍋と写真のアルバム、そしてそのアコーディオンを抱えて、神戸港まで来たのだそうです。税関では呆れられたようですが、その三つは、いずれも大いに役立ちました。鍋は毎日の食卓に上がりましたし、アルバムを持ち帰ってくれたおかげで、私たち兄弟の赤ん坊の頃の写真を、今でも見ることができます。中でも一番助かったのは、やはりアコーディオンでした。アコーディオンが一台あったおかげで、私たち四人兄弟は、戦争中のつらい毎日の中で、ほんの少しですが楽しむことができました。

Ⅱ 立川での戦争体験

母はクリスチャンで、北京の教会に熱心に通っていたそうですから、讃美歌をたくさん覚えていました。その讃美歌を、戦争中の本当に暗い時代に、「私が讃美歌を教えてあげるから、覚えなさい」と言われ、私たち四人兄弟で歌うようになりました。ちょうど四人でしたので、四部合唱です。讃美歌は通常は混声合唱用に、ソプラノ、アルト、テノール、バスという形で編曲されていますが、それを男ばかりの四人兄弟で、毎日、母の指導のもとに歌っていました。

その頃、私はすでに声変わりをしていたと思いますが、不思議なことに、兄たちよりも声が低く、一番上の兄が少し高めの声でした。そのため、一番上の兄がソプラノ、二番目の兄がアルト、征爾がテノール、私がバスという具合に、きれいに四部がそろい、毎日のように讃美歌を歌っていたのを覚えています。

あるとき、私たち四人と、先生役の母を合わせた五人で歌っていた際に、母の音程が少し上ずるといいますか、怪しいところがありました。私も何となく気づいてはいたのですが、征爾があるとき、「お母ちゃんに合わせるのは苦勞するよ」と言ったのです。征爾はその頃から耳がよかったようで、はっきりと母の音程のずれを指摘しました。先生役だった母は驚いたようですが、あとでそのことを笑って話していました。

そんなふうに、戦争中でテレビも何もない時代でしたから、それくらいしか娯楽はなかったのですが、そうした時間はとても楽しいものでした。私たちは立川でそのような生活を送っていました。

立川では、家の前に若草幼稚園があり、そこに私と征爾が通いました。近くには現在の都立立川高校があり、当時は旧制二中と呼ばれていましたが、そこに上の兄二人が通っていました。私と征爾は幼稚園から柴崎小学校へ進み、立川での生活を続けていたわけです。

その頃は、楽しいことなどほとんどなく、戦争中でしたからアメリカの飛行機が飛んできたり、食べるものもなく、本当に苦しく、つらい時代だったと思います。

あまり戦争中の思い出というのは、これまで話したこともありませんし、正直、話したくもありませんでした。しかし、今になって、この歳になって振り返ってみると、あれは本当にすごい体験だったなと思うことがありますので、今日はそのことを少しだけお話しさせていただこうと思います。

太平洋戦争は、昭和十六年に始まり、昭和二十年に終わりました。昭和二十年に入った頃には、日本はもう負け続けで、アメリカの戦闘機が次々と日本にやって来て、爆弾を落としていく、そういう時代でした。

立川には郊外に飛行場がありました。現在は昭和記念公園になっているそうですが、当時は日本軍の飛行場でした。そのため、そこを目がけて、アメリカ軍が毎日のように爆弾を落としに来たのです。そして、そのついでと言っては何ですが、市街地にも次々と爆弾が落とされ、立川の町は半分以上が焼け、爆弾による被害を受けました。亡くなった方も大勢いたわけです。

そのような時の出来事を、少しお話ししてもよろしいでしょうか。

防空壕というものは、皆さんはご存じないかもしれませんが、空襲警報が鳴り、アメリカの戦闘機が上空に来ると、必ず防空壕に入らなければなりません。我が家の庭には、父が掘った、六人家族がやっと入れるほどの、穴蔵のような防空壕があり、そこに家族で入っていました。そして、アメリカ軍の飛行機が飛び去るまで、じっと耐えているわけです。

ところが、あるとき、私と征爾が喉が渇いてしまい、本当は外に出てはいけませんが、「喉が渇いた、水が飲みたい」と母に言いました。すると母が、「今なら大丈夫。上空にアメリカの飛行機はいないから、行ってらっしゃい」と言い、私と征爾は防空壕を出てしまいました。

玄関を通り、裏の台所の前にポンプ井戸がありましたので、そこで二人でガッチャン、ガッチャンと水を汲み、飲もうとした、その瞬間でした。雲間から、アメリカのグラマン戦闘機という一人乗りの小型戦闘機が、私と征爾を見つけ、突然、ダダダッと機銃掃射をしてきたのです。脇の畑にパパパッと砂煙が上がりました。

私は腰が抜けてしまい、脇の木の下に逃れた記憶があります。母は防空壕から身を乗り出し、「早く帰ってらっしゃい」と叫んでいましたが、私は腰が抜けてしまって、まったく動けませんでした。

た。征爾は落ち着いていたのか、あとで「乗組員の顔が見えた」と言っていました。私にはそんな余裕はまったくありませんでした。敵機が飛び去ったあと、慌てて這うようにして防空壕へ戻りました。本当に恐ろしい体験でした。当時は、こうしたことが日常的に起きており、みんなが似たような経験をしていたのだと思いますが、私にとってはそれが初めてでしたし、まだ小学校二年生だったと思いますので、本当に怖かったことをよく覚えています。

もう一つ、ついでにお話ししますと、B29 という大型爆撃機が、立川の飛行場を目がけて飛来し、立川の市街地にも爆弾を落としていくのですが、地上から日本軍が迎撃射撃として、バーン、バーンと撃ち上げても、上空を飛んでいるため、なかなか届きません。多くの場合、爆弾はその手前で爆発してしまい、私たちはそれを「ああ、当たらないな」と、毎日のように見ていました。

ところが、あるとき、珍しく B29 に砲撃が命中しました。大型の B29 が真っ赤に燃えながら、私たちの目の前に落ちてきたのです。それだけでも衝撃的でしたが、その後しばらくして、今度は音もなく、落下傘で乗組員がゆっくりと降りてきました。

そこから先は、大変な騒ぎになりました。街の市民たちが集まり、そのアメリカ兵を捕まえ、近くにある立川の諏訪神社へ連れて行きました。私が通っていた柴崎小学校の隣にある神社ですが、その境内の大きな木に、まるでキリストのように縛りつけられ、まだ生きているアメリカ兵に対して、大勢の市民が集まりました。確か、指導する日本の兵隊がいて、「並べ」といった号令をかけ、市民を並ばせたのだと思います。市民たちは、それぞれ鞭や木の棒を手に持ち、縛られたアメリカ兵を、次々に殴りつけ、最後には打ち殺してしまいました。

捕虜を虐待してはいけないということなど、まったく顧みられず、普段は善良な市民であった人たちが、目の前にアメリカ兵が現れた途端、鬼のようになって鞭を振るう、その光景でした。私は近くの木陰に隠れ、震えながら、その一部始終を見ていました。そのアメリカ兵は、GI カットの、二十歳くらいの、白人兵でした。生きて動き、呻いているのが分かりました。それに対して、「こんちきしょう、こんちきしょう」と言いながら、五十人ほどの市民が代わる代わる殴り続け、ついに殺してしまったのです。

あの光景は、私は一生忘れることができません。ただ、あの経験は、忘れよう、忘れようとして、実は最近まで誰にも話さずにきました。ところが、この歳になって、新聞などで「戦後八十年」といった言葉を目にするようになり、「やはり、あの経験は、戦争を知らない若い人たちには知っておいてほしい」と、最近になって思うようになりました。

そうしたこともあって、ついこの間（2025 年 5 月 15 日）、あるコンサートの機会がありました。バルカン室内管弦楽団という、バルカン半島から来たオーケストラで、柳澤寿男さんという若い指揮者が指揮をされていました。バルカン半島は、かつてユーゴスラビアという国でしたが、チト大統領の死後、国が分裂し、民族間の内戦が続いた地域です。ついこの間まで同じ国民だった人たちが、殺し合うような状況が続いていました。

そのバルカン半島に、日本の若い指揮者である柳澤さんが入り込み、一人一人に「音楽をやろう、オーケストラをやろう」と声をかけ、説得して結成したのが、このバルカン室内管弦楽団です。柳澤さんは音楽監督・指揮者として活動し、この楽団は毎年のように日本を訪れています。

そのコンサートでは、被爆ピアノが使われました。広島で原爆が投下された際、家庭にあったピアノが被爆し、焼け焦げながらも奇跡的に残ったアップライトピアノです。それを、広島の調律師である矢川光則さんが引き取り、弦をすべて張り替え、再び演奏できるようにしたもので、そのピアノを使ってピアノ協奏曲が演奏されました。通常はグランドピアノが置かれるところに、傷だらけの縦型ピアノが中央に置かれ、ピアニストがそれを弾くという、非常に印象的なコンサートでした。

そのとき、柳澤さんから「小澤さん、子どもの頃の戦争体験があるそうですが、それを話してみませんか」と声をかけられ、私は休憩時間に舞台に出て、初めてお客様の前で、今お話ししたような体験を語りました。伊藤貴雄先生がたまたまそれを聞いてくださり、今日もまた話してよいと言ってくださったので、こうしてお話しさせていただいています。

これは、兵隊として戦地に行ったわけでもなく、いわゆる大げさな戦争体験ではありません。ただ、自分の家の庭で起きた、子どもとしての体験です。それでも、私にとっては一生忘れることのできない戦争体験であり、目の前で善良な市民が鬼のようになり、人を打ち殺す光景は、二度とあってほしくないものです。

若い皆さんにも、戦争の愚かさ、怖さというものを、少しでも感じ取っていただきたいと思い、伊藤先生のお許しを得て、今日お話しさせていただきました。ありがとうございました。

Ⅲ ピアノとの出会い

もう少しお話をしてもよろしいでしょうか。先ほどアコーディオンの話をしましたが、その頃に触れた楽器はアコーディオンだけではありませんでした。

近くにあった、現在の立川高校、当時の旧制二中の音楽室に、上の兄が征爾を連れて行き、ピアノの手ほどきをしたそうです。すると征爾は、上達がとても早かったらしく、上の兄が「征爾はどうやらピアノの才能があるみたいだから、本格的にピアノをやらせたいね」と言っていたそうです。その話を小耳に挟んだ父が、ある日突然、「ピアノを買おう」と言い出しました。

当時は戦後間もない時代で、食べるものも十分でない頃ですから、ピアノを習っている子どもなどいませんし、家にピアノがある家庭など、夢のまた夢のような時代でした。それでも父がそう言ってくれたものですから、兄たちは大喜びしました。横浜の親戚の家に、使っていない縦型ピアノがあるという話を聞き、交渉したところ、「売ってあげてもいい」と言われ、それを購入することになりました。

値段を言うのも恥ずかしいのですが、いくらだったかというと、三千円だったそうです。昭和二十二、三年頃の三千円ですから、当時としては大金だったと思います。父はその三千円を工面するため、趣味で持っていたライカというドイツの高級カメラを売り払って、ようやくお金を作っ

たそうです。

私は、母が晩年に話してくれたことをずっとメモに取り、母の少女時代から晩年までをまとめて、『北京の碧い空を わたしの生きた昭和』という本を角川文庫から出しました。その中で、ピアノの話になったとき、「いくらで買ったの？」と母に聞いたところ、「三万円だったよ」と言われたので、そのまま三万円と書いてしまったのです。ところが本が出てすぐ、横浜の親戚から連絡があり、「そんな高くふっかけませんでしたよ。三千元でしたよ」と言われました。やはり昭和二十三年頃の三千元というのは、それほど大きな金額だったということなのだと思います。

そのピアノがあったのは、横浜の白楽というところの親戚の家でした。そこから立川まで、どうやって運んだかという、上の兄二人が、立川の二中の学校からリアカーを借り、空のリアカーを押して白楽まで行き、そこにピアノを載せ、縄で縛り、白楽から立川まで三日かけて運んだのです。兄二人は、今で言えば高校生、当時は旧制中学生でした。道はたしか府中街道だったと思いますが、砂利道で、ガタガタと揺れる道だったそうです。一番怖かったのは下り坂で、ピアノが田んぼに落ちそうになり、必死に押さえたと話していました。父も「二人だけでは心配だ」と言って、二日目か三日目の途中から合流し、最終的には三人で我が家まで運んできました。

狭い我が家の玄関にピアノが置かれたときの喜びは、相当なものでした。私はまだ小学校二、三年生でしたから、そのありがたさはよく分かっていませんでしたが、家族は本当に喜んでいました。征爾は「ドミソ」と音を出して、「きれいだね」と言っていました。考えてみれば、砂利道を三日間、ガタガタと運んできたピアノですから、調律もされていませんし、きれいな音が出るはずはないのですが、それでも「ピアノが家に来た」という喜びの中で、征爾が「ドミソ」を弾いて「きれいだね」と言ったことを、私はよく覚えています。

当時、自分の家にピアノがある家庭など、ほとんどなかったと思います。そんな貧乏な我が家にピアノが来て、征爾は朝から晩まで弾いていました。上の兄も弾いてはいましたが、ほとんど征爾が一人で弾いているような状態でした。

私が覚えているのは、柴崎小学校で、征爾が五年生のときの学芸会で、ベートーヴェンの「エリーゼのために」を弾いたことです。それが、征爾にとって人前でピアノを弾いた、デビューだったのではないかと思います。なぜそのことをよく覚えているかという、その学芸会の日、私たち三年生は、講堂の雑巾掛けを命じられ、クラス全員で雑巾を持って講堂に行き、床をきれいに拭いていたからです。そのとき、舞台の上で、征爾が一人で「エリーゼのために」を弾き続けていたのを、私は覚えているのです。そんな出来事がありました。それが、立川での、本当に戦後間もない頃の話です。

立川の町は、戦後アメリカ軍が来て、郊外の飛行場は占領され、今の沖縄のように、町中がアメリカ兵であふれ、治安も悪く、とても住みにくい状態になりました。父も、アメリカ兵にホルドアップされ、ポケットの中のお金をすべて取られたことがありました。「ノー」と言えば撃たれてしまいますから、何も言えなかったのだと思います。

私の記憶にあるのは、立川のアメリカ兵たちは、気前がいいのかどうか分かりませんが、ガムやチョコレートを食べながら、それを私たち子どもに投げてよこすことがありました。それは彼らなりの好意だったのかもしれませんが、私たちにとっては、とても屈辱的なことでした。菌形のついたようなチョコレートを投げられ、それを子どもたちが拾って食べる。あれは本当に屈辱的でした。今でも私は、アメリカのハーシーズのチョコレートは食べません。それほど、強く印象に残っています。

そんな時代の立川でしたので、父は「もう立川には住めない。田舎へ行って百姓をやろう」と言い出し、家族全員で、神奈川県足柄上郡金田村へ引っ越しました。小田急線の新松田駅から、ずっと歩いて行く、田んぼばかりの村です。

私と征爾は、田んぼ道を歩いて村の小学校へ通い、兄は、県立小田原高校へ通っていました。小田原までは小田急線で十分か十五分ほどでした。小学校時代のことは、あまりはっきり覚えていませんが、征爾が六年生のとき、小学校には音楽の先生がいませんでしたので、音楽の時間になると、征爾がオルガンを弾き、授業をしていたことがありました。

あるとき、私が廊下を通ると、教室から征爾のオルガンの音が聞こえてきました。何をしているのかと思ってのぞいてみると、先生がいなくて、征爾がオルガンを弾きながら、同級生たちに音楽を教えていたのです。戦後で先生も足りない時代でしたから、田舎では、オルガンが弾ける子どもなど、ほとんどいなかったのだと思います。

IV 成城学園時代

それで、征爾が田舎の小学校を卒業することになり、「どこか良い学校はないだろうか」という話になりました。当時、我が家の家計は本当に貧乏のどん底で、小さな畑と、母は内職で毛糸のネクタイを編んで売ったり、魚の行商をしたりして、何とか暮らしている状態でした。父は、医者に戻ればいいのに、「俺はもう絶対に医者には戻らない」と言い張り、会社を始めては倒産し、借金ばかり増えていくような状況でした。

貧乏話をするのは好きではありませんが、それでも母は、「学校だけは、良いところへ行かせたい」と思ってくれたのだと思います。小田急沿線で学校を探し、征爾のために調べたそうです。すると、玉川学園と成城学園があることが分かりました。まず玉川学園を訪ねると、「我が校は一貫教育で、幼稚園から大学までずっと通っていただかなければなりません」と言われました。そのとき母は、「もしかしたら征爾は音楽の道に進むかもしれない。それなら、この学校は少し無理かもしれない」と思ったそうです。

そこで成城学園に行って、同じ質問をしたところ、「全くかまいません。入りたいときに入って、出たいときに出ていただいて結構です」と言われ、「それなら、ここにしましょう」と決めて、征爾は成城学園に入ることになりました。もちろん入学試験はあったのですが、当時は戦後間もない時代で、今のような厳しい試験はなかったようです。私もその二年後に成城学園に入りましたが、試験らしいものはなく、校長先生との面接だけで入学したような記憶があります。

征爾は、小田急線で二時間以上かかる新松田から成城学園まで、毎日通っていましたが、それを苦にすることもなく、朝六時頃には起きて、喜んで通学していました。成城学園は、音楽がとても盛んな学校で、戦前から成城合唱団があり、室内楽なども行われていました。征爾は後年、「成城に行かなかったら、オレは音楽家にも指揮者にもなっていなかった」と言っていたそうですが、確かにそれだけの環境があったと思います。

戦前から旧制成城高校があり、その卒業生たちが男声合唱団「コーロ・カステロ」を作り、ロシア民謡や黒人霊歌を歌っていました。そのハーモニーが実に素晴らしく、私はそれを聴いて、「自分もコーラスをやりたい」とあこがれたほどでした。

征爾は、合唱の経験などまったくなかったにもかかわらず、その「コーロ・カステロ」の練習場に行って、「僕はピアノが弾けますから、入れてください」と言ったそうです。中学三年生の征爾が、大先輩ばかりの合唱団に入れてもらい、歌うことになりました。しかし、征爾にとって合唱は生まれて初めての経験でした。

その合唱団で、河津祐光さんという指揮者スケアキのもとで練習をする中で、征爾は、「指揮によって音楽が変わっていく」ということを、歌いながら初めて体験したそうです。河津さんは、旧制高校の卒業生でアマチュアの指揮者でしたが、当時は確か東大生だったと思います。その指揮によって音楽が変化していくのを体感し、「指揮というのは面白いな」と思うようになったようです。とはいえ、大先輩ばかりの中で、「自分にも振らせてください」と言えるはずありません。そこで、私が中学一年生で入学したとき、征爾は親しい中学生だけに声をかけ、中学生だけの新しい合唱団を作りました。仲間は二十人ほど集まりました。この写真が、その合唱団「城の音」の最初の頃の写真です。一番左が征爾、二列目の一番右が私です。私は中学一年生で、征爾は中学三年生でした。女の子のほうが多い編成でした。

合唱団はできたものの、征爾は指揮の経験がありません。そこで練習に行く前、小田原高校で散々コーラスをやっていた上の兄に、「兄ちゃん！ 三拍子はどうやって振るの？」と聞いたそうです。兄から、三拍子はこう、四拍子はこう、と教わり、それで練習に臨んだと聞いています。そうして、征爾はこの合唱団で、初めて指揮というものを経験しました。

この経験は、征爾にとってとても大きな意味を持ったと思いますし、私たちはこの合唱団で、ずっと歌い続けてきました。実は、今でも歌っているのです。何を歌っていたかと言いますと、先ほども申し上げましたが、母からたくさんの讃美歌を教わっていて、何十曲もの讃美歌を暗唱できるほどでしたので、征爾は「讃美歌をやろう」と言いました。団員の中にクリスチャンは一人もいませんでしたが、みんなそれぞれ家から讃美歌集を持ち寄り、ひたすら讃美歌を歌っていました。

最初は名前もなく、「讃美歌ばかり歌っているグループ」ということで、「讃美歌グループ」などと呼ばれていましたが、三年目くらいから、讃美歌以外にも民謡などを歌うようになり、正式に合唱団の名前を付けようということになりました。そこで考えたのが、「城のおと」と書いて「しろのね」という名前です。この「城の音」は、創立から七十年を超え、今でも歌い続けています。

普段はコンサートなどは行いませんが、クリスマスになると、学校の教室でクリスマスコンサートを開き、讃美歌を歌ってきました。若い頃には、キャンドルを手を持って、成城の街を真っ暗な中、讃美歌を歌いながら歩いたこともあります。本当に元気な時代でした。夜が明けるまで歌い続け、駅前の交番のお巡りさんに、「君たち、何をやっているんだ。早く家に帰りなさい」と叱られたこともありました。

そんなふうにして、「城の音」は長くコーラスを続けてきました。征爾にとっては、自分が作った原点の合唱団ですから、指揮者として忙しくなり、海外に出るようになってからも、必ずクリスマスには戻ってきて、私たちの合唱団を指揮してくれていました。とにかくそんな中学時代だったのです。

今日は、私の話だけではあまり面白くないだろうと思い、古い映像をご覧いただこうと考えております。今あらためて見てみると、なかなか面白いものです。

森進一さんと小澤征爾が特別に親しかったわけではありませんが、征爾が森進一さんのファンだったんです。それで、「オーケストラがやってきた」という番組がありましたが、その番組に森さんをゲストとしてお招きし、征爾が「新日フィル（新日本フィルハーモニー交響楽団）」を指揮したことがありました。そのときの映像です。

（ここで、小澤征爾氏と歌手・森進一氏が、音楽における「感情の表出」をめぐる対話した映像が流された。小澤氏は、西洋音楽におけるビブラートの技法と、森氏の歌唱に見られる声の揺れを比較し、両者には表面的な類似性がある一方で、本質的には異なる表現原理があるのではないかという見解を示す。西洋音楽では音程を保ったまま強弱や響きを変化させるのに対し、森氏の歌唱では感情の高まりに応じて音そのものが変化するように聴こえる点が指摘され、そこに文化的背景の違いが関係している可能性が示唆された。これに対し森氏は、歌唱中に自分自身はそのような変化を意識的に操作しているわけではなく、その場の感情に即して自然に生じているものであると答えた。小澤氏はこの点に深い感銘を受け、西洋音楽における理論先行の姿勢と対比しながら、感情が直接リズムや音に現れる森氏の表現のあり方から多くを学んだと振り返っている。）

このときのことはよく覚えています。森進一さんが歌ったのは「襟裳岬」ですね。発表された当時、地元の襟裳岬では、「こんな歌を歌われたら、誰も観光客が来なくなるんじゃないか」と言われたそうです。というのも、歌詞の中に「何もしません」という一節があるでしょう。ところが、この歌がヒットしてから、逆に観光客が殺到したという話を聞きました。

私は森進一さんが大好きで、実は一度だけ、電車の中で偶然お見かけしたことがあります。声が聞こえてきて、「あ、この声は、いつも耳にしている声だな」と思って振り向いたら、森進一さんが乗っておられたんです。直接お会いしたわけではありませんが、そんなことが一度ありました。

V 音楽の師・齋藤秀雄

とにかく、うちの兄は、最初から指揮者になろうと思っていたわけではありませんでした。もともとはピアニストを目指して、ピアノの勉強をしていたのです。ところが、先ほども少し触れた成城学園ですが、音楽が盛んな一方でラグビーも非常に盛んな学校でした。松尾三兄弟という名選手が出たほどで、征爾の同級生に松尾さんの一番下の弟さんがいて、彼に征爾は誘われてラグビー部に入ったのです。

征爾はラグビーにすっかり夢中になってしまい、毎日毎日、泥だらけになって練習をしていました。母は「ラグビーだけは指を怪我するからやめなさい」と言っていたのですが、征爾はすっかりはまってしまってやめられず、母には「もうやめた」と嘘をついて、ジャージやスパイクは学校に置いたまま、家では「やっていない」という顔をしていたそうです。

ところが、とうとう大事な試合で、指を骨折し、さらに鼻の骨まで折るという大怪我をしてしまいました。これではラグビーはもちろん、ピアノも弾けません。包帯姿で、当時ピアノを習っていた豊増昇先生という当時日本では有名なピアニストの偉い先生のところへ行き、「もうピアノが弾けなくなりました」と話したところ、先生が「小澤くん、ピアノだけが音楽じゃないよ。指揮というのもあるよ」と運命のひと言をおっしゃったそうです。

征爾は、それまで指揮者になろうなどとは、夢にも思っていなかったのです。その言葉を聞いて家に帰り、母に相談すると、「指揮だったら、親戚に齋藤秀雄という指揮者がいるよ」と初めて聞かされました。齋藤秀雄先生は、母とははとこ同士で、はとこっていうのはおじいさんとおばあさんが兄弟なんですよ。それで母は以前から齋藤先生のことを知っていたのです。

征爾は、そんな立派な指揮者が親戚にいることを、それまで全く知りませんでした。そして、その話を聞いた翌日だったと思いますが、麹町にある齋藤先生のお宅を、一人で訪ねたそうです。「親戚の者ですが、指揮を教えてください」と突然訪ねてきたので、先生もさぞ驚かれたと思います。しかし、話をよく聞いてくださり、「今、新しい音楽学校、高校を作る予定だ。それが来年できるから、そこに入って来なさい」と言われたのです。

その翌年、京王線の仙川にあった桐朋学園女子高校の校舎の一部を間借りして、齋藤先生が桐朋学園音楽科を創設されました。征爾は、その第一期生として入学することになったわけです。そのため、成城学園の高校にとりあえず進学し、高校一年で中退し、新しくできた桐朋学園女子高校音楽科（音楽科のみ共学）に入り直しました。

こうして齋藤先生の指導を受けることになったのですが、その指導は、いわゆるスパルタ教育などという言葉では済まないほど、非常に厳しいものでした。弟子たちは全員、自宅に呼ばれて個人レッスンを受けます。ピアノでも、ヴァイオリンでも、指揮でも、とにかく一対一で徹底的に教え込まれる。暴力を振るうわけではありませんが、指揮棒で腕を叩かれたり、眼鏡を床に叩きつけられたり、そういう厳しさがあったそうです。

指揮のレッスンには、山本直純さんと征爾の二人一組で行われました。一人が指揮を振り、も

う一人がそれを見ながらピアノを弾く。そこを齋藤先生が指導する、という形式です。その厳しさに耐えかねて、二人が裸足のまま庭から飛び出して逃げ出したことがあった、という話も聞いています。そのあとを奥様が靴を持って追いかけてきたそうです。

それほど厳しいレッスンが続いたものですから、征爾はその恐怖が家に帰っても消えず、玄関先で靴も脱がずに、先生に叱られたことを泣いていたこともあります。あまりの緊張で、家の戸棚が何かを叩き壊して、血だらけになったこともありました。

しかし、そうした厳しい指導があったからこそ、一人前の指揮者になれたのだと思います。齋藤先生に教わったチェロの弟子や、その他多くの教え子たちは、皆そろって「今の自分があるのは齋藤先生のおかげだ」と言っています。

ご存じの方も多いと思いますが、先生が亡くなられて10年後、教え子たちが世界中から集まって「サイトウ・キネン・オーケストラ」を結成しました。そして長野県松本市で、「サイトウ・キネン・フェスティバル」という音楽祭が、1992年から始まり、今もなお続いております。

本当に、弟子たちは皆、口をそろえて「先生は怖かったけれども、先生がいたからこそ今の自分がある」と言っています。実際、世界各地で活躍している音楽家たちが、自分の仕事を休んでも松本に集まり、「音楽祭をやろう」と協力してくれるのです。ヨーロッパのオーケストラで演奏している人たちも、その期間だけは仕事を休んで帰ってきます。

この音楽祭では、オーケストラの演奏だけでなく、オペラも上演しており、その両方を継続して行っています。もっとも、最初に松本で「サイトウ・キネン音楽祭」を始めた頃は、市民から「サイトウ・キネンなんて知らない、有馬記念なら知っているけど」などと言われたことがありました。

しかし今では、松本市民の皆さんはサイトウ・キネンをよく理解し、心から支えてくださっています。多くの方がボランティアとして参加し、市全体がサイトウ・キネン・フェスティバルを中心に一つにまとまっている、そんな雰囲気があります。もしご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度松本まで足を運んでいただきたいと思います。

最近、フェスティバルの名称は「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」に変更されました。征爾本人は変えなくてもいいと遠慮したそうですが、フェスティバルの名称は変わっても、オーケストラの名前は今も変わらず「サイトウ・キネン・オーケストラ」のまま続いています。

では、なぜこれほど大きな成功を収めたのかと言いますと、齋藤先生が学生時代から「今は分からなくても、私の言うとおりに学べば、将来必ずヨーロッパでも通用する音楽家になれる」とおっしゃっていたそうです。当時は半信半疑で勉強していた弟子たちも、その言葉が本当だったのかどうかを確かめたい、実験しようという思いから、先生の没後10年を機に集まり、サイトウ・キネン・オーケストラを結成しました。

そしてヨーロッパ・ツアーを行ったところ、それが大成功を収め、ヨーロッパ各地で非常に高い評価を受けたのです。そこで初めて、「先生のおっしゃっていたことは本当だった」「かつては

ヨーロッパに比べてはるかにレベルが低いと言われていた日本の音楽が、ここまで成長した」ということが証明されたわけです。

その成果として、フェスティバルは今も続いていますし、今では逆に、ヨーロッパの世界的な音楽家たちが「松本に行ってフェスティバルに出演したい」と思ってくれるようになりました。世界的な歌手や指揮者が、出演することを名誉と感じて松本に集まってくる。そうした状況が、今も続いています。それは本当に、ありがたいことだと思っています。

Ⅶ ヨーロッパで指揮者としてデビュー

征爾が桐朋学園を卒業する段階になったとき、齋藤先生は「お前だけは、まだ卒業させられない」とおっしゃったそうです。理由としては、「まだ教えることがある」「ベートーヴェンの『第九』をまだ教えていない」など、いろいろな説明があったそうですが、結局征爾だけが留年となり、卒業を許されませんでした。同級生たちは次々と卒業してヨーロッパなどへ渡っていく中で、征爾は桐朋学園に残り、助手のような立場で齋藤先生のもとで働き、学生オーケストラの世話をする日々を送っていました。

それでも、どうしても海外で学びたいという思いは捨てきれず、まずフランス政府の音楽留学試験を受けました。この試験に合格すれば、フランス政府から奨学金が支給される仕組みでしたが、残念ながらフランス語がほとんどできなかったため、不合格となってしまいました。それでも征爾は諦めませんでした。どうしてもフランスへ行きたいという強い思いから、ヨーロッパまで向かう貨物船に無賃で乗せてもらえないかと交渉をし、さらにマルセイユからパリまではスクーターで行けると考え、富士重工を訪ねて「ラビット・スクーター」を一台譲り受けたのです。本人は「もらった」と言っていたのですが、会社のほうは「貸した」と言っていました。実際には新品を提供してもらい、そのスクーターを貨物船に積んで神戸港を出港しました。

今では考えられない話ですが、当時は飛行機に乗るお金もなく、それ以外に方法がなかったのです。今の学生にこの話をすると、「なぜ飛行機で行かなかったのですか」と聞かれますが、当時は今のように夏休みに気軽に海外へ行く、ヨーロッパの音楽学校の講習を受けて飛行機で帰ってくるなどという時代ではありませんでした。私は、征爾が神戸で船に乗るというので、東京駅で見送った記憶があります。そうして、ようやくフランスに到着し、マルセイユからパリまでスクーターで一週間ほどかけて向かいました。

パリに着いて国立音楽院を訪れたところ、掲示板に「ブザンソン国際指揮者コンクール募集」というポスターが貼ってあったそうです。フランス語だったため内容がよく分からず、読んでもらったところ、「自分も受けられる」ということが分かりました。しかし、受けようと考えているうちに、なんと応募の締め切りが過ぎてしまっていたのです。

それでも征爾は諦めず、日本大使館を訪ねて何とかならないかと相談しましたが、相手にされず、門前払いだったそうです。汚れたジーンズにヘルメット姿でスクーターに乗った若者が突然

現れたのでは、無理もなかったのかもしれない。

ところが征爾はさらに諦めず、今度はアメリカ大使館を訪ねました。アメリカ人でもないのに、です。すると、受付にいたアメリカ人の女性が非常に親切で、征爾の話丁寧に聞き、「それなら私が電話して聞いてみましょう」と、ブザンソンに長距離電話をかけてくれました。「今、日本人の若い指揮者が来ているのですが、締め切りは過ぎていますが、特別に受けさせてもらえませんか」と頼んでくれたのです。それがOKだったんです。締め切りが過ぎてしまったのに征爾だけ特別に受付してもらえました。彼は急いで課題曲を勉強し、汽車に乗ってブザンソンへ向かい、コンクールを受験しました。そして、そのコンクールで見事に優勝したのです。このとき力になってくださったアメリカ大使館の女性、マダム・ド・カッサは、征爾にとってまさに恩人でした。征爾が後に有名になり、パリでデビューした際には、「セイジ・オザワを世に出したのは私よ」と言って楽屋を訪ねてきたそうです。若い頃は音楽家だったそうで、音楽への深い理解があった方だったのだと思います。

当時は、日本ではブザンソンに指揮者コンクールがあること自体、ほとんど知られていませんでした。征爾自身も、現地に着いてポスターを見て初めて知ったほどです。それが今では、日本や世界中の音楽学校の指揮科の学生たちが、ブザンソンを目標に勉強する時代になりました。今年も、若い日本人指揮者・米田覚士さんが優勝しましたが、征爾が優勝したのは日本人として初めてでした。その後、現在までに11人の日本人指揮者が優勝しています。日本の音楽水準が大きく向上したことを、歴史として実感させられます。このように、征爾のデビューに至るまでの道のりは、紆余曲折の連続で、今では信じられないような出来事ばかりでした。しかし、そうした数々の中で、なんとか世界デビューができたわけです。

しかし、ヨーロッパでデビューしたばかりの頃、現地の新聞記者や音楽評論家から、こんなことを言われたそうです。「あなたは日本人なのに、よくベートーヴェンが分かりますね」「日本人なのに、よくバッハが分かりますね」と。表向きは褒め言葉のように聞こえるのですが、その裏には、「本当は分かっているだろう」という差別的なニュアンスが含まれていたと言っていました。

そうした言葉を一度や二度ではなく、何人もの人から、しかも一年、二年と繰り返し受けたそうです。本人はあまり多くを語りませんでしたが、それを乗り越えるためには、人一倍勉強をしなければならなかったのだと思いますし、デビューするまでの道のりは本当に大変だったのだと思います。

そうした中で、ベルリン・フィルのヘルベルト・フォン・カラヤンが征爾を弟子として迎え、レッスンを受けるようになります。また、アメリカでは、当時ニューヨーク・フィルハーモニックの指揮者だったレナード・バーンスタインから、「うちのオーケストラの副指揮者にならないか」と声をかけられ、アメリカへ渡ってニューヨーク・フィルで仕事をするようになりました。そうして、少しずつ指揮者としての仕事が増えていったのです。

VII 世界のオザワとして

ただし、良いことばかりが続いたわけではありません。あまり知られていないかもしれませんが、当時、征爾は一度日本に戻り、NHK 交響楽団の指揮者に就任しています。しかし、NHK 交響楽団は、東京藝術大学を卒業した超エリートの集団ですから、「出来たばかりの桐朋学園出身の、若い指揮者に振られるのはたまらない」といった空気があったようです。今で言えば「いじめ」に近い状況だったのかもしれませんが。当時はまだ「いじめ」という言葉はありませんでしたが、結果として、「小澤の指揮では演奏できない」として、演奏会がボイコットされてしまいました。

それが、年末の「第九」の演奏会でした。いわゆる「N 響事件」と呼ばれる出来事で、社会面でもスキャンダルとして報道され、「生意気だ」などとマスコミからも激しく叩かれました。この事件をきっかけに、征爾は「もう日本では指揮ができない」と感じ、アメリカへ渡ることになります。「二度と日本ではできない」と、アメリカに向かったのです。

ところが、アメリカに渡ったからといって、すぐに仕事があるわけではありません。ニューヨークの安いアパートで、マネージャーからの連絡を待つ日々が続きました。そんなある日、ロナルド・ウィルフォードというマネージャーから電話がかかってきました。シカゴ交響楽団で、一週間後に予定されていた演奏会の指揮者が病気で倒れてしまい、急きょ代役を探しているというのです。

シカゴ交響楽団のマネージャーが征爾のマネージャーのもとに電話をかけ、「誰か空いている指揮者はいないか」と聞いてきました。そこで、「今、空いているのは日本人の若い指揮者が一人いる」と伝えたところ、「日本人？それは勘弁してくれ」と言われ、電話を切られてしまったそうです。

ところが、しばらくして再び電話がかかってきました。「もう他に誰もいない。その日本人でもいいから、そいつをよこしてくれ」と。そう言われて、征爾はマネージャーから「今すぐシカゴへ飛べ。曲目はこれと、これだ。きちんと振ってこい。このコンサートが成功するかどうかで、お前の指揮者人生が決まるぞ」と送り出されました。

そのとき征爾は、「シカゴと聞いても、アメリカのどこにあるかも分からなかった。ギャングしか思い浮かばなかった」と、のんきなことを言っていましたが、とにかくシカゴへ向かい、オーケストラと一日のリハーサルを終えました。すると、「日本人は勘弁してくれ」と言っていたそのマネージャーが征爾のところにやって来て、「I will give you this orchestra」と言ったそうです。つまり、「このオーケストラを君にやる」という意味です。

毎年夏に行われる音楽祭の音楽監督を来年から務めてほしいという、大変なオファーを受けました。これはまさに、運命の分かれ目だったと思います。こうして征爾は、シカゴ交響楽団の夏の音楽祭の音楽監督を、五年間務めることになりました。

その後は、カナダのトロントへ渡り、トロント交響楽団の音楽監督を五年間務めました。つい先日、野球のワールドシリーズでは負けてしまったようですが、そうした国際的な舞台での活動

が、さらに続いていくことになります。

その後、征爾はサンフランシスコのオーケストラを指揮するようになり、そして最終的にはボストン交響楽団の音楽監督に就任しました。公式には29年間ということになりますが、その前から夏のタングルウッド音楽祭でボストン交響楽団を振っていましたから、実際には30年以上にわたってボストン交響楽団と関わり続けていたことになります。

ボストンは本当に素晴らしいオーケストラで、街としてもとても魅力的で、征爾自身も「もう辞める気はなかった」と言っていました。契約も期限のないものでした。しかし、ご存じの方も多いかと思いますが、ウィーン国立歌劇場から「音楽監督になってほしい」というオファーを受け、大いに悩んだ末に、「やはりオペラをやろう」と決断し、ボストンを離れることになります。そして2002年、ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任しました。

その年のお正月、元旦に行われる恒例のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤー・コンサートに初めて出演し、同じ年の秋から、本格的にウィーン国立歌劇場の音楽監督としての仕事を始めることになりました。

齋藤秀雄先生はオペラについては教えてくださらなかったそうですが、その後、ヨーロッパで仕事をするようになってから、カラヤン先生から、「オペラをやらなければだめだ」「オペラとオーケストラは車の両輪だ。両方やらなければいけない」「オペラをやらなければ、モーツァルトもヴェルディもワーグナーの半分しか分からない」と、強く言われたそうです。

さらにカラヤン先生は、自分が指揮する予定だったオペラ公演について、「これはお前が振れ」と言って、いきなりチャンスを与えてくれました。それが、ザルツブルクだったと思いますが、そこで指揮したオペラが、征爾にとってのオペラ・デビューでした。それ以降、オペラに深くのめり込み、長年にわたって取り組んできた結果、先ほどお話ししたように、2002年のウィーン国立歌劇場からのオファーへとつながっていったのです。これは本当に良い選択だったと思います。

残念ながら、当初は10年契約だったものが、病気のために7年でウィーンを離れることになりましたが、その7年間、私も何度も現地へ足を運びました。オペラは本当に面白く、引き込まれるものでした。

また、松本で行われている音楽祭でも、オペラを継続して上演するようになりました。松本のオペラは、一般にはあまり知られていない、普段なかなか上演されない作品を取り上げることが多いようですが、それもこの音楽祭の大きな魅力の一つです。

そのような形で、今も活動は続けております。

VIII 再び中国の地に

最後に、最初に申し上げましたように、征爾は中国で生まれたものですから、「どうしても中

国に行って、自分が生まれた中国で、中国のオーケストラと一緒に音楽をしたい」という思いを、ずっと抱き続けていました。

ところが、あの文化大革命の時代には、「西洋音楽は聴くことも演奏することもだめ」という状況が、およそ十年間続いていました。ですから、中国へ行くことも、音楽をすることもできなかったわけです。それでも、その夢だけはずっと持ち続けていました。

やがて文化大革命が終わり、その頃に倉敷レイヨン、今のクラレですね、倉敷に美術館をお持ちの会社があります。あの会社は、日本と中国がまだ正式に国交を結ぶ前から、民間レベルでの交流を続けておられまして、当時の社長さんは中国でも非常に顔の広い方でした。その社長さんにはお嬢さんがいらして、その方がテレビ番組制作会社のテレビマンユニオンで音楽番組を制作されているプロデューサーだったんです。れいこさんという方ですが、その方がお父様のつてを使って、「小澤さんが中国で音楽会をやりたがっている」という話を、ずっと中国側に伝えてくださっていたんですね。

その結果、北京中央楽団という北京のオーケストラと連絡が取れるようになり、1978年、初めて北京でオーケストラを指揮することが実現しました。そのときは、私たち家族も全員で中国へ行きました。

念願かなって、征爾はそのオーケストラを前にした、最初のリハーサルのときに、「音楽家になって、今日が一番うれしい」と言って、涙をぬぐって指揮を始めたんです。それほどまでに、ずっと中国のことを思い続けていたわけです。そのコンサートは本当に大成功でした。

その後、北京の市内には、私たちがかつて住んでいた家が今も残っているということが分かりまして、もちろん別の方が住んでおられましたが、「せめて門の前だけでも見てみよう」ということで行ってみました。そうしたら、車の音を聞いて、中に住んでいる方々が一斉に出てこられたんです。そこで、「実は、ここに昔住んでいた日本人なんです」と話しますと、「昨日テレビで見たシャオツォだ」と言われまして。「小澤」は中国語で「シャオツォ」と言うんですね。「昨日テレビで指揮していたシャオツォだ」と大騒ぎになりまして、「入れ、入れ」と言ってくださり、とうとう家の中まで入れていただきました。まさか昔の自分たちの家に入れるとは思っていませんでしたので、非常に感激的なひとときでした。

それがきっかけとなって、その後、征爾はほぼ毎年のように中国を訪れるようになりました。そして、自分が生まれた瀋陽という、北の地方の町にもオーケストラがあることが分かり、「それなら、そこも振ろう」と言って、瀋陽へ行き、瀋陽のオーケストラを指揮したこともありました。このように、中国との縁は、その後もずっと続いております。

そのときのことがアナザーストーリーズの番組「小澤征爾 悲願のタクト～北京に流れたブラームス」で取り上げていただきましたので、少しご紹介します。

（ここで、指揮者・小澤征爾氏が中国で指揮を行った際の映像が流された。映像では、小澤氏が自らの師である齋藤秀雄氏、ならびに亡父・小澤開作氏の写真を前に、オーケストラを指揮す

る場面が映し出された。映像の背景として語られるのは、日中国交回復を機に実現した中国公演であり、小澤氏にとっては長年の念願であると同時に、特別な思いを伴う出来事であったという点である。家族の証言によれば、小澤氏はこの訪中を、歴史的経緯を踏まえた「謝意」や「省察」を含むものとして受け止めていたとされる。また、同時代の中国の音楽家たちが置かれていた厳しい状況にも触れられ、個人の音楽的感情と、国際関係や文化史という大きな文脈とが交差する場面として、この公演が位置づけられている。）

いや、本当に中国は、文化大革命の影響というか、そのために十年間の空白があって、音楽の発達が遅れてしまったんですね。それは確かに事実だと思います。ただ、今ではもう目覚ましい勢いでレベルが上がっていて、日本を追い越すのではないかと思うほどです。国際コンクールでも中国人が次々と優勝していますし、オーケストラの演奏水準も非常に高くなっています。正直に言えば、日本が追い抜かれている状況にあるのではないかと感じることもあります。

一方で、中国の人たちは日本に対してとても親しみを持ってくれていると感じます。私自身、中国で生まれたということもあって、中国には強い親近感を抱いております。

IX 文化・芸術の力 ～若者へのメッセージ～

ただ、今ふと思い出したことがあります。昨日、ワールドシリーズでアメリカの野球に日本人選手が出場しているのを見て、改めて感じたことがありました。今では日本の選手がアメリカで活躍するのは当たり前のようになっていますが、その道を切り開いたのは、やはり野茂英雄投手だったと思うんです。

野茂投手が、日本の野球界の強い反対を押し切ってアメリカに渡った当時、日本では「アメリカで通用するわけがない」「思い上がりだ」と、非常に冷たい評価を受けていました。それでも野茂投手はそれを乗り越え、渡米初年度から新人王を獲得するなど、見事な活躍をしました。その野茂投手の努力や、断崖絶壁に立たされたような覚悟は、兄・征爾にとっても、強く重なるものがあったのだと思います。

征爾は、ヨーロッパに渡ったばかりの頃、「日本人なのに、よくバツハが分かるな」と言われた経験がありましたが、その言葉の裏にある差別的な空気を、野茂投手も同じように感じていたのではないかと思います。そのためか、兄はよく「野茂投手、野茂投手」と口にしていました。

そして、野茂投手が引退した時のことです。征爾が私に「野茂が引退したな」と言うので、「そうだね」と返すと、「あいつが何て言ったか、知ってるか」と聞かれました。「分からない」と言うのと、『悔いが残る』って言ったんだと教えてくれたんです。あれほどの活躍をした野茂投手でさえ、「まだやりたかった」「悔いが残る」と語った。その言葉に、征爾は強く心を打たれていました。

晩年、征爾自身も腰を痛め、思うように体が動かず、指揮ができなくなっていました。周囲からは、「もう十分やり遂げた」「万万歳でもういいじゃないですか」と言われても、本人は「ま

だやりたい」「まだ振りたい」と、最後まで言い続けていました。だからこそ、野茂投手が引退の際に語った気持ちが、よく分かったのだと思います。

昨日の試合を見ながら、改めて「野茂投手は偉大な人だった」と感じましたし、「野茂投手がいたからこそ、今こうして日本人選手がアメリカで活躍できているんだな」と、そんな思いで野球を見ておりました。

以上、雑駁な話で恐縮でしたが、もしご参加の皆さまの中で、何かお聞きになりたいことがございましたら、どうぞご質問ください。

質問（学生） 本日は貴重なお話をありがとうございました。一点、質問させていただきたいと思います。私は将来、「教育」と「芸術」という分野で社会に貢献していきたいと考えております。将来、教員になるかどうかはまだ分かりませんが、少なくとも現時点では、絵を描いたり、音楽を演奏したりといった芸術活動を通して、教育に関わっていきたいと考えています。

ただ、学生としてそのような活動を続ける中で、「自分にとって本当の芸術とは何だろうか」「教育とは何だろうか」といった問いに対して、まだ明確な答えを見いだせずにいます。

これからの人生の中で、ある時ふと「これかもしれない」と思えるような転機が訪れるのか、それとも、どのような気持ちや態度、意識を持ち続けていれば、いずれそうした答えが見えてくるものなのか、その点について先生のお考えをお聞かせいただけましたら幸いです。

小澤幹雄氏 それは、私などが簡単にお答えできるようなことではなく、本当に大きな問いだと思います。ただ一つ申し上げられるとすれば、ご自身が「やりたい」と思うことに、まっしぐらに取り組むこと、それに尽きるのではないのでしょうか。

正直なところ、「こうすべきだ」「こうしたほうがいい」と私から言えるような立場ではありません。しかし、どのようなことがあっても、自分の進みたい道を諦めずに歩み続けることが何より大切だと思います。

この間のノーベル賞受賞者の方も、「周囲から『無理だ』『だめだ』と言われ続けても、最後まで研究の道を諦めなかった」とお話しされていました。やはり、自分が本当にやりたいことを、最後まで諦めずに続けること、それしかないのではないかと思います。

質問（学生） それは、一つの確信というか、いわば「大きな確信」に近いものなののでしょうか。

小澤幹雄氏 そうですね。どうか頑張ってください。実にすごい質問をされましたね。

私もこの年齢ですので、本日は、つい年寄りめいた昔話ばかりしてしまいました。若い皆さんにとっては、あまり実感の湧かない話が多かったかもしれません。ただ、どこか頭の片隅に、「年寄りがこんな話をしていたな」と、ほんの少しでも残していただけたら、それだ

けで私は嬉しく思います。

戦争体験についても、偉そうに語るつもりはありません。ただ、日本はいま非常に平和な国ですから、皆さんは平和しか知らず、戦争を知らない世代です。だからこそ、戦争を知っている人間の体験を、ほんのわずかでも心の隅に留めていただければと思います。

私は、食べ物のない時代に育ちましたので、食べ物の好き嫌いがありませんし、食べ物を残すということもできません。いまは、言い方は難しいですが、好きなものがいくらでも手に入る時代です。ただ、それを羨ましいとはあまり思いません。子どもの頃に飢えを経験したことは、今でも自分にとって大きな糧になっていると感じています。決して負け惜しみではありません。

皆さんには、現在の物質的な豊かさを大切にしつつも、その「ありがたさ」というものを、ぜひ感じ取っていただければと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

Advancing Global Education and Democracy through the Practice of Value-Creating Education

Namrata Sharma, Takao Ito, Tetsuko Watanabe, Stephanie Kukita

Global Education for human development and a participatory democracy

Soka, or value-creating education, is an approach to curriculum developed by Japanese educators Tsunesaburo Makiguchi (1871-1944), Josei Toda (1900-1958), and Daisaku Ikeda (1928-2023). At a time of societal transformation in the early twentieth century, and in opposition to increasing militarization by an authoritarian regime, Makiguchi articulated a radically different vision of education aligned with democratic values and fostering independent thought. In more recent years, this approach has been instrumental in shaping global citizenship education across Soka institutions worldwide. These institutions are established by Ikeda with the purpose of framing education as a transformative process aimed at cultivating capable citizens.

Building on Makiguchi's vision, Ikeda's proposals and thoughts on education for global citizenship are aimed at fostering empathy, a sense of shared humanity, and a commitment to peace (Ikeda 1996). Research studies suggest the practical application of these ideas within selected Soka institutions (Watanabe 2025). Such emerging scholarly works in the growing field of Soka studies in education contribute to current themes related to the discourse on global education and democracy. For example, the need for global education within the educational system that is focused on human development (Ito 2008) and preparing learners for democratic engagement at national and global levels (Sharma 2025).

As critical thinkers such as John Dewey, Makiguchi and Ikeda envisaged, the true test of democracy is the development and growth of the individual citizen. Such as emphasized

Namrata Sharma (State University of New York); Takao Ito, Tetsuko Watanabe, and Stephanie Kukita (Soka University)

This article is a reprint from the blog post (https://angel-network.net/Blog_Value-Creating_Education), which is an outcome of a panel discussion held at the ANGEL Conference 2025 in Berlin, Germany between 4-6 June.

through Dewey's concept of participatory democracy. Whereas in a representative democracy people elect representatives to do all of the active work of governing, in a participatory democracy, as Dewey envisaged, people need to engage directly in the ongoing work of democratic life. As has also been argued by other scholars, a sustainable world without participation and democracy is unthinkable (Wals and Jickling 2009: 78), highlighting the importance of sustainability education to human development. This places a greater emphasis within global education across nation-states that is focused on human development to create a sustainable world with the full and democratic involvement of all, including young members of society.

The influence of such thought processes has begun to influence Soka and non-Soka educational settings with a greater emphasis being placed on human development within programs focused on enhancing education for global citizenship. For example, research on key initiatives in Soka University Japan examines students' university experiences and personal growth through formal and informal learning within diverse environments, such as interactions between Japanese and international students, and among international students themselves in cultivating a global mindset (Kukita 2025).

Politicization and depoliticization of progressive thought

At the same time, broader studies engaging the ideas and relevance of Soka progenitors and other such critical thinkers also raise key questions, including, what does it mean to be an active citizen?; and under what social, political, or educational scenario does a person become a citizen? (Sharma 2020, 2025). Questioning for example, the socio-political context within which the Soka progenitors advocated their ideas as active citizens – a context of authoritarianism similar to other revolutionary thinkers such as Paulo Freire (1970), bell hooks (1994), and Mahatma Gandhi (1958) who have offered deeply political critiques of oppression and transformative visions for liberation (see Bourn 2022). In modern democratic educational contexts, however, their ideas are subject to two competing processes: politicization and depoliticization.

To explain, politicization highlights the disruptive potential of progressive thought. For example, Freire's (1970) *Pedagogy of the oppressed* is taken up as a manifesto for critical pedagogy, mobilizing teachers and students to see education as a practice of freedom (Giroux 2020). Depoliticization, however, strips these thinkers of their radical force. Their writings are reduced to universal "inspirational" lessons, disconnected from the political struggles

that gave rise to them. Freire becomes merely a symbol of “student-centered learning” ; Gandhi becomes a spokesperson for “peace” without reference to colonial resistance; hooks is invoked as an advocate of “love” without her critique of patriarchy and white supremacy. This process makes radical thought palatable within mainstream curricula but undermines its transformative intent (Apple 2006). The fate of such progressive thinkers is not dissimilar to the claim Herbert Marcuse makes on the “classics” of literature, philosophy and politics which, in becoming available in paperbacks in local bookstores

have left the mausoleum to come to life again...but coming to life as classics, they come to life as other than themselves; they are deprived of their antagonistic force, of the estrangement which was the very condition of their truth. The intent and function of these works have thus fundamentally changed. If they once stood out in contradiction to the status quo, this contradiction is now flattened out.

(Marcuse 1972: 24)

A vital implication of the above examples of the politicization and depoliticization of dissident thinkers is that their ideas and values tend to lose their creativity and efficacy when they are used in a way that does not contend with the existing power structures of society. This argues the need for political education and addressing the impediments related to learning for social participation.

Implications for global education across formal and non-formal learning spaces

Advancing global education and democracy through the practice of value-creating education and similar critical pedagogical approaches include the following:

- Engage with creative modes of thinking and acting: Curriculum development in global education can be enhanced through engaging students in the creative modes of thinking, behaviors, and beliefs of citizens such as Freire, hooks, Makiguchi, and Gandhi, who did not provide a single, linear and reductive prescription for the needs of their respective societies, but instead, contended with the complexity of their respective social and educational contexts (Sharma 2020).
- Embrace controversy for political education: In the face of rising narrow nationalism across nation-states, the need to equip educators with the ability and confidence to teach controversial political issues, such as immigration and climate change within

the classroom is becoming increasingly relevant. As Hess and McAvoy's work on the political classroom suggests, teachers are being confronted with the "political education paradox" of the contrast between "the need to provide students with a nonpartisan political education on the one hand with the need to prepare them to participate in the actual, highly partisan political community on the other" (Hess and McAvoy 2015: 4; see also Council of Europe 2014; and Oxfam 2018 for relevant resources).

- Emphasize a normative, reflective approach to learning: Global education can also be enhanced by taking into consideration students' values and interests that inform their actions. As pointed out by the British sociologist, Basil Bernstein (1970), it is inadequate to "politically" educate the learner within the closed brick walls of schools where in most cases the learner is expected to drop their identity, way of life, and its symbolic representations at the school gate. Further, guidelines and recommendations for educators, curriculum developers, and policymakers can also help challenge our own values and assumptions in undertaking the task of Education for sustainability and global citizenship so that it is reflective, dialogic, and inclusive (Sharma 2025: 155-194; for details visit <https://drnamratasharma.com/>).

References

- Apple, M. W. (2006). *Educating the "right" way: Markets, standards, God, and inequality*. New York: Routledge.
- Bernstein, B. (1970). Education cannot compensate for society. *New Society*, 15(387), 344–347.
- Bourn, D. (2022). *Education for social change: Perspectives on global learning*. London: Bloomsbury.
- Council of Europe. (2014). Teaching controversial issues: Developing effective training for teachers and school leaders. <https://pjp-eu.coe.int/en/web/charter-edc-hre-pilot-projects/teaching-co...>
- Freire, P. (1970). *Pedagogy of the oppressed*. New York: Continuum.
- Gandhi, M. K. (1958). *Hind swaraj or Indian home rule*. Ahmedabad: Navajivan Publishing House.
- Giroux, H. A. (2020). *On critical pedagogy*. London: Bloomsbury.
- Hess, D. E. and McAvoy, P. (2015). *The political classroom: Evidence and ethics in democratic education*. New York: Routledge.
- hooks, b. (1994). *Teaching to transgress: Education as the practice of freedom*. New York:

Routledge.

- Ikeda, D. (1996). Thoughts on education for global citizenship. Daisaku Ikeda Website. <https://www.daisakuikeda.org/sub/resources/works/lect/lect-08.html>
- Ito, T. (2008). Readings from Daisaku Ikeda's youth: Johann Heinrich Pestalozzi in the early development of Daisaku Ikeda's educational thought. *Soka Kyōiku*, 1, 141–7.
- Kukita, S. (2025, June 4-6). Works at IRISE: Initiatives and research on value-creating education and global citizenship [Conference presentation]. ANGEL Conference, Berlin, Germany. <https://angel-network.net/ANGELconference2025>
- Marcuse, H. (1972). *One Dimensional Man*. London: Abacus.
- Oxfam. (2018). Teaching controversial issues: A guide for teachers. <https://policy-practice.oxfam.org/resources/teaching-controversial-issue...>
- Sharma, N. (2020). *Value-creating global citizenship education for sustainable development: Strategies and approaches*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Sharma, N. (2025). *Education for sustainability and global citizenship: Intercultural, ethical, and justice-based approaches*. London: Bloomsbury.
- Wals, A. and Jickling, B. (2009). A framework for young people's participation in sustainability. In P. B. Corcoran and P. M. Osano (Eds.), *Young people, education, and sustainable development: Exploring principles, perspectives, and praxis* (pp. 77–84). Wageningen: Wageningen Academic.
- Watanabe, T. (2025, June 4-6). The present-day practice of value-creating education [Conference presentation]. ANGEL Conference, Berlin, Germany. <https://angel-network.net/ANGELconference2025>

池田大作の「人間主義」と創価大学

勘 坂 純 市

アニョハセヨ

創価大学の創立者である池田大作先生は、1997年の趙永植先生との会見の折、慶熙大学は創価大学の「お兄さま」の大学であると述べました¹。本日は、「弟の大学」である創価大学を代表し、「お兄さま」の慶熙大学の宗教市民文化研究所が、韓国新宗教学会とともに主催される学術大会で話をさせていただくことを大変光栄に思います。

以下、学術報告ですので、人物の敬称は略させていただきます。

1. 創造的人間たれ

1997年の池田との会見で、趙は、「人間性が破壊されないように、何とか歴史の方向を転換しなければならない」と述べ、その方途として、趙の「人間中心主義」と池田の「人間主義」をあげました。趙は、この二つは同じ思想であるといいます²。

では、池田のいう「人間主義」とはなんでしょうか？ 本日は、とくに池田が創価大学に対し示した指針を主な手掛かりとして考えていきたいと思います。

池田は、1973年の創価大学第3回入学式で、学生たちに「創造的人間たれ」と呼び掛けました。これは、現在に至るまで創価大学の重要な指針になっています。

もちろん、創造の作業は容易ではありません。池田は、「創造の仕事は高い山のようなものであり、……幅広い学問的知識と深みのある思索の基盤のうえに、はじめてみのある創造の仕事ができる」と述べています。その「基盤」を築くために、大学はもっとも適切な場です。しかし残念ながら、当時の日本の大学は、「創造性への意欲は皆無に等しい」、とくに、「創造的人格

Junichi Kanzaka（創価大学経済学部）

この原稿は、2025年10月18日に、韓国新宗教学会と慶熙大学宗教市民文化研究所が主催し、韓国外国語大学で開催された「池田大作思想学術大会」で報告されたものである。この学術大会のテーマは、「池田大作思想と人類文明の転換——持続可能な平和と世界市民性を中心に」であり、韓国の学識者70人が出席した。

¹ 池田大作（2000）『21世紀と人生を語る』第1巻、聖教新聞社、248頁

² 池田大作（2000）『21世紀と人生を語る』第1巻、聖教新聞社、264、267頁

を形成していく場」とはなっていませんでした³。そこで池田は、創価大学で、創造的人間を育成する真の大学の姿を、取り戻そうとしたのです。

また同じ講演で、池田は、学生たちに、「この創価大学を自分たちでつくり、自分たちで完成していく大学であるという認識をもっていただきたい」と呼びかけています。学生こそが、大学建設の主体者である。大学の中心は学生である。池田は、この指針を何度も創価大学で語っています。池田の「学生中心の大学」という指針は、日本の多くの大学の、教育より研究を重視する風潮に対する挑戦でした。日本の文部科学省が、「学生の立場に立った大学づくり」のために、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換の必要性を強調したのは、2000年になってのことです⁴。これと比較すれば、池田の「学生中心」の大学論が先駆的意義をもっていたのは間違いありません。

しかし、池田の大学論の意義は、単に時代を先取りしていたことに留まりません。このことを理解するために、次に、池田の学問論、科学論について考察したいと思います。

2. 「急進主義的アプローチ」批判

平和学の父といわれるヨハン・ガルトゥングは、池田との対談で、25年かけてやっとたどり着いた自身の「基本的な洞察」を紹介しています。すなわち、「社会の現実はいかに複雑で矛盾に満ちており、数学のような一つの矛盾なき思想体系によって適切に表現することはできない」というのです。ガルトゥングは、世界を平和にする道筋を明らかにしてくれる理論を求めているのかもしれません。しかし、現実はいかに複雑で、そんな理論などできないと気付きました。池田は、この洞察に同意し、「抽象的な論理や概念は、あくまでも現実の“部分観”にすぎません」と答えています⁵。

こうした両者の学問観は、ジョン・デューイのプラグマティズムの思想と共通しているといえるでしょう。デューイは、「概念、理論、思想体系」は「道具」とであると指摘し、「すべての道具の場合と同じように、その価値は、それ自身のうちにあるのではなく、その使用の結果に現われる作業能力のうちにあり」と述べています。概念、理論、思想体系は、決して完璧なものではない。それらは、「それらをテストする行動の基礎として理解すべきであって、究極的なものとして理解すべきではない」。むしろ、それらは、「使用されることを通じて常に発展し得るもの」なのです⁶。

デューイ協会元会長のヒックマンも、池田との対談で、「デューイの方法は、まず実際に経験したさまざまな困難に始まり、そこから安定を取り戻すのに必要な道具を適用することで達成さ

³ 池田大作（1973）「創造的人間たれ」『池田大作全集』59巻、41頁

⁴ 文部科学省（2000）「大学における学生生活の充実方策について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm（2025年9月21日閲覧）

⁵ ヨハン・ガルトゥング、池田大作（1995）『平和への選択』毎日新聞社、75、77頁

⁶ ジョン・デューイ（[1920]1968）『哲学の改造』（清水幾太郎・清水禮子訳）岩波文庫、127-128頁

れる」と述べています⁷。

理論は「道具」に過ぎません。しかし、その理論を万能視して、それに合わせて「現実を裁断し、作り変えていこうとする」試みがしばしば行われてきました。1993年のアメリカ・クレアモント・マッケナ大学での講演⁸で、池田はこれを「急進主義的アプローチ」⁹と呼んで批判しています。それは、「歴史は一定の理論、法則によって導かれ、したがってその理論、法則さえマスターしてしまえば、すべてが分かったように錯覚してしまう」アプローチです。池田がとくに問題とするのは、こうしたアプローチが、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力」を否定してしまうことです。

それは、目的の達成への過程を、ゴールに向かって歩みを進める道のりに例えてみるとわかりやすいかもしれません。ゴールに向かって歩いている自分を想像してください。そこで、あなたは問題に直面しました。あなたの前には幾筋かに分かれた道があり、間違っただ道をとれば目的地にはたどりつけません。でも、もしここに、それを「マスターしてしまえば、すべてが分る」包括的な「理論、法則」があるのなら、その理論が教えてくれた通りに正しい道を選ぶことができるのです。次に別の問題が起きて同じです。その理論はいつも正解を教えてください。そしてあなたは無事にゴールにたどり着くことができます。「急進主義的アプローチ」に多くの人が魅力を感じてしまうのは、理論にこうした力があると錯覚しているからです。

しかし、今あなたが歩んできた道のりを振り返って下さい。気が付くでしょうか。実は、あなたは、何も考えていないし、何も決断していません。ただ、理論にしたがって道を選んできただけです。あなたは、理論の駒にすぎません。池田が、「急進主義的アプローチ」では、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力を否定されてしまう」というのは、このことをいっています。

また池田は、モスクワ大学総長のサドーヴニチとの対談で、「もし、かりに科学の予測機能が完璧なものとなり、未来が100パーセント予測可能になったとすれば、それは、動物の未来と本質的に同じ」であるといいます。すなわち、『法則』や『決定論』にこだわって自由や責任に背を向けることは、未来を拒否することにほかならず、その結果、……人間であること自体の否定にまで行きついてしま[う]」のです¹⁰。

3. 理論を使いこなす知恵を

これに対し、池田は、「人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力」を開発することから出発しようとします。困難な状況でもそれを乗り越える力が人間にはある。池田は、そうし

⁷ ラリー・ヒックマン、ジム・ガリソン、池田大作『人間教育への新しき潮流：デューイと創価教育』第三文明社、80頁

⁸ 池田大作（1993）「新しき統合原理を求めて」（池田大作（1996）『海外諸大学講演集 21世紀文明と大乘仏教』聖教新聞社）

⁹ 英語訳では、“the radical rationalist approach”（急進合理主義的アプローチ）となっている。

¹⁰ ヴィクトル・A・サドーヴニチ、池田大作『新しき人類を 新しき世界を』潮出版社、2002年、93-94頁

た一人ひとりの可能性を信じ、その可能性を開花させることを第一義としました。彼の思想が、「人間主義」といわれる理由の一つはそこにあるのでしょうか。

もちろん、自身の可能性を開花させることは、容易なことではありません。池田は、創価大学第4回入学式で、「逆境への挑戦をとおして開かれた、ありとあらゆる生命の宝を磨きぬくにつれて、人間は初めて真の人間至高の道を歩みゆくことができる」と訴えました。そうした「汗と涙の結晶作業」のなかでこそ、各自の“創造的生命”は開花し、「創造的人間」へと成長することができるのです。

さらに池田は、同講演で、「人間が技術の開発、発展によって得てきた」“力”を学ぶだけではなく、「この“力”を使いこなし、人間の幸福のために価値判断していく」「知恵”をも持つべきだと呼びかけています。先に述べたように、学問が提供する理論、つまりここでいう“力”だけでは問題を解決できません。それは池田がいうように「部分観」に過ぎないからです。だとすれば、それを使いこなす人間の知恵がどうしても必要になります。

このことは、学問の役割を懐中電灯に例えるとわかりやすいかもしれません。もういちど、ゴールに向かって歩みを進める自分を想像してみてください。しかし、今度はゴールまでの道りをすべて明らかにしてくれる光はありません。あなたが持っているのは、暗闇の一部を照らす懐中電灯だけです。道が幾筋かに分かれた場所に来て、懐中電灯の光は、どちらの道がゴールにつながっているかを示してくれません。懐中電灯、すなわち理論は、すべてを明らかにする光を発することはないのです。しかし、かといって懐中電灯が要らない、ということはないでしょう。たとえ、すべてを照らし出してくれないとしても、暗闇の道を歩くのに、一本の懐中電灯は役に立つ道具ではないでしょうか。

そして、大事なことは、懐中電灯はそれをもって道を進もうとする人びとがいてはじめて活かされることです。理論も、それを用いて具体的な問題を解決しようとする人間の知恵があつてはじめて活かされるのです。

4. 創造的人間を育成する、学生中心の大学とは

最後に、これまでの考察をもとに、もう一度、池田が創価大学の学生に対し、「創造的人間たれ」「学生中心の大学」と訴えた意味を考えてみたいと思います。

私たちは大学の姿を考えると、気づかないうちに、このような枠組みで考えていないでしょうか？ すなわち、そこでは、大学にいる教員や研究者たちが作り上げた理論が、教育によって学生たちに伝えられ、学生たちはその「専門家」として、その理論を現実に応用していくことになります。

理論

↓ 人間（専門家）

現実

しかし、この枠組み自体が、池田の構想とは異なっています。池田は、理論を万能と錯覚する「急進主義的アプローチ」を批判し、人間が「自らの行動によって運命を切り開いていく力」の発揮を出発点とするべきだ、と指摘しました。理論は、現実の一部分しか明らかにしてくれないからです。したがって、個々の具体的な問題を解決するのは、一人ひとりの人間の知恵です。だとすれば、人間と理論の位置は、この図のようになるのではないのでしょうか。

人間（知恵）
↓ 理論（知識）
現実

個々の問題の解決策を示すのは、あくまでも人間の知恵です。その人間は、理論を利用しますが、単純に理論に従うことはありません。このように、現実の一つひとつの問題を解決する知恵を発揮する人間こそ、池田のいう「創造的人間」に他ならないでしょう。

こうした視点に立った時、大学における教育が単に専門知識の伝達にとどまるのではないことは明らかです。現実のさまざまな問題を解決しようとする諸研究も、研究者による理論の体系化としてだけで完結することはありえません。具体的な問題の解決は、具体的な現実のさまざまな局面で問題に対して自在に知恵を発揮する「創造的人間」の教育なしには成り立ち得ないからです。

ここに池田が、大学での教育を重視し、「大学の中心は学生」であることを強調した一つの理由があります。学生が、理論を教えられるだけの存在であれば、大学の中心は理論を作り出す教員・研究者です。しかし、学生が、現実の問題を解決する人間となることが真に求められることであるならば、池田のいうとおり、大学の生命線は、学生一人ひとりの可能性を開いていくことであり、大学の中心は学生です。

池田は、学生たちに「創造的人間たれ」と呼び掛けた講演の中で、「戦争兵器がもつ平和への脅威はもちろん、進歩に対する誤った信仰が、人類の死への行進を後押ししている」と指摘しています。そして、こうした危機に対する「壮大な人類の戦いの一翼」を担うのが創価大学の使命であると述べています。本日の学術大会のテーマにある“持続可能な平和”の実現のための“人類文明の転換”は、まさに創価大学の開学の目的だったのです。その実現のために、池田が提唱したのが「創造的人間」の育成でした。

この理想の実現のために、創価大学は、「文化大恩の国」である韓国のみならずと共に歩んでいきたいと思います。そして、今回の学術大会がその一歩となることを深く希望します。カムサハムニダ。

中国における「池田思想」研究の動向（22）

高橋 強・堀 口 真 吾

1. 池田思想研究に関する学術シンポジウム、フォーラム等

（1）第16回「池田大作平和思想研究国際フォーラム」

第10回「池田大作思想研究国際青年フォーラム」

2025年2月27日、台湾・中国文化大学にて、「平和・文化・教育——21世紀の青年の使命」とのテーマのもと、上記2つのフォーラムが同大学「池田大作研究センター」主催で開催され、約350人の学生や教員らが集った。同フォーラムには、20大学25人の研究者らが論文を寄せた。

開幕式の冒頭、これまで別々に行われていた研究者のフォーラム、院生の青年フォーラムを今回より合同開催する旨の報告があり、これまでを総括する映像が放映され、池田大作氏と張鏡湖前理事長の友誼、創価大学と中国文化大学の交流の歴史、池田思想研究の成果等が紹介された。

开幕式では、林彩梅元学長による歓迎挨拶の後、同センターの名誉主任である池田博正創価大学最高顧問のメッセージが代読されるとともに、王子奇学長等の挨拶があり、創価大学を代表し鈴木将史学長（現顧問）が祝辞を述べた。

以下、「会議日程」に基づき2名の基調講演を含め、発表論文のテーマを紹介する（以下敬称略）。

「基調講演」

鈴木将史「池田大作の対話運動と21世紀の青年の使命」（創価大学）

林彩梅「池田の王道文化が企業発展に齎す優位性」（中国文化大学）

「第16回池田大作平和思想研究国際フォーラム」

戴惟天「気候変動下における青年の責任」

——池田大作思想からの啓示と行動指針」（中国文化大学）

呉安妮「池田先生の哲学思想が企業の永続的経営管理に与える影響」（政治大学）

高橋強「池田大作の『人間主義』と『人間革命』——教育主義を出発点として」（創価大学）

Tsuyoshi Takahashi（創価大学大学院文学研究科教授）

Shingo Horiguchi（創価大学池田大作記念創価教育研究所事務長）

唐彦博「池田大作思想を通じて 21 世紀の青年の使命と実践方法を探る」

（セント・ジョンズ科技大学）

傅仲麟「池田大作思想とグリーンエネルギーの発展との関係

——台湾の太陽光発電の発展を例として」（淡江大学）

林奇佑「人工知能と持続可能な医学」（台北医学大学）

林少顗「池田大作の平和教育理念が構築した AI 時代の道徳的枠組み」（虎尾科技大学）

黄麗鴻「希望と平和の社会へ——創価文化、教育、平和理念からの考察」（雲林科技大学）

陳勁廷「主観的要素と客観的要素：牧口常三郎の幸福論における 2 つの核心的概念」（東華大学）

何佳玲「超高齢社会の尊厳と対話——池田 SGI 平和思想の実践」（淡江大学）

吳啟新「人間を根本にした企業の持続可能性の指標」（中正大学）

莊念青「世界市民教育——池田大作のビジョンと台湾の国際教育」（屏東大学）

周建亨「21 世紀の青年の生態学と持続可能な発展における重要な役割

：池田大作の視点」（中国文化大学）

「第 10 回池田大作思想研究国際青年フォーラム」

古島冬馬「生命の無限の可能性を探る——生命科学と池田思想の視点から」（創価大学）

羅健文「池田大作思想の視点から探る 21 世紀のスマート医療の発展

——精神疾患を例として」（台湾大学）

王冠中「池田大作思想に基づく対話の人工知能との協働の価値」（台北大学）

鄭宏杰「池田大作思想からの人間主義の福祉経済と精神発展の探究」（台湾大学）

蔡幸諺「イスラエル・ハマス戦争をどう解決するか？池田大作平和思想を通して

地政学が引き起こしたイスラエル・パレスチナ紛争の解決策を論ずる」（台湾大学）

林觀明「偽情報の判読の未来——池田大作の寛容思想を中心に」（東呉大学）

陸雅瑩「“人を本とした”世界を構築する

——池田大作の平和哲学の心理療法における応用」（中山医学大学）

劉玫欣「池田大作の人間主義思想が幼児教育従事者の心理的レジリエンスに与える影響

——創価教育従事者を例として」（台北市立大学）

黃光華「沖合風力発電——池田大作思想を通じて台湾のエネルギー転換を探る」（台北科技大学）

林立安「台湾創価学会のボランティア組織のアイデンティティ、自我効力感と持続的な

サービス意欲の関係性についての初歩的な探求」（高雄師範大学）

（2）「広東外語外貿大学 2025 年池田大作シンポジウム」

2025 年 6 月 29 日、広東外語外貿大学が主催し、創価大学が後援する上記シンポジウムが、広州市内で開催された。「池田大作思想と中日人文交流」のテーマのもと、復旦大学、北京師範大学、厦門大学など中国の 50 以上の大学や研究機関から約 100 人の専門家、学者らが出席した。広東

外語外貿大学から劉建達副学長、創価大学から鈴木美華学長、安武妙子国際部長が挨拶した後、基調講演、分科会へと移った。

以下、「会議日程」に基づき基調講演のテーマ、分科会での発表論文のテーマを紹介する（以下敬称略）。

基調講演

程永華「人文交流『金の橋』を強化し、中日関係の継続的改善と発展を推進する」(中日友好協会)

楊伯江「平和主義の共通点に立脚し、人類運命共同体の構築を共に目指す」(中国社会科学院)

陳多友「池田大作思想と中日人文交流

——人文精神に導かれた文明対話と平和の実践」(広東外語外貿大学)

高橋強「池田大作の『人間主義』と『人間革命』

——教育主義を出発点として」(創価大学)

胡令遠「『理念』の視座から見る戦後の中日関係

——戦後日本思想史における池田大作の位置づけ」(復旦大学)

呉光輝「デジタル化時代における池田大作平和思想の展開と位置づけ」(厦門大学)

張曉剛「池田大作平和思想の学術的価値と現代的意義——平和学を中心として」(長春師範大学)

分科会1（日本語発表）

胡嘉明「池田大作の詩歌における平和叙事に関する一考察」(貴州大学)

陳毅立「池田大作の『幸福論』の内在的論理とその現代的価値」(同濟大学)

庄婕淳「池田大作の平和思想が中日人文交流に与える示唆

——中日共同世論調査を手がかりとして」(惠州学院)

小林正弘「日中の民間レベルの相互不信を改善する方途を探る

——池田大作平和思想の視点から」(清華大学)

潘永萍「池田大作の生命尊厳の思想から見た老年観

——『第三の人生を語る——高齢社会を考える』を中心に」(広州華立学院)

趙冬黎「『桜に込めた思い』と中日友好の実践」(広東外語外貿大学)

松永源二郎「ティーチングからコーチングへ

——外国語教育における新しい展望」(香港中文大学深圳校)

分科会2

李剛「義をもって心を通わせる——人類運命共同体の視座からみた

文化的道義の探究」(広州南方学院)

官建生「池田大作思想の視座から見る文化差異の克服と中日人文交流の可能性」

(広州華夏職業学院)

孟芮竹・楊鑫穎「池田大作の西洋近代性批判とその現代的価値」(南開大学)

李俄憲・呉江舒悦「池田大作の児童文学創作思想

——その中核的内容、叙事的特色および価値的次元」(華中師範大学)

劉軍「『分断』から共生へ——東洋文明の視野に立ったグローバル協力」(湖北大学)

夏広興「来日僧と宋代における中日仏教文化交流」(上海師範大学)

陳秀武「池田大作の平和思想が中日人文交流に与える示唆」(東北師範大学)

馬利中・江虹「人文学術交流を架け橋として中日関係の民意基盤を強化する
——上海大学と大阪市立大学の交流 20 年の回顧」(上海大学)

分科会 3

蔣菊「人類運命共同体の視野における池田大作教育思想の理論と実践に関する研究」(肇慶学院)

姚新「『池田鲁迅』と広東人物との歴史的関連」(広州体育学院)

陳斯怡「池田大作思想が大学の思想政治教育に与える示唆と応用」(広東金融学院)

蔡冬「中国アニメ新潮流と Z 世代の文化的自信の共生メカニズム

——池田大作の文明対話理論に基づく構成的分析」(大連大学)

楊悦怡「創価学会の中核理念に関する哲学的考察——『師弟不二』を中心に」(貴州大学)

蔡瑞燕「池田大作の中日人文交流の経験とその示唆」(仲愷農業工程学院)

曾建平「池田大作の文明観における六大視座」(浙江工商大学)

分科会 4

韋立新「池田大作の女性観および平和思想に関する一考察

——『新たな地球社会の創造へ』を事例として」(広東外語外貿大学)

劉清源「池田大作の平和観における『法華経』の智慧」(広州新華学院)

王子先「『和漢朗詠集』と和漢文学の融通的照応に関する考察」(広東白雲学院)

湯煥坤「短編ドラマが促進する中日異文化交流の革新的方途に関する研究」(広州南方学院)

陳芬「池田大作と孔子の教育思想における現代的融合」(貴州黔南科技学院)

方志娟「『Labubu』ブームにみる中日青年の自己形成に関する研究」(広東外語外貿大学)

高岳倫「記憶・自己認識・青年外交」(仲愷農業工程学院)

分科会 5

孫妍「牧口常三郎の平和思想と実践に関する研究」(長春師範大学)

頼国文「平安朝漢文学から見る『紅梅』の日本伝来」(肇慶学院)

蔡暢「池田大作思想の影響下における日本公明党の対中交流に関する研究」(上海政法学院)

王進偉「池田大作平和思想の現代的価値

——生命尊厳観・文明対話メカニズム・民間外交の道筋に基づく三次元的考察」

(貴州大学)

龍維「池田大作の文明観と人類文明の新たな形態の構築」(広州南方学院)

夏晶晶「『新人の覚醒』と『人間革命』

——大江健三郎と池田大作の教育の本質をめぐる考察」(華中師範大学)

衡中青「中国における池田大作研究の現状に関する量的分析」(佛山大学)

分科会6

王鵬飛「『人間革命』から『文化共生』へ

——池田大作平和理念の中日交流に対する応用と示唆」(天津師範大学)

馬涛「池田大作写真芸術の美学的含意」(貴州黔南科技学院)

劉愛君「民間人士による中日人文交流促進の事例研究」(大連工業大学)

グラーム・ムルタザー・カーン「Advancing Sino-Japanese Cultural Dialogue Through Daisaku Ikeda's Peace Philosophy: A Youth-Led Framework for Value-Creation」(仲愷農業工程学院)

劉斌「平和主義思潮の視点から見た池田大作の平和観」(仲愷農業工程学院)

楊鵬「池田大作教育思想が現代の教育従事者に与える実践的示唆」(肇慶市高要区第一中学)

劉建榮「中国式現代化における人類運命共同体の意義」(湖南師範大学)

(3) 院生、学部生、学生団体等のフォーラム

①大連工業大学が「第13回中日青年池田思想読書会」を開催

2025年5月24日25日、大連工業大学外国語学院による上記読書会が開催された。これには北京留学中の創価大生・アメリカ創価大生計12名が参加し、同大学日本語学科の学生約25名と共に、池田氏の著作『青春対話』を題材に、「語学」や「働くこと」をテーマに活発に意見が交わされた。同研究所の劉愛君所長があいさつし学生らを激励した。

②河北外国語学院と創価大学が共催し「創価杯 作文コンクール表彰式」を開催

2025年5月28日、河北外国語学院と創価大学が共催した「創価杯 作文コンクール」の表彰式が同学院で行われた。「言葉で未来を築こう——周恩来総理と池田大作先生の精神を受け継ぎ、時代を担う優れた若者を目指そう」とのテーマのもと、周総理と池田氏の一期一会の会見の意義を理解することを目的に開催された。コンクールは大学生部門、高校生部門に分けて実施され、大学生および附属高校の生徒計409名が作文を応募し、厳正な選考を経て、22名の学生・生徒が入賞した。表彰式には同学院から同学院池田研究センター主任である日本語翻訳学院の趙騰執行院長、施立潔業務院長、国際交流合作処王雲麗副処長、日本語学院教研室劉曉菲主任、朱雪雪氏、学年主任の劉一鳴氏などが出席するとともに、創価大学北京事務所、北京留学中の創価大学学生、卒業生等が参加した。主催者である趙騰執行院長より「コンテスト実施にあたり、孫建忠学長が池田思想の偉大さと温かさに感動し全面的に支援してくれています。池田先生の精神を一人でも多くの学生に伝えるべく引き続き努力したいと思います」と抱負が述べられた。

表彰式の後、両校の関係者が教育理念や人材育成について、活発な交流と意見交換を行った。なお、同学院から 2023 年に池田氏に終身名誉教授称号が授与されている。

③仲愷農業工程学院が「池田大作初訪中 51 周年記念研究会」を開催

2025 年 6 月 3 日、仲愷農業工程学院の学生団体である「廖承志・池田大作研究会」が池田氏の初訪中 51 周年を記念する研究会を開催した。同学院外国語学院柴明勤党書記は「中日友好協会会長を務めた廖承志先生と池田先生を継承し、両国の若い世代の相互理解と信頼の促進を」と強調した。同学院マルクス主義学院蔡立彬院長、廖仲愷何香凝記念館劉斌副館長、同学院廖承志・池田大作研究センター蔡瑞燕副主任らが、池田氏の初訪中の歴史的意義、両国の青年交流などについて語り、同センター高岳倫主任があいさつし学生らを激励した。

④南開大学「周恩来・池田大作研究会」が読書交流会を開催

2025 年 6 月 15 日、南開大学の学生団体である「周恩来・池田大作研究会」の読書交流会が「池田大作思想における人文的関心」とのテーマのもと開催された。山西大学マルクス主義学院の王育鋒講師が自身の学術成果を共有した後、学生による討論が行われた。

今回の読書会は、対面とオンラインを組み合わせた形式として行われ、「池田大作思想の人文精神とその時代的価値」を探究するものとなり、学問的深さと実践的関心を兼ね備えた思想的対話が展開された。

講評と指導を行った南開大学マルクス主義学院の紀亜光教授は、池田氏の人間主義思想に見られる生命尊厳の哲学的基盤、対話主義の実践、人類共同体への倫理的関心はいずれも注目に値するとして、その思想に学ぶことで、学際的視野とグローバルな思考が培われ、専門知識をより広い視野で深化させることができると評価した。また、学生たちの池田人間主義思想への理解について、生命・人間性といった核心的テーマを捉え、その内包を深く論じ、人生の充実や生活問題への対処といった哲学的意義を明らかにした点を高く評価した。加えて、池田氏の「人間革命」の精神は、個体の内面に向けた変革を重視し、対話と理解を通して自我の向上と調和的共生という理念に合致することを強調した。

⑤仲愷農業工程学院が「周恩来・池田大作会見 51 周年記念座談会」を開催

2025 年 12 月 5 日、仲愷農業工程学院の学生団体「廖承志・池田大作研究会」が、「精神を継承し、担うことを恐れず、平和を守る」をテーマに周恩来総理と池田大作氏の会見 51 周年を記念する座談会を開催した。学内関係者および専門家、教職員・学生代表が参加し、周総理が池田氏に寄せた友好と世界平和への評価と継承を改めて確認するとともに、青年の歴史的責任について意見交換が行われた。同学院「廖承志・池田大作研究センター」主任である高岳倫元党書記が、1974 年に周総理が病を押して池田氏と会見した史実を回顧し、軍国主義に反対し平和を堅持してきた精神の今日的意義が指摘された。また、高元書記は、中日関係の発展過程と四つの政治文書の重

要性を踏まえ、青年が歴史を銘記しつつ理性的かつ主体的に民間交流を推進する必要性を強調し、「関係が緊張する今こそ、お二人の精神に立ち返り、平和を守る決意を共有したい」との励ましを寄せた。

2. 池田思想研究に関する掲載論文等

2-1. 論文集発刊

(1) 南開大学が「第9回池田大作思想国際学術シンポジウム論文集」を発刊

2025年12月、南開大学出版社より『文化交流と文明融合——第9回池田大作思想国際学術シンポジウム論文集』が発刊された。2016年10月22日より天津市の南開大学で開催された同シンポジウムの発表論文を掲載したもので、池田大作氏が寄せたメッセージ、中国人民対外友好協会李小林会長の祝電に加え、分野別に平和主義15本、文化主義14本、教育主義15本、人間主義14本、計58本の論文が掲載されている。

2-2. 掲載論文

(1) 『紹興魯迅研究』2024年（2024年12月31日）

卓光平『『ペンの戦士』池田大作に見る魯迅と巴金』（紹興文理学院）

(2) 『大連大学学报』2025年第1期（2025年3月6日）

王明兵『池田大作生態哲学の理論の源、核心要義と実践の方向』（東北師範大学）

王育峰『人類文明的視野における池田大作の対話思想と現代価値』（山西大学）

張曉剛、呂宇航『池田大作の生命畏敬理念を探る』（長春師範大学）

周雯『池田大作世界市民教育理念を探る』（湖南師範大学）

3. 講演・講座等

3-1. 講演

(1) 叢曉波「人文学の観点から見た日本研究の可能性」（創価大学）

2025年6月13日、天津外国語大学日本語学院の連続講演シリーズ「天外導師講壇」でオンライン講演を行った。講演では、「幸福」というテーマを手がかりに、日本研究の現状と今後の発展について、池田思想を例に挙げ、その特色と「池田の幸福思想」を多角的に理解することの重要性を述べた。

3-2. 講座

(1) 「中国池田研究事情」（創価大学）

創価大学で2023年度より開講した中国池田研究事情をテーマとした「総合科目特講」が、2025年度秋学期に開催された。中国の各研究機関による池田思想研究の成果の発表の場として、

創価大学の学部生を対象に、複数の講師陣によるオムニバス形式の授業として、池田思想研究者が現地からオンライン（一部対面の場合あり）でまたりアルタイムで講義を実施した。

担当した研究者は以下の14名（敬称略）

2025年9月18日 叢曉波「中国の池田研究について」（創価大学）

2025年9月25日 曾建平「池田大作環境思想」（浙江工商大学）

2025年10月2日 陳多友「池田大作思想と中日人文交流

——人文精神に導かれた文明対話と平和の実践」

（広東外語外貿大学）

2025年10月9日 孫妍「池田大作の中国観が中日大学生に与える啓示」（長春師範大学）

2025年10月16日 崔学森「池田教育思想の中核とその生命哲学の淵源」（大連外国語大学）

2025年10月23日 韋立新「東洋の智慧の魅力——中国学術界に広がる池田研究」

（広東外語外貿大学）

2025年10月30日 冉毅「池田思想の人間主義及び人間教育の実践」（湖南師範大学）

2025年11月6日 高橋強「池田大作の『人間主義』と『人間革命』

——教育主義を出発点として」（創価大学）

2025年11月13日 賈凱「SGIの日記念の平和提言から見る池田大作先生の平和共生思想」

（北京大学）

2025年11月20日 劉愛君「池田大作の中国観とその影響

——1974年の初訪中を中心に」（大連工業大学）

2025年11月27日 紀亜光「周池会見の歴史的価値」（南開大学）

2025年12月4日 陶金「『平和』・『対話』と二十一世紀の『女性』

——池田大作先生の女性観とその現代的意義」（大連海事大学）

2025年12月11日 譚桂林「私の池田大作思想研究」（湖南大学）

2025年12月18日 松永源二郎「私の池田研究」（香港中文大学 深圳校）

（2）「世界文明概論」（湖南師範大学）

湖南師範大学で2024年度から開講した外国語学院1年生向けの「世界文明概論」が2025年度も継続して開講され、同学院の冉毅教授（池田大作研究所副所長）が、計4クラスの受講者約320名に対して「池田大作の文明観」の授業を行った（11月11日、12月2日、12月4日、12月11日）。

4. その他

(1) 2025年度の中日友好研究助成の審査結果が発表され、以下の採択があった。

日本への研究派遣

黄順力「人類文明的視野における池田大作『平和融合と文化復興』思想研究」(厦門大学)

劉澤軍「池田大作インタビュー集の日中翻訳および伝播効果研究」(天津外国語大学)

李辛「『金の橋』の道に沿って永遠に歩む」(渤海大学)

研究プロジェクト

衡中青「中国における『池田大作研究』文献索引データベースの構築」(佛山大学)

学会会議支援

陳多友「池田大作思想と日中人文交流」(広東外国語貿易大学)

創価大学・東京富士美術館所蔵 ゲーテ自筆・自署書簡について（2）

田 中 亮 平

3. アウグスト宛書簡（つづき）

前号に続き子息アウグスト宛の8通の書簡のうち、残りの2通の全文翻訳をおこない、解説を付す。

⑦ 1822年8月13日、エーガー発

「エーガー市、1822年8月13日

昨日、お前のイエーナとヴァイマルからの手紙と一緒に届いたが、格別に嬉しい思いだった。というのも、今日はヴンジーデルから2時間のところにあるバイエルンのレトヴィッツに招待されて出かけるからだ。その地には注目に値する非常に重要な化学工場があるのだ。私は18日に戻り、今月末にお前たちのもとに帰れるよう、ただちに出発の準備にとりかかる。これを受け取ったら、もうお前の方で手紙を書いたり送ったりするには及ばない。

同封したものをバウマンが喜んでくれるといいが、お前がその他にイエーナで喜ばれるとして挙げたものを、とりいそぎ指示しておこう。

万事よろしく、ごきげんよう。

草々

G ー」

全文ゲーテの自筆書簡。データベースでは手稿は所在不明となっていて、やはりヘンケル・ドナースマルク家寄託文書の情報が追記されている。1907年のヴァイマル版が初出で、1974年のシュタールガルトのカatalogでの部分紹介に先だち、1949年ベルリンのオークション会社ゲルト・ローゼンのカatalogにも一部分が印刷されているとある。ローゼン社のカatalogはハイデルベルク大学図書館のサイトでも確認できる。

手紙が書かれたエーガーは現在はチェコ領のヘプで、カールスバート（カルロヴィ・ヴァリ）やマリーエンバート（マリアーンスケ・ラーズニェ）などの湯治場への入り口にあたり、ゲーテも幾度か滞在した。特に1820年に知己となったヨーゼフ・ゼバスティアン・グリュナー（1780-1864）はエーガーの法律家で警察官吏であり、かねてよりゲーテの崇拝者でもあった。ゲー

テは1823年まで毎年湯治の際にグリュナーを訪問し宿泊もしている。グリュナーは1825年にヴァイマルにゲーテを訪ねているが、その後も2人の文通はゲーテの死の年まで規則的に続いた。この手紙が書かれた1822年にはゲーテは7月下旬から8月下旬のおよそひと月エーガーに滞在しており、その間にグリュナーと連れ立って近郊の地域に遠出をしている。

レトヴィッツ（今日のマルクトレトヴィッツ）への小旅行もその1つで、クネーベル宛の同月22日付けの書簡にはより詳しい報告がある。それによれば、この町はこの時期バイエルン王家の領地になって間もないころで、工場経営の機運が高く、ゲーテを招待した工場主は大規模に昇華物や酒石酸を製造していた。またその子息が経営するガラス工場の規模の大きさはゲーテを驚嘆させている。

⑧ 1823年8月24日、エーガー発

「エーガー、1823年8月24日

今晚来るはずの善良なるマイヤー顧問官に託して、ボヘミア滞在での最後の手紙を送る。この素晴らしい友にとって、かくも短い湯治滞在では大した効果が期待できないのは仕方がない。しかし彼が書いているところでは、カールスバートが多くのことを進捗させる助けになってくれて、新たな希望がよみがえってきたとのことだ。私もお前たちが私をここへ追い立ててくれたことに重々感謝しなければならない。この8週間の自由で陽気で社交的な生活がいかに私を回復させたか、とても言葉では表わせないほどだ。ある種の感じやすさだけが残っているが、初めてそれを意識したのは音楽を聴いていたときだ。ミルター（歌手）とシマノフスカ（ピアニスト）の2人でなければ、私をこのような気持ちにさせることは決してなかったはずだ。しかし、これが意識にのぼった以上、その影響は避けられまい。あしたカールスバートに行って、私の中のこれらの印象も更新するつもりだ。その後はハルテンベルクにアウアースペルク伯爵を訪ね、それからエーガーに戻る。前に伝えたように9月13日の土曜にはイエーナに帰りつけるように馬車をよこしてくれ。しかしもし何日か戻るのが遅れても心配には及ばない。ひょっとすればヴンジーデルに寄ったり、レトヴィッツやコンラーツロイトを訪ねるかもしれないので、そうなれば帰りが遅れることになる。

グリュナー顧問官は彼の鉱物学と地質学の研究を信じがたいほどの働きで進捗させている。彼はこの2年岩石学を打ち込んで研究したので、もうすぐすべての芸術家仲間から尊敬される存在になるだろう。それに彼は同時に交易業も始めたので、陳列室は目立って豊かになったし、送付物はフランツェンブルン鉱泉水の甕運搬のついでに輸送できるので、わずかな費用で済んでいる。

そのほかじつに様々なことを日記で読めるだろうが、会って話すべきこともたくさんある。

レーバインにはその充実した内容の著作に感謝している、もうじき彼と再会して語り合うのが楽しみだ。

当初はお前に小さな白鳥の形の鉱物を送ろうと思ったが、それはほかの荷と一緒に着くこ

とになりそうだ。しかしひとまとまりの紅柱石を手紙といっしょにお前に送らずにはいられない、おそらくアンダルシア人でも自慢できないほどのものだ。もっと素晴らしい鉱石類も持ち帰ることができるだろう。

レーバインの花嫁のマイアー嬢も来ている。とてもきれいで心根もよく、皆に尊敬される女性だ。グリーンナー顧問官も彼女には太鼓判を押しているし、この縁組を喜んでいる。この6週間というものの毎日この人を目にして確信したのは、彼女が非の打ちどころのないふるまいを心得ている人だということだ。

ところでここでイェーナでの我々の食事会のことについても触れておこう。その件で私に代わってお前からフォン・リエンカー夫妻に挨拶してもらえると都合がいいのだが。思うに昼食会は彼らのところではするほうが、先方にとってむしろ望ましいだろうし、極めて自然でもある。わたしも目下の心境ではそれで満足だ、帰り着いてすぐにまた世捨て人暮らしに陥ることは避けたいので。

マイアーが来た、では終わりにしよう、ごきげんよう。

エーガー 1823年8月24日

G 』

データベースによれば書記ヨーンが筆記したものにゲーテ自筆の訂正が加えられている、頭文字の署名もゲーテの自筆だが、発地と日付は書記による。原本の所在は不明となっている。この手紙とともに1823年8月6日から19日までの日記（ヨーン筆）が同送された。この手紙の一部は1900年の『ゲーテ協会年鑑』第15巻に掲載されたが、全編の掲載は1906年のヴァイマル版ゲーテ全集書簡編の第37巻が初出である。

ゲーテはこの手紙の前にボヘミア（現在のチェコ）の温泉地マリーエンバート（マリアーンスケ・ラズニェ）に滞在していた。有名なゲーテ最後の恋の舞台となったところである。相手はこの時19歳のウルリーケ・フォン・レーヴェツォーという貴族の娘で、母親を含め家族ぐるみで大詩人ゲーテとの交際を喜んでいて。ゲーテは1821年からこの年まで、毎年夏になると一家と再会していたが、次第にウルリーケへの恋情が募っていった。主君のアウグスト大公も湯治に来ていて、ゲーテは大公を通じてレーヴェツォー夫人に娘との結婚の意志を伝えてもらった。彼は7年前に妻に先立たれていたが、息子アウグストと嫁はゲーテの再婚には反対だった。このことを推察してか、ウルリーケが74歳の大詩人の申し出を受けることはなかった。

この手紙の時点ではレーヴェツォー家はすでに別の保養地のカールスバートに移っていた。手紙にある通りゲーテもこの翌日の8月25日にその地へ向かい、28日の自身の誕生日を祝ってもらうなど、ウルリーケとの日々を楽しく過ごした。しかし、9月5日には別れを告げてカールスバートをあとにする。この手紙はしたがって、激しい情熱の渦中にある中で書かれたものであり、ゲーテの心情も含めた当時の事情を伝える極めて重要な資料である。

この時のウルリーケ体験からゲーテ晩年の抒情詩中の傑作とされる『情熱の三部曲』が生まれた。「ヴェルテルに」「悲歌」「なごみ」という独立した3つの詩をまとめたものだが、成立順は逆で、

最後に置かれた「なごみ」の詩が一番早い。中核をなす「悲歌」はウルリーケと別れた直後の旅路で作られ、9月17日のヴァイマル帰着時にはすでに完成していた。その第一連ではカールスバートに到着する直前、即ちこの手紙の翌日の心情が歌われている。「再び訪れた出会い　だがこれは何を意味するのか / 今日まだ花開かぬこのつばみに何を期待すべきか / 眼の前に開かれるのは天国なのか　それとも奈落か / 胸は狂おしくうずき　心は千々に乱れる…」(内藤道雄訳)。

文中には2人の音楽家によって心を揺さぶられた経験のことも語られている。声楽家のアンナ・パウリーネ・ミルダー（1784-1838）とピアニストのマリア・シマノフスカ（1789-1831）である。ミルダーはこの手紙ではミルターと表記されている。ミルダーはベルリンで人気を博したオペラ歌手で、マリーエンバートでこの月の13日と17日にゲーテを訪問している。15日に少人数の集まりの席で彼女は4曲を歌ったが、それを聞いたゲーテは深い感動に襲われ落涙を禁じえなかった。

一方シマノフスカ夫人は、当時人気を博したピアニストであり作曲家でもあったが、やはりこの月の14日、16日および18日にマリーエンバートで、また9月4日にはカールスバートでゲーテに会っている。ゲーテは心の落ち着きを欠いていた状況のなかで、彼女の音楽から深い感動と慰めを見出した。8月のマリーエンバート滞在時にゲーテは彼女に宛てた詩を書いているが、これがのちに上記の「なごみ」と題された詩になった。

2人の女性音楽家との交流はその後も続いた。ゲーテの作品にグルックが作曲したオペラ『タウリスのイフィゲーニエ』の役をミルダーがベルリンの舞台で歌ったことがあった。その際に、ゲーテは原作の本に4行の詩を書き入れて彼女に贈った。一方シマノフスカはこの手紙と同じ年の10月末から11月初めにかけて2週間ヴァイマルに滞在し、その間毎日ゲーテを訪ねて食事を共にし、演奏を聞かせた。

レーバインはヴァイマルの宮廷医で、1818年以来ゲーテのホームドクターでもあったヴィルヘルム・レーバイン（1776-1825）のことで、ヴァイマル大公の侍医も務めていた。ゲーテは彼に尊敬と信頼と友情を抱いており、2度にわたってカールスバート行を共にしたこともあった。ゲーテの病気の治療にもあたったが、その妻クリスティアーネの臨終を看取ったのもレーバインであった。彼はこの手紙の2年後に亡くなったが、ゲーテはその死を深く悲しんだ。

最後にフォン・リュンカーはカール・ヴィルヘルム・フリードリヒ・フォン・リュンカー男爵（1767-1843）のことで、この人はすでに少年時代にヴァイマル宮廷の小姓を務め、のちに法律家、将校を経てイェーナの郡長を務めた。晩年に『アマーリエとカール・アウグスト時代のヴァイマル宮廷にて』という回顧録を残しているが、若くして宮廷に新風を吹き込んだゲーテとそれを快しとしない守旧派貴族間の対立の時代などの記述も含まれている。自らの見聞をもとに、全体に中立的で冷静な描写でつづられているとされる。

4. ヨーゼフ・シュタニスラウス・ツァウパー宛書簡

1822年12月27日、ヴァイマル発

「尊貴なる閣下

大公殿下の随員を勤めている侍従長ボイルヴィッツが、私に代わってご覧の書簡を閣下にお渡しし、あわせて私からのねんごろなご挨拶をお伝えすることでしょう。もとより閣下は私の依頼がなくとも、この有為な男がそちらの地で願うことすべてにお力添えをいただけることでありましょう。学事長様にもくれぐれもよろしくお伝えください。この友が戻りましたら、同様に閣下のご健勝ぶりをわたしに伝えてくれるものと思います。

ブラハからの詳細で愛すべきお手紙は遅滞なく無事に届きました、心から御礼申し上げます。

敬具

ヴァイマル、1822年12月27日

J. W. v. ゲーテ」

データベースによれば書記ヨーンが本文と発地・日付を書き、ゲーテが署名したとある。ヨーンによる下書きはゲーテ＝シラー文書館に保管されているが、原本そのものの所在は不明とされている。初出は1907年のヴァイマル版であるが、それは写しによったものとある。2つ折りの4頁からなっているが、記載があるのは最初の頁のみで、そこにはカール・アウグスト大公の肖像のすかしが入っており、公的な書状であることがわかる。

名宛人のヨーゼフ・スタニスラウス・ツァウパー（1784-1850）は文献学者であり、ボヘミア（現在のチェコ）のビルゼン（プルゼニ）のギムナジウムの教師で、詩学・修辞学を担当した。彼は前年の3月にゲーテの詩に基づいた詩学の書物を送り、ゲーテの賛同を得た。引き続きこの年と翌年にもゲーテに関する著作を送っている。2人はこの手紙の前年から3年連続して夏にマリーエンバートで会っている。

フリードリヒ・アウグスト・フォン・ボイルヴィッツ（1785-1871）は、ヴァイマル大公国の高位の軍人、枢密顧問官、侍従長などを歴任し、大公の厚い信頼を得ていた。ゲーテとは1809年以降、公私にわたる親交を結び、3年続けてマリーエンバートでも滞在を共にしている。1828年、大公カール・アウグストが旅先で死去したが、それを当時ドルンブルク城に滞在していたゲーテに手紙で知らせたのがボイルヴィッツであった。これに対してゲーテが彼宛てに書いた長文の返信は、文化的な側面から亡き大公の業績を論じており、城にちなんで「ドルンブルク書簡」と呼ばれている。

5. 東京富士美術館所蔵の書簡

東京富士美術館は東京都八王子市の創価大学キャンパスに隣接する形で、1983年に開館した。その館蔵品の中には自筆書簡類も所蔵されており、創価大学での展示をきっかけに改めて確認したところ、ゲーテ関連の文書も2通所蔵されていることが伝えられた。そのうちの1通はゲーテの署名はあるが、管轄部署の年次会計に関する公務文書なので、ここでは詳述せず、もう1通に

ついて翻訳と解説を付すにとどめる。

1803年7月26日、ヴァイマル発

「あいにくその戯曲は目下私の手元にはありません、戻ってきたら喜んでお役に立てましょう。私へのあなたの旺盛なご関心は私を大変喜ばせましたので、お互いを一層よく知りあって、それが減じることがないように切に願っております。

ご健勝を心からお祈りしつつ、真実なる尊敬をこめて署名いたします。

敬具

ヴァイマル、1803年7月26日

あなたの忠実なるしもべ

ゲーテ」

データベースによれば本文、署名、日付、発地ともすべてゲーテの直筆である。原本は所在不明とある。ヴァイマル版の注釈を見ると、エルンスト・エルスターの論文（1885）によれば、手紙の左側に破り取られた跡があり、現存のものは手紙の後半部分ではないかとされている。エルスターの論文の末尾に手紙本文が掲載されており、これが初出である。

名宛人のヤーコプ・アンドレアス・コンラート・レーヴェツォー（1770-1835）は、この当時ベルリンのギムナジウムで教師をしていた。考古学的な著作が多いが文学的なものも書いている。この年の5月にゲーテは『ネボティアン』と題する作品をシラーに送り、評価を頼んでいるが、書簡の中で言及されている「戯曲」はこれを指すとされている。

『新教材集録』『新教』掲載の牧口常三郎の 文章について（補遺その1）

岩 木 勇 作

▼解題

本資料紹介では、『新教材集録』、『新教』に収録された牧口常三郎の文章を紹介する。第三文明社版『牧口常三郎全集』（1981～1996年）に未収録および本研究所紀要の資料紹介において未掲載の文章である。

戸田城外が1930年代に編集兼発行者として城文堂（後の日本小学館）から刊行した教育雑誌は、『新進教材 環境』を皮切りに『進展環境 新教材集録』、『新教材集録』、『新教』、『教育改造』と順に改題を重ねている。今回掲載するのは、『新教材集録』第4巻第5号、同第5巻第6号、『新教』第5巻第7号、同第5巻第10号、同第5巻第11号、同第5巻第12号、同第6巻第2号、同第6巻第3号、に掲載された牧口常三郎の文章である。掲載時期としては、1934年6月～1936年3月となる。以下、そのリストを示す。

- ①「教育問題質疑解答欄」（『新教材集録』第4巻第5号）
- ②「〈巻頭言〉教育国策の審議」（『新教材集録』第5巻第6号）
- ③「教育者の信の確立を論ず（下）」（『新教材集録』第5巻第6号）
- ④「〈巻頭言〉内閣審議会と文政審議会」（『新教』第5巻第7号）
- ⑤「〈巻頭言〉再び内閣審議会と文政審議会に就て」（『新教』第5巻第10号）
- ⑥「御盛徳拝聴所感」（『新教』第5巻第10号）
- ⑦「〈巻頭言〉教育改造と宗教革命」（『新教』第5巻第11号）※本文省略
- ⑧「教育時評」（『新教』第5巻第11号）
- ⑨「〈巻頭言〉教学刷新評議会の出現について」（『新教』第5巻第12号）
- ⑩「赤化教師の完全転向は如何にして可能なるか—全国数万の赤化青年転向指導のために—」（『新教』第5巻第12号）※本文省略
- ⑪「教育時評」（『新教』第5巻第12号）
- ⑫「〈巻頭言〉国体明徴と宗教革命」（『新教』第6巻第2号）
- ⑬「教育者煩悶相談 教育者の転任の問題」（『新教』第6巻第3号）

以上のリストのうち⑦と⑩の本文は収録および掲載済であるが、一部に異同が認められること、また情報更新の必要性から、本文を省略して解説のみ作成している。

▼資料の表記および凡例

各資料の冒頭には書誌情報を主とした簡単な解説を付してある。

資料の表記について、凡例は以下の通りである。

一、資料を復元するにあたって、特に断らない限りは、創価大学池田大作記念創価教育研究所所蔵資料を原典とした。

一、漢字は新字体に統一した。仮名遣いは、基本的に原文のママ。ただし、変体仮名、仮名合字は現代仮名遣いに改めた箇所がある。踊り字のくの字点は「／＼」で表記した。

一、誤字・誤植等が見られた場合は、これに代わる正しい文字および補足を〔 〕内に示した。

①「教育問題質疑解答欄」（『新教材集録』第4巻第5号）

<解説>

『新教材集録』第4巻第5号、日本小学館、1934年6月15日、31頁掲載。教育問題についての質問（入澤一夫）と解答（牧口常三郎）のやりとりである。質問者の文章はポイントを下げて表示している。

質問者の肩書きに「本誌評議員」とある。『新教材集録』第4巻第4号（4月号、日本小学館、1934年4月15日発行）の巻頭付録「謹告」を見ると、『新教材集録』の評議員は、事前に牧口常三郎や戸田城外をはじめ創価教育学会の会員や創価教育研究所の所員、『新教材集録』編集部などから推薦のあった人物に対して、購読願いおよび本誌評議員としてご推薦を戴きましたという旨を記した葉書を送り、返送の承諾を経て評議員となった者である。評議員の特典は、「1. 本誌に自己の研究物及論文の発表の自由を有す／2. 教育に関する一切の質疑及調査等を自由に依頼し得ること（右の解答は本誌上もしくは直接に責任ある解答をなす）／3. 評議員の希望に依り講習会及研究会に本会より講師をさしむく／4. 日本小学教育研究会（都下実際教育家を以て組織されし、唯一の純学究団体なり）の会友として推薦す／5. 日本小学〔教育〕研究会の研究物を発行の都度贈呈す／6. 評議員上京の節（転任、遊覧共に）は各方面に御便宜を図る／7. 地方在住にて東京より物品購入の場合は本社に御申込下されば調査、照会、購買等出来得る限りの便宜を図る」（前掲「謹告」）の7項目である。この2番目の特典によって評議員である入澤は質問を行っている。また、「謹告」の末尾に掲載された「購読申込書」と「評議員証」のテンプレートにはいずれも「尋常高等小学校」という所属先を書く項目があるため、推薦のあった人物は基本的に小学校教員であることが窺える。

評議員の特典の4、5番目に記載されている「日本小学教育研究会」とは、当時牧口らが純粋な学究団体として組織しようとしていた団体で、同第4巻第4号（5月号、日本小学館、1934年

5月15日発行)には、「日本小学教育研究会／宣言／帝国の非常時、世相日々に頹廢しその底る所を知らず、思想の悖戾滔々として挙げて抗すべからず、国家重大事この秋にすぎたるはなし。今国家社会の振肅革正の烽火の源泉となるべき教育界を一瞥せば慄然として国の前途を憂ひせしめん。／長野県下の赤化教員事件、東京市の教育疑獄、而も、その対策に奔命して未だ改革もならざるに、何事ぞ、文教の司たる文部大臣は汚行の疑を天下に暴露し、まさに教育界混沌、濁悪その帰趨する所を知らず。／人の子の親、八百万の児童を抱へて如何と為すか？ 今にしてその源泉の宿弊革めずんば百年河清を待つも空し、斯に全国憂国俊秀の教育研究家参集し、教育理論、实际教育技術について真挚なる研究、批判、検討をなし、是れを發表実行し聊か教育界の革正、進展に資せんとして、斯に日本小学教育研究会の結成を宣言す。(同17頁)という日本小学教育研究会の宣言書が掲載されている。この宣言書によって日本小学教育研究会は正式には1934年5月に結成されたことが分かる。前出の「謹告」には、「本誌評議員にして読者を五名以上御紹介下され、研究会を組織されし場合は本誌、地方支部として認め、日本小学研究を毎月発行の都度御贈呈申上げ、日本小学館発行の図書御指定に依り新に一部御贈呈申上ます。尚会員一同評議員と同じ特典を有す。」とある。評議員を中心に組織された研究会とは、つまり日本小学教育研究会の地方支部のことで、1934年5月には、石川県(2)、山口県(2)、長野県(2)、神奈川、新潟、秋田、山形、大分の11の地方支部が結成されている。(同第4巻第5号(6月号)、日本小学館、1934年6月15日発行の巻頭付録「謹告」参照)。

本作品は、郷土の伝説やお伽噺を教授上ではどのように取り扱うか、という質問に対して牧口が答えている。その趣旨は、郷土教育には2つの意義があり、1つめは、この質問の場合であれば教科書の材料を理解する基礎概念として引用する、読み方綴り方の応用の材料として利用する、修身道徳の材料として採択する、といった郷土教育である。2つめは郷土におけるあらゆる事柄を種々の観点から採集し記録することを奨励する郷土教育である。牧口の郷土科研究の立場は前者にあり、この郷土教育の意義の混同を戒めている。

<本文>

○郷土伝説を郷土科に於て如何に取扱ふべきか

【質 問】

質問者

新潟県刈羽郡刈羽村
本誌評議員三五〇番 入澤一夫

……(前略)御誌紹介に依り牧口常三郎氏著「教授の総合中心としての郷土科研究」を拝読仕り、其の卓絶なる見解、該博なる範囲、懇切なる指導、近來の快著と存じ候。就ては小生年來聊か郷土伝説及お伽噺、等を研究仕り候が之が教授上の取扱は如何に候や、幸に御高教賜はらんことを御願申上候。

【解 答】

解答者

「郷土科研究」著者 牧口常三郎

所謂郷土教育に主張には二つの異つた意義があることを知らねばならぬ。学校諸教科教授の起点としては、終点としての郷土科研究と、郷土に於ける天然人事のあらゆる事物を種々なる観点から、科学の研究対象として採集し、記録することの奨励をなす目的の郷土教育とがそれであるが何れなるか。後者の取扱としてならば恰もその土地に於ける動植物や生産物などを採集し、分類し、整理し、以て他の地方又は全国の同種類とも比較綜合して、之から何等かの概念（又は理法）を抽象すると同様の考を以て、昔から伝つたまゝを採集し忠実に聞き取つて記録し、各部門の専攻者の研究資料に供給しその代り自分に必要な研究資料を受ける等の方法により、それぞれの研究をなすことであり、もし又前者としてならば修身歴史地理等の教科書の材料を理解するの基礎概念とし引用するのがその一、読本綴方などで諸種な表現形式の文章を授けたとしたら、それ等の応用作品の材料として利用し記憶を呼び起して、その保存をなすことがその二、もしまた郷土の産業や文化の発達に貢献された如きものであるならば修身道德の教科材料として直接に採択することが其三であらう。

近来の流行の如くに鼓吹されてゐる郷土教育の実際がやゝもすればこの両者を混淆する傾向のあるのは、教育学の本質を理解しない郷土研究専門家の主張を鵜呑みにせんとするに基づくので、幼児を指導する小学教育者の警戒を要する所である。教師自身が特別の科学的趣味によつて道楽的に研究するのは固より結構で、奨励すべき事ではあるが、それは夫々の専門学者が独特の研究するのと同様、郷土教育に関する資料を探究、調査するので郷土教育とは縁の遠いものであることを注意しなければならぬ。

②「〈巻頭言〉教育国策の審議」（『新教材集録』第5巻第6号）

＜解説＞

『新教材集録』第5巻第6号、日本小学館、1935年6月15日発行、1頁掲載。巻頭言。本号は改題記念号。次号より「新教」と改名することが扉に記されている。

内閣審議会（国策審議会とも称される）とは、1935年5月10日公布・施行の勅令第118号内閣審議会官制によって設置された内閣の諮問機関である。内閣審議会官制の第1条には「内閣審議会ハ内閣ニ隸シ其ノ諮問ニ応ジテ重要政策ニ付調査審議ス／内閣審議会ハ重要政策ニ付内閣ニ建議スルコトヲ得」とある。会長1人（内閣総理大臣）、副会長1人（国务大臣）、委員15人以内で組織される（同第2条、第3条）。翌年5月6日に廃止された。

本作品は、先月に設置された内閣審議会ではその構成員からして、教育問題に対応してくれる見込みもなく、却って教育国策を審議する妨げになるかもしれないと批判している。そして、教育問題は現在の人気取りに没頭する政治家だけに任せられるものではないとして、『新教材集録』

第5巻第5号（日本小学館、1935年5月15日発行）に掲載された秋月左都夫の「教育本部の設置に関して（上）」に触れている。

牧口常三郎は『創価教育学体系』第3巻（創価教育学会、1932年）の中で、「教育参謀本部論」を提唱している。その趣旨は、100年の大計を立てるべき教育事業を人気取りにあくせくする政治家等が応急処置的に行うのではなく、教育の永続的な計画を立てる機関として教育参謀本部を設置するという提案である。『新教材集録』第5巻第5号は未確認のため秋月左都夫の「教育本部の設置に関して（上）」の内容は不明だが、同第5巻第6号（日本小学館、1935年6月15日発行）に掲載の秋月左都夫「教育本部の設置に関して（下）」の内容から牧口の教育参謀本部論の趣旨とほぼ一致するものと推察できる。

<本文>

教育国策の審議

弱体内閣の補強工作とまで云はれてゐても、ともかくも難産であつた内閣審議会が出来上り、之が補助機関としてのその調査局も、顔振が揃つたのは政局の不安を幾分たりとも除くことが出来やう。だがこの機関の主力は相変わらず国防、財政、農村の問題の解決に注がれ、教育の問題にその力が向けられることはその顔振れから見ても、いつのことやら見込みがつくまいと思はれる。ことによると国策審議会が出現したお蔭で、教育国策の審議の促進の妨害になるかも知れぬ。

一時喧かつた学制改革問題が、松田文相の代つたによつて、一時打ち切りの姿となつたが、この機関が出来たがために、又た後廻しになつたのでは、教育国策などはいつになつたら確立するかと思ふと真に心細くならざるを得まい。

所詮、教育問題の如きは、現在の人気取りにのみ没頭する政治家の関心さるべきものではなく、従つて分担の役人が心配しなくても、督励のしてがないものであるから、そのまゝに進むならば、愈々岸壁につきあたるまで覚醒が出来ぬものかも知れぬ。が、国家の将来を憂ふるもの、傍観し得べきことであらうか。

といつて、何人が責任を以て、之れが衝にあたるかといふに、今までのところで、その人がないが為に今日の行詰りを来たし〔た〕ことは屢々陳べた通りであるのに、なほ未だ政府の力にたよることができなかつたら、私立の篤志団体によつて、之が解決を促すより外に途がないであらう。

このときに当つて本誌の前号より掲載の秋月左都夫氏の「教育本部論」の如きを得たのは、実に空谷の跫音といふてよい。斯やうなる根本的考察家の先輩を創価教育学会が顧問として活躍せんとするのは、単り同会の意を強うするのみではない。

③「教育者の信の確立を論ず（下）」（『新教材集録』第5巻第6号）

<解説>

『新教材集録』第5巻第6号、日本小学館、1935年6月15日発行。3～4頁掲載。本号は改題

記念号。次号より「新教」と改名することが扉に記されている。本号の表紙裏には、前号および次号の目次が掲載されている。前号（第5巻第5号）に本作品の上編にあたる牧口常三郎「教育者の信の確立を論ず（上）」が掲載されているが、前号は未確認。

『創価教育学体系梗概』（創価教育学会）は1935年春頃に発行のパンフレットで、そのうち牧口常三郎の文章であることが明確なのは、「緒言＝教育合理化を論ず（著者の辞）」「結語＝法華経と創価教育（著者の辞）」である。この「結語」において「信の確立」を論じている。ただし、ここでは要点だけを述べて詳細は「創価教育学」にゆずると述べている。また、牧口常三郎『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』（創価教育学会、1937年）にも「信の確立」が一部ではあるが論じられている。「信の確立」に関する記述の順序としては「結語」、「教育者の信の確立を論ず」（上下）、『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』となる。

「結語」において牧口は「信の確立」の要点について述べているので簡単に紹介をしておく。その趣旨とは、「信仰」といえば宗教家の専売特許のように思われるが、「信用」「信任」「信念」と言えば、日常生活の基礎といえる。信用のない人間関係、信用のない取引関係、信任のない教師の教育は、無益で有害なものである。信仰は宗教特有の基礎と見做されるようであるが、一切の学術、生活の基礎であり、信用・信仰の基礎の確立しない生活は砂上の楼閣である。いかなる場合でも信は生活力の増大である。人生は信の上に立つといえる。よって結局の問題は、信じるか信じないかではなく、何を信ずべきかという問題になる。何を信じるかは、いかにして信じるかという取捨選択の標準を確立する必要がある、というものである。

本作品は、何を信ずべきかという問題に対して、冒頭でその対象の候補として、物、人、人の団体、神・仏、法・則、を挙げている。そして信の対象として適切なものは、物なのか、人なのか、人の団体か、を具体的な例や譬喩を挙げて論及している。以降は『創価教育学体系』の第5巻で詳細に触れると予告した。

<本文>

教育者の信の確立を論ず（下）

牧 口 常 三 郎

—

何を信仰して之にたよるか、物か、人か、人の団体か、神か仏か、法か則か、是等の信仰対象の選定には人間の心意発育程度によつて異同があるやうである。

何が信の対象となるに適するものか、今晚は店を出したが明晩は最早出るか否かの予定ができない縁日商人に信用が成立しやうがないとほり、変転常なき人に信用がないことは言ふまでもない。よし又住所が一定するやうになつたとしても、その性質にどんな変化の来るかといふ疑問の人に、安心して交際のできないことも亦言ふまでもない。

是に於て原始時代に於ては物と物との交換で、人よりも物の方が最初の信用対象らしい。日限り市場や縁日商人の人間の信用が成立つものでない。物と物、物と人の交換がすめばあとに用は

ない。人格より財産に目を付けて結婚したがるのが、世間一般の人情である。箆筒長持がお嫁さんよりは大切にされた時代もあり、無為徒食の放蕩息子が遺産の故に尊重された時代もあつた。今もなほ家庭の悲劇が多くそれから演ぜられてゐる。

新聞広告などの甘言によつて純朴なる地方の人々が、物品の注文をして詐欺にかゝつたり、悪辣なる無尽会社などに預金して元も子も失つたり、棚からぼた餅風の営利会社に投資し祖先伝来の田畠を取られたりするやうな新聞の三面種子が至る所に繰り返へされるのは悉く信用の対象を物におき、物を操つる人間のよし悪しを着眼するに至らない結果である。

所詮、如何なる暴利が眼前にぶら下つて居るとしても、共同事業の相手の人格が下劣であるならば、到底最後の日〔目〕的は達せられるものでないと思ふ。

真理の了解はさ様な成功失敗の幾多の経験を積んだ上でなければできないものでなくして他人の忠告ぐらゐでは適はぬものらしい。

だが、結局は信用の基礎は物によつて築かるべきものでないことは、やがて何人でも気が付く所である。

二

如何なる人を信ずるか、如何なる人を警戒すべきかの価値判断がなくして漫然と環境に対するから、或るときはすべてを信じて手を焼き、或るときはすべてを疑つて警戒して、帰一する所を知らぬといふのが一般普通の見所である。

いかなる人を信じ、いかなる人を信じまいか。と、その人を見分けることが第一のなすべきことである。信用すべき善人と、信用すべからざる悪人とが判然となり、一方をば信頼し、他方をば警戒するといふ態度の決定ができるならば、敵か身方かとの信疑未定若しくは半信半疑の危険状態を継続するよりは、自分も相手も相互の生活が遙かに安定することは、論を俟たぬところであらう。それがためには、ためして見ることが一番簡便な法として広く行はれることである。東京で古来桂庵といはれた職業紹介所から新に女中を得たとして、その子が正直であつて、家庭の留守居とさせてよいか、否かの信の確立を判定せんとする場合に、五十銭二十銭の貨幣を置き忘れた振りして捨てておいて、届け出させるが如きは手近なる一例である。ところが、心の歪曲の単純であるものに対しては有効ではあるが、試されるといふことを看破つて、その罠にはかゝらず、もつと大きな悪をしかねまいとするものにはもはや役に立たぬ。そこでより有効なる方法を講ぜねばならぬ。上野公園などに網を張つて、田舎上りの純朴な者を瞞着せんとする詐欺賭博等を企む者が、サクラと称する同穴の貉をオトリに使ひ、初めの二三回は勝利を与へて油断をさせ、好機を狙つて財布の底を払はせ、あまつさへ威嚇脅迫を以て訴へ出ることを拒ぎ、いち早く逃走するが如きは、単純なる心の歪みを複雑なるうは手の歪みを以て偽瞞するもので、珍しからぬものである。こんな悪辣なものにかゝると、数年間に亘る精密なる計画を立て巧妙なる手数を弄んで、人を誘惑して財産を横領することがある。斯様の深酷〔刻〕なる傷手を受けたものには、遂に敵と身方との見分けは、とても人間の力ではできないといふ結論に達し、いかなる人に対して、決して心は許せぬとして螺螄の如く団結せざるを得ないことゝなる。

是に於てか試験といふ一時的の方法では安心ができずとして、他の方法を要求するに至る。それに対して友は類を以て集まる。といふ人間の性質を説明した「人を知らうとせばその友を見よ」といふ語を原則となし、既に信用をなした、ある人の紹介によつて未知の新人にその信用の継続をなすといふより確實なる方法が採用されてゐる。だがこの手段とて漫然と過去に悪事がなかつたから、将来も恐らくはあるまいといふ蓋然論法の物〔論〕理的法別〔則〕を人間に適用したまでに過ぎずして、それが果してどれだけの確實性を有するかは、保証人と雖ども見通しのつくものでない。従来生活範囲以内に留まつた小悪小善に対しては、なるほど保証ができるかは知れぬが、経験範囲外なる大善、大悪に対していかほどの役立つか信用はできぬ。又その範囲内に善悪に対しても、性質境遇の変化から、必ずしも従前通りの行路を辿るとは見通しも保証もできないといふことも考へられねばならぬ。反対に嘗ては多少の悪事をはたらいたにしても、その事が果して未来永久如何なる場合に対しても悪をなすと断定してよいものか否か。それには悪事をなさねばならなかつた事情も考慮して見ねばならぬことではないか。それから又以前は相当の悪人であつたものでも、その後悔悟によつて再び罪を犯さぬやうに、性質や境遇の変化したために改まつたかも知れないではないか。だが、かやうな人間は千百人中に稀にある例で、「三ツ兎の魂百までも」の諺のある通りで、同一の原因から同一の結果が生ずるといふ自然現象に於ける因果応報をそのまゝ、人生にも適用して、不充分ながらも信を確立しなければ安心ができないといふ人情に基づいたものである。

斯様に色々の手段によつて、対人関係の法則性を見出し、『信の確立』を謀らうとするけれども、所詮、自然現象に於てのその如く、簡單明確なる法則は見付けることができず、期待した信用も色々の事情で裏切られるために至る所失敗が演ぜられ、往々悲酸なる運命に遭遇するものを見るのである。

斯くの如くして、「信の確立」にも又た「不信の確立」にも一定不変の法則性は、人間の性質だけには結局見出し得ないことにならざるを得ないことになり、然らば「何が人をして信用の確立に導くものか」といふ、より深く何物かに追及を進めなければならぬことゝなつて来る。

三

固より多くの人間の中には一諾千金、崩れざること泰山の如きものもあるによつて、その人の配下に属すれば自分の運命は充分に保証されると信ぜられるが故に、英雄豪傑の傘下には多数の有象無象が集まつて政党や政派ができ、営利会社ができるのである。源、平、藤、橘、北條、足利、織田、豊臣、徳川、薩長、土肥、政友会、民政会、はた又三井、三菱等の財閥等はみなそれである。

ところがその中心人物たる英雄豪傑も、いつまでも信頼の対象たり得るものではない。紅顔の美少年がいつしか白髪の老人にならねばならぬ如く、いつしか秋風落寞の時期が来ることを予想しなければならぬ。伊藤、大隈、加藤、原、後藤の諸氏が死んだため、前途の有望の幾多の人材が恰も木から落ちた猿の如くなつた例は吾々があまりにも生々しく見せ付けられて居る所である。要するに人もやはり物と同様、信の対象となり得るものでない。変転極まりなき人間を頼るよりはもつと常住不変なる他の何物かを信ずるより外には運命の不安を免れることはできぬもの

である。蓋し他人の信頼を受けるだけの人は必ずその背後に何等か常恒不変の信仰を有するものであり、それでこそ何人にも信頼に足る性質のものであるからである。然らばそれは何であるか。是に至ると勢ひ神仏の問題に至らざるを得まい。だが、それは頗る広汎に亘らざるを得ないので、他日の機会をまたねばならぬ。それに就てはなほ創価教育学の第五巻には、やゝ詳かに之に触れてゐるのである。

信用、信仰の確固たる根柢のない教育の破綻が、暴露されたのに狼狽し、俄か造りの宗教教育論が喧ましいやうであるが、そんな輕佻浮薄なお祭騒ぎで斯様な重大問題は解決されない。

④「〈巻頭言〉内閣審議会と文政審議会」(『新教』第5巻第7号)

<解説>

『新教』第5巻第7号、日本小学館、1935年7月15日発行。1頁に掲載。巻頭言。

内閣審議会(国策審議会とも称される)は、1935年5月10日公布・施行の勅令第118号内閣審議会官制によって設置された内閣の諮問機関である。文政審議会は、1924年4月15日公布・施行の勅令第85号文政審議会官制により定められた内閣総理大臣の諮問機関である。文政審議会官制の第1条には、「文政審議会ハ内閣総理大臣ノ監督ニ属シ其ノ諮詢ニ応シテ国民精神ノ作興、教育ノ方針其ノ他文政ニ関スル重要ノ事項ヲ調査審議ス」とある。総裁1人、副総裁2人、委員50人以内で組織され、内閣総理大臣、文部大臣、ほか内閣総理大臣が任命した委員で構成される(同第2条、第3条)。文政審議会は1935年12月に廃止された。

本作品は、文政審議会が形ばかりとは言え存在しているにもかかわらず、役割が重なってしまうような内閣審議会が登場してしまった。内閣審議会が出て来て仕事を奪うのであれば、文政審議会は存続する意味はないだろうし、廃止することもできないような諮問機関であれば内閣の補強すら覚束ないだろうと批判している。

<本文>

内閣審議会と文政審議会

文政審議会といふものが名許りとは云へ、まだ存立して居る所へ、更に内閣審議会が調査局といふ機関までを帯同して登場した。そこで文政と内閣との冠辞は違ふが、胴体の同じな、従つて為す仕事も重り会[合]ふやうな二つの機関が顔見合せて仕事の奪ひ合ひをするのは免れない勢である。

触らぬ神に祟りなしとする、事勿れ主義の官僚気質から打算して、松田文相が文審もこのまゝ存続しておくといへば済まぬ事もあるまい。が、国民の常識は、もはや許せなくなつて居りはせぬか。文政も国政の一部で、部分が全体に包括される位の事は小学生でも知つて居る。仕事の奪ひ合ひは却つて邪魔し合ふ結果となり、審議すべき最高の審議機関それ自身から、先づ以て審議されなければならぬ羽目に陥つて居ればなり。

文政審議会は云ふまでも文政の最高審議機関として起つたものであるが、役人達の立案したも

のを評価するための諮問機関にしか過ぎないだけの権限なるが故に、教育国策の建立か否かまでには責任を持たないことは、現に今なほ教育の根本政策の立たない行詰りを対岸の火事視することが証明する通りであり、そこに内閣審議会が出現して仕事を奪はれることになつても、苦情は言ひ得ない所であれば、今更有名無実のものを存続する口実はない筈であらう。

有名でも無実ならば、存続しても悪くはないといふ辯解も立つかも知れぬが、贅瘤だけは除けねばならぬ。こんな事さへも出来ないやうな諮問機関ならば、弱体内閣の補強工事さへも覚束ないものであらう。況んや国家百年の長計をや。一学校の教育方針の審議もやはり同様であらう。

⑤「〈巻頭言〉再び内閣審議会と文政審議会に就て」（『新教』第5巻第10号）

<解説>

『新教』第5巻第10号、日本小学館、1935年10月15日発行。1頁に掲載。巻頭言。

本作品は、資料紹介④の「〈巻頭言〉内閣審議会と文政審議会」で述べた内容について1935年9月4日付『東京朝日新聞』の社説を引用して再び論じている。社説では、同じ様な役割を持つ機関をつくってもしその答申が相反したらどうするのか、文政審議会は1924年の設置以来刷新的なことは行わず、常に文教刷新を阻む勢力として存続してきたと批判している。さらに牧口は、創価教育学の提唱によって根本的な改革を促そうとしているが、容易に教育社会は覚醒しないだろう。一縷の希望は、少壮新鋭の国を憂いた教育者の奮起と結束によって新勢力を醸生することであると述べている。

<本文>

再び内閣審議会と文政審議会に就て

殆ど同一の仕事をする二つの機関が対立して、調和統一の出来る筈がないことを、吾々は去七月号の本欄に指摘しておいたが、果然、内閣審議会に対し、文教刷新方策の諮問せんとする政府の方針から、両者の衝突が都下の諸大新聞によつて報導〔道〕され九月四日の東京朝日の社説には、やはりその姑息なる両立は到底許されることが痛論された。吾人の言ふよりは嫉妬と麻痺の教育社会にはいくらか強く響くであらう。曰く、『もし両者の答申が相反したならば、一体内閣総理大臣はどう裁定を下すか、その裁定の補助機関は何人になるのか。文部大臣でも内閣調査局でもいけないとなれば、またもう一つの官制によつて、その裁定機関を作らなければいけない理窟になるのである。実際のところ、二つの審議会の答申は相反することが予想されるのである。文政審議会委員五十人を見渡しても文教を刷新しさうな顔触れではなく、寧ろ刷新される対象ではないのかといふ感じがする。又大正十三年創設以来の実績を顧るときに何一つ刷新的のことはせずに、余り進歩的でない文部省の学制改革案を潰す方に働いて来たのであつて、もし現内閣が本気に文教刷新の実行を志すならば、此の種の機関は、害あつて益ないのである。それは大体に於て今の教育制度を立て、育て、来た教育行政に関係し、刷新すべきものがありとする今の

教育を代表してゐる人々である。稀に改革意見をもつてゐても、それは自分の位置はそのまゝに保ち、自分の関係方面には手をつけずに、他の方を改革しようといふのであるから、その改革意見が一致するわけではなく、その為に建設的には一致せず、現状の防衛、改革の反対にのみ一致するために、常に文教刷新を阻む力として存続して来たのである云々。』

斯様なことは日本の教育制度を大局から瞰下するものの容易に看取され得る所であつて、こればかりでなく、その他の部門に於ても又殆ど同様の病弊ならざるはない。之が即ち日本の教育が時勢の進歩と甚しく隔離してしまひ、却つて衰亡の因にまで行詰つてゐると非難されながら、刷新の目鼻さへもつき得ない所以でないか。

あゝ何の力によつて打開が出来るか。蟻螂の斧か、椽〔縁〕の下の力持ちに過ぎぬとは知りながら、国家の将来を慮ふとき、傍観に忍びざるが故に、聊か「創価教育学」を提唱し、根本的の政〔改〕革を促す所以であるが、恐らくはもつと／＼門外から大なる破折が加はるにあらざれば、今の教育社会には覚醒力は容易に起るまい。与へられた位地に於て言ひ付かつた仕事をしてさへ居れば、役に立たうか立つまいが、その地位を保つに於て差支なく、能率を挙げることが却つて嫉妬排擠的となる現状にまで墮落して居ても、仕事の相手が評価力のない子弟なるが故に、差当り制裁の加はる心配のないのが、教育社会の特色であるからである。

この時に當つてたゞ一縷の望の囑せられるのは、少壮新鋭なる憂国教育者の奮起と結束とによつて、新勢力を醸生することである。一の学校も国家の縮図である。と見るならば、こんな事の詮議もまんざら徒勞ではあるまい。

⑥「御盛徳拝聴所感」(『新教』第5巻第10号)

<解説>

『新教』第5巻第10号、日本小学館、1935年10月15日発行。4～6頁に掲載。

1935年8月29日に、当時創価教育学会の顧問でもあった学習院初等科長の石井國次の自宅へ牧口と創価教育研究所所員の渋谷信義が訪れている。石井國次は、1902年に学習院教授、初等科長となり、1936年2月に辞任した。昭和天皇が学習院初等科に入学してから6年間主管(学級担任)を務めており、学習院を辞任後は、1936年に宮中顧問官に任ぜられた人物である(『人事興信録』第11版改訂版上、人事興信所、1938年、イ170頁参照)。牧口と渋谷が訪れた際に、石井の国体論(石井國次「今上陛下の御盛徳」『新教』第5巻第10号、日本小学館、1935年10月15日発行、2～3頁に掲載)を拝聴した牧口がその所感を述べているのが本作品である。1935年には、政府から第一次国体明徴声明(8月3日)、第二次国体明徴声明(10月5日)が発せられている。所感はこの国体明徴声明の最中で発表された。

本作品で、牧口は、石井の国体論に一通りの謝礼を述べた後、国体明徴問題に触れている。そして、指導者階級の認識作用と評価作用の混乱に触れ、その混乱の源泉である嫉妬軽蔑の感情に言及した。天皇機関説事件を取り上げて、天皇機関説事件を真理上の問題というよりは、単に感

情の問題であると切り捨てている。牧口は、天皇機関説事件は、認識作用と評価作用の混乱であり、「怨嫉輕蔑」の感情問題であると述べた後に、指導者階級が、真に国体の明徴を期するのならば、進んで積極の大乗教的道徳に覚醒して、国家社会の安全繁栄の中に自己の幸福を見出すべきであるとする。さらに、指導者階級の感情問題が駆除できれば「天皇機関説」も正しく認識され、評価されるだろうと述べている。

<本文>

御 盛 徳 拝 聴 所 感

教育者は如何にして此の大御意を

奉体し且つ教材化すべきか

牧 口 常 三 郎

—

今上陛下の御盛徳の一端を、前項の通り、図らざりき拝聴の光栄に浴し 陛下の公明正大、公平無私、一視同仁にましまして、嫉妬心などは微塵も御持ち合わせなさらないこと、それは全く我が国体の然らしめる所であるとの断案を窺ふに至つて、余は非常の感激にうたれたのである。これは余一己の修養上に於てのみならず、現下の教育上に対して大なる反省の課題が与へられたと思はれるからである。

その意味如何。つい此頃国体明徴の声明が岡田首相から発表されたばかりの非常時に当り、思想国難を憂へるのはよしとするも、之が救済策は一向纏まつて居らず、多少の講ぜられたものがあるとしても枝葉末〔末〕節の弥縫策に留まり、教育の根本政策に至ると、文政審議会や国策審議会やの機関だけは備はつたといへ、未だ端緒さへも見えないことは国家の前途のために真に憂ふべききわみである。しかもその応急対策だけにしても、教育者も為政者もはた先覚者も、着眼が悉く末梢的な不良分子に向けられるに留まり根幹的な、指導階級それ自身の反省には一向至つて居ないやうであるからである。

余はおこがましくも教育国策確立の土台ともがたと、創価教育学の研究に没頭し、将来の立国策は今の政治家達が云為してゐるやうな対症療法的の応急政策のみでなく、もつと根本を培養する教育国策からきめてかゝらなければならず。それがためには虚妄の概念的なる必要論などのみにはあらず、ともかくも首尾貫徹の方法案を具した上で、論者に相談せねばならぬと、聊か進み行く間に、如何にしたら今の混乱の思想が統一されて、教育針路の確定が可能となるかの問題に逢着し、結局世の指導階級にある人々までが、認識と評価の両作用を混乱するのに基づくであらうといふことに想到し、さて之を如何にすべきかと困惑しつゝあつた折柄、はからずもこの点に関し、闇路に光明を得た感じがしたのである。乃ち聊か感想を披して識者の斧正を乞はうとする所以である。

二

現在社会の險悪を憂ひ、之が救済に志すもの、第一に為すべきは悪党の有力を憤るよりは、善人の無力を憂ひなければならず。そして少数なる悪人の驅除に腐心するよりは、大多数なる善人の強〔協〕力を促すべきでありそれを率ゆる大善人の自覚を促すべきである。

いかに悪人が党を結び横暴を逞しうしやうとも、全体の数を善人と較べたら知れたものであらう。かかる少数の悪人が大多数の良民を苦しめつつある事恰も数匹の狼が数千の羊群を脅迫するが如くなるは何故ぞ。悪人が自己の弱点を自覚するに伴ひ、同類と協力して生存を保持することを知つて居るのに反して、善人共が却つて小さく独りを慎んで居ても、直接に圧迫が来ない所から自尊心に囚はれて他の善人と協力して悪人に当るといふことを意識しないことで而してその源をなすものは実に嫉妬心があるからである。

これを過言と思ふなら試に平素最も尊信し居る学者、道德家、宗教家等に、一步進んで思想、学説等の少しく難解のものを提出して御覧。十の八九は必ず好感を以つて傾聴しないであらう。而してそれが先入主たる信念よりは高ければ高いほど、怨嫉輕蔑の感情が必ず言動に顕はれるであらう。殊に宗教上の問題になつては、それに限つて平素の冷静公平の態度を忽ち変じ、險悪の容貌を呈し、認識せんとはしない中に自己の臆測を以て、的外れの罵詈誶を加へる狂態やうなをさへ暴露して恬として恥づることを知らないであらう。勿論正確に認識し、誤謬を明かにした上でその事ならば、無理とは言はぬ。のみならず之れこそ指導階級の任として、勇敢に破折すべきであらうと思ふ。ところが、そんな場合には先づ以て、一身の安危を氣遣ふのが先立ち、「触らぬ神に祟りなし」と回避し敬遠してしまうのが普通ではないか。彼の宗教聯盟や宗教教育委員会などの団体で思想善導の源泉なる宗教問題などに於て、神、仏、儒、耶蘇等と全く反対の思想信仰の者が集まり、根柢に於て互に相容れざる心を秘藏し、呉越同舟の姿で表面だけを糊塗し、巧言麗色を交換して平然たるなどはこれでないか。美濃部博士の「天皇機関説」の論争などにしても、三十年間も黙認してゐた今日初めて起つた事及び起つては来たもの、敵も身方も冷静に真理を追求し、あくまで真理には服従せんとする純真さよりは、怨嫉輕蔑の情が湧き立つために、結局は有耶無耶の水掛け論に終りはしな〔い〕であらうとか想像するに難くないことなども、畢竟この禍といはねばなるまい〔。〕これに就て思ひ出されるのは法華經に於ける「斯經は如来の現在すら猶ほ怨嫉多し況や滅度の後をや」「一切世間多怨難信」の二句である。初信のものは不思議の至りであるが、多くの人々を試るとその通りなのに驚嘆せざるを得ないのであつて、右の怨嫉の情を持つて此の經に対するから当然起り得べきことたるのが肯かれるのである。

この事は教育實際の上に頗る重大なる根本事項であれば、なほ少しく考察する必要がある。

三

何故に法華經は怨嫉多きか。先祖以来親密に交際して来た隣り同志の一家に土蔵が建つて以来、とかく円満につき会〔合〕が出来ぬやうになるといふ昔からの言ひ伝ひや、普通の人に対しては何とも思はず交際して居た人が、警官の前に出ると俄かに憶病となり、畏縮し警戒する所から旧悪が暴露する事例等によつて説明さるものであらう。何となれば前の場合に於て蔵を〔た〕てた

一方が俄に傲然たる態度を採るやうになつたが為に、疎遠となつたといふならばともかく、さうでないのに疎隔が出来たとせば、之は大に反省しなければならぬ人情の弱点に原因したものと見るべきもので、それは即ち嫉妬心の知らず知らずの間に禍したといふことである。次に警官の前に出た為に態度の急変した場合は、それによつて心底に秘められて居た過去の罪惡の痕跡がこれに照されたため良心の苛責にあひ、何となくその犯罪を撥かれはしまいかと、怖けを懷くに至つた結果と見做すべきものである。何となれば身に暗い所がないならば、如何なる人の前に出たとて恥づる事も警戒することもいらぬから、そんな態度に変じやうがない筈でないか。その事は純情無垢の子供は、これを害するものでない限り、如何なる人の前に出ても変化がないのを見ても解るであらう。彼は心に少しも疚しい所がないからの^{ママ}どんな人の前に立つても、怖けたり警戒する必要がないからである。

法華經も警官の心の通りで、毫も良民に対して害する理由はないのみならず、鋭意専心擁護せんとする親心の表現である。されば純情無垢の子供心ならばそれに親しむべきでこそあれ、毫も警戒すべく怖るべきものはない筈である。然るにその意味さへも聞かぬ間に既に／＼に怨嫉の情の起るのは隠すことの出来ない心底の弱点の顕はれるによるものである。今一つの理由として、過去の罪惡などはないと自惚れて居る所の学者道德家、宗教家等が此經に対し此經を一護受持するものに対しての怨嫉の態度は如何。隣の土蔵を建てたからとて自分の財産がそれだけ減つたわけではない。恰も隣の財産が出来ただけそれだけ自分の財産が減じたかの如く何となく嫉ましく感ずるのが即ち凡夫の人情の弱点で免れがたき所といはねばならぬ。法華經にもしも何等かその人の生命を害するやうの分子が少しでもあつての事ならば当然であるが、何程索つて見てもそんな分子はけしほどもなく、却つて如何にして人間の苦悩を救護せんかの大慈悲の仏心であるものを、頭から輕蔑し怨疾〔嫉〕するに至つては隣の土蔵に心の狂つたのか、警官の前に出た為に心の怖ちけたのか以外に解釈のしやうがないでないか。果して然らばその現象によつただけでも、法華經其ものに固有するそれ自身の独特の功德力を説明し得るではないか。何となれば他の道德、他の宗教に対して起り能はぬ独特の現象が斯經にのみ起るとしたならば恰も普通の人には起らぬが警察官だから起つたと同様にその特有力を証明するものであらねばならぬからである。これを要するに己れの及ばざる地位名望の人に接すれば、余程の悟つた人でない限りは必ず嫉妬の念が起つて、如実に冷静に評価することが出来ないといふのか人情の弱点である。それといふのも、己れの及ばぬといふ不安の念から生ずるのに対して、法華經は仏教に於ける一切經中の最爲第一・已・今・当の三世に亘つての最高至上、の唯一の經としての力即ち価値を具備したものなるが故に、之に従へば〔ば〕最大の利益が得られる代り、之に謗けば最大の罰を受けねばならぬといふ性質であるから斯經に接したときに特に起るべき現象である。されば心に恐れがなく、歪みがなくて、純真正直であるならば、決して起り能はぬものであるから、万一起つた場合には先づ以て自分の心の清掃が足らない結果と断定すべきこと、恰も鏡面に対ふによつて自分の醜面を知ると同様にしなければならぬといふことにならふ。三省すべきでないか。

法華經が人心の鏡として正邪善惡の鑑定には欠くべからずといふ所以である。「一代聖教の中

に法華経は明鏡中の神鏡なり。銅鏡等は人の形をばうかぶれどもいまだ心をばうかべず。法華経は人の形を浮ぶるのみならず心をも浮べ給へり。心を浮ぶるのみならず先業をも未来をも鑑み給ふ事くもり（曇）なし云々。」と日蓮聖人は仰せられてある。

四

幸に斯かる明天子を奉戴する世界無比の国民の指導階級に位する教育者、智者、賢者等が、其の地位を自覚し、真に国体の明徴を期し、その使命を完了せんとするならば、退いてその独を慎しみ、己の欲せざる所を人に施す勿れ、といふが如き消極的小乗教的道德の実行に安んじ、己の安全を謀るよりは、進んで積極的大乗教的道德に覚醒し、国家社会の安全繁栄のその中に自己の幸福を見出すことでなければならぬ。それが為には悪に対する直接の反抗は、これをその筋の分担者に任せておいて可なりとしても、己の如かざる善の中でも大善に対しては、傍観の日和り見の態度であつてはならぬ。況やたとへ些でも嫉妬心を以て冷眼視したる結果、その大善の流布を妨げるが如きに至つては 陛下の御高德に対し奉つて、誠に申訳のないことと云はねばなるまい。現在の憂婁には混濁したる末流の浄化に労するよりも、上流の混濁を予防するのが急務にして且つ賢明の策であらふ。

「嫉妬軽蔑」といふ唯これだけの一心さへも、吾々が駆除することが出来たならば、如何なる思想でも人間でも、少しの忌憚もなくまた畏るる所もなく、明かに認識することが出来、然る上で正しき評判が下されるであらう。果して然らば、それが出来なかつたために昔から未解決のまゝに持ち越されて居る教育宗教上の幾多の問題が解決されるであらう。斯くて正邪善悪の価値判定が真に出来た上で初めて思想の善導も可能とならふ。

⑦「〈巻頭言〉教育改造と宗教革命」（『新教』第5巻第11号）

<解説>

『新教』第5巻第11号、日本小学館、1935年11月15日発行。1頁に掲載。巻頭言。

本作品については、本研究所紀要『創価教育』第16号（2023年）で資料紹介した小冊子「赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか—全国数万の赤化青年転向指導のために—」に収録されている巻頭言と同一内容である。文章としては『新教』第5巻第11号が初出となる。『牧口常三郎全集』第9巻（第三文明社、1988年）には『新教』昭和10年12月号別冊掲載として収録されているが、当時『新教』第5巻第11号が未確認の状態で、同小冊子しか確認できなかったためと考えられる。詳しい解説は、前掲『牧口常三郎全集』の解説および『創価教育』第16号の資料紹介解説を参照されたい。

<本文省略>

⑧「教育時評」（『新教』第5巻第11号）

<解説>

『新教』第5巻第11号、日本小学館、1935年11月15日発行。66～69頁に掲載。教育時評欄。

本作品は、「級長選挙問題」「学位論文不通過による商科大学の騒動」「女学校の半日制度は如何」「全体観と部分観」のトピックに対して評論を行っている。文中の「別項の主要参照」は同76～77頁掲載の「最新変動重要教材」欄内の「級長選挙問題に関する輿論の一端」を指しており、ここでは『読売新聞』の1935年9月28日付社説および同年10月2日付の三木清の論説記事等を転載している。

「級長選挙問題」では、小学校の級長選挙の制度は、現今の大多数の学校のように無訓練の児童に形式的模倣的に行わせて放任するから弊害が生ずるのであって、これは級長制度の問題ではなく、教師の指導の問題である。指導方法の研究がどれほど行われているかを反省すべきであるのに、級長選挙問題に関する事件という枝葉末節にとらわれている新聞社説等の教育への無理解を批判している。

「学位論文不通過による商科大学の騒動」では、商科大学の騒動を事例として、従前の自身の主張である博士論文の審査法についての考察を述べている。商科大学の騒動とは、1935年7月9日の東京商科大学（現在の一橋大学）の教授会で助教授であった杉村廣蔵の博士学位請求論文の評決に際して、白票が7票もあったために否決となったことに端を発する学内紛争である。牧口は『創価教育学体系』第2巻（創価教育学会、1931年）の第三編価値論第三章認識観第四節直観及び思考、において博士論文の審査法について述べているが、ここでは簡略化した形で紹介している。ただし、消極的の認識として挙げられた三番目の「制定の正否、真偽は論理の法則に合致するや否や。」の「制定」は「それ」（同書95頁は「その正否、真偽は論理の法則に合致するか否かに基づくものである。」）の誤植と考えられる。

「女学校の半日制度は如何」では、良妻賢母を女学校の目的とするならば、青年女子を家庭生活から隔離して学校に一日中閉じ込めておくのは不合理であると批判している。このタイトルの「半日制度」は、牧口の「半日学校制度論」を指している。1906年以降、牧口は半日学校制度論を度々発表しており、その趣旨は、生涯に亘って学習生活と実際生活を並行していくことである。彼の「半日学校制度論」は『創価教育学体系』第3巻（創価教育学会、1931年）の第四編教育改造論第十章半日学校制度論、において詳細に述べられている。

「全体観と部分観」では、部分観から脱して全体観に立って正當に物事を判断する能力を涵養することが重要であり、これは一部の教科という部分的のものではなく全教科の問題であると述べている。

<本文>

級長選挙問題

小学校に於ける級長選挙の制度があるために種々の弊害がある。近來之に就て或は板の間稼ぎ

をやつて運動資金を作らうとしたり、或は落選したために憤激して学校へ放火する等の厭ふべき実例が頻々として学校に現はれるのに、輿論の囂々たるに鑑み、文部省は之を禁止することに大體の方針を決めたといふ。これに対して賛否多様の意見が現はれてゐることは實際家の参考として熟慮すべきものである。(別項の概要参照)

要するに適用さるべき児童の程度によつて可否の見解が分かれることを見るのであらう。

本当に弊害の起らぬやうに訓練した優秀教育の学校に限つて、高学年だけに実行しても可なりとは反対論者と雖も異議はあるまい。

たゞ現今の大多数の学校に於ける無訓練の児童に形式的模倣的の実行をなして大人の如く放任するから弊害が生ずるのである。是に於てか問題は級長制度なるものよりも、教師の實質に移らねばなるまい。それ等に対す「」指導方法の研究が、果して如何ほどされてゐるかの反省こそ、より緊急の問題で、それに対すれば枝葉末節の小問題に過ぎない。何となれば正宗の名刀でも持つ人によつて利害両方の結果を生ずることは云ふまでもないことだからである。

然るに可否の両論者とも枝葉たる事件そのものにのみ囚はれて弊害のよつて起る幹根に及ばぬのは遺憾とせねばならぬ。折角の大新聞の社説までがさうであるに至つて教育に対する無理解が察せられるではないか。

学位論文不通過による商科大学の騒動

「経済哲学の基本問題」といふ一助教授の提出の学位論文が不通過であつたのを憤慨し、その著者は東京商科大学教授会を通過せざりし論文を公刊して大方の批判を仰がうとし、「通過せざりし顛末」をものした序文を掲げて出版することになつたので、予て同大学の学問的沈滞をあきたらず老朽教授連に対して不満を抱いてゐた若年の助教授団が結束して、「学問擁護」の為に起つたのが、勢で全学生に波及し、学閥打破として学長の辞職勧告にまで進展したといふのが近頃の新聞を賑はしてゐる所のものであることは周知の事柄である。

単なる新聞種子、時事問題としての観察であるならば、之は吾々教育實際家の生活には殆ど没交渉に相違ないが、もつと大きく博士論文の審査法及びその制度となると、認識評価の指導を以て任とするものにとつては一顧の価値なしとしないであらう。

所謂ジャーナリズムの人々ならば階級争闘の推移を問題として面白がつてゐてもよいであらうが、これこそ国民の指導階級の統制上に重大なる関係事として注目しなければならぬものと信ずる。そこで「創価教育学体系」第二巻「価値論」第三章「認識観」には認識方法の一例として、博士論文の審査法についての考察が掲載されて居るが、斯様な問題が近き将来に必ず我国にも起つて来る時代があらねばならぬと予想して書いたことが肯けるであらう。要点を挙げれば所謂博士論文の審査法は現今の世人が考へて居るやうに、学校の卒業論文の如きであつては無意義である。従つてその審査の方法に於てもそれが真に博士論文の名に値するやうな独創的のものである限りは、之を判定するものは本人以外にない筈である。然るにそれを審査するなんぞは盲者が目明きを指導するものに過ぎない。そんなことをされるものも、するものも、受けるものも一樣に無意義なる見戯に類する。それを強いてするとならば、たゞ左の消極的の認識に制限さるべき

であらう。

一、其の学説が全く新発見であるか否か。

二、それが正当なる研究法によつて、帰納された生産物であるか否か。

三、制定〔それ〕の正否、真偽は論理の法則に合致するや否や。

それ以上に侵入することは不可能であらう。もし果してさうとすれば、その審査を通過した博士論文と雖ども、内務省が有害でないと証明した売薬免許位にしか過ぎないものでないか。

女学校の半日制度は如何

文部省の学制改革省議は相変らず続行し、中学校、高等女学校の学科課程の改正案に進んだといふことである。

家庭の主婦としての良妻賢母たらしめんとする〔を〕女学校の目的とするならば、青年女子を家庭生活から隔離し、学校に一日中を閉ち籠めておかなければ教育が出来ないといふ考は一たい何処から出て来たものであらう。文部省の学制改革研究はいま、での伝統の埒内に於て枝葉末節の詮索に没頭するよりは、もつと根幹にまで遡り、価値の検討をなすことが肝要でないか、そんなことが気付かぬとは不思議である。

全体観と部分観

知識の低級な眼界の狭い一般民衆は目前に直覚し得る狭隘なる範囲の環境しか見得ないもので、それに関聯して切り離すことの出来ない深奥且つ広汎なる一全体を統観するだけの明がない。そこに狡猾なる煽動的政治家等の存在の可能性がある鎮守の祭礼に百円も寄附しやうものなら、町村第一の名誉職として祭礼に御輿の前に揚々と立てるが、蔭では何万円もの収賄をして全体に大損害をかけて済まして居る事が出来る。さて教育はこれ等の局部観部分観を以て全体観と錯覚する盲目者を開眼して、全体を統観して正当に物事を判断する能力を涵養するものといふことが出来やう。これこそ是迄の教育に欠陥たる最も重大なる教科であり、教材でないか。修育〔身〕科などの部分的のものでなくて、全教科の問題でないか。

⑨「〈巻頭言〉教学刷新評議会の出現について」（『新教』第5巻第12号）

＜解説＞

『新教』第5巻第12号、日本小学館、1935年12月15日発行。1頁に掲載。巻頭言。

文政審議會は1935年12月に廃止された。教学刷新評議會は、1935年11月16日公布・施行の勅令第307号教学刷新評議會官制によって設置された文部大臣の諮問機関である。教学刷新評議會官制の第1条には、「教学刷新評議會ハ文部大臣ノ監督ニ属シ其ノ諮問ニ応ジテ教学ノ刷新振興ニ関スル重要ナル事項ヲ調査審議ス／教学刷新評議會ハ前項ノ事項ニ付文部大臣ニ建議スルコト得」とある。会長1人（文部大臣）と委員60人以内で組織されている。

本作品は、教育界の大家を網羅した文政審議會ができなかった教学刷新を、むしろ教育専門家の少ない教学刷新評議會に期待しつつ、刷新する勇氣はあっても教育の識見はどうするかと問い

かけ、その指導理論として創価教育学を提案している。

<本文>

教学刷新評議会の出現について

再三に亘つて本誌が苦言を公にして来た文政審議会が愈々癱止され、それに代はるに、教学刷新評議会が大袈裟に出現するに至つた。積年の弊害その極に達した教育制度の根本的改造を目論む政府の意図が窺はれて、ともかくも意を強うするに足る。遅れたりとはいへ、なほなさざるゝには如かぬ。

文部省の統轄の下に六十余年の歳月を以て金城鉄壁の如く築き上げられた、教育制度といふ大伽藍の腐朽頹廢が愈々見るに堪へずとなつて、土台から全く建て直さねばならぬ内情が遺憾なく暴露しかけたものであれば、こんなにまで行詰らせた責任者に対しては腹立たしきは尤もながら、聊か愁眉を開いてよいであらう。このまゝに今後とも進行をつづけるならば、教育をすればするほど国家の衰亡を早める結果となるを恐れざるを得ないからである。

新教育制度創設の大功が永久に没すべからざることは勿論であるが、時勢の推移に従つて進化するやう改正するだけの見識と勇氣とがなく、今日の行詰りを来し、今更弥縫策の講じやうもなく、遂に教育局外者の手に城を明け渡して「宜しく頼みます」といふ止むを得ざる事情に立ち至つたのは、当局者並にこの大小の舅姑たる教育専門家には気の毒ではあるが、研究怠慢の結果が自然にこゝに到らしめたものとすれば自業自得といはねばなるまい。

さて教育当局の大小舅姑たる一世の教育大家を網羅した文政審議会でさへ出来なかつた教学の刷新を、新しい教育刷新評議会は如何にして出かさうとするか。それが為には旧来の誤謬と失策との因つて来た所の深いものを、根本から反省し、枝葉茎幹だけの手入ではなく、全く根柢から樹立するだけの識見と勇氣とが備はるにあらざれば、徒らに文政審議会の二の舞を演ずるのみで、所謂教学刷新の実は挙るものでないと思ふのである。

それに対して刷新の勇氣だけは、幸に既成の制度に対する責任感の少き教育専門外の大家を多数とするが為に、相当の期待が出来るかも知れないが、識見に於ては果して如何。

之に就き国家永遠の教育国策の樹立のため、吾々の希望を率直に披瀝せねばならぬことは、折角の選定によつて網羅された各方面の先輩諸士が、真に教育に対する門外漢たることを自覚し、一知半解の教育常識の偏見に墮することなく、教育の真の本質を認識してかゝるだけの雅量を持たれんことであり、これに対し教育の老大家に於ても、既に斯くまでに城を明け渡すだけの醜態を恥づるならば、これまで教育専門家としてのみ持ち越したやうな教育常識の偏見をかなぐり捨てゝ、全く新しき見解に立つて教育の本質を見直してかゝるだけの雅量を持たれんことである。果して然らばそれに対しての指導理論として何が存在するか。いくら厭でも創価教育学以外には纏まつたものはないではないか。忌憚なき斯様な言をなせば必ず生意気といふであらう。が斯様な言をなし得る自信者が教育實際家の中にあるであらうか。希くは国家のため教育国策樹立のために再思されんことを。

⑩「赤化教師の完全転向は如何にして可能なるか—全国数万の赤化青年転向指導のために—」（『新教』第5巻第12号）

<解説>

『新教』第5巻第12号、日本小学館、1935年12月15日発行。5～10頁に掲載。

本作品は、本研究所紀要『創価教育』第16号（2023年）に資料紹介として掲載した小冊子「赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか—全国数万の赤化青年転向指導のために—」に収録された文章と同一内容である。タイトルの「赤化教師」のみに異同がある。詳しい解説は『創価教育』第16号を参照されたい。

<本文省略>

⑪「教育時評」（『新教』第5巻第12号）

<解説>

『新教』第5巻第12号、日本小学館、1935年12月15日発行。46～49頁に掲載。教育時評欄。

本作品は、「信の確立し得ない人」「教育刷新の目標如何」「ギャング狩りの功績」のトピックに対して評論を行っている。

「信の確立し得ない人」では、本号資料紹介で掲載した③「教育者の信の確立を論ず（下）」が、何を信ずるべきか、がテーマであったのに対して、信の確立し得ない人とはどのような人か、を論じている。

「教育刷新の目標如何」では、1935年11月15日の文教刷新に関する文部大臣の諮問案の検討を内閣審議会の特別委員会で行ったところ、「文教刷新の目標をどこにおくか」を審議することに決定をみた。このことに対して、今更ではあるがやらないよりはましで、問題はどの目標に向かって教育の刷新を講ずるかであると述べている。

「ギャング狩りの功績」では、暴力団の検挙について言及し（『読売新聞』1935年8月24日付夕刊2面では、同年5月から開始された全国の暴力団検挙人数が19220人に及ぶことが報道されている）、少数でも悪人は団結が得意なために強力なのに反し、善人はいくら多くても孤立するために無力となる。これに対する根本的な対策が必要であると述べている。

<本文>

信の確立し得ない人

他人の信仰を見ながら聞きながら、自分には到底それは出来ないとあきらめ、冷笑を以て見過ごすが、その僻、非常の場合にはとんだ迷信に陥る人が多い。此種の人々は、左の六つの障によつて度し難いものである。

一、自分の考が最も正しいと思ひ込み、それと異つたすべての意見は皆間違つてゐると断定し、

我見の依つて生じた元などには一向頓着しない自惚の強いもの。

二、知つて言ふならばよいが、知りもせぬ間に、斯うであらうと推測して勝手に批評する等、評価と認識との両作用の使ひ別が出来ず、何事でも輕蔑か盲従かが先立ち、正当なる認識をなし得ないもの。

三、ぶつかつた一小事象を直観するのみで、前後左右等の、それを存立せしめた広汎な関係を意識することの出来ないもの。

四、刻々と移り変わる苦樂を追隨するのみで、後々の計画を立てやうともせず、従つて依て起つた原因などを深く探求しやうともせず、唯ふらふらとその日／＼を送るもの。

五、従つて自己一身の生活にのみ没頭して、それ以上には一步も踏み出し得ない利己主義者。偶々他人のため社会の為に活動するが如く見えてもその実は自己一身名利の爲めにする非社会的な人。

六、過ちを指摘される場合、一方に、高い人格に比較して恥づる人があるのに反し、常に低級の人間のみを見、それに比較すればなほ良いではないかと、頑張るところの反省力のない人。即ち理想を持たぬから着眼が低く、従つて強者を嫉み、弱者も蔑み、善友に遠ざかり、悪友に近づく人。「笛吹かず太鼓たゞ〔ゝ〕かず獅子舞の後足になる心やすさよ」といふ待遇に甘んじて居るなら世話はないが、それでゐて権利の主張は人一倍であるから厄介である。

以上は模型的な極端なるものを描出したものである故に、誰でもそんな人はよつほど下劣の人格で、自分等とは無関係と思ふのであるが、その実頗る高級なる人間にまで広がつてゐる障魔であることが、宗教問題などになるとはつきりして来るのである。即ち立派な位地名望の人々で、日常卑近の生活問題や、専攻の學術問題などに対しては立派な判断をなす者でも、少し六ヶしい未経験な宗教問題などになると、無学者と同様な偏見に陥つてしまひ、平生の聰明には似るべくも無き狂態を呈して恥ともせぬのが十中八九である。

斯様な種類の人々は、薬を飲まぬ病人の治し難きが如く、水を嫌ふ水泳者の教へ様がないと同様人間の力で済度のし難いものとして、時期の到来を俟つより外に仕方がないとされてゐる。が、果して教育化外の人として放任しておかねばならぬものであらうか。

一たい人類は斯かる人間を如何にするか。今の学校は放校処分を以て片付けてしまひ、他人ならば当らず触らずの主義を採る外に途はないとするが、真に愛子の将来を慮る親であるならば、そんな生緩い態度に居れるものではない。そこで懲戒といふ強烈な刺戟を加へて、魔睡の本心を醒すの一手を用ひる。涙を振つて馬蜀〔謬〕を截るといふ心境がそれである。

しかしながら、これとて親の統制の服せしめ得る子供の間だけに留まる。それ以上は手の着けやうがない。親さへも見放した代物を、社会がどうしやう筈がないのは当然である。たゞ其の必然の結果として生ずべき犯罪に対してだけは道德的の制裁を加へ、乃至法律的の刑罰を以て外形的の防止をなすのである。それが人力の及ぼし得べき極限である。

然らばそれ以上はどうすることも出来ないとして、永久に放任されねばならぬものであらうか。そこに仏陀の出現の理由が考へられなければなるまい。「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親な

り」仏の意であるからである。

法罰の体験によつてすべての人事の最も深き根柢をなす所の一念の覚醒によつて信心を喚起するのである。既に意見も教訓もその他の如何なる人力も反撥して受け付ざらんとする者に向つて、唯だ此の一手段のあるによつて、初めて救済の途が開かれるといふ所に仏教の最高至上の大法の価値がある。人間が一度此の最高深秘の根本大法に到達するならば、是迄の枝葉末節の小法は、太陽に対する螢火、泰山に対する蟻塚の如きものであることが自ら悟られるであらう。

教育刷新の目標如何

文教刷新に関する文相の諮問案の内審特別委員会が去十五日開会、齋藤、水野、伊澤、富田、馬場、黒田の各特別委員は、今日の欠陥を究明すべく当分は「文教刷新の目標をどこにおくか」と云ふことについて審議することに決したといふ。

小提灯を持つて闇夜の旅行をなすものは、障壁に打つかつて初めて驚き、そこで途方に呉れ[た]のであるが、今の教育制度の欠陥に対する社会の態度は、ちやうどそれに相当する。盗賊を捕へての縄綱ひほど世に笑ふべき譬へはないとされて居るが正にそれではないか。が、遅走せでも、な[さ]ざるに如かぬ。問題は如何なる目標に向つて、教育の刷新を講ずるかにある。

之に対して委員諸氏の聰明が何事を認識されるかは未だ分る所ではないが、既成教育制度の圈内に踟躕する人々の見解を超越して、専門家でないだけ、それだけ従来の制度に執着せず、高所から大局観して、根本的の欠陥を比較的に究明し得るであらうことが期待されるであらう。

ギヤング狩りの功績

全国で二万に近い左右両翼の暴力団が先頃検挙され、現内閣の功績に数へられた。何れも恐喝、脅迫、暴行などの凄まじい犯罪であるのが、幾分でも取除かれたわけだからである。ただ善人がいくら多くても、孤立するために無力となるに反し、比較的少数でも悪人は団結に長ずるために、強力となるに鑑み、もつと根本対策を講ぜねばならぬ。

⑫「〈巻頭言〉国体明徴と宗教革命」（『新教』第6巻第2号）

<解説>

『新教』第6巻第2号、日本小学館、1936年2月15日発行。1～2頁に掲載。巻頭言。

この作品では、牧口の国体に対する戦略的言説が表れている。1935年8月（一次）、10月（二次）に政府から発せられた国体明徴声明に言及した後、「それよりか遙か適切なことは、小・中学校の實際生活における国体明徴の取扱い方の問題であろう」と矛先を変えて宇佐八幡宮の神託の問題に切り込んでいる。神託という宗教問題を扱うにあたって触れぬ神に崇り無しの回避的態度では、結局は唯物論的解釈に陥ってしまう。まさか宇佐八幡宮の神託に対して捏造である等の唯物論的解釈で妥協しないよね、とでも言うように政府の神社非宗教論の立場に揺さぶりをかけつつ、さらに宇佐八幡宮の神託が「天壤無窮の御神勅の現実なる証明となつてこそ、初めて万邦無比なる日本国体の明徴の根柢が得られる。さもないれば肇国の御神勅でさへも、やはり非現実

の一神話と見做されるの危険がないと限るまい」という皮肉をたたみ掛けている。

この「国史教授」の問題については、本作品が収録されている『新教』第6巻第2号以降、毎号に亘って創価教育学会員の論考が掲載されている。主に「国史・日本精神の宗教的再認識」というテーマのもと執筆されている。以下、該当する論考を挙げておく。

- ・渡辺力「法華経と聖徳太子」（『新教』第6巻第2号、1936年2月15日、34～35頁）
- ・三矢孝「大楠公と法華経」（同号、36～37頁）
- ・三ツ谷孝「法華経と菅原道真」（『新教』第6巻第3号、1936年3月15日、43～44、42頁）
- ・三ツ谷孝「法華経と後醍醐天皇」（『新教』第6巻第4号、1936年4月15日、78～79頁）
- ・三ツ矢孝「法華経と神の観念について」（『新教』第6巻第5号、1936年5月15日、80～83頁）
- ・「国史教育再認識提唱」（『新教』第6巻第6号、1936年6月15日、56頁）
- ・小林済「国史教授指導案」（『教育改造』第6巻第7号、1936年、7月15日、39～43頁）

例えば、三ツ矢孝の「法華経と神の観念について」（『新教』第6巻第5号に掲載）を取り上げてみると「カミ」の語義を『大言海』（富山房）等で穿鑿した後で、次のような言及を行っている。「以上の如く「神」の「上」との共通点を探つてみるとそこにこの二語のもつ正しき理解が生まれ出づる。／即ち人の力以上のものに対する場合と人間の最上位に対する称等なり、又実際古文書等に使用されてゐる所より推理してどうしても語原を一つにすると考へられる。／神の歴史的推究考察をしてゐる大家の説がこの「神」は「上」なりの思索決定を下されてゐるのと思ひ合はされてほゝえまされるのである。そこで神道家あたりの神の説を考へて見るに全くもつておかしくなる、特に仏教味たつぷりな神説や、支那式神論を読み。そこにあまりにその作意的工作を見出してくる。／そこで再び仏教と神との関係がいかになつてゐるかについて考ふるに、仏教上の教理と区別してはその託宣等に於いては全く解釈も出来ぬものが多い。／神に祈誓する呪文のごときも仏教典中の梵語しつたん（悉壇）からとつたものから派生せるものが非常に多いことである。／かく考察して見るといさゝか教育上に於ける神についても深く究めずして敬神崇祖を教育すると被教育者が大人となり古文書を読んだ時に必ずその先生の「でたらめ」にあきれることであらう」（83頁）。彼らの言う「国史・日本精神の宗教的再認識」が那邊にあったかが窺い知れるであろう。

なお牧口の国体観の解釈については、本号収録の岩木勇作「牧口常三郎の国体観—「国体明徴論」における逆用のレトリック—」を参照されたい。

<本文>

国体明徴と宗教革命

「国体明徴」問題は、岡田首相が二度までも声明書を發表したに拘らず、未だ片付いた風もなく、又もち上らうとしてゐた間に、議会は解散となつた。一たいこの問題は、いつになつたら如何なる方法によつて、解決のつくものであらうか。迫るものにも迫られるものにも、しつかりした見通しもつかず、確かな定案もなく、まるで盲目めつぼうの擲り合ひを見るが如きだから始末が悪い。

それよりか遙か適切なことは、小・中学校の實際生活に於ける国体明徴の取扱ひ方の問題であらう。国史中の最大忠臣の一人としての和氣清麿を、学校で教授するに当り、「宇佐八幡宮の神託を如何に取扱つてゐるであらうか」の疑問がそれである。

宗教に対して無知識なる歴史家たちは、宗教的根柢からでなければ、到底解すべからざる斯やうなる宗教問題を取扱ふに「触らぬ神に祟りなし」の回避的態度を以てし、従つて不知不識の間に、当然の唯物論的解釈に陥り、国民をして事実の真相を見誤らしめ、半面を以て全体と解するに至らしめたのである。

斯やうにして敢て事実の否定はしないでも、進んで肯定もせぬ不即不離の指導に従つた学校教師は、やはり半信半疑の態度を以て、架空想像のお伽噺くらゐにしかして居ないではないかと思はれる。果して然らば、虚妄なる伝説の上に、歴史の事実を結び付けて国民の信念を確立せしめんとするもので、影響するところの甚大なる由々しき問題ではないか。こんな事で国体の觀念の涵養が出来るであらうか。

之はすべての学校に於ける現在最も適切なる實際問題であると思ふが、教育家諸君は如何に、かゝる活問題をこなしつつ、その貴重なる職責を尽しつつあるであらうか。とは吾々が屢々提出して解答を求め、研究を促したものであるが、未だ一人の異議を申込んだものもないのを甚だ心細く思ふところである。がしかし、之は思ふものに無理があるであらうか。

単に想像のお伽噺くらゐに見過すならば、知らないだけのこと故まだ罪は浅いといつてよいかも知れぬ。が、一步進んで知つた振りをなし、多少こぢ付けの解釈を下すものが、往々あるに至つては、戦慄に値するものがあつて、とても傍觀し能はざるものである。

これは和氣清麿が道鏡を折伏のために、宇佐八幡宮の神託にかこつけて、勝手な捏造をなしたと、まさか陽には言へまいが、陰にはさう思はしめるやうの取扱ひすることで、想像の伝説としてゝは満足が出来ない唯物論者には、考への持つて行き所のない結果、自らこゝに陥るに至るといふのである。

万が一にも斯様なことに解釈するものがあるとすれば、それこそ今時の考へを以て、政争の具に宇佐八幡宮の神託を供したとするもので、誠に戦慄すべき重大事でなけ[れ]ばなるまい。もしかうなつたら、単に史実を信ぜしめざるに留らず、また清麿の大誠忠を沫[抹]殺するが上、さらに奸悪なる行為とさへも思はしめることに、論理の結果は到達せしめざるを保証し得ないことゝなるであらう。

これは殊更に打ち明けて問ふものがなければこそ、あらはに言ふものもないので、一般の意識に上らないまでのことであるが、国史教授の徹底を止むことを得ないほどの純真教育者の偽らざる告白をさせるならば、勢ひ今のところ、そこまで陥らねば他に行き所がないといふのが、彼等の真率なる心情なるが故にかくは云ふのである。

是は決して平凡なる歴史上の一小事ではない。天壤無窮の御神勅の現實なる証明となつてこそ、初めて万邦無比なる日本国体の明徴の根柢が得られる。さもなければ肇国の御神勅でさへも、やはり非現実の神話と見做されるの危険がないと限るまい。然らば形式的に国体の明徴を何ほど

繰り返した所で、徒勞であることが解るでないか。

国史教育をこゝまで徹底しなければ、国民教育の価値がないことが解ると共に、宗教革命にまで至らなければ、その徹底が期し難いことが明かとなつたであらう。吾々が袖手傍観し能はぬ所以である。

然らば各自の宗教革命を断行して最高宗教の信仰にまで達すればその辺の理解も出来るであらうか。吾々は出来ると断言し得る確信を持つ。ともかくも、宗教上の史実を宗教無視の唯物論的解説だけでは、断じて理解し得られぬといふことだけは、是非共明記しなければならぬ。

⑬「教育者煩悶相談 教育者の転任の問題」(『新教』第6巻第3号)

<解説>

『新教』第6巻第3号、日本小学館、1936年3月15日発行。33頁に掲載。質問者の文章はポイントを下げて表示している。

本作品は、宮城県の小学校教員からの質問に対して牧口が答えている。質問者は、自身のマルキシズム的な言動を含めた勤務態度を理由に校長から転任を強要されているが、あまりにもくだらない理由なので対抗しているという。質問者は、職を失ってもよいが、マルキシズムの抛棄はどうしてもできない、どうすればよいかと投げかけている。それに対して牧口は、潔く退職して主義に尽くせばよいと思うが、それができない所にあなたの苦悩があるのだろう。マルキシズムを抛棄しても、自分を満足させるものもなく転向しきれない所にも悩みがあるだろうとして、最後の一策として、牧口の小冊子『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』を紹介している。

小冊子『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』の本文は、本研究所紀要『創価教育』第16号(2023年)の資料紹介に掲載されている。また、その解釈については『創価教育』第16号に収録の岩木勇作「治安維持法下における思想犯転向輔導施策への牧口常三郎の対応に関する研究—牧口常三郎の『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』を読み解く—」を参照されたい。

<本文>

転任の問題

宮城県 S・K生

【問】

私は県の師範学校を卒業してから今年で丁度満四ヶ年になります。卒業の当時帝都を始めとして各地方に右翼、左翼の問題等が頻りに起り、実に搔[騒]がしかつたのです。温室的に書生々活を終へて来た私にとつては此の実社会に飛び出して見て、唯啞然たらざるを得なかつたのです。

幸な事には私には師範時代からの本当に心から話し合ふ友達が二人あつたので、其の友達と行き来し、文通をしてお互に励まし合つて居りました。友達等と種々話し合つたゞけではどうしても満足することが出来ず、何かしか

確固たる信念の必要を痛感して居りました。ふとした事からマルキシズムの一青年と知り合ひ、その人の積極的実践性に打たれ、其の人の影響を受けて遂に辯証法的唯物論者に陥つて仕舞ひました。そして通常職員室にも、或は同僚と語り合ふ場合にも、その語句を用ひて凡ての事象の解釈をして行くやうになつて來たのです。

ところが次第に私の意識が進むに従つて、表面的に現はすことの非を悟り、カモフラージュのため酒を飲み、偽悪的姿態をしてゐました。校長は私の不慮な行為、云い分に恐れを抱いてゐたので、此の私の傾向に内心喜びを感じ、私のなした抹消的の悪事を指摘して、他校へ転任することを強要するのです。私は余りにもくだらぬ理由なので転任強要に対して、対抗してゐるのです。

すると近頃では「君の後釜は定まつてゐる、君の行くところが決らない、浮いて仕舞ふよ」と云ふ。「私はあなたの勝手な処置にはどうしても賛同する事は出来ません」と云つて校長の云ふ事を聞かないで居ります。このまゝ、自分の職を失ふとも敢えて差支ありません。又理論としてマルキシズムの放棄はどうしても出来ません。先生どうしたい、でせうか。

【答】

県知事から辞令を貰つて教職に就て居り、その内申権は学校長及び監督官庁にある以上、この命令を拒むことは出来ないものであるから、頑張つて見たところで、何にもなるまい。賛同出来なければ潔く退職して主義のために尽すより外に途はないでせう。が、またそこでの決心もつかない所にあなたの苦悩があるのでせう。

さて之をどうするか。沢山の先輩友人共の親切なる忠告者はあつても、今のところ、そのマルキシズムを抛棄されて、しかもあなたの折角の熱烈なる社会救済の志望を満足させるものもない所に所謂「転向」しきれない他の悩みがあらう。而して之に対してありふれた家庭上の煩悶や、空疎なる日本精神などでは耳にタコのよほど聞かされた所として、却つて反感を増大する位のものであらう。

然らば今の世に君の如き、尖鋭なる思想家を動かすだけのものはないか。社会科学だけでは、恐らくはそれを克服させることは出来ないではあるまいか。それでもなほ何物かを求めなければならぬといふだけの余裕があるならば、茲に最後の一策があるが如何、それは某県有名な教育界の赤化事件によつて、首になり、又は処刑されたもの五氏が本会の仲間になつて、完全に転向し、今では明朗に、当時の積極的な勇氣も恢復し、進んで日本の教育宗教革命運動に精進しつゝある実例があることである。

そしてその精神革命の根拠として「赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか」と、昨年十二月の本誌に発表し、なほ之れを「パンフレット」として印刷してあるが、一読されては如何。

2025年度 池田大作記念創価教育研究所 活動報告

【※】：「Soka University Grand Design 2021-2030」に関連して推進

- 1：価値創造教育を学ぶ授業の充実
- 2：「世界市民教育に関するシンポジウム」の開催
- 3：世界市民教育に関する国際共同研究の推進
- 4：創価教育に関する刊行物の発刊

1. 教育活動【※1】

(1) 学部・「創価教育論」の開講（全学部共通）春学期、秋学期とも

・「創価教育学講義」はオムニバスで開講

一人の教員が担当した回

勘坂純市（2回：コーディネーター）、伊藤貴雄（2回）、富岡比呂子（2回）

坂口貴弘（2回）、岩木勇作（2回）

特別講義（1回）

複数教員が担当した回

ガイダンス・シンポジウム（2回） 勘坂・伊藤・富岡・坂口・岩木

斎藤正二の牧口常三郎研究について（1回） 伊藤、塩原、牛田、岩木

高崎隆治の戸田城聖研究について（1回） 伊藤、塩原

(2) 通信教育部科目

・「創価教育論」の開講

夏期スクーリング 勘坂純市、坂口貴弘、岩木勇作

・「Soka Education」英語・オンデマンド版の収録

久木田 ステファニー 光子（科目責任者）、アンドリュー ゲバート

富岡比呂子、坂口貴弘

・「人間教育論 B」オンデマンドスクーリング 叢暁波

・「共通総合演習」（創立者の若き日の読書に学ぶ）の開講

夏期スクーリング 岩木勇作

(3) 学部「Soka Education」[英語] アンドリュー ゲバート、久木田 ステファニー 光子

(4) 学部「人間教育論 A」 坂口貴弘（コーディネーター）

(5) 学部「人間教育論 B」 伊藤貴雄（講義の一部を担当）

(6) 学部「人間教育論 C」 叢暁波（中国語で開講）

(7) 学部「大学史の中の創価大学」 牛田伸一、坂口貴弘

(8) 学部「現代文明論」 蝶名林亮（コーディネーター）

- (9) 学部「共通基礎演習」
久木田 ステファニー 光子、叢暁波、坂口貴弘
- (10) 学部「共通基礎演習」創立者の若き日の読書に学ぶ
伊藤貴雄（コーディネーター 15 回）
アンドリュウ ケバート（1 回）、牛田伸一（1 回）、岩木勇作（2 回）
- (11) 学部 総合科目特講「中国池田研究事情」叢暁波（1 回）

2. 国際部会

- (1) 海外の池田思想及び創価教育研究機関等との交流【※ 3】
 - a) スペイン・アルカラ大学「池田大作『教育と発達』共同研究所」と共同研究を開始
アナ・バレラ副所長 / 渡辺哲子所員（アルカラ大学 IDEEAI 研究委員）
共同研究テーマ「価値創造教育における教師の役割」
 - b) ベルリン・フンボルト大学（ディートリッヒ・ペンナー名誉教授）、ベルリン国立博物館（オリビア・ツォーン博士）、ベルリン国立図書館（マルチナ・レープマン博士）と交流を行った。（6 月 3 日～5 日）
伊藤貴雄副所長・渡辺哲子所員
 - c) 南イリノイ大学デューイ研究センター（イリノイ州カーボンデール）マシュー・ブラウン所長、デポール大学池田大作教育研究所（シカゴ）ジェイソン・グーラー所長、国際ジョン・デューイ協会バーバラ・ステンゲル会長およびアンドレア・イングリッシュ次期会長、パーカー・スクールのアンディ・カブラン元教諭と交流を行った。
またシカゴ大学図書館およびハロルド・ワシントン図書館（シカゴ）で調査した。（8 月 18 日～25 日）
伊藤貴雄副所長・坂口貴弘所員
 - d) ケニア・ナイロビ大学オダリ・マスミ氏と打ち合わせを行った。（9 月 18 日、10 月 2 日）
 - e) イタリア・ビー・ザ・ホープ財団と打ち合わせを開催した。（9 月 29 日）
 - f) 中国・大連池田大作思想研究連合会と交流会を開催した。（9 月 30 日）
 - g) 韓国・慶熙大学「宗教市民文化研究所」「趙永植・池田大作研究会」と交流を行った。
（10 月 18 日）
 - h) スペイン・アルカラ大学「池田大作『教育と発達』共同研究所」と交流会を開催した。
（11 月 19 日）
 - i) 韓国・韓国宗教学会、新宗教学会と交流会を開催した。（2 月 12 日）
 - j) アルゼンチン・池田国際平和研究センター（CIDIEP）と交流会を開催した。（3 月 19 日）
- (2) 出版【※ 4】
 - a) 創価教育に関する刊行物の準備

池田思想・創価教育に関する基本文献の英語への翻訳作業を行った。

アンドリュー ゲバート所員

- b) Report on Ikeda Studies in Education (No.23 ~ No.28) を発行した。

3. 研究・教育部会

(1) 出版

- a) 池田大作『歴史と人物を語る』下（第三文明社）の発刊に際し、伊藤貴雄副所長を中心に資料提供、編集協力を行った。（5月3日発刊）
- b) 英国エメラルド出版社より発刊された「Education for Sustainable Futures: Global Citizenship and the Earth Charter（邦題：持続可能な未来のための教育——世界市民と地球憲章）」に教育学部の富岡教授と経済学部の掛川教授が、それぞれ1章ずつ寄稿を行った。

富岡比呂子「第11章：地球憲章と創価教育：世界市民教育の視点から」（The Earth Charter and Value-Creating Education: From the Perspective of Global Citizenship Education）

(2) 研究会

- a) 岩木勇作「牧口常三郎の国体観」（11月27日）

(3) 講演会

- a) 創価教育論講演会（6月2日）
西園寺一晃（東日本国際大学客員教授）
「池田大作とその時代—周恩来と池田大作」
- b) 創価教育論 戦後80周年記念 特別講演会（11月3日）
小澤幹雄（俳優・エッセイスト）
「兄・小澤征爾とともに——戦争を越えて、芸術が奏でる平和」

(4) シンポジウム

- a) 斎藤正二生誕100年記念シンポジウム
「斎藤正二の牧口常三郎研究」（10月20日）
塩原将行、牛田伸一、岩木勇作、伊藤貴雄
- b) 高崎隆治生誕100年記念シンポジウム
「高崎隆治の戸田城聖研究」（10月27日）
塩原将行、伊藤貴雄

4. 資料部会

- (1) 学内外からの問い合わせ対応
- (2) 資料整理の推進

(3) 創立者・創価教育に関する資料・証言の収集

- a) 本学卒業生（2 期生）八巻晴夫氏と学生の懇談会を行った。（5 月 22 日）
- b) 創価学園を訪問し、資料整理方針について狩野俊一氏と懇談した。（7 月 23 日）
勘坂所長・ゲバート所員・坂口所員・久木田所員
- c) 「共通基礎演習：創価教育のオーラル・ヒストリーを紡ぐ」
塩原将行「私が歩んできた道—なぜ、牧口・戸田評伝執筆をすることになったのか—」
2 期生（9 月 30 日）
櫻井啓雅「教育国連構想の実現を目指すささやかな歩み」
1 期生（10 月 21 日）
狩野俊一「創立者根本・学生第一」
1 期生（11 月 4 日）
高木美智代「大恩に報じる人生をめざして」
1 期生（11 月 18 日）
三好健洋「第 2 回滝山祭」
1 期生（12 月 2 日）
廣瀬美智子「草創期の女子寮」
2 期生（12 月 16 日）
加賀譲治「第二の草創期」
3 期生（1 月 20 日）

(4) 「池田文庫」の研究調査

- a) 創価大学中央図書館 7 階「池田文庫」の外国文学（請求記号：920. 2～）の調査を行った。

(5) 資料提供・協力

- a) 石狩市厚田村合併 20 周年記念特別展「旧厚田村栄誉村民と豊かな海」の監修を行った。
塩原将行・岩木勇作（主催：「厚田ふるさと平和・文学賞」実行委員会）
- b) 鈴木将史著『推理式指導算術と創価教育』に画像資料の提供を行った。
- c) ウズベキスタン・アリシェール・ナワイー記念タシケント国立ウズベク語・文学大学での創価大学銅像写真展に画像資料の提供を行った。
- d) Asia Peace Festa 2025 にベートーヴェン関連の資料提供を行った。
- e) 伊藤貴雄編著『新カント派の哲学と近代日本——受容と展開』（東洋哲学研究所）の発刊に際し、資料提供を行った。
- f) 『灯台』『創価教育の源流』を学ぶ」第 6、7、9、11 回に画像資料の提供を行った。

5. 所員の研究活動

(1) 発表・講義・講演等

- a) ANGEL Conference 2025（6 月 4 日～6 日）セッション発表
伊藤貴雄「The Origins of Value-Creating Education in an Era of Fascism」
渡辺哲子「The Present-day Practice of Value-Creating Education」
久木田 ステファニー 光子「Works at IRISE: Initiatives and Research on Value-Creating Education and Global Citizenship」※事前収録発表
- b) 中国・天津外国語大学「天外特別講師フォーラム」オンライン講演（6 月 13 日）

叢暁波「人文学の観点から見た日本研究の可能性」

- c) デポール大学池田大作教育研究所「第4回教育分野における池田・創価研究国際会議」
セッション発表（7月31～8月1日）

アンドリュー ゲバート、久木田 ステファニー 光子

「Student Learning Experiences at Soka University」

※久木田 ステファニー 光子所員は事前収録で発表

- d) Asia Peace Festa 2025 連続講演会第1回（9月28日）

伊藤貴雄「苦悩を越えて歓喜へ ～《第九》が奏でる未来への祈り～」

- e) 2025 韓国池田大作思想学術大会での基調講演（10月18日）

勘坂純市「池田大作の『人間主義』と創価大学」

- f) 創価学会総兵庫白ゆり大学校講演（10月18日）

渡辺哲子「創価教育の原点を学ぶ」

- g) 第三文明文化講演会（10月26日）

伊藤貴雄「ベートーヴェンと高田博厚」

- h) 創価学会第二総東京教育部 人間教育トークセッションにて講評を担当（11月30日）

「教育のための社会へ！いのち輝け！子どもの未来へ太陽の励ましを」

富岡比呂子 講評を担当し創価教育について言及

- i) 客員研究員 岩木勇作

・寄稿「学光」「創価教育と通信教育の歴史」第4回 vol.10～第6回（完） vol.12
（創価大学通信教育部）

・「創価教育ガイダンス」（6月12日）

創価学園関西校創大研修において創価教育に関するガイダンスを行った。

- j) 客員研究員 塩原將行

・寄稿「灯台」『創価教育の源流』を学ぶ」第1回5月号～第12回4月号（第三文明社）

・寄稿「新渡戸稲造と牧口常三郎（上）」『新渡戸稲造の世界 第34号2025』（新渡戸基金）

・創価学会宮城県教育部「創価教育懇談会」

第1回 「創価の`人間教育、を学ぶひとつの参考に」（11月1日）

第2回 「愛児の優等化と推理式学習参考書を中心に」（12月20日）

第3回 「池田大作先生が戸田大学で学んだこと」（3月）

(2) 出版

- a) 『東洋学術研究』通巻194号（第64巻第1号）

教育対談：伊藤貴雄（副所長）／渡邊弘（作新学院大学学長）

「人間教育の探究－ペスタロッツから池田大作へ」

論文：岩木勇作客員研究員「池田大作の『師弟』観——普遍的な教育論としての『師弟』」

- b) 『デュイと創価の遺産、そして教育の未来』（ピーター・ラング社）

(The Dewey-soka Heritage and the Future of Education)

伊藤貴雄「牧口常三郎とジョン・デューイ」

アンドリュース ケバート「稀有なる信仰:ジョン・デューイと牧口常三郎による「宗教」の再定義」

- c) 『日本デューイ学会紀要 第 66 号』(日本デューイ学会)

伊藤貴雄「デューイとカント——『定言命法』と『尊厳』をめぐる」

- d) 『新カント派の哲学と近代日本——受容と展開』(東洋哲学研究所)

伊藤貴雄「序章 近代日本における新カント派受容史の再構築に向けて」、
論文「牧口常三郎の価値哲学とそのコンテクスト——科学的教育学という構想の思想的
位置づけ」、コラム「カントと「価値」の概念史」ほか

6. ホームページ、SNS 等

- (1) 研究所 Web サイトの更新

- a) 講演会、研究会、紀要、刊行物案内等のニュースを配信し、更新を行った。
b) 「創大名所マップ」を更新し、名所 30 か所の音声ページを作成した。(11 月 14 日)
伴って学内 10 か所に名所プレートの新設しプレートからリンクできるようにした。
c) 第 2 回世界市民教育シンポジウムページを制作・公開した。(1 月 30 日)

- (2) 公式 SNS の発信

研究所が所蔵する資料(歴史資料・研究資料等)の活用の一環として、インスタグラム
および YouTube を通じ、資料提供ならびに関連情報の公開を行った。

7. オープンキャンパスの取り組み

2025 年度オープンキャンパスにて 3 つの「創価教育企画」を行った。

- a) 「創価教育ワークショップ」

高校生を対象とし、創立者のスピーチ映像を学びながら創大生や同じく参加した高校
生とディスカッションを行い、創価大学で学ぶ意義を一緒に深め合う企画を行った。

5 月 3 日勘坂純市所長、5 月 4 日坂口貴弘所員

8 月 2 日坂口貴弘所員、8 月 3 日勘坂純市所長

8 月 24 日渡辺哲子所員、9 月 21 日勘坂純市所長

3 月 20 日坂口貴弘所員

- b) 「50 周年記念展示ツアー」

本部棟の記念展示を通し、創立者による設立構想から現在に至る大学の歴史を、現
役学生が紹介し学び合う企画を行った。

- c) 「創価大学歴史紹介」

創価大学の歴史について 15 のストーリーから参加者が選び、現役生が当時の写真を

通して様々なエピソードを紹介し、創立者の思いなどを一緒に学び合う企画を行った。

8. 人事

〔2025年4月1日付人事〕

鈴木 美華が池田大作記念創価教育研究所 運営委員会委員長となった。

〔2025年6月1日付人事〕

堀口 真吾が池田大作記念創価教育研究所事務室 事務長となった。

〔2025年9月1日付人事〕

上田 大作、坂口 貴弘、伊佐 陽一、堀口 真吾が池田大作記念創価教育研究所 運営委員会委員となった。

編集後記

本号は「周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム」の特集号である。「対話による平和と発展」をテーマに掲げて2024年11月30日～12月1日に開催された同シンポジウムには、7カ国から138名の参加があり、6名の基調講演のほか、16の分科会において51本の発表が行われた。本号には基調講演とともに、分科会発表の中から2本を掲載している。

本号には、論文として3本を掲載した。塩原將行氏は、アメリカのジョン・F・ケネディ大統領と池田大作の間で予定されていた会談が実現しなかった経緯を検証している。岩木勇作氏は牧口常三郎の「国体」をめぐる言及について、その変遷をたどっている。また同氏による「創価教育と通信教育の歴史」は、通信教育部の設置50周年を機に同部の機関誌『学光』に連載された記事をまとめたものである。

次に、2025年に行われた講演の中から6本を掲載した。西園寺一晃氏、小澤幹雄氏の寄稿は、それぞれ6月2日、11月3日に行われた研究所主催講演会の講演記録である。また、創価教育論の授業の一環で行われたシンポジウム「斎藤正二の牧口常三郎研究」「高崎隆治の戸田城聖研究」の記録を収録した。さらに、世界市民教育に関する国際的な学術団体ANGEL（Academic Network on Global Education & Learning）が主催する国際会議と、韓国で開催された池田大作思想学術学会での所員の発表をもとにした論考を掲載している。

中国における「池田思想」研究の動向についての報告は、本号で22回目を迎えた。2025年に開催された池田思想研究の学術シンポジウム等のほか、池田研究の成果等を紹介している。

資料紹介では前号に引き続き、「創価大学所蔵 ゲーテ重宝展」に出展された書簡について田中亮平氏に解説いただいた。また、教育雑誌『新教材集録』『新教』に収録された牧口常三郎の文章の翻刻を収録している。

おわりに、今回の紀要に原稿をお寄せ下さった諸先生方、そして紀伊國屋書店をはじめ御協力・御尽力いただいた方々に、この場を借りて篤く御礼を申し上げたい。

2026年3月 (T.S.)

創価教育 第 19 号

2026 年 3 月 16 日 発行

代表者 勘 坂 純 市

発行者 創価大学池田大作記念創価教育研究所

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236

TEL. 042-691-5623 FAX. 042-691-5654

印刷所 株式会社紀伊國屋書店